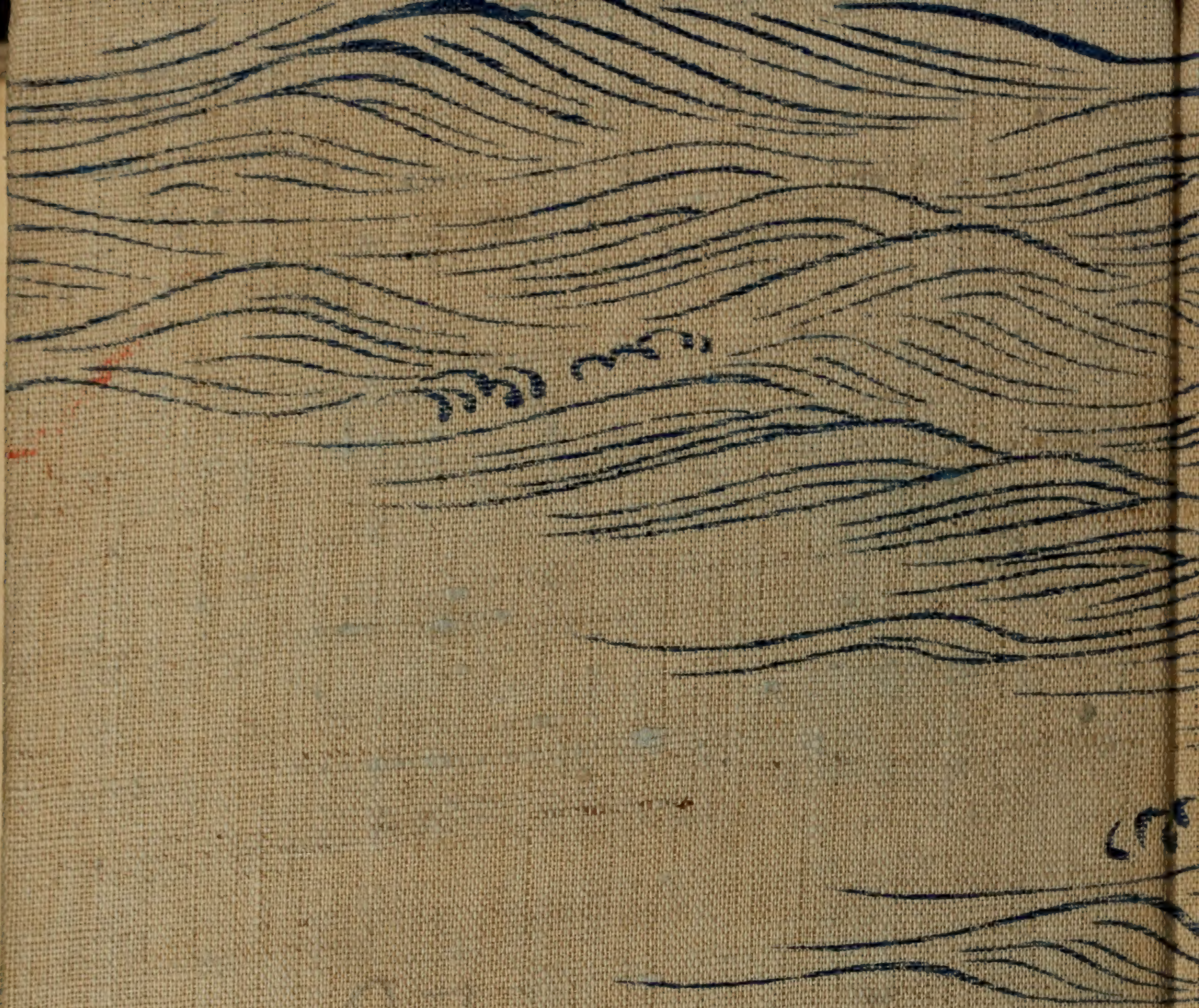




野阿弥全集

第廿七巻

默阿彌畫像

解説

明治十四年三月敬文閣といふ所から版行された『現今英名百首』(眞亭逢多編輯、鮮齋永濯畫)といふ豆本がある。三條、岩倉、木戸、板垣、大久保、山縣、等の政府關係者から、福澤諭吉、福地源一郎、岸田吟香、成島柳北、長三洲、伊藤潮花、角海花樓の小紫、跡見花蹊などゝいふやうな所まで混交してゐるが、その中に河竹其水として默阿彌もはひつてゐる。

其水は通稱を新七と呼び狂言作者にして久しく劇場に關係なし無類名譽の人物なり開明の後和漢の書に老眼をさらし西洋飜譯書も專ら研究して俳優に之を示し劇場の舊弊を一洗なさんと社長守田勘彌(と)談合し新著に勉勵なせしとぞ

わざをきのことの誠を川竹の節あたらしくつゞりいださむ。

默阿彌畫像

解說

明治十四年三月擻文閣といふ所から版行された『現今英名百首』(眞亭逢多編輯、鍊齋永濯畫)といふ豆本がある。三條、岩倉、木戶、板垣、大久保、山縣、等の政府關係者から、福澤諭吉、福地源一郎、岸田吟香、成島柳北、長三洲、伊藤潮花、角海花護の小紫、跡見花蹊などいふやうな所まで混交してゐるが、その中に河竹其水として默阿彌もはひしてゐる。

其水は通稱を新七と呼び狂言作者にして久しく劇場に關係ある無類名譽の人物なり開明の後和漢の書に老眼をさらし西洋翻譯書も專ら研究して非常に之を示し劇場の舊弊を一洗なさんと社長守田勘彌(と)談合し新著に勉勵なせしよしな

むかしながらのこの諺を川竹の節あたらしくへひしもいたちむ。

其水ハ通称を新七と呼び狂言作者にして久しく劇場に関係なし無類名誉の人物なり開明の後和漢の書り老眼をさらし西洋翻譯書も専ら研究して俳優に之を示し劇場の旧弊を一洗せんと社長守田勘弥と談合し新著に勉励なせしとぞ







天日坊
時貞
高窓
豊国画



默阿彌全集

第廿七卷

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

東京　春陽堂刊行

默阿彌全集　第二十七卷目次

挿繪目次

戀相撲春顔觸

こひずまふはるのかほぶれ

角力太鼓の櫓下色となさけの深川にはなれぬお仲清七が浮名辰巳の二軒茶屋誰松木に忍び駒お藤がちかひの三線より胴を据たるお坊主幸次があやふいかたりの土俵際ちよつと行司が引分けし水に縁ある淀車が割つた茶碗のむかう疵遺恨もはれし朧夜に鵺の長吉が小舟の仕返しそれもくだけてよい中のお咲が身賣に手に入りし寶も質に舟木が越度伯母がさいなむ伯父殺しの其言譯も七つ子が清書双紙の書置に汚名を鳥目の腹切もやいばの威徳にさつぱりと三めぐり堤の敵討善悪分かる勝負附

力士淀車浪五郎と船頭の鶏の長吉とを書いた『戀慕相撲春顏觸』は明治五年正月、作者五十七歳の時中村座に書きおろされた。『め組の喧嘩』は後年高足たる竹柴其水が書き、作者も亦眼目の場を助筆したのであつたが、この『戀相撲』は作者の肚ではめ組事件を諷したのであつたと傳へられる。煩雜な問題の生ずることを厭ふ作者は、鳶の者の代りに同じきほひ乍ら船頭にして脚色したのであつた。原作では序幕、同返し、二幕目、同返しとなつてゐるのだが、便宜上四幕目を大切としてかぞへておいた。作中へ菊五郎の役で洋學の書生を出して漢語を用ひさせたのは、新しい世相を寫したものと見るべきで、明治五年に舞臺上へ持出したのは、特筆するに値ひするかと思ふ。

書きおろしの時の役割は尾上菊五郎（船頭鶏の長吉、葛飾十右衞門、實はお坊主幸次、洋學の書生寺島松雄）、中村芝翫（關取淀車浪五郎）、坂東三津五郎（深川藝者おふち、淀車女房お咲）、坂東簑助（行司志村丈九郎）、中村福助（船木左市郎）、中村仲太郎（角力取駒ヶ嶽荒藏）、嵐榮三郎（仲町の藝者お仲）、中村翫太郎（澁井道庵）、中村成藏（家主杢兵衞）、中村鷺助（千葉右馬之助、道具屋吾市）、尾上梅五郎（女衒）等であつた。

挿繪にしたのは國周筆の錦繪である。

大正十五年十二月初旬

校訂者



戀慕相撲春顏觸（淀車と鵜の長吉――四幕）

序幕

深川八幡の場
境内角力の場
松本座敷の場
洲崎土手の場

〔役名〕――淀車浪五郎、山崎屋手代清七、駒ヶ嶽荒藏、行司志村丈九郎、澁井道庵、千葉右馬之助、馬車馬丁、諸士二人、中間二人、茶屋亭主、淀車弟子鵜の川、同白鷺、船頭づぶ六、箱廻し幸吉、鵜の長吉、葛飾十右衞門、御坊主幸次。淀車女房お咲、藝者お仲、松本の下女、茶屋女、呼出し奴其他。〕

〔深川八幡鳥居先の場〕――本舞臺三間の間後ろ一面の遠見、上手に莫大なる石の鳥居、正面同じく石の玉垣、下手に葭簀張りの出茶屋、御待合といふ行燈を掛け、上手よき所に花相撲の辻番附、これへ取組の顏觸を大分張り、諸所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て深川富ヶ岡八幡、鳥居先の體、爰に床几二三脚並べ、相撲見物の仕出し○□△◎の四人、床几に掛り煙草を呑み居る、茶屋女出茶屋

の娘、前垂がけにて茶を運び居る、此の模樣角力太鼓にて幕明く。

〇　花相撲とはいひながら、今日が丁度五日目に、取組の顔觸がいゝから後には爪も立ちますまい。

□　さうとも〳〵、何でも今の内早くはひつて、いゝ場所へ陣取つて居るが割事でござります。

女　どなたもお茶をお上りなさりませ。

△　いや〳〵、そんなに茶を飲むと、小便が近くなるから、茶は歸りまでお預けだ。

◎　ときに、惡込みのしないうち、そろ〳〵と出掛けませうではないか。

〇　さうしませう〳〵。（ト天保錢一枚を出し、）姉や、茶代は爰へ置くよ。

四人　さあ、行きませう。

ト右の鳴物にて、仕出しは上手へはひる。跡大拍子になり、花道より千葉右馬之助、羽織袴大小若殿のこしらへ、諸士一、二くり下げ、袴羽織大小にて附添ひ、駒ヶ嶽角力好みの鬘、羽織着流し一本差し、何れも雪踏にて、跡より〇△の紺看板、中間にて出る、皆々花道にて、

右馬　今日の相撲は初日から、待ちに待ちたる取組ゆゑ、花咲く春の魁に乘出す千葉の右馬之助、まだ若年の身ながらも馬術の聞えそれがしが力を添へて居るからは、後れを取らず駒ヶ嶽、是非とも勝負に勝つてくりやれ。

一　こりや若殿の御意の通り、名に負ふ相手は西の關、當時名うての淀車なれば、爰で首尾よく勝つ時は、最早外には怖い者なし。

二　さうとも〳〵、まだ初日から一日も後れを取らぬ駒ヶ嶽、淀車さへころがせば差詰め春の本場所には肩を並ぶる關相撲。

駒嶽　いやもう、同じ千葉家のお抱へながら、淀車とは事かはり荷鞍も重き駒ヶ嶽、まだ新店の中丸に皆御贔屓を松鶴屋、いぢくね惡き技振りの憎まれ役も曲りなり、見やう見眞似の附燒刃、然しこぶしは節くれてまだ初日から一日も砂を摑まぬ上からは、假令相手が淀車で浪を蹴立てゝ來やうとも、汐風荒き磯端に馴れた木振りの此の荒藏、負けることぢやあござりませぬ。

○　いや〳〵こつちも贔屓相撲、しつかりやつて貰ひませう。

△　この勢ひでは今日の取組、勝つに違ひはござりませぬ。

右馬　然らばあれなる境内へ、

一二　駒ヶ嶽も打ちつれて、

駒嶽　先づお越しなされませ。

ト右鳴物にて、皆々舞臺へ來る、此の時上手より道庵、慈姑天窓、羽織着流し一本差し、ぱつち尻端

折り、雪踏にて出來り、皆々を見て、

道庵　これは〳〵若殿はじめ、各々方にはようこそ〳〵、先刻より澁井道庵お出でを待つてをりました。

右馬　道庵老にも契約違はず、ようこそ出張いたし居つた。

道庵　先づ〳〵是れへお掛けなされませ。（ト是れにて皆々床几へ掛ける、茶屋女茶を汲みて出すことよろしく、）

駒嶽　ときにお娘や、貴樣大儀ながら場所へいて、わしは旦那方のお供で松本に居るによつて、用があつたら知らせて來いと、內の野郞どもに言うて下せえ。

女　はい〳〵、畏りました。（ト上手へはひる。）

一　中間共は先へ參り、いつもの座敷を明けておくやう、松本へ申し附きやれ。

○△　畏つてござりまする。（ト中間兩人も同じく上手へはひる。）

二　いやなに道庵老、して若殿がお賴みありし、かの一藥は調ひ居るか。

道庵　調合いたしてござりまするが、他聞を憚る品なれば。（ト駒ヶ嶽へ思入。）

右馬　いや〳〵、彼れも一味同腹、其の斟酌には及ばぬわえ。

道庵　左樣なれば御覽に入れます、これでござりまする。

ト懷中より錫の中繼へ入れし藥を出して見せる、右馬之助受取り

右馬　然らばこれが、南蠻祕法の、

道庵　大毒藥でござります。

駒獄　その一藥のとゝのふ上は、豫てあなたのお望みも。

右馬　おゝさ、成就いたすは瞬くうち、

一　こりや前祝ひに、御散財を、

二　なされずば相成りますまい。（ト皆々悦ぶこなし。）

道庵　してまた、それなる一藥を、何にお用ひなされますな。

右馬　幸ひ四邊に人目もなし、密事を申し聞かせるであらう。（ト合方かすめて大拍子になり、）先づそれがしがそちを頼み、此の一藥をとゝのへるも、千葉家の當主左門之助を亡きものにせん一つの企て、仔細はそれがし惣領ながら、妾腹ゆゑに分家となり、現在弟左門之助に家督を取られし口惜しさ、此儘空しく過ぎ行くときは、生涯千葉の家來分、世に出る事のならざるゆゑ、これに居合す兩人と申合せて左門めを毒殺なさん我が企て。

一　事の成就となる上は、一味荷擔の我々は、

二　今の身分に引替へて、一足飛びの立身出世。

駒嶽　それに列なる駒ケ嶽、當千葉家のお抱へたるあの淀車をしくじらせ跡へ廻つて御家來分、道庵老もその如く、此の若殿の世になれば、十人扶持は押へたもの、何とうまい口ではないか。

道庵　成程さうなれば、うまいものでござりまする、さうして當座の御褒美は。

右馬　その恩賞は、わが大望成就するまで待つて居やれ。

道庵　いえ〳〵それはいけませぬ、待たれぬと申しますは、既に先日お頼みゆゑ、千葉家の重寶胡蝶の茶碗と千壽院の短刀をお坊主幸次といふ惡者を語らひ、愚老と二人で盜みましたが御褒美が下らぬゆゑ、其の御褒美が下るまで幸次と愚老が一品づゝ寶を抵當に持つては居れど、根が盜みものに質にも置かれず、ほんの寶の持腐れで、誠に困り切りまする。

駒嶽　はてさ、それも今の話しが首尾よく行つた其時は、なければならぬ千葉家の重寶、默つて居ても金になるわな。

道庵　成程言へばそんなもの、僅かな褒美で一品を向ふへ渡してしまふより、直の出た時分に金と引替へ、さういふ事なら待ちませうが、あの二品を盜ませ船木親子を自滅させたは、何の遺恨でござりまするな。

一　はて、それも是れなる若殿を家督に立てる根ごしらへ、船木親子を生けおいては、何かの邪魔と

思ふゆゑ、彼れが預かる寶を奪ひ、役目の越度で宗左衞門に、切腹させたは一つの手立。

二　その父悴の清七めは、かねて是れなる若殿が御執心なる町藝者お仲と深きなかなれば、浪人させてみじめを見せ、金の威光であのお仲をこちらへ靡かす苦肉の計略。

右馬　やがて千葉家の當主となり、家督を握るそれがしが惡事にかけての匙加減、功者なものであらうがな。

トこれにて道庵感心の思入にて、

道庵　したり、昔と違ひ今時は、いくら大家の若殿でも智慧をあみ出す世の中に、醫者も及ばぬ藥の懸引、其御器量を見込んだゆゑ、義理ある甥の淀車が馬鹿正直を見限つて、あなたへ荷擔の此の道庵、然し當時は賣りするゑで甥の所へ居候、あの淀車の女房の實の弟が清七ゆゑ、盜んだ寶をうつかりと手許に持つては居られませぬ。

右馬　その寶をば種に遣ひ、申し談ずる儀があれど、

一　何をいふにも爰は門中、

二　何かは山の松本にて、

駒嶽　そんなら一緒に道庵老、

道庵　お供いたして參りませう。

一二　左樣ござらば若殿樣、

右馬　然らば駒ヶ嶽、

駒嶽　さ、參りませう。

トやはり大拍子にて、皆々上手へはひる。跡端唄になり、花道より清七、羽織着流し雪踏にて小さな風呂敷包みを持ち出る、是れなお仲、藝者好みのこしらへ東下駄にて引かれ出來る、跡より銀次箱廻しのこしらへにて、三味線箱を持ち出來り、花道にて、

清七　これお仲、今日はちつと心も急けば、わしは一足先きへ行くわいなう。

お仲　いろ〳〵話したい事もあれど、ちつとも出て來ては下さんせず、偶に道で逢へば何のかのと逃げ支度、定めて餘所外にたんと用のある所がござんせうに、大きにお邪魔をしましたわいなあ。

清七　これはしたり、そなたを除けて外に心が移つてよいものかいの、何で餘所へ行かうかいの。

銀次　お前さんは行かないでも、清七さんは行くといふ噂でござります。

清七　そなたまでが、其樣な事を。

銀次　何であらうと、向うの床几へ。

お仲　さあ、行かうわいなあ。（ト皆々本舞臺へ來り床几へかけ、）もし銀次どん、お前一足先きへ行つて、そこをよいやうに賴んだぞえ。（トお仲紙入より金包を出し銀次へ渡す、銀次思入あつて、）

銀次　そこはよろしうございます、そんならお先へ行きますから、御用が濟んだら隨分お早く。いえなに、お話しをなさいまし。

ト銀次上手へはひる。跡兩人思はず顏を見合せ、これより媚めきの合方になり、お仲清七の側へ摺寄り、

お仲　もし清七さん、お前はきつい濟まぬ顏色、どうぞしなさんした事かいなあ。

清七　おゝよう言うてたもつた。これお仲、互ひに久しう逢はぬゆゑ、若しも心が替らうかとこつちで思へば、そなたの方でも疑ふは無理でもないが、以前と違ひ清七が今の身分でなかなか浮いたどころの話しではない、父宗左衞門さまがお預かりの寶紛失せしゆゑに、其の申譯に御切腹、草を分けても紛失の寶の在所尋ねんと馴れぬ町家の手代となり、詮議はすれど今以て手掛りとてもあらざるゆゑ、苦勞の絕ゆる暇もなく、そなたに無沙汰するうちに、聞けば千葉家の若殿が身請けをするといふ事ゆゑ、世が世の時であらうなら、此のわしも人に不義理をしてなりと、一旦二世と言ひかはせたそなたをこつちへ身請けして、妻と呼びたく思へども、あるに甲斐なき浪人の身

の日蔭者、それに引替へ若殿は金の威光でそなたのやうな、妻を持つとは因果もの、世の譬にも天窓勝はどうでも運がよいといへば、所詮ひがふな此のわしはあの若殿には叶はぬわいの。

お仲　えゝも、言うて下さんすな、假令身貧であらうとも一旦かうと言ひかはしたお前を捨て外へ行く氣はござんせぬ、其の紛失の寶とやらも今に在所が知れぬなら、わたしも共々苦勞して其在所を尋ぬる程に、必ず〳〵其やうな、弱い心を出して下さんすな、ほんにもう千葉の若殿は顔を見るさへ腹の立つ、でぼちん天窓でござんすわいな。

清七　ほんにそなたがさういへば、世にも稀なる大きな天窓、何の事はない、延喜棚の福助によう似て居るなう。

ト此時前方より、以前の右馬之助先きに、一二〇△附添ひ出て、後に聞いて居る、右馬之助腹の立つ思入よろしくあつて、

右馬　やい、福助とは誰が事だ。（ト前へ出る、これにて兩人びつくりして、）

清七　あなたは千葉の、

お仲　若殿さま。

右馬　憎き雑言。

敵役皆々　動きやあがるな。(トきつと言ふ、清七前へ出て、)

清七　これは〳〵若殿には、思ひもよらぬお疑ひ、今福助と申しましたは、あなたの事ではござりませぬ。

右馬　いや〳〵さうは拔けさせぬ、身共の天窓が小さければ、人事とも思はうが日頃自慢の大天窓、すぐれて居るゆゑ聞捨てならぬ。

一　こりや若殿の仰せの如く、茶の湯で遣ふ路次笠さへ、はみ出す程の大天窓。

二　武將の源頼朝すら、おさ〳〵これには及ぶまじと、殿の御武運祈り居るに、

〇　口汚くもでぼちんだの、

△　福助に似て居るなどゝは、

一　返す〳〵も、

四　憎き奴めが。

清七　いえ福助と申しましたは、おゝさうぢや、歌舞伎役者の福助に、よう似て居ると申すお噂。

右馬　やあ言ふな〳〵、分家なれども主人の片割れ、身共を蔑なす上からは、たゞ此の儘には許さぬ。

一　殊更以て此方には、口を掛けたる藝者のお仲、横盤切つて晝日中もたつき居るとは大膽不敵。

二　何さまかやうな性根では、紛失なせし寶の在所、いつまで經つても知れぬ筈。
右馬　かやうな奴は引ッ括り、屋敷へ連れ行き成敗なさん。それ、下郎ども引ッ立てい。
○△　心得ました。（ト兩人にて淸七を引立てに掛る、お仲これを留めて、）
お仲　あゝもし、まあ〳〵待たしやんせ、蔭で噂をしたことが耳にはひつてお腹立ちなら、淸七さんには科はない、わたしが初手の口開きゆゑ、打つなりと叩くなりと存分にして下さんせ。
右馬　いや、女は相手にならぬ、猶豫いたさず引立てい。
○△　はッ、きり〳〵歩め。

ト此時櫓太鼓の頭を打ちおろし、○△淸七を引立て花道へ行く、お仲一緒に行かうとするを、一二引附ける、櫓太鼓竹に雀の唄になり、花道より淀車、相撲好みのこしらへ雪踏にて出來り、跡より鵜の川相撲の弟子にて、淀車の座蒲團をかつぎ出來り、花道にて行きあひ、淀車○△を投げ、淸七を後ろへ圍ひきつと見得、是れにて中間兩人天窓を抱へ、向うへ逃げてはひる。お仲これを見て、

お仲　やあ、よい所へ關取さん。
右馬　そちは千葉家の抱へ相撲、淀車浪五郎だな。
一　殿に無禮の淸七めを、成敗いたす其所へ、

二　參り合せて妨げなすは、おのれが女房の弟ゆゑ、
右馬　かばひ立てをば、
三人　いたすのだな。
淀車　いゝや女房の縁により、かばひ立てはいたしませぬ。まあ何にせいそこへ行つて、譯をお話し申
します。
鵜川　親方が來いしたからは千人力ぢや、清七さま落附いてござりませ。
右馬　譯を申すとあるからは、
一　われ〳〵是れにて、
三人　承はらうか。
淀車　どりや、そこへ行つて申しませうか。
ト右鳴物にて、淀車鵜の川舞臺へ來り、床几の眞中へ腰を掛ける、敵役三人前へ出て、
一　して又女房の縁でなく、
二　何ゆゑ留め立て、
兩人　いたしたのだ。

淀車　さあ清七どんをかばうたのは、あなた方のお爲を思つて。
兩人　何と。
淀車　さればまあお聞きなされい、此の清七どんは大事ない御家の寶紛失ゆゑ、百日の日延べを願ひ、寶の在所を詮議の役、その日限も切れぬうち御分家のあなた方が、御成敗をなされましたら、御本家よりの疑ひかゝり、どんな越度にならうも知れぬ。
敵役三人　やあ。
淀車　そこを思うて浪五郎が、兎角浪風立たぬやう梶を取つたる扱ひも、深い樣子は牧方から水に車の廻り氣で、戀には登る鳥羽繩手誰と伏見のいざこざも、ほんの夜舟の夢だと思ひ、水に流して淀車に、どうぞ預けて下さいまし。
右馬　料簡仕にくい所なれど、男を磨く其方の詞を立て許してくれるわ。
一二　それではあんまり。（ト言ひかけるを、）
右馬　はて、彼れが詞を立てるのも、お仲のことを頼まん爲め。
淀車　そりやもう、わしが詞を立てゝ御料簡さへ下さらば、お仲のことはどうなりと。
お仲　いえ〳〵わたしや。（トいふを冠せて、）

淀車　はて、只何事もわしに任せて、若殿樣と御一緒に。

お仲　それぢやというて。

淀車　これはしたり、藝者の役だ、いやな座敷も。

右馬　や。

淀車　いやさ、今が座敷の勤め盛りだ。

右馬　その美しさに、身共も執心。（トお仲に抱き附くを、）

お仲　えゝもう、しつこい。（ト振拂ひ、）知らぬわいなあ。

淀車　はてさ、何にも言はずに。

右馬　お仲おぢや。

ト唄になり、右馬之助お仲の手を引く、お仲清七に心を殘す思入にて、敵役兩人附添ひ上手へはひる。清七思入あつて、

清七　これ關取、お前さまにお目に掛るも面目なき今日のしだら、どうぞ姉へは內々で耳に入れずに下さりませ。

淀車　そりやもう女房に聞かせれば、又氣を揉む種なれば決して言はぬが、清七さまちとお嗜みなされ

ませ。（ト合方になり、兩人入替り。）今更言はいでもの事ながら、わしが親はお前さまの親御宗左衛門さまに使はれし、若黨仁平といひしもの、その縁續きで淀車も宗左衛門さまの御推擧にて、千葉の御家へお抱へ相撲、それのみならずお孃さまをわしの女房に下されしは冥加に餘る御恵み、夫婦仲よう暮すうち宗左衛門さまには御預かりの寶を盗まれ御切腹、こゝぞ御恩の送りどころと女房の縁にあなたを引取り、寶の在所詮議の爲め久松町の茶道具屋へ手代奉公おさせ申すも、人の手前は弟と呼べども元はお主筋、少しも早く二品の寶の詮議仕出すが御肝要でござりまする。最早日延べの日限も百日近くになりましたに、是れぞというて手掛りも。

清七　さあ、草を分けて詮議をすれど、今に寶の在所も知れず、わしも當惑しますわいの。

淀車　それ御覽じませ、知れますまいが。其の御苦勞をなされながら、藝者狂ひでもござりますまい、私などは斯うして居ても、世間の廣い附合に懇意な人を見掛けては、若しも斯ういふ短刀や、こんな茶碗が見當つたら隨分直をよく買ふ程にと賴んで置いた甲斐あつて、昨日計らず短刀の在所をやう／＼聞き出し、買ふ約束にいたしまして、今金の工面をして居りますのぢや。

清七　むゝ、そんなら尋ぬる短刀の、在所をこなたが聞き出して。

淀車　さあ、道具屋吾市が所持なすゆゑ、買ひ取る積りに約束なせば、金の工面で手に入る短刀。

清七　何から何までこなたの心配、其の短刀の在所が知れるも、八幡宮の御利益ゆゑ、ちよつと參詣して來ませう。
淀車　參詣なさるはよろしいが、又色狂ひはなりませぬぞ。
清七　いやもう、さつきで懲り／＼しましたわいの。
淀車　さういふ事なら若旦那、ではない、弟清七どの。
清七　どりや、參詣して戻りませうか。
ト流行唄になり、清七は上手へはひる。淀車見送つて、
淀車　もし御參詣をなされたら、早くお店へ戻らつしやれ、藝者狂ひはなりませぬぞ。はて世話の燒けた事ぢやなあ。
ト煙草を呑み居る、やはり流行唄になり、花道より丈九郎羽織着流し一本差し、相撲行司にて出來り直に舞臺へ來り淀車を見て、
丈九　淀車關、これにござつたか。
淀車　おゝ誰かと思うたら、こなたはお行司丈九郎どの、まあ／＼爰へ掛けさつしやれ。
丈九　丁度こなたにお目に掛つて、御相談がしたい所であつた。

淀車　さうしてそれは、どんなこッてごんす。

丈九　さ、外でもないが此の相撲を、打揚げると直に外へ賣れるゆゑ、關取衆の給金を預かつて來ましたが、當時日の出の淀車關、是非とも相談に乘つて下され。

淀車　そりやあもうこなたの頼みなら、相談にも乘りませうが、何をいふにも爰は門中、場所へ行つて話しませうか。

丈九　さういふ事なら、淀車關。

淀車　そんならお行司。

丈九　さあ、行きませう。

ト右の唄にて、兩人連れ立ち、鵜の川附いて上手へはひる。跡大拍子になり、花道より葛飾十右衞門羽織袴大小田舍侍のこしらへにて出來り、花道にて、

十右　繁華の地とは申しながら、何れの里も賑はしく、梅の盛りに人の出るは流石東の都ぢやな。（ト舞臺へ來る、上手より以前の清七出來り舞臺にて兩人行逢ひ）あこりや〳〵町人、ちと物が承りたい。

清七　はい、何御用でござります。

十右　身共當所は不案内ぢやが、富ケ岡八幡と申すは、此の境内の事ぢやな。

清七　はい、左様にござりまする。

十右　然らば此の境内に、松本と申す料理屋があると申すが、それは何れぢやな。

清七　その松本と申しますは、此の社内へおはひりなされまして、ずつと奥でござりまする。入口に松本と申す聯が掛つて居りますから、いらつしやれば直ぐ知れまする。

十右　おゝ左様でござるか、して其の松本と申す料理屋に、澁井道庵と申す醫師が今日參り居る由、其方は存じ居らぬかな。（ト此の時上手より以前の道庵出來り居て）

道庵　その道庵は愚老でござるが、何ぞ御用でござるかな。

清七　おゝ、丁度折よく道庵さま。

十右　然らば貴公が、澁井氏でござるか、是れは初めて御意得申すが手前は下總結城の藩にて、葛飾十右衞門と申す者、以後昵懇に賴み申す。（ト皆々よろしく床几へ掛ける。）

道庵　して愚老に御用とは、御病人でもござりまするかな。

十右　いや病人ではござらぬが、同藩のものゝ勸めによつて貴公を尋ね參りしは、俄に金子入用の儀につき、質物の世話を賴みたく、それで態々參つてござる。

道庵　なに、質物のお賴みとはなっ（ト合方になり、）

十右　賴みと申すは外ならず、何を隱さう手前主人の若殿が、少々御放埓の筋あつて遊里の金子に差支へ、今月中に百金程急に金子が入用ゆゑ、是非とも調達いたしくれいと、此の十右衛門へお賴みなれど國表より罷り越し、まだ一ヶ月も立たざるそれがし、至つて當所は不案内、尤も國表へ申し遣はせば其金子は調へども、何を申すも火急の場合にほとんと當惑いたせし所、朋友どもの話しには道庵老と申す御仁、醫師はほんの表向きにて、緣邊や金談のお世話を主に御周旋なさるゝと承はり、態々尋ね參りしそれがし仔細と申すは斯くの仕合せ、何と賴まれては下さるまいか。

道庵　いや左樣でござりまするか、成程あなたのおつしやる通り、醫師と申すは附けたりにて、地面の賣買御妾宅のお世話、或は緣談金談と何でもござれに受けこみまして、愚老がお世話をいたしますが、して質物とおつしやりまするは、如何なる品でござりまするな。

十右　さ、其の品と申すは外でもござらぬ、元は千葉家の重寶にて胡蝶と申す銘の茶碗、屋敷へ出入の道具屋より、去暮主人がお求めありしが、寶は身の差合せと火急に迫る場合なれば、質物に預けたいのぢや。（ト是れを聞き淸七よろしく思入。）

道庵　へえ、して其茶碗をあなたさまが、それに御所持でござりまするか。

十右　如何にも、是れに所持いたせば、とくと御覽下されい。

ト懐中より箱入りの茶碗を出す、道庵手に取り改め見て、

道庵 話しには承はりましたが、拜見いたすは今が初めて、目利の程は分かりませぬが、成程こりやあ結構な品でござりまする、(ト捻くつて見て居るゆゑ、清七これを見て)

清七 もし道庵さま、どうぞお跡で私に拜見させて下さりませ。

道庵 おゝちげえねえ、爰に茶道具屋さんが居た。さあ〳〵、拜見をしておかつしやれ。

ト清七に渡す、清七改め見る事あつて、

清七 おゝ、こりや正眞の胡蝶の茶碗。

十右 何と正物であらうがな。

道庵 正眞の品とあれば、隨分お世話をいたしませうが、さうしてそちらの金子の高は。

十右 只今も申す通り、金子の高は百兩だ。

道庵 左樣なれば早速に、お世話いたすでござりませう。

十右 然らば直ぐさま、同伴いたさう。(ト床几を放れ立上る。)

清七 あもしお侍さま、ちよつとお待ち下さりませ。

十右 何ぞ用ばしござるかな。

清七　外の儀でもござりませぬが、どうか其の品私めにお預けなされては下さりませぬか。
十右　預かりたいと申すなら、隨分預け遣はさうが、してお手前の身許はな。
清七　へい、私は久松町の山崎屋勘兵衞と申す、茶道具屋にをりまする、手代の清七と申す者にござりまする。
道庵　愚老が同居いたして居る甥の女房の實の弟、身分の所は道庵がお請合ひ申しまする。
十右　道庵老が身分を請合ふ、慥なものとあるなれば、如何にも質に預けんが、して百兩の金子は手許に。
清七　へい、只今主人の使先きゆゑ手許にはござりませぬが、何れ後方御屋敷まで、持參いたすでござりませう。
十右　暫時の猶豫がいたさるれば、斯く心配はいたさぬが、火急に迫る入用ゆゑ周旋いたすそれがし、只今金子が間に合はねば外へ話しを向けねばならぬ。（ト清七當惑の思入、道庵見て、）
道庵　これ清七どの、こなたきつと後方までに金を返して下さるなら、さるお人から預かつて爰に持つて居る百兩を、貸して進ぜよう。
清七　そんならあなたが百兩金、お貸しなされて下さりますか。

道庵　これといふもこなたの姉に、厄介になる愚老ゆゑ、こりやあ達引といふものだが、然し如在もあるまいが、預かり物ゆゑきつと後まで。

清七　それは違ひございませぬ。

道庵　それ承知なら、そりや百兩。（ト懐中より百兩出して清七に渡す。）

清七　慥に、借用いたしました。（ト金を改めることよろしく。）

道庵　然しながら清七どの、何の中でもこれは別、ちよつと書附をよこさつしやれ。

清七　成程左様でございまする。（ト腰より矢立を出し、鼻紙へ證文を書く、此内十右衛門は件の茶碗を摺替ることよろしく、清七證文を書きしまひ、）これでよろしうございまするか。

ト出す、道庵證文を取つて、

道庵　おゝよいとも／＼、たゞ是れはほんの掟だ。（ト懐へ入れる、清七件の金を十右衛門の前へ持行き、）

清七　左様なれば、百兩金。

十右　然らば今にも國許より、金子の參る其時は、必ず受けに參る程に、隨分共に大切に。

清七　承知いたしてございまする。（ト双方金と茶碗の箱を引替へる。道庵思入あつて、）

十右　然し火急の用向にて、心もせけば直樣手前は。（ト金を懐へ入れ立上る。）

清七　左樣ござれば、お侍さま。
十右　お若いの、道庵老、何かとお世話になりました。
ト唄になり、十右衞門道庵とちよつと顏見合せ、思入あつて花道へはひる、跡浮いた合方になり、淸七嬉しき思入にて、
淸七　これ道庵さま、思ひがけなく此の茶碗が、再度わしの手に入るも、御親切なるあなたのお蔭、有難うございます。
道庵　何のその禮に及びませう、一ツ家に居るゆゑに、愚老もこなたの姉御から、薄々聞いた寶の紛失それゆゑ人の預かり物を、貸して進ぜた今の百兩。
淸七　その金子も後方までに、きつとお返し申しまする。
道庵　おゝ、其返すので思ひ出したが、松本に居る客人が、もう今頃は歸る時分、嘸わしを待つてゐるらう。
淸七　そんなら何れ後方に。
道庵　間違はぬやう、頼みますぞや。
ト右の合方にて、道庵上手へはひる。淸七茶碗の箱を持ち思入あつて、

清七、先づは是れにて一つの安堵、たとひあちらで此の茶碗を受戻しに來ようとも根が不正の品なれば千葉家で表向き懸合ふ時はこちらの物、今一品の短刀もさつきの話しに關取が手掛りがあるといへば、これも近々手に入る一品、歸參の手蔓に取附いたわい。

　　トこの内上手より、以前の一二出掛り居て、此の時前へ出て、

一二　清七どの、嘸滿足でござらうな。(トこれにて大拍子になり、清七兩人を見て、)

清七　お悅び下さりませ、先づ一品の胡蝶の茶碗は、手に入りましてござりまする。

一　それは重畳、只今山の松本にて、道庵老より承はり、共に嬉しく存ずるゆゑ、わざ〳〵是れまで出張いたした。

二　然し何も念の爲め、誠の品か僞物なるか、是れにて内見いたした上、殿へ御推擧いたすでござらう。

清七　左樣ござらば御兩所さま、いざ御覽下さりませ。(ト茶碗の箱を出す。)

一　どれ、然らば内見いたすでござらう。(ト一箱の蓋を明け中を見て、)いやなに清七どの、是れが胡蝶の茶碗でござるか、今一應お改めなされい。

清七　なに、茶碗がどうぞいたしましたか。(ト件の箱を見てびつくり、)こりや、いつの間にやら、此の樣

な、やゝゝゝゝ。(ト當惑のこなし、)

二　なに、いつの間にやら、どれ、(ト箱の中より茶碗を取出しびつくりなし、)こりやどうだ〳〵、なんぼ茶碗が胡蝶でも、夢に見てさへこんな物を、誠の品とは思ひはせぬに、かやうな茶碗をのめ〳〵とよく見せられたものでござる、あのこゝな大だはけめが。(トきつといふ。)

清七　ちえゝ、そんなら今の侍が、摺替へ行きしか、むゝ。(ト無念の思入、一せゝら笑ひ、)

一　いや、きつとさうもあらうかえ、寶詮議の其爲に、浪人をした身で居ながら、藝者狂ひに現をぬかし、横盤切つた盗み喰ひ、その天罰で目がくらみ、こんな茶碗を誠と思ひ質に取るとは呆れたもの、これを思へば世の中に、馬鹿ほど怖いものはござらぬ。

一二　むゝはゝゝゝゝ。(トよろしく笑ひ、)

一　どりや此の由を歸宅の上、家中の者に言ひ觸らさう。(ト行きかけるを縋つて、)

清七　武士の情にこれ御內所、此儀ばかりは御內分に。

二　いゝや、是れに尾に尾を附けて、こなたのうつけをひろめるのだ。

清七　そりや又あんまり。(ト寄るを、)

一二　えゝ、寄りやあがるな。

トよろしく蹴倒し、兩人上手へはひる、跡に清七どうとなり、ほつと思入あつて、件の茶碗を手に取り向うをきつと見て、

清七　さうぢや。（トつかくと花道へ行く、此の時上手鳥居の內より、以前の丈九郎出で、）

丈九　清七どの、待たつしやれ。（ト聲をかける、清七丈九郎を見て、）

清七　こなたは行司の丈九郎どの。どうでも跡を。（トまた行きかけるを、）

丈九　これはしたり、又しても血相かへて駈け出すは、茶碗を騙つた侍の跡を追ツかけ行く氣であらうが、かほどの巧みをする者が、そこらに浮々して居やうか、待てといつたら清七どの、淀車もあのやうに氣をもんで居るものを、短氣をやめて、まあ爰にござりませ。

トきつといふ、これにて清七餘儀なく舞臺へ來り、

清七　これ志村さん、どんなことをしたわいの。（ト男泣きに泣く。）

丈九　はてまあよいわい、金は世界の湧き物ゆゑ今騙られた百兩も、あの關取が今日の相撲に勝ちさへすれば纏頭もあつまる、又外に手立もござりませう、騙つた奴は武家の樣子刃物三昧した上で、若しもの事ある其時にやあ、淀車の親切も水の泡、金で命は買へませぬぞ、まあ兎も角も關取の部屋へお出でなされませ、何かのことも話しながら、延喜直しに一杯遣らんせ。

清七　それぢやというて、どうもこなたに。

丈九　はてまあ、一緒にごんせといふに。

ト櫓太鼓の入りし端唄になり、丈九郎清七を連れて上手へはひる、直ぐ一六どんたく大一座の唄になり、大拍子を冠せし鳴物になり、花道より洋學の書生寺島松雄洋服好みのこしらへ、子供同じく洋服のこしらへお咲島田くづし、派手なる相撲女房のこしらへ、馬丁紺の法被、股引、馬車の馬丁のこしらへ、松本の下女茶屋女、白鷺相撲の取りてき、○呼出し奴にて出來り、花道よき所に居並び、

お咲　もし旦那御覧じませ、春さきとは申しながら、賑やかな事でござりますな。

松雄　追々江湖も變革して、當今一六どんたくには戲場妓樓はいふに及ばず、柳橋などの繁昌は他郷にまたとあるまいて。

お咲　思ひがけなく今日は、お誘ひをうけまして、目の正月をいたしまする。

白鷺　關取の留守にお上さんが、内を明けて出なさるのは、珍らしいことではないか。

下女　これも外ならぬ御贔屓の旦那さまのお誘ひゆゑ。

馬丁　さうとも／＼關取のお上さんなんぞは、あすこの花會こゝの義理と、あけしい間はないのさなう。

松雄　家内を守るが役ではあるが、舊弊を一洗して、たまには遊山もするがいゝ。

お咲　それはさうと坊ちやんは。よこ、おあんよをなされまするな、然しお草臥れはなされませぬか。
○　奴がおんぶしませうか。
子供　いや〳〵、僕は奴はぺけだ。
馬丁　奴がぺけなら、
兩人　私共が。
松雄　いや、それには及ばぬ。もう直ぐだ、奮發して步け〳〵。
○　もう土俵入りでござりませう。
松雄　土俵入りとあるからは、因循せずと行かうかい。
皆々　さあ、お出でなされませ。（ト右の鳴物にて舞臺へ來る。）
馬丁　まあ、旦那さま。
兩人　これへお掛けなされませ。（ト床几を出す、皆々これへ腰を掛け）
お咲　いやお好きとは申しながら、よく旦那は御遠方から、いらつしやつて下さいますな。
松雄　僕が相撲の好きなことは、學校でも評判ゆゑ、富ケ岡の八幡に花相撲のある事を、新聞誌に載せぬうち、東京の親友から電信機で知らせしゆゑ、取るものも取りあへず即刻馬車で出て參つた。

馬丁　よつぽどお好きでなくツては、濱から態々東京まで、お出で下さるものではない。
白鷺　又坊ちやんもお好きと見えて、よく毎日お飽きなされず、御見物にお出でなされます。
松雄　それは僕が傳授ゆゑ、なか〳〵こいつも好者と見えるて、追々世界も開化して、今に三ッ子が相撲などを見るやうになるであらう。
お唉　有難い事に、どこの場所もよい御見物。
下女　關取の人氣はまた格別。
松雄　それといふのも關取が、衆に勝れしと申すものぢや。僕も近頃洋學に心を委ね書見いたすが、日本はおろか各國にも關取に續くものはあるまい、當今日の下開山と謂つべきものなるゆゑ、恐る敵はなけれども、今日は相手が駒ヶ嶽ゆゑ見物擧つて來た樣子、勝は知れた淀車投げ物をいたさうと持つて參つた物がある。
お唉　それは有難うござります、たゞ御贔屓のお力ばかりで、出世いたしまするでござります。
松雄　いやも贔屓といふものは別なもので、淀車が勝つた時には我を忘れて、しやつ飾りが汚れてびつしより濡るゝわえ。
白鷺　もし旦那、どうぞわしらも關取同樣に、可愛がつて下さりませ。

おゝ關取の弟子は皆贔屓ぢや、然しそち達も今のうちは勉強が肝腎ぢやぞ。（ト白鷺を見て、）おゝいつぞは聞かうと思つたが、白鷺そちが其の首は、どうして左樣に曲つたのぢや。

白鷺　是れは內の關取と地取りをした其時に、どういふはずみか張手を喰つて、それなり首が曲りました。

奴　それから旦那、この人は、白鷺と名を替へました。

馬丁　それは又どういふ譯だ。

お咲　よくどゞ逸で唄ひますぜ、白鷺が小首をかたげて。（ト唄ふ。）

松雄　いや、是れは確論、愉快々々。

お咲　最前から餘程の間、嘸坊ちやんが御退屈、場所へ入らつしやつてはどうでござります。

松雄　おゝ左樣いたさうか。これ奴、手前は先に場所へ行き、新場の黑船が居らうから棧敷を周旋して置いてくれ。

○　畏りました。

松雄　まだちつと早からうから、ちよつと山の松本で一喫催して行かうか。

お咲　それがよろしうござりませう。

子供　おとつさん、又どろんけんになつては坊が違却するよ。

松雄　こいつ親仁を、諷學いたし居るわえ。（ト此の時本鐵砲の音する、白鷺びつくりする、）

白鷺　えゝびつくりした、今のずどんは。

お咲　ありやあ十二時の空砲さ。

松雄　内儀も洋刻を覺えたな。（ト松雄時計の蓋を取り明けて見る。）

お咲　今の流行でござりますもの。（ト是れを聞いて、時計の蓋をぴつしやりとしめるを道具替りの知せ、）ます〳〵開化の。時節ぢやな。

ト此の仕組よろしく、此の道具廻る。

（相撲小屋前の場）――本舞臺正面相撲小屋の前面を見せたる張物、潜り戸明け建てあり、爰に取組の額觸を大分に張り、下手葭簀張りの出茶屋、床几二脚程並べ、後一面の淺黃幕、櫓太鼓にて道具納まる。と口々の仕出し大勢、相撲見物木戸へはひる事よろしくあつて、以前の〇△出で來り直に床几へ掛り、茶屋の亭主盆の上へ茶碗を載せ出來り、

亭主　皆さん、よくお出でなされました、お茶を一つお上りなされませ。御見物でござりますかね、只

今丁度二番取りになりました。

○二番取りのうちは見て居るのが大儀だから、淀車の取組になつたらはひつて見よう。

△今日は屋敷のお抱へ同士の取組、それに又駒ヶ嶽は、おらが旦那の最屓相撲だ。

亭主左樣でござりますか、駒關は今度の場所にまだ一度も寢ませぬが、今日の取組はちつと手强いものでござります。

○馬鹿を言ひねえ、そりやあ順にすりやあ負ける筈だが、すてきと勝誇つて居る駒ヶ嶽、大抵な事では遣つてのけるて。

△さうとも〳〵、今日駒ヶ嶽が勝たねえと、おらあ駈落道具だ。

○そりや又なぜ。

△役當で四三で三兩いつて居るから、負けた日にやあ大しくじりよ。

○さうか、四三ならたゞ取りだ、おらもちつと乘りてえな。

△どうして今乘せるものか、それならおらア今日は精進をして、摩利支天樣を信心して居らあ。

○へゝ、親の日にも精進をしねえ奴が、とんだ大笑ひだ、はゝゝゝゝ。

ト此時右馬之助先きに、一二出來り、

右馬　おゝ中間ども、是れに居つたか、して駒ヶ嶽と淀車の立合は。
○　只今二番取りでござりますから、もうたんと間もござりますまい。
一　二番取りも又一興、直にお越しなされては如何でござりませう。
二　いやもう拙者は、駒ヶ嶽は今日の取組は名におふ相手は淀車、誠にあぶないものでござる。
右馬　それゆゑ身共も怖いもの見たさとやらで、何かわな〳〵胴ぶるひがいたして、何でも今日の立合は、駒ヶ嶽の晴れ勝負。
一　早く勝相撲の安否をば、殿のお耳に達したい。
二　それゆゑ年寄中へ頼み込み、打留めの取組を、前へ繰替へます程のこと。
一　どうか勝たせたい、
兩人　ものでござる。（ト思入、此時奥にて拍子木を打ち、外の呼出しよろしく、皆々捨ゼリフあつて、）
奥で　西淀車々〳〵。東駒ヶ嶽々〳〵。
右馬　そりや、駒ヶ嶽の取組だ、皆々續け。
皆々　いざ、參りませう。（トわれ勝に皆々木戸の中へはひる。取組の體よろしくあつて、）
奥で　淀車。

仕出大勢 淀車が勝つた〳〵。（ト仕出し大勢出る、此内前の入込に出し仕出し△○□出て）

△ 駒ヶ嶽が勝つだらうといふ當込みが違つて、

□ 淀車が勝になつたは、強い關取は違つたものだ。

○ いつたいこの取組は、打留めの積りのを、

△ 年寄衆が屋敷の頼みで、繰替へた所からもめが出來て、

○ それで跡の取組にかゝらねえのか。（ト内へ思入）

□ 何にしても淀車が勝相撲とは延喜がいゝ。

皆々 勝つた〳〵、淀車が勝つたぞ〳〵。

△ 淀車が勝つたを見りやあ、

○ 是れで言分はねえ。

△ さあ行かう〳〵。

ト皆々はひる。やはり右の鳴物にて、木戸の内ばた〳〵にて、船頭鶏の長吉先きに世話人二人出て、

世話一 まあ〳〵、靜かに言ひねえな〳〵。

同二 そこが間違ひでございます。

皆々　料簡しなせえな。
長吉　何の料簡も糸爪もいるものか、おれもな、これでも客のうちだぞ、おれが土地の者も外に見物の者も來て居るわ、何ぼ御免の相撲だといつて。
世一　はて、それだと言つて今關取が、土俵へ立つ出合がしら、おめえが立派な兄いでも、
世二　まあ待ちなせえと留めたのだ。
兩人　わつちらが役目だわな。
長吉　いゝや役目でもあらうが、そつちが強い生業でも、おれも川舟の仲間ぢやァ。
世一　さあ、こつちもそこが間違ひだから、
世二　留めたのが氣にさはつたら、
皆々　料簡しねえな〳〵。（ト世話人の三出來りて、）
世三　まあ〳〵兄い、わつちが挨拶だ、ちよつと爰で茶を飲んで。
長吉　いやだ〳〵。
世三　はて、おらが言ふことを、聞いてくれねえのか。
ト捨ゼリフよろしく、下手の茶屋へ、長吉を宥めてはひる。此内相撲太鼓のあしらひよろしく。皆々

捨ゼリフのやうに、わや／＼言ひながら、相撲太鼓にて花道へはひる。好みの合方になり、淀車好みの着附、但し縮緬の大模様の浴衣を引つかけ、扱き帯、以前の白鷺の取りてき、同じく以前のなりにて、白鷺羽織浴衣などを抱へて出來り、淸七の息子、しだらなきなりにて、淀車と連立ち出で、

淸七　淀車、よう勝つたな／＼。（ト踊りながら夢中になり、附添ひ出る。）

淀車　是れはしたり淸七どの、門中でどうしたものでござる。

淸七　どうもかうもない、わしや此樣な嬉しい事はござらぬわいの。

淀車　それはさうと淸七どの、さつきの茶碗を出さつしやれ。

淸七　さうして是れを、どうするのぢやえ。（ト懷より茶碗の箱を出す、淀車受取り、）

淀車　それは爰へ置いて、こなたは山の松木へ行つて待つてござれ。

淸七　そんなら關取、待つて居ますぞや。（トこなしあつて下手へはひる、此内白鷺件の着物を纏め前へ出て、）

白鷺　親方纏頭がこのやうにありますぞ。

淀車　おゝ、禮いうてお返し申せ。

白鷺　あい／＼。（ト着物を持つて木戸口へはひる。此時丈九郎行司好みのこしらへにて出て、）

丈九　淀車關、きつい出來でござりました。
淀車　されば、あの駒ヶ嶽も初日から一度も寢ぬ今度の出來、取りにくうはあつたれど、妙な事からはずみになりて、投げねばならぬ今日の相撲。
丈九　さうして妙なはずみとは、どんな事でござりまする。
淀車　さあ今爰へ來た清七どのゝ此の茶碗で、百兩騙られ切羽詰つた金の工面、
丈九　扨はそれゆゑ力を張り、今日の相撲に首尾よう勝ち、
淀車　貰うた纏頭は茶碗の埋草、はて忌々しいこの茶碗。
ト件の茶碗を箱より出し、舞臺へ打附ける、これにて碎けて飛び散る。
丈九　それでこなたの、胸のつかへも、
淀車　割つてしまへば元の土、これで心がさつぱりした。
丈九　さあ、是れからは、跡の取組を。
淀車　わしは是れから松本へ。（ト上手へ行き掛ける時に、よき所の土間の中より長吉勇みのなりにて出で、）
長吉　やい〳〵、ちよつと待つてくれ。（トこれを淀車聞き入れず、上手へ行かうとする。）やい、待てといつたら待たねえか。（ト舞臺へ上り來る。）

淀車　呼んだのは、わしが事か、何ぞ用かえ。
長吉　おゝ、用があるから呼んだのだ。
淀車　その用は。
長吉　用事といふのは外でもねえ、茶碗をむしやうに打附けやあがつて、其のとばちりが、（ト眉間へこなしあつて、）此通り、割れが當つて眉間の疵、人に疵を附けて置き、默つて行つてそれで濟むかえ。
淀車　いや、何事かと思つたら、疵が。おゝこれはわしが惡かつた。これ若いの、許さんせや〳〵。
長吉　いやだ〳〵。さつきから疳癪に障つて、料簡がならねえのだ、今も中で關取の向うを切つたとか留めたとかぬかしやあがつて、大勢が寄つてよくもおれを木戸から突出しやあがつたな。これ近所の友達も大勢見て居る其中で、けじめを喰つちやあ、おれも面が立たねえわ、それも場所の法だとか規則だとかぬかして、爰の茶屋へ押込みやあがつたは今のことだ。何か譯があらうともそつちの事の腹立ちで、大道へ打附けた茶碗のとばちり。これ、おれがしやつ額へ此の通り疵が斯う附いたからは、もう料簡がならねえわ。そつちが幕の大關の淀車でも水車でも、さう横ぞつぱうには通さねえ。こつちは眞直ぐ川舟の、江戸川筋で賣込んだ鵜の長吉だ。（ト茶碗の割れへこなし

あつて、）淀車のしやツ額へ疵を附けにやあ料簡ならねえ。うぬ、どうするか見やあがれ。
ト立かけるを丈九郎留めて、

丈九　これ〳〵若いの、此の通り關取が詫びて居なさるから、料簡したがよいではないか。

長吉　いやだ〳〵、うぬが名もねえやうな相撲なら默つて居るが、淀車とか水車とか人に知られた男だけ、うつちやつては置かれねえ、おれも疵を附けなけりやあ合點しねえ。
ト立ちかける、此時以前の白鷺ともう一人弟子相撲出來り、

白鷺　やい〳〵、關取が此樣に譯をいふに、手めえの耳へははひらぬか。

弟子　分からねえにも程があるわえ。（ト兩人立ちかゝるゆゑ、）

長吉　こいつらア默つて居やあがれ、そこをのきやあがれ。（ト兩人を掻きのけ、淀車の側へ行くを留めて、）

淀車　これ程詫びても、聞き入れぬか。

長吉　いやだ〳〵、疵を附けねえけりやあ、堪忍ならねえ。

淀車　聞かれなけりやあ、勝手にさらせ。（ト長吉を突き倒すを起上り、）

長吉　うぬ、待ちやあがれ。（ト此爭ひ、捨ゼリフをまくしかけ、木戸の內より世話方多勢、仕出し出て、）

仕出　言ふことを聞かずば、

皆々 ぶつくじけ〳〵。

長吉 いや、あいつが面へ。（ト立ちかゝるを皆々手どりばいとり長吉を捉へ、天井持ちにかき上げる。）

皆々 うしやあがれ〳〵。（トわや〳〵花道へ擔ぎはひる。）

丈九 思はぬ事で、とんだけいたう。

淀車 爰らで丁度、

ト此時に呼出し奴、拍子木を持ち出て、拍子木をちよんと打つが道具替りの知せ、

いゝ中入だ。（ト皆々よろしく、櫓太鼓にて此道具廻る。）

（松本奥座敷の場）――本舞臺三間中足の二重、本緣附、大和葺の庇櫛形の欄間、上手一間の障子屋體、いつもの所枝折戸、此外柴垣、正面風雅なる襖、平舞臺よき所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て二軒茶屋松本奥座敷の體、二重眞中に以前の右馬之助、左右に侍の一二住ひ、平舞臺に以前の道庵、清七を捉へ居る、この見得流行唄の合方にて道具納まる。

道庵 これさ淸七どの、こなたがそんな事を言つては、此の道庵が迷惑する、さつき貸した百兩の金、耳を揃へて返して下され。

清七　さあ際どい間の時借りゆゑ、其の催促は尤もなれど、さつきの茶碗をいつの間にやら贋物と摺替へられ、當惑したゆゑに金の工面もどこへやら、長くとは言ひませぬ、どうぞ晩まで道庵さま、お待ちなされて下さりませ。
道庵　いや晩のことは扨置いて、寸の間も待たれねえ、たつた今返して貰はう。
清七　それだといつて今といつては、こりやどうしたらよからうなあ。（トじゆつなき思入、）
右馬　こりや〳〵道庵、承はれば其方は清七めが姉の家に、同居いたして居るとやら、其誼ゆゑ清七めとこしらへ事をいたしてをるな。
道庵　いえ、どういたしまして、全く左様な。
右馬　いや〳〵それに相違ない、藝者お仲の身請の金の手附に渡してくれいと申し、其方に預けたを清七めに、貸すと申すは何とも以て心得ず。
一　こりや清七の肩を持ち、身請の邪魔をいたす、深い巧みに相違ない。
道庵　いえ、どういたして全く左様な。
二　いや其の言譯は暗い〳〵、左様でなくば質物を、預けて置きし當人、いづくの誰ぢや是れへ出せ。
道庵　さあ、其の預け主は結城の御家來、葛飾さまとおつしやりまして、始めて逢つたるお侍。

右馬　だまれ道庵、始めて逢ひし侍より、百兩金といふ預かり物を、身許も調べず渡すといふは、甚だ
以て心得難い。
一　殊更胡蝶の茶碗といひ、千葉の御家の重寶にて、紛失いたせし不正の品。
二　それを當家へ屆けもなく、質に預かるなんぞとは、不埒至極の横道者。
右馬　何とこれにも言譯あるか。
道庵　さそれは。
一　言ひ合せだと、白狀するか。
道庵　全く以て。
二　然らば金子を是れへ出すか。
道庵　さあ、それは。
三人　さあ、
道庵　さあ、
四人　さあ〳〵〳〵。
右馬　道庵返事は、

三人　どゞ、どうぢや。（ト是れにて道庵うんと詰り、清七の胸倉を捉へ、）
道庵　これ清七どの、いやさ清七、こなたのずるい根性から、正直正路の道庵までが、痛くない腹を探られて、疑ひうけるもこなたゆゑ、さアたつた今金を返すか。
清七　それぢやというて、今爰には。
道庵　えゝ爰にないでは濟まぬ、こなたのやうな横着者は、此の道庵が斯うして出させる。（ト煙管にて打擲しながら、）これでも出さぬか、これでも出さぬか。えゝ、いつその事に。
十右　あいや、其の金子お返し申さう。
敵役四人　何と。（ト合方きつぱりとなり、奥より侍の十右衞門やはり頭巾の儘にて出る、清七これを見て、）
清七　や、こなたはさつきの騙りどの。（ト言ふを冠せて、）
十右　こりや〳〵町人、うろたへて何を申す、手前は下總結城の藩中、騙りなどゝは無禮者めが。
清七　いゝや騙りであるまいか、さつき渡したあの茶碗、ありやまツかいな贋物ぢやぞよ。
十右　さあ假令僞物であらうとも、手前主人が先達て五百金にてお求めありし、御祕藏の胡蝶の茶碗、只今國許よりお手許金が參りしゆゑ、請戻しに參りしが騙りにあらぬ此身の面晴れ、いざ質物を取らう。（ト懷中より袱紗包みの金を出す。清七當惑の思入にて、）

清七、さあ其茶碗は贋物ゆゑ、先刻淀車に見せたれば、直に粉微塵。
ト是れを聞き、十右衛門びつくりなし、
十右　何と申す、すりや大切なるあの茶碗を、微塵に割つてしまひしとな、やゝゝゝゝ。（ト清七を引附け、）こりややい、最前あれほど大切に預かりくれよと申し附けしに、自由に人手に寶を渡し、微塵に碎きしとは、言はうやうなきおのれはなあ。（トきつと思入あつて、）よしく、此の上はおのれのやうな人でなしを、相手にいたすも大人げなし、其の淀車に面會なして。
ト刀を持つて立上る、此の時障子屋體の内にて、
淀車　いゝや、其の大切な茶碗は、只今お返し申しませう。
ト誂への合方になり、淀車茶碗の箱を持つて出來り、よろしく住ふ、皆々見て、
右馬　誰かと思へば、其方は、
一　千葉のお家の抱へ相撲、
兩人　淀車浪五郎だな。
十右　微塵に碎きし寶の茶碗、如何いたして返納いたす。
淀車　さあ最前腹の立つまゝに、打碎いては見たものゝ、質に預かる品と聞き、元の通りに繼ぎました。

十右　やあ、假令燒繼ぎいたせばとて、疵の附いたる其の茶碗、殿の祕藏に相成らうか。

道庵　これさ〳〵淀車、貴樣にも似合はぬ、いつそ未練な事を言はないで、伯父が預かつてやらうから、金で濟ましてしまふがいゝ。

淀車　いや〳〵、よしませう。

道庵　そりや又なぜ。

淀車　預かり物の此の茶碗に、ひゞが入るとか疵が附くとか、躊躇があつたら伯父御を賴み、扱つて濟ませようが、元の通りに燒繼いで少しも替りのないからは、金を出すにも及ぶまい。さあ改めて受取らつしやい。

ト茶碗の箱を出す、十右衞門手に取り、茶碗を出し改め見てびつくりなし、

十右　やゝ、繼いだと申せど繼ぎめもなく、寸分違はぬ此の茶碗。

淀車　それでも言分ござりまするか。

十右　さあ、それは。

淀車　よも言分はござりますまい。（トきつといふ、これにて敵役皆々顏見合せ）

右馬　さつきあれ程割つた茶碗が、どうして爰へ。

一　元の通りに燒繼で、少しも疵目が知れぬとは。

二　これが噂の吉利支丹、眼をくらます法ではないか。

道庵　はて、面妖な事ではないか。（ト淀車につこと笑ひながら、）

淀車　そりやあ合點が行かぬ筈、かういふ事もあらうかと丁度似寄りの恰好のが、此の松本にあつたを幸ひ、貰つて最前表の茶屋の緣で割つて見せたはこつちの山、さうとも知らずまた候や、金に仕ようと此茶碗を、受戻しに來た大騙り、めつたに爰は立たせねえぞ。

トきつといふ、是れにて十右衞門南無三といふこなしあつて、

十右　さう知られたら、こいつを攫つて。

ト前にある金を持ち逃げにかゝるを、淀車これを支へ、ちよつと立廻ると、十右衞門の冠りし頭巾と上着すつぽり脱げて、褞袍平ぐけのこしらへになり、淀車件の金を奪ひ取り、

淀車　おのれのやうな太い奴は、いつそ此場で張り殺して。（ト握り拳を振上げるを、）

十右　あゝもし〳〵關取、そのお腹立ちは重々御尤もでござりまするが、これには段々譯のあること、まあ一通り聞いて下さりませ。（ト是れにて淀車は手を放す、十右衞門は下手へ行き、小さくなつて蹈まり、誂への合方になり、）何をお隱し申しませう、私はこの蛤町で人力を曳きに出ます梅吉と申すも

の、身貧に暮す其中で、たつた一人の母親が長の病氣に看がくも煎じ詰めたる藥の代、價の高い人參を飮ませればきつと直ると、醫者が教へてくれましたれど、僅かに二朱か一貫のほまちで歸る車曳き、殊に段々人力も類が殖えて共潰れ、どうせうかと思ふ矢先き、ふつと兆した惡心に貧の盜みの出來心もなれぬ事ゆゑ直に見出され、今お前さまに此命を取られましては私ばかりか、病苦に惱む母親を見殺しにせねばなりませぬ、どうぞ不便と思召して命ばかりは關取、お助けなされて下さりませ。

ト十右衞門そら涙をこぼして淀車に賴む、これにて道庵もそら涙をこぼし、態と大聲をあげて泣き出し、

道庵　はあゝゝゝゝ、扨も〳〵哀れなこなたの物語りに、年を取つた愚老などは、思はず涙をこぼしました、さう聞いて見ればこれ關取、小遣ひの少しも遣り、此儘助けてやらつしやれ。

淀車　いや、こなさんは其樣な、欺しを喰ふか知りませぬが、わしやあ其手は喰ひませぬ。

道庵　なに、こなたが欺しを喰はぬとは。

淀車　はて、今こいつが口車で人力業をするといふが、第一胡亂な手足の先。

十右　や。

淀車　そんな白化うそを言はずと、實は斯うだと言つてしまやれ。
　　トこれにて十右衞門、もう是れまでといふ思入あつて、
十右　いや忌えましい摺古木だなあ。（ト胡坐をかき、是れより合方替つて、）口から出任せ出たらめも、間の惡い時にやあ惡いもので、かうとんちんかんに見出されちやあ、どうなるものか仕方がねえ。ありやうは言つてしまはうが、おれも以前は鎌倉の直參隔日の勤めをして大小名にも殿中で顏を知られたお坊主だが、親仁の惡事が露顯から悴諸共廢されて、持つた病の馴れ易く丸い天窓の月代が延びるに從ひ段々と、凄みなせりふに功が積み、今ぢやあお坊主幸次といふ肩書のある遊び人だが、當時日の出の關取と體の貫目をくらべちやあ、まだ〳〵よつほど不釣合、其の淀車を抱き込んで、命一つを投げ出すからは、おれを是れから突出すとも下手人になる料簡なら、切るとも突くとも勝手にしてくれ。
淀車　おゝ、望みに任せて殺してくれるわ。（ト刀を持ち立掛る爰へ奥より以前のお咲出て、此中へはひり、）
お咲　こちの人、まあ〳〵待つて下さんせいなあ。
淀車　いゝや、手前の知つた事ぢやあねえ、留立てせずと退いてゐろ。
お咲　いえ〳〵退かれぬ退きませぬ、わたしが爰へ出たからは、お前に短氣はさせぬわいな。

ト無理に淀車を宥めて下に居らせる。

十右　さあ〳〵殺せ、殺しやあがれ。(ト體を突附けるを留めて、)

お咲　これはしたり、靜かにしなんせ。(ト兩人思はず顏見合せ、)

十右　さういふおめえは。(トぞつとせし思入。)

お咲　ほんに何處かで見たやうな、(ト合點の行かぬこなし、十右衞門思入。)おゝそれ〳〵、梅幸によく似たお人、斯う見た處が以前は何の某と、定めて氏もござんせうが、大それた不手勝手、又お前もちと嗜みなさんせ、こんな人を相手にして、いゝえいなあ、こんな爭論しなさんすと、第一大人氣ないと人に笑はれますぞえ、又お前もわたしが關取をかばふやうに思うて居るお方もござんせう、それぢやによつてわたしが扱ひと云うたら、さあお前も腹が立たうが、其いゝ人が留めたと思つて、器用に歸つておくんなさいな。

十右　外の者の挨拶なら歸らねえが、ちつとこちらに思はくが。いやさ、おもッたらしの損料物、ちらねえやうに纏めて行かうか。(ト落散りありし着物頭巾を大小へ帶にて結び附け、枝折の前へ行き、)おいお上さん、歸りにくい所だが、今日はお前の顏を立つて、何も言はずに歸つて遣るぜ。

道庵　これさ、餘計な事を言はねえで、さあ〳〵早く歸るがいゝ。

ト道庵は十右衞門を無理に枝折の外へ出す。十右衞門思ひ入あつて、

十右　然しまあ、こんな强請の引込みは、これまで幾度かしたけれど素手で歸つたことはねえが、當時ア天保同樣にびいつくの相場も下り蔓ることが出來ねえから、てえげえ爰らで負けておかうよ。

ト大小を肩へ引掛け、跳への合方になり、十右衞門花道へはひろ、跡浮いた合方になり、淀車件の百兩包みを出し、

淀車　さあ伯父御、さつきお前に弟が借りた金の此の百兩、改めて受取らつしやい。

道庵　如何にも慥に受取つた。さあ若殿さま、お返し申しまする。

ト金を取つて、右馬之助の前へ出す。淀車これを見て、

淀車　そんなら金の出所は。

右馬　如何にも身共が道庵に、預け置いたる此の金子。

淀車　それでは騙りのあひずりも。

一二　やあ。

淀車　いやさ、騙りのあいつにすんでの事、いや危ない事であつたなあ。（ト奧より茶屋の下女出來り、）

下女　もウしお上さん、奧のお客さまが、何か御用がござんすとやら、呼んで來いとおつしやりまし

た。

お咲　あゝさうでござんすか、そんなら最うこちの人、濱の旦那が待つてゞござんす、早うござんせ。

淀車　今行く程に、そこをいゝやうに言つてくれ。

お咲　あい〳〵、どれ行きませうわいなあ。(トこれにてお咲下女附いて奥へはひる。)

右馬　手附の金子が戻る上は、福島屋の亭主を呼びやれ。

一二　心得ました。亭主々々。

亭主　へい〳〵〳〵。(ト亭主羽織着流しにて出來り、下手へ手をつかへ、)先刻お人でござりましたゆゑ、お次に參つて居りましたが、火急のお使ひは、何御用でござりまするな。

右馬　そちを招くは別儀でない、かね〴〵申し置いたる通り。お仲が身請は身共がいたせば、則ち手附の金子百兩改めて受取つて置きやれ。(トこれにて件の百兩を亭主の前へ出す。)

亭主　左樣なればお手附の、受取りを差上げまする。(ト有合ふ硯にて受取りを書きにかゝるゆゑ、)

淀車　これ〳〵御亭主、その身請はわしが先口、外へさせては濟まないぞ。

亭主　成程それはおつしやる通り、お前さまが先口なれど、まだ御手附の金さへ受取らずにござりますれば。

淀車　さあ、其金も夕方までには、きつとこしらへ渡さうから、それまで待つて下せえ。

亭主　關取のお頼みだが、右から左り斯うやつて、身請けの口がござりましては、假令そちらが先口でも待つ譯には參りませぬ。

淀車　さうでもあらうが、そこが顔づく。

亭主　いえ、金銀のことばかりは、顔づくでは行きませぬ。

淀車　はて、さう因業を言はずと、長うは言はぬ夕方まで。

亭主　いえ、なりませぬ。

淀車　そこをどうぞ、なこれ、親方。

右馬　こりや／＼淀車、それへ出い、づッとそれへ出い。（ト合方になり、）最前おのれは何と申した、いたしにくい勘辨も身どもがいたしてやつた替り、お仲の事はと請合ひしは、男を磨く稼業を持ち舌を二枚に遣ふのぢやな。こりややい、分家なれども右馬之助、おのれに扶持を與へ置く千葉家では御惣領だぞよ、其の身共をば出し抜いてよくも身請けの邪魔をいたす、お仲をこれなる清七めが、女房にあてがふ所存ぢやな。

淀車　いや、それは大きな物の間違ひ、此の清七の女房に請出してやるといふは、ほんの世間の表向き

實は疾からお仲にぞつこん惚れて居るゆゑ、舌を二枚に遣つても、こつちへ身請けいたしますのさ。

ト右馬之助これを聞き、口惜しき思入あつて、

右馬　えゝ舌たるい其の詞、其儀であらば身共が折檻。（ト握り拳にて淀車を打つ、手の痺れる思入あつて、）やあ、誰かある、淀車を打ち据ゑい。（ト此以前より駒ケ嶽出かゝり居て、）

駒嶽　その役目なら私が、勤めたうござりまする。（ト前へ出て來る。）

淸七　そんなら今日の、相撲の遺恨で。

駒嶽　いや土俵の上の勝負は目ツ張りツこの力づく、殊に今度の顏觸ぢやあ西と東に立別れ、肩を比べる關取だが、檜木舞臺の本場所ぢやあ、同じ幕でも淀車と段の違つた駒ケ嶽、負けた所が恥でもなく、遺恨を含むいはれはねえが、見下げ果てたる根生に殿の上意を幸ひと、一番けちを附けてやるのだ。

淀車　なに、此の淀車を見下げたとは。

駒嶽　見下げ果てたは今日の場所、取るにも足らねえ船頭を、何でこんたは摘み出した。

淀車　や。

駒嶽　いゝやさ、たゞの喧嘩と事違ひ、ついぞ是れまで例のねえ土俵の上で茶碗の投げ打ち、碎けた缺が散亂して客の額へ向疵、その粗相をば逆捻ぢに摘み出すとは手荒い仕方、しかも相手の船頭は今日若殿のお供ゆゑ、それだによつて駒ケ嶽が、爰で遺恨を晴らしてやるのだ。

一　扨は先刻われ／＼が、今日の勝負は散々と、力を落し歸りし跡、間違ひありしと聞きたるが、

二　殿のお供の船頭を、淀車めが手籠めにせしとは、返す／＼も憎き奴。

右馬　おゝよくぞ申せし駒ケ嶽、此の始末を本家へ達し、今日よりして扶持を召上げ、最早千葉家の抱へでないぞ。

駒嶽　扶持放されの證據には、われが額へ極印打つて。（ト煙管にて淀車へ打つてかゝる、淀車身をかはし、駒ケ嶽の手首を捉へぐつと押へる、これにて駒ケ嶽かひなの痺れる思入。）あいたゝゝゝゝ。

右馬　やあ身共が名代たる駒ケ嶽に、手向ひいたすは無禮であらう。

淀車　いゝや少しも無禮でない、今よりしては一本立ち千葉家の抱へでないからは、假令分家の若殿も恐れることは少しもねえ。

一二　もう此上は。（ト刀の柄へ手をかけるを道庵留め、）

道庵　まづ／＼お待ち下さりませ、其の御立腹は御尤もだが、遊里の場所でそれは惡い、まづお鎮まり

下さりませ。（ト宥める。）

駒嶽　やい淀車、われを此の場で打ちすゑるは、いとより安いことだが、おれも初春早々から罰が當るといはれては、あんまりどつともしねえから、此の仕返しはわれとおれとが顏觸の、今度の場所まで預けて置く。

右馬　おゝそれがよい〳〵、今日よりして其方は、千葉の抱への出世相撲、體へ怪我が附いてはならぬわえ。

一　そんならこなたは、一足先きへ、

二　お屋敷へ行て待つて居やれ。

駒嶽　左樣なれば、若殿さま。

右馬　おゝ。（ト駒ヶ嶽淀車に思入あつて）

駒嶽　われとおれとが、今度の顏觸。

淀車　いつ何時でも。

駒嶽　きつと詞を番うたぞよ。（ト誂への鳴物相撲太鼓にて、花道へはひる。）

亭主　これさ關取、身請けが出來ずば仕方がない、それとも爰へ金をお出しなさるか。

淀車　それぢやというて今爰には。

二　なけりやあこつちで身請けをしても、言分はあるまいがな。

淀車　さあ、それは。

一　金を出すか。

淀車　さあ、

兩人　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵。

一二　返答ぶて、どゞどうぢや。

亭主　關取、こりやいつたい、どうしておくんなさるえ。

トこれにて淀車當惑の思入、此時奥より洋服の寺島松雄出掛り居て、

松雄　いや、其の金子は關取の、手より只今渡すであらう。（ト前へ出る。）

淀車　あなたは、濱の旦那さま。

松雄　さあ今日の相撲の勝祝ひに、纏頭を少し惠まうと思ひ居るうち喧嘩の動搖、つい因循いたせしが爰にとあるゆゑ尋ねて來たは、些少なれども萬古が二枚圓金が五十枚合せて百兩、百貫の裸は相

僕の稼業柄、包ず送るも懇意仲、これが此の場の役に立つなら僕も大慶。

ト萬古の札二枚、圓金を五十枚前へ出す。淀車思入あつて、

淀車　旦那さまには是れまでも、度々お世話になりし上、又もやこれを頂戴しては、誠に以て濟みませぬ。

松雄　濟むの濟まぬのと關取には、僅な金に違却の樣子、義を見てせざるは勇みなし、僕が寸志納めてくりやれ。

淀車　濟まぬ事ではござりまするが、御覽の通り淀車が顏に拘はる手詰の金。頂戴いたすでござります。此の御恩は旦那さま、一生忘れはいたしませぬ、えゝ有難うござりまする。

ト手を突いて禮を言ふ。

松雄　いや左樣に禮を言はれては却つて僕が赤面いたす、勝負は時のはずみながら、勝つた祝ひは誠に愉快、それに引換へ不覺を取り因循などを。（ト敵役を尻目にかけ思入あつて氣を替へ、）いや、僕も因循いたされぬわ。學校所に用事あるを、はたと失念いたした。

淀車　それでは是れから、旦那さまには。

松雄　又明日參る程に、萬事の周旋頼み申す、最早時刻も夕陽に小兒をせめて暮れぬうち、僕も歸宅を

促がさう。

淀車 左樣なれば、旦那さま。（ト送らうとする。）

松雄 いや、送り迎ひは固く辭します。（ト兩人を留め、）明日拜顏、諸君子失敬。

ト咳拂ひして眞面目になつて、是れをキツカケに唄になり、思入あつて奥へはひる。跡淀車見送り思入あつて、件の金を亭主の前へ出し、

淀車 さあ御亭主、これで言分はあるまいがな。

亭主 さあ、それは。（ト右馬之助氣の揉めるこなしあつて、）

右馬 こりや亭主、一旦請取る身共の手附、よもや再び返しはせまいな。

亭主 さあ、それは。

淀車 金を出したら先口の、よもや顏を潰されまいが。

亭主 さあ、それは、

右馬 さあ、

三人 さあ〳〵〳〵。

淀車 御亭主返事は、

お仲　まあ〳〵待つて下さりませ、其のお歎きを掛けるのも、元はといへばわたしゆゑ、申譯には此場にて。

ト涙ながらに清七をこづく。爰へお仲留めに出て、

ト淀車の脇差へ手をかけるを、淀車留めて、

淀車　あゝこれ待つたお仲どの、こなたを殺す位なら出入り屋敷を上げられて、人に叩かれても苦勞はせぬ、又女房も女房だ、返らぬ愚癡をくど〳〵と、今更言つても返らぬことだ。

お仲　それぢやと言うて、どうもお前に。

淀車　はて、濟むも濟まぬも内輪同士、人に聞かれてみつともねえわえ。

トよろしく叱り附ける、爰へ奥より鵜の川、白鷺出來り、

鵜川　親方、爰に居られたか、お前さまに逢ひたいといつて、

白鷺　どこかの人が參りまして、内に待つてゞござりますぞえ。

淀車　さういふ事なら清七どの、女房と一緒に連立つて、

お咲　わたしや丁度巳の日ゆゑ、ちよつと洲崎の辨天さまへ、

清七　そんならわしだけ關取と、そこまで一緒に行きませう。

お仲　父女は女連れ、何かのお詫びも道すがら、

お咲　そんなら此子はわたしと一緒に、

鵜川　二人の供も立別れ。

白鷺　西と東へ一人づゝ、

淀車　どりや、新河岸の。（ト羽織を肩へ掛けるを道具替りの知せ、）船まで行かうか。

ト流行唄にて、この道具廻る。

（洲崎土手の場）――本舞臺三間の間中足の二重、棕梠伏せの土手、下手に開帳場の上り口、後黒幕左右藪疊よき所に柳の立木、日覆より同じく釣枝、總て洲崎の土手夜の模様、浪の音にて道具留る。

と上手より、松本の下女火繩箱を持ち、づぶ六の船頭醉つて引張つて出來り、

下女　もし船頭さん、もう關取はお歸りゆゑ、早く河岸へ行きなさんせ。

船頭　えゝい、おらあもう醉つてしまつたから、船頭は誰ぞに讓りてえ。

下女　あれさ、關取の御馳走になつて、そんな事を言つては濟みませぬぞえ。

船頭　濟むも濟まぬも水屋の喧嘩、跡に遺恨があるばかり、こりや〱。（トどゞ逸を唄つて踊るゆゑ、）

下女　そんな事を言はないで、早く船へ行きなさんせ。（ト無理に火縄箱を持たせ、枝折の外へ連れて來る。）

船頭　何だ、船へ行け、船饅頭よりちよつと爰で棹がつツぱりてえのだ。

ト ひよろ附きながら下女に抱附くを、

下女　えゝ、知らぬわいなあ。（ト船頭を枝折の外へ突出し、ついと奥へはひる。是れにて船頭起上り、）

船頭　えゝ酷い事をしやあがる、そりやさうと草履が見えねえ。

ト火縄箱を捨て枝折の外でうろ／＼して居る、爰へ下手柴垣の蔭より手拭を深く冠りし長吉の船頭吹替にて出て、船頭づぶ六が提げて居る火縄箱を引ツたくるゆゑ、船頭びつくりして、

何をしやあがる。

ト吹替の胸倉を取る、吹替その手を拂ひ、船頭づぶ六の前を蹴る、これにてたぢ／＼となる、吹替は火縄箱を提げ、花道へ行き向うを見て逸散に駈けてはひる。船頭づぶ六起上り、捨ゼリフを言ひながら、跡を追つてはひる。浪の音、時の鐘にて以前の二、頬冠り尻端折りにて出來り、礫を打つ、上手より以前の○△出來り、

○△　船橋さま。

二　こりや。（ト時の鐘になる、）手前達を爰へ呼び寄せたは外でもないが、若殿様がかねてより御執心

の藝者お仲、淀車めに身請けされては我々どもが身の恥辱。それゆゑ只今辨天へ參詣をした歸りを待ち受け、喧嘩仕掛けで引つさらひ、直に川岸から小船にてお下屋敷へ連れて行けば、町家と違ひ屋敷では氣遣ひなし、一骨折つて手傳へば、褒美にありつく仕事だ、しつかりと遣つてくれ。

○ いや、そんな事なら朝腹茶漬。

△ しつかり飲めるを樂しみに、一骨折つて、

兩人 手傳ひませう。(ト二、向うを見て、)

二 向うへ見える提灯は、慥にかれ等の女連れ、必ず拔かるな。

兩人 心得ました。

二 忍べ。

ト是れにて三人上下の葭の蔭へ隱れる。跡浪の音、端唄の合方になり、花道より以前の鵜の川先きに提灯を持ち、お咲お仲跡より銀次の箱廻し附いて出來り、花道にて、

お咲 まだ春とはいひながら、朝晩は寒いから土手通りは急がうよ。

お仲 ほんにお上さんのおつしやる通り、海から來る潮風で顔が冷たうござんすな。

鵜川　折角飲んで醉つた酒が。

銀次　さめない内に、さあ行きませう。(ト右の合方にて皆々舞臺へ來る、爰へ二、先きに、以前の中間窺ひ出て鵜の川の提げたる提灯を打ち落す、皆々おどろき、)そりや、追剝ぎだ。

ト是れより禪の勤めになり、皆々暗黑こつちやの立廻りよろしく、此内二はお咲をお仲と心得、引立て行かうとする。鵜の川此中へ探つて出で、お咲を下手の藪の所へ突きやる、お咲藪疊の前へたぢ〳〵となる。此時藪蔭より手を出して、お咲の懷中物を拔き取るものある。お咲これに心附かず、此うち銀次お仲を連れて上手へ逃げてはひる。中間兩人は相打ちのをかしみなどあつて、トヾ鵜の川敵役三人と立廻り、下手へ追つてはひる、お咲こちらへ來り、

お咲　あゝこれ鵜の川、長追ひをして怪我をせまいぞ。お仲さんはどこへ逃げたか。箱屋の銀どんが附いて居るから、氣遣ひもあるまいが、何しろ眞つ暗黑、落した物でもなけりやあよいが。(ト頭の物などを探り見ることあつて、懷中を探りびつくりして、)さあ〳〵、言はない事ではない、紙入を落したわいなあ、但しは今のどさくさ紛れに、物取りに拔かれたか、捜して見るにも此の暗黑、あの紙入は惜しくもないが、中にはひりし書附は、あの子の身請けに手附の請取、あゝ困つた事をしたわいなあ。

ト當惑のこなし、此時下手の藪蔭より、以前の騙りお坊主幸次事幸我出て、思入あつて、

幸次　もしお上さん、その紙入は、是れぢやあござりませんか。（ト出す、お咲紙入を受取り探り見て、）

お咲　はい、是れでござりまする、是れは御親切に有難うござりまする。

ト此時知らせに附き、日覆より月をおろし、これと一緒に後ろの黒幕を切つて落す、向う海の遠見よろしく、お咲、幸我の顏を見て、

お咲　や、さういふお前は。

幸次　あい、さつきの騙りさ。

お咲　えゝ。（ト氣味の惡き思入、誂への端唄の合方になり、幸我有合ふ捨石へ腰を掛け、）

幸次　今此土手をすご〳〵と通り掛つた往來で、何やら足にさはつたを取上げて見るうちに、女の聲で紙入を落したと言ひなさるから、はて似た聲だと段々聞きやあ、さつき山の松本で久し振りにて出逢つたお前、盡きせぬ縁とて又爰で逢ふといふのはお上さん、不思議な事もあるものさねえ。

ト お咲も思入あつて、

お咲　お前がさう言はしやんすりや、さつきわたしも松本で、はて見たやうなと思つたが、さうしてお前はいづれいづくの。

幸次　そんならお前は忘れなすつたか、わしやあ本所竪川產れ、十二の年まで二ッ目の好文堂へ上つて居て、一ッ師匠で手習をした坊主天窓の秋山幸我さ。（トこれにてお咲こなしあつて、）

お咲　ほんにお前がさういへば、わたしの方でも覺えある、秋山といふお坊主の御子息であつた幸我さん、替る身裝に此の年月お目に掛らず居たゆゑに、ついお顏をば見忘れたが、よくまあ覺えて居なさんしたねえ。

幸次　何の忘れていゝものか。おいお咲さん、お前これを知つてお出でか。

ト守袋より緣結びの紙縒を出してお咲に見せる。

お咲　こりやわたしとお前の名の、結び合したかんじん縒り、これをどうしてあのお前が、

幸次　持つて居るのも十六年、今は昔の話しだが、忘れもしねえ正月の、丁度五日の書初めに、男女の打交り、

お咲　ほんにわたしもあの時は、まだ十一で本所のお下屋敷に居た時分、お師匠さんの書初めに、つい後れ毛の銀杏髷、

幸次　今日を晴着と福引に當る繪凧や千代紙を、樂みにする前方に、まだ筆おろしも白紙へ可愛憎いの當物から、

お咲　いつそ紙縒をこしらへてと、互ひに名をも書初めに、思ひ出雲の縁結び、
幸次　どうした縁のはずみやら、お咲幸我と其時に、しつかり結ばるこの紙縒、
お咲　心に留めねどそれなりに、別れ程經て十六年、
幸次　年月たつても戀風の、子供心に忘られず、
お咲　そんならそれゆゑお前には、
幸次　こなたに疾から焦れて居たのさ。
お咲　えゝゝゝゝ。（トびつくり思入、これより合方きつぱりとなり）
幸次　これさ、何も其やうにびつくり驚くことはねえ、長の年月斯うやつて、結ばる縁の紙縒をば大事に掛けて持つて居るも、どうかお前と末始終夫婦になつて暮してえと、心で思つて居るうちに、お姫さまのお相手に師匠を下つて御殿へ上り、それからふッつり顔を見ず、こつちも段々成人して親仁と共に鎌倉の殿中へ出て勤めの身、月日はたてど心に忘れず、千葉家へ出入りの朋輩に聞いてもしかと身許も分らず、其うち替る世の中に、和田北條を始めとして、鎌倉山の大小名、それ〴〵國へ引込んで得意を失ひ浪人なし、別れ〳〵に此の年月、どこにどうして居る事と焦れて暮す一昔、今日道庵に頼まれて強請騙りも身すぎの爲め、首尾も世過ぎと思つたもひとの入つた

る體ゆゑ、種を割られた瀬戸茶碗、もう是れまでといふ所へ思ひ掛けなくお前に出逢ひ、押の利かねえ引込みも、爰でしつぽり汗をかき、日頃の思ひを晴らしたさ。否應いはずにお咲さん、色よい返事を聞かして下せえ。（トしなだれ掛る、お咲思入あつて、）

お咲　そりやもうわたしのやうな者を、子供のうちからそれ程までに思つておくれの志し、此の身に取つては嬉しいゆゑ、色よい返事もしたけれど、以前と違ひ歴然とした今は亭主のあるわたし、所詮お前のいふ事を聞く譯にはいかぬゆゑ、逢はぬ昔とあきらめて、思ひ留つて下さんせいなあ。

幸次　いゝや思ひ留まられねえ、そりやあおめえが言はねえでも、今日の下に隠れのねえ淀車といふ歴然とした亭主のあるのも合點だが、逢はぬ先きなら兎も角も十六年が其間焦れ慕つて廻り逢ひ、顔も巳の日に辨天の歸りを待つた磯端も町を離れた洲崎の土手、訪ふものは汐風と見て居るものは月ばかり、爰をおめえの口先きで、さうかと言つて引込むやうな、そんな安いおれでもねえ、斯う言ひ出した上からは五分でも跡へは引かねえから、野暮を言はずとお咲さん、うんと言つたがいゝぢやあねえか。

お咲　いえ〳〵何と言はしやんしても、いやと言ふよりもう外に、

幸次　そんなら是れほど口説いても、

お咲　あい、わたしや返事はござんせぬ。（トずつけりと言ふ、幸次思入あつて、）
幸次　さう言ひ張りやあ仕方がねえ、手荒い事をしてなりと、日頃の思ひを晴らさにやならねえ。
ト懐より匕首を出し、脅す心にて抜いて見せる、お咲これを見て思入あつて、
お咲　もし幸我さん、ふざけたことをしなさんすな。
幸次　どうしたと。（ト合方替つて、）
お咲　見れば刃物をひねくつて、わたしを脅す氣だらうが、そんな脅しで行くやうなわたしだと思つておいでか、以前は野暮な屋敷でも今は力士の女房に、年が年中旅へ出た留守を預かるわたしの役、ひつこしのない料簡で鬼のやうなる弟子どもを、幾人となく内へ置き、朝晩使ひこなせようか、さあ亭主のある身を手籠めにして、抱いて寢ようといふ心なら、殺しておいて勝手にさしやんせ、さもないうちは金輪際、お前の自由になるまいわいなあ。
ト體をつき附けきつと思入、幸次出そくなつたといふ思入あつて氣を替へ、
幸次　むゝ面白い、よく言つた、さう叉肚胸が据つたら、手めえを殺しておれも死ぬ、浮名まうけは心中と人に噂をされてえのが、こけなやうだがこつちの望み、殺して遣るから覺悟しろ。
お咲　疾から覺悟はして居るから、さあ、すつぱり遣らしやんせいなあ。

幸次　おゝ、遣らねえでどうするものか。

ト　お咲の胸先を捉へて匕首にて突かうとする。お咲は目を閉ぢて覺悟のこなし、此のうち始終誂への端唄の合方、幸我月明りにお咲の顏をぢつと見て美しいものだといふ思入あつて、思はず匕首をしやんと納め思入あつて、

こいつアどうも殺されねえ。

トこれにてお咲目を開き、

お咲　さあ、早く殺して下さんせ。

幸次　こりやもう、たまらぬ。（トお咲に抱き附くを振拂ひ、）

お咲　えゝ、ふざけなさんな。

ト有合ふ紙入にて、幸次の天窓をぴしやんと打つ、これにて幸次天窓を押へて閉口する。浪の音ばたになり、下手より以前の鵜の川、武藏屋の貸提灯と笹折を提げ出來り、

鵜川　おゝお上さん、爰に居なすつたか。

お咲　おゝ鵜の川か、何を今までして居たのだ。

鵜川　さつきの奴等を追ひ散らし、息が切れてなりませんから、武藏屋へ飛込んで、一杯ねだつて參り

ました。

お咲　また意地汚なに土產まで、ほんに困つた男だなう。

鵜川　さうしてあのお仲さんは。

お咲　さつきの騷ぎにはぐれたが、銀どんが一緖だから、大方內へ送つたらう。

トこの內幸次は惡い奴が來たといふ思入にて、匕首を懷へしまひ、こそ〳〵と下手へ逃げて行かうとするを、鵜の川見附けて、

鵜川　何だか胡散の風體だが。（ト咎めるを、お咲留めて、）

お咲　いや、あの人はわたしの落した紙入を、拾つてくれた往來の人さ。

トこれを聞き、幸次風が替つたといふ思入にて、

幸次　今お上さんのおつしやる通り、此物騷な洲崎の土手、お前さんの歸るまで、番をして居て上げました。

鵜川　そりやあ大きにお世話でござつた。見りやあしがないなりの人だが、今武藏屋で貰つて來た、此の殘物をお禮に上げよう。（ト折を出す、幸次何をといふ思入あつて氣を替へ、）

幸次　そりやあ有難うござります。（ト折を取る、お咲思入あつて、）

お咲　でも、思ひがけない。

鵜川　え。

お咲　さあ、行かうわいなう。(ト流行唄、浪の音にて鵜の川先にお咲上手へはひる。幸次これを見送り)

幸次　もし、隨分氣を附けてお出でなさいまし。(トこちらへ來る、)と言つたものよ。然しあつちも通りもの、命を掛けて惚れられりやあ、萬更憎くもねえと見えて、今の野郎が咎めた時、世話になつた人だと言つて、ごまかしてくれた氣性といひ、今夜の樣子でまた一倍思ひが增して來たが、居所が知れた上からは、附けつ廻しつ〳〵みつを取り、土俵の上より床の上、四ッに渡つてしつぽりと一汗かいて取組みてえが、いゝ魂膽が。

ト腕組をする心にて、持つたる折を思はずばつたり落すを木の頭、此時下手に縫包みの犬出て、件の折を喰ひにかゝる。

えゝ畜生、びつくりするあ。

ト石を拾つて犬を追ひ散らす、浪の音、門附けの合方にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

永代橋の場

〔役名　淀車浪五郎、船頭三吉、同次郎兵衛、同權八、船頭鵜の長吉。淀車女房お咲等。〕

本舞臺一面の淺黄幕。爰に前幕の船頭三吉尻端折り草履にて立ちかゝり、次郎兵衛、權八の船頭、着流し草履下駄素見に出た心にて、同じく立ちかゝり居る、此の見得浪の音にて幕明く。

次郎　これ三吉、友達が通るのに見えねえか。

權八　何をそんなにあわてゝるのだ。

三吉　おゝ誰かと思つたら、次郎兵衛に權八か、おらア今日とんだ目に逢つた。

次郎　また株で喰え醉つて、喧嘩でもしたのか。

權八　大方酷くなぐられでもしたのだらう。

三吉　えゝ、べらぼうな事を言ふな、おれも新川新堀ちやあ一二といはれる小船乘りだ、どんな腕の達者な奴が脇櫓を入れて來ようとも、跡へ下つたことはねえのだ、喧嘩をしてなぐられるなどゝ、そんなちよぼ一はありやあしねえ。

次郎　こウノ〳〵いつまで駄味噌を上げるのだ、人も負けた話をする奴は腹の底が知れねえが、

權八　勝つた話しをする奴は、てえげえ箍がゆるんで居るのだ。

三吉　箍がゆるむのゆるまねえのと、船の上と盆の上ぢやあ、腕の違つた三吉さんだ。

次郎　その豪氣な三吉が、とんだ目に逢つたとは、

權八　どんな目に逢つたのだ。

三吉　今日深川の相撲場へ、淀車關を乘せて行つた所、松本の内で喰ひしめて、關取の歸りなさるのを供部屋に寢て居てちつとも知らずよ、所で女中に起されて火繩箱と碇をかついで慌てゝ出ると、いやといふ程おれが横ッ面アなぐりやあがつて、道具をそつくり持つて行つたが、とんだ巾着切もあるものぢやあねえか。

次郎　そいつァとんだ目に逢つたな。

權八　そこでこそ日頃の腕を、一番見せりやあよかつたな。

三吉　ついくれえ醉つて居たばかり、すつかりどぢを組んでしまつた。

次郎　さうして手めえ船はどうした。

三吉　さあ痛い面を抱へながら、八幡前の川岸へ行つて見ると、繋つて置いた船がねえのよ、近所の衆に聞いて見ると、今しがた關取を乘せて行つたといふ話しだ。

權八 誰ぞ悪戯でもしやあしねえか。

次郎 何にしろ、分らねえ話しだ。

三吉 それでおらァ茫然して、夢でも見て歩くやうだ。

次郎 延喜直しに一杯飲みやな。

三吉 どうで自棄だ、附合はう。

權八 そりやあいゝが、錢があるか。

三吉 火繩箱へ入れて置いたから、爰には三文なしだ。

次郎 手めえの祝儀を當にしたに、

權八 とんだものを背負ひ込んだ。

三吉 そこが友達の附合だ。

ト浪の音、三人上手へはひる。雨落より波手摺を引出し、よき所にて淺黄幕を切つて落す。

（永代橋川中の場）――本舞臺高梁、橋の桁と欄干、眞中に黑く塗りたる箱番屋の後を見せ、親船の繋り船、白魚の四ツ手灯入りの篝火、舞臺一面波幕、總て永代橋川中の體、下へ寄せ丸物の猪牙船、爰

に前幕の淀車、蒲團を着て小緣に縋り居る、前幕の長吉頬冠りにて櫓を押して居る、此の模様波の音佃にて道具納まる。と船ゆれる思入、淀車こなしあつて、

淀車　これ〳〵若い衆、さつきから此船は橋の下を行つたり來たり、どうぞしはしねえか。（ト此うち長吉舳先の碇をとつて投り込み水の花立つ、火繩箱を持つて艫の方へ來る、淀車心得ぬこなしにて、）この船頭は何をするのだ。碇を川へ打ちこんだは、何ぞ仔細のあつての事か。

長吉　ちつと譯があつての事さ。

淀車　譯があるとは、そりや何が。

長吉　外でもねえ、此の茶碗さ。

ト火繩箱より以前の茶碗の割れを出し見せる、是れをキツカケに後へ灯入りの月を出す、船は流れる心にて、よき所まで引く。淀車月明りにすかし見て、

淀車　こりやこれ、さつきこのおれが、土俵の上で割つた茶碗。

長吉　缺らが飛んで此面へ、産れも附かねえ向疵、印の附いたは忘れもしめえ。

ト長吉手拭を取る、淀車思入あつて、

淀車　今まで心附かざりしが、扨はその時とやかう言つた、

長吉　小舟乘りの船頭さ。

淀車　その船頭が顏を隱し、爰までおれを乘せて來たは。

長吉　さつきの遺恨を、晴らす氣だ。

淀車　何と。

ト淀車立ち掛らうとするを、長吉動かす、これにて淀車尻餅をつく、長吉は艫へ腰を掛け　兩人きつと見得、本調子の端唄の合方になり、

長吉　今日八幡の相撲場でこなたが割つた茶碗が飛び、おれが額へ附いた疵、僅か三分か四分ながら五分はおろか一分でも、人に負けることの出來ねえのが持つて生れた意地ッ張り、所詮團扇の上らねえ喧嘩を承知で物言ひを附けては見たが相手が關取、手玉に取られ突き出され砂を摑んだおれが悔しさ、幸ひ歸りは船と聞き面を隱して乘込んだは、爰で一番引組んで勝負なしに大川へどんぶり行けばこつちが勝ち、肩名に取つた鵜の長吉、波を潛れば千人力、水に緣ある淀車と一番爰で取らうかい。

トきつと見得、淀車こなしあつて、

淀車　そんならそれを、遺恨に思ひ、

長吉　土俵の上の返報を、

淀車　この永代の川中で、

長吉　關取こなたを、投げる氣だ。（ト身繕ひして立ち掛る、是れにて船動く、淀車困る思入。）

淀車　成程これはあやまつた、關と呼ばれし淀車も生れて初めて此の難儀、こりやこなたに詫びずばなるまい。

長吉　いや、其の詫言は聞きたくねえ。

淀車　そこを幾重にも膝を折つて、詫びねばならぬもお主の爲め。

長吉　今となつて卑怯未練に、お主の爲と言譯は、命が惜しくなつたのか。

淀車　さあ卑怯未練と思ふであらうが、助けて貰はにやならぬのは、お主の難儀を身に引受け、心を碎く淀車、恥を捨てゝ此の通り。（ト手を突き詫びる。）

長吉　いやだ〳〵、その言譯は聞きたくねえ。

淀車　聞き度くなくも折入つて聞いて貰はにやならぬのは、しつこいやうだがお主の爲、關と呼ばれし浪五郎、土俵の上でついに一度、砂を摑んだことのない勝ち誇つたる淀車も、板子へ手形のこの詫言、俠氣ならば長吉どん、どうぞ聞き分けて下されいなう。

長吉　役にも立たぬよまひ言、そんな事を聞く耳はねえ。

淀車　そんならこれ程頼んでも。

長吉　いやだ〱、料簡ならねえ。

淀車　料簡ならずば、勝手にしろ。（トきつと言ふ。）

長吉　何と。

ト淀車きつと見得、これを肥前節めいたる誂への合方になり、後へ遠見の屋根船、上手より下手の方へ引出し、此の鳴物をかりろ心にて、淀車身繕ひして、

淀車　おれも男だもう頼まぬ、一度死んで二度は死なぬ、人間僅か五十年、遅かれ早かれ死ぬ命、卑怯未練に惜しみはせぬが、おれが命をわれは取る氣か。

長吉　取らねえで、どうするものか。

ト長吉水棹にて打つて掛かる、淀車立上らうとするを長吉船を動かす、淀車また尻餅をつく、長吉また打つて掛るを腕にて受け、ちよつと立廻つて水棹を捉へ、長吉の襟上を摑んで引附け、

淀車　さあ動かれるなら動いて見よ、今このおれが拳で一打ち打たば息の根留めるは造作もないが、素人を相手に關取が命を取るも大人氣なさに、こなたを此の儘助けるも、形に似合ぬ俠氣な心を見

込んで頼みがあるが、何と聞いてはくれまいか。（ト手を放す。）

長吉　むゝ、此の長吉に頼みとは。

淀車　今もいふ主人の爲、我が女房の弟ながら元は主人の千葉の家中、船木宗左衛門さまの御子息宗次郎どのが、寶詮議に其身を窶し町家の奉公、首尾よく寶を尋ね出し本地へ歸參させたいが、世間を知らぬ相撲の身の上、どうか力に頼みたいが得心してはくれまいか。

ト淀車思入あつて言ふ。

長吉　そりや此わしを關取が頼むとあるなら男づく、品によつたら命でも捨てるが土地の産神がら。

淀車　その頼もしい心を見込み、力にしたいが長吉どん、とても事に兄弟の因みを結んではくれまいか。

長吉　思ひがけねえ兄弟分、そりやあ願つてもなりてえが、などゝ心を許させて、船から上つて寢返りぢやあねえかえ。

淀車　疑念するのも尤もだが、そんな卑劣な心のない、證據は、（ト合方きつばりとなり、淀車缺茶碗で眉間を切り茶碗へ血汐をうけ、）因みを結ぶ、この場の血酒。

長吉　成程これで兩方へ、五分と／＼の向う疵、こつちも此の場で。（ト以前の疵の血を絞り、）誓ひの血

酒を互ひに取替へ。（ト兩方取替へ血汐を飲んで、）

淀車　まるゥ納まる茶碗と茶碗。

長吉　男は當つて、

兩人　まッこの通り。（ト茶碗を川へ投込む。）

淀車　かう兄弟になるからは、先づ聞きたいはこなたの素性。

長吉　今は小船の船頭だが、生れた時はお乳の人、婆ァ育ちのお坊さま、人も知つたる藏前の伊豆屋清三が次男の長吉。

淀車　それではこなたのお袋は、およどのとは言はなんだか。

長吉　いかにも其名はおよといつて、以前は和田の奧勤め。

淀車　此の淀車のお袋も、同じ屋敷の奧勤、しかもこなたのお袋とは、遠緣ながらつながる緣。

長吉　思ひがけない間違ひから、名乘つて見れば親類同士、

淀車　今のいままで白魚の、船の篝に素性も知れ、

長吉　永代結ぶ兄弟に、流れの水の末かけて、

淀車　過ぎこし方の物語り。

長吉　幸ひ汐もあげ南、
淀車　中洲を越して兩國へ、
長吉　話しながらに、
淀車　御苦勞ながら、
長吉　どれ、乘ッ切つて行きやせう。
　　ト長吉碇をあげ、櫓をおろす。此時橋の上へ以前のお咲出て、橋から船を見て、
お咲　おゝ、そこに居なさんすは、こちの人ぢやござんせぬか。（ト淀車上を見て、）
淀車　さういふ聲は、女房お咲か。
長吉　姉さんならば、
お咲　どうぞ一緒に、
淀車　便船しやれ。（ト此時後へ幸次の吹替、すつぼり頬冠りをして後から抱附く、これを振拂ひ、立上る、此内お咲吹替になる、船の兩人思入あつて、）橋の上にて、物音は。
長吉　もしやすりでは。（ト此時橋の後へ吹替飛込み、どんと水音、兩人思入あつて、）
淀車　お咲か。

お咲　こちの人。
淀車　あぶない事で。（トお咲を船へ引き上げる、長吉は櫓を構へる、これを木の頭）あつたよなあ。
　　トこれに構はず、
長吉　取り梶。（ト皆々引ツぱりよろしく、浪の音佃にて、）
　　ひやうし　幕

三幕目

淀車内の場

〔役名〕――淀車浪五郎、船木佐一郎、山崎屋手代淸七、澁井道庵、藤屋才兵衛、大家杢兵衛、道具屋吾市、女衒善八、淀車弟子鵜の川の九郎藏、同白鷺、御坊主幸次、鵜の長吉。淀車女房お咲、道庵女房お倉、娘お千代等。〕

〔本所石原淀車内の場〕――本舞臺三間の間平舞臺、向う暖簾口、上手押入戸棚、下手茶壁、進上物のびら・上の方一間障子屋體いつもの所門口、下の方黒塀、床の前隣家の二階伊豫簾を掛ける、總て本所石原淀車内の體よろしく、爰にお千代娘のこしらへにて、机へ向ひ手習をして居る、下手に弟子白鷺、米俵を積み居る、此の脇に米を入れる四斗樽、繩あること、門口に杢兵衛家主にて、風呂敷包を

持ち弟子鵜の川と連れ立ち立かゝり居る、合方、通り神樂にて幕明く。

李兵　これ〳〵、お內儀は內かの〳〵。
白鷺　これは大家さま、お出でなさいまし。お家さんは奥に居られます。
李兵　さあ鵜の川、こつちへはひりや。
鵜川　あい〳〵。（ト下の方に小さくなつて居る。）
白鷺　やあ九郎藏、昨夜はどこへ行つた。また千代鶴の所へいつたか、無駄な事だのに。
鵜川　何をおのれが知つて。（ト兩人捨ゼリフにて爭ふ。）
李兵　これはしたり、まだ詫言も濟まぬのにどうしたものだ。
白鷺　はゝあ、それぢやあ大家さまに、誤つて貰ふのぢやな。
鵜川　うぬ、今に見やあがれ。（ト白鷺をにらむ。）
李兵　いやお千代坊、よう精が出ると見えてお清書がよく出來ますの。此次は何を習ふのぢや。
千代　あい、都路を習ひますわいな。
李兵　それは大層上りましたの。よう精を出しませうぞ。
鵜川　わしもこれから精出して、今度の場所には番附を、上げて貰はにやならぬ。

白鷺　何の、女郎ばかり買ひくさつて。
杢兵　これはしたり、又あらがふかいの。これ、お内儀をちよつと呼んで下され。
白鷺　あい／＼、お家さん／＼、大家さんが、お出でなさいました。
お咲　あい／＼、せはしない、今行きますわいの。（ト合方になり、奥よりお咲世話女房のこしらへにて出來り、）これは／＼お家主の杢兵衛さま、ようお出でなされましたな。
杢兵　さあ、今日わしが來ましたは、外の事ではないが、こちの弟子の此の鵜の川が昨夜内を明けたさうだが、つい友達の附合で酒を飲んで遲うなり脇へ泊つて來たさうなが、わしに詫言してくれと賴みゆゑ一緒に連れて來ましたが、どうぞ許して遣つて下さりませ。
お咲　いえもう、度々の事ゆゑ許しにくい所なれど、折角あなたの御挨拶、それに免じて戻しまするがこの後は酒を飲まぬやう、おつしやり附けて下さりませ。
杢兵　そりやもうきつと言附けて來ました程に、大丈夫でござります。これ、九郎藏お内儀にあやまらつしやれ。
鵜川　もしお上さん、どうぞ堪忍して下さりませ。（ト手を突いて詫びろ、白鷺見て、）
白鷺　えゝ、意地地のねえ奴ぢやな、はゝゝゝゝ。

ト杢兵衞風呂敷包みより清書双紙と床本を出し、

杢兵　いや、これはお千代坊が手習に精が出ますゆゑ、御褒美に持つて來ました。

お咲　それはまあ有難うござります。これお千代、爰へ來てお禮を申しや。

トお千代杢兵衞の側へ來て手を突き、

千代　これは伯父さま、有難うござりまする。

杢兵　何の／＼、よう挨拶が出來ますの。

お咲　これお千代、今日は朝から精が出たゆゑ、もう手習を止しにして、奥へ行つて遊んだがよい。

千代　そんなら人形を出して、遊んでもよいかい。

お咲　遊んでもよいから、早う行きや。

杢兵　ちとわしが所へも遊びに來るがよい。

千代　あい、晩に行かうわいな。

杢兵　おゝ晩といへば隣りの地主の家に、晩に淨瑠璃の溫習があるぢや、所でわしも猿寺の勇造の所で稽古をして此通りぢや。（ト堀川の床本を出して、）そりや聞えませぬ傳兵衞さん、お詞無理とは。（トちよつと語つて、）晩におもいれ當てる積りぢや。

千代 ほんにをかしい伯父さんぢやわいなあ。（ト お千代ついと奥へはひる。）

お咲 いやもうお前さまのお聲では、嘸面白いことでござりませう。これ四郎助や、こちの人が勸進元に用があると言うてゞあつた早う行て聞き合せて來や、その行きがけに横町へ行つて、ちよつと見舞つて下さんせと、言傳を言つてくりや。

白鷺 へい、横町とは、どこだつけ。

鵜川 それ、いつも來る取り揚げの所だ。

白鷺 むゝ、婆さんの所か。

杢兵 おゝそれ〳〵、取り揚げといへば、お内儀は懐妊でござるさうだの。

お咲 はい、左樣でござりまする。

杢兵 それはお目出度いことだ。おゝわしも横町に用があつた、そこまで連立つて行きませう。

お咲 まあ、よいではござりませんか。

杢兵 いや〳〵、町用なれば捨ては置かれぬ。

鵜川 もし大家さま、有難うござりまする。

杢兵 これ、必ず酒を飲むまいぞ。（ト杢兵衞白鷺門口へ出て）いや、いつ見ても美くしいものだ。然しあ

の關取も旅がへり、定めて毎晩。
白鷺　もし、地取は晩にはございませんよ。
杢兵　その地取りより、床の内の、
白鷺　どうしました。
杢兵　四十八手、あゝ氣の惡い事ぢや。
ト通り神樂になり、杢兵衞白鷺下手へはひる。此うち鵜の川下手にて居睡りを始める。お咲こなしあつて、
お咲　ほんに、氣散じなお家主さまぢやわいの。これ九郎藏、晝日中どうしたものぢや。
トこれにて鵜の川目を覺し、
鵜川　ゆうべ氣で睡たうなりました。
お咲　また其やうな事をいうて、まだ詫言の餘熖も冷めぬうちに、ちとしつかりと氣を持つがいゝわねへ。
鵜川　はい〳〵、今度は大丈夫だ。此の通りしつかりとして居ります。
ト眞面目になつて正面を向いて居る。
お咲　ほんに、困つたものぢやわいなあ。

トやはり通り神樂になり、花道より道具屋吾市、羽織ばつち尻端折り、袱紗包みの短刀を持ち出來り、

吾市　はい御免なさいまし、關取はお内でござりまするか。

お咲　おゝお前は道具屋の吾市さん、ようお出でなさんした、まあおはひりなさいまし。

吾市　左樣なら、御免なさいまし。（ト内へはひる。）扨此間から度々參りましたが、此の短刀も今日までのお約束でござりますが、外に買手もござりますれば、さう〳〵お待ち申されませぬから、外へ相談をいたしますから、さう思つて下さいまし。

お咲　そりやさうでもござんせうが、今更外へ賣られては、濟まぬことがござんすゆゑ。

吾市　さあ濟まぬ事もござりませうが、こつちも大枚百兩といふ金になる相談ゆゑ。

お咲　御尤もではござんすが、約束したは今日中ゆゑ、長うとは申しませぬ。どうぞ日暮まで、待つて下さんせ。

吾市　そりやこれまでの待ち次手に、待てなら隨分待ちませうが、其の金が出來ますかえ。なにお上さん、こりやお話しぢやが、同じ人間でありながら、有る所にはあるもので、わしが近所へ京都から玉を仕入れに來て居る女郎屋でござりますが、三箱ばかり持つて來て居るとの事でござりまする。

お咲　もし〳〵吾市さん、そりやお前の御近所へ女子を抱へに京都から。して、其お方をお前御存じか

え。

吾市　へい、近所ゆゑ心易うござりますが。それをお聞きなさるには、何ぞいゝ玉の當でもあるのでござりますかえ。

お咲　さあ事によつたら、いゝえ、事によつたら其お方に、お願ひ申さにやならぬといふ譯は、ちと外から頼まれた事がござんすが、斯う世帶染みたものでも、相談が出來ませうかね。

吾市　そりやあ玉次第で、直ぐに相談が極りまする。

お咲　さうして、急にお目に掛れませうかね」

吾市　さりやあ造作もありません。もし相談でもなさるなら、見越しの松の貸寮で、藤屋才兵衞とお聞きなされば直に知れます。

お咲　それでは兎もあれこちの人が留守ゆゑ、戻りますまで奧へ行てお茶なと上つて待つて居て下さんせ。

吾市　折角のお頼みゆゑ、後まで奧で待ちませう。

お咲　どうぞさうして下さんせ。（トこのうち鵜の川居睡り居て、）

鵜川　あゝ、よんやしよ。（ト大きな聲をする。）

吾市　え丶、びつくりした。
お咲　晝日中寢言ぢやわいなあ。
吾市　あは丶丶丶丶、どれ歸りを待ちませうか。（ト吾市暖簾口へはひる。お咲思入あつて、）
お咲　あ丶紛失なせし短刀の在所は知れても大枚百兩、こちの人もいろ〳〵と苦勞はすれど手に入らず詮議の日延べも今日限り、なくて叶はぬ金ゆゑに、いつその事この身をば。
ト ちつと思入、此時奥よりお倉胡鹽鬘伯母のこしらへにて出來り、
お倉　これお咲〳〵。よい加減に苦勞をせぬかいやい。（ト合方になり、お咲こなしあつて、）
お咲　お丶伯母さんでござんすか。お丶よい所へ來て下さんした。今最上山さんの所から、ちよつとわたしに用があると呼びに來てゞござんしたところ、ちよつと行つて來るうち、どうぞ留守をお頼み申しますぞえ。
お倉　留守をするのは承知ぢやが、淀車も留守なれば、戻つてからにすればよいに。
お咲　いえ〳〵ぬしの歸らぬうちに、直に行つて來ますわいの。
お倉　行くなら誰ぞ、連れて行くがよい。
鵜川　よいしよ〳〵〳〵。

お咲　また寢言かいの。（ト鵜の川目を覺し、びつくりせし思入）

お倉　おゝ幸ひ、九郎藏を連れて行くがいゝ。（ト此時奥よりお千代走り出で）

千代　かゝさま、一緒に行かうわいの。

お咲　そなたは内に待つて居や。

千代　あい／＼。

鵜川　お上さん、わしが一緒に參りませう。

お咲　そんならそなた、大儀ながら。

お倉　これ、早う戻つてくりやゝ。

お咲　直に戻つて參ります。（ト通り神樂になり、お咲先きに鵜の川附いて向うへはひる。）

お倉　これお千代、わが身は奥へいつて、もそつと遊んだがよい。

千代　あい／＼。（トお千代奥へはひる。お倉こなしあつて）

お倉　あのお咲めも淀車に、いらぬ義理を立て居つて、金の工面に行きをつたが、早うあいつらを追出して樂々爰に居たいものぢや。（ト道庵奥より出來り）

道庵　うつそり阿魔めは、もう行つたか。

お倉　さあ金の工面に行きましたわいの。
道庵　今に金の算段をして來て短刀を受戻す、所があの短刀は道具屋の吾市と豫てしめし合せ、贋物をこしらへすつぽりはめたが、是れで大概あいつも寂滅、おぬしは是れより大儀ながら此場の樣子を若殿さまへ。
お倉　そんならわたしは、一走り。
道庵　お下屋敷にござるから、首尾をお知らせ申してくれ。
お倉　あい、合點でござんす。（ト門口へ出て、）どれ一走り行つて來ようや。
ト下手へはひる。道庵思入あつて、
道庵　然しこの短刀をかうして置いてはけんのんだ、淀車が千葉樣へ持つて行つたが贋物と突返されて歸つた時、かぎ附けられては巧みの邪魔、この餘焔のさめぬうち、何處ぞへ隱して置きたいものだ。
ト誂への合方になり、いろ〳〵こなしあつて、上手にある炬燵の地爐を明け、緣の下へ刀を隱す。此の以前より下手へ前幕の幸次出來り、門口から內を窺ひ思入ある。
先づ斯うして置けば氣遣ひなし、どりや祝ひに一杯やらうか。

ト道庵暖簾口へはひる。幸次これを見て、

幸次　あの道庵が地爐の下へ人目を忍んで隱したは、何でも千葉家の若殿から大金を取り毒藥を調合したといふ噂、慥に褒美に貰うた金、あいつをこつちへ卷きあげて、慾張り親仁の道庵に、一番泡を吹かしてやらうか。

トうそ〳〵と內へはひり、邊を窺ひ、件の地爐を明け、金を捜す思入、此の時道庵出來り。

道庵　やあ、泥坊々々。（ト是れにて幸次びつくりして道庵を見て、）

幸次　やあ、道庵ぢやあねえか。

道庵　おゝ、幸次か。

幸次　えゝ、野暮に大きな聲だな。

道庵　さうしてこんたは、何で緣の下を。

幸次　さあ、見附けられたら仕方がねえ。もうこれからはおれも肚胸だ。地爐の下へ隱したものは、おれが借りて行くのだ。（トまた地爐の方へかゝるを、道庵留めて、）

道庵　えゝ古い事を言ひ居るな、今までおのれに段々と鰻登りに貢いであるのだ。それを忘れたおめえも、よつぽど太え人だ。

幸次　おい道庵さん、おれが事を太えといふが、おめえの方が太えのだ、是れまでおれが働いて首尾よくやつた悪事の段々、その度毎に宛ひ扶持、割を喰つたは幾度か、若殿さまから五十兩褒美に取つた其金も、おめえが一人で溫めちやあ、あんまり蟲がよすぎるぜ、悪事が分かりやあ兇狀は言はずと五分々々、半分割り二十五兩といふ所だが、耳を揃へてきり〳〵出して下せえ。

道庵　いや、その五十兩の金はない。

幸次　どうしたと。

道庵　おゝそれ〳〵、昨夜歸りに落してしまつた。（ト素知らぬ振りにていふ。）

幸次　なに、昨夜落してしまつた、いけ圖太え事をぬかしやあがるな。いゝわ、金を出さにやあおれも自棄だ、どうで長くは此の娑婆に居られねえ體、おそかれ早かれ抱へて行くから覺えて居ろ。

ト幸次行きかける、道庵留めて、

道庵　えゝ氣の短え、まあ待て。

幸次　むゝ、留めるからは、金を出すか。

道庵　さあ、其の金は、

幸次　出さにやあ抱き込むぞ。

道庵　さあ、それは。

幸次　おい道庵さん、どうとも返事をしてくんねえな。(トきつと言ふ。)

道庵　そんなら今まで實明らしく、愚老が用を足したのは。

幸次　斯ういふ仕事を仕よう爲だ、どうせ密事をする奴に、實があつてたまるものか。

道庵　うぬ、さう吐かせば。(ト煙草盆にて打つて掛る、ちよつと立廻つてきつと見得、鳴物になり、幸次道庵の天窓をくらはす、是れにて額血紅になる、)こりやおれを殺す氣だな。

ト聲を立てるゆゑ、トゞ道庵を繩にて締殺す、此時奥よりお千代出來り、此體を見て顫へながら、

千代　怖いわいなう。(ト逃げまはるゆゑ、幸次思入あつて、)

幸次　えゝやかましいわえ。

トお千代を引捉へ、下手にある米俵の繩を取り、是れにて縛る。あれえ／＼と聲を立てるゆゑ、手拭にて口を縛り、四斗樽を冠せ下の方へ置く、思入あつて道庵の懐より五十兩包を出し、

こりや五十兩、忝けない。(ト懐へ入れ、)此の死骸はどうしてくれう。(ト邊りを見廻し、屏風に手拭掛けてあるを見附け、)むゝ、此の手拭は覺えのある淀車の手拭だ、こりやあいゝ物があつたわえ。これで首を締め直しておきやあ、詮議になればこれが手掛りで、淀車は伯父殺し、これで昨

日の意趣返し、こいつアいゝ段取りになつて來たわえ。（ト件の手拭にて道庵の首を締め上の屋體の内へ入れ、）何しろ合點の行かねえのは、地爐の下へ道庵が、何を隱して置きやあがつたか。（ト緣の下を搜し、件の短刀を出し、）こりやあ道俺の脇差だが、何で爰へ入れておいたか、これも小附けに持つて行かう。（ト腰へさし門口へ出る、此時下手より、以前のお倉出來り、）

お倉　や、幸次ぢやあねえか。

幸次　え、おゝお倉さんか。（ト幸次行きかけるを、お倉脇差を見附けて、）

お倉　おゝ、おめえの指して居る脇差は、こちの人の脇差ぢやあねえか。

幸次　むゝ、こりやあちつと入用だから、借りたのよ。

お倉　いや、何だか知らぬが、刃物は貸されぬ、さあこつちへ寄越しなせえ。

ト捨ゼリフにて脇差をお倉取る。

幸次　えゝ、仕方がねえ。

お倉　さうして、こちの人わえ。

幸次　おゝ今の一件の祝ひに、一杯飲んでもう寐なすつた。

お倉　あゝ夜食前に、いゝ氣な人ぢやの。

幸次　そんならお倉さん、また遊びに來ますよ。

お倉　まあいゝわね、もつと遊んで行くがいゝ。

幸次　なに、是から友達の用があるから又來ませうよ。道庵さんによろしく申しておくんなせえ。（トお倉は內へはひる、幸次は花道へ行きかけ、人音するゆゑこなしあつて、）南無三、淀車の女房が來た。

トこなしあつて下手へはひる。鳴物になり、以前のお咲、杢兵衛、才兵衛、羽織ばつち尻端折り一本差し、善八半合羽脚絆尻端折り判人のこしらへ、跡より駕籠屋駕籠をかつぎ出來り、

お咲　これはまあ大家さま、御苦勞さまでござりましたわいなあ。

杢兵　何の〳〵日頃から懇意なこなた、世話をやくのはあたりまへぢや。

才兵　斯ういふ事の掛合は、世間にいくらもある事だ。

善八　さうして、お前のお內はどこだえ。

お咲　はい、つい向うにござります。

才兵　そんなら向うか。

善八　さあ、早く行きやせう。（ト皆々捨ゼリフにて門口へ來り、）

お咲　もし、少し爰に待つて居て下さいまし。（ト門口を明け、）はい、只今歸りました。

トお倉奥より出來り、

お倉　おゝお咲今歸つたのか、もう今に日が暮れるのに、何をして居たのぢや。

お咲　はい、中の郷まで行きましたが、お家主さまへお寄り申して、つい遲くなりました。

お倉　むゝ、さうして九郎藏が見えぬが、どうぞしたのか。

お咲　はい、九郎藏はこちの人の用を忘れたとか言うて、兩國まで參りましたわいな。

お倉　さうか、あの野郎もそゝくさと、尻の落附かぬ奴ぢやなう。

李兵　これ伯母御、そのやうにやかましく言はぬがよい。

お倉　や、これは大家さん、ようお出でなされました。

お咲　もし伯母さん、まだこちの人は戻りませぬかいな。

お倉　おゝまだ歸らぬわいの、あゝ表に誰やらお人がござるぢやないか。

お咲　さあ、あのお方はな。

李兵　何も遠慮な人ではない、さあ〳〵こつちへはひつた〳〵。

才兵　左樣なら、眞平御免なさいまし。これ善八、こつちへはひりや。

善八　はい〳〵。（ト皆々よき所へ住ふ、お倉思入あつて、）

お倉　今ござつた二人の衆は、ついに見た事もない衆ぢやが。

お咲　さあ、お連れ申した其譯は。（ト言ひ兼ねる。）

善八　もし／＼、こりやあお上さんには言ひにくい、こつちでお話し申しやせう。

杢兵　成程それがようござる。

お倉　して、ござつたお前さま方は。

才兵　あい、わしは京の島原で、藤屋才兵衛といふ遊女屋、子供を抱へに此近所へ寮を借りて居りますが、聞けば爰のお上さんが急に金の入る事があつて、百兩なければならぬにより、此身を買つてくれろとの頼み、然し御亭主のある女中といひ、殊に聞けば生業柄、篤と元方を洗はねばなりませぬ。

杢兵　所が相談が出來ぬと言はるゝゆゑ、お咲どのがわしへの頼み、據なく此家主が口をきいて、どうやら斯うやら。

善八　相談が極つた上は、御亭主の去状を取らねばならないの、又は親御の印形がなくてはならねえのと、押合ひ最中。

お咲　さあお願ひ申さにやならぬのは、所詮夫へ此譯を申した所がとやかうと、以前のお主に義理立て

を言はしやんすに違ひない。それぢやによつて伯母さま、ぢやない、母さまの。

お倉　なに、母さまとは。

お咲　さあ、あなたはわたしの實の母さま、其のかゝさんのお心一つで、此の身を賣つて百兩の金調へてこちの人や、弟が尋ぬる彼の品を求めて歸參の種にもと、思ひ詰めた身賣りの相談、お願ひ申すはあなたから、あの衆達へよいやうに、どうぞおつしやつて下さいまし。

トお倉呑込みし思入あつて、

お倉　おゝ出來しやつた〳〵、夫や弟のその爲に、苦界の里へ勤め奉公、世間にまゝある事とはいへど思ひ切つたそなたの料簡、假令淀車が何と言はうと親の効驗でわしが請合。もし〳〵あなた方、お心置きなくこの娘を、買つて遣つて下さりませ。

才兵　いやも親御が御承知とあるからは、直に相談いたしまする、元よりわしも買ふ氣の奉公人。

善八　殊に受人が大家さまなら、大丈夫の事だから、何と親方、今爰で取引にしてしまひませうか。

才兵　さうよ、善は急げだ、直に證文にしよう。

ト鳥追通り神樂になり、花道より淀車、相撲好みのなりにて出で、直に門口に來り様子を窺ひ居る、この内才兵衞紙入より年季證文を出し、

さあ、當人とお袋は、爪印でようござります。

杢兵　そんなら、わしが印形を。（ト杢兵衞紙入より印形を出し證文へ押す、皆々よろしくあつて、）

善八　先づこれで極つたといふものだ、もし親方、直に爰から。

才兵　さうよ、又といつても面倒だ、身の代を渡すがいゝ。

善八　へい〳〵畏りました。それ、小判で百兩、改めて受取りねえ。

ト善八胴卷より百兩包みを出し、お倉に渡す。

お倉　おゝ身の代百兩は、母が慥に受取りました。

お咲　もしかゝさん、其のお金はこちの人へ、在所の知れた彼の品の、價に屆けて下さんせ。

お倉　おゝ、そりや合點ぢやわいの。

才兵　さあ〳〵金を渡したら、これ善八、出掛けよう。

善八　左樣さ、日の暮れぬうちに行きやせう。

お倉　そんなら行きやるか。

お咲　あい、何も言はずに、行きませうわいな。（ト涙を隱して立ち上ろ、此時淀車門口を明けて、）

淀車　女房、待ちやれ。

お咲　や、こちの人。もし、面目なうござんすわいな。

ト泣伏す、淀車皆々を尻目に掛け、眞中へ住ふ、皆々顔見合せ思入、

淀車　これお咲、何も面目ない事はない、門であらまし樣子は聞いたが。こりやお前方は亭主の留守に主ある女を釣り出す算段、こりやあぢな事をさつしやるの。

才兵　はゝあ、それではお前が爰の御亭主さんか、お初にお目に掛りまするが、わしは京の島原で藤屋才兵衞といふ遊女屋渡世のものでござりますが、奉公人の買ひ出しや遊山がてら此の近所へ寮を借りての假住ひ、所へこちの御内儀が段々との賴みゆゑ、お家主が請合で百兩出して買ひましたが、何も仔細はござりますまいの。（ト淀車だまつて居るゆゑ、善八こなしあつて、）

善八　何の仔細も絲瓜もいりやあしねえ、金を出して此の上さんを買つたのだが、誰か惡いとでもいふのか。これ人が物を言つて居るに、なぜ返事をしねえのだ。はゝあ、こりやあ何かえ、おめえが大きな體ゆゑ脅しに掛けて身の代の、金を體好く踏む氣だな。どうかこれぢやあ六段目の、女衒のやうだが、これ聞かッし、京大阪はいふに及ばず五十三次宿場でも、爰の鞍替あすこの住替、おれが聲が掛らにやあ、とさあ、御大層も言ひたくねえが、これ百兩といふ金を出して證文をした上からは、損をしちやあわしが立たねえ、何ぼおめえが關取でも、斯う極つた相撲の土俵際で

ふん張つて、こりやあ物言ひを附ける氣だな。

才兵　假令何と言はうとも、此のお内儀はわしが買つた、あい百兩といふ金を出して、買ひましたに違ひござりません。

杢兵　これさ〳〵、まあ靜に言はつしやれ。

淀車　成程こりや當人が賴みゆゑに、買つたといへば、どうやら理窟のやうなれど、そりやあそつちの勝手といふもの。これお咲、手めえもおれへ沙汰なしに、誰が承知で身を賣つた。

お咲　さあ、それは。

淀車　これには定めし譯があらう、さあ其の譯を聞かうかい。

お倉　あゝこれ〳〵、其譯は人よりもこなたの胸に覺えがあらう、今日百兩といふ金の入るのを知つて勤め奉公、身の代金は小判で百兩。（ト淀車の前へ百兩包みを出し）こなたの留守にお咲どのが、お家主と相談して。

淀車　そりやはや、短刀求める百兩で手詰めになつて居りますゆゑ、見兼ねて身をば賣りましたといふか、假令お咲がどのやうに申したとても女の事、先づ一應はこのわしに相談せねばならぬのに、留守を幸ひ逢はせずに、やらつしやるとは、こりやちつと。（トお倉へ當て、いふ、）もしお家主さ

ま、ちと御粗相かと存じまする。（トこれを聞き杢兵衛むつとして、

杢兵　これ〳〵淀車どの、さう言はつしやれば町内で、役も勤める杢兵衛が成程これは誤まりぢやが、なければならぬ其金の才覺ゆゑに身を賣るも、元の起りは御亭主やまた弟御の御歸參の爲め、樣子をわしが知つて居るだけ、こなたの留守も合點で此の相談に加はりましたが、はて、命を賣買するではなし、女が女郎に身を賣るは世間に幾らもあることだ、何も粗相と言はるゝ覺えはござらぬわいの。

お倉　こりや大家さまのおつしやる通り、世話をするのもこなたの爲め、とやかう言はずと此の金で、賣物に出た彼の品を、買つた方がよいではないか。

トこれにて淀車ちつと思入、此時奥より吾市出來り、

吾市　おゝ、關取今歸りなすつたか。

淀車　むゝ、道具屋の吾市どのか。

吾市　さつきから關取の歸りを、奧にて待つて居りましたが、もし短刀の方は、どうしておくんなさるのだ。

淀車　さあわしが方からこなさんに、挨拶せうと思つたが、見らるゝ通り此の混雜、晩までどうぞ待つ

て下され。

吾市　いやお氣の毒だが待たれませぬ、外に買手がせり込んで、右から左りへ賣れる代物、商人といふものは金にするのが當りまへ、それとも直に金になるなら、こちらが先約ゆゑ賣りませうが、晩といふなら是れから直に、外へ賣りますから、もし關取、さう思つて下さりませ。

淀車　そりやさうでもあらうけれど、どうぞ晩まで。

吾市　是れまで度々待つたから、もう今度は待たれませぬ。

淀車　そんならどうでも。

吾市　えゝ、くどいといふに。（トきつと言ふ、淀車當惑の思入、お咲思入あつて、）

お咲　もしこちの人、常々お前の義理立てが、わたしや恨みでござんすぞえ。（ト合方になり、）假令以前は主筋でも、今ではお前の女房なれば、なぜ打明けて下さんせぬ、さういふお前の氣質ゆゑ相談しても氣に入らぬは、知れてあるゆゑ沙汰なしに、大家さまをお頼み申し、わたしや勤めをする積り、此身を賣つて百兩でどうぞ短刀を取戻し、お主へ忠義を立つた上、お前の身の上弟の歸參を願うて下さんせ、さうさへなれば三方四方の身の爲ゆゑ、どうぞ此金遣うて下さんせいなあ。

ト件の百兩包みを、淀車の前へ出す。

淀車　段々厚いそなたの親切、何にも言はぬ忝けない。
お咲　そんなら遣うて下さんすか。
淀車　苦界へ沈む志し、一生恩に着るわいの。
お咲　えゝ嬉しうござんすわいな。（ト淀車金を取つて、）
淀車　これ、短刀の代金百兩、改めて受取れ。
吾市　へい〳〵、これは有難うござります。（ト金を受取り、）やれ〳〵、思ひがけない此の百兩、慥に受取りました。へい短刀をお渡し申します。（ト淀車短刀を受取り、ちよつと改め見る、）いやお金さへお貰ひ申せば、用のない私。（トそこ〳〵に門口へ來て、）左樣なら、關取。
淀車　御苦勞でごんした。
吾市　どれ、お暇いたしませう。（ト通り神樂になり、吾市足早に花道へはひる。）
淀車　此の短刀の手に入つたも、全く女房おぬしの蔭。
お咲　そんなら是れから廓へいつても、大事ござんせぬかえ。
淀車　おゝ手詰の金ゆゑ是非がない、今から勤めに行つてくりやれ。
お咲　おゝよう言うて下さんした、それで夫婦も隔てなう、わたしや嬉しうござんすわいなあ。とはい

ふもの〻お前の身の上。弟の歸參叶うた上は。それ樂しみに行きますわいな。(ト お咲ちつと思入。)

杢兵　いやも世にも稀なるお咲どの、親へ孝行夫へ貞節、御褒美でも貰うて遣りたいわえ。

お倉　えゝ、何のかのと利口にいへど、どうでなければならぬ金、兎角金には勝たれぬことだ。

お咲　もし伯母さま、伯父さまにも此事をよういうて下さんせ、又娘にも逢ひたいが、逢つたら結句未練が起らう、逢はずに是れから行きますが、これから先きはお前の手一つ嘸厄介でござんせう、殊に常から蟲持ちゆゑ、氣を附けてやつて下さんせ、逢ひたい娘の顏も見ず、思ひ切つて行きまする。

ト 涙を拭ひ立上る、才兵衞善八思入あつて、

才兵　さあ〳〵、いつまで居ても同じことだ、何も是れが死に別れといふではなし。

善八　いつ何時でも逢はれることだ。さあ〳〵、日の暮れぬうち早く〳〵。

ト 兩人捨ゼリフにてせり立てる、お咲こなしあつて、

お咲　もしこちの人、またも頼みは弟の身の上、どうぞ歸參の叶ふやう。

淀平　おゝ氣遣ひしやんな、短刀を船木さままで持參なし、今日の切羽を濟ました上では、どう才覺をしてなりと、そちが體も身儘にするわえ。

お咲　それ樂しみに行きますわいなあ。
　　　　　トお咲泣伏す、才兵衞善八捨ゼリフにて、駕籠へ乘せる、淀車 思入あつて、

淀車　女房ども、

お咲　こちの人、

淀車　達者で居やれ。

お咲　はあゝゝゝ。
　　　　　ト泣き伏す、お倉思入あつて門口を締める、淀車ちつと思入、才兵衞垂れをおろし、それと花道まで
　　　　　駕籠を舁き行く。

善八　治助さん。

才兵　これ、急いでくれ。

駕屋　合點だ。（ト時の鐘、合方にて、皆々花道へはひる。）

杢兵　やれ〳〵、女房の賣られるのを生れて始めて見ましたが、心持の惡いものだ。然し短刀が手に入つて重荷をおろしたやうであらう。それはさうと何やかやで、隣りの溫習が遲くなつた。どれ、お暇をいたしませう。（ト杢兵衞思入あつて下手へはひる。）

お倉　これ浪五郎、そなたは其の短刀を持つて、ちつとも早く船木さまへ、お手渡しいたすがよい。わしはそなたの歸る間、釜の下など焚附けておきませうか。（トお倉こなしあつて奥へはひる。）

淀車　此上は船木さまへ、一刻も早く此の短刀を、さうぢや〳〵。

ト淀車腕組をなし思入、合方ばた〳〵になり、花道より船木佐一郎、足早に出來り、直に門口へ來り、

佐一　浪五郎は在宿なるか。

淀車　はい、どなたさまでござりますか。（ト門口を明けて見て）や、あなたは船木樣。

佐一　おゝ浪五郎、宿に居つたか。

淀車　何は然れ、先づ〳〵これへ。

佐一　おゝ許しやれ。（ト内へはひり、上手へ住ふ、淀車思入あつて、）

淀車　これは〳〵船木樣には、ようこそお出で遊ばされました。早速申し上げまするが、彼の紛失の千壽院の短刀、やう〳〵只今手に入り、あなた樣まで持參いたす所でござります。

佐一　なに、すりや短刀が手に入りしとか。

淀車　はツ、即ち是れが千壽院の、短刀にござりまする。（ト佐一郎に渡す、佐一郎取りて、

佐一　すりや、是れが誠の千壽院よな。

淀車　左樣にござりまする。

佐一　むゝ。（ト中身をよく〳〵改め見て、）こりや浪五郎うろたへ者め、そちが目には誠の品と見えやうが、まつこの如く燒刃金色似たれども、左り鑢に中身の相違、これを眞と心得て此の佐一郎が差上げる其時は、役目の越度と相成るぞ。

淀車　はゝツ、申譯なき拙者が粗忽、全く以て正眞の短刀と心得たは、此の浪五郎が身の誤り。むゝ察する所最前の道具屋めが、それ。

ト行かうとする、此時ばた〳〵になり、花道より吾市走り出來り、直に內へはひろ。

吾市　これ〳〵關取、こなたは〳〵とんだ人だの。

淀車　おゝ吾市どん、よい所へ來てくれた。

吾市　いゝや、よくは來ませぬ。これ關取、さつきお前が渡した金は、これ、此通り皆月星の極印金、千葉の屋敷で紛失の二百兩のうちなりと、疑ひ受けたはわしも災難、これ、とんだものを渡さつしやつたの。

ト以前の百兩包みを出す、淀車見て、

淀車　なに、此金が極印金とな。先づそれよりは差當る、貴樣の手から受取つた、此の短刀は贋物ぢや

わえ。

吾市　なに、短刀が贋物とは、やゝゝ。

佐一　事の實否は分からねど、浪五郎が渡したる此の金子には御家の極印あれば、民部之進が夜詰の夜奪ひ取られしお納戸金、出所は知らねど不正の金子、遣ひし上は盗賊のそちに疑ひ掛るぞよ。

淀車　むゝ。

佐一　さあ短刀といひ極印金、言譯あらば言へ聞かう。さゝ、どうぢや〳〵。

ト佐一郎詰寄る、淀車思入あつて、

淀車　さゝ御尤もなる仰せながら、何しに金子を私が、殊に贋物の短刀も、これなる者より買取る品。詮議の手蔓は此の吾市。こりや此の贋物は何物の手から受取つて、おれを一杯はめ居つたな、さあ、それ吐かせ〳〵。（ト吾市をこづき廻す。）

吾市　あゝこれ〳〵關取、贋物か眞物か、市で買つた其の短刀、わしやあ何にも知らぬ〳〵。

淀車　いゝや知らぬとは言はさぬ、日外おれに見せた折は、正眞の千壽院、今となつて贋物とすり替えたに相違ないわえ。

吾市　あゝもし〳〵、摺替えた覺えはない〳〵。

淀車　うぬ言はぬな、言はずば斯うして。（ト吾市は强く締める。）

吾市　あいたゝゝゝ。言ひます〳〵、言ふから少し緩めて下さい。（ト是れにて手を放す、吾市體をさすりながら、）その譯といふのは外でもねえ、其の短刀はお前の伯父御、道庵どのから賴まれて賣りましたのでござります。

淀車　すりや、あの伯父の道庵どのか。むゝ。（ト思入、佐一郎こなしあつて、）

佐一　その道庵といふ醫者は、右馬之助殿と合體なし、毒藥調合いたせし曲者、扨は伯父甥一ツになつて。

淀車　あゝもし、めつさうな事おつしやりませ、どういたしまして私が、左樣な事を。

佐一　でも現在の甥伯父なれば、こりや知らぬとは申されまい。

淀車　いや〳〵、全く左樣な事は。（ト此時淀車金を包みし反故に目を附け、取上げ見て、）やゝ、此の書きものは、何やら怪しき。（ト開き見て、）なに〳〵、「飛札を以て申入れ候、此程奥方かくの病にて、御惱强く、かねて名醫の訴へ候辰の年度の懷姙の女の生血を良藥に加へ用ひ候へば、日ならず御全快。」（ト半分讀みかけびつくり懷中して、）扨は最前廓より、來りし奴は、正しく騙り、跡追ひかけて、それ。

ト　つか〳〵と行きかける、佐一郎留めて、

佐一　こりや浪五郎、血相して何れへ參る。

淀車　はて、曲者を引捉へ、詮議いたさにやなりませぬ。

佐一　いゝや、おのれは言譯なさに、此の場を逃げる心であらう、爰一寸も遣る事はならぬわえ。

淀車　さゝ、其のお疑ひはさることながら、是れには段々。

吾市　其言譯を聞かうより、道庵どのに逢つた上、贋物を授けた明りを立てにやならぬ。道庵どの〳〵。（ト尋ね廻り、トゞ上手の障子を明け、屛風を引きのけ道庵の死骸を見て、）やゝゝゝ。もし〳〵、爰に道庵どのが、殺されて居ります。

淀車　なに、伯父御が殺されて居る、どれ。（ト見て、）やゝゝゝ。

ト　これにて佐一郎立寄り、よく〳〵見て、

佐一　こりや何者にか手ひどくも、聲立てさせぬ無理殺し。

吾市　こいつア斯うして居られぬわえ。

ト　吾市足早に逃げてはひる、お倉此聲を聞附け、奥より出來り死骸を見て、

お倉　やゝゝゝ、こりやむごたらしう、誰が此樣に道庵どのを殺したのぢや。これこちの人いなう〳〵。

これ浪五郎、道庵どのは誰が殺したのぢや、わが身も以前は武士ではないか、さゝ、早く敵を取つてたも、わしや悔しい〳〵わいなう。（トこのうち淀車ぢつと思入、）

淀車　あゝ折も折、時も時、かてゝ加へて伯父御の此體。

佐一　合點の行かぬ死骸の樣子。はてなあ。

ト思入、此うちお倉道庵の襟に殘りし京染の手拭を取つて見て、扨はといふこなしあつて、

お倉　これ浪五郎、此の手拭はわが身の手拭、死骸に纏うてあるからは、疑ひもなく道庵どのは、こなたが手に掛け殺したのぢやな。

淀車　あもし〳〵、めつさうな、現在伯父御をどうしてわしが。

お倉　いや〳〵殺したに違ひない、といふは極印のあるこの百兩、こりや道庵どのが日頃から大事に所持してござつた金、それが此の場にあるからは、言はずと知れた短刀を買はうと思ふ惡心で、此の手拭で無理殺し。（ト何心なく金の事を口走る、淀車これに心附かず、佐一郎此詞に聞耳立てる思入）

淀車　いえ〳〵、何の恨みで私が。

お倉　いゝや、殺した證據は此の手拭。おのれはなう〳〵。さゝ道庵どのを、生かして戻せ〳〵、えゝ爰な極惡人めが。（ト散々に打ちすゑ捻ぢ附け、思入あつて、）もし〳〵お侍さま、伯父を殺せし淀車、

どうぞ切りさいなんで下さいまし。

佐一　いゝや、其の成敗は得いたさぬ。

お倉　そりや又、なぜでござりまする。

佐一　されば其の極印の百兩金、道庵所持とあるからは、此の浪五郎が殺さずとも、天下の刑罪受くべき科人。

お倉　やあ。

佐一　なれども死人に口無きが、まだしも連添ふそちが仕合せ、それゆゑ身共は手はおろさぬ。

お倉　え、そんなら金は、千葉のお家の。

佐一　さあ極印据りあるからは、それを遣へば女たりとも、きつと吟味をいたさにやならぬ。

お倉　いやア――、おゝそれ〳〵、全く金は間違ひ、こつちに覺えはござりませぬ。

ト金を突き出し、後じさりする。

佐一　間違ひとあるからは、それにいたしてくれう。こりや浪五郎、金子の出所大方それと推量はなしたれど、一旦そちが遣ひしゆゑ、疑ひ受けし言譯あるか。

淀平　さあ其申譯は最前の、金子を包みし手紙の名宛。即ちこれに。

ト以前の反故紙を出す、佐一郎取上げ見て、

佐一　こりやこれ山名の屋敷よりかくの病を治する爲め、辰の年度の懐妊の、女の生血求むる文體、

淀車　さあ、此の手紙をば手掛りに、金の出所を詮議なし、どうぞ此身の明りをば。

お倉　何でおのれが明りが立たう、佛のやうな道庵どのを、むざ〳〵手にかけ殺した罪科。

佐一　それも嚴しく詮議いたさば、事明白に分るべきが、千葉の家來のそれがし口出しいたすも益なきこと、此上は立歸り、今宵のうちに刀の詮議を。

淀車　あゝもし旦那様、やがて誠の千壽院を、詮議仕出して此の身の言譯。

佐一　いゝや其儀は汝に頼まぬ、斯う不所存の者と知らず、大事の詮議を其方に任せ置きしは身共が不覺、顔見るさへも穢らはしいわえ。（トきつといひ門口へ出る、淀車うろたへ袴の裾を捉へ、）

淀車　さゝ、其の御立腹は御尤もなれど、其の短刀を取り得ん爲め、女房といへどお主の娘を苦界へ沈めし其金も。

佐一　樣子怪しき極印に、八重山吹の實を持たぬ、

淀車　その贋物と露知らず、身に疑ひの短刀も、

佐一　今宵につゞまる日限りの切羽、

淀車　そこをお慈悲に誓しのうち、

佐一　日延べは叶はぬ。

淀車　すりや、どうあつても。

佐一　くどい。（ト振切るを、）

淀車　あゝもし、（トまた袖を控へる。）

佐一　あの爰な。（ト振拂ひ、）人でなしめが。

ト唄になり、佐一郎思入あつて花道へはひる。淀車はツと思入あつて、件の金を取つてお倉の傍へ差寄り、

淀車　最前女房が身を賣りし此の百兩は極印金、惡事の種は知りながら、船木樣の前といひ、血で血を洗ふ伯父甥ゆゑ、ぢつと怺へて居たなれど、年度の血汐に闇々と操正しい女房が、命に拘はるこなたの巧み、お咲の行方をこれ伯母御、さあ有體に言はつしやれ。

お倉　いゝや、大それた巧みの何のと、何でわしが知るものかいの。

淀車　いゝや知らぬとは言はせませぬ、廓の者から受取つた、金は伯父御が所持の金、包んだ反故は山名家で、藥を求むる密事の一通。

お倉　さあ。

淀車　何と動きは、取れますまいがな。(トきつといふ、お倉思入あつて、)

お倉　むゝ、さう吐かしやあ是非がない、もう何もかも言つて聞かせる。いかにもわれが女房を廓の勤めと僞つてわしが勸めて遣つたのは、辰の年度に懷妊の血汐を藥に遣ふ爲め、身の代金を持つて來た廓の主人や判人も山名さまの廻し者、もう今頃はお咲めも、此の世の息の土俵際、四十八手を盡してももう叶はぬと、往生するがいゝぢやあねえか。

淀車　扨こそ違はぬ、こなたの惡事。

お倉　樣子を知つたら、生けてはおけぬ。(トお倉以前の道庵の脇差を拔いて切つて掛る、淀車其手を捉へ、)

淀車　惡事に錆びたこなたの刃物、めつたに體へ。

お倉　おゝ、さう吐かせば。(ト振拂つて又切つて掛る、淀車お倉の刀を引つたくる、)むゝ、わしが刃物を取るからは、こりや何ぢやな、伯父御ばかりか慊らいで、わしまで殺す心ぢやな。

淀車　めつさうな、どうしてわしが。

お倉　いや〳〵殺す氣ぢや、さあ殺せ〳〵。三ケの津に鳴り響いた淀車といふ關取が、金に目がくれ現在の伯父や伯母を殺したら、定めてよい男になるであらう。さあ殺せ〳〵、殺し居れやい。

淀車　あゝこれ、何しにこなたを。

お倉　何ぢや、其の刀で殺すことがならずば、(ト淀車の脇差を持つて來て、)さあ、此の刀で殺してくれ、さあ殺せ／＼。さあ是れで殺せ／＼。(ト刀を拔いて突附ける、淀車これを留めるはずみに、お倉の肩先へ疵附く、兩人心附かずトヾお倉肩先を擦り、血を見てびつくりして、)淀車、おれを切つたな。人殺し人殺し。(ト立ち騷ぐゆゑ、お倉を抱へ、)

淀車　あゝ、これはしたり、人殺しぢやの何のと、世間へ聞えますわえ。

お倉　いや／＼、わりや伯母を殺すのぢやな。人殺し。(ト大きく言ふ、淀車お倉の口を押へ、肩先を見て、)

淀車　あゝこれ、留めるはずみに手が廻り、思ひがけない、むゝ。

お倉　人殺しだ／＼。

トいふゆゑ、又留めようとする、お倉逃げ出すを一太刀切る、お倉血紅になり、兩人きつと見得、鳴物になり、立廻つてトヾ以前の四斗樽をひつくりかへす。中よりお千代出て顫へ居る、兩人これに心附かず、立廻つてトヾお倉へ止めを刺し、淀車ほつと思入こなしあつて、

淀車　あゝ心がらとはいひながら、淺ましき此の最期、わづか一時立たざるうちに、伯父伯母共に。(ト思入あつて、)南無阿彌陀佛々々。(ト兩人の死骸を片附ける、此時お千代に躓き見て、)

や、わりやお千代ぢやないか。
ト縛られて居るゆゑ、びつくりして繩を解き、口の手拭を解いて、
千代　とゝさま、怖いわいなう。
淀車　これ、何も怖いことはない。可愛さうに、誰がこのやうに縛つたのぢや。
千代　あの幸次といふ奴が、わしを縛つて、伯父さまを殺したわいの。
淀車　なに、伯父を殺せし奴は、幸次といふ名であるからは、扨はこの程深川で出逢ひし騙りであつたるか、何にせえ、幼いものを此樣に、嘸切なかつたであらうなう。（ト火鉢の藥鑵を取つて來て茶碗へつぎ、）さあ、湯でも一つ飲んだがよい。
トお千代に湯を呑ませる。此時本釣鐘の暮六ツを打つ、淀車これを聞き思入、六ツの數を打ち切ると、淀車鷄目の思入
南無三、暮れ六ツ、鷄目の時刻、今宵につゞまる千壽院の短刀詮議、二つには、女房を騙りし曲者の手掛りが知れたりとも、兩眼見えぬ盲目同然、所詮今宵の期を延ばさば取返さんこと思ひもよらず、こりや淀車が絶體絶命、むゝ。
ト口惜しき思入にて、どうと坐る。此の響きにて、側にある藥鑵ひつくりかへる。

千代　とゝさま、お湯がこぼれたわいなあ。

淀車　おゝ、そこらに雜巾があらう、拭いてくりやれ。

千代　あい／＼。（トお千代雜巾を持つて來て拭く、此時隣りの二階にて）

口上　東西々々、お俊傳兵衛堀川の段、始まり左樣。（トこれにて淨瑠璃になる。）

〽同じ都も世に連れて、田舍がましの薄煙り、堀川邊に住居して、後家の操も立つ月日、琴三味線の指南屋も、保養がてらの藥風呂、目さへ不自由な暮しなり。（ト淀車思ひ入あつて）

淀車　あゝ折も折とて隣りの溫習、あの淨瑠璃はお俊傳兵衛、子ゆゑの闇も目の見えぬ、ありや母親の心遣ひ、わしも丁度この鷄目、あゝ目の見えぬといふものは、力業にも叶はぬものぢやなあ。

〽どこへ取附くしまとてもなし、〽おいて彈く手もしをらしき。（ト床の合方になり、）

あゝ如何なる過去の因果やら、千辛萬苦で取得たるあの短刀は質物にて、女房賣つた身の代もお家で失ふ極印金、殊に年度の血汐ゆゑ義理ある妻は惡人の巧みの罠に非業な最期、いかなればこそ此やうに爲ることなすこと鶍の嘴、摩利支天にも見放され相撲冥利に盡きたる身の上、生き存へてどの面さげ、人に顏が合されう。こりや腹切つて言譯を。

〽鳥邊の山はそなたぞと、死にゝ行く身の後影、

〽どこへ取附く島とてもなし。
是れといふのも道ならぬ、みんな伯父御が巧みゆゑ、思へば〳〵口惜しい。
ト此うちよろしくあつて、淀車泣落す。お千代見て、
〽與次郎、
千代　とゝさま、何で泣くのぢやえ。
淀車　あゝ何にも知らず、可愛やなあ。
〽苛責の鬼。（ト淀車お千代を抱きしめぢつと思入、此時日暮れし心にて、）
千代　とゝさま、暗うなつたわいの。
淀車　おゝさうであろ〳〵。これわが身は賢いものぢや、明りを附けてくりやれよ。
千代　あい〳〵。
〽どれ灯をとぼそと棚の隅、こて〳〵取出す行燈の、火影も漏るゝ暖簾ごし。
トお千代奥へはひる。淀車探り〳〵門口へ掛金をかけこなし、此うちお千代佛檀の鶴の蠟燭立へ明りを附け、持ち出で、
とゝさま、灯を持つて來たわいの。

淀車　おゝ賢い〳〵。これお千代や、そこらに硯箱と紙があらう、持つて來てたも。

千代　あい〳〵。

〽あいとお俊が内外より、思ひ悩みし顔形。

ト上手にある硯箱と、白き清書草紙を持つて來り、淀車の側へ置く、此の内淀車蠟燭立を探り見て、

〽聞く程、

淀車　こりや佛檀の蠟燭立、蟲が知らせて子心に、わしへの手向けか。

〽可愛さ餘る親心、南無阿彌陀佛も涙なり。（ト淀車愁ひの思入あつて、）

せめて一言この身の言譯、書殘さんにも目は叶はず。これお千代、硯箱と紙はどこに。

千代　あい、わたしの硯とお清書草紙を、持つて來ませうわいの。

淀車　おゝよい〳〵。これ其の草紙の白い所へいろはでなりと、今とゝが言ふことを、書いてくりやゝ。

千代　あい。

〽あいとお俊がとも〴〵に。（トお千代草紙を廣げ、硯箱を明け、筆を取る。）

淀車　これ娘、このとゝはなお主様への言譯に腹を切つて死なねばならぬ、それゆゑに今そちに書かすものを、若旦那か長吉に逢うたら、それを渡した上、よう身の上を頼めよ。

〽可愛さあまる。

千代 そんなら、若旦那か伯父さんが來たら、遣るのかえ。

淀車 おゝさうぢや／＼。

千代 さうして、何と書くのぢやえ。

淀車 おゝ、先づ始めは。書置の事。

千代 書置の事。（ト大きな聲をする。）

淀車 あこれ。

〽詞にいなも泣顏を、隱す硯の海山と、重なる思ひ延紙に、筆のたてども後や先、にじみ勝ちなる胸のうち。

ト淀車あたりへ聞えては惡いといふ思入して、お千代に囁く、お千代うなづいて書くこと、

〽頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、忍ぶ姿もしよんぼりと。

ト花道より前幕の清七先きに、船頭の長吉、小田原提灯を持ち出來り、花道にて、

長吉 もし、おせきなさる事はない、浪五郎に逢つた上、樣子を聞いたら分かりませう。

清七 それぢやというて聞いて下され、從弟同士の佐一郎殿が、立腹なしてわしへの話し、短刀求める

其爲に姉を欺して苦界へ賣り、剩へ短刀の贋物をこしらへ置き、佐一郎へ渡したる人でなしの、あの淀車。

長吉　それに違ひのない事なら、切り刻んでも慊らねど、大恩のある船木の御家、よもやそんな事もござりますまいが、人の心は知れぬもの兎角迷ふは色と慾、いよ〳〵さういふ譯ならば、兄弟分の緣を切り、存分言はにやあ腹が癒ねえ。

清七　思へば〳〵あのやうな不實な者とも知らずして、我が身の上を何やかや賴み置いたが腹が立つ、悔しいわいの〳〵。

長吉　御尤もでござりまするが、何にいたせ浪五郎に、逢うた上になされませ。

清七　然し斯ういふことゆゑに、若しや留守ではあるまいか。

長吉　さあ、あの淀車は女房始めわしにまで、隱しては居りますれど、鷄目でござりますから、日が暮れたれば、內に居るに違ひござりません。

清七　それでは內に居るであらう。不思議なことで長吉どの、お前の世話になりますが、此後を賴みます。

長吉　そりやお氣遣ひなされますな、及ばずながら長吉が、是れからお世話をいたしませう。

清七　えゝ、忝い志し、それに引替へあの淀車。

長吉　はてまあ、せかずとおいでなされませ。

〽佇む軒は目覺えの、慥に爰と門の戸へ。

ト兩人思入あつて門口へ來る、淀車は此うちお千代に書置をかゝせ、肌を脱ぎ、件の匕首を取つて、腹を切らうとする、兩人門の戸を明けようとして明かぬゆゑ、

清七　これ、淀車々々。

長吉　爰を明けてくれ〱。

清七　爰を明けてくれ〱。

〽聞くにお俊が飛び立つ思ひ、提灯吹き消し。

ト淀車兩人に逢つては惡いといふ思入にて、蠟燭立を探り、灯を吹き消す。

千代　怖いわいの。（ト淀車に縋る。）

淀車　これ。（トお千代を押へ、）

長吉　まだ宵だのに、表をしめ、

清七　留守にもあらぬに、子供の聲。

長吉　どうやら仔細が。

〽寢耳に聞いて與次郎が、びつくり明ける門の戸。

ト兩人烈しく叩く、内には淀車思入あつて腹へ突立てる。此の物音に長吉聞き耳を立て、門の戸を足にてこはし、兩人内へはひり、提灯にて此體を見て、

こりや淀車、はやまるな。

〽捉へる袖の振合せ。（ト引廻さうとするを、長吉しつかと捉へる。）

淀車　おゝ長吉か、若旦那か。

清七　むゝ、扨はそなたは、言譯なさに。

長吉　これ、何であらうと、まあ放せ〳〵。

〽無理に引込み取縋り、戸口を内からぴつしやり、いふもがたく胴ぶるひ、

ト無理に淀車の匕首を取る、有合ふ廻しを取つて、腹を結へる。

清七　これ浪五郎、何ゆゑあつて、腹を切つたのぢや。

長吉　これには何ぞ譯があらう、譯をいへ〳〵。

淀車　さあ、樣子といふは、これ娘。

千代　あい〳〵。（トお千代清書草紙を長吉の前へ置く。）
長吉　いかに子供と言ひながら、頑是のねえにも程がある。これ手めえのとゝはな、今死ぬのだ。
清七　それも知らずに、清書を褒められたさに見せる氣か。
長吉　えゝ、それ所ぢやあねえわえ。
〽いふに構はず。（トお千代は清書草紙を廣げ。）
千代　書置の事。（ト大きくいふ。兩人びつくりして。）
四人　なに、書置。やゝゝゝ。
〽うろたへ騒ぎ、（ト長吉清書草紙を廣げ見て。）
長吉　何々、短刀求むる金に迫り、據なく女房を苦界へ賣つたも騙りにて、血汐を取りに連行きしとのこと、その上金は紛失金、まつた短刀は贋物にて佐一郎さまの御身の難儀、これ皆伯父の仕業と知れど、伯父は悪者幸次に殺され、其疑ひで手が廻り伯母を殺せし淀車、申譯なく相果て申し候。
やゝゝゝ、すりやそれゆゑに腹を切りしか。
淀車　若旦那、長吉、その譯ゆゑにどうも立たぬ、嘸や様子を聞かしやつたら、腹も立つでござりませうが、生前からの約束と御料簡なされて下さりませ。これ長吉、おぬしは兄弟の誼に、これから

おれに成替り、お世話を申して上げてくれ。

〽問ひ弔ひをしてくれと、いふにお俊は側へ寄り。

ト淀車苦しき思入、長吉側へ寄り、思入あつて、

長吉　そりや聞えぬぞえ淀車、おぬしがいふも無理ではねえが、なぜ死ぬ程の事ならば、おれに話してくれねえのだ、そりや水臭えといふものだ。兄弟分になつてより、世話になつても恩に着ず。

〽ほんの夫婦と思ふのに。

おちあ實の兄弟より、おめえを力と思つて居るに、なぜ相談をしてくれぬぞ、三方四方の義理づくに立たねえといふも尤もだが、相撲堅氣な一途な料簡、元より是れが慾心でしたといふ譯ぢやあなし、お主の爲にした事を言譯なさに腹を切り、死んで行く身は今日限り、跡に殘つた女房が斯ういふことゝ聞いたなら、生きて居るそらはあるめえ、又不便なは此の娘、二人の親に悲しい別れ、いかに強いが生業とて、子が可愛くはねえことか、少しは不便と思ふなら、膝とも談合このおれに、相談かけて下すつたら、どうか仕樣もあらうのに短氣な事をしてくれたなあ。

〽詞にわつと泣出し。

淀車　えゝ忝けない。よういうてくれた、元より死ぬる覺悟ゆゑ、心殘りはなけれども。

〽たとひ鳥類畜類でも、子の可愛さに替りはない。兎角迷ふは此の娘、早く親に別るゝせゐか世間の子よりおとなしく、此の書置のいろは文字、これが此世の見納めなるか。

ト淀車書置の清書草紙を見る、お千代これを見て、

千代　とゝさま、お前は目が見ゆるかえ。

淀車　やゝゝゝゝ。（ト心附きし思入にて、）今まで心附かざりしが、いつの間にやら兩眼とも。

長吉　さては鷄目が、

淸七　明らかなるか。

淀車　兩眼見えるは、若しや劍の。

ト件の短刀を取って出す。

淸七　どれ。

〽子ゆゑに迷ふ闇の闇、二人は何と詞さへ。（ト七首の目釘をぬき中身を改め見て、）

淀車　すりやそれが、千壽院の短刀とな。

こりや、紛ふかたなき千壽院。

長吉　思ひ掛けなく、
清七　我が手に入つたぞ。
淀車　こりや覺えある、伯父の匕首。
清七　扨は摺換へ置きたるか、
長吉　何は兎もあれ、こなたの働き。
三人　ちえゝ忝けない。
〽悦び唄ふもころびくに。
トばた〳〵になり、花道より幕明きの鵜の川走り出來り、直に舞臺へ來て、
鵜川　もし親方、お上さんは内にござりまするか。
淀車　いや、女房は内に居ぬわえ。
鵜川　それぢやあお上さんに違ひねえが、こりや關取、うつちやつては置かれませぬ。
長吉　これ九郎藏、譯も言はずにどうしたのだ。
鵜川　さあさつき贔屓のお客に連れられ、平岩へ行つた歸りがけ、枕橋のだら〳〵下りで、摺れ違つた四手駕籠はお上さんに違ひねえ、駕籠の前後に附いて居たは、なりも怪しい惡者どもが五六人、

こりや常事ではござりませぬぜ。

淀車　それぞ女房を騙りし奴等。

長吉　して、連れ行きし道筋は、

鵜川　さあ、隅田川の土手續き、

長吉　なに、隅田川の土手、む〻、遠くは行くまい、それ。（ト長吉行かうとするを）

淀車　こりや待て長吉、その惡者は慥に幸次、伯父の敵だ、おれが行くから待つてくれ。

淸七　然し、そなたの深手では。

淀車　なに、これしきのへろ〳〵疵、これ九郎藏、おれが脇差をおこせ。

鵜川　おい。

〽心の内の暇乞、名を繪双紙に聖護院。

トこのうち皆々手傳ひ、淀車廻しをしめ、着類を着替へ思入あつて、

長吉　おれも一緒に。

淀車　いや、こんたへ賴むは跡の始末。

淸七　計らず手に入る此の短刀、

長吉　片時も早く船木樣へ。
淀車　われは是れより隅田堤へ。
長吉　ちつとも早く。
淀車　おゝ、合點だ。
〽森をあてどに。
ト淀車行かうとする、お千代留めるな鵜の川隔てろ。淸七は短刀を持ち淀車を氣遣ふ思入、長吉も同じく案じるこなし、トゞ淀車花道へ行き、たぢ〳〵となり、きつと見得、櫓太鼓になり、花道へ逸散にはひる、此の仕組よろしく、

幕

四幕目　三圍の場

ト禪の勤めにて、つなぎ、直に引返す。

〔役名——淀車浪五郞、船木佐一郞、手代淸七、藤屋才兵衞、判人善八、駕籠舁二人、お坊主幸次　淀車の女房お咲等。〕

（向島稲荷川岸の場）――本舞臺一面の高足、三圍の土手、正面眞中に石の鳥居の笠木を見せ、此向う奥深に稲荷の本社の遠見、二重諸所に櫻の立木、日覆より柳の釣枝、上手に葭簀張りの出茶屋を疊みたる道具、よき所に堤の花折取るべからずの高札などよろしく、總て向島稲荷河岸の模樣好みの通り爰に○△□の惡者生醉の體、二升樽竹の皮包みなど、いろ〳〵取散らし焚火にあたりながら酒盛りの體、此のうち一人鉢卷にて、肌を脱ぎかけ踊つて居る見得、甚句の合方、浪の音にて幕明く。

○　あゝけむい〳〵、焚火の側でぱツぱとされてはたまらねえ。

二人　もうよせ〳〵。

△　つい大文の騒ぎを聞いた所から、浮かれ込んだやつさ。

□　成程人の揚げた藝者で浮かれるのは利方だが、飲み喰ひも其の格にいきやあいゝけれど。

△　いかねえ事もねえ、料理番へ行つて匂ひをかいで、盃洗ひの水を貰つて飲みやあ同じことだ。

○　べらぼうめ、菰冠りぢやァあるめえし。

□　何の菰冠りだつてこちとらだつて、あんまりのいた仲でもあるめえ。

△　違えねえ〳〵、おらあまた菰ツ冠りと聞いても嬉しい、どうぞ一生の願ひには、樽酒で附けて置いて、たらふく飲みやあ死んでもいゝのさ。

○　しみツたれな事をいふな、今夜の仕事がうまく行きやあ、たんまりとした金になるから、樽酒はおろかなこと、當分旨い酒が飲めらあ。

□　ほんにさうだ、其時は藝者とまでは行かずとも、瞽女のほうでも押上げて思ふさま騒がうぜ。

△　それに附けても、みんなもう歸りさうなものだが、またどぢな事でもしなけりやあいゝが。

○　いや、そこはあの手合の事なり、それにさつきちよつと様子を聞いたが首尾よく行つたといふ事だから、もう今に歸るだらう。

□　さう聞いたら前祝ひに、思ふさま喰ひしめよう。

△　所が肝腎の酒がねえ、こウ誰ぞもう一升買つて來やな。

○　まだ飲む氣か、さつきから二升の酒だ、もういゝ加減にしちやあどうだ。

□　酒でも飲まなくつて、此の吹晴しの向島に居られるものか、誰もいくのがいやなら、おれが爰から呼んでやらう。

△　馬鹿をいふなえ、爰から呼んだつて、酒屋へ聞えるものか。

□　所が聞えるの。

△　聞えるなら、呼んで見や。

□ 呼ばなくつてよ。酒やアい。（ト向う越しに呼ぶやうにいふ。）

皆々 何を言やあがる、あはゝゝゝゝゝゝ。

ト靜かなる浪の音、薄きばた〳〵になり、花道より前幕の才兵衞先きに、一二の駕籠かき、垂をおろせし四つ手駕籠をかつぎ、跡より善八の判人附き出で來り、かご舁花道にてちよつと杖をする。

才兵 いや御苦勞々々、此の丁場を杖なしは、よつぽど無理な仕事だ。

一 そりやあどんな腕ツこきでも、是れが行けたらお目に掛らねえ。

二 見なせえ、この寒さにびつしより汗だ。

善八 こつちやあ又寒くつてたまらねえ、早く行つて焚火にあたらう。

才兵 もう一息だ、やつ附けねえ。

兩人 合點だ。（ト才兵衞先きに、皆々舞臺へ來り、）

才兵 おゝみんな爰に居たか。嘸待遠であつたらう。

△ いやもう、待遠の何のと、今も噂をして居た所だ。

○ おめえ方の事だから、よもやどぢは組むめえが、それでももしやと案じて居た。

善八 斯う遲くなる積りぢやあなかつたが、何のかのと手間取つたので、途中ですつかり日は暮れる。

一　それにこいつらが、どぢを働いて、提灯を持つて行かねえものだから、道は凍つて足場は悪し、どんなに困つたか知れねえ。
二　知れた事よ、日暮れまでには、歸る積りだもの。
才兵　あたりまへの仕事なら、よつぽど増して貰はなけりやあならねえのだ。
一　默つて居ろえ、旦那に御如在はねえや。
二　御如在もねえが、錢もねえが聞いて呆れらあ。
善八　惡く狼狽ると、駕籠賃ぐるみぶちだあ。
才兵　そこは大丈夫だ、此節親分の懷がいゝ事は知つて居るから、案じるにやあ及ばねえ。
△　おゝ親分といやあ爰に見えねえが、何處へ行つたのだ。
才兵　おめえ方の歸りを待ち草臥て、あの葭簀の蔭でやつて居やす。（ト寝て居るといふ思入）
○　それぢやあ仕事がうまく行つたから、嘸今頃はいゝ夢でも見て居るだらう、是れからまた夢の見直し、あの丸髷をがた附かせるかと思ふと、ほんに氣が惡いやうだ。
善八　よつぽどいゝ玉ださうだなあ。
　　いゝの何のと、役者で言つて見りやあ、三津五郎丸出しといふ代物だ。

三人　そいつァ素敵だ。
善八　見るばかりも、手めえ達の目に正月だ。やい、爰へ出しやな。
一　合點だ。（ト駕籠の垂を上げる、中に前幕のお咲乘つて居る、履物を直す、）さあお上さん、參りました。
お咲　大きに御苦勞さまでござりました。（ト言ひながら駕籠より出る、三人見てい丶女だといふ思入、お咲あたりを見廻し、びつくりして）もし、爰はどこでござんすえ。
才兵　爰かえ、こゝは三圍の下さ。
お咲　えゝ。（ト合方。）
善八　決して狐に化されたのぢやあねえから、びつくりせずとお上さん。
才兵　まあ、爰へ來て、
皆々　あたんなせえ。（ト是れを聞き、お咲氣味の惡き思入あつて）
お咲　何んでわたしを、こんな所へ。
才兵　お前の體を百兩で、買つた旦那の、こゝは寮さ。
善八　よつぽど風雅なお住居だらうね。
お咲　さうして、旦那といふお方は。（ト葭簀の内にて）

幸次　其の主人は爰に居る。今そこへ行つて逢はう。(トしんみりとした端唄の合方になり、葭簀の蔭より幸次頭巾着流し一本差し、駒下駄にて出來り、)おゝ、みんな御苦勞々々。

才兵　もし、すつかりうまく行きやした。

善八　嘸お待遠でござりましたらう。

幸次　さあ、待草臥れてとろ〳〵とやつたので寢起きのせゐか、ぞく〳〵寒くなつてならねえ。こウどん〳〵焚火でもしやあな。

お咲　さういふ聲は。

幸次　お坊主幸次だ。(ト此時風の音になり、焚火燃え上る途端に幸次冠りし頭巾を取り、好みの鬘になる、)

お咲　えゝゝゝゝ。

幸次　昨日洲崎で出逢つた時、いろ〳〵手を換へ口說いたが、聞き入れねえのがこりやあ尤も、淀車といふ亭主を捨て乘換る氣はあるめえが、所をこつちやあ男の意地、どこがどこまで立てにやあならねえ。

才兵　出來ねえ相談合點で、ちつと手荒い仕事だが、おめえの體を山名さまへ藥に賣るので百兩の、極印金を道庵から親分が借込んで、そいつを種におめえをば、首尾よく爰まで連出したのだ。

善八　たゞ殺すのも惜しいから、爰で親分が抱いて寢て、思ひを晴らした其上で、おめえを殺して、

兩人　金にするのだ。（トこれを聞き、お咲口惜しきこなしにて、）

お咲　さうとは少しも知らずして、廓の勤めと思ひ詰め、それも元より氣にそまねど、實家の爲なり二つには夫の爲と思ひあきらめ連出されて來て見れば、それよりもまだ恐ろしい、そなたの巧みの罠にかゝり、殺されるのは口惜しけれど、これもみんな前生から此身に定まる約束ごと、よしまた爰で死ねばとて、わたしの身の代百兩で尋ぬる寶が手に入れば、實家の家名の立つのが規模。

幸次　いゝや、それも望みは叶はねえ。

お咲　なに、叶はぬとは。

幸次　さればさ、其寶の短刀も道庵が摺替へたれば、さつき道具屋吾市が渡した友千鳥の短刀は、ありやァまつかな贋物だ。

お咲　そんならあれも、えゝゝゝ。

幸次　まだ〳〵そんな事ぢやあねえ、おぬしが愛しい戀しいと、思ふ淀車を、伯父殺しにしてやつたわ。

トお咲おどろき、

お咲　なに、まだ其上にこちの人を、伯父殺しにしたといふは。

幸次　さあ伯父殺しといふ譯は、あの道庵の金を取り、直に其場で締殺し、淀車の手拭を襟に纏つて塗り附けたも、深川からの意趣晴らし、もう斯う何もかもぶちまけりやあ、どうで生けてはおかねえと言ふとこだが、爰がおぬしの胸との相談、おい、夜が短い早くしろ。

ト刀を拔きお咲の目先きへ突附ける、お咲きつと思入あつて、

お咲　さう聞く上は猶以て、何のおのれに隨はう、今聞いたる惡事の一々、内へ戻つて夫へさうぢや。

ト逃げにかゝる、皆々あわてゝ押留め、

才兵　えゝ待ちやあがれ、途方もねえ。うぬを逃してたまるものか。もし親分、こいつは所詮すべよくは寢ませせぬぜ。

善八　いつそ手短かにおッ轉ばし、手足を押へて念佛講だ、さあ遣ッ附けろ〳〵。

ト皆々お咲へ立ちかゝる、お咲逃げようといふごつちやの立廻りになる、トゞ皆々寄つてお咲を押へ附ける。大ばた〳〵になり、土手通りを來る心にて、正面の堤の上より前幕の淀車、尻端折り一本差し、跡より鵜の川出來り、皆々を取つて投げる。トゞ淀車お咲を圍ひきつと思入、お咲淀車を見て、

お咲　やゝ、お前はこちの人。

淀車　おれが來たから落附いて居ろ。やい、鵜の川女房をわれに預けるから、爰から直に先へ行け。

鵜川　それだといつて關取一人を置いて、どうして此儘行かれませう。

淀車　えゝ、爰氣遣はずと、ちつとも早く。

鵜川　そんなら關取。

淀車　行け。

鵜川　合點でごんす。さあござりませ。

ト是れにて鵜の川お咲を連れて花道へはひる。この內皆々起上り、淀車を見てびつくりなす、

淀車　さあ、わいらは片ッ端から、生けては置かねえ、覺悟しろ。

幸次　やあ、思ひがけねえ、わりや淀車。

皆々　どうして爰へ。（ト稽古囃子の入りし合方になり、）

淀車　おゝわいらが巧みで斯う〳〵と、樣子を聞いたそれゆゑに、足手も空に追つかけて、折よく爰で三圍の稻荷の加護か女房は、こつちへ取りかぢ向う越し、突ッきるおれが腕限りうぬらは憂き目都鳥、いざ事問はんこゝまでに、巧みの一々聞いた上、惡事の枝葉根を斷つて、枯らす櫻の花相撲、土手の土俵へ叩き附け、投げ殺すから覺悟しろ。（トきつと思入、幸次せゝら笑ひ、）

幸次　面白い、殺せるなら殺して見ろ、外の者なら知らねえこと、われにばかりやあ殺されぬ、劔難除けのこつちにやあ、守りがあるから安心だ。

淀車　なに、おれにばかりは殺されぬ、劔難除けの守りとは。

幸次　拜みたけりやあ拜ましてやる。（ト懐より誂への箱入の茶碗を出し、）そりや、これだ。

淀車　慥にそれは、

幸次　胡蝶の茶碗。おれに手向ひするが最後、箱ぐるみ叩き附け、粉微塵に割つてしまふぞ。

淀車　やあ寶をおとりに卑怯な奴、われも名うての惡黨なら、なぜ尋常に勝負はせぬ。

幸次　知れた事よ、そつちは相撲こつちは素人、盆の上の勝負なら知らねえこと力づくで叶ふものか。

淀車　さういや茶碗を。（ト取りにかゝるを、幸次ちよつと留め、）

幸次　面倒な、疊んでしまへ。

皆々　合點だ。

ト皆々縫包みを持つて淀車へ打つて掛る、淀車皆々を相手にちよつと立廻つて見得、これより誂への鳴物になり、面白き立廻り、此のうち幸次刀をぬき淀車に切つて掛る、淀車は土手の高札を抜きとり兩人よろしく立廻つて、双方よき見得にて、此の道具廻る。

（三圍鳥居際の場）――本舞臺以前の土手の後を見たる道具、丸物の鳥居、石段、下手に非常道具の置場、是れに誂への竹階子を多く掛け、總て三圍鳥居際の體、早き禪の勤めにて道具留る。と淀車皆皆を相手に立廻りながら出來り、よき見得より後黒幕切つて落す、向う打ち抜き今戸川岸灯入りの遠見、是より又誂への賑やかなる鳴物になり、存分立廻りあつて、淀車階子を引ッたくり振り廻す、皆々叶はず逃げてはひる。爰へ幸次切つて掛る、淀車抜き合せ、ちよつと立廻つて幸次を一刀切る、幸次どうとなる。

幸次　こりやあおれを、切りやあがつたな。

淀車　惡の報いだ、覺悟しろ。（トたゝみ掛けて切附ける。幸次ちよつと留め。）

幸次　おゝ殺される返報にやあ、うぬが欲しがる此の茶碗を。

ト手早く出して箱ぐるみ石段へ打附ける、淀車驚く。

淀車　やゝゝゝゝ、大切なる胡蝶の茶碗を、打碎かれし上からは、最う是れまで。

トまた幸次を一刀切る、はツと苦しみ、

幸次　人殺しだ。

トいふを又切附ける、幸次立身にて苦しみ、ぱつたり倒れる。淀車寄つて止めを刺す。此時ばた〳〵

にたり、前幕の佐一郎清七出來り、

佐一　おゝ淀車、爰にあつたか、別條もなくて、先づは重疊々々。

清七　最前直に短刀を、持參しようと思ふ所へ、船木殿のお出にて。

佐一　千壽院の短刀は、慥に身共が受取つたが、今一品の胡蝶の茶碗。

淀車　その茶碗は幸次めに、打碎かれて、それそこに。

清七　どれ。(ト茶碗の箱を取りあげ蓋を取り、中を改め見て)いゝや、茶碗に恙はない。

淀車　ちえゝ忝けない。

清七　胡蝶の茶碗に恙のないも、こなたの忠義を天の助け。

佐一　幸次は元より惡者ゆゑ、殺害なしても構ひなけれど、只殘念なは淀車、その深手では。

淀車　はて、目出度い折柄、歎くは不吉。

佐一　それぢやと申して。

清七　あいや、全く二品揃ふ上。(ト落ち散りし百兩包みを拾ひ見て、)是れに落散る極印金。

佐一　紛失なせし品々の、殘らず揃へば本地へ歸參、ちえゝ忝ない。

ト此時以前の○△兩人窺ひ寄つて、

兩人　うぬ、人殺し。

ト淀車へ掛るを振拂つて一人を見事に投げのけ、一人を引附け、此上へどつかりとなつて苦痛の思入

清七も思入あつて、

清七　歎きの中の、

淀車　一つの悦び。

佐一　目出たい〳〵。（ト淀車段々落入る。皆々愁ひを隠す思入、よろしく頭取出て、）

頭取　先づ今日は、これ限り。

ト目出度く打出し。

慾相撲（終り）

英名瓢の千年に輝く
猿冠者の昇進
麒麟祥瑞祝
鳳凰奏樂舞
俊名竹の千里に響く
寅童子の化身

抑永祿の始めより元龜天正の末迄を筆に耕やす作場道恵み深田へ權右衛門が落しを哀む賢君も思はぬ夢を三保ヶ濱天下に擬へ靈玉を握る吉事に悦びの一指其羽衣の天女に似たるお萬にお手が築山殿へ知て局が呵責の笞流石作左も鬼の目に浮む涙は信康君疑念を受ての切腹に歎く主水に彌九郎

實難有聖代御恩澤劇場新築開場式

上使に立ど立兼て顏も得上げぬ半藏に是非も泣々山城が介錯なして沙門の門出行方何處と家康公が一世の御難伊賀越から伊勢の船出に七郎次が烏と言ど鷺沼が聞かぬ手詰に彌十郎突込む鎗の危きも退れて聚樂の對顏に狐紙子の陣羽織で諸侯を化す秀吉の一策成しも年立て四海納る德川の功

今大樹枝葉繁茂

松榮千代田神德

壯時の德川家康を取扱つた『松榮千代田神德』は明治十一年六月、作者六十三歳の時、新富座に書きおろされた。新富座の改築成りて開場した時の新狂言であるから名題も緣起のいゝものになつてゐる。依田學海、松田道之（當時の東京府知事）等によつて提唱せられた演劇改良運動の第一聲とも稱すべき、歷史的意義ある新史劇であることは、坪内逍遙博士の回顧錄、續々歌舞伎年代記等に明記されてゐるが如くである。作者へも多少の助言が試みられ、俳優では主として團十郎に種々の指導が試みられて有職故實を重んぜしめ、次第に活歷的藝風を誘致せしめたのは、此作に始まるといふ。仲藏の百姓權右衞門がよく團十郎の新演出たる家康と調和したことは、驚嘆に價ひしたと坪内博士は述べてゐる。三保の松原で靈玉を奪ひ合ふのダンマリは全篇の暗示、諷刺ともなつて作者の働らきの現はれたものと評せられ、干鰯船の件も劇的場面として著明であつた。

書卸しの時の役割は市川團十郎（德川家康・築山御前）、尾上菊五郎（此下藤吉郎後に秀吉、服部半藏、野澤彌十郎、柏原小平太康政）、市川左團次（山形山城、本多忠勝、角屋七郎次）、岩井半四郎（天津乙女、權右衞門娘お萬）、中村仲藏（本多作左衞門、百姓權右衞門、七郎次母おなぎ）、坂東家橘（岡崎三郎信康）市川小團次（德川元康、進藤傳次郎）、中村鶴藏（鷲沼九郎兵衞、權右衞門妻おくろ）、市川團右衞門（老女藤浪、和田八郎）、尾上梅五郎（修驗者怪典）、大谷門藏（大久保新十郎）、岩井小紫（中老八重機伏屋娘柵）、坂東喜知六（庄屋茂次兵衞）等。

挿繪にしたのは稿下當時の繪番附の一部分である。

大正十五年十二月初旬

校訂者


六幕目
七幕目

松榮千代田神德（德川家康——九幕）

序幕

岡崎八幡社内の場
同元康兵粮入の場

〔役名——德川藏人元康、岩淵九郎友則、脊藥賣逸平、神主左司馬、德川の家臣四人、仕丁、家臣、軍兵。乳母伏屋、娘柵、家中娘お蝶、同お清、同おこま、同お筆等。〕

（岡崎八幡社内の場）——本舞臺中足の二重、石垣、眞中石段、左右石の玉垣、正面本社の遠見、此の前八幡宮と記せし掛額のある石の鳥居、石燈籠、諸所に松の立木、上手に出茶屋、下手手洗鉢、床几を二脚並べ、○△□◎の仕丁四人並び、總て岡崎八幡社の體、大拍子にて幕明く。

○　今日は五月の十三日で、三日の内でも八幡様へは、餘計に參詣の出る日だから、めつぽう地内が賑かだ。

△　此の岡崎の鎭守様だけ、氏子繁昌宿内安全、家業繁昌息災延命と、氏子の者が信心するので、

□　今日は二十五座の神樂が上り、其のお流れの强飯と、煮染で御神酒が飲まれるといふもの、

◎　何でも氏子が盛らねば、神主様がもうからねえが、鰯の頭も信心がらと、成程譬に云ふ通り、

○　此神主の左司馬樣に、祈禱を賴むは無駄な話し、まづ第一に慾が深く、第二番が大の助平、
△　毎年春には御城下へ、御札配りで供に行つても、娘子供のある內だと、やれ御祈禱をしてやるの、惡魔拂ひをしてやるのと、親切らしく見せかけて、
□　內々あたつて見たがつてばかり、のんこのしやァの神主樣だ。
◎　其の神主の氏子の者が、御祈禱を賴むといふは、
○　それが所謂金言にて、
△　鰯の頭も、
□　信心がらと、
三人　いふのだらう。

ト此時やはり大拍子にて、上手より左司馬、神主の拵へ烏帽子神主にて出で、

左司　のんこのしやァとは、誰の噂だ。
○　いえ、のんこのしやァではございませぬ。豐川の神主樣は、こん〳〵の神主樣と、
四人　申しましたのでございまする。
左司　假令豐川の神主にもせよ、こん〳〵の神主などゝ申しては相成らぬぞ。

四人　へい〳〵、恐入りましてござりまする。（ト左司馬向うを見て、）

左司　おゝ表門より是れへ參るは、殊の外の美婦人だが、參詣人と見ゆるわえ。や、どこやらで見た顏ぢや。

○　あれは每日百度にまゐる、德川の家中の者にござりまする。

左司　そんならおれが札配りに、ちよつと當つて、いや、なに、そちはよく當てた。

トまぎらす、三味線入り大拍子になり、花道よりお蝶、お淸、おこま、お筆等の四人、家中娘振袖なりにて、めい〳〵お百度のこよりを持ち、後より中間新助日傘を持ち、出で、

お蝶　今日で丁度三周りの結願も、皐月の中の日でござりますれば、八幡樣の御祭日、

お淸　武運を願ふお百度の、今日も長閑き神の庭、

お駒　其御手洗の水澄みて、勝利を松の御神木、

お筆　みどり色濃き兄樣達の、必ず御勝利あるやうに、

お蝶　御祈禱お願ひ、

四人　申しますわいなア。

ト皆々舞臺へ來る、左司馬下手へ來り、

左司　是れは〳〵何れも様、ようこそ毎日の御參詣、まづ〳〵これへ。
お蝶　眞平御免、
四人　下さりませ。（ト四人は床几へかける、中間は下手へ控へる。）
左司　これは〳〵皆様方には、毎日お百度にお出でなさるに、ついにお目にかゝりませぬ、誠に失禮の
いたしました。
お蝶　私共こそ毎日出まして、お目通りもいたしませぬ。
お清　此間よりの合戰に、我君様は申すに及ばず、
お駒　兄の武運を祈りますので、お百度を上げに參りますれど、
お筆　ついに御たづね申しませぬ、併し今日は結願にて、
お蝶　御祈禱願ひに、
四人　出ましたわいなア。
左司　それは御信心な事でござる、分けてお女中方の事なれば、念を入れて御祈禱をば、勤めまするで
ござりまする。
四人　それは有難うござりまする、何卒よろしく願ひまする。

左司　又御出陣の御評定にて、御宅様が淋しければ、夜分でも御祈禱に、伺ひまするでござりまする。

お清　いえ〳〵それには及びませぬ、下部も宅に居りますれば、必ずお斷り申しまする。

左司　それでは御家來衆が御留守居番、それは生憎、

四人　エ。

左司　いえ、生憎今日は祭日にて、社内も殊の外混雜いたせば、御同道も仕つれば、まづ神前へござるがよろしい。

お筆　左樣なれば、御祈禱を、

四人　お願ひ申上げまする。

左司　どれ、御案内の仕らう。

ト大拍子にて、左司馬先に四人の娘、中間附添ひ、鳥居の内へはひる。仕丁後を見て、

○　一度か二度逢つた人でも、百年も馴染んだちんころとやらで、あの挨拶はなか〳〵出來ねえ仕事だなア。

△　あのあつかましやの左司馬樣は、女にかけては餘程で、

□　千枚張りの、

四人　厚皮だなア。（ト花道揚幕にて、膏藥賣逸平の聲にて）

逸平　鞍馬相傳、義經一夜膏。

ト宮神樂になり花道より逸平、尻端折り脚絆わらぢ手拭を冠り、膏藥箱を肩にかけ呼び乍ら出來り、

鞍馬相傳義經一夜膏。

○　いつもの膏藥屋だが、大層今日はゆつくりだの。

△　サア〳〵、此方へかけるがよい。

逸平　有難うござります、眞平御免下さいまし。（ト床几へかける。）

□　まだ其の膏藥を、ためしたことは一度もないが、

◎　義經一夜膏といふは、いつたい何にきくのだね。

逸平　一夜膏の謂れ因緣、御存じなければ話しませうか。

○　どうぞ話して、

三人　聞かして下され。（ト是れより聖天の合方になり）

逸平　先づ賣弘めまする一夜膏は、其の昔義經公、まだ牛若丸と言ひし時、劍術修行に志しをゆだね、鞍馬山にとぢ籠り、僧正坊が其許にて日々修行の其折に、手足は元より肩腰まで竹刀或は木の枝

にて、生疵絶えたことなきゆゑ、僧正坊の相傳にて、製したまひし膏藥、今夜附くればあくる日は元の如くに癒えるので、一夜膏と名附けたり、まだ此外の功能は、打身切疵金瘡は、即座に治る希代の膏藥、扨もよし〱義經が、鞍馬で製した大天狗の、先づ功能は斯くの通り。

○ 何ぼ駿河が近いといへど、白酒屋の言立から、尻の來さうな長言立、

△ おれは買はぬが言立を、聞いた代りに案內して、

□ 神主樣の所へ行き、いくらか買はしてやらうから、

◎ おれと一緒に、

四人 來るがいゝ。

逸平 左樣なら神主樣の所へ、お連れなされて下さりまするか。

○ とも〲藥を賣込んでやらう。

逸平 それにて暫時待受くれば、

四人 エヽ、

逸平 どうぞお願ひ申しまする。

ト大拍子になり、仕丁四人付いて逸平奥へはひる。唄になり、女房伏屋娘桐日傘をさし、文金島

田の娘にて、伏屋に連れられ花道にて、

伏屋　一足先へ鳥居様のお娘御が、お隣りやお向うのお友達と、お百度を上げにお出でなされてぢやが道で逢ひさうなものぢやが。

柵　一足違ひの様なれど、もう御參詣の濟んだ時分、お宮へ行つたら逢ひませう。

ト舞臺へ來り、思入あつて、

伏屋　皆さん方が先にしろ又後にしろ、一ツお社の事ゆゑに、此所に待合はして、戻りは一緒に行かうわいなう。

柵　それがよろしうござりまする。（ト合方になり。）

伏屋　今改めて申さずとも、かね〳〵話に聞かせし通り、私はそなたを産落し、程なく徳川家の元康様が御誕生、御乳が足りない所から、達ての勸めに御殿へ上り、お育て申せし我君様、言はずとそなたとは恐れ多いが乳兄弟、其の元康様が此度は、今川殿と織田方の、合戰ゆゑに池鯉鮒迄、御出張遊ばす、其御武運の開くる様、願うて參詣するのぢやわいなう。

柵　元康様は人並勝れ御發明の御産れゆゑ、無謀な戰を遊ばす様な、御方にてはあるまいけれど、まだ今年はお十八御年若の事ゆゑに、どうぞお怪我のない様にしたいものでござんすなア。

伏屋　それゆゑ氏神八幡様へ、お願ひ申して居るわいの。

ト時の太鼓、合方になり、花道より岩淵九郎、陣羽織、鎧、附太刀、陣立の拵へにて出來り、花道にて留り、

岩淵　今日岡崎八幡にて、徳川譜代の者共が武運を祈りの其爲に、妻や兄弟打寄つて神樂を奏すと申す事ぢやが、もしや伏屋が娘なる柵も居りはせぬかと、わざ／＼是れへ參りしが、向うに居るは親子の者、こりや幸先がよろしいわえ。（ト思入あつて舞臺へ來り、）ヤヽ、そこに居るは、伏屋殿ではござらぬか。

伏屋　これは岩淵様、よう御參詣でござりました。

岩淵　誠によい所でお目に掛つた。

伏屋　先づ／＼、これへお掛けなされませ。

岩淵　眞平、御免下されい。（ト柵を尻目にかけ乍ら床几にかけ、）疾よりお目に掛り度く存じ居つた其所へ計らず是にて面會いたし、我に於ても重疊でござる。

柵　母様、早うお百度をなされませ。遲うなるとならぬわいなア。

岩淵　イヤ／＼百度が遲う相成れば、身共が助けても遣はさう程に、ゆつくりといたすがよい。ハテ柵

殿のあでやか〳〵。

栅　えゝもう、存じませぬわいなア。（トつんとする、伏屋心遣ひのこなし。）

伏屋　これはしたり、どうしたものぢや、まだ御挨拶も致さいで、何といふ事ぢやぞいの。

岩淵　いや、其の心配無用に召され、まだ年端も行かぬ者、決してかまひはいたさぬて。

伏屋　どうぞお許し下さりませ。

岩淵　扨伏屋殿にそれがしが、御願ひの筋がござるが、何卒今日御返事を、願ひ度う存じまする。

伏屋　なに、返事をせいとおつしやりまするわ。（ト合方になり、）

岩淵　餘の儀でもござらぬが、此間より申入れたる、栅殿を身共が妻に申受けたく、左すれば當時今川家で、上見ぬ鷲の威勢ある、お覺え目出度きそれがしなれば、御身達親子ばかりでなく、乳を上げたる元康殿の第一仕合せと申す者、其譯は元康殿は、我主人義元殿の助けにて今舊領岡崎の城主たり、其恩のある今川家を寢かさうと起さうと自由にいたすは我のみなり、爰に於て伏屋殿が娘を見事に下さらば、主人によしなに取成しいたし、遠三二ケ國は德川の慥に領地に相成るやう取計らひのきつといたせば、何卒娘御栅殿を身共が妻に下さるまいか。

伏屋　此間より當社の神主左司馬樣より、再度のお話し、承つて早速に御返事申す筈なれど、いまだ娘

に表向き申さねば、今少しお待ちなされて下さりませ。

岩淵　いや〳〵今少しが待遠ゆゑ、今日こそはあつかましくとも、此場で直に申入れたい。何も別段改めずと三ッ鼎にて柵殿へ、只今ちよつとお話し下され、それともに又伏屋殿が、此の御縁談に不承知なら魚心あれば水とやら、縁につながる徳川殿も今川家にてかまはぬ時は、忽ち織田に亡ぼされんが、そこをこなたが思ふなら、たつた今御返事下され。

伏屋　サア、それは。

岩淵　それとも、御不承知でござるかな。

伏屋　サア、

岩淵　サア、

兩人　サア〳〵〳〵。

岩淵　善惡二つの此の縁談、伏屋殿。（ト柵のそばへ行き、）コレ柵殿、如何でござるな。

ト寄り添ふ、柵つんと脇を向く、伏屋ぢつとこなし、此の時上手より左司馬出で、

左司　これは〳〵岩淵樣、最前より後ろで樣子を窺ひをりたる所、御尤もなる仰せ、さり乍ら、木折りで行かぬが戀の道、只今直ぐに返事は出來ますまい、先づ拙者にお任せ下され。

岩淵　いや手前に賴んでから、何れ〳〵ともう一年、かゝる戰國の其中にて明日をも知れぬ武士の一命いつ迄待つて居らるゝものか。

左司　それは至極御尤も、我が料簡に引きくらべても、妻がなくては居られねば、どうか口入れいたし度く、左すれば御禮も、いやなに、御禮はどうでもよろしいが、早々御返事いたしますやう、取計らひの仕る內、今少々の其所を。

岩淵　いや、かう云ひ出した上からは、是非とも此の場で挨拶を。

左司　はてさて、これは困つたものぢや。

ト左司馬困る思入。上手より以前の逸平出て、

逸平　岩淵樣でござりまするか。

岩淵　さいふ汝は。

逸平　拙者は清洲の、

岩淵　あ、これ。

ト皆々へこなし、岩淵逸平に呑込ませる。逸平手箱の內より手紙を出し、岩淵受取り下手へ行き、氣を替へ、

こりや朋友より、頼まれて參つたのか。

逸平　ハイ、左樣にござりまする。

岩淵　それは大きに大儀であつた。

逸平　まだ其外にお言傳がござりまする。

岩淵　只今少々此所に、捨置かれぬ用事あれば、明日にいたしくれぬか。

逸平　いや〳〵、火急の御用にござりまする。

岩淵　それは困つたものぢや、折角只今、

逸平　えゝ。

岩淵　いや、只今聞かずばならぬ事なら、爰は往還別當方にて。（ト呑込ませる。）

逸平　承知いたしました。

岩淵　伏屋殿、火急の用事で參らねばならぬが、今の返答。

伏屋　篤と思案をいたしまして、申上げるでござりませう。

岩淵　もし御承知の返事なら。

伏屋　エヽ。

岩淵　流れも濁る、徳川の。

伏屋　承知いたしてござりまする。

岩淵　しからば、汝も、

逸平　お供いたすでござりまする。

ト岩淵逸平を連れ、柵を見い／＼こなしあつて、鳥居の内へはひる。左司馬見て、

左司　いやもう戀に事よせ退引させぬ兩天秤、さぞ御迷惑にござりませう。

伏屋　あなたもいろ／＼取持下されど、元より娘も心に染まず、又私とてもあのお方は心底いやでござりまする。

柵　今も今とて厭らしい、やれあでやかの美しいのと、側へよつて手を取つたり、ぞつとする程いやでござんす。

左司　男でさへも岩淵樣をあまり好む者はござりませぬから、女子の嫌ふは御尤も、それ故疾うより頼まれ居れど、今日の明日のと日を延ばし、釣つて置いたのでござりまする。斯樣な事は拂ひたまへ清めたまへ。（ト大拍子になり、左司馬鳥居の内へはひる。）

柵　ほんにまア、人の心も知らいで、岩淵樣と同じ樣に、いけすかない神主樣。

伏屋　これ柵、此間からそなたへも度々云うた此の縁談、わしも元より進まねど爰に一ッの難儀と云ふは、御恩を受けし我君様へ御難儀でも掛つては、恩を仇にて返すも同然、それでは親子が濟まぬゆゑ、爰の所を合點して行つてくりやつたら無事で濟まうと、わしは思ふがどうぢやぞいの。

柵　そりやもう母様の仰せなくとも、一部始終の入譯を、お聞き申すと此事を私がいやと云ふ時は、御主へ御難儀かゝるゆゑ、たとひ憂目を見ようとも、決していとひはいたしませぬが、私の心ももし母様、推量して下さんせいなア。

ト伏屋柵愁ひのこなしあつて、

伏屋　さアわしも進まぬ縁談を、親の口から勸めるのは本意でないとは思へども、御主の爲に一命を、捨てるが武士の本意ゆゑ、女子に勝る男になり、主人の爲に戰場で討死すると心を定め、どうぞ行つてくりやいなう。

柵　あい。

伏屋　得心をしてくりやるか。

柵　あい、心に染まぬ縁なれど、御主の爲に岩淵樣へ、私や參るでござりまする。

伏屋　ヲヽ、よう得心してくりやつたなう。

ト伏屋も泣く、合方きつぱりとなり、鳥居の内より以前の家中娘、お蝶、お清、お駒、お筆した〳〵として出て、

お蝶　様子はあれにて伺ひましたが、

お清　よう得心をなさんしたなア。

お駒　それこそ御主人へ大忠義。

お筆　なれどもお前の胸の内。

お蝶　ほんにお察し。

四人　申しますわいなア。

伏屋　眞身も及ばぬ其のお詞。

柵　浮世はつらうござんすなア。

お筆　して、あなた方は、

四人　これからお宮へ。

伏屋　ちよつと參詣いたしまして、それから戻るでござりまする。

柵　一足お先へ、お構ひなく。

お筆　御免なされて、
四人　下さりませ。
伏屋　是れを思へば世の中は、一つ叶へば又二つ、
柵　　若君様の御武運を、祈りし甲斐も情なや、
お蝶　敵にも増す岩淵の、
お駒　進まぬ瀬戸も忠孝の、
お清　二字に柵む深草や、
お筆　涙の雨の五月雨に、
柵　　晴れぬ心の、
皆々　思ひぢやなア。
お筆　左様なれば、
四人　御二人様、
伏屋　後程お目に、
皆々　掛りませう。

德　川　家　康

ト唄になり、皆々しな〳〵として、伏屋柵は上手へ、四人は花道へ別れてはひる。直に三味線入り宮神樂にて、鳥居の内より岩淵九郎出來り、

岩淵　今日主人義元公、大高城へ兵粮入れの評議に、多くの人々召し寄せられ、一決なして元康を人選されしと聞きし故、其の由清洲へ密告せしに、今又來る一通は、大高兵粮入れの街道を、竊に知らせと頼みの文面、元康の心底聞糺した上と、是れへ返書を持參せしが、早くきやつに逢ひたいものぢや。

ト爰へ以前の逸平出で、

逸平　岩淵樣。

岩淵　エヽびつくりした。

逸平　して、先刻の御返書は。

岩淵　これに認め、持參なしたり。（ト懷中より狀を出し、渡す。）

逸平　はッ、慥に御受取り申しました、然らばこれにてお別れ申す。（ト下手へ行きかけるを、）

岩淵　こりや〳〵。（ト邊りへ思入。）

逸平　はッ。

岩淵　まだ口達もあれば陣所へ參り、目立たぬ樣に控へて居れ。

逸平　心得ました。（ト大拍子にて、逸平下手へはひる。岩淵後を見送り、）

岩淵　是れにて身共の算用も。

トうなづき上手神木の蔭へかくれる。合方になり、鳥居の內より伏屋柵出來り、

伏屋　思ひの外手間取つた、日の暮れぬ內、少しも早く。

柵　さア、參りませうわいなア。（ト行きかける。）

岩淵　まづ、お待ちなされ。

伏屋　さういふお聲は、

柵　岩淵樣にござりまするか。（ト柵惡い所へといふこなし、岩淵前へ出て、）

岩淵　只今拙者も戻りがけ、して先刻の御返事は。

伏屋　さア、其の御返事は。

岩淵　御不承知とござるなら、元康殿が仰せ付かりし、大高兵粮入れの御役目を、外役人に振替えまするが、それもこなたの御返事次第。（ト兩人是非なく、）

伏屋　いえ、娘は承知いたしました。

柵　岩淵樣、お目かけられて下さりませ。

岩淵　なに、すりや御承知とな。

柵　はァ、。（ト忍び泣きに泣く。）

岩淵　いや、是は夢ではなかつたか。あゝ有難い〳〵。然らば直に同道なさんで

ト岩淵柵の手を取る、伏屋割つて入り、

伏屋　あなたもまァお氣の早い、吉日を選み結納を取交しました其の上で。

岩淵　いや昔堅氣な伏屋殿、斯く戰國の其中に、何吉日に及ばうや、直樣手前と同道して。

伏屋　それはさうでもござりませうが、娘が晴れの身祝ひゆゑ、まァお待ち下さりませ。

岩淵　あゝ此の美しい柵殿が御得心なされしを、今が今行かぬとは、寶の山へ入り乍ら、手を空しくして戾るのか。

伏屋　どうぞ暫く、お待ち下さりませ。

岩淵　ム、、然らば是より同道なさん。

伏屋　いえ、それも一足お後より。

岩淵　いや、よく〳〵婦人に好かれぬわえ。

伏屋　左様なれば、岩淵様。

岩淵　あゝ輿入れが待たるゝわえ。

ト唄になり、岩淵　柵を見返り乍ら、思入あつて花道へはひる。兩人はほッと思入。本釣鐘になり、

伏屋　チヽ、とかう云ふ內、もう入相。

柵　少しも早く參りませう。（ト立上り、下手へ行かうとして、以前の手紙を見付け、）

伏屋　何やら手紙が。（ト柵　取上げ上書を見て、）

柵　「岩淵殿、清洲より、」正しくこれは敵方の。

伏屋　ムヽ、こりやよいものが、（ト兩人互ひに顏見合せるを、道具替りの知せ、）手に入りました。

ト兩人思入、大拍子にて此の道具廻る。

（元康兵粮入れの場）――本舞臺三間の間中足の二重、白洲階子、向う打抜き遠見の砦、內石垣、柵矢來など見える、いつもの所陣門、幕張り、此外石垣、柵矢來、上下同斷、日覆より松の釣枝よろしく、時の太鼓にて道具納まる。と元康の家臣一、二、三、四、鎧附太刀小袴にて床几に腰をかけ控へ居る。

一　扨十郎左衛門殿を始め、各方には如何めさるゝか、我君今朝地鯉鮒なる、今川氏の本陣へ、御出張に相成りし、其の集合は何事なるか。

二　定めし軍議の評議ならんが、君御發明とは申し乍ら、いまだ御若年にましませば、如何あらんと御同然に、御案じ申上げらるゝが。

三　然し夜に入り餘程の間、最早御歸陣あるでござらう。

四　お歸りの上御樣子を、承らぬそれ迄は、誠に以て、

四人　心配でござる。（ト此時向うにて、）

呼び　御歸り。（ト呼ぶ。）

一　噂をすれば影とやら、

二　お出迎ひの、

四人　致すでござらう。

ト誂へ二挺入りの合方になり、花道より德川藏人元康、鎧、附太刀、後よりやはり鎧、附太刀の武者○八の二人付添ひ出で、

元康　今日今川義元殿の、陣所に於て諸將の軍議一決なして歸城せしが、幸ひ今宵は滿月に、照り行く

月もほがらかに心に掛る雲もなく空すみ渡る我思ひ、軍中乍ら風雅なる、月の詠めに思はずも、
歸城遲刻いたしたわえ。

○ 御出掛けは地鯉鮒迄、早馬にて御越しゆゑ、またゝく内に參りましたが、

△ 三里にある道程ゆゑ、戻りは大きに更けてござりまする。

元康 先へ參つて申し入れい。

○ はッ。(ト駈けぬけて、)御歸城。(ト案内する。)

ト舞臺の四人はツと返事をし乍ら、二重へ敷革、太刀掛など並べ、平舞臺へ下りて出迎ふ、元康家臣の二人附添ひ、元康は二重敷革の上へ住ふ、家臣四人は下に居て、

一 我君には滯りなく、

二 御歸城の遊ばされ、

三 恐悅申し、

四人 上げ奉りまする。

元康 ヲヽ、我に於ても滿足せり。

一 して今日地鯉鮒なる、義元公の御本陣へ、

二　軍議に付いて御出張ありし、
三　其趣きは如何なる事にや、
四　恐れ乍ら我々へ、
一　仰せ聞けられ、
皆々　下さりませ。
元康　何れも、悦びくりやれ、義元公より直の御下知、尾州大高城の兵粮入れを、我れへ仰せ付かつたぞ。
一　すりや、大高の兵粮入れを、
二　我君仰せ、
四人　付かりしとな。
元康　ヲヽ、上もなき事なるぞ。
三　すりや、いよ〳〵兵粮入れを。（ト互ひに顔見合せ、）
一　恐れ乍ら我君には、如何なる御思案あつてか知らねど、
二　尾州大高城の邊りは、皆悉く織田方にて、

三　取巻き居るゆゑ一方たりとも、蟻の這ひ出る所もなく、

四　城中一統用意なせし、糧にとぼしく相成りて、

一　今日は味方の助けあるか、明日は敵地となる事やと、

二　城中評議一決なし、最早落城近きにあり、

三　其の敵軍の取圍む、大高城へ如何にして、

四　翼があらば知らぬ事、兵粮入れとは思ひもよらず、

一　何ゆゑ君には御存じあるに、

二　御辭退の、

四人　なされませぬぞ。

元康　其方達が小量なる心にくらべ考へなば、左樣思ふは尤もなれど、よしんば敵充滿なすとも、磐石をも貫くが、武士たる者の本意ぢやぞ。

一　そこが則ち血氣の勇、君御壯年の御事ゆゑ、恐れ乍ら後先の、お辨へなき事ならん。

二　今岡崎の城主たる、徳川公と仰がれたまふ、大事の御身を輕々しく、

三　死に極りし敵地の中へ、兵粮送るは思ひもよらず、

四　一旦仰せ付かりしとも、御身の上にはかへられず、
一　一まづお止まり、
四人　下さりませう。
元康　今更何ゆゑ辭退のならうや、今日義元公の御前には、御家臣方はいふも更なり、あまた並居る諸侯の中で、我一人選み出され、何卒頼むと有難き仰せありしは身の面目、よし一命を失ふとも、何の惜しむに足らざらん、必ず心配いたすに及ばぬ、安心のいたしくりやれ。
一　すりや、再應願ひましても、
二　お止まりは、
四人　下さりませぬか。
元康　何の辭退いたされうや、是が一世の譽れぢやわえ。
四人　はて、是非に及ばぬ。
トぢつとこなし、下手より岩淵出で、
岩淵　流石は德川元康公、あれにて今の詞を聞き、實に感心のいたしてござる。
元康　こは岩淵氏には、よくこそ御入來、まづ〳〵。

岩淵　然らば、御免下されい。（ト二重へ上り、元康のそばへ住ふ。）
元康　只今そこ許主人たる、義元公の御前より、退散いたした所でござつた。
岩淵　今日評定所に於て、大高兵粮入れの一儀をば、元康殿を人選されしと、使者より委細承りしが、彼處へ兵粮を遣す者は、誰一人としてなかりしを、御若年たる其許が、此の儀お引受け下さるとは、家臣の者に至る迄、籠城いたせし軍勢の、心を察して有難く、共々御禮申上げ奉りまする。
元康　未だ仕果するか、又仕損ずるかは存ぜぬが、爰で日頃の御恩を報ずる、則ち時節と存ずるゆゑ、一層盡力いたす心でござる。
岩淵　いやあつぱれ〳〵、して大高城へ米穀を運送いたす手配りは、如何召さるゝお積りか、我々に於ても後學の爲め、仰せ聞けられ下されい。
元康　元より思慮なきそれがしゆゑ、どういたすと云ふ目途もござらぬ。
岩淵　いや〳〵、それは近頃卑下致されるといふもの、何卒是れにて手配りを、お聞かせなされて下されい。
元康　左樣ござらばおこがましけれど、所存の程を此所にて、お物語りの仕らん。

ト肥前ぶしもやうの合方になり、

抑此度の合戰は、味方は破竹の勢ひある義元公の大軍にて、尾州沓掛の城を乘取り、それより續いてひた押しに大高城を攻落し、爰に御家臣鵜殿長助孝景殿を入城させ、それより中島丸根の方へ、勝に乘じて追ひ行きしが、此の大高の城と申すは元來兵粮の貯へ乏しく、織田にてもそれを知り居るゆゑ、後詰の兵の隔つを窺ひ、佐久間大學を始めとして、英勇の士が十重二十重、遠巻きなして城中を兵粮攻めになす所存、落城も早昨今に相成りしが兵粮入れの命令下り、まづ運送の道順たるや、池鯉鮒御本陣を出てより東海道をひた押しに、敵充滿いたすとも戰ひ〳〵血路を切抜け河野落合有松より、鳴海善庵中の鄕、是れより一時に大高へ、兵粮入れをなさんず所存、なれども淺智のそれがしなれば、元より一命を天に捧げ、若し大高へ着せぬ前妨げあらん其時は、たゞ討死と決定のいたしてござれば、これがお別れになるやも知れず、首尾よく參らば再會のいたすでござる。

トよろしく物語る。岩淵につたり思入あつて、

岩淵　いや流石は智謀軍略に長けたる御身の計らひ、然らばいよ〳〵東海道を、鳴海へとつてお出であるとな。

元康　いかにも、順路を馳せ参じ、兵糧入れをいたす所存。
岩淵　いよ／＼東海道と御決定とな。
元康　いかにも決して居りまする。（卜につたり思入。）
岩淵　然らば此の由織田方へ。
六人　エヽ。
岩淵　いやなに、織田方へ此事洩れざる樣、各々方にも心を付けられい。
一　お物語りの承はり御尤もとは存ずれど、名に負ふ織田の陣地へ向ひ兵糧の通路を通さう筈がなく。
二　薪木を負うて火中に入り、命を落すも同然なり。
三　其の御手配りにて御出馬あるは、危ふき樣に存じられます。
四　今一應御勘考、
六人　然るべきかと存じまする。（卜案じるこなし。）
元康　我を思ひて再度迄、家臣がいさめは忝けれど、かゝる役目を蒙りしは、此身に取つて一世の譽れ、何しにお受を變ずべきや。

岩淵　さすがは貴殿の御手配り、如何あらんと我君にも、御心配あそばして、其方參つて見屆け參れと内命受けし此の岩淵。
元康　何分ともに賴み存ずる。
岩淵　委細承知仕つてござる。
元康　然らば岩淵友則殿、
岩淵　戰場に於て面會いたさう。
ト岩淵平舞臺へ下りて、陣門の外へ出る、下手より逸平出て、
逸平　岩淵樣。
岩淵　あこれ。
ト押へ門の內へ思入、岩淵囁く。逸平うなづき下手へ忍ぶ。
一　再應お止め申しましても、最早お用ひあらぬ上は、善惡ともに其主の、御意に從ふまでの事、
二　我々どもゝ一命捨て、是より直樣東海道より、大高へ參ると決心仕つれば、
三　直樣甲冑の用意なさん。
四人　我君御免。（ト立ちかける。）

元康　あいや暫く／＼、たとひ一命捨つるにせよ、急いては事の破れとならん。

一　それぢやと申して猶豫あつては、却つて敵の計策に落ち、

四人　我々共の不爲と存ずる。

元康　いや、其の計策の行届くは、却て我の幸ひゆゑ、必ずともに早まるな。

　　トばた／＼になり、花道より○△の軍卒二人、鎧下、太刀草鞋にて走り出で、

軍卒二人　只今戻りましてござります

元康　ヲヽ大儀であつた、して往還の樣子はいかに。

○　大高城の間道を、兩人にて竊に參り、篤と諸所を窺ひしに、織田の圍みは更になく、

△　事の外平穩に、

二人　ござりまする。（ト元康悅ばしきこなし。）

元康　それにて我の圖に當れり、然らば是より用意なさん。（ト皆々不審の思入にて。）

一　扨は只今、

四人　仰せありしは。

元康　岩淵九郎を欺く計策。

六人　とは又何ゆゑ。

元康　いかにも、彼れは表向き今川方の家臣なれども、裏は織田家へ内通なし、百事心を寄する事、篤と承知いたせども、是と申す證據なければ是れ迄口外いたさゞりしが、此度こそは慥なる、證據手に入る上からは正に其の圖に當つたり。

一　して又證據と、

六人　仰せあるは。（ト元康密書を出し、）

元康　則ち密書を披き見やれ。

一　ハヽ。（ト是より以前の一通を、燈臺の許にて讀む事あつて、）扨は我君兵粮入れの、道順知れなば注進せよと、

二　織田より頼みの、

六人　此の文面。

元康　それゆゑ先刻岩淵に、東海道と申せしは、我が裏を行く一つの計策。

三　始めて知りし智略の程、左すれば敵に本海道の、手配りあるが味方の仕合せ。

四　して又運送人數の駈引、

〇　恐れ乍ら我々共へ、
皆々　仰せ聞けられ下さるべし。
元康　其手配りは悉く、人歩割に認め置いたり、これにて開き會得をしやれ。
ト懐中より人歩割を書きし畫圖面を出す、皆々開き見て、是より派手なる大小入りの合方になり、元康軍扇にて、一々指圖する。皆々思入あつて、
元康　まづ池鯉鮒の本陣より、河野へ出て左りへ切れ、本海道を右に見なして、
一　桶狹間より追分を、横切れなして間道の、大府峠を打越え／＼、
二　込高口へ馳せ付けなば、道も僅かの大高城。
元康　織田は先刻岩淵が内通なせしを誠と思ひ、兵粮奪はん手配りにて、敵も過半は本海道へ廻すは鏡に照らすが如し。
三　して、小荷駄の兵粮割、
〇　人歩の駈引兵士の割、
△　いかなる策か愚眼ゆゑ、
一　詳しく御示し、

皆々　下されたし。

元康　まづ兵卒を三手に分ち、一備を五十人と見做し、眞只中へ小荷駄を立たせ、此間半町を隔て、遊軍五十騎を備へ、後陣は眞先の備と同じく、兵士を三段に備へて取圍み、半町毎に遊軍を備ふ以下是に順ずるなり。

一　して又道に敵あつて、もし横合より切つて出でなば。

元康　眞先なる五十騎にて防ぎ、其の五十騎の出し後へ、後ろ備の五十騎を備ふ。

二　もし左に敵ありて、小荷駄を目がけ切込みなば、

元康　同じく左の五十騎にて、其の敵勢を防ぎ、此の五十騎の出し後は、左り後の備にて變に應ず。

三　其仰せ御尤もなれど、敵左右より一時に出でなば。

元康　矢張左右の五十騎にて、防戰いたす其内に、此の戰に構はずして、中に備へし遊軍は、小荷駄に付いて先へ進む。

四　然らば敵大軍にして、小荷駄に附添ふ遊軍に、突いて掛る其の時は、

元康　左に出でなば右の遊軍、心を合せて小荷駄を守る。

○　して又小荷駄の俵の數は。

元康　三俵附けにて三百疋、

△　此數實に九百俵、

一　いや、あつぱれ希代の此の備。

二　一々會得。

皆々　仕つてござる。

元康　たゞ此上は圖に印せし、其の持口をめい／＼には、我々どもと心を合せ、盡力必ず頼むぞよ

一　仰せ迄も候はず、いまだ御壯年にましませば、如何なる事と案じたりしも、

二　此畫圖面を拜見いたし、驚き入つたる御胸中。

三　臣等一同出陣なさば、

四　盡力いたすで、

皆々　ござりまする。（ト此時早き合方にて、以前の岩淵窺ひ出で、）

岩淵　ちえゝ、殘念や口惜しや、かゝる企みのあるとは知らず、最早織田へ内通せしゆゑ、大丈夫と思ひの外、首尾よく兵粮入れられては、仕組みし手筈も水の泡、もう此上は腹いせに。

ト太刀を拔き元康へ切つて掛る、元康立廻つてきつと押へる、此の時竹法螺ばた／＼になり、花道よ

り、人足廻し走り出來り、

人足廻し　ハッ、先刻仰付けられましたる、小荷駄へ四斗入り三俵づゝ、三百駄付けさせまして、御城内にて御沙汰のあるを、今や遲しと相待ち居ります。

一　いや、勇ましき其の知らせ。

一　これより兵士のめい／＼へ。

人足廻し　もし／＼、其お知らせには及びませぬ。

四　なに其知らせに及ばぬとは。

人足廻し　さア馬へ俵を積み切りますと、かねて合圖がござりましたか、御城中の兵士方、殘らずお支度調ひまして、小荷駄の傍へ御出張に相成りました。

一　ムヽそれにて、安堵、

皆々　いたしてござる。（トこれにて岩淵無念のこなしにて、）

岩淵　やア、返す／＼も殘念なは、兵粮入れにて德川を自滅させた其後で、岡崎城を我物になさんと思ふ企ても、色に迷つたばつかりに大事の密書を落した不覺、手盛りを食つたか、エヽいま／＼しい。

元康　これを汝に聞かせんと、最前より待ち受けた。サア斯うなる上は此所にて、悪事を残らず白状いたせ。

一　其上にていさぎよく、切腹なして相果てるか。

二　白状いたすか。

元康　サア、

皆々　サア〳〵〳〵。

元康　岩淵返事は、如何なるぞ。

岩淵　もう是れ迄。（ト刀を腹へつき立てる。）

三　ヲヽ、見事の切腹、

四　流石は武士、

岩淵　ちつとも早く、介錯いたせ。

元康　ハテ、心地よき、（ト床几を放れるを木の頭。）幸先ぢやなア。

トどんちやん、カケリにて、よろしく

幕

二幕目

岡崎在産見村の場
權右衛門茅屋の場

〔役名〕―德川家康、進藤傳次郎、永田彌八郎、百姓權右衛門、修驗者怪典、庄屋茂次兵衛、大久保新十郎、深谷藤藏、百姓、近習、鷹匠、供廻り。權右衛門女房お米、同娘お萬、村女房お畑等。〕

(岡崎在産見村の場)　本舞臺三間の間野邊の遠見、下寄りに松の大樹、ひくき草土手、松の前に小さき祠、是へ繪馬三つ四つ釣しあり、下手に高札場、東德川領西織田領といふ榜示杭、上下松の植込みにて見切り、掛稻など澤山にある、日覆より松の釣枝、岡崎在産見村の體宜しく。爰にむしろを敷き、一、二、三の百姓辨當の世話をして居る。下手に修驗者怪典住ひ、在郷唄にて幕明く。

一　サア、もう晝は廻つたであらう、辨當をつかはつしやれ。

お畑　茶は爰へ持つて來てありますぞや。それ、茶碗も雜かごに入れてあります。

二　今日は何かうまい物がはひつて居るかの。

三　みんな一緒に始めませう。(ト百姓はめい〳〵辨當を開き、遣ふこと。)

一　もし〳〵、お前は法印さんぢやが、諸勸化は此村へ入る事を禁じましたが、御支配の本多樣に見

付かつたら叱られますぞや。

怪典　いや、わしは修驗者でも物貰ひとは違ひます。世界の人に禮物もとらず、如何なる難病でも治して進ぜます。此の村内にあらば敎へさつしやれ、まぢなつてやりませう。

一　いや、施しに見て下さるなら、わしは耳が遠いが、どうぞ治して下されぬか。

怪典　いや、それはこなたの年の加減ゆゑ、生れ替れば直ります。

二　わしは生れだちから、顏の色が黒いが治りませぬか。

怪典　それは易いこと、度々湯へいらしやつて、日の目を見ずに居さつしやれば、自然と治ります。

三　わしは片目惡うござりますが、治りませぬか。

怪典　斯う見受けた所が、こなたの目は俗にいふ目ッかち、それは生れだちで直らぬが、年の行かぬ時分からなれば胎毒、又成人してからなれば瘡でござるから治りませぬわえ。まだしも兩眼でなくて仕合せぢや。

三　あたりめえさ、兩眼なけりやあめくらだよ。

お畑　アもし〳〵私ではござらぬが、此村に貧の病で難澁して居る者がありますが、それは治りませぬか。

怪典　それは定めし日々の暮しを天窓に病み、胸先がつかえて日々米かみを病み、黄金水の廻りが悪いのであらう。拙僧が家傳の藥法は、黄金湯を萬金丹に合して用ふれば、必ず全快仕ります。

お畑　それはお前さんあたりまへぢやが、皆の衆聞かつしやれたか。

四人　ヲヽ、さうぢや〳〵、おなかの中まで見通した法印様ぢや。

怪典　それらの事は何でもないことぢや、さうして其お人は年寄でござるか、若い御方でござるかの。

お畑　父御は先頃の戰爭で討死さつしやれ、今は病身の母御と二人で、御領主様に仕へてござるが、ほんに〳〵貧乏人孝行なお方でござんす。（ト辨當を遣ひ乍ら向うを見て、）

二　あれ〳〵見さつしやれ。噂をすれば影とやら。

三　成程向うからござるわ。

三人　おゝいゝ〳〵。

ト在郷唄になり、上手より進藤傳次郎納戸の着附、鹿の角紋散しの羽織、大小にて出來り、

傳次　これは〳〵各々方には、お早い事でござりました、早く參らうと存じ居るが、手前の他行中は母が困りますゆゑ、差支へぬ様にと手廻りの用をたしますゆゑ、それで遲うなりました。

三人　それは孝行な事でござるわえ。

お畑　これ傳次郎樣え、お前のふだん云はつしやる金病をば、あの法印樣が治して上げると云はしやつたぞ。

怪典　扨はこれなるお人が、今お話のあつた、貧の病のお人かな。

お畑　はい、左樣でござります、どうぞ治して上げて下され、容態を言はつしやれ。

傳次　はい、父御には先頃死別れ、其後は小祿にござれども、母と私で送りますゆゑ、此程父の三週忌に當りましても、ほんの心ばかりの追福もいたし兼ね、困りきつて居りまする。お話し申すも面目なうござりまする。

怪典　それは決して案じさつしやるな。手前が家傳の黃金湯へ、黃金丹を合せまして、持藥に用ふる其時は、貧を去つて福を得る、其身の仕合と相成りまするて。

傳次　然らば其の藥を、頂戴いたしたうござりまする。

怪典　それは心易いことでござるが、愚僧の家傳にござりますれば、眞言祕密の事にして、他人に洩らせば忽ち罰を蒙りまするゆゑ、どこぞ小蔭へ參りまして、お指圖いたすでござります。

ト百姓皆々是を聞き、

お畑　これ、さつきから餘程食休みをいたしましたが、もう一切りやりませうか。

三　それ〳〵、丁度其内進藤さんは、まじなひをして貰はつしやれ。
傳次　仰せに任せ、左樣いたすでござりまする。
お畑　これ進藤さんえ、まじなひをなされたら、いつぞやから頼んで置いた私の返事を。（ト袖を引く。）
一　やア、こりや婆ア猫がさかりが付いた。
二　いくら付いても、ちん猫婆アだ。
三　むだ事はよしにさつせえ。
お畑　何だ私の事を猫だとえ、そんな事をいふと磨すました此の爪で、お前方をばらがきにするぞえ。
三人　やア、ばらがきにされてたまるものか
お畑　さア待つておいで、ひつかいて上げるから。
ト猫ぢや〳〵の唄になり、三人を追廻し、トヾ三人上手へ逃げてはひろ。怪典後を見て、
怪典　いや、ひやうきんなお人でござるわえ。
傳次　草臥れて手間のかけぬやうにさつしやるがよい。左樣ならば、どうか靜な所へ參り、お呪ひを願ひたう存じまする。
怪典　もう行くにも及ばぬ、聞手もござらぬ。御身樣の其金の病ひは、今いふ黃金湯でなくては治るま

い、何と機密をば授けさつしやれ。

傳次　なに、機密をさづけろとは。(トさんげ〳〵の合方になり。)

怪典　ハテ、尾州の織田殿が甲州の武田方へ、味方の機密を告げさつしやれば、敵方より褒美の金は望みに任せ、事によれば其身も出世、左すれば、此國で小祿を大事さうに貰ふより、大國の名將に用ひらるゝ方がよいではないか。左すれば母御へも又孝行、多年の貧病も治るといふもの。

ト傳次郎はむつとして、

傳次　其詞忝なうござれども、不義の富貴は望みにござらぬ。主人の祿を汚し乍ら其主恩も打ち忘れ味方の大事を敵方へ洩らす樣なことは仕らぬ。察する所汝こそ士民を惑はす僞法印、武田方の間者の者だな。

怪典　あゝこれ〳〵、間者などゝめつたな事を言はつしやるな、そんな者ぢやあねえ、ほんの一時のたはむれに申したのだ。氣に障らば勘辨して下され。

傳次　ムヽ、たはむれとあらば許してくれる。重ねて左樣な事なき樣、氣を付けさつしやい、憎い奴めが。

ト身がまへする。

怪典　ようござる／＼、許さつしやい／＼。座興に申した事氣にかけて下さるな。諸國を廻る修驗の身ゆゑ、此國へ參らぬとて、別段差支へもござりませぬ。

傳次　ムヽ、然らばとつとゝ立去らつしやい。

怪典　エヽ今參りまする。（ト立上り笠を持ち、）こんな馬鹿には。

傳次　何と申す。

怪典　なに、こんな場所へは、立寄りませぬ。（トさんげ／＼になり、睨み付けて下手へ行く。）

傳次　油斷のならぬ敵の間者、重ねて立入らぬやう、嚴しく申してやつたれば立入る事もあるまいが、小祿とは云ひ乍ら賣僧に等しき僞法印に、侮どらるゝとはいま／＼しい、よしなき事にひまをいたした、どりや農業にかゝらうか。

ト在かしみの合方になり、上手よりお畑出來る。此の內傳次郎は百姓なり、襦袢絆纏になり、お畑は傳次郎を見て、

お畑　ヲヽ進藤さん、よく爰に居て下さんしたなァ。

傳次　ヲヽお畑どの、此間から逢ひませなんだな。

お畑　これいなァ、此間からお前に賴んだ事、今日は色よい返事をして下さんせいなァ。

傳次　これ、又しても〳〵、年に恥ぢずそんな事を言はつしやる、世間の手前も見つともない。そんなみだらな事を云はつしやると許しませぬぞ。（トお畑びつくりして、）

お畑　ヲヽ怖やの、さう血相かえて云はしやんすと、私や血の道が起るわいなァ、さうして今許さぬと云うたが、定めし切る氣でござんせう。あれあの、高札にも記してある、人を殺す者は其身も殺すなりと、可愛いお前も死ねば、私も死なねばなりませぬぞえ。

傳次　エヽこなたが世迷言、丸で猪が遠ぼえをする様だ、あの爰な猫また婆アめ。（トきつと云ふ。）

お畑　おや、何だ猫だとえ。あい、私や猫でござんす。それゆゑ爪がきゝますぞえ。

傳次　えゝも、最前よりみだら千萬、尻尾を巻いて歸らつしやい。

お畑　もう〳〵、私の望みが叶はねば、それ。

ト邊りにある傳次郎の刀を取り、自殺しようとする。傳次郎これを止めて。

傳次　これ、あぶない〳〵。

お畑　いえ〳〵私が望み叶はねば、死んでお前に取り付くぞえ。

傳次　そんな無理な事を。

お畑　聞いて下さんすか。

兩人　サア〳〵。
傳次　いや、常談さつしやるな。
　　ト傳次郎刃物を無理に取りのけろ。これをやらじと爭ふ内に、百姓權右衞門出て其中へはひり留め、百姓大ぜいも出て留める、お畑間違へて權右衞門に抱き付く、
權右　何をさつしやるのだ。
お畑　ぶちだ。
權右　なに、ぶち、
お畑　白ぶちと間違へました。
　　トこれにてお畑逸散に下手へ逃げてはひろ。
權右　あの助平婆アめにも困つたものだ。ヲ、こなたは傳次郎樣、お畑婆アに何か云はれてござつたな。
傳次　誠に狂人同樣、困つて居りました。
權右　助平婆アめ。
傳次　權右衞門殿には、何れへござるな。
權右　今日は思ひの外用が片附きまして、まだ八ッでもありませうか、早いのにつくねんと、休んで居

るのもむだゆゑ、畑仕事に出ませう。

傳次　左樣でござりまするか。

權右　もし、よい折ぢや、いつぞやお賴みなされた畑仕事、爰でお敎へ申しませうか。

傳次　それは幸ひ、然らば御敎示受けるといたしまする。

權右　さう堅くおつしやつては、脇の下から汗が出ますわえ。

傳次　ハヽヽヽ。

權右　丁度あそこで、（ト二重の上へ出て、兩人鍬を持ち、）總て鍬は斯う持ち、力を入れずに持たねばいけませぬ、かうやるとこんなに窪みが出來ます、所でかう、そく〳〵。（ト鍬にて掘返し、）これをすくひ取りと申しまして、土が鍬の刃に溜れば、足でかうやつて拂ひ落しまする。

ト いろ〳〵して見せる。傳次郎眞似をする。

傳次　かうやりまするかな。

ト此内鍬の刃を打込み取れぬゆゑ、無理に取るとはれ返り、土權右衞門の目へはひる。權右衞門もぢもぢして、

權右　お前さんが鍬へ力を入れ、お遣ひなされますから、私の目へ土がはひりまするわえ。

傳次　これは粗相をいたしました。（ト介抱する事よろしく、權右衞門目をすり乍ら、）

權右　年をとりましては、からだが役に立ちませぬ、目と口ばかりでござります。其の目を惡くしてしまへば、達者な物は口ばかり、只さへ憎まれる所へ、年取つてはとんと意氣地がござりませぬ。

傳次　こなたはさう云はつしやるが、世間の老人と違ひ、氣力の達者なことは村中で評判でござるて。

權右　なに、それ程でもござりませぬ。

兩人　ハヽヽヽ。

ト これを田植唄になり、永田彌八郎、野袴絆纏大小一文字笠にて切草鞋、花道より本舞臺へかまはず出で、

彌八　おのれは進藤傳次郎殿、殿より祿を頂戴いたし乍ら、土民へ交り百姓業、主人の顏へ泥を塗る、不屆至極の此の有樣。

傳次　南無三。

ト 傳次郎むしろの大小着物を抱へ、上手の藪の内へ忍ぶ、彌八郎追行くを權右衞門留めて、

權右　あゝもし〳〵、あのお方は親御へ孝行、決して御主人樣へ對し、左樣なお心はござりませぬ、お前樣も御朋輩の事、御勘辨なされませ。

彌八　いや〳〵、御主人の前へ引立てねば、

權右　ま、大目に見脫しておやりなされませ。

彌八　エヽ、放せ〳〵。

權右　まア〳〵、待たつしやりませ。

ト爭ひ居るはずみに、權右衞門深田へ落ちろ、以前の百姓三人出て、

一　エヽ、權右衞門を田の中へ、

二　農業して居る年寄を、

三　いかに御領主のお役人とて、

一　此まゝでは濟ましませぬぞ。

三人　何で田へおッぱめた。

彌八　やア、こいつが〳〵、上へ對して不都合をはたらき、打捨て置れぬ奴ゆゑ、取紮さんとなす所、かれこれ出しやばる權右衞門、今に是へお上がお通りに相成れば、土民共とて料簡ならぬぞ。

一　何ぼ御領主が御通りに成るとも、先觸もなく亂暴されては、

二　農業をする百姓は、迷惑をいたしまする。

三　理不盡に年寄を、田の中へ打込まれては、
三人　たまつたものではございませぬ。
彌八　やア、返すがへすも不法を申す土民めら、此上は手討にいたすぞ。
一　やア瓜や大根見たやうに、
二　たやすく切られて、
三　たまるものか。
皆々　叩きしめろ〳〵。
彌八　うぬ、手向ひいたさば、手討にいたす。（ト刀をぬく、百姓皆々おどろき）
皆々　やア、抜いたぞ〳〵。

ト鋤鍬を持ちさわぐ。下手より庄屋茂次兵衞出で、中へはひろ。

茂次　これ、みんな待たつしやい〳〵。（ト下手へよけて中へはひり）まア〳〵小まいの者の悪いのは、庄屋の悪いのと同じ事、不行屆の段は私がお詫いたしまする。
一　農業をして居る所へ、不時の御通行があるとて、
二　何ぼ御領主でも、お先觸もなく、

三　無法な事をなされましては、
一　小まいの者の立行が、
三人　附きませぬ。
茂次　これ〳〵、さういつては相成らぬ。どうか私に免じて、御許しを願ひまする。
三人　なに詫びる事があるものか、しめてやれ〳〵。（ト立廻り乍ら花道の方へ行き、向うを見て）ヤア、
御殿様だ〳〵。
彌八　なに、殿様だ。
トあわてゝ刀を納め控へる。小鼓の合方になり、花道より家康、割羽織、野袢纏、大小、わらんぢ、
菅の一文字笠を冠り、大久保新十郎始め同じ拵への家臣八人附添ひ鷹匠を連れて出で、供方の者革床
几を出し、是へかける事、皆々は下手へ控へる、茂次兵衛出で、
茂次　へい、お殿様へお訴への者でござりまする。當村庄屋茂次兵衛と申します、御領主様の御通行と
も存ぜず、小前の者が農業に取りまぎれ、不調法の段は幾重にも、御料簡下さりまするやう、偏
に願ひ奉りまする。
家康　今日は鷹野にて、此邊へ參る心得ではなかりしが、支配向きの申付がよいと見え、百姓どもの農

業に精を出し耕しくれると聞きしゆゑ、我も巡見をいたさんと不時に作場へ入り込みしが、さぞ迷惑のいたすであらう、許してくれよ皆の者。

茂次　こは恐入りましたお詞、お叱りもあるべきに、お褒めに預かり、有難き仕合せにござりまする。

一　御慈悲深い殿樣の、お詞に引かへて、

二　農業して居る年寄を、

三　無法に深田へ打込むとは。（ト家康聞き咎め、）

家康　何と申す、老人を深田へ打込みしとか。

三人　へイ〱、左樣にござりまする。

茂次　權右衛門も權右衛門だ、いつ迄田の中へはひつて居るのだ。これ權右衛門、爰へ來さつしやい。

ト二重へ上り田の緣へ來て見て、

やア大變だ、權右衛門が目を廻して居る、村の衆〱。

三人　そりやまア大變だ。（ト立寄るを、）

家康　それ、老人を手當いたせ。

家來皆々　ハツ。（ト五六人田の中へはひり、權右衛門をかつぎ出し、眞中へ來り、）

茂次　權右衛門やアいく〳〵。（ト侍六人介抱する。）
大久　老人、氣を慥に持て。ウム、（ト活を入れる、これにて權右衛門氣の付く事。）
茂二　權右衛門、心が付いたか。（ト權右衛門うつとりとして、）
權右　いや有難うござりまする。御蔭でしつかりいたしました。（トあたりを見廻し、）へ丶是は御役人樣、勿體なうござりまする、もう〳〵かまうて下さりまするな、恐入ります〳〵。
ト辭儀をする。
茂次　これ權右衛門、御殿樣が御家來に介抱さして下すつた、仕合せ者、よく御禮を申上げろ。
權右　へい〳〵我々風情を斯程迄に、御介抱下さるとは、罰が當ります、嬉し淚がこぼれまする。
家康　老人怪我はいたさぬか。それ、手當を遣はせ。
大久　ハツ。
家康　彌八郎、是へ出い。
彌八　ハツ。
家康　其方何故老人をば、深田の中へ打込みしぞ。
彌八　ハツお目立ちまして恐入りまするが、御通行を妨げましたるゆゑ、あの者に嚴しく申せしに、あ

やまつて深田の中へ。

家康　だまれ、通行の妨げいたすとも、農人は國の寶、汝が權を以て老人を深田へ打込むおのれが殺伐、殊更爰は作場道、混雜なすを權威を以て通るは沙汰の限り、以後はきつと愼しみ居らう。

彌八　恐入りましてござります。

大久　庄屋是へ參れ、殿より老人へお手當なるぞ。（ト紙へ一兩のせしを出す、茂次兵衞受取りて、）

茂次　これ權右衞門、殿樣よりお手當を下された、御禮を申上げるがよい。

權右　いや〳〵、御介抱受けてお手當迄受けましては濟みませぬ、どうか御辭退のなされて下され。

茂次　殿樣から折角下されるものを、御辭退申すは却て失禮、御受け申しておかつしやれ。

權右　庄屋樣、受けてもよいかの。

茂次　あゝよい〳〵。

權右　それではお詞に隨ひ、頂戴いたしておきまする。

一　權右衞門殿、こなたは〳〵冥加に叶うたお人ぢやなう。

二　御直に御介抱受けた上、御手當迄下さるとは、何たるもつけの幸ひだらう。

三　かういふ事ならおら達も、田の中へはまり込めばよかつた。

茂次　馬鹿な事を云はつしやるなよ。
家康　こりや老人、どこか痛みはいたさぬか。
權右　なに、お前樣、痛みも何も忘れて、嬉しくツてなりませぬ、早く歸つてお殿樣から頂戴したお金を、婆や娘に見せて悅ばせてやりたうござります。
一　さうであらう〳〵、こんな事があれば、村の記錄帳に載ります。
二　ずねえ手柄だ、何でも村では權右衛門殿が上席だんべえ。
家康　これ、老人をいたはつて、宿所へ同道いたしてやりやれ。
茂次　ハヽ、畏つてござりまする。これ權右衛門殿、御禮申して內へ行かうではござらぬか、
三人　わしらも一緒に送つて進ぜませう。
權右　左樣なれば、お殿樣、
茂三人　御暇いたすでござりまする。
ト在鄉唄になり、茂次兵衛百姓三人は、權右衛門の介抱を仕乍ら、會釋して上手へはひる。家康見送り、
家康　農夫どもはなか〳〵賴もしきものぢやなう。

大久　ハッ御意にござりまする。これ、何れも君の御仁心、よく見習ひおくがようござるぞ。

皆々　恐入りましてござりまする。

彌八　君の御仁心に引きかへて、其祿を汚し乍ら、殿の御顏へ泥をぬる、不忠な奴がござりまする。

家康　なに、予の顏に泥をぬる、不忠者とは何者なるぞ。

彌八　餘人にござらぬ、只今是へ引出し、御覽に入れん。

　ト上手藪疊の蔭へ行き、傳次郎を引出し、

　さア、うせろ。（ト前へつきはなす、皆々見て、）

皆々　やア、貴殿は進藤傳次郎殿。

傳次　ハヽ、君祿を汚し乍ら下賤に立入り、御名を汚しまして面目もなき不忠の段、眞平御免下さりませ。

家康　傳次郎、許しくれよ。

傳次　何とおつしやる。（ト合方になり、）

家康　かねて家康、そちに一人の母ある事存じ居るが、僅かの祿に養ひとてもさぞかしならん、予が小身にあらざれば、疾にも加增申付けしに、心に任せぬ事のみにて、打捨て置きしは予の誤り、必

ず土民と交りても、恥辱とばし思ふなよ、其方の苦心は老衰いたす母の爲と思ふがゆゑ、褒めこそいたせ決して咎めぬ、彼の堯の世の舜が母へ孝を盡さん爲め、世の嘲りを堪え忍び、大象諸鳥の助けを得て、田地を耕すためしもあり、家康思ふ仔細もあれば母の孝養忘るなよ。

傳次　ハツ、賤き姿で御目見得いたし、いかなるお咎めあらんかと心痛のいたし居りしが、御懇情の其のお詞、我身にとりていかばかりか、有難く存じ奉りまする。

彌八　何の事だ、お咎めあらんと思ひの外却て君の御許し、長居いたさば上への恐れ、早く此處を退散いたせ。

大久　なに樣進藤氏が爰にござつては、いやさ、彌八郎殿の云はるゝ通り、長居いたさず立歸れ。

傳次　ハツ、歸宅いたすでござりまする。

ト在鄉唄になり、傳次郎包みの中の大小をさし、元の侍になり前へ出て、

家康　母へ孝養忘るゝな。

左樣なれば、我君樣。

傳次　いづれも、おさらばでござりまする。

ト右の合方にて、愁ひの思入あつて、上手へはひろ。雨車になり、

大久　日和ぐせとは云ひ乍ら、俄に降出す此の野面、
臣一　雨具の用意もござらねば、
臣二　田家へ參つて宿りをなし、
臣三　萬端調へお迎ひに、
家康　ヲヽ、よきにいたせ。
皆々　ハツ。
　ト大小入りにて皆々付いて上手へはひる。後彌八郎殘り居る。以前の怪典窺ひ〳〵藪蔭より出て、
怪典　彌八郎樣。
彌八　あこれ。（ト押へる、さんげ〳〵の合方になり、）して怪典には、何ぞ機密を探り出したか。
怪典　敵地の穴をさぐらんと、故鄕を飛去り當地へ來て、御先狐は遣はねど、諸人の難儀を助ける爲、祈禱をすると愚人を化し、何ぞ獲物と思ふ折、出逢つた進藤傳次郞貧に迫るを幸ひと、こいつを寶珠の玉につかひ、武田方の幕下に仕ようと思ひの外先方にて、我が企みを見拔きしゆゑなかなか化す事ならず、擧句の果が所拂ひ、うか〳〵尾張に居ようより、一まづ古巢の甲州へ、立歸らうと思ひますが、何ぞ密事はござりませぬか。

彌八　別に密事もあらざるが、只今これへ來る道家康公へ仕官を望みし、小田二郎の臣和田八郎と云へる者、主の信長を見限り居ると相見ゆれば、汝は是より尾州へ立歸り、織田の城外を徘徊なし、此の一條を流言なし、彼の八郎を抱へ入れさせ、甲州武田方へ抱込みなば、勝頼公のお爲であらう、それを褒美に歸るがよい。

怪典　ハヽ、して八郎と申す者は、どつちの方へ行きました。

彌八　ヲヽ、池鯉鮒の驛へ出るとあるゆゑ、本海道を上るであらう。

怪典　然らば愚僧は、見えがくれ。

彌八　後より追付き、ぬからぬやう。

怪典　道を拾つて是れより直に。（トつか〳〵と花道へ行くを聲かけ）

彌八　こりや〳〵、首尾よく行けば、吉左右を、

怪典　きつとお知らせ申しまする。

彌八　ムヽ、早くゆけ。

怪典　ムヽ。

ト早く合方にて逸散に花道へはひる。彌八郎見送り居て、思入あつて上手へ行きかける。此時以前の

傳次郎、尻からげにて窺ひ出で、附廻して、

傳次　彌八郎、待て。

彌八　誰かと思へば傳次郎、何ゆゑ是へ參つたのだ。

傳次　先刻身共へよからぬ事を、勸め込みし賣僧の修驗、道にて見かけしそれゆゑに、後を付けて見えがくれ、身共が後ろで聞くとも知らず、武田方へ密事を送りし汝等二人、

彌八　や、それ知られたら。（ト出しぬけに切つて掛る、傳次郎其手を押へ、雨車、風の音になり、）

傳次　先刻より催せし、降り出す雨の五月雨に、さぞ我君にもお困りならん。

彌八　左云ふおのれのからだへも、いで、血の雨をふらしてくれん。

傳次　何を。

ト雨車、早き合方、互ひに抜き合せ立廻りあつて、よき見得にて、此の道具廻る。

（權右衞門茅屋の場）――本舞臺藁ぶきの二重、後ろ眞中三尺の暖簾口、上手一間障子屋體、續いて上下の戸棚、下手鼠壁、いつもの所門口、下手一間ふきおろしの竹窓、繩のれんをかけ、臺所口、此下野面の遠見を奥深に見せ、舞臺上手に圍爐裡、鑵子をかけ、薪木などあり、門口にお米、洗濯をして

居る、以前の茂次兵衛立掛り居る、總て權右衞門内の體よろしく、在郷唄にて此の道具留る。と合方彈流しにて、

茂次　おい婆樣や、此の天氣の惡いのに洗濯とは、惡い思ひ付きだなう。

お米　さア仕事に出る絆纏はこれ一枚限り、少しでも間さへあれば、野良仕事に出るゆゑ、打ちやつておけば、ぢ樣がぐづ〳〵云ふゆゑ、日和が惡くても構はず洗つて居ますが、又降り出して來ましたわえ。

茂次　そんなにがつ〳〵と二人とも稼がずとも、今にいゝ娘があるから、左り團扇で樂々とくらして行かれまするぞえ。

お米　庄屋樣、氣の毒乍らちよつと手をかして下され。

茂次　手をかしてどうするのだ。

お米　降り出して來ましたので、急に干はせぬゆゑ、圍爐裡の火で干しておきますのだ、どうかそつへ引張つて下され。

茂次　とんだ手傳ひが當つたわえ。（ト件の洗濯物を引張り込み、合方になり、）何でも此の村にでも、隨分子のある內が多いが、爰の內が仕合せのよい內だ。

お米　いや一つ〳〵に取る年ゆゑ、年若な者とあゝして内へおいては心配でなりませぬ。

茂次　なに、そんなに心配をさつしやらぬがよい。

お米　いえ〳〵さうでござらぬ、毎晩々々藪際の權十だの、榎のそばの甚吉が張りに來るから、それで苦になつてなりませぬ。

茂次　わしも女の子を持つて居るが、心遣ひのものぢやての。

お米　はて、お前樣にお子樣はない筈ぢやが。

茂次　いや、可愛がるぶちのことさ。

お米　又御常談ばつかり。

茂次　ハヽヽヽ、降つて來たわえ。

ト門口へ來る、小鼓の入りし二挺になり、花道より以前の家康先に、大久保其他近習皆々鷹匠の供廻り付き出來り、花道にて、

大久　次第に降も烈しく候へば、暫時が間あれなる家にて。

家康　晴間をしばし相待たうか。

大久　それがよろしうござりまする。（ト舞臺へ來て、）こりや、賴まう。

ト門口を明け、家康ずつと内へはひる。

茂次　あい誰だえ、此方へはひらつしやれ。（ト下りて來てびつくりなし）や御領主のお殿樣、婆さま、お殿樣がお出でなされた。これ、そこらを片附けさつしやい〳〵。

家康　いや、構やるな〳〵。

ト近習の出せし床几に腰をかける。家來皆々左右に控へる、其他は下に控へる、茂次兵衞手をつかへ、

茂次　これは〳〵お殿樣、むさくろしい所へようお出で遊ばしました、只今村方へ申付け、雨具の用意申し付けました、どうか暫く御小休みをなすつて下さりませ。

家康　オヽ見受し所其方は、當村の庄屋ぢやな、左すれば此家は其方が宅か。

茂次　いえ、これなる茅屋は、最前御厚情に相成りました權右衞門が宅、送り屆けましたる爲め、立寄りましてござりまする。

お米　憚り乍ら私は、權右衞門が女房米と申しまする、先刻は連合が格別の御惠みに預かり有難う存じまする。

大久　御殿と違ひ、茅の庇に栗丸太、

家來　竹の簀の子に夫婦の住居、

同二　四方は田畑の見晴らしよく、
同三　御庭前に事替り、
同四　ハテ、風情ある、
皆々　眺めぢやなア。（ト家康掛けある襦袢を見て、）
家康　オヽあれなる襦袢は見覺えのある、權右衛門とやらの老人の品ぢやの。
お米　はい、なけなしの襦袢を先程田へ落ちまして、よごしましたゆゑ、洗つてかけておきました。
　　ト家康氣の毒の思入にて、
家康　オヽ左樣であつたか。（ト思入あつて我が羽織をぬぎ、）これを取らせい。
大久　ハヽツ。（ト羽織を持ち行き、）それなる袢纏の代りに御前より下さるぞ、有難く頂戴いたせ。
　　ト茂次兵衛思入あつて、
茂次　あの樣なぼろ袢纏の代りに、結構なるお羽織を下さるとは、何といふ勿體ないことなるか、よくお禮を云はつしやれ。
お米　有難うござりまする、下さる物は夏も小袖、頂いておきまする。
茂次　これ下さる物とは勿體ない、そんな事をいうては濟まぬぞ。（トこれにて權右衛門上手より出で、）

權右　これ〳〵、其のお羽織はどうあつても、頂かれませぬぞ。

家康　オヽ、其方は先刻の老人、別段障りもなかりしか。

權右　有難うござりまする、付きまして御殿様には、むさくろしき賤が家へようこそお出で下さりました、冥加にあまる御越しの上、又お羽織を下さるとは恐れ多うて頂かれませぬ。

家康　なぜ又貰へぬといふのぢや。

權右　さればでござります、諸國戰爭の其中に、年貢の事は扨おいて、何から何迄御下の者を、哀れんで下さるゆゑ、我々共も安樂に斯うして農業の出來るのは皆お殿様の御蔭、それさへあるに最前も我々風情にお手づから御介抱下されて、其上お手當迄下され勿體ないと思ふ所へ、重ね〴〵の御惠み、何しにお受けがいたされませう。

家康　いや左様に申す程、猶々遣はしたいわえ。

お米　あの様におつしやるゆゑ、親仁殿頂いておかつしやれ。

權右　エヽ手前の知つた事ぢやない、すつこんで居さつしやい。

茂次　左程爭ふ物なら、こなたの代りにわしが頂いておかう。

權右　エヽ慾張つた事を云はつしやるな。

大久　こりや老人、御前が斯程におほせらるれば、辭退は却て失禮なるぞ。
一近習　大久保氏迄、あの樣に仰せあれば、
二　御辭退申さず速かに、
三　拜領いたすが、
皆々　よからうぞよ。（ト權右衞門涙をこぼし、）
權右　御殿樣始めあなた方迄、左樣におつしやりまするゆゑ、お貰ひ申すでござります。（ト渡すを受取り、）エヽ、有難う存じまする。
茂次　これ、こなたの内の寶物ぢや、大切にしておかつしやれ。
お米　これから村の寄合にも、此の羽織を着て行かつしやれば、差詰お前は上席ぢや。
茂次　又折に依つては、わしも借りて着ますわえ。
權右　へいへい、斯樣な悦ばしい事はござりませぬ。
皆々　エヽ有難うござりまする。（トお米思入あつて、）
お米　アヽ、こんな事ならさつきにから、お茶でも差上げればよかつたに。
權右　何云はつしやる、我々風情のぢゞむさい、お茶が召上られるものかいの。（ト家康笑ひ乍ら、）

家康　いや〳〵苦しうない、所望のいたさう。

權右　なに、召上つて下さりまするか。（ト奧へ思入あつて、）これ〳〵、娘に云附けお煮花を、差上げるがよいぞや。

お米　ほんに、さうしませう。さうして此のお羽織を娘にも見せて悦ばせませう。

權右　オヽ出世前の者ぢや、あやかるやうに頂かしてやるがいゝ。（ト渡す。）

お米　オヽ、餘程目方がある。

權右　アヽコレ。（ト目まぜする、お米にこ〳〵し乍ら奧へはひる。）

茂次　アヽ今度のお鷹野には、道普請や掃除をして、お褒めに預からなくてはならぬわえ。（ト雨止む。）

近一　雨も小降りにござりますれば、我々共は當所支配所へ罷り越し。

近二　雨具萬端取りそろへ、

近三　直樣是へお迎ひに、

近四　大久保氏にお附きを願ひ、

近五　我々共も取つて返し、

皆々　直樣是れへ參りまする。

大久　御前はそれがし確と警固仕れば、片時も早く、

家康　相待つぞよ。

皆々　ハツ。

茂次　どれ、小降りの内わしも歸らう。

權右　まア、よろしいではござりませぬか。

茂次　いや〳〵少し村の用事もあれば、お殿樣へ失禮いたしまする。（ト門口へ出て、）これ權右衛門殿、お羽織拜領の振舞があるであらうな。それを樂みに待つて居ますぞや。どなた樣も、はい、御免を蒙ります。

ト在鄕唄になり、花道へはひる。此時奥の暖簾口より、娘お萬島田かつら、振袖娘、緋鹿の子の帶をしめ、盆の上へ茶呑茶碗を三つ乘せ持ち出來り、家康の方へさし出し、

お萬　粗末なるお茶、召上られ下さりませう。

ト家康取つて飲み、ちつと見て、

家康　ハテ、鄙に稀なる、よい茶ぢやなう。

大久　ハツ、泥中の蓮とは此事、よき出花にござりまする。

権右　御意に入りましたら、お替りを差上げませう。

家康　今一杯所望いたす。（ト出す、お萬盆へ受けて奥へはひる。家康こなしあつて、）こりや老人、只今のはそちが娘か。

権右　左樣にござりまする。

家康　うむ老母といひ其方に、似合はざる娘ぢやが、夫婦の仲の子ではあるまい。

権右　ハッ、御目高なる其の仰せ、何をお隱し申しませう、お尋ねゆゑに申上げます。（ト六段樣の合方になり、）元あれが親は尾州熱田の宮の大宮司、永見惣左衞門と申す者の子、私夫婦が一人子を失ひ、乳に困つて居るを聞き付け、自分が妻を失ひて困つて居るゆゑ育てくれと、里によこしてお頼みありしが、自然と我子の樣に馴染み、月日も立つ内我儘したり無理も云ひ、とんと我子の樣に育ち、可愛うて〳〵なりませねば、今年で丁度十七年、本人には明かしもせず實の親子同樣に育てました事なれば、少しも知らず馴れなじみ、親と思うて居りまする。

家康　そち達二人の面ざしとは、あまり異なる樣子ゆゑ、左樣な事と存じ居つた。

ト爰へお米茶を持ち出て、

お米　はい、お茶を。（ト出す。）

家康　そちが茶はほしうない。

お米　年の行かぬ娘ゆゑ、不調法があつてはと存じまして、私が恐れ乍ら持つて參じました、それではあなた樣へ。(ト大久保へ出す。)

大久　身共も望みでないわえ。

お米　ほい、しくじつた。

權右　これ〳〵、手前の樣な老ぼれが持つて參ると興がさめる、奥へ行つて娘をよこせ。

お米　はい〳〵、どうでも年寄りは賣口が惡いわえ。(ト奥へはひる。入替つてお萬出で、)

お萬　はい、何か御用にござりまするか。(ト下手にてもぢ〳〵して居る。)

家康　オヽ、予が問ふ事がある、是れへ參れ。

お萬　何御用にござりまする。

家康　そちが名は、何と申す。

お萬　はい、まんと申しまする。(トぢつとこなしあつて、)

家康　そちが容貌、ア、あやめはよく咲きをるな。(ト大久保悟つて、)

大久　是れなる女御意に叶ひましたれば、當所支配は本多作左衛門にござりますれば、申し付け計らふ

様にござりまする。

家康　どうぢや、奥向へ奉公いたすか、存じよりはあるがどうぢや。

お萬　はい親共さへ得心にござりますれば、御奉公仕りまする。

權右　只今申上げます通り、生さぬ仲の子ゆゑ、產みの親が承知いたしますれば。（トこれを聞き、）

お萬　もうしとゝさん、今私の素性を聞くが始めて、是迄は產の親とばかり思ひ、我儘云うたり無理云うて、お二人樣に御苦勞かけましたは、濟まぬ事にござりまする。どうぞ堪忍して下さりませ。

權右　それに何の詫がいるものか、これ迄そちに明かさぬのは、親子の仲に隔てあつてはと、育てる甲斐もない事ゆゑ、明かさず居たのは恨んでくれるな。

お萬　さうおつしやられては、却つて此身に罰が當りまする。

大久　こりや、仰せのあるこそ幸ひ、君へ御奉公いたすが其身の出世と申すもの、權右衞門夫婦の者に相談して、御返事申上げるがよい。（ト此時お米出て、）

お米　其御奉公は此方にて、願うてもいたさせねばなりませぬ、これ親仁殿、此上の悅びはござらぬ、ちやつとお受けをさつしやれ。

權右　汝の口出しする場所ではない、すつこんでゐい。

お米　いえ／＼何と云はしやつても、口出しせねばなりませぬ、年頃の者を内へ置いては親の心配、よい折からぢや、願はつしやい。

大久　こりやさうありさうな事ぢやわえ。

ト雨車早めの合方になり、傳次郎黒合羽、下駄にて走り出で、門口へ來り、

傳次　御前様には、是れにお出で遊ばしましたか。

家康　オヽ、進藤傳次郎參つたか。

傳次　ハツ、先刻君にお別れ申し歸宅の途中、お家に仇なす輩に出逢ひしゆゑ、お訴へ申さんと存ぜし所、俄雨にて當村へ、お雨宿りの由承り、罷り出ましてござりまする。

大久　ムヽ、曲者とは氣遣はし、早く此所にて申上げい。

傳次　先刻歸りの折柄俄雨に、小蔭にて休み居つたるに、武田の間者怪曲と申す者、御家臣彌八郎とお家の密事を通ぜし様子、慥に聞き取り候へば、彌八郎は引とらへ、縄をかけてお館へ送り届けましたれば、君にはお館へ御歸館あつて然るべう存じまする。

大久　成程御歸館の上彌八郎、御詮議が肝要かと存じませる。

家康　ムヽ、よくぞ知らせた、只今の功により加增申付くるぞ、猶も忠勤勵んでよからう。

傳次　ハツ、有難う存じまする。

ト雨車早めの合方になり、以前の供廻り出來り、

供　お迎ひ。（ト乘物をかき揃へる。）

家康　チヽ、皆參つたか。

臣一　ハツ、支配本多方にて、雨具萬端取揃へ、一統お迎ひに出ましてござりまする。

家康　然らば、歸館いたさうか。（ト二重より下り家康下駄をはく。）

大久　君の御立。

權右　最早御立にござりまするか。

お萬　御機嫌よろしう。（ト蛇の目の傘をさしかけ、長合羽を着せる事あつて、）

家康　折よく雨にて、（トぢつと顏を見合せるを、木の頭、）

世話であつた。

ト寺がれ、在郷唄早めてよろしく、

幕

三幕目

駿河三保松原夢の場
同　徳川家奥殿の場

〔役名――徳川家康、織田信長、井伊直政、明智光秀、山形山城守、木下藤吉郎、服部半藏、本多作左衛門、漁師岩藏、船頭、近臣、里の子民松、同重松、天津乙女實ハ賤の女天人お松等。〕

（駿河三保松原夢の場）――本舞臺一面の道具幕、磯邊そなれの松、燈明臺など書きわり、爰にやつしなりの船頭四人○△□◎、かいを持ち立持り居る、波の音にて幕明く。

○　此間から毎晩々々、天人が羽衣の松のもとへ出るといふが、大層いゝ女だといふことだ。

△　さうよ、濱の者で見た衆もあるさうだ、それに引換へおらが濱の女達は、年中潮風に吹かれて居るから、色が黒くて日向くさいばかり。

□　正物の天人が、昔は伯良といふ漁師に迷つて、おりたさうだが、おらッちの目に掛つたら、とらへてむほんを起すだらうに。

◎　手前達がむほんを起しても、小大名が戰をすると同じこと、とても及ばぬ仕事だ。

○　むほんと云へば此頃は、おだやかで戰沙汰もあんまりなく。

△　それに引換へ今天下に人の知つて居るのは、甲斐の武田、相模に北條、尾張に信長、中に一際三

河の徳川。

□ おら達には、そんな大きなむほんはねえが、兎角おだやかで戰沙汰がなくて有難え。

◎ 戰も强くなくてはいかぬ、弱くつて籠められて居ては頭が上らぬて。

○ おらッちも腕限りかせいで、晩には天下廻り持と、盆のやりとりせうか。

△ それもよからう。サア／＼、精出して働け／＼。

四人 それがいゝ／＼。

ト波の音にて、四人上手へはひる。道具幕、山おろしにて切つて落す。

本舞臺眞中松の大樹、枝葉茂りゐる、此前羽衣の松といふ文字を記せし制札建てある、此の上に白木造り中足九尺の社、白の緞帳をかけ、三保神社と記しある事、上下岩組の張物にて見切り、下手折廻して蘆原、切破りあり、ずつと上手前に太き竹藪の植込み、松の釣枝、松の根方に銀の玉落ちてゐる事、此後ろ銀張りの海原、三保の浦より見たる富士ケ根莫大に見える、右誂への道具、波の音にて納まると浪の音打上げ、一聲コイヤイになり、謠掛り、唄淨瑠璃になり、

〽風早の三保の浦わを漕ぐ船の浦人騷ぐ浪路かな。

ト一くさりあつて、直に唄になり、

唄〽實に長閑なる時しもや、春の景色を松原の、浪立ちつゞく夕霞、はるかに三保の浦風に

〽月も照り添ふ天の原、及びなき身の心にも、詠めことなる清見潟、はるかに三保の浦風に

かた浪ぱツと立つと見せ、釣りせで歸る蜑小舟、沖のかもめの群立ちて、磯邊に歸る春の宵。

ト此唄淨るりの内、鳴物にて磯の子民松、田舍染中形の着附小ぶりなるを着、草苅籠を背負ひ、後より同じ磯の子里松、同じ拵へ鹽かきをかつぎ、兩人花道にて振あつて、

里松　これ民松よ、あすこの松の根方にある、ぴか〳〵光つて居るものは何であらう。

民松　オヽ、あれは潮に打上げられた、貝の光りであらう。

里松　何にせい取つて見よう。

〽月の桂の花や咲く、實に花かづら色めくは、

ト兩人よろしく舞臺へ來る、民松つか〳〵と大樹の根本にある玉を取りあげ、こなしあつて、

民松　や、こりや銀の玉だ。

里松　これ、其玉はわしが先へ見付けたのだ。

民松　いや〳〵、わしが先へ取つたのぢや。

里松　いや〳〵、わしが。

民松　いや〳〵、おれが。

〽あら面白や雨ならで、音も妙なり天津風。

ト兩人件の玉を爭ふ、此時後ろの蘆原の蔭より、舟頭岩藏、木綿やつし三尺なり、舟の櫂を持ち出で兩人を引分け、

岩藏　これ〳〵、爭ふ物は中からと、子供が持つては勿體ねえ、此方へよこせ。

ト件の玉へ手をかけるを振拂ひ、

民松　これ、それはこつちが見付けたのだ。

里松　やる事はならぬ〳〵。

岩藏　いや、此方へよこせ。（トつきのける。）

民松　エヽ、人の物を横合から、たゞ取るのは晝鳶の骨頂め、

里松　烏と共に斯うしてしまふぞ。

岩藏　何を。

〽雲の通ひ路吹きとぢよ、乙女の姿暫しとて、春の色をば三保ケ岬。

ト民松、里松熊手と鹽かきにて、岩藏を打ちすゑる、岩藏うづくまり、山刀をぬきふり廻す、これにて件の玉を取落し、兩人ほう〳〵の體にて下手へ逃げてはひる。これを取上げ、こなしあつて、

犬もあるけば棒とやら、是といふ字を彫付けあるは、何に遣つたものだやら。ハテいゝ物が手に入つたなア。

〽類ひも浪も松風の、音もしづけき浦のさゞ浪、

ト納まる、件の玉を持ち花道へ行かんとするこなし、ドロ〳〵になり、行き掛ける岩藏小戻りに連理引やうになり、此時松の蔭より畫面の天人、羽衣を腰に付け、現はれ、岩藏の持ちし玉は、天人の手にはひる、岩藏悶絶して返る。此時上手の竹藪より明智光秀、鎧甲冑、小手臑當、切れわらんぢ附太刀にて、竹槍を持ち出る。下手の蘆原より織田信長、狩くらの出立、達付、むかばき、附太刀、切わらんぢ、弓矢を携へ出る、三方一時の見得、樂入り誂への鳴物になり、天人件の玉を持ち空中より下りる、是れを信長光秀怪しと見て傍へ行き、三人からんでダンマリの立廻りあり、此内花道より藤吉郎、旅奴角字の着附、胸當、革袴の下くゝりあるをはき、大小、わらんぢ、紺の手甲三度笠、飛脚にて、小田原提灯を下げ、逸散に出で、花道眞中にて見得。正面の社の扉開き、徳川家康小素袍、葵紋附き、附太刀、後三年烏帽子、木地の三方に白旗をのせて持ち、足中草履にて、社より出かけ窺ひ

居る見得。世話の鳴物になり、藤吉郎は舞臺へ來り、此中へからんで立廻る。家康も窺ひ〳〵四人の內へはひり、少しづゝあしらふ、藤吉郎すばしこき仕組、光秀は竹槍、信長は大弓にて立廻りの內、件の玉は天人の手より信長の手へ渡り、又光秀へ渡り、又藤吉郎の手へはひり、家康の携へし旗を光秀奪ひとり、信長藤吉郎と旗をかせに立廻りの內、藤吉郎玉を取落し、家康の手へはひる。件の旗も家康の手へ戾り、是にてつか〳〵と社の二重へ上る。光秀信長拔きつれて立廻り、藤吉郎もまじり素早き仕組、天人ははれ釣瓶にて宙乘りの見得、藤吉郎は眞中にてギバをなしたる見得、光秀は上信長は下、家康社の二重、五人引張りの見得、鳴物カケリにて此の道具廻る。

（同　德川家奧殿の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向う一間床の間、夢想國師の横物の軸をかけ、置物を据え、續いて銀張り畫繪にて三保の浦より見たる富士の襖を建てあり、屋體前側に塗ぶちの障子をしめあり、此の下落間、土塀松の釣枝、立木などよろしく、道具中程より風の音、ドロ〳〵にて道具留る。とドロ〳〵打上げ、すが糸にて絹細工の蝶二羽、庭の隅より眞中の日覆へドロ〳〵樣の風の音にて引上げる。よき程に、屋體の內にて、

家康　障子を明けい。

近習　ハヽ。

ト件の障子を三方とも引拔く。內に家康無地紋服にごまがら縞の袴、茶木綿の褥の上に座し、太刀掛けを後ろに置き、火桶を控へ、見臺に羽衣の謠ひ本をのせある。袴着流しの近習控へ居て、

御前、いかゞ遊ばしました。

家康　ヲヽ、予は一睡の夢を催したり。

近習　ハア。

家康　本多を呼べ。

ト近習こなしあつて下手の棲へはひる。家康思入あつて、謠への合方になり、

春の日永のつれ〴〵に、日頃好める謠ひ本、羽衣のくだりを暫く讀む內、計らず眠りを催し、しばしまどろむ其間、心のつかれか見し夢は、是れなる襖に書きたる、處は駿河の三保ケ浦、是といふ字をえり付けし、床に掛けたる色則是空空則是色、これといふ字を寄せたるも、夢想國師の名にさへちなめるものなるか、ハテ不思議な事を見るものぢやなア。

ト思入、下手襖より本多作左衞門、繼ぎ上下、小さ刀にて出て、平伏なすを遙かに見て、

ヲヽ、作左か。

本多　ハツ、御前如何遊ばしました。

家康　予は今此所で夢を結びしが、吉夢か凶事か判斷せよ。

本多　何事なるか、仰せ聞けられ下さりませう。

家康　ヲヽ、進め。（ト謡への合方になり、）暫く戰の沙汰もなく、平穩ゆゑに予が好む、亂舞の本を取出し、羽衣の段を讀む内に眠りを催しまどろみしが、然も駿州三保の浦、空も朧に春の夜の月影霞む夕曇り、彼の羽衣の松ヶ枝に赫々たる光りさし、草苅る童が二人して、松の落葉の間よりぬしは誰とも白浪の、一つ玉を拾ひ得て二人爭ふ其處へ漁師の一人窺ひ出で玉を奪ひて逃げ行く折、彼の鼓と諸共に空より俄に樂器の調べ、靈香薫じてほうほッと天津乙女が天下り、漁師が玉を取返せし時しも弓手の蘆原より、出でしは丹波の明智光秀、馬手の蘆原押分けて出しは尾張の織田信長、互ひに件んの玉を取らんと、岩に打來る荒浪のぱッと散つては又打寄せ、暫しいどみて信長が、手に入る玉を光秀が、何なく我手に入れたる折柄、一時三里犬走り、猿と綽名の木下藤吉、隙を窺ひ兩人が爭ふ玉を奪ひ取り、天の輿へと押頂く途端に三保の社より、此の家康が窺ひ出で是といふ文字の其玉を、此の手にしつかと握りし折さつと寄せし松風に夢は破れて跡もなし、吉夢か凶夢か作左衞門、予が見し夢の判斷をせよ。

本多　ムヽ、此の上もなき吉夢にござりまする。
家康　取留もなく見し夢を、何を證據に吉夢とは、
本多　是といふ字を三つに割れば、日の下の人とよむ。
家康　何と申す。
本多　先に光秀信長が、奪ひし玉を猿賢くも秀吉が、取りしを御前が又々手に入れしは、やがて、（ト手を開きて一緒に寄せ、）四海も遠からず。（ト小聲にて呑込ませろ、家康ちつと笑みて、）
家康　吉夢ぢやな。
本多　御意にござりまする。

ト此時下手襖を明け、服部半藏、山形山城守、井伊直政の三人出で、下手後ろに平伏なす。三人並よく並び、

服部　ハッ、服部半藏、
山形　山形山城守、
井伊　井伊直政、
三人　參上仕つてござりまする。

家康　夢の判斷そち達も、聞いてをつたか。
服部　ハツ、御次に控へて居りましてござりまするが、
山形　御前は富士の高根と共に、天下に並ぶ者もなく、
井伊　夫の羽衣の松は常磐の、千歳榮ふ松平と、
服部　偏へに仰ぐ神德の、
山形　萬代諷ふは、
三人　遠からじ。
家康　ヲヽ、目出度く祝せ。
服部　ハツ。

ト立上り扇を構へ、羅生門の謠ノリの早き處の鼓地になり、服部舞ふ事よろしく。家康初め控へし人人悅喜のこなし、曲舞の足拍子にて、木の頭、よろしく、

幕

四幕目

岡崎曲輪内遊輿の場
同　奥殿詮議の場
家康居間の場
築山御殿奥庭の場

同　返し

〔役名――徳川家康、服部半藏、本多作左衞門、徳川信康、大賀彌四郎、修驗者怪典、近習。御湯殿番お萬、中老八重機、權右衞門妻お米、奥女中轡野、同すみれ野、老女藤浪、おはしたおふと、同おでこ、腰元皐月、同菖蒲、同撫子、同紅葉、同草葉、取次の腰元等〕

（岡崎曲輪内遊輿の場）――本舞臺眞中御錠口門、此の左右源氏塀、竹床几三脚程毛氈をかけあり、塀の内櫻の立木、同釣枝、左右植込みの張物、爰に袴侍○△□◎の四人、丸腰にて扇を腰にさして立掛り居る、誂へ田舍の踊りの鳴物にて幕あく。

○　此程より信康樣には、御母君築山樣をお引取り遊ばして、

△　御機嫌伺ひとて御下の者へ申付け、踊りを御覽に入れるとお噂のみにて、

□　奥向は賑やかなれど、下々の者は見ること叶はず、

◎ 永井村の者は今に是へ、揃ひの着物で來るとやら、
○ せめて繰込む所でも、これにて見物、
三人 いたさうわえ。
ト踊りの鳴物になり、奥より腰元さつき、あやめ、霧島、撫子、紅葉、若葉等六人對のなりにて出來る、皆々見て、
○ これ／＼女中達、奥御表と隔てあるに、
△ 猥りに爰迄ござつては、
□ 我々共が迷惑いたせば、
◎ 早く御奥へ歸らつしやい。
さつ いえ／＼今に大勢來るとの事、
あや どの樣な催しか、早う見たうござんすゆゑ、
霧島 わざ／＼爰へ參りました。
撫子 どうか内々で、お見せなされて、
皆々 下さりませ。

○いえ〳〵何と仰せあつても、爰へ出てはなりませぬ。
△それ程達て見たければ、
冂御庭の御腰掛で見さつしやい。
◎きり〳〵と御門へおはひりなされ。
紅葉　これ程私共が頼むのに、
若葉　ても話せぬ、野暮てんぢやな。
四人　なに、我々を野暮てんとは。
さつ　それはかうでござりまする、ヲヽそれ〳〵、お庭のしやぼてんが話しにならぬ程、大きいと申したのでござりまする。
○それならそれにしてやらうが、
三人　とつと〳〵門内へはひつた〳〵。

ト捨ゼリフにてせき立てる、腰元六人とも門の内へはひる。後を見送つて、

○いづれも方、最早踊りのまゐる時分、
△申合した通り、

□　喧嘩じかけに、

◎　いたしてくれう。

ト此時鳴物になり、四人の侍こなしあつて門の内へ忍ぶ。誂へ踊りの鳴物にて、上手よりだん〳〵一對の着附揃ひの手拭、先に永井村と染出したる幟を持ち、同じなりにて若い者八人、此中へ彌八郎入り、何れも踊り乍ら順々に出來る、是れにて以前の四人の侍出て、踊りの中へ一人々々邪魔にはひり、冠りし手拭の内を覗き込み改める模樣、此内彌八郎を見出し、侍四人引立てる、鳴物早渡りになり、踊り崩れる、彌八郎こなしあつて、

彌八　モシ〳〵、こりやどうなされまする。

若一　私共は村の者でござります〻。

若二　踊りの事ゆゑ御勘辨。

皆々　下さりませ。

彌八　あゝもし〳〵、皆さん、何ぢや知らぬが詫びて下され。

○　ヤア、外の者には構ひない。

△　こやつ一人詮議がある。

□　其方達は、
◎　歸りをらう。
皆々　いや〳〵、村から連立つて來たもの、一人たりとも殘しちや歸れませぬ〳〵。（トわや〳〵云ふ。）
○　ヤア、かれこれ申さばおのれらも、
△　共に卷添へ喰ふぞよ。
彌八　これ〳〵、わしに何か用があるとの事、用事が濟んだら後から行きます、御門の方へ行つて待つて居て下され。
若一　そんなら、皆の衆、
皆々　拍子をそろへて行きませう。
　　ト以前の踊りの鳴物になり、皆々踊り乍ら花道へだん〳〵にはひる。
（）　サア喧嘩をしかけた小二歲め、サア立上つて、
四人　相手になれ。
彌八　どういたして私が、喧嘩などをしかけませう、全くあなた方の方よりして。
○　いや、眼中、足の取廻し、

△　間者の者に相違ない。

彌　どういたして、左樣な。

□　左樣でなくば立合ふか。

彌八　サア。

◎　但し喧嘩か。

五人　サアく〳〵。

四人　いつそかうして。（ト一人づゝ掛るを投退け、）手向ひなさば、まツ此通り。

ト四人双方より掛る。此時後ろにて、信康、

信康　者ども待て、つぶさに是れにて見屆けたり。

ト小鼓の入し本調子になり、門の內より信康紋唐草のさし貫、紋服、足中草履、後ろより近習高平紋兵衞刀を持ち出で控へる、信康床几に腰をかける、四人の侍は彌八郎を取卷き控へる。

彌八　ヤア僞り事と思ひしに、何ゆゑあつて私を。

信康　物見の內より見る所、汝が風俗五體の備へ賤しからざる立振舞、それゆゑ臣下に申付け、かくこそは計らひしぞ、斯程の手練を持ち乍ら、かくは下賤に交りしぞ、但しは性來の土民なるか、仔

細によつて計らふべし、野夫にも功の譬の通り。

彌八　へイ親類も當村にござりまするが、永見重左衞門と申します、以前都に居りし節は御出入りをも仕りましたが、今はほんの水呑百姓、身の薄命を心に悔み、只孝道のみ盡して居りまする。

信康　孝道盡すとはよき志し、さり乍ら其身を一生農夫にて果す氣か、但し仕官の望みあるや。

彌八　仕官の志願にござりまする。

信康　志願とあれば頼もしゝ、此の信康が召抱へんが、予の臣下になるや如何に。

彌八　有難き仰せなれど、斯く賤しき土民をば、

信康　辭退いたすは、此の信康が不足と申すか。

彌八　イヤ、全く以て。

信康　臣下となるか。

彌八　サア、

信康　サア、

兩人　サア〳〵〳〵。

信康　不足でなければ今よりして、予が臣下に召抱へるぞ。

○かういふ事と知らずして、御前の仰せに從ひて、
△踊りに事よせ紏せし所、
□手玉の樣に投げられて、
◎いまノ\しいと思へども、
○新參でも御家臣と、
△相成る上は是れよりして、
□末睦まじく、
◎附合ふでござらう。
彌八　此上共に不便を加へ、よろしく御披露願ひまする。
信康　此上は母築山へ申上げ、主從の杯いたさん。
四人　然らば、お奥へならせられまするか。
信康　いかにも、左樣いたすであらう。
彌八　然らば是より私は、村の者へ此事を。
○御前のお召しぢや、猶豫はならぬぞ。

彌八　ちよつと參つて直樣又。

△　でも、それにては君へ失禮。

四人　是非とも同道いたされい。

彌八　然らば上るでござりませう。

信康　ムヽ、よき家來を求めしよなア。

ト訛への鳴物になり、信康先に近習四人付いて錠口の門の内へはひる。以前の踊りの鳴物になり、二幕目の怪典緋の衣、白の着附撫附草履にて、小包を提げ出で後より產見村のお米、小紋の着附前帶濱松染の風呂敷へ切溜を包み、是を提げて出來り、花道にて、

お米　もし〳〵、ちよつとお待ち下さりませ。(ト是にて怪典振返りて、)

怪典　ヲヽ、誰かと思つたれば、產見村のお米どのではござらぬか。

お米　ヲヽ、ほんにいつもと違ひ、立派な緋の衣を着てござるゆゑ、見違へました。

怪典　これは又失禮な事、何は然れ御庭の口に、休息所がござるゆゑ、それへ參つて話しませう。

ト兩人して舞臺へ來り、あたりを見廻し、床几へかける事あつて、

コレお米どの聞いて下され、是迄諸國の難病を、治したのが當城主の御耳に入り、今日お招ぎに

預かつて、築山御前の御病氣を丹精ぬきんで御祈禱なせしに、日あらずして御恢復あらせられ、格別の御恩賞を受け、それを御緣に御出入りとなり、男の叶はぬ奥御殿へ日々御祈禱に罷り出で御膝組でのお話もなる、結構な身分になつたぞや。

お米　それは〲お仕合せな、其様に御祈禱が利きますなら、世間にいくらもある父なし子などを、孕みました時あなたの御祈禱にて、ふくらんだお腹がくぼみますかな。

怪典　くぼむとも〲、丹精ぬきんで祈禱をなせば、一夜の內に元の通りになつてしまふぢや。さうしてこなたは、何れへござるのぢや。

お米　はい、此の御殿に娘が奉公して居りますゆゑ、是非逢はねばならぬ用にて、わざ〲と參りました。

怪典　はて、さうでござつたか、廣い御殿の事ゆゑに、少しも氣が付なんだが、（ト心企みの思入あつて、）丁度幸ひ。

お米　幸ひとは、そりや何が。

怪典　いつぞは逢つて。（ト奥へこなし。）

お米　お前さん奥へござるなら、萬に母が逢ひに來たと、ちよつとよんで下されぬか。

怪典　ヲヽ、只今參れば、早速呼出して進ぜる程に、暫く待つてござれ。
ト踊りの唄になり、怪典御錠口へはひる。

お米　昨日文で來てくれと便りがあつて來た事は來たが、早く娘に逢ひたいものぢやな。
トこなしある、右の唄にて御錠口より前幕のお萬、藍地矢がすりの着附、黑の帶にて出來る、是を見て

ヲヽ、お萬ではないか。

お萬　ヲヽかゝさん、よう來て下さんしたなア。（ト慇懃に辭儀をする。）

お米　ヲヽお萬見違へた樣になつたなア、さうして髮のよう出來ましたこと、なりもきれいな事ぢやなう。

お萬　何を言はしやんす、さうしてとゝさんも替る事もござりませぬか、いつも乍らお達者で。

お米　ヲヽ相變らず達者ぢやが、さうして踊りの好きなお邸で、賑かな事であらうの。ときに、昨日よこした文に、懷胎して居るとよこしたゆゑ、父なし子を孕んでは面倒ゆゑ、若い者のあり內とは云ひ乍ら、心配でならぬゆゑ、今日は急いで逢ひに來ました。

お萬　それで來て下さんしたか、あのまア畑仕事も忙しないに、ようまア來て下さんしたなア。

お米　これ〳〵、いよ〳〵それときまるなら、女子は一生の大役ゆゑ、誰の胤やら糺しおかねばならぬ

ゆゑ。

トづか〳〵と云ふゆゑ、お萬氣あつかひのこなしにて、邊りを見廻し、

お萬　あの私は始めての事ゆゑわかりませんが、多分それと思ひますゆゑ、何事も申さず病氣のお届けをして、宿へ下る方がよからうと、其の御相談をいたしたさに。

お米　それは御支配の本多樣へ、願へば造作もない事ぢやが、然し誰やら相手も知れず、引取る譯にもゆかねば、もし知れて居るなら、其人に相談などして、モシそなたが云へずば、わしからでも話さう。なにも遠慮するには及ばぬ。

お萬　其樣に云はしやんすなら、御聞かせ申しませうが、高くは云はれませぬが、（ト小聲になり）其相手と申しますは、大殿樣でござんすぞえ。

お米　エヽ、そりやまア、殿樣が。

お萬　さア、去年の五月御前樣が、御鷹野の歸りがけ、俄の雨に產見村へ、御立寄りになりし時、賤しい此身を奥向へ、出さぬかとの御聲掛り、其の御支配の本多樣から御沙汰があつて御殿へ上り、御湯殿の掛りに當つた私、然も去年の暮の事、御前樣には濱松から此の岡崎へ成らせられ、御逗留中の事なりしが、御年忘れの御酒宴とて、御前がお奥へ入らせられ、お風呂を召したる其晩に

御湯殿番は私の掛り、お流しに出た其折に嬉しい仰せを受けました。

お米　そりや、お湯殿でか。

お萬　あい。（ト顏を袖にてかくし、恥しき思入。）

お米　ヲヽ、よう洸はしやつた、出來しやつた〳〵、お手が付いてさへ悦ぶに、御胤を宿すとは此上もない仕合せ、ヲヽよう仕やつたなう。

ト我を忘れて悦ぶ、お萬あたりへ氣扱ひして、

お萬　アレ大きな聲して下さんすな、梁山御前樣へ沙汰あつてはと、殿樣のお口留ゆゑ、靜かにおつしやつて下さりませ。

お米　さういふ事なら猶の事、遠慮には及ばない。（ト大きく云ふお萬氣扱ひする。）今そちの云ふ通り、病氣のお屆けをして、宿へ下るがよい、又かう云ふ事はわしにも云へぬ、御支配の本多樣へ願うて宿へ下つて養生したがよい、大事のからだぢや。

お萬　それでは父さんから御支配樣へ願ひ、お上のお名の出ぬやうに、密々に病氣とのみお屆けをしてどうぞ一日も早く下りたうござりまする。かういふ事は得て知れ易く、いかなる事か此程より、御前樣と梁山樣、御仲不和の御樣子ゆゑ、もし、知れては私の身の上、又一つには殿樣の御恥辱。

ぢやによつて本多樣から、お願ひ申して下さりませ。

お米　ヲヽ直に歸つて親仁樣から、御支配樣へ願ひにやります。わしはもう歸りますが、隨分喰物に氣を付けて、大切にしてたもや、ヲヽ忘れて居た。草餅を持つて來たゆゑ、朋輩衆へ進ぜて下され。

ト以前の切溜を風呂敷より出す。

お萬　これはまア御用の多いのに、お心にかけ有難うござります。お重は又お返し申すがおつくうゆゑ直に持つて歸つて下され、あけてまゐりまする。（ト切溜を持ち立ち掛る。）

お米　いや／＼そなたの事が心急きゆゑ、早う歸つて親仁殿に言はにやあならぬ、今日は切溜は置いて歸りませう、其内持たしてよこすがよい。

お萬　それもさうでござんすなア。

お米　そんなら歸ります、大事にしませうぞ。

お萬　あなたもお早うお歸りなされませ。（ト捨ゼリフにてお米花道へ行きかけ、）

お米　アヽ、それにしても大殿樣のお胤を宿すとは、我子乍ら見上げたものぢやなア。

お萬　アモシかゝさん、どうぞ靜かにして下さりませ。

お米　あいよ／＼、なに遠慮に及ぶものかね。

お萬　かゝさんに口留しておいたが、早う迎ひに來てくれゝばよいが。どれ、お重を皆さんへ。

　　ト踊りの鳴物になり、お米花道へはひる、お萬見送りて、

　　ト件の切溜を提げ行きかける、此の時怪典出て抱き付く。

あれ、誰でござんす、御常談なされまするな。

怪典　誰でもない、怪典だ〳〵。

お萬　エヽモ、修驗の御身分でてんごうなさんすな。

怪典　エヽ、修驗でも法印でも、戀に上下の隔てはない。わしの言ふ事、ちよつと。

お萬　エヽも、その樣な事、知らぬわいなア。

怪典　なに知らぬ事があるものか。

お萬　エヽ。（ト箱せこにて手ひどく額を打ち、早き唄にてツイと御錠口へはひる。）

怪典　アイタヽヽ。（トこなしあつて見送り、）ムヽよし〳〵、人我に辛ければ、我又人に辛しの譬、此の意趣晴らしは大殿の、胤を宿せし事染山樣へ申し入れ、ほえづらかわかし褒美の金。

　　ト思入あつて、

こりや、色氣を捨て欲にいたさう。

ト踊りの太鼓にて、此の道具廻る。

(同　奥殿詮議の場)――本舞臺四間常足の二重、塗りがまち、向う金襖、花の丸、左右落間、杉戸の出入り、總て書院の模樣、揚幕に杉戸を取付け、爰に二重の上に局藤浪、裲衣裳、二重下に奥女中樺野、すみれ野、二人、同じく裲衣裳片はづしにて控へ居る。琴唄の合方にて此の道具止る。

くつ　信康樣には此程より、美少年をお見とめあると、幾人となくお抱入れになりますが、まさか色戀でもござりますまい。

すみ　殊には築山樣には家康樣と御仲惡しく、此の二股へならせられてより、城外の田家より美男を召し、市中在方の者に踊りををどらせ、御見物なさるゝとは、一圓合點がまゐりませぬ。

藤浪　其の御不審は御尤も、築山樣の甥御今川義久殿は、元織田に亡ぼされしゆゑ、其の御無念にて織田徳川兩家を不和になし、甲州武田方に味方なして、伯父君義元樣の御恨みを晴らさんと思召し家臣數多召抱へる爲、城下へ踊をゆるせしなり、此の事成就する時は、あなた方にも御出世でござりまする。したが、決して御沙汰は御無用にござりまするぞ。

ト此時下手杉戸を明け、腰元一人出來り、

腰元　ハヽ、只今是へ怪典樣出仕いたしてござりまする。

二人　待兼ねました、これへ通しや。

腰元　畏りました。

ト直に腰元引返してはひる。入替つて以前の怪典、緋の衣白綸子のなりにて出で、下手に控へ、

怪典　ハヽ、怪典只今出仕つかまつつてござりまする。

くつ　これは〳〵怪典殿には、いつもより遲いお上りにござりまするな。

怪典　遲參のだんは御容赦下され。これと申すは昨夜不動尊が、我が枕邊に立ちたまひ、不思議の靈夢を蒙り、當今築山樣御病氣は、大殿の御胤を宿し、北の方にならんとする者あつて其者の呪咀調伏容易ならぬ次第ゆゑ、急ぎ出仕いたせし所途中に於て計らず暇どり、遲參のだんは幾重にも、御免なされて下さりませ。

藤浪　して其女は、何者でござりまするな。

怪典　それぞ御湯殿番の萬と申す女にて、御二方の御仲をさかんが爲なる事、示現によつてよく知りたり、早速取る物も取りあへず、御近習番に申付けて召捕らせ、張番いたさせ置きました。

藤浪　ても大膽な下賤の女、一方ならぬ築山樣の御身の大事。

くつ　此儀をば申上げ、御詮議が御肝要。

　ト此時花道より又腰元一人出來り、

こし　ハヽ、只今濱松より大殿樣、御出でにござりまする。

怪典　愚僧は此の由築山樣へ。

すみ　どれ、私が御案內申しませう。（トすみれ野先に、怪典下手杉戸の內へはひろ。）

藤浪　どれ、御用意。

　ト花道の腰元舞臺へ來り、殿の褥を出し上手へ敷き、脇息亂れ箱を置き、下手杉戸の內へはひろ。と花道より家康公小ぶりの上下、茶の着附、大小を服部に持たせ出來る、藤浪くつわ野出迎へる。

家康　ヲヽ、皆の者出迎ひ大儀であるぞ。

皆々　ハヽッ。（ト辭儀をなす。）

服部　君にはまづ、お越し遊ばされませう。

　ト是にて靜なる合方にて、家康は舞臺へ來て二重褥の上へ住ふ、服部は二重下へ住ひ、始終家康の刀を持ち居る、藤浪轡野思入あつて、

藤浪　是れは大殿樣には先達て濱松城へならせられ、當今は御久方振にて、此の岡崎へならせられ、御

機嫌とても麗はしく、恐悦至極に存じまする。

くつ　御久方振りの御入來ゆゑ、御料理萬端珍味を揃へ、献立仕り候へ共、不時の御入りにて届かぬ勝、其儀は御詫び申しまする。

家康　老女を始めそち達にも、すこやかなる體、予も重疊々々。

服部　信康君へ御異見の爲、濱松城よりわざ／＼の御入來。

藤浪　なに、御異見のお爲とは。

家康　事新らしく申さずとも、此程より金繡摺箔を粧ひとし、市中の美少年を集め、踊りを日々物見より見物なし、且つ多人數を招き抱へ酒宴に耽るの由、予も當今は織田へ屬し、家政を正し儉約を專らにいたし居るに踊りなどゝは驕奢の沙汰、今日よりしては止めさす爲今日は參つたが、是も定めし信康の一存ではよもあるまじ、簗山が、サ、附添ふ者が惡しきゆゑなり、老女達、よきに信康へ申聞けよ。

服部　御前の仰せの通り、左樣の次第につのり候へば、御臺所のお爲にも惡しかるべし、信康樣が御亂行の條々、武田、上杉、齋藤、淺倉、諸國の將に聞えなば、これを以ていかなる手段にあはんも計り難し、是を以て簗山樣が、なぜお愼しみ遊ばさぬ、又奥向は老女のお掛り、なぜ御諫めは申

上げぬ、打捨て置きなば大事とならん、それゆゑ君の御供なし、わざ〳〵来着いたしてござる。

藤浪　お叱りを受けまして、恐れ入りましてはござりまするが、其御詞に従ひまして、申上ぐる一儀がござりまする、其の次第は掟を破る女がござりまする。

家康　なに、掟を破る女とは、何者なるか老女共、厳しく詮議いたしてよからう。

藤浪　いまだ誰とも詮議はいたしませぬど、御前の御入りを幸ひ、是へよび出し一詮議いたすでござりませう。

くつ　私共が役目の面晴、此席へ引出して。

ト奥へこなし、此の時下手杉戸の内にて、女中おふと、おでこ、湯殿女にて、以前のお萬を引立て出で、

でこ　下に居や。（トお萬ぢつと下に居る。）

ふと　サア、お前はさつき、何とやら云はしやんしたなア。

でこ　此頃は身重になつたと申す事。

ふと　朋輩の私等に、何も包む事はござんせぬ。

でこ　若い内はあり内ゆゑ、ツイ誰ぢやと、

ふと　話して、

二人　聞かしやいなう。

ト双方より急いて云ふゆゑ、お萬思入あつて額を上げ、邊りを見、上手の家康と顏を見合せてびつくりする。

お萬　ヤヽ、ハア。（ト思入あつて泣き入る、藤浪思入あつて、）

藤浪　イヤ、萬これへ出や。イヤサ、爰へ出や。

お萬　ハアイ。（トしつとりとした合方になり、）

藤浪　これ萬、まア法度厳しい奥御殿、女ばかりで出入りは固く、男と申すは御年寄りの金太夫殿より外、他より來る者はなし、それをまアよくも／＼、そんな身になる迄、イヤサ、奥様の御目をかすめ、此の堅い御殿でみだらな事、今も御前にお呵り受け、老女の役がつとまらぬ。

くつ　こなたはまア／＼、三月四月は袖にもかくし果せようが、一方ならぬお腹ゆゑ、もうかくしては居られまい。

ふと　定めし知らぬと云ひ張らうが、お腹の中は見通しな、慥な人がござんすぞえ。

でこ　サアかくし立せず其の相手は、ツイかうぢやと言へば奥向は内々で濟ます程に隱し男を云つて、

兩人　聞かしや。

お萬　なか〳〵、忍び男のなんのと、病ひのせゐでござりまする。

藤浪　こりや法度を破る事ゆゑに、病ひと云ひぬけるのであらうが、此の藤浪は、其の僞りは喰ひませぬ。

くつ　サア何者と不義したか、打捨て置かれぬ賤しき女、其分に濟まさうか。

藤浪　サァきり〳〵と、

皆々　云やいなう。

ト家康見て居て迷惑のこなし、藤浪へ思入、藤浪扨はといふ思入、服部も家康の面色を見てさとり、

服部　あいや、こりや斯様いたさう、其の様子にては女とても、迂濶には申すまじ、拙者が預りきつと詮議をいたすでござる。

藤浪　ア、イヤ〳〵、そりやなりませぬ、奥向は老女が差配にござります、御表よりの入らぬお指圖、御控へなされませ。

くつ　あなたが如何程御ひいきなされても、退引させぬ證人がござんす。コレお萬殿、それでもお前白狀せぬかえ。

ト兩人きつと云ふ、服部も詰る、此時杉戸の内より中老八重機、打掛衣裳にて出來り、

八重 あゝいや、其の御詮議は、私が仕るでござりまする。

ふと あなたは御中老、八重機殿。

ト八重機は家康、服部に挨拶して、下手へ控へる。

八重 只今お次にて事の次第を承りましてござりまするが、事荒立てましては却つて奥向の手落にも相成りますれば、どうか私にお預け下さりまするやう、願ひたう存じまする。

藤浪 いえ一通りの事なれば、こなさんに預けまいものでもござんせぬが、打捨て置かれぬ大罪人、それ故お任せ申されませぬ。

八重 只今お次にて承りますれば、御法を犯せし不義者は、懐胎いたし居るとの事、假令掟を破りまする大罪でござりますとも、身に宿したる其子には、罪なき様に存じられます、それを手荒く責めましては、當人ばかりか身に宿る、子に迄あやまちある時は、闇から闇へやるも同然、それを不便と存じますゆゑ、とくと當人へ申し渡し、白狀をいたさせまして、御家の御法の亂れぬ樣、取計らふでござりますれば、お萬殿は私へ、御預け下さりまする樣、我君樣、何卒御聞濟みの程、願ひ上げまする。

家康　ムヽ、そちに任せる、いたはりて詮議のいたせ。

お萬　どなたが御詮議遊ばしても、こればかりは申されませぬ。

藤浪　何ぼ云はぬといやつても、御殿へ祈禱に上りたる怪典といふ者が、よく存じて居りますわいな。

お萬　すりや、怪典が申しましたか。

藤浪　何とのがれはあるまいな。(トお萬思入あつて、)

お萬　ハア。

ト泣落す、家康見て、

家康　何と申す、修驗者怪典と申す者、證人とあらば是へよべ。

ふと　怪典殿、御前が召します。

トおふとおでこ兩人して、

怪典　ハア。(ト下手杉戸の内より怪典出て、平伏する。)ハヽ、お召によつて修驗者怪典、罷り出ましてござりまする。

家康　怪典とは其方か。

怪典　ハツ、左樣にござりまする。

家康　ムヽ、如何なる用にて罷り出でしぞ。
怪典　ハツ、奥方樣此程御病氣ゆゑ、御祈禱を仰せ付かり、丹精をこらし祈りましたる所、神の惠か御快氣にならせられましたが、尙も怠りなく祈りまするでござりまする。
家康　して、あれなる女懷胎と見極めしは、如何いたして存じ居つた。
怪典　ハヽ、昨夜不動の示現に依り、靈夢を蒙り見極めましてござりまする。
家康　取留もなき雜夢をば、何で證據に相成らうや、尤も夢にも眞夢賢夢正夢とて、利欲にふけらぬ賢人にはあれども、汝等如き似非法印、婦女子などはあざむかれうが此の家康は眞にせぬぞ。
怪典　ハヽ御諚ではござれども、神明を頭に頂き、丹精をぬきんで善惡を知る、靈夢に僞りはござりませぬ、空事と思召すなら、目前女の腹中を御改めなされませ。
家康　何をたはけた、左程御身に行力あらば。ムヽよしく、これに居る服部の年齢は、何歳なるか當て見よ。
怪典　ムヽ（トつまりし思入あつて、）此儀は今晚靈夢をさづかり、又々御答へ申上げまする。
家康　ムヽ、卽座にこれは當らぬか。
怪典　サア。

家康 但し僞りを申すか。

怪典 サア。

兩人 サア〳〵。

家康 よも卽座には申されまい。（ト怪典つまる、家康きつとなつて、）汝詞を巧みに當城へ入り込みしが、とくより武田の間者なる事、大河彌八郎が白狀にて、人相恰好存じ居るわえ。

怪典 ムヽ、それは世間に似たる者は、幾等もある、間者とは覺えはない。

家康 汝似た者ありと陳じ立いたすなら、面體を存じ居る、進藤傳次郎とつき合はさうか。

怪典 サア、それは。

家康 サア。

兩人 サア〳〵。

怪典 こりやもうたまらぬ。（ト逃げに掛る。）

服部 御免。

トつか〳〵と立つて引戾し、立廻つて、當てる事あつて衣をはぎとり縛り上げる。

藤浪 あゝ、そりや何をなされまする、築山樣御病氣にて、祈禱の爲に上りし者を、奧向きにていまし

めたまへば神への恐れ、どうか私へお任せあつて。

服部　いや、男を禁ずる奥御殿へ、修驗者たりとも引入れて、入らぬ御差配お控へなされ。

藤浪　むゝ、然らば其女もくゝし上げ、嚴しき詮議をとげませうか。

トきつと云ふ、服部つまりてくだけ、

服部　さ、そこが所謂弓も引き方、たゞ何事も穩便に、命助けて追放なすは、兎角双方お爲を存じて。

怪典　何樣、こりや命をとらぬがお爲でござる。

藤浪　流石は服部樣のお計らひ、感心いたしました。

くつ　怪典の詮議は片付きましたが、片付かぬはお萬が詮議。

ふと　白狀せねば是非に及ばぬ、此の上は、

兩人　私共が。（ト兩人きつとなる、此の時時計鳴る。）

家康　ありや未の刻、最早歸邸いたすであらう。

服部　すりや我君には、御立にござりまするか。

藤浪　折角の御入りに、何の風情もござりませず、御許し下し。

皆々　おかれませう。

家康　然らば服部。
服部　まづ、お越し遊ばされませう。（ト家康花道附際へ行き、）
家康　八重機近う。
八重　ハッ。（ト前へ進む。）
家康　お萬は其方に預ける。人知れず、イヤ、よきに計らひ得させませうぞ。
八重　お氣遣ひ御無用、萬事は私がよい様に。
家康　よいの。
八重　ハッ。
服部　あいや我君には、まづお越し遊ばされませう。
ト是を唄になり、家康附添ひ、花道へはひる。
藤浪　さ、女郎めうせう。
八重　あいや、それは相成りませぬ。
藤浪　そりや又、なぜに。
八重　あなたもまア物覺えの悪い、今大殿様よりお預けありしこれなる萬、私が詮議をいたしまする。

藤浪　何の手ぬるいお前の詮議、是非とも萬は築山殿へ。
八重　イヤ、大殿の仰せをお背きあるか。
藤浪　全く以て。
八重、但しはお用ひありませぬか。
藤浪　サア、それは。
八重　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
八重　藤浪樣、何とでござりまする。
　ト藤浪詰ろ、此の時杉戸の内より、以前のすみれ野出で、
すみ　只今お襖越しに、築山樣がお聞き遊ばし、それは〳〵一方ならぬ御立腹、引立て來いとの仰せでござりまする。
八重　でも只今大殿樣より、厚き仰せ。
すみ　いや女儀の事は築山樣の御差配を、受けませねばなりませぬ、但しそむいてもかまひませぬか。
八重　何のそむいてよろしうござりませうや。

すみ　背かずば、控へなさんせ。

藤浪　それ・萬めを。

ふとでこ　はゝ。（ト両人双方よりかゝりて、）さア、きり／＼と立ちや。

お萬　そんならどうでも私を。

藤浪　知れたことでござんす。

お萬　えゝ、情ない事ぢやなア。

ト泣落すを、道具替りの知せ。かんの唄になり、奥女中皆々お萬を引立てる。八重機取りすがるを拂ひ退けろ、無念の思入にて此道具よろしく廻る。

（同家康居間の場）――本舞臺三方折廻し、正面二間の床の間、これに三幅對の幅をかけ、花瓶に時侯の花をいけ、續いて上下は襖、下手杉戸の出這入り。大欄間をおろし、揚幕へも杉戸を取付けある、調べにて納まろ。と爰に家康茶木綿の褥の上に、ごまがら袴、すゝ竹色の羽織着附にて住居ゐろ、傍らに亂れ箱、刀掛、脇息直しあり、はるか後ろに一、二、三、四の近習四人、袴なりにて控へ居る。

家康　して、申付けたる作左衛門は、いまだ出仕いたさぬか。

一　ハッ、先刻直様お召しの由を、
二　申し遣はしましてござりますれば、
三　最早程なく作左衞門、
四　出仕いたすで、
四人　ござりまする。
家康　何にいたせ火急な場合ぢや、今一應迎へに參れ。
一　いさい承知、
四人　仕りまする。

ト近習の一思入あつて立ちかける、此の時直に下手より本多作左衞門、繼上下、年寄りにて鼠地蜘の巣立縞のはかま、無地着附にて平伏する。

家康　ヲヽ作左衞門參つたか。
本多　火急のお召し、何御用にござりまする。
家康　其方に密談いたし度き儀に附いて、呼寄せしぞ。
本多　ハッ。

一　御密談とござりますれば、
二　我々は席を遠ざけ、
三　御次へ參るで、
四　ござりまする。
四人　我君、御免。（ト下手へはひる。）
本多　シテ、御密談とござりまするは。
家康　其の仔細と申すは、其方支配内に、產見村と申す所があつたな。
本多　ござりまする、あの邊の農人共は愚昧の者のみにて、文字もろく／＼存じませぬゆゑ、制札などは平假名にて記し置きまする。
家康　先達てあの邊を、鷹野の砌り通行いたしたな。
本多　御意にござりまする、あの砌りは手前に役向きござりまして、本多平八郎が御供いたして、御鷹野でござりました。
家康　其砌り農夫方へ、雨宿りに立寄つたのぢや。
本多　へえ、左樣承りましてござりまする。

家康　其方へ大久保より申入れ、萬と申す女を奥向へ出したではないか。
本多　あれは權右衛門娘萬と申す女、御湯殿に御奉公いたし勤め居ります。
家康　その萬に付いて密談があるのぢや。
本多　ムヽ、敵の間者でもござりましたか。
家康　かれは予が湯殿へ參り居り、(ト言ひ兼ねる思入、よろしくまぎらして、)よう奉公いたし居る。
本多　御湯殿の儀にござりますれば、御奉公の常と存じまする。
家康　その湯殿にてよう快く、予が背中を流したのぢや。
本多　へえい。
家康　その萬が、予が背中を流したのぢや、志しを不便に存じ、實はあの、手を付けたのぢや。
　　ト思ひ切つて云ふ、作左衛門呆れし思入にて氣をかへ、耳へ聞きとれぬ思入にて、
本多　作左衛門年取りまして、どうもおつしやる事が聞きとれませぬ、どうかもうちと御高聲に、仰せられて下さりませ。(ト家康きまりわるきこなしにて。)
家康　彼れは忠義者にて、予が手を、湯殿にて、手を、大がい爰らにて推察いたせ。
本多　手前にては御役に立ちませぬか。御用に辨ぜずば、手前御次へ下りませう。

家康　こりや〳〵、さう性急に氣を持たずと、落着いて聞いてくれ。

本多　手前などは本多忠勝が血統にて、戰場にては鬼をもひしぐ武將の家柄、世の通例の事なぞは、甚だ以て不得手でござる。

家康　ヲヽよいわ〳〵、今申す萬が事、予が背中を流した忠義の志し、不便ゆゑに手を付けたのぢや。

ト大きく思ひ切つて云ふ。

本多　えゝ、（ト氣をかへて、）左樣でござるか、さういふ事なれば、それと仰せあればよいに、何か御前の仰せがとぎれ〳〵の御話にて、身共の心に受取れませなんだ、ハヽヽ、手前なども若年の砌りは、夜詰の手廻りの女に手を付け、奥に隱しおいて。（トのつて話をする內、互ひに顏を見合せ、）ムヽハヽヽヽ。左樣なれば萬を、早速奥向きへ出しませう、して役向きを改めませう。

トしやべり付けられ、家康云ひ兼ねる思入あつて。

家康　いや〳〵、其萬が懷胎いたし居るて。

本多　懷妊を、忝い〳〵、何人なりとも御仕込み遊ばせ、男子でござれば信康君の御控へにも相成りますれば、早速に奥向きに取計らひまする。（ト云ひかけ、急いで立ちかけるを引留め、）

家康　まア聞きやれさ。（ト下に居させ、）然るに最前、家風を犯したとあつて、その萬を老女藤浪が我面

前へ引出し、其相手を申せと詮議をなす、かゝる事は予も始めて知りしが、奥向の者いかにして知りたるか合點行かず、然るに間者に入りし怪典とやら申す修驗者、藤浪を以て奥築山へ内通せしと覺えたり、それに依つて藤浪築山の指圖にて、折檻なすと覺えたり、さすれば彼の萬もよもや申しはいたすまじきが、もし折檻に怺へ兼ねて、口外なさば身の大事、いかにも不便と思ふがゆゑ、そちを頼みたいと申すは爰の事ぢや。

本多　成程、打捨て置かれぬ、御胤が大事。

家康　如何いたしたらよからうの。（ト作左衞門考へ、）

本多　何にいたせ當人をば、御庭へ忍びつれ參らせ。

家康　何かとよきに、そちを頼むぞ。

本多　然らば直樣、これよりして。（トつか／＼と下手へ來り、向うへ思入、）御免。

ト早舞にて花道へ足早にはひる。家康向うへ思入あつて、

家康　どうか首尾よく。（ト案じる思入。）いたせばよいが。

ト鼻紙臺の紙を取るを、木の頭、よろしく鼻を拭ふ。これにてよろしく

幕

ト後水の音にてつなぎ、直に引返す。

（築山御殿奥庭の場）――本舞臺上寄りに九尺の茶座敷、數寄屋建、中足根府川石の沓脱、見附床の間違ひ棚茶立口三方とも竹組の障子を立廻しある、尤も大和葺き屋根附、上下網代塀にて見切り、正面に泉水八ツ橋、杜若の盛り、此の向う築山、樹木、葉櫻、奥庭の遠見、若楓若櫻の釣枝よろしく。水の音、夜廻りの棒の音にて幕明く。

〽更渡る鐘も冴え行く春の夜の、樹々の梢も青葉して、風の音さへ靜なる、流石風流つき山の物好みとこそ見えにけり。

トよき程に、上手より藤浪出來り、下手より轡野すみれ野庭下駄にて出來り、

くつ　藤浪樣、御役目、

すみ　御苦勞に、

兩人　存じまする。

藤浪　お前方にも御苦勞千萬、ほんに〳〵大それた女め、蟲も殺さぬ顔をして、我君樣をおだまし申し御胤を宿すなんぞとは、押の強い女でござんす。

すみ　女中も多いに下司女の、お萬に見かへて御臺樣を、御離緣を遊ばすとは、あんまりあきれた大殿樣。

くつ　さうとも知らず此程より、我君樣と御臺樣の御仲合がお遠々しいので、せめてお付きの私共でも御前に叶ひて奥御殿へ、しげ／＼御入りのある樣にと、心を盡した甲斐もなく、下司女めに出しぬかれては、こんな悔しい事はござりませぬ。

すみ　私共は御前樣が、御厠へお立寄り遊ばした時、どうぞ嬉しいお詞でも、頂くやうにと願うて居たが、御手の付くのに事をかへ、御湯殿番の萬などに、御手が付くとは怪しからぬ。

くつ　此の腹いせに御臺樣の、御悋氣へ付込んで、思入ほえ面かゝせてやりませう。

藤浪　何はともあれあの萬を、庭前へ引出しめされ。

すみ　最早夜更に相成りますれば。

くつ　築山樣へ申上げませう。

すみ　それがよろしう、

兩人　ござりまする。

〽三人して庭前の障子をそつと引明くれば、築山御前は打見やり、

築山　ヲ、二人の者大儀ぢやの。
藤浪　ハヽ、仰せの通り下司女郎は、お庭の角の雜部屋へくゝし上げ、張番いたさせおきました。
くつ　時刻もよろしうござりますれば、
すみ　是へ引出し、御詮議を遊ばしまするが、
兩人　よろしうござりまする。
〽申上ぐれば、打ほゝゑみ、
築山　それ、引出してよからう。
すみ
くつ　畏りました。それ、罪人是れへ、引出しめされ。
ト揚幕にて、おふと、おでこハアと答へる。
〽無慙なるかな身に宿す胤も嫉妬の枷になる、お萬は心細繩にしめからまれてしを〳〵と、進まぬ足に彳めば、情容赦もあら〳〵しく。
ト花道よりお萬以前の裝の上を細引にて縛り上げ、以前の二人割竹を持ち繩取りの奴にて添ひ出來り、
ふと　エヽ、埓の明かぬ、
でこ　早う向うへ行かぬかいなう。

お萬　ハイ只今參りまするが、どうぞ御慈悲にお二人樣、築山樣へよいやうに、御詫びなされて下さりませ。
ふと　エヽ、そんな得手勝手な、お願ひなどをしようぞい。
でこ　自分で仕出かした事ゆゑに、斯うしたものぢやとあきらめて、
ふと　きり〳〵、向うへ、
兩人　行きやいなう。
お萬　エヽ、情ない事ぢやなア。
〽呵責の場所へと引かれ來る。
兩人　下に居や。
トおでこ繩を引き、こづき、割竹にて追立て、よろしく舞臺へ來て、お萬うづくまる。
ふと　ハツ、引立てまして、
兩人　ござりまする。
〽築山御前は座を進め、
築山　こりや萬、それへ出や。ハテ何も恐るゝことはない、ずつとそれへ進みやいの。

お萬　ハア。（ト琴唄の合方になり、）

築山　貴賤上下の隔てはあるとも、女子の情に替りはない、もし此事知れる時は、語らふ男へ情が立たぬと深く包みかくすであらうが、斯うした譯とツイこゝで、自らに云うたなら、又よい樣に計らふ程に、心配いたさず明して聞かしや、假令相手が御前樣であらうとも、悋氣嫉妬は女のたしなみ、穩便に濟ます心なれば、包まず云うてくれたがよい。產は女子の大役ゆゑ、分けて大事にせねばならぬ。夜風にあたり深夜迄、さうして居やるは其身の毒、萬一御前樣のお胤をば、宿して居やれば、猶以て身二つになる迄は大事の體、掛りの者へ申付け、安々平產ある樣に手當もいたし遣はさねば、自らとても御前樣へ濟みませぬわいなう。

〽猫撫聲にすかし付け、聞かんと企む御樣子にこなたは尙も恐ろしく、（トよろしくあつて、）

お萬　ても勿體ない其のお詞、此身に覺えがござりますれば、有體に申上げまするが、全く以て我君樣の、お胤を宿したなんぞとは、露いさゝかも覺えぬ事、どうぞ御情御慈悲にて、此儘お許し下さりませ、偏にお願ひ申しまする。

〽御慈悲々々とばかりにて、涙と共にひれ伏せば、傍へ老女がしや〳〵り出で、（ト藤浪出で、）

藤浪　エヽ、あれ程迄に御臺樣が、事を分けておつしやるに、そちや有難いとも思はいで、あく迄知ら

ぬと云ひ張るか、これ、よう物を積つて見や、御前の御手が付かぬものが、何でお腹が其樣に大きくなつてよいものか、脹滿などと云やつても病ひで大きくふくれるのと、懷妊してふくれたとは、一と目見れば直に知れる、それをとやかう云ひ張るは、そりやしぶといといふ者ぢやぞ。

くつ　但しは御前の御手が付いて懷妊した覺えがなくば、誰と不義をばさつしやつた。女護の島ではあるまいし、相手のないのに子を孕む、よもや謂れもござるまい。

すみ　男嚴しき御殿ゆゑ、忍び男を引き入れて、樂しむ事は出來ぬ筈、まさか狸の化物を、抱いて寐たとも言はれまい。

ふと　朋輩中の私等さへ、知らずに居たがいま〳〵しい。

でこ　どうしてそんなになりやつたのだ。

藤浪　サア有體に、

五人　申上ぎや。

ト　へどうぢや〳〵と口々に、問ひ詰められて身をふるはせ。

お萬　サア其の相手はござりますれど、御前樣ではござりませぬ。

藤浪　さうしてそれは、

五人　誰ぢやぞいなア。

お萬　其の御名を申せば御身分に、かゝはる事ゆゑ申されませぬ。

藤浪　イヤ云はれぬでは濟まぬぞや、御前樣にお疑ひが掛りし上御臺樣にも御心配、三方四方へ御迷惑の、かゝりやつながる我々迄、斯うして吟味をせにやならぬ。サア〳〵云うてしまや。

くつ　誰であらうと有體に、申上げれば私らも、

すみ　御慈悲ぐらゐは御臺樣へ、お願ひ申してやる程に、

ふと　サア〳〵相手を有體に、

でこ　サア〳〵云うて、

五人　しまやいなう。

お萬　サア、それは、

藤浪　云はぬは矢張り、

五人　御前樣か。

お萬　いえ、左樣では。

藤浪　左樣でなくば誰ぢやぞいなう。

お萬　サア、それは。

五人　サア、

藤浪　いけしぶとい、云はねば我身の、

五人　命がないぞ。（ト四人割竹にてお萬を打ちすゑる。お萬苦痛の體にて、）

お萬　たとひ命を捨てましても、是ればつかりは申されませぬ。

〽齒を喰ひしばり覺悟の體、御臺は見るより、

ト お萬愁ひのこなし、築山御前きつとなつて、

築山　こりや、そち達では埒が明ぬ、妾が詮議をしませうわいの。

藤浪　スリヤ、御自身に、

五人　御臺様が。

築山　ヲヽ、妾に任せて置きやいの。

〽烟管携へしづ〳〵と、庭へ立り立ち進み寄り、

ト琴入り六段の合方になり、藤浪つか〳〵と二重へ上り、築山の手を持添へ介抱し乍ら、二重より下りて來る、此内おでこ竹床几をよき所へ直す。轡野二重の褥を持來り、床几へ敷く事、築山よろしく

床几へかける事あつて、

こりや萬、そなたは命を失うても、云はぬといふは兩親を見捨ても、男をかばふ心なるか。

お萬 サア產の親より大切な、育ての親にござりますれば、濟まぬ事ではござりまするが、斯樣な譯になりましては、此世で恩は返せませぬゆゑ、あの世へ參り恩返しを、いたす心でござりまする。

築山 それは惡い合點、親子は一世夫婦は二世、添はれぬ夫にあの世で逢はれる事もあらうが、親子は此世限りにて、もうあの世では逢はれぬぞや、其親達の歎きも厭はず、相手を云はぬは不孝の罪、相手さへ知れたなら、そなたの命は取りませぬ。サア有體に云うてしまや、ハテ慈悲は此方にあるわいなう。

お萬 でも相手のお方に迄、御難儀かけては濟みませぬ。

築山 ハテ其相手とて次第によりては、聞捨てにしてやりませう。

くつ サア、早う云うて聞かしや。

お萬 サア、それは。

築山 男は誰ぢや。

お萬 サア。

築山　サア。

藤浪　サア〳〵〳〵。

築山　どうぢやぞいなう。

〽責付けられて女氣の、僞り云うて脱れんと、（トやはり六段の生殺し。）

お萬　ハテ、其相手は修驗者の、怪典樣でござりまする。

築山　なに、修驗者の、

五人　怪典殿。

藤浪　さうしてあの怪典殿とは、いつの頃から不義をしをつたぞ。

お萬　ハイ、あの先程。

築山　何と。

お萬　いえ、先月でござりますわいの。

藤浪　あのこゝな横道者めが。（トお萬を引付け、）こりややい、繩目にあつて引かれしゆゑ、あの怪典と云ひ拔ければ、相手が居ねば當座を脱れ、又御臺樣が御贔屓遊ばす修驗者ゆゑ、おのれの罪を脱れるかと、詞工みの其の言拔け。それを誠と思ふことか、怪典は當春より奥向へ出入りの者、わ

づか二タ月たゝぬ内に、かくされぬ程其腹が、大きうなつてよいものか、情を以て詮議をすれば
よいかと思ひ付上り、御臺様を欺くやつ、サアきり／＼云うてしまやいなう。

〽邪險に詰めるまむし指ひねり上げ／＼、惣身はあざに爪のあと、お萬は苦痛にたえ難く、

ト此内藤浪さいなむ、おふと、すみれ野打ちすえろ、お萬は是を見て逃げんとするを、繩をむごく引き、五人にてめつた打ちに打つ、お萬取亂したえ／＼のこなし、かすめて水の音、よろしく。

お萬　御臺様、御免遊ばせ、怪典様ではござりませぬ。

築山　さうして、誰ぢや。

お萬　是ればかりは申されませぬ。

築山　エヽ、云はずば斯うして、言はして見せう。

〽又も打据え手の先の、しびれて暫したためらへば、

ト築山きせるにて打据える、とゞ我手のしびれし思入にて、煙管を取落す。

藤浪　御臺様、お休み遊ばせ、あなたに代つて私が、もう一責せめませう。

築山　ヲヽ、替る／＼打据えて、白狀をさせませう。

ト築山の右の手を縛野さすり介抱して、床几にかけさせろ。五人の女めい／＼割竹を持ち、左右を取

りまき。

くつ　サア、これからは此方のもの、言はぬとあれば云ふ樣にして云はせる。
すみ　そなたの骨が碎けるか。
ふと　こつちの腕がしびれるか。
でこ　二つ一つの根くらべ。
すみ　しぶとい女め、
五人　覺悟しや。

〽かよわきものを大勢が、よつてかゝつてめつた打ち、苦しむ聲もたえ〴〵に。

ト五人して割竹にて打廻す、お萬たまり兼ね、

お萬　エヽ皆さん、お情ない。

〽鬼にもまさる地獄の責、宿せし御胤と身二つになる迄厭ふ此の體と、云ふに云はれぬ此場の切なさ、胸も張りさくばかりなり。

いつその事一思ひに、お殺しなされて下さりませ。
粂山　いや、白狀せねば命は取らぬ。

藤浪　サア、きり／＼と、

五人　白狀しや。

〽情白髮と白齒の娘、面白半分打据ゆれば、うんとばかりに息たえたり。

ト藤浪おふと、おでこさいなむ、藤浪手荒く打つ、お萬氣絶する。

藤浪　や、こりや女郎めは、

五人　絶え入りました。

築山　それ、氣附の用意。

五人　ハア。（トメリヤスになる。）

〽又も打たんとする所へ、

ト揚幕より中老八重機先に、五人の腰元、手ぼんぼりを持ち、庭下駄にて出で控へ、

八重　御臺樣へ一同の者、

腰元六人　お願ひを申上げまする。

築山　なに、自らへ願ひとは。

八重　不義いたづらをいたしましたる、是れなる萬の儀に付いて、一同の者打揃ひ、御慈悲願ひに出で

ました。

皐月　何卒此の儘私共へ、

あや　御下げを仰付けられまするやう、

霧島　偏へにお願ひ、

六人　申上げまする。

築山　折角の願ひなれど、不義の相手を云はぬ内は、其方達へは渡されぬ。

八重　サア、其の御相手を申上げぬ内、却てお下げを遊ばしまするが、御爲の樣に存じられます。

藤浪　なに、相手を云はぬが、

五人　お爲とは。

八重　此儀に付いて御臺樣へ、密々申上げ度き事あり、暫時の間お人拂ひを、願はしう存じまする。

〽何か樣子のある事と、邊り見まはし、（ト築山思入あつて、）

築山　皆の者、控へてたも。

六人　ハア。

〽皆々連れ立ちたつて行く。

ト腰元六人下手柴垣の間より奥庭へはひろ。

築山　して自らに密々の、用事と云ふは如何なる仔細ぢや。

八重　御臺樣、御改心あそばしませ。

築山　何といやる。

八重　たゞ斯樣に申上げては、御合點が參りますまい、先頃よりの御企て、餘人は知らず私は、よく存じて居りまする。

築山　ヤ。（トぎつくりこなし。）

八重　なに御不自由なき御身にて、伯父君樣の御謀叛をお晴らし遊ばすお思ひ立にて、信康樣を御勸め遊ばす御心ならんが、もはや先刻御荷擔に語らひたまひし怪典とやら我君樣の御目が付き、御表へ引かれし上は、御謀叛露顯はまのあたり、血で血を洗ふ御詮議ゆゑ、たゞ何事も穩便に、これなる萬も此儘に不義の相手を云はずして、お許しあれば我君も又御宥免遊ばして、あなたも元の御臺樣と、ならせたまふよすがにもなりませうと存じまするが、さもなき時はゆかりの者の、白狀によりあなた樣や、信康樣迄お祟りが掛るまいとも申されませぬ、そこを存じてお相手を白狀させずに御慈悲にて、御見脫し遊ばしまするがあなた樣のお爲かと、憚り乍ら存じまする。

築山　成程そちの云やる通り、この萬は許しませう。

八重　すりや、お許しなされて下さりまするか。

築山　ヲヽそちなればこそ其様に異見してたもるが、重々自らがあやまりゆゑ、大義を止まり改心して、此身の罪を詫入りませう。

八重　足らはぬ此身の御諫めを、お用ひなされて下さりますとは、此上もなき身の面目、有難う存じまする。

築山　そなた、よきに計らうてたも。

八重　畏まりました。

〽油斷見すまし後ろより、エイと一聲たゞ一打、さしも手練のお手の内、

ト八重機有合ふ手ぼんぼりを持ちて先に立ち、下手の庭へ案内の心にて行きかける、築山油斷を見すまし、後ろより懐劍にて一突に八重機へ切付ける、是れにて八重機ウンと落入る、直に上手より以前の藤浪、築山の持ちし懐劍をぬぐふ。

藤浪　ヤヽこりや八重機を。

築山　コレ。

〽邊り見廻し〳〵て、（ト築山あたりへこなしあつて、藤浪に呑込ませる。）

藤浪　左樣なれば、御臺樣。

築山　早う取片付けい。

〽と仰せに藤浪心得て、血を拭ひたる懷劍をさし上ぐればにつこと笑み、あたり憚りしづしづと障子建切り入りにける。

トよろしくあつて、築山上手の茶座敷へはひる。

〽後には局が氣味惡く、

藤浪　エ、血だらけな此の死骸、取片付けいとは、いやな役ぢや。

〽つぶやき〳〵、

ト八重機の死骸を池の中へ打込み、思入あつて上手へはひる。

〽入る後の月も限なき眞夜中過ぎ、時分はよしと小蔭より窺ひ出でたる作左衞門、內意の氣附腰提より取出してかたへなる手洗鉢の水、これ幸ひと口にふくませ介抱なす、お萬は息を吹返し、

ト此內メリヤス、蛙の聲、本釣鐘、水の音にて下手の柴垣より、前幕の本多、野袴大小にて窺ひ〳〵

出で、お萬の姿を見て傍へ來り、介抱して腰より氣附を出し、手洗鉢の水にて飲ませ、活を入れる、お萬心付き、顏を見て、

お萬　ヤ、あなたは。

本多　ア、コレ、シイ――。

ト作左衞門お萬に囁き呑込ませる、此後へおでこ窺ひ出で、是れを見付け、

〽何か囁きせり立てる、折柄窺ふ以前の腰元、

でこ　怪しい曲者。

ト後ろより本多に掛る、本多立廻つて上手へ投げのけ、しごきを取りこれを冠り、お萬の手をとり其手を肩にかけ、擔いで下手へはひる。おでこ心附き、あたりを見廻して、

ヤア、これは。モシ皆さん、曲者がはひりました。モシ、皆さん〳〵。

トわめき立てる、藤浪すみれ野出で來り、

藤浪　なに、狼籍者が、

四人　はひりしとは。

でこ　ハテ、萬をつれて逃げましたわいなア。

四人　ヤアく。
藤浪　さうしてそれは、何者が、
くつ　萬をつれて、
四人　逃げましたぞ。
でこ　さア夜分の事ゆゑ顏も知れず、掟嚴しい奧御殿へ、どこからはひつて來ましたか、大方天狗でござりませう。
ふと　エヽ、何を言やるぞいの。
藤浪　何はしかれ御臺樣へ、お知らせ申さにやならぬ。
ト此時築山障子をあけ、此事を聞き居る、皆々これを見て、
五人　扨はお聞きでござりましたか。
築山　正しく御前のお指圖ならん、後追ひかけて取返しや。
藤浪　左樣なれば、直に、
五人　是より。
築山　早う行きや。

五人ハヽ。

〳〵と重き尻邊に太い足、地ひゞきさせて走り行く。

ト藤浪先に四人附添ひ、逸散に花道へはひる。

〳〵後に無念の築山御前、吐息を次の一間より、窺ふ近習目くばせなし、

ト此内築山立上り、向うを見詰めきつとなし、此の時屋體の奥庭より近習一、袴股立にて、十手を持ち窺ひ出で、後ろより、

一 御免。

ト十手にて打つて掛り、羽がひじめにするをふりほどく、茶立口より近習の二御免と打つてかゝる、琴唄の合方になり、築山つか〳〵と二重のなげしに掛りし黑塗りの長刀を取り、四人を相手に仕ぬきの立廻り十分にあつて、四人は向うへ逃げてはひる。築山も追つて花道へ掛る、ツッかけになり、花道より服部半藏、袴股立にて出來り、花道にて兩人顏見合せ、きつと見得、肥前節の合方になり、

築山 そちや半藏、我君の言附ぢやな。

服部 仰せいかにも御尤も、築山樣には次第に募る御陰謀、先刻怪典の白狀により、露顯いたせば何もかも顯はれたり、御後悔して御愼みなさるやさもなくば、織田家への聞え是非に及ばず、繩打つ

て御前へ引立てませうや、有無の御返事、拙者へ仰せ聞けられ下さりませう。

ト云ひ乍らだん〳〵と押戻し、兩人舞臺へ來て、

築山　慮外の半藏、覺悟しや。

服部　御免。

ト半藏扇にて打つて掛る、築山長刀にて立廻る內、ト〻扇にて長刀を拂ひ落す、築山是迄とあたりに落散る我が懷劍を取り上げ、乳の下をつき、ハアと下に居る。

ヤ、御改心の御自殺なるや。

〽築山御前は髮逆立て、

築山　ヤア、改心などゝは汚らはしい。（ト篠入りの合方になり、）陰謀なりと申せども、伯父君今川義元公の怨敵ゆゑに信長を、討たんと計るは武門の意地、それをうとみて我君樣妾を深く憎みたまひ、見かへる者に事を替へ、下司女めに御心を移させたまふはお情ない、かゝる事に相成るも、元はと云へば女めゆゑ、生きて恨みは果さずとも、魂魄此土に止りて、無念を晴らさでおくべきか。

ト築山恨みのこなしよろしくあつて、件の懷劍にて乳の下を引廻し、

〽物狂ほしく立上り、はつたと睨む形相は、鬼女の姿を顯はせり。

ト懐劍を抜き捨て、きつと見詰める、風の音樣のドロ／＼になり、件の長刀をかまへ詰寄る見得、

〽怪し恐ろし。

ト床の三重、薄ドロ／＼にて築山向うを見詰める、服部引張りの見得にてよろしく。

幕

五幕目

濱松城大廣間の場
二股城內切腹の場

同返し

遠州濱松城中の場

〔役名――徳川家康、服部半藏、山形山城守、徳川信康、本多作左衞門、酒井左衞門尉忠次、永田彌八郎、近臣宮居新十郎、同駒井角之進、同寶井八十郎、同森下錄之助、近習、小姓保川惣次、同宮崎主水、同櫛田嘉平、同西尾左門、同里村紋彌等。〕

〔濱松城大廣間の場〕――本舞臺一面の平舞臺向う上手一間の大床の間、續いて二葉葵の紋散しの襖を折廻し、上下襖出這入り高麗緣の薄べりを敷詰め、日覆より同じ紋散しの大欄間をおろし、揚幕杉戸の出這入り、○△□◎の四人居並び、時の太鼓にて幕明く。

○扨今般の一條は容易ならざる事柄にて、當時勇猛天下に轟く織田家の疑惑蒙りて、御前に於ても此程より殊の外なる御心配。

△是と申すも北の方、築山樣には日頃から嫉みの御心深くして、御奧へお出でのあらざるは、御召使ひのなす業と、それのみ朝暮恨みたまひ、終には重き御しつらひ。

□御病氣平癒祈念の爲め、身許知れざる修驗者の怪典とやらを近く召され、永く御殿へ止め置かれしが、元より奸智にたけし者ゆゑ、彼が佞辯にまどはされ、

◎御發明でも女儀ゆゑに、企みの罠に掛らせたまひ、甲斐の武田へ心を寄せられ、勝頼から送りたる密書を計らずおぐし上げの、腰元琴路より奪ひ取られ、

○岡崎樣の御簾中へ、身近く仕うる琴路が妹、松野へそれを送りしかば、忽ち密事露顯なし、御簾中よりお里なる、織田家へお知らせありしゆゑ、

△御身に覺えのなき事乍ら、岡崎樣には御謀叛と、專ら世上で取沙汰なすも、正しく武田の間者なる、彼の修驗の怪典が、流言なるに疑ひなし。

□是れ卽ち甲斐の計略にて、織田徳川を不和となし其虚を計つて討入る所存、早くも我君察したまひ、酒井殿を尾州公へ遣はされしが、

◎　其後何の沙汰もなきゆゑ、彼の地の首尾は如何なるかと、上を始め我々迄、日夜相待ち居つたる所、今日到着と先觸の者歸りしゆゑ、

○　酒井殿の歸國をば、固唾を呑んで相待ち居るに、

△　いまだ遠見に出でたる者が、到着なきは、

□　彼の諺に申す如く、待たるゝ身より待つ身の譬、

◎　實に一時千金の、思ひといふは此の事なり。

○　ハテ、待久しき、

四人　事でござる。（ト花道より、上下の侍出で。）

侍　ハヽ、申上げまする。

○　何事なるぞ。

侍　只今酒井左衞門尉殿、御到着にござりまする。

○　なに、酒井氏が、

四人　御到着とな。

侍　宜しく御披露願ひ上げまする。

四人　承知いたした。
侍　ハヽ。（ト引返してはひる。）
○　待ちもうけたる酒井氏。
△　御到着とあるからは、
□　此趣きを、
四人　我君ハ。（ト四人立ち掛るを。）
本多　イヤ、其の知らせには及び申さぬ。
山城　只今、それへ、
服部　御出席。
ト合方にて、上手襖より本多作左衛門、山形山城守、服部半藏、上下の拵へにて出る。
○　スリヤ、我君には、
四人　此所へ、
本多　程なく入らせられるぞ。
四人　ハヽ。

ト下手へ並ぶ、時計の音序の舞家康羽織袴にて、近習を召しつれ出る、皆々ハツと辭儀をする。

家康　尾州表へ使者に參りし、左衞門尉歸りしとか。

○　ハ、、只今到着いたせしと、

四人　申し通じてござりまする。

本多　旅中の儘ゆゑ詰所にて、

山形　服改めて、忠次には、

服部　御目見得いたすでござりまする。

ト バタ〳〵になり、花道より酒井左衞門尉上下にて出來り、花道にて、

酒井　酒井左衞門尉、只今到着仕つてござりまする。

家康　チヽ、左衞門尉待兼ねしぞ、近う進め。

酒井　ハ、。

本多　御前の仰せ遠慮めされず、

山形　酒井氏には、

服部　急いでこれへ。

酒井　ハヽ、然らば御免下さりませう。（ト舞臺へ來り、）先づ麗はしき尊顏を拜し、恐悅至極にござりまする。

家康　見れば旅中の勞れもなく、予に於ても大慶なるぞ。

酒井　ハヽ、御懇の御意を蒙りまして、有難く存じ奉りまする。

本多　今般御前の御眼鏡にて、尾州表へ火急の御使者、

山形　名におふ氣早の信長ゆゑ、なかく〵以て餘人には、

服部　勤まり難き此の大役、御苦勞至極に、

皆々　存じまする。

家康　して、織田殿の樣子はどうぢや。

酒井　ハヽ、只今言上仕るでござりまする。（ト合方にて忠次前へ出て、）尾州表へ御名代の御役目蒙り罷り越し、信長公に謁せし所、御近習衆を遠ざけられ、ひそかに拙者へ仰せありしは今我娘を信康の室に送りて因みを結べば、左樣の事はあるまじきと我は思へど表裏の人心、信康事はかねてより竊に謀叛の企てあつて、母築山と諸共に甲斐の武田へ隨身せしよし、汝は家の長臣ゆゑよも存ぜざる事あるまじと、氣色をかへて御尋ねに、コハ何者の流言なるか、毛頭覺えござらぬ事と

申譯いたせしかど、武田へ隨身いたせしは、確證あつての事なるぞと取出されし一通は、築山樣へ勝頼が密事を告げし文面に、脫れ難なき確證ゆゑ再應申し解きたれど、岡崎樣の御簾中より送りし箇條を誠と仕たまひ、家康事は兎も角も勝頼に母築山の手引にて隨身なせしと思ふなり、立歸らば信長が、此の疑ひの晴れる樣、取計らうて返答せよと、主人に申せと云ひ捨て、其儘奧へ入りたまへば是非なく直にお暇なし、片時も早く此事を、君へ言上仕らんと驛馬に鞭打ち、中有を走つて歸つてござる。

家康　奧築山は血を分けし、今川殿の姪ゆゑに、伯父の敵と織田殿を心に恨み居つたる所、彼の修驗者の怪典は、武田方の間者にて、これが勸めに勝頼へ心を通じて織田殿を、討たんと計りし密議ゆゑ、終にはかゝる事となつたり、罪を責むべき其者は今は世に亡き冥府の客、して築山へ勝頼が送りし密書と申すのは、如何なる事が認めありしぞ。

酒井　則ち是なる密書、篤と御覽下さりませう。(ト出す。)

家康　ムヽ、斯樣な事にならうかと、存ぜしゆゑに此程より、二股城へ信康を呼寄せ謹愼させ置きしが、此上如何なすべきか、作左を始め皆の者、めい〳〵所存を申し聞かせよ。

本多　仰せの如く信長公の、疑念は容易に解けますまい、所謂膝とも談合なれど、此の作左も年老いて

よつほど焼がもどつたゆゑ、なか〳〵急に思案は出ませぬ、まづ壯年の者からして、所存を申上ぐるがよい。まづ誰彼と云はうより、山城殿より御所存を、承り度う存ずるて。

山形 古老を差置き拙者などが、發言なすは恐れあれど、猶豫いたす場合にあらねば、愚存を申し上げまするが、武田方より送りたる密書が證據となる上は、内通なせし其者の御成敗をなされずば、申譯は立ちますまい。御疑念ありし岡崎樣には元より御存じなき事にて、武田方へ内通せしは此の山形山城ゆゑ、則ち成敗いたせしと、拙者が首をお送りあらば、信長殿の疑念も晴れ、事穩便に濟まうかと、憚り乍ら存じまする。

服部 流石は山形山城殿内通なせし罪を負ひ、一命捨て穩便の沙汰を願ふは感心いたす。然し斯程の巧みをなすのに、たゞ一人では誠しからず、拙者は貴殿と同意ゆゑ兼ねて兩人申合せ、事を成したる體にして共々切腹仕らん、酒井氏には兩人の首級を持つて織田家へ行き、二タ心ある奸臣を斯く成敗のいたせしと誠しやかに申しなし、事なく無事に納まる樣貴殿の御配慮賴み存ずる。

家康 成程一命捨て信康へ、掛りし疑念を晴らさんとは實にあつぱれの二人の所存、内通なせし罪を負ひ汚名を殘して主人の爲め、一命捨つるは戰場の、討死よりもはるかに勝り、我に於ても忝いぞよ。

山城服部　ハヽ、末座に控へし拙者ども、申上ぐるも恐入れど、愚存にてはござれども、當家に覺えなき事を再應織田家へ云ひ解かば、聞入れのなき事もあるまじ。

新十　萬一それも聞入れられずば、一戰に及ぶ所存でござる。

八十　然る上にて身の潔白を、お立てなさるがよろしからうと存じまする、元より淺智の拙者ども、取るに足らざる所存乍ら、

角之　御老功の本多氏、貴殿は如何。

四人　思召さるゝぞ。（ト本多だまつて考へて居るゆゑ。）

家康　イヤ／＼此の家康に於ても、父とも思ふ本多作左、そちが所存を聞きたいは、今山形服部の兩人が、無實の罪を身に負ひて、一命捨つるをよしと思ふか、大久保始め四人の者が一戰なして潔白立つるをよしと思ふか、作左汝は何れを取るぞ。

本多　ハヽ、山形服部兩人が無實の罪を其身に負ひ、切腹なさんと申すのは、あつぱれ乍らよろしからず、大久保始め四人の者が討手を引受け一戰なし、潔白立てると申すのも、勇ましけれどよろしからず、兩樣共に心にかなはぬ。

山形　われ／＼共が今の發言、よろしからずと云はるゝは、

服部　定めて貴殿の御所存は、衆に勝れし事ならん。
酒井　常より君が何事も、御相談遊ばさるゝ、御家の老臣本多氏、
○　如何なる御所存ある事か。
△　後學の爲め、
皆々　承りたい。
本多　拙者が所存は外ならず一旦受けたる謀叛の疑ひ、おいたはしくはござれども、信康公が御生害を遊ばすより外はござらぬ。
山形　ヤア信康公に御切腹を、おさせ申す位なら、所存も何も入りませぬ。
服部　御惣領を失はんとは、常に似合はぬ本多氏、
○　成程燒がもどりしと、
△　仰せありしが、
皆々　御尤もでござる。
本多　燒の廻つた作左衛門が、所詮各々の氣には入るまい。それゆゑ今迄默して居つたが、達てと云ふゆゑ申したが、惡しくばよしにさつしやるがよい。

家康　イヤ、予が所存は老臣の作左衛門と同意なるぞ。

山形　こは情なき思召し、築山樣は存ぜねど、岡崎樣に限つては決して左樣の事なきは、拙者なども存じ申す。

服部　それを武田へ與せしと、疑ひ受けし申譯に、御生害をおさせ申すは、あまりと云へば御親子の。

山形　御情愛が薄きかと。

服部　憚り乍ら存じまする。（ト詰寄る。）

家康　予が嫡子たる岡崎三郎生害さすれば家康が、など快く思はうぞ。（ト合方になり、）幼年よりして智慧さとく、天晴行く〳〵大將に成るべき器量も備はれば、末頼もしく思ひしに、奥築山が愚かゆゑ終に武田が策に陷り、思はぬ謀叛の名を取りしも、若氣の至りに當春より武藝勝れし若者を召抱へしが噂となり、竊に企てある樣子、予が耳へも入りしゆゑ、それとはなしに異見をなせしに元より左樣な事なきは推量なすゆゑ捨置きしが、信長殿の疑ひを受けたるゆゑに取あへず、左衛門尉を遣はせしが、多分は一命捨てさせずば事穩便に濟むまじと、かねて覺悟はいたしをつたが、信長殿の言譯に罪なき者を生害さす、予が殘念はいかばかり、空を翔ける鳥、地を走る獸、凡そ生きとし生けるもの子を思はぬはあるべきぞ、いとも不便に存ずれど生害させねばならぬと

いふは、内通なせしは臣下の者ゆゑ、成敗なせしと汝等の首級を織田家へ送るとも、いかでかそれを誠となさん、疑念解けねば不和となり止むを得ずして一戰に及ぶ事にいたりなば、信長殿は天下の勇將、幕下に木下藤吉郎といふ、古今獨歩の智者ありて、なか〳〵微力で敵し難し、威を東海に揮ひたる今川殿さへはかなくも、桶狹間にて無慙の最期、今家康を亡ぼさんと隣國武田が覘へども、因みを結ぶ織田殿の後ろ見あるゆゑ今日迄、三遠二ヶ國平穩なり、疑念を解かんと一戰に及ぶ時には忽ち亡び、數代續きし先祖の家名、終には絶やす事にいたらん。爰を存じて家康が、家督になすべき信康を生害さすも家の爲、我子に先祖はかへられぬぞ。

山城 服部　ムウ。

本多　流石は御父廣忠公の御氣性受繼ぐ家康公、凡人ならぬ御決斷は、岸の藥師の十二神、寅童子の御再誕、やがて千里の外迄も英名とゞろき德川の、御家は萬代不易でござる。

家康　山形服部兩人は、是より彼處へ立越えて、事の仔細を申述べ、嘸口惜しくもあらうなれど、家の爲ゆゑ生害いたせとよく信康に云ひさとし、未練の最期なさぬ樣檢分なして立歸れ。

山形　是れ迄君の仰せをば、背きし事はござりませねど、

服部　此儀ばかりは餘の者に、仰付けられ、

兩人　下さりませう。

家康　なぜ其方共は參らぬのぢや。

服部　ハヽ、いかに君の仰せとて、無實の罪の信康樣へ、

山形　御生害を遊ばせと、何とて申上げられませう。

服部　それ故御免を、

兩人　蒙りまする。

本多　こは心得ぬ其の詞、君の仰せを背かるゝは、御手前達の發言ありしを、お用ひなきゆゑ斷らるゝか。

山形　何しに左樣な、

兩人　事がござらう。

本多　然らば仰せを背かずと、上使の役目を勤められよ。

山形
服部　ぢやと申して、

兩人　兩人は。

家康　是非なき次第を信康へ、其方共よりさとしくれよ。（兩人是非なき思入あって、）

兩人　ハツ、畏つてござりまする。

本多　然らば是より二股へ、片時も早く立越えられよ。

ト料紙硯を家康の前へ直す、合方になり家康申渡書を書き、

家康　是を以て申渡せ。

兩人　ハツ。（ト受取り、）左樣なれば、是れより直に、

家康　急いで參れ。（ト兩人立掛り、しなく〳〵と下手へ行き、

兩人　ハツ、然らば御免。（ト早舞にて花道へはひる。）

家康　忠次事は遠路の勞れ、退出なして休息いたせ。

酒井　ハツ、有難う存じまする。（ト中の舞になり、下手へはひる。）

家康　四人の者も退出いたせ。

四人　ハツ。（ト四人下手へはひる。）

本多　御前。

家康　作左衞門。

本多　ハ、ツ。（ト泣く。）

家康　何をそちは、落涙いたす。

本多　戰場にては敵方に鬼と呼ばれし作左なれど、是れが泣かずに居られませうか。

家康　何と申す。（ト合方なり。）

本多　信康樣と年頃も、似寄りの悴を持つ身にて、邪險な事を云ふ親仁めと、定めし思召すでござりませうが、今織田殿の氣を背かば、御家の爲によろしからず、おいたはしくはござれども、御生害を遊ばさねば、所詮穩かにならざるゆゑ、發言いたす我切なさ、御推量下されて憎まれ口は老の常と、御容赦なされて下さりませ。

家康　誠に汝は我爲に父とも思ふ老臣ゆゑ、幼年よりして今日迄、百事異見を聞かざる事なし、先刻忠次尾州より立歸りての物語り、思ひもうけぬ織田殿の疑念を受けし上からは、不便乍らも信康に生害させず穩便に、事濟むまじと存ぜしゆゑ、心中決心いたせしが又臣下の者の異見により、計らふすべもあらうかと、所存の程を聞きつるに、予が心中とはみな異なり、流石は古老の作左衞門、汝ばかりは同意なりしぞ。

本多　あつぱれ御前の御氣性を、受繼ぎたまふ信康樣、御家の御爲と云ひ乍ら、罪なき御身を御生害、さぞ御殘念にござりませう。

家康　今三遠二ヶ國の、主人と云へど兵乏しく、織田の應援あらざれば、武田と一戰成り難く、力と頼む信長殿の、疑念を解かん其爲に罪なき嫡子信康を、生害いたさす予が心中、察しくれよ。

本多　御口外なき御心中、とくと推察仕る。

家康　返すがへすも、（ト愁ひの思入、これを道具替りの知せ、）殘念なるぞ。

ト歎く。中の舞にて、此の道具廻る。

（二股城の場）＝＝本舞臺一面の平舞臺、向う九尺の床の間、塗りがまち、違ひ棚、上手折廻し襖の出這入り白牡丹の銀地襖、下手寄りに對立置きあり、舞臺一面に高麗縁の薄縁、大欄間を下し總て二股城内のもやう宜しく、調べにて止る。と爰に主水、嘉市などの小姓五人、振袖上下にて居並び居て、

主水　コレ紋彌殿、今御足輕衆の話に聞けば、今日尾州から酒井殿が御本城の濱松へ、御歸りありしを見たる由。

嘉市　織田家の首尾は如何なるか、器量勝れし忠次殿ゆゑ、定めし無事に云ひなして、御歸りありし事であらう。

左門　吉事なれば濱松より、直にお使者がある筈なれど、いまだに何の御沙汰のないは、モシ不首尾で

はあるまいか。

紋彌　夕刻迄にはよしあしの、御使者があるに疑ひなし、どうか吉事の御沙汰をば、承りたうござります。

主水　いつたい此度我君の御身に掛りし御疑ひの、信長樣より掛りしは、申すも恐れ多けれど築山樣ゆゑ、元の起りは濱松樣のお奧へ御入りが遠ざかりしを、

嘉市　深くお恨み遊ばして、御しつらひとなりしゆゑ、典藥方がお藥を調進なせど驗なく、

左門　誰が手引をいたしたるか、怪典といふ修驗者が御殿へ上つて祈禱をなし、御藥迄も差上げしが、

紋彌　不思議な事には御全快ゆゑ、其の怪典を信じたまひ、長く御殿へ留置かれしが、彼れは武田の間者にて、

主水　築山樣へ取入つて、我君樣を甲州へ味方に付けんと勝頼の、密書を持參なしたる所、おぐし上げの女中に拾はれ、織田殿よりお入りありし御簾中の御手に入り、

嘉市　直に密書を御簾中より、お里へお送りありしゆゑ、我君樣には甲州へ御隨身ありしといふ、噂が世上へ高くなり、

左門　忠次殿が、わざ〳〵清洲へ内意の御使者。

紋彌　先刻お歸りありしとあれば、御沙汰次第で我君の、お愼しみも今日限り。

主水　かゝる大事に及びしも築山樣の科なれど、今は此の世になき御方。

紋彌　密事をお知らせなされたる、御簾中にも今となり、

左門　さぞ御後悔でござりませう。

嘉市　是といふのも皆口ゆゑ、

主水　實にわざわいの、

皆々　元ぢやなア。

トバタ／＼、早舞にて、小姓萩原惣次、剃刀を持ち逃げて出る、後より信康、刀を持ち追ひかけ出來り、

惣次　私めが不調法、お許しなされて下さりませ。

信康　イヽヤ許さぬ、憎いやつめが。（ト小姓四人留めて、）

主水　御意に入りの惣次殿、何を粗相いたしましたか、

嘉市　私共が成代り、御詫を申上げる程に、

左門　今日の所は幾重にも、

紋彌　御免なされて、

四人　下さりませ。

信康　イヽヤ留めるな、料簡ならぬ。今日清州より濱松へ酒井が歸城せしとの事、凶事か吉事か知らざれど、今日ぞ此身の落許ゆゑ、髮を取上げ湯あみなし、使者の入來を相待たんと、只今剃刀とらせしに予が面體へ疵を負はせ、コレ見よ家の定紋へ、血汐をかけしは不屆き奴、幸先祝ふ今日に思へば憎くき萩原惣次、手討にいたす、覺悟いたせ。

トきつとなる、主水留めて、

主水　まア〳〵お待ち遊ばしませ、手が外れしとは云ひ乍ら、君の御面體へ疵を付け、御紋服へ血をあやせしは、此上もない不調法、今お手討に相成りましても、是非なき次第にござりまするが、君には只今御愼み中。

信康　ヤア。

主水　たとひ粗相があるにもせよ、御手討に遊ばしましては、

紋彌　濱松表へ聞えもいかゞ、

左門　何卒惣次の一命は、

主水　お助けなされて下さりまするやう、
嘉市　偏にお願ひ、
皆々　申上げます。
信康　一時の怒りに忘れしが其方共の申す如く、愼み中の某ゆゑ、惣次の手討は許しくれるぞ。
主水　スリヤ、御助けなされて下さりまするか、エヽ有難う、
皆々　存じ奉りまする。
信康　一命助ける其の代り、永の暇を遣はすぞ。
主水　エヽ、スリヤ惣次へ御暇を。
信康　イヤ惣次ばかりでなく、小姓一同暇を遣はす。
主水　エ、何科もなき、
四人　私共迄。
信康　予が心に叶はぬゆゑ、疾より暇を遣はさんと、存じ居つたが丁度幸ひ、いづれへなりとも勝手にいたせ。
惣次　私事は御面へ疵を付けたる其上に、御紋服迄汚せしゆゑ御手討になるべき所、一命御助け下さ

れて、御暇を賜はりしは、此上もなき御情有難涙にくれまするが、それに引きかへ四人の者は、何の越度もござりませねば、何卒此儘以前の如く御召使ひ下さりませ。

信康　イヤ其方はいふに及ばず、四人の者も是れ迄に、やゝともすると詞を返し、主を主とも思はぬから、それゆゑ暇を遣はすのぢや。

惣次　スリヤ、どうあつても、

四人　私共を。

信康　長の暇を遣はすからは、再び歸參は叶はぬぞ、何れへなりとも主取りいたせ。

皆々　ハツ。

信康　やゝともすると予に逆らふ、憎い奴ではあるなれど、（ト懷中より金を投げやり）明日をも知れぬ予が身の上。

惣次　エヽ。

信康　片時も早く立去り居らう。

惣次　ハツ、仰せに任せ一先づ此の場を、退きまするでござりまする。

左門　昨日迄も御情を、蒙りたる私共。

嘉市　お名殘り惜しう、

皆々　存じまする。（ト思入、信康も別れを惜しむ思入にて、）

信康　名殘り惜しいは、予に於ても。イヤ、行けと申すに。（ト信康ツイと奧へはひる。小姓顏を見合せ、）

惣次　常に變りし我君の、お詞荒き此の御暇。

左門　これと申すも今日の、酒井殿が御使者の次第を、

紋彌　お待ち詫び遊ばして、御癇癖を起したまひ、

主水　惣次殿の粗相をば、御立腹なされしか、

嘉市　此間中御抱へありし、彌八郎殿と相談の上、

惣次　何にいたせ此の惣次が、思はぬ粗相をいたせしゆゑ、何れも方にもお暇出で、濟まぬ事にござりまする。

主水　是れには何か深い樣子が、大方あるので、

四人　ござりませう。（トバタ〳〵にて近習花道より出で、）

近習　ハツ、申上げまする。

主水　何事でござる。

近習　ハツ、御本城濱松より、山形山城服部半藏、御上使として當城へ只今御入來にござりまする。

ト花道へはひる。

左門　御上使御入來とあるからは、御次へ參つて御樣子をば窺ふといたしませう。

四人　左門殿、

左門　サア、お越しなされませ。(ト是より床の淨瑠璃になり)

〽打連れ一間へ入りにける、かねて覺悟を信康の君は衣服を改めて、家來伴ひ立出て、

ト奥より信康彌八郎出る。

呼び　上使。

〽待つ間程なく山形服部、禮儀正しく上下の折目高にぞ入りにける。

ト是へ序の舞を冠せ、花道より山形山城、服部半藏出で、花道にて、

山形　山形山城、

服部　服部半藏、

山形　上使の役を蒙むつて、

服部　是迄參着、

兩人　いたしてござる。
彌八　遠路の所御苦勞千萬、是れへお通り下さりませう。
兩人　御免下され。

〽信康君を見るよりも、せき來る涙さしうつむき、しづ〳〵もうけの座に到れば、

ト兩人上手へ通る、信康見て、

信康　ヲヽ珍らしや山形服部、上使の役目大儀なるぞ。
兩人　ハヽ。
山形　濱松表へ在勤いたせば、久々君にも御意得ませぬが、
服部　斯く御壯健の體を拜し、恐悅至極に、
兩人　存じ奉りまする。
信康　其方にも替りなく、予に於ても大慶なるぞ。
山形　ハヽ、御懇の御意を蒙むりまして、
服部　有難く存じ奉りまする。
信康　早速乍ら兩人が、上使に立ちし趣を、此の信康に申し聞かせよ。

兩人　申上げるでござりませう。
信康　して、上使の趣きは、
兩人　サア、其の趣きは。
　　〽互ひに目と目を見合せて、
山形　服部氏、御手前御書を御讀み下され。
服部　イヤ、拙者は上使の差添役、御書はそこもとお讀み下さい。
山形　是非に及ばぬ、然らば身共が上意の趣き讀上げん。
　　〽上使に是非なく懷中より、山形御書を取出し、開けば胸もふさがりて、
　　　ト山形立文を出し、やがて立つて、
　「一、其方儀豫て武田勝頼に通じ、竊に謀叛の企ある事、織田信長殿へ確證の密書手に入り、事明白に依て其罪輕からず、切腹申付る者也。岡崎三郎信康へ、家康判。」
　　〽聲もうるみて讀終れば、かねて覺悟に信康公、左こそあらめと了承なし、
信康　武田方の計略にて母へ送りし其の密書が、信長殿の手に入つて此の信康が勝頼へ同心なせしとの御疑ひ、脱れ難たく父上より、切腹仰付けらるゝ段、委細承知仕る。

〽云ふをも待たず、

彌八　何ゆゑあつて我君には、其のお受をなされまする、たとひ御父君の仰せでも、自身に覺えなき事なれば、證據となりし其の密書は、武田が計略なる事を申し開きをなされまして、潔白お立てなされませぬぞ。

信康　汝が左樣に申すのも、尤もなれど此の儀に於て、何樣申上ぐるとも、御聞濟みはあらざるぞ。

彌八　それは、いかなる仔細にて。

信康　我が父上は天下の賢將、智勇は元より仁愛深きは、誰知らざる者もなし、切腹なすは是非なけれど、恨みに思ふは信長殿、智勇勝れし猛將にて仁愛薄きと云ひ乍ら、此の信康が武田家へ心を寄せるか寄せざるかを、御存じなきは情なし、其の疑念より信康が罪なき此の身に罪を負ひ、汚名を殘して生害なす口惜しさはいかばかり、推察せよや、こりや兩人。

〽暫し涙にくれて行く秋の名殘りの露時雨、聞く兩人も袖絞り、

山形　御尤もなる其の仰せ、御身に覺えなき事にて、御生害遊ばしますは　さぞ御殘念にござりませう。憚り乍ら御心中、御察し申上げまする。

服部　それゆゑ先刻兩人とも、御上使は餘の者に、仰せ聞けられ下さりませと達て御免を願ひしかど、

其方共は幼年より馴染も深き事なれば、餘儀なき譯を言ひさとし、切腹させよと我君の、切なる仰せに是非なくも、涙乍らに當城へ上使に參つてござりまする。

山形　只今仰せの赴きは、我々共より我君へ、お傳へ申すでござりまする。

服部　たゞ此上は是非なき事と、御心靜かに御最期あるやう、願はしう存じまする。

山形　然し萬事の御支度あらん、暫しの內は苦しからず、御猶豫いたすでござりまする。

信康　其斟酌は忝いが、かねて用意はいたしてある。（ト兩人びつくりなして、）

山形　エヽ、すりや御切腹の、

兩人　御用意を。

彌八　云譯立たざる其時はと、かねてお覺悟なされしゆゑ、萬端調ひ居りまする。

山形　其の御生害のお支度迄、

服部　未然を察して御用意とは、

兩人　恐入つてござりまする。

彌八　かゝる御沙汰を平岩氏が、御聞きあらば驚きめされん、せめて日數の間もござれば、又御執成の仕樣もござらうが、ハテ、是非もなきことでござる。

服部　平岩氏は信康公の、御傅役にて御幼稚より、お附き申せど今日の、上意の趣き聞かれなば、
山形　必定歎息めされんと、お察し申せど餘儀なき次第、永田氏には此の趣き、平岩氏へ御傅へ下され。
彌八　委細承知仕つてござる。
信康　何は然れ先刻より、餘程時刻を移したれば、席改めて生害なさん。
彌八　イザ、御上使様には、別殿へ。
山形　まづ、信康様より。
信康　今日は父の上使、辭退いたさず參るがよい。
服部　左樣ござれば、
兩人　上使の役目。
信康　案內いたせ。
彌八　ハア。

〽永田が案內に一禮なし、上使は一間へ入りにけり。

ト山形服部彌八郎付いて奧へはひる。

〽後に信康立上り、此の二股の城內も今日が此の世の見納めと、見返るこなたに窺ふ惣次、

顔見合せて奥の間へ、入るや遅しと立切る襖、折柄こなたへ立出る四人、

四人　惣次殿。

惣次　コレ。（ト合方になり、）扨は最前此の惣次が、粗相を幸ひ四人の者へ、長のお暇下されしは、御慈悲深き御心に、似合はぬ事と存ぜしが、此の御生害をお察しあつて、それで御暇下されしか。

主水　たとひ御暇出るとも、主從三世と云ふからは、

紋彌　御生害をなされぬ內、

左門　此世のお別れ一同に、御暇乞ひを、

嘉市　お願ひ申さん。

彌八　何は兎もあれ、奥殿へ、

四人　片時も早う。

彌八　アコレ。（ト主水に囁く。）

〽しめし合して、

ト三重にて、此の道具廻る。

（同城内切腹の場）━━本舞臺四間中足の二重、本庇、本椽附き、向う銀襖塗り骨の障子、二重眞中に白布を敷き、近習二人疊を敷いて居る、此の見得三重にて道具留る。

〽入側をめぐる日ざしも八ツ下り、居所の歩みの未の刻、運ぶ疊の死支度、此の世も中の七つには、未だ間のある奥の間より、立出る上使が座を占むれば、後より靜々信康は覺悟を死出の水上下、見るも哀れの出立に、

トよき程に、奥より山形、服部出來り、又奥より信康白小袖水上下にて出來り、白布の上へ住ふ、兩人は思入あつて、

山形　申す迄もござらぬが、斯く御生害の御支度。

服部　御用意あるは兩人とも、誠に驚き、

兩人　入つてござる。

信康　武士の身はいつと限らず切腹なすも計られず、かねぐしつらへ置きたれど、今日生害の此の役に、立たうとは予も思はざりし。

山形　御平服の其時とは、打つて變りし此のお姿、御いたはしき事でござる。

服部　けふはいかなる惡日にて、かゝる上使を蒙りしか、胸も張りさく身の切なさ。

信康　猶豫いたして汝等に、歎きをかけるは本意ならず、疾く／＼生害いたすであらう。

ト折もあらせず一間より短刀のせし三方を、彌八郎は携へ出で、禮儀正しく信康の前へ直して控ゆれば、（ト文句の通りあつて、）

信康　こりや、彌八郎。

彌八　ハヽ。

信康　只今申し渡せし如く、一命捨つるを忠義と思ひ、殉死いたさば信康が却つて爲に惡しきゆゑ、必ず殉死は相成らぬぞ。

彌八　ハヽ。

信康　心得違ひをいたすまいぞ。

彌八　ハヽ。

トはツとばかりに涙にくれ、顏も得上げずひれ伏せば、斯く迄我を慕ふかと胸もせまりて信康が、暫し詞もなかりしが、

信康　よしなき事にて時刻の遲れ、いでや生害いたすであらう。

ト水上下をはねのけて、小袖の肌をぬぐ折柄、惣次を始め四人の小姓、小柴垣の蔭より立出

ト此時下手の垣より、惣次を始め四人の小姓、立出で、

惣次　最早君には此の場にて、

主水　御生害に、

四人　ござりまするか。

信康　惣次を始めそち達は、長の暇を遣はせしに、何故是へ參りしぞ。

惣次　ハヽ、おぐしを上げし其時に思はぬ粗相で御紋服へ、血をあやせしは我君の御生害を遊ばします物の知らせでござりましたか。

左門　惣次殿の粗相より、一同長の御暇を、下さりましたはかねてより、

紋彌　御覺悟ありし事なるか、

主水　是迄厚き御情を、

嘉市　蒙りましたる私共、

惣次　殉死いたす心にて、是れへ出まして、

皆々　ござりまする。

信康　長のいとまをとらせしからは、主從ならぬ其方共、殉死いたす謂れはない。

惣次　たとひ御暇賜はりても、御恩を蒙る私共、
左門　此の場で殉死、
五人　仕りまする。
信康　予が詞を背くか。
五人　全く以て、
信康　詞を用ひぬ上からは、七生迄の勘當ぢやぞ。
五人　ハア。
彌八　拙者も殉死いたさんと、疾より覺悟いたせしかど、御本城への聞えを憚り差控へて居りまする、君の御先途見屆けし、後にて死すとも遲かるまじ、君の仰せに從ひまして、控へまするで、
五人　ござりまする。
〽日脚も短かき秋のくれ、數も忙しき鐘の音に、
ト時のかれ、信康思入あつて、
信康　最早是にて生害なせば、其方共は退座いたせ。
彌八　スリヤ、此のお席には、

五人　かなひませぬか。
信康　介錯なすは彌八郎のみ、其の餘は席にかなはぬぞ。
五人　ハア。
信康　此の對面を思ひ出に。
彌八　いづれも疾く／＼退散召され。
五人　ハア。

〽盡きぬ名残りに見上ぐれば、顔を背ける信康公永田が知らす目遣ひに、是非もなく／＼打ちしをれ、垣の外面へ立つて行く、（ト皆々垣の内へはひる。）
〽後見送りて三方を、引寄せたまへば山形は、（ト信康三方を引寄せる。）

山形　最早御覺悟の體なるが、仰せ置かるゝ事あれば、
服部　何なりとも　私共へ。
兩人　仰せ聞けられ下されませう。
信康　此期に及び信康が、申殘す儀はなけれど、汚名を受けて相果つる、此身の不幸は是非なけれど、教へを受けし父上へ、左せる孝養盡くさずに、先立つ御詫をいたしくりやれ。

兩人　ハヽ。

信康　又別腹の於喜丸は才智勝れし生れゆゑ、申す迄はなけれども、我に代りて孝養盡し、人となつて德川の家名相續いたしなば上を敬ひ下を哀れみ、家名を大切に守る樣よく申傳へてくりやれ。

山形　委細畏つてござりまする。

信康　是にて申置く事なし、急いで生害いたすであらうが、服部そちに予が一期の賴みがあるが、聞いてくれるか。

服部　改まりし其の御詞、拙者へ賴みとおつしやりまするは。

信康　久しく馴染であつたなれど、もはや今生の別れゆゑ、予が介錯をいたしてくりやれ。

服部　イヤ折角のお賴みなれど、此儀は御免を蒙りまする。

信康　何と申す。

服部　御家來多き其中に、合緣奇緣とやらにて、此の半藏が御意に入りにて、御相手いたせば御機嫌よろしく、コリヤ御褒美ぢやと御手づから、見事なお菓子を下されし、まだお五ッや御六ッの過ぎし昔が偲ばれて、ありし事共思ひ出し、此の御切腹が情なく拙者が胸は張りさくばかり、何で御介錯がなりませう。山形殿御推察下されく。

〽鬼にも負けぬ半藏が怺え情なくはら〳〵と、落す涙に人々も共に袖をぞぬらしける。

信康　其いにしへを思ひ出し、予が介錯を頼むのに、聞入れてはくれぬのぢやの。

服部　サア、それは。

山形　斯程迄に仰せあるに、辭退召さるは半藏殿、臣下の道が缺けまするぞ。

服部　サア、それは。

信康　これが今際の別れなるに、半藏そちは聞入れぬか。

服部　サア。

山形　御介錯いたされぬか。

服部　サア、

信康　サア、

三人　サア〳〵〳〵。

信康　一期の頼み、聞いてくりやれ。

〽問ひ詰められて是非なくも。

服部　ハヽ、左程迄におつしやるもの、是非に及ばず御介錯、いたしまするでござりまする。

信康　それにて望みを達したり、彌八郎硯持て。
〽ハッと答へてかたへなる、料紙硯を取出せば、
ト彌八郎料紙硯を出す。
辭世の一首詠じたれば、後のかたみに記し置かん。
〽短册取りてさら〳〵と書くも緣の薄墨に、筆の命毛はかなくも、（ト書終り。）
彌八郎、讀上げい。
彌八　ハヽ、「村雲に淸き心も覆はれて、はかなく西へ落つる月影。」
山形　只今仰せの御歌の如く、誠に淸き御心も間者の雲に覆はれて、はかなく西へ落ちたまふ、御いたはしき御生害。
彌八　此のお歌こそ後の世へ、淸きを殘す御形見。
信康　ヲヽ、半藏へ刀を渡せ。
彌八　ハヽ。（ト下手にある刀を渡し、）イザ半藏殿、御用意召れ。
〽刀を取りて差出せば、是非無く取つて拔きはなし、中身をとつくと打見やり、
服部　ヤ、此の御刀は。

彌八　ヲ、それぞ我若御懇望にて、御求めありし千壽院。

服部　スリヤ、村正にて御介錯を。

山形　御先代より村正は。

信康　ヤ。

山形　イヤサ、昔馴染の半藏殿、御介錯をいたされよ。

服部　ハヽ。

〽下緒を取つて早だすき、餘儀なく後ろへ立上れば心靜かに信康公、九寸五分を取直し、弓手へぐつと突立て、馬手へきり〳〵引まはし。

ト半藏用意して後ろへ廻ろ、信康突立てる事あつて、

信康　半藏、介錯。

服部　ハヽ。

〽ハツとはいへどわな〳〵と、刀の切先打ちふろえ振上げ兼ねて半藏が、どうとばかりに泣伏せば。

信康　ヲヽ、猶豫いたすか未練者めが。

服部　イエ〳〵、拙者には出來ませぬ。

信康　然らば山形、介錯いたせ。

山形　ハヽ、御意ではござれど拙者とても。

彌八　御辭退あらば、今の御苦痛。

信康　エヽ、いたせと申すに。

山形　ハヽ、是非に及ばぬ。

〽觀念なして山形が刀振上げためらひしが、眼を閉ぢてエイとかけたる一聲と共に首級を打落せば、涙乍らに亡骸へ白布覆ふ彌八郎、山形血糊を押拭ひ、

ト山形是非なく介錯する。半藏泣伏し愁ひの思入。

永く御苦痛おさせ申すも、本意ならねば御意に任せ、御介錯をいたせしが、涙にくれて刀を捨て出來ぬと言はれし半藏殿、御尤もでござるぞよ。

服部　よく御介錯して下された、貴殿がなくば御苦痛を、長くおさせ申さにやならぬ。

山形　是れにて拙者の役目も濟めば、

〽山形刀取直し、髻ふッつと押切れば、

服部　ヤヽ、こりや山形氏には、何ゆゑに。
彌八　其の髻を拂はれしぞ。
山形　御介錯をいたすべき、此身は涙に伏沈めど、時刻遲れて御苦痛をおさせ申すがおいたはしく、仰せに任せ、それがしが御介錯をいたせしが、斯く髻を拂ひしは、武門を捨て高野へ登り、君の菩提を弔ふ心、服部氏には御本城へ、其の御首を持參あつて、今日の次第を我君へ仰せ上げられ下されい。
服部　斯く相役たるそれがしへ、沙汰をされぬは情なし、拙者一人御本城へ見るもいぶせき御首を、持參いたして歸られうぞ、我も共々剃髮なし、君の御跡弔はん。
（髻切らんとなしければ、（ト半藏小柄をぬき、髻を切らうとするを、）
山形　ヤレ早まつた事召さるゝな、兩人剃髮いたしなば、斯く御覺悟を召されたる、御生害の次第をば誰が申上げますするぞ。
服部　サア、それは。
山形　一方ならず信康樣の、御最屓受けし服部氏、御遺言を御君へ仰せ上げられ下さりませ。
彌八　今山形氏の仰せの如く、斯く健氣なる御生害を、御父君へ申上げたし、何卒剃髮思ひ止まり、御

歸城なされて下さりませ。

服部　成程此場の樣子をば、申上げぬも殘念ゆゑ、異見に付いて思ひ止まり、御遺言を申上げん。

山形　スリヤ、聞屆けて下さりまするか。

彌八　エヽ、忝うござりまする。

〽御首級を服部へ、渡す折柄今生の、御暇乞に立出る小姓、

ト彌八郎服部の前へ首桶を出す、ばた〳〵にて、上手柴垣の蔭より以前の小姓出て、

主水　誠に是れぞ今生の、御別れにござりますれば、

左門　何卒一同、

皆々　御首級を。

〽云ふに服部うなづきて、

服部　餘の御家來と事替り、御情受けし御小姓衆、是れにて名殘りを惜しまれよ。

〽首桶の蓋取除くれば、以前に變る御首級、一目見るよりたまり得ず。

主水　テモ、情なき、

五人　御有樣。（ト皆々泣く。）

服部　涙は君の御爲にならぬぞ。（ト首桶の蓋をする。）

小姓　ハア。

山形　時刻移る。

彌八　片時も早く。

服部　承知いたした。

〽首桶携へ立上れば、前後にすがる人々が惜しむ名殘に行兼ねしが、心弱くて叶はじと中を隔てる山形に、さらばとばかり服部が、

ト服部首桶を抱き、立上ろを小姓皆々服部の袖を引き、名殘りを惜しむ、彌八郎へだてゝ、

〽本城さして、

ト服部下手へ行く、五人ハツと泣伏す。山形彌八郎愁ひの思入にてよろしく

幕

ト調べにてツナギ、直に引返す。

（濱松城中の場）――本舞臺元の廣間の道具に戻る、爰に○△□◎の近臣四人、上下にて住ひよろしく

幕明く。

○今日君の御意を蒙り二股城へ上使に立ちし、山形服部御兩所はいまだ歸城めされぬが、滯りなく信康公御切腹あつたるか。

△信長公の御疑ひも全く武田の計略にて、築山殿へ送りたる密書が證據になりたれど、御身に覺えなき事ゆゑ御得心はござるまい。

□上使に立ちし御兩所が御家の大事となる事を、おさとし申すでござらうが、御得心なき其時は、一徹短慮の信長公。

◎御簾中を取戻し、たちまち不和となるは必定、さある時には武田より其虛を狙つて攻來らん。

○左右に敵を受ける時は、元より小勢の三河勢、なか〳〵防ぐ事叶はず、

△容易ならざる事ゆゑに、御いたはしくは候へど、

□御家の御爲を思召され、御生害をなされたら、

◎信長公の心もとけ、不和を生ずる事もなく、

○御家和順の上からは、

△益々御家は御安泰、

◎　兎にも角にも御兩所の、
○　御沙汰を早く、
四人　承りたい。（トバタ〳〵になり、花道より上下の侍出て）
侍　ハッ、申上げます。
四人　何事なるぞ。
侍　二股城へ御上使にて參上ありし服部殿、只今歸城いたされてござる。（ト引返してはひろ。）
○　最前より我君にも、
△　再度歸城をお尋ねあれば、
□　急いで此よし、
四人　申上げん。（ト奥にて）
家康　イヤ知らせには及ばぬぞ。
ト音樂になり、奥より前幕の家康に本多附添ひ出來り、家康は眞中、本多は下手に住ひ、
半藏一人歸城せしは、何か仔細のある事ならん。
○　樣子知れざる其内は、

△　誠に以て、
四人　安心ならず。
トバタ〳〵中の舞、花道より前幕の服部、淺黄袱紗に包みし首桶を抱へ出て、花道に住ひ、
家康　ヲヽ、半藏か、近う。
服部　ハツ。
本多　先刻よりお待兼ね猶豫召れず。
四人　お進みなされい。
服部　ハツ、御免下さりませう。（ト中の舞にて舞臺眞中下寄りに住ふ。）
家康　早速乍ら信康事、生害なすを承諾せしか。
服部　ハツ、御承諾にござりまする。
家康　承諾せしとあるからは、予が意に隨ひ生害せしか。
服部　ハツ、御切腹なされましてござりまする。
家康　ヲヽ、よくぞ生害いたしたな。
本多　日頃勇氣の御氣性ゆゑ、如何と御案じ申せしが、

○　全く以て御上使の、御兩所の御諭しゆゑ、

△　深く御得心あらせられしと相見ゆる。

□　誠に以て御迷惑なる御役日、

◎　お察し申上げまする。

本多　然し乍ら心得ぬは、上使に立ちし山形が同道せぬは如何なる譯だ、何ぞ脫れぬことあつて、二股城に殘りしか。

服部　山形事は故あつて、只今歸城いたしませぬが、仔細は後して申上げん。

家康　シテ信康最期の樣子、逐一それにて申聞けよ。

服部　ハツ、主命背くは恐入れど、其儀は御免下さりませう。（トうつむき淚を拭ふ。）

○　我君と云ひ本多殿が、再應お尋ねなさるゝに、何ゆゑ申し、

四人　上げられぬぞ。

服部　各々方は御存じなきゆゑ、左樣仰せあるは御尤もなれど、御生害の御樣子は淚にむせられ申されませぬ。

家康　ムヽ、淚にむせて申されぬとか。

服部　ハツ。
家康　信康事は我にまさり、勇氣烈しき性なりしが、涙にむせて半藏が申されぬといふからは、其場に至り勇氣なく、未練な生害いたせしか。
服部　イエ、あまり立派な御覺悟にて、兩人共にむせび入り涙にくれてござりまする。
家康　立派な覺悟でありしとな。（ト嬉しき思入。）
服部　ハツ。
本多　如何なる御覺悟ありたるか、御家の記錄に書殘せば、逐一申上げられよ。
○　武士の手本になる事なれば、後學の爲承りたし。
△　とく〳〵是にて、
四人　申上げられよ。
服部　スリヤ、どうあつても。
家康　最期の樣子、話して聞かせよ。
服部　今日君の上意を蒙り、山形拙者同道にて二股城へ罷越し、山形御書を讀上げて、信長公への申譯に御生害遊ばせと、餘儀なき次第を申上げしに、早くも事情を御察しなされ、慈愛深き父上が切

腹せよとの御上意あるは、身に覺えなき事柄を百方それがし云ひとくとも、所詮脱れぬ事なれば上意の赴き承知せりと、異議に及ばず最期の御覺悟、誠に恐入つたるは、かねて御用意ござりまする、無紋の小袖に召替られ、心靜に座に直り、辭世の一首をよみたまひ形の如くに御生害、あつぱれ見事にござりますゆゑ、一倍我々兩人はおいたはしく存じまする。

家康　シテ、遺言はなかりしか。

服部　御最期なさるゝ其前に、御殘念の餘りにや信長公を御恨みありしは、今遠三二ヶ國の領主となりし徳川の嫡子に生れし此の信康、威勢天下に及ぼす程の信長殿の息女をめとり、此上もなき身の上にて父と舅に敵たひて、何故武田へ隨臣なさんや、コレ勝頼が計略なる事、目前知れし事なるを疑はるゝは情なし、我なき後は於喜丸は兄に代つて孝行なし、徳川の家相續なさば家名大事に守るやう、そちより弟へ傳へよと、此の御遺言を承る半藏が心の悲しさ、御推量下さりませ。

家康　ヲヽ、そちが心中察し居るぞよ。

本多　成程これは半藏殿、涙にくれて話せぬと申されたのは尤もだ、ついに泣いた事のない鬼と呼ばれし身共さへ、今日は涙がこぼれました。（ト本多涙を拭ひ、）

○　今更申して歸らねど、御家の御家督なさるべき、御惣領にお生れ遊ばし、

△　文武二道はいふに及ばず、何くらからぬ御身にて、

□　かゝる疑ひ受けたまひ、御生害遊ばしまするは、

◎　いかなる事でござりませうか。

○　殘念至極に、

四人　ござりまする。

家康　シテ辭世の歌といふは。

服部　則ち是にござりまする。

ト懷中より袱紗に包みし短册を出す、合方きつばりとなり、家康見て、

家康　常より手跡も見事にて。（ト見て居る。）

本多　其の御辭世の御歌といふは。

家康　「村雲に淸き心も覆はれて、はかなく西へ落つる月かげ。」（ト讀む。）

本多　イヤあつぱれなる其の御辭世、御生害の際に臨み大丈夫なる御覺悟、此作左衞門は無我夢中、歌道は一向存ぜねど、自然と哀れを覺えまして、おいたはしく存じまする。

家康　シテ介錯は、其方せしか。

服部　ハツ介錯せいとの仰せゆゑ、再應辭退いたしましたが、達ての御意に是非なくも、刀を取つて振上げましたが、御いたはしく思ふのあまり、兩眼くらみ手はふるへ、其儘そこへ泣伏して、御介錯はいたしませぬ。

家康　半藏尤もなるぞ。

服部　ハツ。

本多　シテ介錯は、誰がせしぞ。

服部　御介錯は山形が、いたしましてござりまする。

家康　山形代つて、介錯せしか。

服部　ハツ、長く御苦痛おさせ申すも、本意ならずと山形が御介錯いたしてござりまする。

本多　シテ〳〵山形には何ゆゑに、歸城いたさぬぞ。

服部　山形歸城いたさぬは、御いたはしく思ふのあまり、無常を感じ其場にて、髻切つて出家となり、高野山へ登山なし君の御跡弔はんと、退身いたしてござりまする。

家康　ム、。

本多　御介錯せしはつれなきものと思つたが、剃髮せしとは感心いたした。

○シテ、信康様の、

皆々　御首は。

服部　是れへ持参いたしました。

家康　ヲヽ、此の世の別れ、對面なさん。

服部　ハツ。（ト音樂になり、服部首桶を明け、首を臺にのせ、家康の前へ出す。）

家康　ヲヽ、信康か。（ト見て）作左衛門見やれ、常に變りし事もなく、笑ふが如き此の面。

本多　誠に物をおつしやるかと、思ふばかりに存ぜられまする。（ト皆々愁ひのこなし。）

家康　かく非命に終るのも、そちが母なる築山が常に嫉妬の心深く、人を恨む性ゆゑに武田方へ内通なし、間者が策に陥つて勝頼方より送りたる、密書を人に拾はれて織田殿の手に入りしゆゑ、終に謀叛の疑ひかゝり、そちに一命捨てさせねば、なか〱以て心解けず、左ある時には不和となり我が徳川の家名をば捨てねばならぬ一大事、餘儀なく先祖に替えられず、そちに生害いたさせしぞ、科なき身にて一命捨て、嘸口惜しく思ひつらん、あつぱれ我子にまさるとも、劣らぬ器量のそなたゆゑ、今に家名を讓らんと思ふ嫡子を科なくして、非業に失ふ我心中、其の口惜しさは百倍なるぞ。（ト首へ向ひ思入。）

本多　其の御歎きは御無理ならねど、御最期ありしは御身の御爲、君には御不孝に似たれども、御先祖様へ大孝行。

服部　是れにて謀叛の御疑念受けし、信長殿の心もはれ、

○　御家は益々、

四人　萬代不易。

家康　其の徳川の家名をば、

本多　相續あるべき信康公には、

服部　御運至らず、はかない、

四人　御最期。（ト家康首をちつと見て、）

家康　果報つたなき、（トほろりとなし、涙を隱すを、木の頭。）事ぢやなア。

ト皆々愁ひの思入、三重、引取り太撥の時の太鼓を打込み、よろしく

幕

六幕目　伊賀鬼瘤越の場

〔役名――徳川三河守家康、榊原小平太、本多平八郎、進藤傳次郎、和田八郎、近習、杣等〕

〔伊賀鬼瘤越の場〕――本舞臺向う一面の山幕、上下山組の張物、松の釣枝、爰に一、二、三、の杣三人思ひ〳〵の持物を持ち、此の見得山おろし、ドン〳〵竹ぼらにて幕明く。

一　コレ杣六よ、大分麓の方が騒々しいが何であらう。

二　あれは大方此の伊賀越で、百姓一揆でも始まつたのであらう。

三　早太鼓や竹ぼらが、谺に響いて聞えるのは、人を集めるのに違ひない。

一　イヤ里と違つて山の中では、何かの事は急には知れず、取分け爰は伊賀の內でも、往來稀な鬼瘤越だ。

二　杣や狩人の其外は、猪狼が通るばかり、こんな不氣味な所はないが、たとへにも云ふ住めば都で山の中にも人が住むのだ。

三　イヤ其話しで思出したが、此の山中の一軒家に住んで居る八藏は、以前都に居る時分は立派な侍だといふ事だ。

一　ヲヽ、其の八藏は其の以前は、清洲の織田の家來ださうだ、主人を見限つたといふ科で追放されて浪人となり、浮世を忍んで居るとの事だ。

二　どうでも元が侍だけ、腕前が勝れて居れば、鐵砲を元手にして山獵師をして居るが、覘ひ擊が上手だゆゑ狩人仲間の頭分だ。

三　たとひどんなに落ちぶれても、腕前が勝れて居れば、食ひはぐりはないもので、古い狩人が頭を下げて、あの人を敬ふのは、やつぱり腕の德と云ふもの。

二　こつちも其氣で精出して、

三　モウ一稼ぎやるとしよう。（下山おろし、バタ〳〵にて、同じ拵への杣一人四出で、）

四　コレ〳〵、皆悅べ〳〵、金もうけの口が出來たぞ。

一　なに、金もうけの、

三人　口が出來たとは。

四　今三軒家の立場へ寄つて、一杯やつてゐる所へ、戰出立の侍が十四五人程やつて來て、村の者へ云ひ渡すには此の二日の朝とやら、當時天下の織田樣を京都の平明智とやらが討滅ぼし、直に惟任將軍といふ天下の主人になつたとやら、それに附けて織田樣とい〻仲であつた德川殿が、自分の領分へ引上げようと、伏見を立つて伊賀路を廻り、此方へ落ちて來るに違ひないから、誰でも彼でも德川と見たら、討つて差出せば褒美の金は望み次第と、旨い話の云ひ渡しに、百姓たちは

騒ぎ出し、早鐘をつくやら竹ぼらを吹くやらで、人數を集めて口々の、固めをすると騒いでゐるが、あゝして厳しい固めがついては、東海道は通れぬとて差詰め此方の裏道を、忍んで通るに違ひないから、それと見たなら討取つて、褒美の金をしめるとは旨い話しであらうがの、

一　ハヽア、それぢやあ今麓の方で、太鼓や竹法螺の聞えたのは、

二　其の一件で百姓達が、急に人數を集めたのか。

三　さういふ旨い話しを聞いたら、此方も手分けをせねばならぬ。

四　それに付けて山中の、あの八藏を大將に賴み、鐵砲の覘ひ打で、徳川どんを討ち取つて貰はう。

三人　それがいゝ〳〵。

一　善は急げといふからは、

二　直に是れから山中の、

三　八藏の内へ行くとしよう。

四　そんならみんな、

皆々　サア來やれ〳〵。

ト山おろしにて、皆々上手へはひる。知らせに付き、山幕切つて落す。

本舞臺上手へ寄せて、見上げる程の切立の屛風岩、人の下りる足掛りあり、下の方谷川の流れ、正面深く山又山の遠見、上下岩組の張物にて見切り、總て伊賀の山中鬼瘤越の體、山おろしにて道具納まると、直に床の淨瑠璃になる。

〽峰おろす風も烈しき屛風岩、木樵りの道を日の影にさぐつて歩む鬼瘤越、さすが鬼神の智者勇者、

ト山おろし、合方、谺にて、花道より平八郎、東の花道より小平太出で、双方花道眞中に止り、

平八　君を守護なし都より脱れて爰へ來りしが、此頂上にて君に別れ、闇に山谿をさまよひて、此伊賀越の雲がくれ峰に照り添ふ宵月の、茂る樹木の常闇に等しき夜には是非もなく、薄の穗にも落人の身はあじきなき小笹原、疵持つ足の九十九折、

小平　道の險岨も白浪の、山賊野武士が爰彼處、埋伏なして我々を、穿鑿なすと聞くからは、

平八　油斷ならざる、

兩人　事共ぢやなア。

〽そよぐ小笹に氣を咎め、心に油斷あらしふく谷間の清水落合ひし、流れは一ツ二筋に別れ

し影を見返りて、

ト此内兩人舞臺へ來り、互ひに相手を窺ふ心にて、火繩をよけて左右へ行違ひ、すかし見て、

小平　それへ見えしは、忠勝殿か。

平八　さ云ふ御身は、康政殿か。

小平　して其許には此邊を、たどりて物見いたされしか。

平八　されば手前の物見せしは、左りにあたる谷間より、麓へ下りる山道を、物見いたして歸つてござる。

小平　手前は是より右に當り、細き道がござつたゆゑ、正しく木樵の通る道と心得しゆゑ、物見いたした。

平八　して我君には峠より、いまだこれへお下りなきや。

小平　此谷間に入らせられなば、追手のやからに逢ひし時、御難儀にてはあらざるか。

平八　あれなる岩を登らねば、後へ歸れぬ此の難所。

小平　ハテ、案じられた、

兩人　儀でござる。（ト爰へ上手の岩蔭より、家康に進藤傳次郎附添ひ出て、）

進藤　それへ來られしは、本多榊原の御兩所よな。

〽云ふ聲こなたは見返りて、

小平　谺に響く其の聲は。

平八　進藤氏にておはすよな。

進藤　いかにも、盛俊でござる。

平八　して、我君樣の、

小平　御在所は。（ト此時山の上にて、）

家康　アイヤ、氣遣ひいたすな、予は無事なるぞ。

ト家康山の上より下りるを、三人介錯して、

平八　君の御座所は如何なるかと、お案じ申してたつた今、取つて返せし此の谷間、御安泰の體を拜し恐悅至極に存じまする。

家康　道の前後も分明ならず、心痛なしてまゐりしに、兩人に出逢ひしは仕合せ、して參る道々物見いたして參りしか。

平八　ムヽ、拙者只今右左物見いたして參りましたが、容易に通路は叶ひませぬ、浪士や山賊どもが、

爰かしこにより集まり、たやすく通路はなり難し。

家康　スリヤ、左右ともに取卷きしとな。

平八　高の知れたる者共乍ら、何を申すも多人數ゆゑうかつに進む事ならねば、評議の上にて參るべし。

〽跡勢來るを待つ所へめい〳〵絶所を打越えて爰へ落合ひ谷間の會合。

ト山おろしになり、上手より○△□◎の家來四人達附、大小、めい〳〵包みを持ち笠を背負ひ出で

○　我君、これに御座ありしか。

△　御無事の體を拜しまして

□　大慶至極に、

四人　存じまする。

家康　其方共も恙なく、此の谷間へは參りしか。

○　ムヽ、此の裏手なる數丈の岩を、蔦へすがりてやう〳〵と、

△　這ひ下りまして此所へ、御後を慕ひ參りしが、

□　山賊野武士が追々と、

◎　寄り集まりて取り卷く樣子、

○　此の行先は何處なるか、
△　所詮後へは、
四人　歸られませぬ。
平八　此行先は多人數にて、道を遮り居るからは、翅なければ伊勢路迄、落行くことは叶ひ難し。
○　スリヤ、行先も、
四人　取卷きしとか。
〽めい〳〵顏を見合して、ハッとばかりに詞なし、御大將も是迄と、
家康　最早進退窮まりしぞ。（ト合方になり）いかなればこそ家康は、武運拙く幼年には今川家へ人質となり、困苦なせしも義元公最期の後は織田家へ屬し、今三遠を安堵なし力と頼む織田殿は、逆臣明智に討たれたまひ、猶家康も討たんと計り、山賊野武士道を遮り、十重二十重に取圍めば、所詮勢州白子迄落延びん事思ひもよらず、よつて家康此場にて自殺いたして相果てん、汝等は思ひ思ひ、勝手に爰を落延びくれよ。
小平　ハッ、君御最期と承はれば、いかで我々お後に殘り、未練に一命存へんや。
進藤　此の場に於て潔よく、殉死いたして冥府まで、御供いたすでござりませう。

○　イデ〳〵支度を、

皆々　仕らん。

家康　すりやそち達も諸共に、自殺いたすと申すのか。

小平　ハッ、是非に御供を、

皆々　願ひまする。

家康　ハテ頼もしき志し、斯く忠臣なる者どもを、無慙の最期いたさする其の殘念さはいかばかり。

小平　其の御述懐はさる事乍ら、治國と違ひ亂國に、產れ出でたる武士は、皆幼年より身を苦しめ、元より命は我君へ捧げしものに候へば、君諸共に殉死なし、最期を遂ぐるは身の本懐。

進藤　日頃臣下を惜しみたまふ、御仁愛より我々の殉死をいたはり斯く迄に、厚き御諚を蒙むれど、疊の上にて死するのは、腰拔武士と心得居れば、君の御供仕り死するは心悦ばしく、

○　われ〳〵四人は我君や、

△　各々方の介錯なし、

□　首級をかくせし其の上にて、

◎　直樣切腹、

四人　仕らん。
小平　殉死なさんと一統に、只今覺悟いたされしに、本多氏御一人、默して是れに控へらるゝは、何とも以て心得難し。
進藤　但し外に奇策ござるや、猶豫ならざる此の場合。
家康　忠勝そちは、如何なる所存ぢや。
平八　愚存乍らも拙者めは、我君始め各々にも其のお覺悟には、及びませぬかと存じまする。
山平　なに、御覺悟には．
皆々　及ばぬとな。
平八　此の忠勝が存ずるには、日頃の勇氣を顯はして、敵に一泡ふかせるのは、此時なるかと思ひまする。
家康　イヤ〳〵それは益なき事、敵八方を取圍み、脱れる道のあらざれば、覺悟なすより外はない。
平八　イヤそれぞ則ち御短慮なり、たとひ野武士が何萬人此の山林を取卷くとも、高の知れたる集まり勢、烏合のやからに聞き怯ぢして、御生害を遊ばせば末世の恥辱此上なし、漢の高祖は七十四度苦戰なせしも難を忍び、四百餘州の基を開く、康政殿を始めとして我々必死を極めなば、物の數

にて數ならず、凡人ならぬ我君ゆゑ、やる所迄おやりなされい。
〽根強き諫めに康政も實に尤もと打ちうなづき、
小平　コリヤ忠勝の言はるゝ如く、御幼年より寅童子の、御化身なりと言はるゝ我君、
進藤　御運強き御身ゆゑ、わづかの敵のうれひを恐れず、
○　一方を破る御威勢あれば、
△　こりや脫れまじき、
皆々　ものにも非ず。
家康　然らば本多の異見につき、我が運命を天に任せ、脫るゝだけは落延びん。
平八　ハツ其時こそは必ずとも、八百萬の神守護なして、御助力いたすに相違なし。
進藤　何れ山路の間道傳ひ、伊勢路へ落つるが肝要ならん。
家康　イデ〳〵發足、
皆々　仕らん。
〽勇み立ちたる其所へ、
八郎　アイヤ、暫く〳〵、其の街道は拙者めが、御案內いたすでござらう。

ト下手岩組の間より、和田八郎出る、忠勝見て、

平八　シテ、われは何奴だ。

八郎　お忘れありしか、本多氏。

平八　なに、此の忠勝に忘れたとは。

八郎　先年三州岡崎にて、徳川公に御目見得なし、仕官を願ひし織田の家臣、和田八郎と申す者。

平八　何と。

家康　誠に汝は織田の家臣、

平八　和田氏にて在せしか。

八郎　絶えて久しき事乍ら、

家康　思ひがけなき。

三人　此の參會。

〽晴れる疑念に月代の、さし合とても闇からず、康政もすゝみ出で。

小平　して　そこ許は如何して、かゝる山家に身を忍び、下賤の姿でをらるゝぞ。

〽尋ねに八郎身をたゞし、（ト是よりこだまの合方になり、）

八郎　されば、かね〴〵それがしは、徳川公の武徳を慕ひ、御家臣になし下さる樣と、先年鷹野の御成り先にて、願ひし事も候ひしが、織田の家臣を我家來に、いたし難しと君のお諭し、是非なく尾州へ歸國せしが、誰が流言をなしたるか早くも織田家へ知れしゆゑ、元より短慮の君なれば主を見限る憎き奴と御憤り甚しく、永の御暇を出されしゆゑ、徳川殿の其外に主君と頼む君なしと、此の山林に身をかくし、時節を相待ち居つたる所此度の都の動亂、君には伏見の御旅館より、伊賀越えなして三州へ、落ちさせたまふと早くも知り、山賊野武士が徒黨を結び通路を固め寄り集り、君を討たんと計るよし、先刻計らず聞きたるそれがし、是ぞ幸ひ浪々中たつきの爲に山獵師を、業になすゆゑ地理案内人の通はぬ拔道を、ようく存じて居りますれば、出逢ひ申して間道の御案内仕らんと、先刻よりして此處彼處、在所をお尋ね申してござる。

家康　〽身の成行を殘りなく、語るに猶も人々が、安堵の思ひぞ道理なる。

スリヤそれ故に御身には、此の山林にかくれ居りしか、思へば只今予を始め臣下の者も一統に、既に最期と決せしを平八郎に止められ、神の助力もあるべしと異見をされしはこれ正に、源家の祖たる弓矢神正八幡の加護なるか、實に忠勝は我爲の正八幡とも思ふぞよ。

平八　ハッ、こは勿體なき其の御諚、是れと申すも我君の皆御武徳による所。

小平　コリヤ忠勝の云はるゝ如く、不知案内に當惑せし、折に幸ひ知る人の八郎殿に出逢ふも不思議。
進藤　これぞ正しく我君を、守らせたまふ神の加護、
○　正八幡の御助力ゆゑ、
△　此の行先もやす〳〵と、
□　御歸國あるに、
◎　うたがひなし。
家康　ハテ、よきものに。
皆々　出逢ひしよな。
八郎　御馴染甲斐に本多氏へ、拙者が一つの願ひがござる。
平八　なに、それがしに願ひとは。
八郎　餘の儀でもござらぬが、豫ていつぞや御念頃なる御諭しとても候へど、舊主織田殿都にて御逝去ありし上からは、何卒拙者を御家臣の端へなりともお加へ下され、御仁惠に預かるやう、此の儀よしなにそこ許より、御推擧の程願ひたし。
平八　其儀はかねて我君にも、御身といつぞや岡崎にて、御約しありし儀もござれば、御採用なき事は

あるまじ。

家康　ヲヽ其の願ひ承知いたした、織田殿逝去ある上は最早遠慮もあらざれば、望みに任せ臣下となさん。

八郎　スリヤ御承知下さるとな。

平八　それにて拙者の詞も立ち、

八郎　有難う存じ奉りまする。

小平　今日よりして和田氏にも、主君の臣下となる上は、

進藤　我々共と同朋輩、

○　以後は水魚の、

皆々　交りなさん。

八郎　何卒入魂をお結び下され。

〽時刻を移す折しもあれ。（ト早鐘、竹法螺になり）

○　間近く聞ゆる物音は、

△　正しく一揆の仕業と覺えたり。

平八　此の忠勝は後へ殘り、一揆の奴ばら切拂ひ、一はたらき仕れば、君にはお早く此の場をば。

家康　然らば汝が、詞に任せ、

小平　イザ〳〵君には、

皆々　間道を傳ひ。

〽心細くも主從七人、伊勢路をさして急ぎ行く。

ト家康先に皆々下手へはひる。小平太殘り是れを見る、此時後より幕明きの杣四人窺ひ出で、平八郎に組付き、ドン〳〵竹法螺にて、立廻りよろしくあつて、トゞ四人を下手へ追込み、平八郎下手の岩組へどうとなるを、上下の揚幕にてヤア〳〵の聲にて立上り、きつとなり、

平八　ハテ面白き野武士の遠卷き、主君を落せし上からは、心に掛る雲もなし、冴え行く月の鬼瘤越、一世の働き致してくれん。

〽あたりをきつと打見やり、

ト竹法螺ドン〳〵にて、揚幕より杣大勢出で、舞臺へ行き入替りて平八郎上手の岩の上へ登り、片足ふみ出すを、木の頭。これにて皆々海老折れになる、此の模樣よろしく、

幕

七幕目

勢州白子濱七郎次内の場
三州沖干鰯船の場

〔役名――徳川家康、榊原小平太、野澤彌十郎、角屋七郎次、進藤傳次郎、和田八郎、大久保新十郎、松浦藤四郎、狩野新平、鷲沼九郎、庄屋權兵衞、水主。母おなぎ、娘おはま、小娘お久等。〕

(勢州白子濱七郎次内の場)――本舞臺三間の間常足の二重、上手まひら戸の戸棚。續いて一間障子出這入り此次折廻し鼠壁、神棚あり、續いて奥へ一間折廻し、奥に同じく一間の障子屋體、出這入り、藁葺屋根、下手吹きさらし、海の入江の遠見、いつも所藁葺きの門口、あしの垣根、ずつと上手に葺きおろしの下家、此前に舟の櫂二三挺掛けあり、下手に舟宿の若い者○△□の三人、筒袖長半纏にて俵を運び居る。此の見得よろしく、波の音、舟唄にて幕明く。

○　今日は煙草休みなしで積んだから、めつぽうけえに早かつた。

△　後は俵詰にしないのばかり、是れでゆつくり煙草にしようぜ。

□　これといふのも汐時が、今夜は五つ時分だらう、うか〱しちやア居られねえ。

○　まアこれで年が明いたといふものだ。

ト奥より娘お久盆へ土瓶、茶碗を載せて持ち出で、

お久　皆さん、御苦勞でござんした、お茶を入れたから、上つて下さい。

○　ヲヽ誰かと思つたら、又助の子のお久ッ子か、よく毎日來て働いてやるな。

△　ずん〳〵なりが大きくなるから、一ぱし役に立つて來た。

□　モウこれぢやあ七郎次殿の、女房になつても釣合がいゝ。

お久　又そんな事を云つて、からかつちやいやでござんす。私が毎日手傳ひに來るも、七郎次さんのお母さんが知つての通り眼病ゆゑ、少しは手助けにならうと思ひ、それで來るのでござんすわいなア。

○　子供のくせにさう思ふのは、なか〳〵感心な心掛けだ、モウ二三年歳が上だと、女房に世話してやるものを。

△　まだ少しおぼこ過ぎるから、何ぼ何でも不釣合だ。

□　こいつばかりはどこの浦でも、おぼこが當にならねえから、何だかお久ッ子も知れめえ。

お久　そんな事は知りませんが、内のをぢさんを思つて居るのは、作兵衛さんの所のおはまさん、友達などゝ遊び乍らも、七郎次さんは亭主だの、ヤレ私の色だのと、それぱかりを言ふわいな。

○　道理で朝晩親方の機嫌をとりに來ると見せかけ、やつぱり内々張りに來るのだ。

お久　どうぞ皆さんが口入して、おかみさんにして上げて下さんせ。

△　どうして〳〵おらッちが、そんな事を云つて見ろ、女嫌ひの親分だから横づッぽうでもなぐり付けられ、痛い目をしにやあならねえ。

□　同じ男に生れ乍ら、おら達は女が好き、又親方は女嫌ひ、そこでおら達は親不孝、又親分は親孝行、同じ人間でも大そうな違ひだ。

○　そして親方は何をして居る。

お久　今奥で伯母さんの、肩をもんで居ますわいの。

○　もう日の暮れるに間もないに、わづかの間の汐時でも、さうして親の面倒見るとは、なか〳〵感心な人だ。

△　何でも人と生れたら、主人へ忠義親へ孝行、まッ直な事をしにやあいけねえ。

□　たゞ分らねえのは、忠義の道を知つてる光秀様が、何の遺恨か知らないが、二日の晩本能寺で、現在主人の信長公へ、夜討を仕かけて殺したは、主殺しも同じ事だ、あれで世界が渡れるなら、

○　主人へ忠義や又親孝行は、何もするにやあ及ばねえ。

△　理屈を云やあそんなものだが、悪い種を蒔いた者が、何でいゝ芽のふきやうがねえ。

□　永い月日の立つ内にやあ、どうせ報つて來るは必定。
○　是れを思ふとよしあしとも、
△　其の種蒔が、
三人　肝腎だ。

ト濱唄になり、お久茶をついでやる。三人飲み居る。花道より作兵衞娘お澤、前掛、小重箱を風呂敷へ包み持ち出で、

お濱　今日は村の寄合ひに、今朝から内がごた付いたので、角屋へ行くのが遲くなつたが、どうぞ七郎次さんが内に居ればよいが。（ト舞臺へ來て、）どなたも御免なされませ。（ト内へはひる。）
○　ヲヽ、噂をすれば影とやら、今こなたの話をして居たところだ。
△□　まア、こつちへ上るがいゝ。
お濱　大方噂をいつたのは、惡う云つたのでござんせう。
お久　イエ〳〵、褒めたのでござんす。
お濱　お前がさうお云ひでも、惡く言つたに違ひない、道でくさめが出ましたわいなア。
お久　いえ、惡く言つたのではござんせぬ、お濱さんは毎日來るに、今日はまだ見えぬゆゑ、内の伯母

さんが案じて居ると云ふので噂をしたわいな。

お濱　イエ、そりや本當でござんすか。

○　イヤ親方が案じて居ると云つたらば、そりや本當の事でござんすかえと、豪氣に聞樣に實が入つたな。

△　チン〳〵筋ではないけれど、お濱ッ子の樣子を見ても、おら達は癪にさはらア。

□　是に付けても國の産神、大神宮樣がおれは恨みだ。

お濱　なに、大神宮樣が恨みとは。

□　恨みといふは外でもねえが、天の岩戸の開かぬ前方、世界に雲が掛つて居る内、大方蒔いた種だと見えて、それでわしの顏付が惡いのだ。

お濱　何もお前の顏の事を、聞いたのではござんせぬ。わたしが聞くのは此方の内の。

□　どつこいしよ、七郎次さんと云ふのだらう。エヽ怨めしい。

ト幽靈の眞似をする。お久おはま逃げる。七郎次おなじ縞ちゞみの着流しにて出で、此中へはひり皆々こなしあつて、

七郎　お袋が目が惡いので、心配して居る所へ、人の心も知らないで、何をざわ〳〵して居るのだ、ち

と靜にしてくれねえか。

○ 大人氣なく騷いだのも、實の所はお濱ッ子が、誰かの顏を見に來たので、つい岡燒餅をおこした所から、うか〳〵さわいで濟みませぬが、

□ 罪はこちとらより、お濱ッ子にあります。

お濱 人聞の惡い、何をお前云はしやんす。私が何で知らうぞえ。

お久 お濱さんは知らぬ事、水主の衆でござんすぞえ。

七郎 しておはまさんは、何ぞ用でもありますかな。

お濱 別に用もござんせぬが、今日はお母さんの誕生日で、粟餅をつきましたから、伯母さんのお見舞に、どうぞ上げて下さりませ。

七郎 それは何より忝い、いやもう眼病といふものは、氣がふさいでならぬゆゑ、人の來るのを樂しみに、話をしたがつて居ますから、さぞ嬉しがつて居りませう。

お濱 それにお內でも生業の、おいそがしい最中にお母さんのお世話をなさるのは、大抵ではござんすまい。

七郎 晝の內はお久さんが、手傳つてくれますので、大助かりでござります。

お濱　モシお手が入りますなら、いつでも私が參りますから、どうぞ云うて下さりませ。

□　入らぬ事の口出しだが、晝の内はお久ッ子が働いてくれるから、夜になつたら更代で、お濱さんが泊りに來て、寢てからの用もたしてやると、どんなに重寶だか知れやしねえ。

お濱　又岩八さんの常談ばつかり、私やおつ母さんに云ひ付けますわいナ。

七郎　餘計な事を云はねえで、俵を舟へ積込んだら、さつき竹法螺が鳴つたから、湯へでもはひつて來るがいゝ。又お濱さんは其粟餅を、奥にお袋が寢て居ますから、どうぞ持つて行つて下さい。

お濱　アイ〳〵、そんならちよつと奥へ行て、御目にかゝつて來ませうわいなア。

ト唄になり、重箱を持ち立上り、七郎次をちよつと見やり奥へはひる。

○　コレ親方常談は扨置いてこなたに話す事がある、外でもないがあのお濱ッ子は、器量は人に勝れて居る上、物腰といひ何一つ、云分のない生れ付。

△　それに作兵衛殿夫婦の衆も、共々こなたにほれて居るから、わしらが媒人になつて、女房に貰つてやつたら、

□　お袋殿が眼病の手助けにもなり、親方とて身の固まる事なり、

○　女房に持つちや、

三人　やらつしやらぬか。
七郎　毎度親切に云つてくれて、其の志しは忝いが、たとひ手助けになればとて、却つて他人が一人交ると、氣兼が出來て面倒ゆゑ、それよりいつそ親子二人で、氣樂に送る事ならば、親孝行も出來ようから、モウ二三年は持たぬつもりだ。
○　度々女房を勸めても、さう決心を付けた日にや、こいつア成程持ちなさるめえ。
△　おら達などは一晩でも居られねえが、又親方は違つたものだ。
お久　をぢさんが今云つた事を、お濱さんが聞いたなら、さぞふさぐ事でござんせう。
□　お濱ッ子はふさいでも、内々張つて居るおれの爲には、今のを聞いて溜飮が下つた。
○　けいあん口に實が入つて、もう薄くらくなつて來た、表の莚を取込んで、汐時を待つとしよう。
△　湯から歸りに五平酒屋で、どぶろくを引つかけて來ますから、どうぞお賴み申します。
七郎　ついでに日暮れになつたから、お久坊を送つてやつてくれ。
□　どうせ通り道だから、つれて行つてやりませう。
七郎　サアお久坊、今日はもう歸るがいゝ。
お久　それぢやをぢさん、又あした參ります。（ト四人立上る。）

七郎 毎日大きに御苦勞でござりまする。

□ お久ッ子、サァ道行だ、手を取つてやらう。

お久 をぢさん、からかつてはいけません。

○ 岩公、子供でも女にや八をくふぜ。

□ こいつァ一番地金の所だ。

△ どれ、延喜直しだ、

三人 御神酒を上げよう。

ト浪の音、濱唄にて四人花道へはひる。

七郎 此間から水主の者が、寄ると觸ると一人身ゆゑ、女房に持てとすゝめるが、濱邊育ちの氣散じに親子二人が斯うしてくらすは、餘程氣樂でいゝといふもの。

ト以前の合方にて、奥よりおはま出で、

お濱 七郎次さん、をばさんは大分よいね。

七郎 ヲヽお濱さんか、そこに居るとはわしはさつぱり知らなんだ。お蔭でだん〱直ります。

お濱 これといふのも信心こゝろで、藥がよく行屆くゆゑ。

七郎　ほんにお濱さんの云ひなさる通り、そのせゐもありませう、あの眞珠の功能が現はれて、今朝からめつきり痛みが去り、餘程樂になりました。

お濱　それに付けても女子がなければ、お藥の世話や何やかや、さぞ御不自由でござりませう。

七郎　長年かうして居たせゐか、左のみ苦勞もしませぬが、毎日追手の吹く時候、内を留守にしますのが、たゞ心配でなりませぬ。

お濱　それに付けても頼まれた、女中が一人ござんすが、どうでござりませう。

七郎　丁度それは幸ひだが、若い女を置くと世間の口がうるさいゆゑ、さうかと云つて年寄を、雇ひに置くとお袋を、二人持つも同じ事で、却て世話がやけますから、今迄なしでやつて居ますのさ。

お濱　それには、丁度よい女中がござんすわいなア。

七郎　丁度よいと云ふは、いくつぐらゐになります。

お濱　年は五十ぐらゐに見えますが、がせいに働く人でござんす。

七郎　がせいに働くといひなさるが、エテさう云ふ人はおしやべりでならぬものだ。

お濱　イエ／＼誠に無口でござんすゆゑ、こちらから話をせぬ時は、一日でも二日でも、いらぬ口はききませぬわいなア。

七郎　なに、一日でも二日でも、此方で云はねば口はきかぬ、そりや病ひ持ではないか、さういふ人は無精なものだ。

お濱　イエ〳〵無精ではござんせぬ、よい物は縫へませねども、不斷着ぐらゐは仕事も出來ます、又七郎次さんが歸つて、草臥れた時にはあんまもしますわいな。

七郎　それは何より調法だ、して其の女子といふは、どこの人だね。

お濱　ハイ、隣村でござんすが、此間からこちらの内へ、來たがつて居ますわいなア。

七郎　何來たがつて居る。それは樣子を知らぬゆゑだ、わしの所は朝も早し又汐時の惡い晩は戻りが遲いと夜もふけるし、骨の折れる内だ。

お濱　いくら朝が早いとて、くらい内から御膳拵へ、又は伯母さんの御用迄、心にかけてしますわいな。

七郎　ハテ、それは不思議な奉公人だが、まア氣に入るか入らぬか知らぬが、一日二日わしの所へ、どうぞ目見得によこして下さい。

お濱　氣に入らぬどころではござんせぬ、置いて下されば、直に居流れでようござんす。

七郎　さうして宿の名前といふは。

お濱　サア、其の宿は。

七郎　何といふ名でござるな。
お濱　作兵衛といふわいな。（ト恥しき思入。）
七郎　作兵衛といふは、こなたの親仁、さうして奉公しようと云ふは。
お濱　あい、私でござんすわいな。
七郎　エヽ。
お濱　モシ、どうぞ置いて下さんせいな。
七郎　何をこなた云はつしやるのだ、五十と云ふから相談したが、こなたはいくつになると思ふ。
お濱　あい、丁度二十になりますわいなア。
七郎　お久ッ子を賴むさへ、世間へ氣兼ねでならぬから、日が暮れると歸すといふに、どうしてこなたが置かれるものか。
お濱　そんなら私が是程思ふに、どうでも置いては下さんせぬか。
七郎　二目と見られぬ顏ならば、置かれまいものでもなけれど、器量の人並勝れて居るこなたは內へ置けぬから、日のくれぬ內歸つて下さい。
お濱　それぢやと云うて、此まゝでは。

七郎　ハテ、明日になつて尋ねて下さい。夜は一切斷ります。
お濱　そんならどうでも、此のお內へは。
七郎　ハイ、夜は通行止ぢや。（トお濱是非なく立上り、）
お濱　これ程思ふに聞かれぬとは、ても情ない事ぢやなア。
　ト唄になり、しを〱と花道へはひる。七郎次そつと門口を明け、向うを見送りホツと思入あつて、
七郎　何ぼ人があつかましくなつても、女の方から男をとらへ、女房にならうの置いてくれのと、よくもの〱言はれたものだ。此間の法談に女は五障三從の罪人なればとお寺樣が、よく〱女をいましめたが、思ひ出してもぞつとする、モウ〱夜は締切だ。
　ト身震ひなし門口へ掛金をかけ、二重へ上り押入より角行燈を出し灯りを付ける、時の鐘、濱唄になり、花道より庄屋、弓張提灯を持ちて先に立ち、後より仲仕○□△の三人出來り。
庄屋　晝間積み込んだ荷物は、まだ運送書があるまいな。
○　今しがた私らがつみ込んで居ります、まだ受けるこつちやござりませぬ。
△　今夜の汐になります迄は、まだ一時早うござりますから、
□　樋に內に居ります。

庄屋　急のお觸ゆゑ逢はねばならぬ。（ト門口を明けようとして、明かぬゆゑ、）コレ〳〵、七郎次は內に居るかな。

ト七郎次行燈を付け乍ら、此聲にびつくりして、

七郎　女は夜は通行留ぢや、明日の事にして下され。

庄屋　イエ、明日にしては置かれぬ事ぢや。お觸れが來たのぢや〳〵。（ト表を叩く。）

七郎　おふれといふ女は知らぬ、明日だ〳〵。

庄屋　イヤ女ではない、おふれが廻つて來たといふのぢや。

○　心配せずと、

皆々　明けて下さい。

七郎　なに、おふれが廻つて來たといふのか。（ト安心の思入、門口を明け、）ヲヽ御庄屋樣でございまするか、ヤレ〳〵、それで安心したわえ。

庄屋　なに、安心したとは。

七郎　わしは又おふれといふ、女が來たかと思ひました。

○　又きまりで親方の女嫌ひ、それでびつくりさつしやつたか。

二人　こんな間違つたことはねえ。
七郎　サア〳〵、こつちへお上んなさい。
庄屋　さうしちやゐられぬが、急にお觸の來たのは、今度都の本能寺で知つての通り光秀公が、織田を殺した所から、亂ちきさわぎになつて、そこで伏見の旅館に居た智者と噂の德川樣も、迚も及ばぬと思つたゆゑ伊賀の國から逃げたといふので、てつきり伊勢の白子の濱から、船にのるに違ひないと、明智方からきびしいお觸、今日から船は斷りなしで、決して出す事は相成らぬと云ふお觸ゆゑ、わざ〳〵此方へも廻つて來たのだ。
七郎　さういふ御觸の矢先では、今夜の汐と思つた船も、出す事は出來ませぬか。
○　是が長く續いた日には、船頭は上つたり、あごが干上つてしまふがの。
庄屋　其代り村の者が一致なして、落人の德川殿を生捕らば、明智方から褒美はづつしり、船をこぐより割がいゝ。
△　道理でさつき話に聞いたは、佐木川の渡場で村の者が云ひ合せ、竹槍や鐵砲を持つて、寄り合つてゐるといふ事だ。
□　船生業が出來ねえから、其の落人の待網を張つて、褒美の金を貰ふとしよう。

庄屋 達て船を出さうといふには、檢分濟の鑑札受け、それから出帆するのだが、それより矢張り落人の詮議で金をもうける方が早手廻しといふものだ。所で觸れるのは、モシ落人の德川殿を、つかまへた其時は褒美の金を貰つても、二人でしめる事はならぬぞよ。

三人 どこか引け道がござりまするか。

庄屋 言はずと知れた引け道は、庄屋權兵衞が二ツ割、爰らがおれの役德だ。

三人 イヤ、慾張つたお庄屋樣だ。

庄屋 なに、慾張つた、是れが世間の通例だ。

□ それぢやあ是れから落人の、來るのを待網かけて、待つて居ようぜ。(ト三人思入。)

七郎 イヤ、それよりは檢分濟の荷物を積んで、渡世をした方がましだらうぜ。

○ イヤ、まともの事ではつまらねえ。

△ 褒美の金に有付いて、

□ 大きな事をしたはうが、

三人 早手廻しといふものだ。

庄屋 そんなら七郎次、檢分濟みの船でなくては、決して出してはなりませぬぞ。

七郎　承知いたして居りまする。

庄屋　又云付けたる褒美の金、二ッ割も忘れてはならぬぞよ。

三人　ヘイ／＼、承知いたしました。

庄屋　それではみなの衆、承知だの、ドレ、御神酒を上げて祝ひませうか。

　　ト濱唄になり、庄屋はひろ、三人後を見て、

○　ドレおれ達も御神酒でも上げて、

△　かゝを相手に祝ひませうか。

□　サア來やれ／＼。

　　ト下手へはひろ。後合方になり、奥より母おなぎ、眼病にて出て、

なぎ　コレ倅、そなたは酒を飲まぬから、いまお濱殿から貰うた粟の餅、搗きたてゞやはらかいが、きなこもある。付けて一ッたべぬか。

七郎　有難うござりまする、まだほしくはござりませぬ、後にいたしませう。

なぎ　そんならちよつと初穂を、神棚へ供へてくりや。

七郎　ハイ／＼、畏りました。（トさつきの粟餅をおしきへのせて供へる。）

なぎ　此の初穗を供へるに付け、思ひ出すは今庄屋が云うた事、お察し申すは德川樣、伊賀越を遊ばす途中も難所ゆゑお供の方は云ふに及ばず、三度の食もろく〳〵に上る事ではあるまいと、思へばかうして安穩に、くらして居るのは有難い事ぢやの。

七郎　其の御難儀をなされまするも元の起りは明智樣、本能寺へ夜討を仕かけ現在お主の信長樣を、討つて惟任將軍の位に登るは人非人、主を殺した其科でも、長く天下は保ちますまい。

なぎ　それに與する今の人達、強慾非道の庄屋が先立ち、高岡、白子、佐木川の、百姓や船人が、寄り集まつて見張りをするのは、囚人に褒美の金がほしいばつかり、いかに時世につれるとて、淺ましい事ぢやなア。

七郎　今も今とて水主の者が、止めるも聞かず集まる場所へ、三人とも行きましたが、よしんば落ちて來た所が、諸家の中でも岡崎衆は人に勝れたお方々、何で百姓船人が及ぶものではござりませぬ。

なぎ　どうぞ出逢つて怪我のない內、村の者へ云ひ聞かせ、內へ歸してやりたいが、そなたも晝のくたびれで勞れて居やらうが、樣子を見てはくれまいか。

七郎　そりやお前樣がおつしやらずとも、是れから行かうと思ふ所、さう云ふ事なら出かけて行き、先は大勢の事ゆゑに、聞かぬ時はせめての事、水主三人へ云聞かせ、內へ戻してやりまする。

なぎ　どうぞさうしてくりやいの。

七郎　そんならちよつと、行つて參りまする。（ト立上り、門口へ出る。）

なぎ　コレ悴、所の者は云ふに及ばず、人の氣が立つてゐるゆゑ、必ず怪我をせぬ樣に、なるたけ早く戻つて來やれ。

七郎　一旦さとして聞かぬ時は、餘儀ない譯でござりますから、直に戻つて參りまするが、わしが行つた其後も、よう氣を附けて下さりませ。

なぎ　承知して居ますわいの。

七郎　ドレ、云ひさとしてやりませうか。

ト浪の音、濱唄になり、七郎次足早に花道へはひる、後時の鐘打上げ、床の淨瑠璃になる。

〽軒を洩る夜風もいとゞ物淋しき磯邊間近き一軒家、我子の留守を唯一人浮世を思ふ物案じ。

トなぎさぐり／＼、門をしめ二重へ住ふ、メリヤスになり、

なぎ　世の人の變り行くは明日も知れぬもの、此の春迄は甲州の、威勢盛んな武田方も、忽ち織田に亡ぼされ、當時天下は信長公と思ひの外に光秀殿が、御主を討つて都の變亂、それに續いて此邊迄、ヤレ落人の詮議をするのと、聞くもうるさい戰話し、此長の年泰平の、御代に逢はぬは宿世

の因縁、モウ老先のない身の上、所詮落着く時節迄、此の世に生きては居られまい。

〽我身をかこつ老のくせ、先を思ふも道理なれ。

吹きさらしの濱邊ゆゑ、蚊は居ぬ筈ぢやが山よりも、却つて今夜は蚊が多い。ドレ蚊やりなとしかけませう。

〽蚊やりしかけて母親は、歸りを松の木下やみ、土地も白子の磯傳ひ、窺ひ來る一箇の武士

ト籠より枯葉を出し、蚊遣りをする、時の鐘波の音になり、柳原小平太出て、花道にて、

小平　和田八郎が案内にて、鬼瘤越よりやう〳〵と、此の伊勢路迄は恙なく君の御供いたせしが、爰は何れの浦なるか、星の光りと思ひしも間近くなりし人家の軒、あれへ參つて尋ねて見ん。

〽灯影目當に門の口、世を忍ぶ身の詞をたゞし、

ハツ、眞平御免なされませ。

〽訪なふ聲に聞耳立て、

なぎ　ハイ、どなたでござります、此方へおはひり。

小平　左様なら、はひつてもよろしうござりまするか。

なぎ　濱邊住ひにしまりもなければ、御遠慮には及びませぬ、サア〳〵此方へおはひりなされませ。

小平　そんなら、ゆるして下され。

〽後窺ひてしめる戸も、他生の緣と腰打ちかけ、

ト内へはひり、緣側へ腰をかけ、

お蔭で助かりました。

なぎ　さうしてどちらから、お出でなされました。

小平　何を隱さう私は、伊勢參宮に出かけました道者でござりまするが、今此の先の佐木川で一服吞んで居る内に、ツイ同行に放れてしまひ、どこを當途に闇の道、灯影をたよりに參りましたが、ひどい難所を歩いたせゐか、殊の外草臥れましたが、此の緣側をお借り申して、生き返つた樣にござりまする。

なぎ　それはさぞかし、お連れの衆の見える迄いつ迄なりと、わしの所に御休息なされませ。

小平　それは何より有難い。

なぎ　お湯でも一つ上りませ。

小平　イエ、決して構つて下さるな。（トおなぎの樣子を見て、）お前さんは、目が惡うござりまするか。

なぎ　ハイ長々の眼病で、いろ〳〵療治を致しましたが、何を申すも片田舍、思ふ樣に行屆かねば、今

日此頃になりましてはかいくれ見えなくなりました。

小平　スリヤ、皆目見えませぬか。

なぎ　ハイ、左樣でござりまする。

小平　それは安堵。

なぎ　エヽ。

小平　イエなに、安心なさるお年で、かうして一人でおいでなさるは、さぞ御不自由な事でござりませう。

なぎ　イエ、悴と孫がござりまするが、これが至つて孝行にて、世話を致してくれますから、誠に仕合せでござりまする。

小平　して聟殿は、どこへ行きました。

なぎ　只今ちよつと此先迄、用達しに參りましたが、程なく戻りませうから、まァ御ゆるりとなされませ。

小平　そんなら母御一人でござりまするか。是れも安心、イヤ安心出來ぬ、此の同行は何をして居るか早く尋ねて來ればよいが。

〽云ひつゝ門へ立ち出て、かねて合圖のあらしふく森のかなたをすかし見て、

ト門口へ出て、花道へ行き、

同行衆はどうしたか、早く逢ひたいものだが。

〽こだまに響く呼子鳥、磯打つ際の波音も世を忍ぶ身の油斷なく歩ませたまふ御方に、從ふ諸士も共々に、灯影目當に入り來るを、こなたの勇士は出迎へ。

ト小平太花道にて出迎ふ、花道より家康、進藤傳次郎、大久保新十郎、和田八郎家臣七人付き出來る。

小平太思入あつて、

小平　只今あれなる茅屋の内篤と實否を糺せし所、悴が他出に宅に居るは老いたる母一人、幸ひなるかな目病みにて、物のあいろも分らぬとは誠に以て最屈竟、少しも早く御越しあつて御休息遊ばしませ。

家康　それは近頃幸ひなり、然らばあれにて休息せん。

和田　これと申すも我君の、御運強くましますゆゑ、平八郎には陸地を廻り、岡崎表へ君御歸國の御注進。

進藤　誠に以て、今宵こそ、日本晴がいたしてござる。

和田　然らば我君、少しも早く。

大久　御越しあつて、

皆々　然るべし。

〽忠義輝く臣等の警固、道を照して附きたまふ。

ト舞臺門口へ來り、小平太家康に囁く。

小平　やう〳〵同行が尋ねて參つた。サア〳〵、わしが爰をかりて置いた、先づ此方へはひつたがよい。

なぎ　ア、お連れの衆が尋ねてござつたとか、ヤレ〳〵それは御安心、先づ此方へおはひりなされませ。

皆々　然らば許しやれ。（トかぶせて、）

小平　アコレ、（ト氣をかへ。）サア〳〵はひらつしやれ。

〽案内につれて主從が、皆々内に入りにける。（トおなぎ考へて居て。）

なぎ　モシお先へお出でなされたお方、此の通りの目病ゆゑ、何もおかまひ申さねば、どうぞあなたが御勝手にお湯なとくんで上げて下さりませ、又皆さんは御遠慮なく、此方へお上りなされませ。

小平　決してかまはつしやりますな、自由に爰らをかりまする。サア〱わらぢをぬいで、お上りなされませ。

〽詞かくして主從は禮儀正しく介抱なし、正座へこそは通しける。

ト大久保は家康の草鞋をとき、家康二重の上手へ住ふ、皆々警固の思入、誂への合方になり、

なぎ　御聲のなさる樣子では、大分大勢の樣に思はれますが、さうして參宮にお出でなされたのは、どちらのお方でござりまする。

進藤　ハイ、わしらは紀州の新宮の者でござるが、まだ都を見物せぬゆゑ、參宮かけて出かけた所、都へはひつて程もなく、本能寺の夜討さわぎ、見物所か同行のからだが危くなつて來たので、どこへ行くにも、ヤレ落人の詮議があるの、往來切手を持つて居るかのと、嚴しい見張りに仕方なく、

大坪　それから伊賀の山越えをやつた所が、殊の外の難所にて實に同行も弱り早て、

進藤　斯うして伊勢の白子へ出たれば、もうこつちのものといふもの。

新平　とてもの事に來たついで、是から渡つて遠州の秋葉へ參詣したいもの。

小平　爰らあたりは都と違ひ、戰などの愁ひはないゆゑ、舟も賴めば出ませうな。

なぎ　それは大きな料簡違ひ、どうして〱此邊りも嚴しいお觸で、今度の戰に都から落武者が來た事

なら、早速捕へて差出せば褒美をやるとのお觸ゆゑ、村の者が一揆を起し、出口出口へより集まり、皆出張つて居りますから其の落人に間違へられぬやう、よく氣を付けてお出でなされませ。

ト皆々聞いてぎつくりする。

小平　さうでござりまするか。うかつに話しも、イヤ、話しの内に息子殿が、早く戻つてくれゝばよいが。

なぎ　〽紛らす詞もどこやらに、自然と包む物腰に、扨はと思へどそしらぬ顔、最前からの御詞は、紀州の方だとおつしやりまするが、どうも詞の様子では、三河のお方と思はれまする。

皆々　エヽ。

なぎ　爰は濱邊の隣知らず、何も遠慮はござりませぬ、定めし三河でござりませうな。

ト皆々顔見合せ、

小平　イヤ、さう言はれては是非がない、包まず申すが實の所は、此の同行は三河の者、あらはにそれと云つたなら、落人とでも間違へられ、いかなる憂目を見ようも知れず、實の所は僞りました。

なぎ　詞は國の手形とやら、あなた方は氣遣ひはござりますまいが、モシ其お方と間違へられ、怪我で

もあつた其時は、御身の大事。イヤ、旅の事でござりますから、御身を大事になされませ。

小平　一方ならぬ其方の親切、シテ其方の息子といふは、なに渡世でござりまするな。

なぎ　ハイ悴は干鰯を積みまして、三州の作の島や、又は同所の大濱邊へ、運送いたす船乘りでござりまする。

小平　それは何より幸ひなり、とてもの事の厄介ついで、どうぞ故郷の三河迄、船を出しては下さるまいか。

なぎ　サア常ならお安いこと乍ら、此の節柄でござりますから、どうありませうか私には、其のお受合は出來ませぬ。

進藤　どうぞ息子殿にお目に掛り、三河へ船を頼みたいものだ。

なぎ　もう程なく戻りませうから、暫くお待ちなされませ。

〽田舍堅氣の親切に、氣も搗き立の粟の餅、さぐり〳〵て取出し、

ト押入より重箱と小さな土瓶を出し、

是は先刻貰ひました、目出度い祝ひについた粟の餅、やはらかにござりますから、きな粉を付けて上りませ、又此の土瓶にござりまするは、はつたい茶でござります自由に上つて下さりませ。

小平　なに、祝ひについた粟の餅とは、それは何より忝い、はつたい茶迄下さるとは、思ひがけない馳走にござりまする。

和田　然らば我君、イヤなに、きびより粟は又格別、風味がよろしうござりますから、早速一ツ上りませ。

ト取らんとせしを押止め、和田八郎餅をはさみ、家康の前へ出す。

小平　サ、先達から御馳走にならつしやい。

家康　心の付きし此の餅は、誠に以て我が醍醐味。（トぢつと愁ひの思入あつて氣をかへ）イヤ、馳走になるでござりませう。

〽厚き老母が情をば、押頂いてつく〴〵と、今日に迫りし主從が飢をしのぐも神の加護、

〽折柄爰へ七郎次、闇の濱路もふみ馴れし、星の光りにたどり來る。

ト七郎次歸り來て、

七郎　どうか一揆を止させようと、いろ〳〵に云ひさとしたが、なか〳〵聞かぬ強情ばかり、モウ此上はころばぬ先で、内の用心にしくはないわえ。

〽云ひつゝ我家の門邊に彳み、樣子窺ひ不審顔、

ト舞臺へ來り、門口より內の樣子を見て、不審のこなしにて、

母者人、今戻りました。

なぎ　ヲヽ、悴歸つたか。

七郎　シテ、爰にお出でのお方は。

なぎ　今しがたお出でなされた、伊勢參宮の道者の衆、京大阪から大和廻り、伊賀越えをしてござらしやつたのだ。

七郎　なに、伊賀越をしてござつたとえ。

ト思入、此の時薄く風の音、角行燈消える、七郎次思入、小平次こなしあつて、

小平　こりや濱風で行燈の、灯りを消してしまつたわえ。

なぎ　消えましたら、ちよつと灯りを。

七郎　イヤ、夜風が強くて持ちませねば、付けぬ方がようござりませう。

なぎ　それぢやと云うて闇では。

七郎　ハテ、伊賀越えをしてござつた客人、返つて灯りのない方が。

皆々　エヽ。（トぎつくりこなし。）

七郎　濱邊と云へど片山里、夏の蟲が居りますれば、灯りを目當に表から、思はぬ蟲が飛込むゆゑ、付けぬ方がよからうわえ。

なぎ　成程そなたの云ふ通り、付けぬ方がよからうわいなう。

〽二人の詞に人々は、もしや此身を悟られしかと固唾を呑んで控へ居る、母は悴に打向ひ、

コレ悴、此のお客人がお出でになりしは、是れより駿河へ乘船を頼みたいとおつしやるのぢやわいの。

七郎　それはお易い御用なれど、不斷と違ひ今日からは、嚴しき上のおふれが廻り、持船は出せませぬから、氣の毒乍らお斷り申しまする。

小平　スリヤ、此の濱邊より乘船の、渡海はならぬと云はつしやるか。

七郎　ハイ、おふれの出た其の元は、當時都の將軍職、明智日向守光秀樣でござりまする。

家康　スリヤ、此の濱邊迄、

小平　日向守が。

家康　アコレ。（ト皆々を止め、七郎次に向ひ）モシ御亭主、何を隱さう此所へ、道者と申して參りし者は皆明智が廻し者、諸所方々へ手分なし。

進藤　落人詮議不都合なきやう、内命受けし詮議の者、決して心配には及びませぬ。

七郎　左樣なればあなた方は、光秀方でござりまするか、それに違ひござりませぬな。

和田　何の違つてよいものぞ、武士にあらぬ我々共は、敵の陣へも姿をかへて、ひそかに入り込む廻し者ぢや。

進藤　決して否やのあらざれば、船を出しても仔細ござらぬ。

七郎　光秀方の御手先なら、鑑札を御所持でござりまするか。

皆々　ヤ、鑑札とは。

七郎　御存じなくば申しまするが、本街道は固め嚴しく、伊賀から伊勢へ山越しに、落ちる者が船を出せとモシ賴みに來た事なら、早速當地の固めの場所へ訴へ出よ、詮議なした其上で差しかまへのない者ならば、海上通路の鑑札を、渡してやるとのお觸故、其鑑札さへ御所持なら、直にも船は出しまする。

皆々　サア、其の鑑札は。

七郎　御所持でなくば、お氣の毒でもお斷り申しまする。

〽云ひ放されて面々は、何といらへもなかりけり。

大久　火急の御用で駿遠三を、穿鑿せねばならぬゆゑ、そこはこなたの働きで、望み次第の船賃を遣すから、どうぞ船を出して下され。

七郎　たとひどう樣にお頼みなされても、上のおふれゆゑ出來ませぬ。

大久　スリヤ、是れ程に頼みましても、

進藏　どうでも船は、

新平　出されぬとな。

七郎　ヘイ、あなた方のお頼みが、わしの心に叶ひませぬ。

小平　なに、こなたの心に叶はぬとは。

ト七郎次立上り、門口へ來り、窺つて元の所へ來り、

七郎　なぜ、御明し下されませぬ。

小平　なに、明せとは、そりや何を。（ト合方になり。）

七郎　高の知れたる船乘り渡世、賤しい者と御疑念は御尤もでござりまするが、是迄道に違つた事は露程いたさぬ親子二人、內宮樣を誓ひに立てゝも、決して他言はいたしませぬが、物腰といひ詞といひ眞闇で樣子は知れねど、明智方の穩密方と、おつしやるのはそりや嘘でござりませう。

〽星をさゝれし一言に、はッと思へどそしらぬ體、

小平　イヤ〱、そりや大きな推量違ひ、何で噓を言ひませうぞ。

七郎　さうお隱しなされまするなら、こちらから申しまするが、あなた方は三州の岡崎樣でござりませうな。

皆々　エヽ。

〽扨は大事の顯れしかと、柄に手をかけ身構へれば、老母は客に打向ひ、

ト皆々露顯せしと刀の柄に手をかけ、きつとなる。此の内おなぎ行燈へ灯りをつけ、七郎次あたりを心付ける。

なぎ　モウかうなりました上からは、恐れ多くも徳川樣、御家譜代の忠臣方と親子の者へ實否をば、御聞かせなされて下さりませ。(ト兩手をつき思入、小平太びつくりして、)

小平　扨は今迄目しひと申せしが、

進藤　老母は物が見えるとな。

なぎ　世を忍ぶ身のお方々、御心を御察し申し是へお出での其時より、皆目見えぬと申したは暫しの内でも御心置なう、御休息させましたく、お爲を思つて申しました。

七郎　又門口にて私も、何れも樣をお見受け申し、てつきりこれは岡崎樣と心が附いて行燈の、消えしを幸ひ眞の闇、くらき御身の御爲と思ひ、いかい失禮いたしましたが、母と共々此のお許し、どうぞなされて、

兩人　下さりませ。

〽正直面に顯はれて、詫びる心の眞心を聞し召されて家康公、譜代の臣も安堵の思ひ、各々威儀を改めて、猶も遊りへ心を配り、

ト兩人詫びる、皆々安堵の思入、侍の心になり、誂への合方にて、

家康　落人の身ゆゑ主從とも、深くも包みかくせしが、臣下の者迄親子して見知りし樣子に何をか包まん、察しの通りそれがしは德川三河守家康なり。

小平　拙者は譜代の家臣にて、榊原小平太と申す者。

和田　それがし事は伊賀越えの、間道より案內に附添ふ、和田八郎と申す者。

進藏　拙者も德川譜代にて、進藤傳次郎盛俊。

大久　大久保新十郎近常。

深沼　深沼藤藏正忠。

新平　佐野新平安行。

小平　いづれも徳川、

皆々　臣下の者。

〽初めて聞きし兩人は、案に違はぬ御方と、顔見合せてハヽハツと、頭を疊にすり付けて、敬ふも又道理なれ。（ト思入よろしく。）

なぎ　よくお明し下さりました、願つてもなきあなた方が、此の見苦しき賤ヶ家へ、御出で遊ばす其元は、やつぱり時世の成行と、實にお察し申上げまする。

七郎　モウ此上は私共が、たとひ一命にかへましても、御領國の三州へ、御送り申さにや是れ迄の受けた御恩が返されませぬ。

進藤　なに、命にかへても是迄の、恩を返すと言はるゝは、

大久　それは、いかなる譯なるか、

小平　其の由逐一、

皆々　申されよ。

七郎　徳川樣を神と敬ひ片時も忘れぬ其の譯は、丁度今年で七年後、御領地三州大濱へ干鰯を積んで參

つた折、所の漁師に見付けられ、他國から來て商ひするは國の衰微となる事ゆゑ、許して置けぬと多勢の者に捕へられ、既に命をとらるゝ所折よく殿樣お鷹野にて、お通りになり聞しめされ、漁師をさとして私の一命お助け下されまして、いまだに母と二人して安泰に暮しまするも、皆德川樣の御恩、それゆゑ私が命にかけても、三州へ御供いたして參りまする。コリヤ其時の御恩送りでござりまする。

家康　それにて思ひ出せしは、鷹野の折に助けたる、角屋七郎次にてあつたるか。

進藤　計らず今宵此所へ、巡り來るは氏神たる、

大久　正八幡の加護なりしか、

藤藏　是もひとへに我君の、

新平　御高運ゆゑに、

皆々　ござりまする。

〽祝す詞も憚りて、世を忍ぶ身の是非なけれ、折から告ぐる遠寺の鐘、

ト鐘の音、七郎次思入あつて、

七郎　あの鐘はモウ五ツ、そろ〳〵汐時になりまするが、爰に一ツ難儀な事がござりまする。荷物の外

は運送のならぬと申すお觸ゆゑ、御窮屈でも荷物の下へ御入れ申して參りまするが、此人數では露顯の元、せめてお供はお二人程、後は所詮積みきれませぬ。

小平　成程是れも一理あり、多人數乘船いたす時は、必ず破れの基なり。

進藤　此所より陸路をば、八郎殿と同道なし、

大久　三州表へ、

五人　參るでござらう。

和田　如何にも拙者が案内なし、たとひ敵地を通ればとて、必ず歸國仕れば、名々方も安堵召され。

小平　然らば我君、片時も早く、

和田　御乘船あつて、

皆々　然るべし。

家康　其志し忝いが、此の乘船はいたすまじ。

和田　なに、御乘船、

皆々　なされぬとは。（ト床の合方になり、）

家康　されば伏見の旅館にて茶屋四郎次郎が注進にて、京地の變を聞きし時破竹の如き猛勇の日向守と

戰ふとも、及ばぬ事と決し居れば味方一同討死と覺悟極めし其折に、忠勝我に異見をなし、亡き一命を延はりて、一先彼處を退きて、伊賀の山越えいたせしに、山賊野武士の集まりて、かねて明智の命令にや、我が通路を妨げんと待ちもうけたる宇治田原、既に一命危ふかりしも服部貞信に助けられ、數ヶ所の難所は行過ぎしが、

〽爰は名におふ信樂峠木の葉茂りし多羅尾谷、向うの丘爰の山、紙旗押立て一揆の武士、又も集りいたせしゆゑ、所詮血路を開くの策なし、いつそ恥辱を取らんより此谷間にていさぎよく生害せんといたせし所、又々忠勝諫めを入れ、再びそこを生延はり、一揆の場所へ近よれば、敵にはあらで出張せしは、多羅尾久右衛門にて仁心深き者なるゆゑ、爰も難なく打越えて、鬼瘤に差掛りしは早夕陽に近き頃、

〽麓に立ちし篝りの光り、樣子いかにと見おろせしに、是とても數多の集まり勢、モウ是迄と打向ひ、二タ打三打戰ひしが、

敵にはあらでこはいかに、柘三之丞、和田八郎、我が通路の妨げと、助力なさんと出張なしたり、是にて共に力を得、難なく當所へ落延びしが、これ皆おのれの力に非ず、全く臣下の盡力ゆゑなり、それを我一人助命なし、何ゆゑ乘船いたされんや。

〽あはれみたまふ御言の葉、心の底も徳川の深き恵みに今も尚、伊賀越御難と殘りけり、聞く兩人は感じ入り、（ト文句の通りよろしくあつて、）

なぎ　是れ迄御落ち遊ばした、御物語りを承り、實に涙のこぼれます程、御難澁をなされました、それゆゑあなたも御家臣と共にお命お捨てなさると、恐れ多いお詞は流石噂の御名君、下を哀れむ思召し。

七郎　とあつて皆樣お乘せ申すは、どうも危ふく思はれますが、よき御思案はつきませぬか。

小平　主從一緒に一命を捨てさせたまふと仰せあるは、恐入つたる事乍ら君に似合はぬ其の仰せ、そも戰場へ出る時は、臣下の者は御馬前にて、一命捨つるが武士の常、

進藤　かゝる危難に至りては、臣が一命なげうつが、則ち日頃の御奉公、

大久　爰の道理を分けさせられ、

藤藏　臣等が一命は天に任せ、

新平　是にてお別れ申しますれば、一先づ三州大濱へ、御乘船下さるやう、偏に願ひ。

七人　奉る。

家康　最早餘命も旦夕に、せまりし武運の拙き身の上、疾より決心いたせしぞ。

へ心動かぬ一言に、取付くしまも投首の手をこまぬいて居たりしが、和田八郎御前へ小膝を進め、

和田 是程迄にめい／＼が、御助命願ふにお用ひなく、共に一命落させたまふは、仁愛深き思召し、實に落涙いたしまするが、後に殘りし方々をば、必ず御案じなされまするな。

家康 合點行かざる汝の詞、斯く八方へ明智の手配り屆きし上は、如何なる事にて助命いたすぞ。

小平 これにて篤と申されよ。

和田 敵地の血路を開かずして、十に九ツ助命いたすは、君御乘船ましまさば、後に殘りしめい／＼はそれがし案内仕り、わざと明智の陣所へ向け、名のり出でなば光秀が情をもつて我君を、幕下に付けんと一命助け、使者を似て送らん事、鏡にかけて見るが如し。さすれば再び我君の尊顏拜するでござりまする。

小平 流石は和田殿仰せの如く身共もそれに同意せり、君が御本國へお歸りありしと聞くならば、臣下を討たば尙の事、敵にはけみを付けさす事ゆゑ、コリヤ一命は助けませう。

進藤 かゝるよろしき策あれば、少しも早く此所より、

和田 君には御乘船、

皆々　然るべし。

〽折しも聞ゆる法螺の音に、海手の方の騒がしく、皆々吐息つく所へ、裾もほら〳〵息せきとお濱は門へ走り來て、

ト家康是非なき思入、花道より竹法螺の音聞ゆるに聞耳立てる、波の音バタ〳〵、お濱後先を見て走り來り内へはひり、

お濱　モシ〳〵をばさん、今村の衆が云ふには、誰が言ひつけたか庄屋殿が、此方の内に都から、落人が來てござるから、手配りをして召捕れと、わや〳〵云うてまゐりますから、早うお立退きなされませい。

なぎ　そりやまア、よう知らせて下さつた。サア、さう云ふ譯ゆゑ何れも樣、

七郎　少しも早く、此所を。

家康　我世に出でなば其時は、必ず恩賞與へるぞ。

七郎　其仰せばかりでも、有難涙がこぼれまする。

大久　兩人迄は干鰯の下へ、かくすとあれば御供は、誰彼よりも何卒御守護をお頼み申す小平太殿。

小平　火急の場合辭退いたさず、それがし御供仕らん。

〽支度調へ人々は、縁より下へおり立ちて、

ト家康先に、皆々平舞臺へ下りる、おなぎ思入あつて、

家康 ヲヽ、堅固で戻れよ。

進藤 隨分ともに御機嫌よう、

なぎ 左樣なれば、何れも、

〽と是非もなく〳〵支度調ふ其内も、濱手に響く法螺の音、心忙しく立つ浪の歩みも陸と二タ道に見送り見送る内と外、恩愛からむもやひの手綱歩みの板のはかどらで、一禮なして愁ひをかくし思ひ込んでぞ別れ行く。

ト此間に舞臺廻る、家康を小平太七郎次介錯して舟の板子をはれ、干鰯俵の下へはひる、後七人思ひ切て下手へはひる。おなぎ、おはま氣遣ふ思入。

〽櫓繩とかんとせし所へ、

ト此時庄屋先に鷺沼九郎、鎧、附太刀、以前の舟子三人櫂を持ち出來り、

九郎 ヤア、其の船出す事罷りならぬ。

七郎 エヽ。

庄屋　最前あれ程云ひ置きしに、斷りなしに出すからは、噂のあつた都の落人、德川殿の一群を船にて落すに違ひない。サア鷺沼樣の見る所で、きり／＼船を改めさせろ。

九郎　それとも達てさへぎらば、汝はおろか老母迄、日向守が陣所へ連れ行き、かくまふやつらの見せしめに、逆ばッつけにいたしてくれる、それがいやなら都の落人、此所へ出してしまへ。

ト兩人きつと云ふ。

七郎　光秀公の御達しにて、落人を匿ふ事のならぬは存じて居るゆゑ守つて居ります、それをやれ德川の落人をかくまひしの何のと決して存じませぬ、其の御詮議のほしか船は、現在爰に居る水主のやつらが、晝間積込んだ俵、改めるなら遠慮なしに、すつぱり船を改めさつせえ。

九郎　イヤのめ／＼とした其の詞、慥に落人汝がかくまひしと申す事は、注進あつて存じ居るぞ、一人ならず二人迄、命を取らるゝ事ゆゑに、隱さず爰へ出してしまへ。

庄屋　さすれば褒美で此の庄屋も、イヤなに、庄屋も肩がぬけるといふもの。

水主　かくさず爰で、

三人　云つた／＼。

七郎　エヽやかましいがらくためら、褒美の金に目がくれて及ばぬ腕も知らずして、一揆を起した欲張

り庄屋、それ程疑ひかゝるなら、干鰯の俵を一俵々々、陸へはね退け改めろ、モシ落人が居ぬ時は手前等の首氣の毒だが貰つて行く、それが何より面晴れだ。

〽ずつけり云へど心の内、もし顯れなば是迄に、盡せし恩も水の泡、如何はせんととつおいつ傍に老母は吐息つき、案じる體を知らさじと目で知らすれば、こなたはいら立ち、

ト七郎次きつと云ふ、おなぎおはま案じる思入、七郎次目でせいし、

九郎　ヤア云はして置けばづべら〳〵と、よくも立派に申したな。よし改めた其上で、居たなら其の時汝の首、刎ねてやるからさう思へ。

七郎　モシ又板子の其下に、落人の居ぬ其時は、コレ御役人、こなたは何と言譯さつしやる。

九郎　ヤ。

七郎　氣の毒乍ら人並より、欲に太つたこなたの首を、此の場にて貰ひますが、それは承知でござらうの。

兩人　ムヽ。

〽ずつけり言はれて權兵衛は、もぬけの蟬のぶる〳〵と、ふるえとまらずどうと座し、

庄屋　鷺沼樣、船改めは、まづ暫く。（トふるへ乍らそばへ行き、）コレ〳〵お袋、こなたは定めしかくまつ

たか、又かくまはぬか知つて居よう、包みかくせば命にかゝはる。サア有體に云つてしまへ。

なぎ　どの樣に御詮議なされても、德川殿といふお方は、緣もゆかりもない知らぬ御人、何でおふれに肖いて迄、かくまひませうぞいなア。

庄屋　そんならおはまお前は知らぬか、云はぬとおぬしも命がないぞ、爰に居たから知つて居よう。サア包まずわしに云つてしまへ。

トお濱おぢけるゆゑ、もしやと七郞次案じる思入。

お濱　私の家はお前の隣り、今しがたお前と一緖に、內を出たではござんせぬか、一足違ひに爰へ來て何を云へといふのでござんす、顏でも洗つてござんせいなア。

庄屋　ホイ、こいつもしくじつた。（ト驚沼きつとなつて、）

九郞　なか〳〵こいつしぶとい奴等、よし、達て云はねば手立がある。

ト　すらりと大刀引拔いて、母の胸倉押取つて、

サア、いよ〳〵僞り申上ければ、今目の前にて汝が母の、一命斷つがそれでも云はぬか。

七郞　サア、それは。

九郞　一命取らうか。

七郎　サア、

九郎　サア、

兩人　サア〳〵〳〵。

庄屋　それ、船底を改めろ。

水主　ムヽ。

〽上意に水主の者共は、手早く船に飛びのれば、モウ是迄と七郎次支へ止むる日頃の强力、

ト此内三人棍を持つて飛びのろ、七郎次南無三といふ思入にて支へ、立廻りあつて、

七郎　運送なす干鰯船のほしかは目方の高い物ゆゑ、斷りなしに手籠になさば役人とても容赦はねえ。サアはねのけるなら、退けて見ろ。

ト俵の上へ立ちふさがり、きつと見得。

九郎　ヤア、無禮の雜言、もう是れ迄。

〽無禮な奴と鷺沼は、板子はねんと立ちかゝるを、こなたは支へる七郎次、既に危ふく見えたる所へ、

ト立廻る所へ、野澤彌十郎出て、

野澤　まづ暫く〳〵。

ト浪の音、バタ〳〵、鎧、白陣羽織、槍を持ち、切わらんぢ、附太刀、先に家來松明を持ちて二人付き出る。

其詮議お控へなされい。

九郎　さ云ふは相役野澤氏、何ゆゑお止めなされまするな。

野澤　其御詮議を御止め申すは、彼處の陸にて先刻より、得と樣子を檢分なしたり。

九郎　何は兎もあれ、此所へ。

野澤　いかにも、それへ參るでござらう。

ト會釋をなして彌十郎、しづ〳〵門邊へ通りける。〔ト千鳥の合方、生け殺し〕

九郎　してそれがしが詮議いたすを、御止めなされし其の仔細は。

野澤　其の仔細外ならず、此度光秀公の嚴命にて、兩人役目を蒙りし上は二人して糺すが法、それを貴殿一人にて改められるは、ちと御粗相かと存じられます。

九郎　そりや御問合せ申さぬは、不念にはござれども、モシ落人取逃さば貴殿とても手落となれば、取敢ず詮議のいたした。

野澤　して又是れなる船中に、落人ひそみ居る事を、何等の廉にて御承知あるな。

九郎　さればさ、慥にかくまひある事は、これなる庄屋が注進にて、此處へ參つたそれがし。

野澤　それは近頃愚な事、是れなる庄屋の注進は、たゞ欲情より起りし事、褒美の金に目がくらみ申した事ゆゑ取るに足らず、然し役目の儀にござれば此場に於て立合の上、一應得と改め見ん。

九郎　いかにも是れにて御一緒に、船改めの仕らん。（ト野澤七郎次に向ひ、）

野澤　コリヤ、何も仔細はあるまい、安心いたして、イヤサ案内いたして改めさせい。

七郎　へイ。

〽と云ひつゝ立つて兩人は、善と惡との逆浪にさわ立つ胸を押し靜め、窺ひ〳〵とつくと見やり、扨はと思へど、そ知らぬ顏、

ト此内七郎次、野澤彌十郎、鷺沼九郎付いて、船の中を板子を明けて見て、扨はといふ思入、

野澤　斯く悉く改めしに、何の仔細もござらぬ上は、検分濟みの鑑札を、これにて彼れに渡すでござる。

九郎　いかにも、仔細ござらぬが、今一應それがしが。（ト船へ行きかける。）

野澤　イヤ、今立合ひし其上にて、事濟みと相成りしに、まだ御疑念のござるかな。

九郎　さうではなけれど、

野澤　何か拙者が改めしを、御胡亂と思し召すか。

九郎　イヤ、全く以て。

野澤　左樣でなくば何ゆゑに、再應船を改め召さるな。

九郎　サアそれは。

野澤　これでも、御疑念晴れ召さぬか。

九郎　全く以て。

野澤　然らば何ゆゑお止めありしぞ。

九郎　サア、

野澤　サア、

兩人　サア／＼／＼。

野澤　斯く立合うて改めし、船に仔細はござりますまいな。

九郎　ム、。

ト面ふくらして庄屋諸共、是非なく床几に控へ居る、彌十郎は威儀を改め、

ト九郎無念の思入、

野澤　コリヤ七郎次とやら、老母も共にそれへ出い。

なぎ　ハツ。（ト合方になり、）

野澤　それがし事は桑名の城主氏家内膳が家臣にて、野澤彌十郎と申す者、今般明智日向守天下の政事を司る、其命令にて此所へ同役鷺沼九郎殿と船改めの見張りの役目、疾より此場の樣子も存じ、徳川殿を救はんと、イヤサ、徳川殿を救ふなどゝ、元より根もなき浮説をば、鷺沼氏が眞に受け詮議召れし事なるが、老母を始め其方が、さのみ驚く氣色のなきは、是れ覺えなき證據なりと、思へど役目の表なれば、是れにて篤と改めしが、全く檢分濟みの鑑札を只今汝に渡す程に、心置なく三州の、なそれ彼の大濱へ送り遣はせ、イヤサ、運送いたして苦しうないぞ。

〽仁あり義ある武士の、情の詞に打悅び。

七郎　スリヤ檢分濟みの鑑札迄、お渡しなされて下さりまするか。

野澤　いかにも、是れにて遣はさん。

〽懷中より取出し、袱紗包みの鑑札を、渡せばこなたは押戴き、

ト鑑札を渡す、七郎次うれし悅び、

七郎　此の鑑札がござりますれば、何處の浦へも參られまして、心丈夫と申すもの。

なぎ　是れにて親子が忠義も立ち、イヤサ、親子が命助かりましたも、皆あなた樣の御執成し。

お濱　居合せました私達も、とも〴〵御恩は忘れませぬ。

七郎　エヽ、有難うござりまする。

〽心の内で伏拜む、早手の風も吹きかはり追手を得たる如くにて、悦ぶ親子こなたには、欲の深海の權兵衛は、磯をきよろ〳〵見廻して、

庄屋　モシ鷺沼樣、コリヤよい證據がござりまするぞ。

九郎　なに、證據と申すのは。

庄屋　コレ御覽なされませ、磯打際よりこれなる所へ、多人數歩みし草鞋の足跡、斯樣に付いて居りまする。

九郎　なに草鞋の足跡が、ムヽ、扨は是れなる足跡は、慥に乘船いたせし樣子、野澤氏、こりやよい證據でござりまする。

野澤　是れは疑ひ深い、都よりの落人は草鞋をはくと極めてもあるまい、大方これは此の土地の、百姓杯の足跡ならん。

庄屋　モシ〳〵野澤樣、それは此場の間に合言葉、漁師ばかりの白子の濱邊、草鞋の跡のあり樣なし、こりや御詮議物でござりまする。

九郎　いかにもそちが申す通り、漁師は草鞋をはかぬゆゑ、こりや此のまゝに濟まされぬ、彌十郎殿、貴殿の槍をお貸し下されい。

野澤　なに拙者が所持の此の槍を。

九郎　拜借申すは外ならず、干鰯の俵は取退けずと今一應の念晴し、俵の上よりづぶ〳〵と、突通して改め申さん。

七郎　エヽ。

九郎　それにて手答へなき時は、いよ〳〵居らぬに相違なし、さすれば疑ひ晴れ申さん。

野澤　イヤそれは至極尤もなれど、此槍は我が得物、人を突くべき品なれば、干鰯を突くに所持はいたさん。

九郎　イヤ干鰯は刺さぬ、現在付けし足跡の、かくれしやつらをつくのでござる。

野澤　イヤ此の近邊に隱れし者あらば、身共がつきまする、貴殿に渡す謂れはござらぬ。

九郎　然らば只今此所で、一々突いてお見せなされい。

野澤　サア、それは。
九郎　それとも是れにて突きませうか。
野澤　全く以て。
九郎　お突きなさるゝか。
野澤　サア。
皆々　サア〳〵〳〵。
九郎　疾く〳〵ついてお見せなされい。
〽退引させぬ詞詰め引くに引かれぬ武士の、面に発じ心を定め、
ト此内野澤思入、おなぎ七郎次おはま見返り、心遣ひの思入。
野澤　いかにも只今貫きて、貴殿の疑ひ晴らしてくれん。
〽槍おつ取て彌十郎、是非もなぎさに立上り、歩みもせまき船べりを渡りて俵をつかんとなす、こなたはどうぞ神佛のお助けあれと三人が、心も空にとつおいつ、胸に一物鷺沼に庄屋もろとも目をくばり、付けつ覘ひつ眞只中、エイと一突きつッ込む槍先、
ト野澤突く、鷺沼見て、

九郎　どうだ、手答へいたしたか。

野澤　イヤ、何ともござらぬ。

〽口には云へど胸の內、もしや血汐の付きしかと、トそつと引きぬきほつと息、

九郎　然らばみよしの方を、今一度。

野澤　心得申した。

〽又も俵の表を目がけ、

エイ。(ト突込む。)

九郎　手答へのいたしたかな。

野澤　イヤ、何ともござらぬ。

九庄　ハテ、めんえうな。

九郎　然らば、ともを今一度。

野澤　心得申した。

〽心得たりとともの方、神を念じて突かんとすれど、手さへたゆみてためらひしが、是迄なりと突通す、七郎次は心の內、樣子いかにとためらひ居る。

ト文句の通りある、九郎次見て、

九郎　ヤア、手答へのいたしたな。

野澤　イヤ、何ともござらぬ。

九郎　ドレ、引拔いて槍先を、ソレ松明。

〽姿見えねど手答へに、南無三寶しなしたり、是迄除けしも水の泡、殘念や悔しやと力もたゆみ引く槍の穗先を灯影に打見やり、

ト野澤これ迄といふ心にて、槍を引きぬき灯影にかざし、見てびつくり思入ある、鷺沼そばへ行かうとするか、手早くしごきにてふき、

野澤　穗先を得と御覽なされ。

九郎　ドレ。（トよく〱見る、扨はといふ思入。）扨は穗先に血汐のくもり、何と慥な證據でござらう。

野澤　貴殿は夜目にて此のくもりが、見分けられぬか存ぜねども、これはほしかの油でござる。

ト皆々こなし、野澤氣をかへ、

九郎　何と。

野澤　それを血汐の曇りと申すは、はてさて粗相なお目違ひ。

九郎　ム丶。

野澤　三度迄も突く槍の、穂先に血汐のあらざれば、是れにて御疑念はれたらうな。

九郎　いかにも、疑ひ晴れてござる。

七郎　スリヤ、お疑ひは晴れましたか。

なぎ　エヽ、有難う存じまする。

〽悦び合ふぞ道理なる。

野澤　斯く明白なる上からは、早く出帆いたしてよからう。

七郎　左樣なれば、御兩人樣。

九郎　思へば憎くき。（ト息込む、野澤槍の石突きにて押留め、）

野澤　サ、片時も早く。

七郎　合點だ。

〽勇み進んで、

ト七郎次船へ飛上り、おなぎおはまもやひの綱をとく、庄屋等三人は、いまくしき仕組よろしく、

幕

ト三重浪の音にてツナギ、道具出來次第、浪まくを切つて落す。

（三州沖干鰯船の場）＝本舞臺一面の大海原、眞中干鰯を積みし大船、前浪手すり、上手松の立木、後に日の出の現れる仕掛よろしく、三州沖干鰯船の體、浪の音にて道具納まる。と船の眞中より家康公、小平太、七郎次あたりを窺ひ乍ら出て、家康眞中へ腰をかける、後左右に控へ、七郎次下手に居て、

小平　我君様、

家康　康政、

小平　危ふい事で、

七郎　ござりましたな。（ト皆々ホツと思入、七郎次思ひ出し、）嬉し紛れに忘れて居りしが、出帆の折野澤様が、下さりました鑑札の袱紗に何やら書いてござりました。

ト鑑札の包みを小平太に渡す、小平太見て、

小平　ハヽア、何やら認めてある。落つれば同じ谷川の水。此の上の句は、雨あられ雪や氷とへだつれど。

家康　落つれば同じ谷川の水、ム丶、水野の忰が明智の家來へ、養子に行くと聞きたるが、

小平　水と申すは心のなぞ、

家康　扨は故主の恩を思ひ、

七郎　それと悟つて助けしは、

小平　末頼もしき、

皆々　者ぢやなア。（ト上手にて、）

聲　神明丸ヤアイ。

ト呼ぶ、皆々びつくりする、七郎次心付き、

七郎　イヤ決して御案じには及びませぬ、陸へ間近くなつたので、港へかゝつた神明丸を、よんだ聲でございまする。（ト皆々案堵の思入ににに、）

家康　なに神明丸をよびしとな、神明納受なす時に、ヲヽ時に取つて幸先よし。（ト鶏笛になり、）

七郎　最早夜明けに海上も、

小平　東雲近く、明け行く空。

ト音頭のきつかけ、黒幕を切つて落し、夜明けの遠見になる、小鼓入りになり、

家康　早鷄鳴にあり／＼と、向うに見ゆる山影は、
七郎　あれぞ御領地三州大濱。
小平　伊勢の白子を出帆せしより、
七郎　追手に船は矢を射る如く、
家康　今朝なぎに海上は、
小平　實に一天の雲もなく、
家康　風おだやかに浪立たず、
七郎　帆も十分に港入り、
小平　誠に朝日の、
七郎　御高運。

ト此時日の出昇る。家康見返り、

家康　實に快晴の、（ト立上るを木の頭、）
心地ぢやなア。

ト此の引張り、浪の音、シヤギリ、きざみと一緒に千鳥笛を引上げることよろしく、

八幕目

家康旅館の場

［役名――徳川三河守家康、淺野長政、大和大納言秀永、大久保新十郎、永井傳八郎、深沼藤藏、成瀬一政、矢野善九郎、茶屋四郎次郎、關白秀吉公。］

（家康旅館の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面床の間違ひ棚、續いて大小掛下茶壁、腰張り上手一間障子屋體、下手同じく障子屋體、出這入り、短檠を照し、碁盤を置き碁を圍み居る、明荷雨掛などあり旅館茶座敷のてい、秋の七草にて幕明く。と爰に長井傳八、深谷藤藏、成瀬一政、向井善九郎の四人碁を圍み居て、

傳八　先づ此石の並びでは、手前が勝利と相見ゆる。

藤藏　所を手前が中手を入れて、爰の所を生かして見せう。

一政　何樣是れは妙手でござるが、爰は如何召されたな。

善九　そこを取られては勝敗も、どちらがどうとも云へませぬ。

傳八　なに、是れしきの中手ぐらゐは恐るゝに足らぬ所、手前は徳川流の圍みゆゑ、爰ではねまするて。

藤藏　イヤ御手前が德川流なら、手前は又羽柴流にて、此處を斷う切りまするな。

一政　コリヤ當家と羽柴方、天下分目の戰ひゆゑ、面白い勝負になりました。

善九　然し小牧長久手の合戰の樣に、始終はどうせ和睦物。

傳八　イヤ〳〵、所を和睦にせずして、此の一目で勝を得ました。

藤藏　イヤ、これは心付かなんだ、其の一目は待つて下さい。

傳八　イヤ〳〵天下分目ゆゑ、是ばかりは待たれませぬ。

藤藏　まつたは出來ぬとは、そりや御無理。

傳八　イヤ〳〵、天下分目だから、そりやならぬ。

藤藏　イヤモウ、心付かなんだ、閉口々々、これはこはしにいたしませう。（ト盤をかきまはす。）

一政　イヤ、こはすとは、御卑怯々々。

善九　武士の身にも御似合ひなされぬ。

藤藏　イヤ今少々やつて居れば、勝たれぬ事もござらぬが、相手が御當家と聞いて見れば、勝つた所が面白からず、主君に敵たふも同然でござる。

傳八　ハテ、負惜しみも大がいになされ。（ト上手屋體より新十郎出て、）

新十　おの〳〵勝敗は如何でござるな。

藤藏　相手が徳川流と聞いて、餘儀なく降參をいたしてござる。

傳八　イヤ〳〵、それは負惜しみでござる。

一政　全く長井傳八殿が、

善九　負けましたに相違ござらぬ。（ト合方替り、新十郎眞中へはひり、）

新十　イヤおの〳〵には何事も、御主君たる徳川家に敵たふ者はあるまいと、左樣に御自慢いたさるゝがそれが則ち油斷の基、近きためしは織田殿ですら明智の爲に不意を討たれ、御落命遊ばして明智が惟任將軍となり、御主君には僅かの人數にて御旅館にも居る事ならず、なか〳〵油斷はなりませぬ。

傳八　仰せの如く殿下秀吉、三度まで我君に、上洛いたしくれるやう、使者をよこして頼みながら、風邪と僞つて今日迄、對面延引さするは、いかなる譯か心得ず。

藤藏　尤も小牧長久手の戰ひ、和睦の其後は緣者にならんと、朝日の前殿を御當家へ輿入れさせ、妹聟の家康公ゆゑ、此の秀吉は二心なしと疎意なき樣に見せかくれど。

一政　いかなる者を妹と僞り岡崎表へ送りたるや、其邊とても計られず、まつた此度御主君に御上洛を

さすに付け、二人となき母親を人質代りに送りしと申せど。

善九　先日我君御發駕の砌り、酒井殿へ御手配の、御内意を御示しありしが、一方秀吉策略を以て、旅宿を襲ふと見る時は、都の町へ放火なして、一先づ東寺へ引上げし上は八坂邊にてはさみ討、伊勢路と僞り近江より、關としめし合せし兼ての手配り、まづ何事も油斷大敵、枕を高く寢られませぬぞ。

傳八　それゆゑ斯樣に夜もすがら、

藤藏　碁でも圍みて我々も、

善九　睡氣ざましを仕り、

一政　なか／＼油斷は、

四人　いたしませぬ。

新十　それにて手前も安堵いたした。（ト此時上手の屋體より、茶屋四郎次郎出で）

四郎　ハッ、各々方へ申上げます。

新十　誰かと思へば四郎次郎殿、あわたゞしい何事でござる。

四郎　誰今表の門の扉を、明けよ／＼と叩きますれば、家内の者は寢入りばな誰一人答うる者なく、私

はまだ寢ませぬゆゑ、何れの御入來と尋ねましたら、決して案じる者ではないから、門を明けよと申しますから、こは〳〵乍ら明けましたら、十人ばかり、何れも忍び頭巾をかぶり、なりも立派なお侍が、德川殿へ密々に、相談あつて參つたれば、奥へ案內いたせよと玄關口からツカツカと、上つて參りました。

四人　ヤ。

傳八　何にいたせ、此の旅宿へ、

藤藏　夜中を計つて參りしは、

一政　曲者に疑ひなし、

善九　是れへ參らぬ其の內に、

四人　イデ、我々が。（ト刀を持つて立上る。）

新十　まづ靜かにいたされよ、何者なるか知れざれば、きつと實否を糺した上、まこと曲者に極まらば打つて取るはいと易し、粗忽の働き召さるゝな。

四人　それぢやと申して。

新十　ハテ、待てと申さば、まづ〳〵待たれよ。

四郎　大久保樣のおつしやる通り、必ず粗忽をなされまするな。
新十　して何れより參りしぞ、其の姓名を問はざりしか。
四郎　御姓名を問ひましたが、氣遣ふ者ではないと、悠々然と上座へ直り、頭と思ふ其人が、冠りし巾を取拂はれた所をそつと覗いて見てびつくり、思ひもうけぬ御方の御入來でござりまする。
新十　なに、思ひもうけぬ御方とは、
傳八　シテ〳〵、それは、
四人　何人なるぞ。
四郎　聚樂の御所に御出でなさる、關白樣にござりまする。
新十　なに、關白殿下の御入來とか。
四郎　秀長公と長政殿が、御供いたされてござりまする。
傳八　扨は關白が今宵旅宿へ在せられしか、不快と云つて期を延ばすは、計略なるに極まつたり。
一致　向うの出の裏をかき、
善九　先を取るのが味方の勝、
四人　イザふん込んで。（ト立掛るを。）

新十　又しても〳〵仔細も問はず殿下へ對し、無禮あつては主人の恥辱、何にもせよ此趣を、我君へ申上げられよ。
傳八　ではござれども、よき機會、
藤藏　此期をのがさず、
四人　我々が、
新十　ヤア猶餘召れず我君へ、仔細を申上げられよ。
四人　ハヽ、（ト奥へはひる。）
新十　して殿下には、何れにござるぞ。
四郎　只今別間へお通し申し、お待たせ申し置きました。
新十　當時威勢旭の如き、武官に例なき關白職に昇進ありし秀吉公の、大切なる身を輕々しく、僅か十人程の人數にて、夜中忍んで入來ありしは何共以て心得ず、それがし參つて出迎へなし、若し密謀ある事ならば、人手を待たず其場にて、
四郎　ヤア。
新十　其場に至り機に臨み、變に應じ計らはん。

四郎　左樣ならば、大久保樣。

新十　殿下の御座所へ、(ト刀を持ち、立上り下緒をさばくを、道具替りの知せ、)案内いたせ。

ト秋の七草にて、此の道具廻る。

(同じく旅館別間の場)――本舞臺下舞臺、上手九尺の床の間、續いて茶壁、折廻し杉戸の出這入り、上手矢張り杉戸、日覆より大欄間、總て旅館別間の體、早めの合方にて此の道具納まる。と眞中に家康公、左右に以前の傳八　藤藏、一政、善九郎控へ居て、

家康　こりや其方共は何故に騷ぐぞ、尾籠にあらうぞ。

傳八　ハヽ、其お叱りはさる事乍ら、僞り表裏の羽柴秀吉逆賊明智を亡ぼして、織田の天下を掌握なし、

藤藏　次第に官位も昇進なし、終に關白殿下となりしは、世俗に申す横着者。

一政　兩三人にて此の旅宿へ、忍び來るは天の與へ、所謂袋の鼠にひとし、

善九　此場で彼れを討果し、我君直に大内へ、御參内遊ばされなば、

傳八　手もぬらさずして一天下は、君の御手に入りまするが、

藤藏　御賢慮如何にござりまする。

家康　ヤア、其の方達は家康を、不法者と心得居るか。
一政　でも、此の場を過しなば、
善九　籠中の鳥を、
皆々　逃すも同然。
家康　近くは明智がよき手本、不義の富貴は好まぬぞ。
傳八　スリヤ、御承引、
皆々　下さりませぬか。
家康　此の上殿下の御噂は、必ずともに相成らぬぞ。
皆々　ハヽ。（ト控へる、花道より新十郎出來り、）
新十　ハヽ、只今關白殿下には、これへ御入りにござりまする。（ト下手へ來り控へる。）
家康　御敷物を。ソレ、お出迎ひいたせ。
皆々　ハツ。（トたすき鉢巻を取り、控へる。）
呼び　御入り。
ト鳴物になり、花道より秀吉公、大和秀長、淺野長政、附添ひ出る、皆々出迎へ、褥、脇息、刀掛、

煙草盆など置並べる、花道に止り秀吉に附添ひの家臣下に居る事あつて、

家康　ハヽ、思ひがけなく殿下には、旅宿へ夜中の御成りは、俄の事ゆゑ設けもなく、失禮御免下さるべし。

秀吉　ホヽオ、珍らしや家康殿、誠に久しく打絶えて、面會せざれば懷かしく、今宵忍んで參つてござる。

秀長　案内もせずに推參せしに、御叮嚀なる御出迎へ、

長政　御家臣方にも御苦勞千萬、

新十　何はさし置き、先づ〱あれへ、

秀吉　然らばそれへ、參るぞよ。

ト鳴物になり、三人舞臺へ來て、秀吉は眞中、褥の上へ住ひ、左右上手へ秀長下手へ長政住ふ家康皆皆下手に控へる事よろしく、

家康　今般上洛いたせし所、御不例との御沙汰ゆゑ、差控へをつたるに計らず今宵成らせられ、斯く麗はしき御尊顏を拜し、恐悅至極に存じ奉ります。

秀吉　長篠以來面會せざるに、家康には以前に替らず、いつも壯健なる樣子、大慶至極な事でござる。

家康　ハヽ、有難き其の仰せ、ソレ御もてなしの用意いたせ。

新十　ハヽ。（ト立ちかける。）

秀吉　アイヤ、其のもてなしは無用にめされ、今宵は忍びの事なれば、馳走は却て迷惑いたす、是れへさゝへを持參いたせば、是にて酒宴を開きたい。

家康　なに、御さゝへを、

皆々　御持參とな。

秀吉　いかにも、是れへ持參いたした。長政それにて、

長政　ハヽ。

秀長　イヤ、其の御酒宴暫く、いまだ徳川殿へ御挨拶を、

長政　拙者も共々、

秀吉　アコレ、其の挨拶は忍びの事ゆゑ、後して改めいたすがよい、夜も更ける事なれば、持參なせし其品を、それにて早く披露いたせ。

長政　ハヽ。（トさゝへを前へ出し、）殿下よりの御土産として、粗末乍ら御酒肴を賜はつた。又御家來衆へ御土産として、黄金三千枚下し置かれますれば、よしなに御配當下されい。

ト懷中より袱紗包みを出して渡す。

家康　御提重と申し家來ども迄、御配慮の御土産、有難う存じまする。それ、御禮申せ。（ト家臣皆々、

皆々　有難く存じ奉りまする。

秀吉　家康殿には不思議の縁にて、先頃婚儀の因みを結び。我が妹を送りしが、不束者にて嘸かし迷惑察し居るが、末長く目をかけて下されい。附いては御身と我等とは、所謂聟舅ぢやが、いまだ引出物も送らねば、幸ひ今宵の面會に、差古びたる小刀乍ら、聟引出に進上申す。

ト家康帛紗にて是れを受取り、

家康　ハヽ、こは殿下御手づから、恐入つたる御引出物、有難く頂戴仕りまする。ソレ、御禮申上げい。

新十　ハヽ、主人を始め臣下の者迄、御土産下しおかれ、

傳八　一同御禮、

皆々　申上げ奉りまする。（ト新十郎金包み押頂き、辭儀をする。）

秀長　イヤ失禮にはござりますれど、殿下の御腰が明きますれば、此の秀長の小刀を、暫く捧げ置きませうや、

秀吉　イヤ、外ならぬ縁者の當家、なに帶刀に及ばうぞ。

秀長　ではござりますれど。

秀吉　エヽ、入らざる事ぢや。

秀長　ハツ。

長政　イザ御酒宴をお開きあつて、召上られて下さりませう。

家康　仰せにはござりますれど、せめて粗茶なり御もてなしに。

秀吉　イヤそれは堅く斷り申す、他見を憚り深夜に及んで參りし事なれば、家内の者へもなるたけに、其の取沙汰のなきがよろし、今宵の酒宴はこれのみにて、一さん開きたい。

家康　然らば上意に從ひて、差控へるでござりませう。

ト此内新十郎氣遣ひの思入。

新十　ハヽ、殿下の御前も憚らず、恐入つてござりますれど、御願ひがござりまする。

家康　なに、願ひとは。

新十　只今お開きなされまする、御持たせの御酒を、何卒拙者へ鬼役を仰付けられ下さりませ。

家康　ヤア、殿下の下され物、なに鬼役に及ばうぞ。

新十　ではござりますれど、臣下の役目、

秀吉　主人を大事に思ふ大久保、尤もなる事乍ら、そちが鬼役いたすに及ばぬ、此の秀吉が毒味いたして家康殿へさすでござらう。

家康　スリヤ、殿下には御自身に。

秀吉　長政、酌いたせ。

長政　ハツ。(ト本調子の合方にて、酌をする、秀吉干して、)

秀吉　イザ、家康へさしますぞ。

家康　ハツ、有難く頂戴仕る。(ト杯を受け、家康飲んで下へ置き、)

秀吉　イヤ、其儘に返杯いたされよ。(ト懐紙にてぬぐひ、)

家康　ハツ、御意に從ひ、恐れ乍ら。(さし出す、秀吉受取り飲む事、)

秀長　秀長より德川殿へ。(ト秀長へさすを飲干して、)家康殿幾久しく。(ト家康飲んで返杯あつて、)

秀吉　まづ是にて安堵いたした。秀長、長政始め家康殿にも、臣下を暫時遠ざけて下されい。

家康　スリヤ、殿下には御密談が。

秀吉　いかにも、密事の頼みがござる。

家康　委細承知仕りまする。殿下の仰せ、大久保始め、皆の者次へ參れ。（ト新十郎思入あつて、）

秀長　左樣ござれば、德川殿。

家康　秀長殿。

長政　イザ、御案内。

ト合方きつぱりとなり、大久保始め秀長、長政下手へ四人はひる。

家康　して殿下よりそれがしへ、御密談と仰せあるは、何等の儀にござりまする。

ト是にて秀吉敷物より下りて、家康のそばへ行き、平伏して、

秀吉　扨如何かと存じ居つたが、招きに應じて家康殿には、よく上洛して下されしぞ、此の秀吉身に取りて、此上もなく忝い、斯くの如く御禮申す。

ト家康の手を取つて押頂く、家康わざと合點の行かぬ思入あつて、

家康　コハ恐れ多き其の御上意、まづ／＼御席へお直り下され。

秀吉　イヤ左樣に禮を厚くされては、甚以て窮屈至極、まづ關白のくらゐは取置き、因みを結ぶ聟舅、隔てぬ中で遠慮なく、打ちくつろいで話しがしたい。

家康　それではあまり恐れ多し、何卒元の御席にて。

秀吉　イヤ、それは餘り禮儀過ぎる、臣下の者もあたりに居らず、斯く差向ひとなる上は、我も以前の秀吉に立返つて一さん傾け、昔語りがいたしたい。（ト飲みさしを飲干して、）家康殿、御受けなされい

家康　頂戴。（ト杯を受取り、手酌にてつがうとするを、）

秀吉　アコレ、手酌では旨うない、さゝへを此方へ遣はされい。（ト酒筒を取つて酌をする、是より合方世話模様になり、）扨光陰は矢の如く月日の立つは早いもの、先刻も申したる通り長篠此方打絶えて、とんと面會いたさず、最早十二年となり申す。誠に夢の様でござる。手前も其の以前彼の岡崎の矢矧の橋にて、寐て居つた時分からは三十餘ケ年、其間には種々樣々の辛苦もござつたが、まづ兎も角もやう／＼爰迄こぎ付け參つたが、其許はとう／＼たる、源家の末の御家柄、智勇を以て武功を顯し、威勢東海に輝きて、人も從ふ身となられ、先づ主人織田殿亡き後は、貴殿が政事をとるべしと、思ひ居つたに我に讓られ、此度又上洛して下されしは誠に以て忝けなし、秀吉厚く御禮申す。

ト手をつき辭儀をするゆゑ、家康迷惑の思入にて、

家康　先づ／＼お手を上げられい。逆臣明智日向守を打亡ぼされし功により、四海の政事を司りたま

ふ殿下には、なか〲以て遠く及ばぬ事なるに、左様に仰せ下されては肝腎の御挨拶がなりかねまする。

秀吉　なに成り兼ねる事がござらう。たとひ官位に高下はあるとも、貴殿の智量に及ばぬ秀吉、まして今宵推參なし、御頼み申す事あれば、尊敬いたすは當然でござる。

家康　して不肖のそれがしへ、御頼みと仰せあるは、

秀吉　サ、其の御頼みと申すは。

家康　いかなる事にござりまするな

秀吉　我が口よりは申し憎いが、家康殿には秀吉へ、くらゐを授けて下さるまいか。

家康　コハ異な事を仰せられまする、神武此方武家に於て、關白職に登庸ありしは、いまだ例も無之然るにくらゐを授けよとの殿下の仰せは、家康一圓合點が參りませぬ。

秀吉　其の仔細、只今打明けお話し申すであらう。

ト合方きつぱりとなり、秀吉くだけて世話のセリフになり、

かねて貴殿も知らるゝ通り、手前事は下賤の生れ、信長公の御取立にて草履取から一足飛に、成上りし身の上ゆゑ、氏もなければ系圖もなし、されば兩三年以前迄は、主人の姓を其儘に、平の

秀吉と申しましたが、昨年の春計らずも、内大臣に任官せし折、藤原と姓を改め、あちらへぐらぐら此方へぐら〳〵、ぬけ掛つた齒の樣に、氏も系圖も定まらねば、織田家譜代の臣下は元より諸國の大諸侯も此の秀吉を匹夫と嘲けり、矢張り以前の朋輩同樣、我を心得居るゆゑに、今關白に昇進なし天下の政事を取る身にても、誠を以て秀吉を尊敬なす者一人もなし、賴みと申すは爰でござる。當時天下の賢將と諸侯も尊む德川殿、貴殿が手前に位を付け御取扱ひ下されば、自然と嘲けるやから迄尊敬なして從ふ道理、定めて御氣には叶ふまいが因みを結びし此秀吉、位を付けて貰ひたい。

家康　コハ殿下にも似合はしからぬ御述懷、たとひ卑賤の御身より御昇進ありしとて、其爲す所人に勝れ、凡ならざればこそ斯迄に、高位高官に昇進したまふ、それを恨むやからや侮るやからは、取るに足らざる者共なり、お賴みなくとも家康は、關白職の秀吉公、禮節失せず尊敬仕るは、當然の儀にござりまする。

秀吉　尊敬なして下さるとは、秀吉身に取り忝いが、眞以てとは思はれず、定めし影で秀吉は、愚な事を云ふ者だと、必ずお笑ひなさるであらう、誠に面目次第もない。

家康　何しに左樣な事がござらう、眞以て僞りは、言上仕りませぬ。

秀吉　いよ〳〵尊敬下さるとは、それは何より忝い。まづ一献頂戴仕りませう。

家康　ハヽハツ。（ト懷紙にて杯を拭はんとなす。）

秀吉　是はしたり家康殿、拭ふといふは他人行儀、其儘にて下されい。

ト無理に杯を取る、家康酌をする、秀吉飲み。

家康　シテ又只今仰せの儀は、如何いたしてよろしきや、斯く御緣者と相成る上は、斯樣いたせと御遠慮なく、仰付けられ下さらば、身に叶ひし事ならば、決していなやは申上げませぬ。

ト是にて秀吉思入あつて、

秀吉　自身に云ふも面目ないが、とあつて云はねば事が相分らぬ、位をつけて下されと云ふは。

ト云ひにくき思入。

家康　如何なる事でござりませうや。

秀吉　表向きにて其許へ、身共が對面いたす折の事。甚だ失禮の事を申すがそれを聞いて下されうや。

家康　何なりともお心置きなく。

秀吉　先づ對面の其折は關白職の位によつて、上段の間に我は座し、上洛なせし諸侯のめい〳〵、左右に列座いたし居れば、此身に位を付ける爲め、さも橫柄に貴殿に向ひ、家康上洛なせしかと云

つたらば其時に、ハ、ハツと慇懃に敬ひ下さらば、日頃蔭にて嘲けるやからも、家康殿さへ斯くの如く尊敬なせば秀吉は、あなどるべき者にあらずと人心こぞつて從ふ時は、謀叛を企つ者もなく全く四海平穩ならん。斯樣申せば秀吉が權威に誇り一天下を、横領なすに似たれども、つまる所は朝廷の宸襟を安んじ奉り、萬民塗炭の苦しみを救ひ、とざゝぬ御代にいたしたく、實に堯舜の聖代も斯くあらんかと思ふ程、とさ輕く申せば斯樣ぢやが、實の所は戰の切ツつはツつも飽きし上、なす度毎に若干の、金銀費すのみならず、得難き人命失ふが、いかにも秀吉歎かはしく、それ故今宵秀吉が忍び參つてお願ひ申す。天下を治める此の密談御承引下さらぬか。

ト此内時代世話の思入、家康感心せし思入にて、

家康　ムヽ、流石は非凡の秀吉公、誠に上なき御賢慮なり。

秀吉　扨は御承知下さるか。

家康　いかにも承知仕る、實にや殿下の仰せの如く、應仁以來世の中も、蜂の如く起り立ち、戰爭の沙汰止む時なく、一天萬乘の宸叡慮を安じましまさねば、下萬民に於てをや、塗炭の苦み少なからず、是を治國になさんには、なか〳〵以て家康如き不肖の身にて、天下を治めん事思ひもよらず、たとひ卑賤より出でたまふとも、今關白の職に進みたまふは、凡人ならざる尊公より、外に

治むる者もなし、家康微力に候へども、一身にかへ補佐仕れば、御心安く思召されませう。

秀吉　イヤ忝き其の一言、貴殿補佐なし下さらば、天下泰平疑ひなし、是にて我も安堵いたした。

ト此時八ツの時計聞える。

家康　あの時計は、巳の刻。

秀吉　思はず時刻を過してござる。（ト襖の内より秀長長政出で、）

秀長　ハッ、夜もいたく更けましたれば、

長政　還御あつて然るべし。（ト是にて秀吉元の座へ直り、）

秀吉　いかにも還御いたすであらう。然らば明日對面の儀を、諸侯へ觸れを出したがよいが、差支へはござらぬか。

家康　其儀は殿下のお心次第、拙者に於て聊も、差支へはござりませぬ。

秀吉　明朝觸れを出すであらう。

家康　それ、お立ちなるぞ。

新十　ハッ、御見送り、

皆々　仕らん。

秀吉　忍びの儀ゆゑそれには及ばぬ。
新十　でも、玄關迄。
家康　イヤ上意に從ひ、無用にいたせ。
秀吉　それが縁者のへだてぬ所ぢや。
秀長　左樣ござれば、徳川殿。
長政　おの〳〵失禮、御免下されい。
　ト双方目禮なす、下手へ以前の四郎次郎手雪洞を持ち出で下手に居て。
四郎　ハツ、御案内申上げまする。
秀吉　ヲヽ、大儀なるぞ。
　ト音樂の鳴物にて、四郎次郎案内して秀長長政花道へはひる、家康見送り、ムヽと思入あつてさしうつむき居るゆゑ、新十郎案じて、
新十　して殿下には我君へ、何等の御密談がござりましたな。
家康　イヤ、案じるには及ばぬ儀ぢや。
　ト何氣なき思入、長政引返して出で、下手へ住ひ、

新十　ヤ、長政殿には唯一人。
傳八　何ゆゑお歸り、
皆々　なされしぞ。
長政　ハツ家康公へ密々に、お願ひ申す儀があつて、立歸つてござりまする。
新十　スリヤ、我君へお願ひあつて。
長政　ハツ。
家康　して願ひとは、何事なるぞ。
長政　餘の儀にてはござりませねど、御存じの如く殿下には勇氣烈しき大將ゆゑ、上なき官位に似合はしからず、やゝもすれば出馬を好み身を輕々しく遊ばすゆゑ、臣等の心痛少なからず、これ關白の位に居て、此後汗馬を動かす時は、恐れ多くも宸襟を惱まし、萬民の愁ひのあたり、それゆゑ拙者愚案乍ら、公へお含みを願ひ度きは、明日聚樂にて御對面の節、殿下祕藏の陣羽織を御懇望下さらば、家康公ゆゑ止むを得ずお讓りあるに相違なし、さすれば向後戰場へ、出馬の念も止まりまするかと、愚存を廻らし此のお願ひ、何卒お含み下さりませう。
家康　コハ異な事を賴まるゝが、家康性來偏屈にて、人に物を乞ふ事は、至つて不得手に有之ゆゑ、首

尾よう拜領がなればよいが。

長政　そこは拙者が時分を見合せ、お合圖をいたしますれば、甚だ恐入りまするが、此の後謀叛のやからあつて、干戈を動す事あらば殿下に御出馬させまじと、仰せ下さる事ならば、いか程祕藏の品なりとも、日頃殿下も家康公を、無二の賴みと思召すゆゑ、却て御機嫌斜めならず、お讓りあるに相違なし、左すれば諸侯は君に恐れ、謀叛を企つ者もなく、是ぞ天下平穩の基なるかと存じまする。(トよろしく思入。)

家康　ムヽ、あつぱれ忠義の御身の計らひ、然らば懇望いたすであらう。

長政　それにて拙者の望みも叶ひ、大慶至極に存じまする。

新十　如何なる儀かと存ぜしに、天下の爲を思されて、長政殿の御忠節、感心の仕る。

傳八　我々共も臣たる身は、

藤藏　斯くぞあり度き、

四人　ものでござる。

長政　供先の儀にござりますれば、失禮御免下さりませう。

ト辭儀をなし、花道の方へ行く。

家康　アイヤ、暫く待ちやれ。
長政　ハツ、何ぞ御用でござりまするか。
家康　陣羽織拜領は、主君を思ふ其方の、一存より出でたるか。
長政　エヽ、（トぎつくり思入あつて、氣をかへ）御意にござりまする。
家康　ムヽ、さうであらう〳〵。
長政　最早お暇仕りまする。（ト思入あつて花道へはひろ。）
家康　コリヤ大久保、只今長政が申せしを、何と聞いて居たぞ。
新十　ハツ、關白殿下の陣羽織を、我君に御所望あれとは、四海を治むる長政の忠義かと存じまする。
家康　イヤ、あれは秀吉の言附なるぞ。
新十　そは何ゆゑに、
皆々　ござりまするな。
家康　中國四國の諸侯を始め、織田家恩顧の譜代の臣下を、歸服いたさす苦肉の計略、ハテ行屆いたものぢやなア。
新十　そりや殿下の計策を、御存じあつて我君には、

傳八　御懇望、

皆々　なされまするか。

家康　予は晩年を、（卜拳を握つて見せるを、木の頭）相待つ心ぢや。

卜につたり思入。皆々ハツト平伏する。此の模樣よろしく、時計の音にて

幕

大詰　聚樂御殿對面の場

〔役名＝關白秀吉公、德川三河守家康、淺野長政、大和大納言秀長、家臣將監、同光長、同一貞、同義明、同政忠、同三橋、近習、奏者、大名大ぜい。〕

（聚樂御殿對面の場）――本舞臺平舞臺、上手三間常足二重、二疊臺を置き、正面御簾襖、みすおろしあり、前の方へ板の間布を敷き、二重斜めに飾り、是に續いて奧深に庭の遠見、總て斜に飾る事、上へ花桐砂子の金の大欄間、御簾上げおろしあり、上下やはり花桐のふすま出這入り、花道の揚幕杉戸の出這入り、薄緣を敷詰め、總て聚樂御殿の體よろしく、大名大勢居並び、調べ合方にて幕明く。

大一　如何に各々、先達て岡崎より徳川殿御越しあつて、關白殿下と當御所にて、
二　疾にも御對面あるべき所、殿下御不例の御沙汰にて、計らず日取の御延引、
三　然るに今日早天に、最早御不例御全快にて、御對面有之ゆゑ、
四　織田家譜代の臣下は元より、中國四國の大小名、參上せよとの俄のふれ出し、
五　先達てより我々も、斯く上洛いたし居れば、事は缺かぬと申し乍ら、
六　殿下の御不例全快ならば、前以て沙汰あつても、よろしからうと存じ申す、
七　そりや手前とても同じ事、いかに逆臣明智を亡ぼし、關白職に昇進せしとて、
八　以前を申せば織田家にて、取るに足らざる馬の口取り、匹夫下賤の藤吉郎。
九　彼が權威に我々を、おどして隨身させる氣でも、天下無双の名大將、
十　徳川殿がござるからは、成上りの秀吉などに、隨身いたす所存はござらぬ。
十一　承れば岡崎より、徳川殿を上洛さするに、殿下の母たる大政所を、
十二　むり押しつけに送りたるは、妹に逢ふと云ふは僞り、誠は今度の人質代り、
十三　猿利口なる秀吉ゆゑ、織田の天下を奪はんと、徳川殿へ輕薄なし、
十四　四海を握る心でも、小牧長久手の合戰に、やり損なつた事もあり、

十五　なか／＼當時岡崎殿は、威勢が強うござるゆゑ、聟舅とは申乍ら、
十六　餘程會釋が面倒ゆゑ、今日迄對面が延引なせしと申す事、
十七　イヤ、あまり殿下を惡く申して、
十八　猿めに風を引れなば、
十九　又々對面延引いたし、
廿　我々共迄迷惑の至り、
廿一　噂は最早止めにいたし、各々詰所へ、
皆々　相詰めませう。

ト皆々上手へはひる。管絃にてツナギ、皆々居並ぶと、前の御簾上る、奏者二人前へ出て、

奏者　ハッ、諸侯一統出仕いたしてござりまする。
一　ハッ、殿下には先達てより、思はざる御不例にて、上洛なせし我々一統、晝夜御案じ申上げ、
二　斯く今日の御對面も暫く延引ならんかと、思ひの外にお早い御快氣、
三　これと申すも逆賊たる、明智光秀を亡ぼされし智勇勝れし秀吉公、
四　武官に例しなき御位に御昇進あそばせしは、驚き入つたる御幸運、

五　定めて先君冥府にて、御悦びはいかばかり、

六　此後共に臣等一統、御忠勤を怠らねば、君の御運にあやかるやう、偏に願ひ、

六人　奉りまする。

秀長　今般徳川家康殿上洛に及ばれしゆゑ、殿下御對面にならせられるに付き、各々參着御苦勞千萬、

長政　殊更以て殿下には此程御氣分例ならず、御對面の儀延引なし、中國四國の諸侯の方々はる〴〵上洛あられしも、御不例によつて御對面も、思はず延引いたせしゆゑ、長々都に御逗留、數日の費へを思召され、いまだ御不例御快氣ならねど押して今日御對面、御不例中ゆゑ不行屆きは、何れも御容赦下されい。

一　我々どもは小祿にて、高が一國一城の主人、

二　拙き武運の者共ゆゑ、

三　殿下へ對して弓引くべき、

四　自力とてはござらねど、

五　當時天下にならびなき、

六　大諸侯たる徳川殿と、

七　御對面の儀にござれば、
八　御不例中とは申し乍ら、
九　元は織田家の御家臣ゆゑ、
十　よしや上なき關白の、
十一　高位高官に上りたまふとも、
十二　又格別の御會釋にて、
十三　御對面あらせらるゝが、
十四　浪風立たぬ四海の治まり、
十五　然るべきかと、
皆々　存じまする。
秀吉　イヤ其の心配には及ばぬぞ、家康事は先達て予が妹を送りたれば聟舅の間柄、必ず斟酌に及ばぬぞ。
一　テモ、智仁勇の備はりし、
二　徳川殿に、

皆々　ござりますれば。

秀吉　然らば秀吉暗愚にして、家康に劣ると申すか。

皆々　全く以て。

秀吉　益なき心配無用なるぞ。（トきつと云ふ、爰へ以前の奏者一人出で、）

奏者　ハヽ、德川殿出仕いたされてござりまする。

秀吉　ムヽ、家康出仕いたせしとか。

トこれにて花道より、家康裝束にてしづ〳〵と出て花道にて、

家康　ハヽ、ハッ。（ト平伏する。）

秀吉　遠路の處大儀なるぞ。

奏者　サヽ、御進み召されい。

家康　ハッ。（ト鳴物になり、舞臺下手へ來る事あつて、）御召しに依て德川家康、早速上洛いたせし所、先達てより殿下には御不例の由承る、如何と心痛いたせし所、日あらずして御快氣と相成り、斯く麗はしき尊顏を拜しまして、恐悅至極に存じ奉りまする。（ト平伏して居る。皆々見て。）

一　御緣を組まれし德川殿へ、御挨拶申す拙者事は、西川玄蕃頭光長、

二　浦上主膳正、
三　加納相模守、
四　高山左衞門、
五　三橋左膳、
六　大塚左近將監元種、いづれも譜代の臣なれど、
一　家康殿には五ヶ國の、
二　御大身にあらせらるれば、
三　わづか一國一城たゞ、
四　我々共と格も違ひ、
五　まづ／＼御席を、
皆々　御進み下され。
家康　凡人ならざる殿下の御前、席を進むは恐れあり、これにて御容赦下されい。
六　ハヽリヤ、それ程に、
皆々　秀吉公を。

家康　斯く不肖なる家康乍ら、關白殿下の御眼鏡にて妹君を賜はりしは、我身の面目此上なし、これと申すも各々方の、御執成のよろしきゆゑと、祝着至極に存じ奉りまする。

大名　ヤア。（ト心に相違せし思入。）

家康　粗末には候へども、殿下への獻上物御披露願ひ奉る。

奏者　ハッ、目錄、一御太刀一腰、一乘馬二疋獻上、德川家康。

秀吉　コハ過分なる贈物、幾久しく受納いたす。

家康　ハッ、有難く存じ奉りまする。

秀長　家康殿には改めて、殿下の緣者とならるれば、以後は入魂にお願ひ申す。

家康　其儀は家康願ふ所、御別懇になし下されませう。

秀吉　斯く因みを結ぶ上は、予が妹の聟なれば、任官なくては叶ふまじ、秀吉よきに奏問遂ぐれば、今日よりしては從三位、內大臣の官たるべし。

家康　ハヽッ、身に餘りたる其の御諚、冥加至極にござりまする。

秀長　何は格別御對面の、御杯こそ肝要ならん。

秀吉　長政申付けい。

長政　ハツ、御杯の御用意。（ト上手にて、）

近習　ハツ。（ト猩のうたひ、太鼓入りになり、杯を持ち出る。）

長政　ハツ斯く御縁邊調ふ上は、徳川氏には殿下の聟君、御引手物を何なりと、御所望あつて然るべし。

秀吉　ヲヽ、何なりと望んでよからう。

家康　其の所望こそ外ならず、殿下常々御自慢の狐紙子の御陣羽織が、拜領仕りたう存じまする。

秀吉　なに、陣羽織が所望とや。

家康　ハツ。

秀長　あの御羽織はくさ〴〵の糸にて綾縫いたしあれば、機に望み變に應じ、千變萬化に其色の變るを以て陣中にて、狐紙子と名づくよし。

一　それゆゑ天下に比類なく、

二　殿下常々御自慢の、

三　御祕藏なりと承りしが、

四　それを御所望なさるゝは、

三　扨は徳川家康殿も、

六　深き御所存ある事ならん。

一　こりやそろ〳〵爭論が、初まる事と、

皆々　相見えまする。

秀吉　イヤ餘の品なれば何なりとも、御身の望みに任せんが、あれは陣中有用の品ゆゑ、容赦して貰ひたい。

家康　イヤ御陣中有用の御品ゆゑ、是非拜領仕りたう存じまする。

秀吉　そは又、如何なる仔細なるぞ。（ト小太鼓入り、樂器になり、）

家康　只今迄と事替り、斯く御縁を結びし上は、此の後如何なる凶變ありて、我日の本の大諸侯、萬一謀叛の企てなすとも、此の家康が一手を以て直に征討仕り、殿下に再び甲冑は着せ參らせぬ志願にござれば、陣中有用の御陣羽織、是非家康に拜領を仰付けられ下さりませう。

ト大名皆々びつくりなす。

秀吉　ホヽヲ面白き其の所望、然らば御身に讓り申さん。ソレ長政、よきに。

長政　ハヽツ、我君の御陣羽織を、急いで是れへ持參召れ。

近習　ハア。

ト白木の臺へ陣羽織をのせ、奏者付き出て、眞中少し下へ置き控へる。

家康　ハツ、有難く拜領仕つてござりまする。

一　天下無類の狐紙子、

二　德川殿へお授けとは、

三　此上もなき拜領物、

四　お羨しい、

皆々　儀でござる。

秀長　斯く殿下より拜領の、陣羽織を着せられ、德川殿が戰場萬事掛引召されば、

長政　是れに列座の諸侯の方々、よもやいなやはござるまいな。

一　一天下を治むべき、

二　德川殿が斯く迄に、

三　殿下へ合體召さるれば、

四　是にて天下は大盤石、

皆々　たゞ〳〵御目出度う存じまするて

秀吉　對面相濟む上からは、岡崎表へ送りたる母をも早く呼迎へん。徳川殿には上洛大儀、諸侯一統とく〳〵歸國いたされよ。

皆々　ハア。

家康　ハツ、御暇出でし上からは。

ト家康秀吉顏見合せ、旨くいつたといふ氣味合の思入あつて、氣をかへ。

歸國いたすで、

ト大紋の袖をかき合せるを、木の頭。

ござりませう。

ト秀吉につたり思入、皆々引張りよろしく、下り端、太鼓入りにて。

幕

徳川家康（終り）

音響千成瓢

三井寺の
本營に
智勇を競ふ
秀吉利一
報讐の問答

小栗栖の藪陰に五十五年の
辭世を殘す强將明智光秀が
村越景則へ紀念の水莖
坂本の城外に寶器を移す　光俊が賢才
天晴なるかな光廉牧子が最期の一首

世界眞書大意寫兩雄
脚色繪本形容彩玆會

太閤記山崎合戰

大德寺の
本堂に
順次を爭ふ
羽柴柴田
世嗣の議論

堅田浦の茅屋に四十餘年の
懷舊を語る老婦乳人芝崎が
長田代助へ紀念の遺言
京都の旅館に平穩を計る　利家が仁才
見事なるかな於通於國が今樣の一奏

當願御見物大筒

『太閤記』を取扱つた作者の作には種々あるが、此處には主として明治九年九月新富座上演の『音響千成瓢』を基礎として輯錄した『三國無双瓢軍配』(明治五年十月守田座上演)は太閤記を取扱つた第二回目であるが、彼此折衷した部分もある。尤も堅田落の後に附いてゐる「野陣の場」だの、次の幕「日の岡峠梟木の場」の如きは上場されなかつたものであるが、珍らしいから參考として併錄しておいた。本全集第六卷に收めた明智左馬之助湖水の乘切は當然『千成瓢』中の一幕になるべきものであるが、獨立して演ぜられた場合が多い。作中著名であるのは、齋藤内藏之助利一(利一は利三を事實とするが利光とまぎらはしいから、利一としてある臺本によつた)堅田落の件と大德寺燒香の件とである。『三國無双』の時に九世團十郎が利一を活歷風に演じた澁い淋しい情景と、大德寺燒香の場に於ける凜々たる名調子とは好劇家をして感歎せしめたものであるといふ。『續々歌舞伎年代記』にも『權之助(九代目)堅田落より燒香場まで勤めたるが、大いに好評を博し、殊に相手の柴田が仲藏たりし故一層評判なりき。常に權之助人に語るやう、毎日仲藏の勝家を見て實にうまいものと感じたり。然し同人にくらぶれば自分の方押出しもよし年も若し、調子も好し、何處からしてもひけを取る筈なければ此次ぎ何れかで演ずる時、此柴田に扮し見物をうならせんと言ひしが、其後彦三郎に秀吉を廻し自分が柴田を好んで買つて出で大いに得意でやつて見ると、どうもうまく行かず仲藏のよい所ばかり目先にちらつきなるほど仲藏は上手に違ひないといよいよ感心したり云々」とある。尚三井寺本陣の場に於ける三成は秀吉として彦三郎によつて上演せられたのを事實とし、堅田茅屋に於ける芝崎は又芝生とも稱し『千成瓢』の際には彦三郎によつて演出せられたと番附にはなつてゐるが、彦三郎病氣の故で岩井しげ松が代役を勤めたのが實際であつたらしい。尚全篇を通じて役名の統一、卜書きの精疎等に慊らない點もあるが、總て採訪の稿本によつたことを諒とせられたい。役割は約三回にわたつて補訂上演せられたものをまとめたのであるから、卷末の年表によつて大體を御承知あることを希望する。

挿繪にしたのは大正六年中村吉右衛門が上演した時の内藏之助の舞臺寫眞、及び國周筆九世團十郎の柴田勝家の錦繪である。

大正十五年十二月初旬

校訂者



音響千成瓢（太閤記――五幕）

序幕

山崎海道立場の場
山崎光秀陣中の場
小栗栖村一揆の場
同　光秀最期の場

〔役名〕――明智日向守光秀、齋藤内藏之助利一、溝尾庄兵衞茂朝、村越三十郎景則、百姓中村長兵衞、進士左衞門貞連、三宅孫十郎朝次、比田帶刀則家、堀田三之丞友之、同三太夫綱之、金丸小傳次爲次、明智の軍兵藤太、同藤次、羽柴の軍兵藤内、同傳内、同幸内、百姓畑作、同久根藏、同田吾七、同九郎藏。長兵衞女房お咲、立場女おひな、同おやま等。〕

〔山崎海道立場茶屋の場〕――本舞臺總て山崎海道立場茶屋の體。幕明くと爰に○△の百姓二人酒を飲みゐる。女房お崎、娘お雛お山酌をしながら、戰の話しをしてゐて、奧へはひる。と此跡へ明智方の軍兵二人藤太、藤次出來る。

お崎　是はいらつしやいまし、こちらへお掛けなされませ。

藤太　いや、構はつしやるな〳〵。
お崎　御酒を上げますか、御膳でござりまするか。
藤次　旨い物で酒を出してくりやれ。
お崎　畏りました。（ト酒肴を出す、娘兩人酌をなし。）
藤太　此の近郷近在を數多飮んで歩いたが、こんな美しい娘のあるのは此の山崎には一軒だ。
藤次　何にしろ、かういふ所にたゞ置くのも惜しいものだが、
藤太　何とものは相談だが、身共と一緒に參らんか。
お雛　有難うはござりますが、見世の間がかけますから、參るわけには行きませぬ。
お山　どうぞそれはあなた方。
兩人　お許しなされて下さりませ。
藤次　いや許す事は相成らぬ、斯く軍中で女を犯すは昔よりまゝある事。
兵藤　然し我々三人へ、此の二人にては一人明く、是れには一番當惑いたした。
藤太　それは少しも氣遣ひなし、身共が年増で我慢をすれば、丁度是にて三人三人。
ト酒に醉つたる思入にて、お崎の手を取る。

お崎　あゝもし、其樣な御無體な事をなされましては、私共が難澁を致します。
三人　どうぞお許しなされて下さりませ。
藤次　いや、かう目に掛つた上からは、どうして是が、
三人　見のがされるものか。

ト女形三人逃げに掛るを無理に引寄せる。此前より以前の○△の百姓二人、暖簾口より窺ひ居り、氣を揉みながら此中へ割つてはひり。

百○　先づ〳〵お待ち下さりませ、私共は奥に居合せました、村の者でござりますが、まだ年端も行きませぬ二人の娘を、其樣に手籠めになされるのみならず、
百△　それなる内儀は長兵衛といふ、亭主のある身でござりまする。それをあなたが御無體に手出しをすれば言はずと間男、こなたの首が落ちますぞ。
藤次　やあ、斯く軍中にて武士に向ひ、首が飛ぶとはにくいやつ。
兵藤　第一陣所で忌み詞、不屆き至極の百姓めら。
藤次　えゝ面倒な、それ引かつけ。

ト百姓留めるを振拂ひ、女形三人を無理に引立て花道へ行く。花道より羽柴方の軍兵藤內、傳內、幸

内の三人出來り、花道にて行違ひ、ちよつと立廻り皆々舞臺へ戻る、女形百姓悦び下手へ手をつかへ、

お崎　どうぞ御慈悲に私共を、お助けなされて下さりませ。

藤内　何か仔細は存ぜねども、道路に於てかゝる振舞、

傳内　見るに忍びず此處へ、我々三人まゐりしが、

幸内　して、如何なる譯なるぞ。

お崎　譯と申すは先程より、あのお客樣がお出でなされ、御酒を上げます其内に、是なる二人の娘を捉へ、云ふ事聞けの一緒に行けのと、始めの内は御常談と思ひの外に言ひ募り、

お雛　私共を手籠めに遊ばし、奥のお客の詫び云ふも、いッかなお用ひなき上に、

お山　屋敷へ行つてなぐさむと、既に引かれて行くところ、思ひがけなきお通りにて、

○　私共の命迄、お助けなされて下さりまして、

△　誠にお有難う、

皆々　ござりまする。

藤内　酒店に於て惡口なす上、女子供へ手出しをなす、

傳内　言語に絶えし今の振舞、其の儘には捨置き難し、
幸内　市中でかゝる亂暴なす、お手前方は何れの兵士、又御姓名は何とおつしやる。
藤次　人の姓名問ひ乍ら、我が姓名を名乘らぬは、各々の手前へ失敬でござるぞ。
藤内　成程是れも御尤も、我々共は中國より、俄に此度引返したる、
傳内　羽柴筑前守の郎黨なるが、市中にかゝる亂暴あらば、諸人の難儀に相成る故、
幸内　巡行致す我々三人、見るに忍びずさゝへましたが、
藤内　其許は何れの、
三人　兵士でござる。
藤次　我々どもは忝くも、當時將軍と仰がるゝ、明智日向守光秀が郎黨、
兵藤　亂暴したのが、
三人　何と致した。
藤内　いや不法を申すのみならず、怨敵明智の家來とあれば、其儘には捨ておかれぬ、
傳内　今此處で罪を詫び、かゝる振舞致さずば、見脫しても遣はさうが、
幸内　さもない時は捕縛なし、我が陣營へ引立て參るぞ。

藤次　引かれるものなら引いて見ろ。假令亂暴いたすとも、羽柴方の指圖は受けぬ。

兵藤　どの道今に出張して、わいらに泡をふかせる故、

藤太　ちつとも早く此所で、我々どもに、

三人　命を渡しやれ。

藤内　小癪な事を。それ、何れも。

兩人　心得た。

ト三人太刀を拔き、切つて掛る、一人づゝ槍にて立廻り、トヾ明智の三人叶はず上手へ逃げてはひる。

藤内　さりとは弱きやつら、首を取るのも殺生故、逃げるものなら逃がしてやりませう。

兩人　いかさま、それがよろしうござる。（ト此内お崎酒肴を膳へ乘せ持ち來り。）

〇　あなた樣のお蔭にて、無難に濟みますのみならず、

△　此の家の娘の歸りましたも、折よく爰へお出で故、大きに有難う存じまする。

藤内　何の〱其禮には及ばぬ事、大將よりの軍令にて此の近邊を見廻りの我々、又々斯樣の事あらば遠慮なく申し出でよ。

兩人　有難うござりまする。

藤內　然らば是より隣村へ、

傳內　巡行致すで、

三人　ござりまする。

藤內　大きに世話であつた。

皆々　有り難うござりまする。

ト三人上手へはひる。花道より長兵衞、百姓なり脚絆、草鞋にて、天秤棒をかつぎ足早に出來り。

長兵　此の山崎で今朝ッから、どんちやん〳〵戰のあるので、何だかそは〳〵と、用もろく〳〵手に附かぬ、嘸內でも案じて居やうわい。(ト舞臺へ來る、皆々長兵衞を見て、)

兩人　おゝ長兵衞殿、戻られたか。

長兵　今にも爰らで始まりさう故、山向うの親類へ何はなくとも荷物を預け、やう〳〵、只今戻りました。

お崎　今も今とておまへの留守に、明智方の軍兵が、酒や肴を飲みたふし、擧句に此子や私迄、既に手籠めにされる處、

〇　丁度折よく羽柴方の見廻りの衆に出ッくはし、ほう〳〵の體で逃げて行つたが、

△　それには引替へ見廻りの衆が、茶一杯飲みたふさず、茶代を拂つた其上に、

お雛　又こんな事があつたら、直樣屆けろ來てやると、お慈悲深いお詞で、

お山　有難涙が、

五人　こぼれました。

長兵　それは何よりよかつたが、どうで明智は本能寺で、主人を討つて天下を取る掟に背いた大將故、どうでろくな家來はないが、それに引かへ感心なは流石は名代の秀吉樣、民家の者を哀んで亂暴するなと、下々迄御政事が行き屆き、自然と備はる將軍職、今に世界は秀吉樣の物になるのは知れた事、何と村の衆、物の道理はさうではないか。

○　さうして見ると今度の戰も、斯うして浮かくして居ずに、百姓乍らも羽柴樣へ御恩送りをする氣になつた、こりや一思案せずばなるまい。

長兵　わしらも今迄明智方の軍兵衆に飲倒されたは、どの位だか知れぬ故、お味方するなら荷擔をしますぞ。

お崎　是が長く續く日には、夜もろくく寐られませぬ。

△　是からわしらは九品寺の堂へ寄つて、一評定した其上で氣を揃へ、竹槍でも拵へませうよ。

長兵　直に跡から出掛けます。
○　それぢやあ行つて、待つて居ますぞ。
△　お內儀、お世話になりました。（ト百姓兩人足早に下手へはひる。）
長兵　おぬしは奥で飯拵らへして、早くおれに喰はしてくれ。
お崎　あい〳〵。（トお崎は三人下手繩のれんの內へはひる。長兵衞思入あつて、）
長兵　今も道で噂を聞いたが、此の山崎の合戰は明智方が慥に負け色、是といふのも光秀が、主人を討つた其罪で、わづかな內に敗北なし、味方もちり〳〵ばら〳〵に、討ち死するに違ひないが、こいつもやつぱり橫道を、突切るやうな仕事故、水は逆には流れぬたとへ、こりや天の道でも斯うありさうな事だ。

ト矢張り大津八町、砧の音にて此の道具廻る。

（山崎光秀本陣の場）――本舞臺すべて山崎光秀本陣の體。眞中に光秀、左右に溝尾茂朝、村越景則、後ろに貞連、朝次、則家、友之、綱之、爲次居並び、どんちやんにて道具留る。と光秀思入あつて、

光秀　今朝より山崎へ出張なして陣取いたすも、過日羽柴が使者として、杉原荒木の兩人が、使者に來

し時約せしゆゑ、方々粉骨碎身なし、名を後代に轟かされよ。

茂朝　將の仰せを逐一に、味方へ流布なし此後共、一層奮發仕り、

景則　中國引返しの羽柴勢に、一泡ふかせし上、

貞連　毛利につゞき今一度、和睦を乞ひしその上に、

朝次　味方へ引入れ、軍令正しく、都の守護をなす時は、

則家　益々君の御勢ひ、

友之　天下に光り輝きて、

綱之　ともに列なる、

六人　我々迄、

茂朝　一統恐悅、

皆々　申上げまする。

光秀　して先刻より先陣の、未だお使者のあらざるが、味方の勝負如何なるか、早く樣子が聞きたいものぢや。（トぢつと思入。此時ばた／＼になり、花道より、軍兵走り出來り、）

軍兵　はッ申上げます、只今齋藤內藏之助早馬にて、御陣所へ參着致されてござります。

光秀　なに、先手の大將內藏之助が、早馬にて參りしとは、何か火急の大事ならん。是へと申せ。

軍兵　はッ。（ト引返してはひる。）

光秀　心得ざるは齋藤が、先手の指揮をなしながら、我が本陣へ使者も立てず自身に參着致すとは、如何なる椿事出來せしか、はてな。

ト思入、誂への合方薄く遠寄せになり、花道より齋藤內藏之助利三出來る、光秀見て、

光秀　おゝ珍らしや內藏之助、出陣の後久方の此の對面、日々晝夜の心勞我も左こそと推察いたすが、先づは堅固で重疊々々。

利三　恐入つたる御仰せ、今般君のお目鏡にて先陣仰せ付けられしは、全く君の御蔭と、肝に徹して有難く、御禮申上げ奉つりまする。

光秀　猶此後とても隔心なく、我に力を添へてくりやれ。

茂朝　して齋藤氏には御自身に、御本陣へ出張ありしは、定めし火急の御用ならん。

利三　拙者是迄馳け付けしは、君へ只管御諫言の申し上げ度き儀のござつて。

光秀　なに、我へ諫言申し度いとは、如何なる仔細あつての儀ぢや。

利三　如何にも只今申上げん。事新らしく申す迄も候はねど、そも〳〵君が信長公を恨みまゐらせし其

の起りは、われ稻葉伊豫の入道へ歸參せざる事よりして、次第に恨み重なり、終に當月二日の夜本能寺におき信長を弑し奉るに至れり。されば其の恩を得て其恩を知らざれば、是竹木に等しき故、幸ひ此度の戰ひこそ爰ぞ主恩報ぜん時と、一途に思ひ定めし故烈しき勳功顯はさんと、弟大八郎と諸共に、昨十二日の曉天竊に陣所を忍び出で、羽柴の陣の備へを篤と巡見致せし所、敵の人員三萬程、しかも備へは高山、鹽川、中川、池田の四頭にて、皆々自國の戰ひなれば、地の理は殊更駈引き小荷駄皆悉く自由を得たり。爰を以て考ふるに、味方の勢は二萬に足らず、殊に他國の働きなれば地の理に暗きは必定なり、其上一旦の威に伏せしも、皆諸國の寄合勢にして多くは賴みとする者少なく、まつた味方を洞察するに、敵へ心を寄する者あり、それ故かた〴〵申上げんと、自身に是迄參つてござる。

光秀　むゝ、して味方に二心あつて、敵へ心を寄するとは。

利一　されば味方を裏切るは、洞ケ峠に陣取りせし、筒井が勢に候なり。

光秀　なに、筒井が隊に裏切りあるとか、して〳〵それは如何なる儀か、はや〳〵申せ。

利一　竊に巡見致せし所、洞ケ峠の筒井が陣所、如何にも不審に候故、よく〳〵見ればこはいかに、敵路に聊か押へなければ裏切りなすと覺えたり。されば未だ戰はざるに、敵の三つの利ありて味方

に則ち三つの失あり。

茂朝　すりや内藏之助殿には、敵に三つの利ありて、味方に三つの失ある故、今日の戰爭は味方に勝手あらざると、貴殿は見極められしよな。

光秀　それ故我へ諫言なすとは、尤もなる申し條。して其三つの失あるを如何致して利に轉ずべきや。

茂朝　是にて仰せ。

兩人　聞けらるべし。

利一　そも〳〵戰の詮とする所、始終の勝こそ肝要なれ、是れを計らんとなすには、一先づ此の場を脫れ京都をも捨て給ひ、丹波龜山の麓なる谷道を塞ぎ、木石を切つて左右の岸に積み掛け、譜代の臣を人選なし、龜山に籠城あるべし。もしさなくんば左馬之助を呼び歸し、安土の城も捨てたまひて、十郎左衞門光近と、兩人の手勢ばかりで引上げ、坂本に籠城あるべし、彼地は湖水の運送よく爰にて敵を待ち受けたまはゞ、一二ケ月位こらへん事、何の難き事やあらん。此の儀御採用下さらば、それがし此場に踏み留まり、寄合勢を一備へとなし、勝負を一命に掛けて烈しき合戰仕るべし、左あらば羽柴の勢ひくぢけ、敵に內變出來なし、味方に與する將士あるべし、そこを計りて龜山より後詰の兵にて押寄せなば、必定勝利に極まれば、此の兩條何れなりとも御決定下さ

らば、臣等が悦びいかばかり、偏にお聞き濟みの儀願上げ奉る。
光秀　こりや齋藤汝兄弟日頃より、武勇の譽れあるといへども、今大敵を引き受けて臆病神の付きたるならん。我將軍の重任を蒙り今日始めての合戰に、敵の旗をも見ずして引かば、誰か我が下知に隨ふ者あらん、汝が詞は逐一に理に背かざる事ながら、左馬之助をも呼び返すまじ、まつた龜山へは猶もつて籠城なぞは致し難し、それとも命を捨てるが惜しくば龜山へなりと坂本へなりと、心任せに引き取るべし、我は跡にて一戰なさん。
利一　すりや、か程までに申上げても、あの、御採用はござりませぬか。
光秀　おゝ一命惜しまぬ日向守、汝が諫言用ゐぬわえ。
利一　はゝはアゝ。（ト平伏する、茂朝、景則皆々氣遣ふ思入にて）
茂朝　御立腹の段は我々迄恐れ入つてはござりますれど、日頃より思慮深き齋藤氏の事なれば、
景則　再三申せし御諫言、今一應御勘考あつて、御取上げ下さるやう、
茂朝　臣等一統、
皆々　願ひ上げ奉りまする。
利一　いや其御心配忝なけれど、それがし再三申上げお用ひなき上からは、おの〳〵歎願いたしした

とて、よもお取上げはござるまい。あゝ是非もなし、たゞ此上は一心の外味方とせず、今一計をめぐらし、一戰なして快く討死の仕つらん。

ト ぢつと光秀を見て平伏なし、やう〳〵立上り花道へ行く。光秀思ひ切つて、

光秀　こりや利一。

利一　はッ。

光秀　互ひに天の運に叶ひ、勝利とならばさもあらんが、もし敗と相成らば、やがて冥府で、いやさ、目通り叶はぬ、下り居らう。

利一　すりや、さ程迄に御決心を、いやさ、最早お暇仕る。

ト 誂への合方になり、舞臺と花道にて別れを惜しむ氣味合の思入あつて、内藏之助利一花道へはひる。

茂朝　君に深き御思慮ある事、兼ねて拙者察し居れど、何故あつて今日ばかり、齋藤氏の御意見を御用ひなきは、如何の次第にござりまするか。

光秀　彼れが諫言尤もなれど、我父それを用ひざるは、深き思慮のあつての故なり。

茂朝　して其の御思慮と仰せあるは、いかなる事か我々へ、後學の爲め承りたし。

景則　何卒仰せ、

皆々　下さるべし。

光秀　いかにも味方の運拙なく、羽柴の破竹に打負けなば、快く討死なすとかねて思ひ定めたり、內藏之助が意見に付き、今山崎を引き退き、龜山又は坂本へ籠城などを致しなば、光秀が威勢忽ち衰へ、只死せざるを樂しむのみ、豈覇業をなすの時あらん。信長在世の其の時は、我丹波近江にて五十餘萬石の大名なり、然るを今未練にも龜山坂本などへ退き、天下の諸侯を悉く、敵に引受け困窮して、城を守らば信長に仕へし以前に劣るべし、此場に望み云ひ甲斐なく、命を惜しみておめ／＼と、何領國へ立ち退くべき、況んや敵は羽柴秀吉、此の山崎は運定め天下分目の合戰なれば、たとひ利一强諫なすとも、かゝる場合に臨みし故、用ひん事のなり難し。方々左樣心得て其身を劍山刀樹におき、潔く血戰いたせ。

茂朝　御思慮の程を承はれば、御尤もに候なり、元より命は君に捧げ、此身は塵埃より輕く存じ、

景則　將の麾下に粉骨なし、たとひ數萬の敵勢が、此の山崎へ押來るとも、

篤次　桔梗の旗風勇ましく、

茂朝　一戰なして羽柴勢、敗亡させせんは、

皆々　またゝく內、

景則　御安堵あれや、

皆々　御大將、

光秀　ほゝお、勇ましゝ〳〵、先はそれにて我も安堵、後刻の注進相待たれよ。

皆々　畏つてござりまする。（ト花道より、軍兵一人出來り、）

軍兵　はッ、御注進申上げます。

茂朝　何事なるぞ。

軍兵　かねて味方と思ひたる筒井順慶裏切りなし、横合より討つて出し故、齋藤殿を始めとして、先陣に向ひたる諸將大きに敗北なし、味方危ふく候間、御用心あつて然るべし。

ト是にて皆々びつくりなし、

光秀　扨は最前内藏之助が、我へ諫言致せし如く、筒井は裏切りなせしとか、斯くなる上は覺悟の前、是より討つて出で對戰せずんばあるべからず、溝尾村越兩人は是より直に罷り越し、先手の樣子見屆けまゐれ。

茂朝　思へば憎き筒井順慶、二心とは卑怯な侍。彼を此のまゝ置くべきや、是より我々先陣へ加はり、敵に一泡ふかしてくれん。

景則　云ふにや及ぶ、それがしも、敵の陣所へ踏込んで、火花を散らし手並の程、筒井を初め目に物見せん。

光秀　ほゝお、あつぱれ方々、少しも早く。

茂朝　左樣ござらば、

兩人　御大將。

光秀　はや行け。

兩人　はツ。

ト槍を持ち花道へはひる。光秀皆々跡を見送り、案じるこなしあつて、

光秀　遙に明神の方に當りて、次第に上る馬煙り、正しくあれは高山が旗下に屬する者ならん、猶豫ならざる此の形勢、敵八方に充滿して陣所を取卷く上からは、我も直樣討つて出でん。

貞連　然らば是より、

六人　我々も、

光秀　おゝ、出陣の、（ト光秀床几を離れるを道具替りの知せ、）用意致せ。

ト光秀きつと思入、遠寄せカケりにて道具廻る。

（小栗栖の場）——本舞臺總て小栗栖の里、夜の體。爰に以前の長兵衞・○△□◎の百姓四人、竹槍へ袖をさしてゐる。鐘太鼓にて道具留る。

長兵　宵から掛つて一人前に三本づゝ出來上つた槍、是でどんな手利が來ても、負ける事はござらぬて。

○　負けるといふので思ひ出したが、此間からおぬしの見世で、無暗に酒を飲み荒し、

△　やれ負けろの、たゞ喰はせろのと、明智方の軍兵が、村の者を困らせたが、

□　物の裏表はあるもので、たうとう今日は山崎で、羽柴方に負けたさうだが、

◎　元より諸國の集り勢故、負色立てば我先きに、皆ばら〳〵と逃げたさうだ。

ト花道より、以前のお雛、お山、藥鑵と辨當の重箱を提げ出來り、

お雛　向うに見えるあの焚火は、慥に內の兄さんや、村の衆の居なさる所。

お山　小じよ飯きりゆゑ皆さんが、嘸待ち兼ねてござりませう。

お雛　早く持つて行かうわいな。

□　おゝ、兵糧方のお雛坊、嘸重かつたらう。

△　お山坊も、御苦勞々々。

お雛　嘸待ち兼ねてござんせうと、お山さんと二人して、

兩人　大急ぎで來ましたわいな。（ト重箱藥罐を出す。）

長兵　それは大きに大儀であつた。さうして九品寺に屯してゐる、大勢の方へ握飯がいつたか。

お山　それは狐川のお庄屋樣から　炊出しをしてやる積りゆゑ、

お雛　内では爰ばかりでござんすわいな。

長兵　これ〳〵、夜更になるだけ物騷ゆゑ、二人は早く内へ歸り、表をしめて必ず明けるな。

兩人　あい〳〵。

○　もし又怪しい者が來たら、九品寺へ駈付けて、寺鐘をつくがいゝ。

△　それを合圖に行つてやるから、必ず案じさつしやるな。

兩人　そんなら皆さん。

四人　道を氣を付けて、行かつしやれ。

兩人　あい〳〵。（ト兩人花道へはひる。）

長兵　や、夜目ではつきり分らねど、微に向うに見ゆるのは、何でも明智の落人らしい。皆の衆、これ（ト四人の百姓に囁き、）しつかり頼むぜ。

四人　合點だ。

ト是にて焚火をしめし、めい〳〵竹槍をかい込み、長兵衞は後ろの藪、四人は下手へはひる。花道より以前の光秀、誂への乘馬にて、片手に槍をかい込み出來り、

光秀 天なるかな命なるかな、軍令正しき山崎の備へも、筒井が變心に味方一時に敗北なし、餘儀なく一先づ妙心寺迄、わづか主從六騎にて駒を早めて落ち延びしが、暫くあれにて樣子を見ん。

ト舞臺へ來り、向うへ思入あつて、馬より下り、有り合ふ岩臺へ腰を掛ける。風の音ばた〳〵になり花道より、溝尾庄兵衞茂朝羽柴方の鎧武者三人を相手に立廻り乍ら出來り花道にてちよつと立廻り、三人は引返し逃げてはひる。茂朝舞臺へ來り、思はず光秀の乘馬を見て、

茂朝 それにあらせたまふは、我君樣ではござりませぬか。

光秀 おゝ、さ言ふは溝尾庄兵衞なるか。

茂朝 おゝ我君、御別條はござりませぬか。

光秀 先づ其方も無事なる體にて、我も共々安堵いたしたり。先刻より餘程のおくれ、暫く乘馬を休ませ乍ら此處に待受けたり。

茂朝 拙者も君のお行方をお案じ申し候へども、何を申すも多人數に、思はぬ遲刻いたしたり。

光秀 何はしかれ此處で、再び汝に巡り逢ひしは、是れ今生の別れなるぞ。

茂朝　何とおつしやる。

光秀　最早斯くなる上からは、我が運命も是れ迄なり、左するとも虎口の敵路、未練の死をばなさんより、此處にて潔く自殺なして相果てんと、疾くより決心致したり。

ト短刀へ手を掛けるを、茂朝びつくりなし、其の手を留め、

茂朝　是は物に狂はせたまふか、申上げずとも御存じながら、其上源の頼朝は石橋山の合戰に、朽木の内に隱れゐて、終に海內を手に握れり、又足利尊氏は西海の波に漂ひ乍ら、是も天下を掌にをさめたり。況んや鬼神と人も恐れし信長公御父子を討ち、京都の守護として萬民に渇仰せられし御身をば、かろ〳〵しく此處にて御生害をなし給はんとは、近頃御不覺かと存じまする。

光秀　左程迄に我を思ひ詞を盡し諫むる上は、いかにも只今死を止まり、一先づ坂本へ落ち延びん。

茂朝　すりや拙者めが申上げしを、あの、お用ひ下さりますとか。

光秀　おゝ、汝が意見に隨ふぞ。（ト短刀を納める。）

茂朝　それは千萬忝し。然らば是より片時も早く、御乘馬あつて然るべし。

光秀　いかにも、承知いたした。

ト茂朝光秀を馬に乘せる。爰へ下手より以前の百姓、竹槍を持ち、ばら〳〵と出て、

四人　落人覺悟。

トやにはに突いて掛る、茂朝槍をつけ、百姓を追散らす、是れにて叶はず下手へ逃げてはひる。茂朝跡を追掛けてはひる。

光秀　羽柴が智略に土民迄が、一揆を結び村々に、屯集いたす上からは、うかつに通路なり難し、幸ひ溝尾が土民共を追行きし間に落ち延びん、さうだ〳〵。

ト光秀上手へ乘り出す。爰へ後ろの藪より以前の長兵衞、竹槍を持ち窺ひ出て、後ろより突かうとしてふるへて突き兼ねる。光秀思はず振返る。是れにて長兵衞藪へ忍び、又乘り出すを思ひ切つて後ろより光秀の脇腹をねらつて竹槍を突き込む。わツと云つて槍を投げ捨て手早く太刀を拔き、竹槍の先を切落す、是にて長兵衞たぢ〳〵となる。是を馬上にて切つて掛るを、長兵衞やにはに礫を打つ、是にて光秀ぢり〳〵と後へ下る。此時下手より以前の百姓四人、ばら〳〵と出來り、一時に突いて掛り、ごつちやの立廻り、光秀是れを切拂ひ、上手へ逃げ込み、光秀脇腹を押へ、跡を追つて逸散に上手へ走りはひる。長兵衞藪の內より、跡を窺ひ乍ら出で、

長兵　爰ら邊りに血潮のしたゝり、突き留めたるに疑ひなし、是れから裏手をのツ越して、首を取つて手柄になさん。さうだ。

ト逸散に上手へはひる。ばた〱になり、花道より以前の羽柴方の武者六人にて、景則と立廻り乍ら出來り、六人を相手に烈しき立廻りあつて、トゞ知せなしに此の道具廻る。

(同光秀最期の場)

本舞臺總て小栗栖山續きの體、三重にて道具留ると直に床の淨瑠璃になり、

〽行く空の月も朧の雨催ひ、一村繁る山續き、木々の雫も若しやはと、草にも心置く露の敵地を切抜けやう〳〵と、手負乍らに御大將。

トよき程に、矢張り竹法螺鉦太鼓ばた〱にて、上手より光秀馬上にて苦痛を怺え乍ら出來る、跡より百姓兩人竹槍にて追ひかけ出て突いて掛る、ちよつとあしらひ兩人を切倒す、此途端光秀落馬をする。是にて死骸の上へ太刀を逆手にとんと落ちる。

〽苦痛を怺へどつかと座し、

光秀　最前小栗栖の藪蔭で土民が突き出す槍先に、わが脇腹を貫かれ、深手をこらへやう〳〵と數十町を馬上にて是迄は落延びたれど、急所の痛手に身體弱り、最早歩行も叶はざれば、邊りに人目のなきを幸ひ、甲冑乗馬を竊に隱し、此處にて相果てん。

ト苦痛を怺え、馬の口を取り邊りへ心を付け乍ら、下手の藪の蔭へはひり、ほつと思入あつて馬手差

しを抜き掛ける。ばた／＼になり、下手より茂朝手を負ひ、武者兩人と立廻り乍ら出來り、是を切拂ひ、兩人逃げてはひる、茂朝光秀を見て、

茂朝　我が君、是に御座ありしか。

光秀　おゝ庄兵衛、汝の來るを待ち兼ねたり、近う／＼。

茂朝　はッ。

〽刀を杖に這ひ寄つて、

茂朝　是迄首尾よく落ちたまひて、今更となり何故に、御生害遊ばしまするな。

光秀　生害いたすは外ならず、急所の深手を負うたるぞ。

茂朝　すりや、我君にも御身内に、かゝる深手を負ひたまひしか。

〽いひつゝ拔取る竹槍の、穗先に流るゝ血汐のしたゝり、溝尾はびつくり手に取上げ、

光秀　たゞ殘念なは其の竹槍、羽柴が兵にあらずして、小栗栖の藪陰より土民一人顯れ出で、不意に脇腹貫かれ、急所の痛手も屈せずに、此處迄駈けつけしが、思はず是れにて落馬なしたり。

茂朝　今一足早くんば、かゝる手疵は負はせ申すまじきに、ちえゝ殘念な事いたしたり。

〽先非を悔いて茂朝は、きつそぎ竹の穗を見つめ、無念を忍び居たりしが、折柄數ヶ所の手

疵さへ主従の行方尋ぬる一心に身は小栗栖の村越して三十長景則は、御在所いかにと爰かしこ、見返り／＼やう／＼と、刀を力にすかし見て、

景則　そこに御座在らせらるゝは、御大将にてましますや。

〽言ふにこなたは、耳そば立て、

おゝ、溝尾殿か。

〽うんとばかりに息絶えたり。

ト此聲を聞きつけ、つか／＼と舞臺へ來り、兩人を見て氣絶する。

茂朝　えゝこれ、云ひ甲斐なき此の有樣。

ト茂朝抱き起し介抱して、耳に口を寄せ、

こりややい、君御大事の際に望み、かゝる振舞致すとは、云はうやうなき三十郎、あの、こゝなうつけ者めが。

ト鐵扇の要にて景則の背中をきつと打つ。是れにて息を吹返し、

景則　おゝ我君樣、溝尾氏計らず是れにてお目にかゝり、悦ばしい儀にござりまする。

茂朝　して其方も身體に、餘程の手疵をうけてゐるが、よくぞ是迄參つたり。

景則　數ヶ所の手疵に身體弱り、自殺なさんと致せしが、一先づ君の御先途を見屆けし上相果てんと、刀に縋り辛うじて、是迄參りお目に掛り、やれ嬉しやと心もゆるみ、計らず不覺を取りし段、我君樣、溝尾氏、平に御容赦下されい。

光秀　して先陣にて其方は、內藏之助に逢はざりしや。

景則　齋藤殿には逢はざりしが、三宅進士の兩人は跡を追ひ來る野武士等を、相手になして數度戰ひ、數ヶ所の手疵にたまり得ず、終に兩人差し違へ、はかなき最期をいたされました。

茂朝　すりや、三宅進士の兩人も、最早討死なしたるか。

光秀　さすれば齋藤內藏之助も定めし敵を防ぎ兼ね、討死なせし事ならん。斯く主從の緣うすく、數多討死なす上は、我も切腹すべき間、介錯なして我が首級何れへなりと隱してくれよ。

茂朝　すりや、どうあつても大將には、

景則　是れにて御生害。

兩人　なされまするか。

光秀　いかにも。

兩人　はあゝ。

光秀　庄兵衞、汝に渡す物あり。

〽御鎧の引合せより、辭世の一句差出し。

是を記念に遣はす間、屍は野外にさらすとも、首級は敵の手へ渡さず、必ず埋葬なしくれよ。

茂朝　はッ、畏つてござりまする。

〽溝尾は記念の一品を、月の光りにすかし見て、

順逆無二門一大道徹二心魂一五十五年夢覺來歸二一元一明窓玄智居士書す」すりや疾より斯迄に、御覺悟極められしことか。

光秀　五十五年の其の間、無明の闇の夢覺めて、冥府へ趣く玄智居士、我は後世にて相待ち居るぞよ。

茂朝　はあゝ。

〽はッと答へて大將の、介抱なして六具を取捨て、覺悟し給ふ其内に、村越甲冑脱捨てゝ既に死なんとなすを押止め。

茂朝　こりや村越、何故に貴殿は自殺いたすぞ。

景則　それがし此の場で自殺なし、冥府の御供仕つれば、何卒お許し下されい。

光秀　いや／＼それは無益なり、今死する命を延はり、片時も早く坂本の居城へ立越え逐一に、此場の

次第を物語られよ。

景則　君の仰せに候へ共、此儘冥府の御供せずに、

茂朝　いや、今一命を捨てんより、仰せに隨ひ坂本へ、忍び行くのが忠臣なり。

景則　それぢやと申して、此場を見捨て。

光秀　然らば我が意に、背く心か。

景則　全くもつて。

茂朝　片時も早く落ち行くか。

景則　さあ。

兩人　さあ。

三人　さあ〳〵〳〵。

光秀　こりや、死するばかりが、忠義でないぞ。

へ理を諭したる一言に、村越實にもと心を定め、

景則　左樣ござらば仰せに隨ひ、是より直に坂本へ、落行きますでござりまする。

光秀　さ、猶豫なすべき所にあらず、早行け。

最則　はッ

光秀　庄兵衞、汝は介錯いたせ。

茂朝　はッ。

光秀　いでや冥土の。（ト光秀馬手差しを拔放し、構へるを、木の頭、）魁なさん。

〽坂本さして、

ト光秀茂朝景則へ思入。景則は思ひ切つて逸散に花道へはひる。此の模樣宜しく、三重、寺鐘にて

幕

二幕目

坂本城中奥殿の場

同　城外應接の場

〔役名――明智十次兵衞光廉、明智左馬之助光俊、村越三十郎景則、堀久太郎秀政、小川源太郎清政、内藤三次郎忠長、今峯新助泰政、尾石藤左衞門武清、堀の士卒。光秀の御臺牧の方、同嫡子十次郎、同末女照子、乳人柵、腰元等。〕

（坂本城中奥殿の場）――本舞臺總て坂本城内奥殿、庭先の體。爰に腰元白梅、山吹、野分、櫻木等短

刀を腰にさし、立掛りゐる。此の見得早舞にて幕明く。

白梅 これ野分殿。けさから櫛の歯を引く樣に、山崎からの戰の注進、案じられる事ではござりませぬか。

野分 左樣でござりまする。初手は味方の勝利と聞きしが、晝後から負色だち、天王山を取られしとやら。

白梅 ても情ない、

四人 事ぢやなあ。

ト爰へ奥より柵、片はづし、襠なり奥女中の拵へにて出來り、

柵 只今お次で聞くとも知らず、よしない味方の敗走話し、勝負は戰の習ひにして、假令百度敗くるとも、始終の勝を是とするが軍法の極意となら、それに何ぞや負色の御注進がありしとて、女子同士が打ちこぞり、いまはしき戰の評議、私なりやこそ宜しいが、御臺樣のお耳に入らば、不吉な事とて、御前の御不興、以後は必ず左樣な事、おたしなみなされませ。

白梅 女子の淺い心から、お案じ申して、ついうかく。

野分 よしないお噂いたしましたが、

山吹　きつと此後はたしなみまする。
櫻木　此場の事は、これ限りに、
白梅　どうぞなされて、
四人　下さりませ。
柵　はて、此の末ともに、たしなましやんせ。（トきつと云ふ、爰へ奥より腰元松江出來り、）
松江　只今是へ御臺樣や、若君樣がお越しにござりまする。
柵　なに、御臺樣の、
五人　お越しとな。
ト皆々下手へ控へる。誂への合方になり、正面の襖を明け、牧の方、下げ髪襠なり御臺の拵へ、子役十次郎若衆鬘、袴羽織にて、同じく子役の姫三人、是へ腰元附添出る、此内腰元松江二重上手へ褥を敷き、牧の方此上へ住ふ、跡皆々宜しく住ひ、柵前へ出で、
柵　御臺樣を初めとして、若殿にも姫君樣にも御機嫌よう入らせられ。
白梅　恐悦申し、
皆々　上げまする。

牧の　今日こそは我君の、御武運をお開き遊ばす戰の當日故、自ら初め二人の子供も、悦ばしう思ひますわいなう。

柵　仰せの通り今朝より、引もきらずの御注進、御味方勝利と承はり、數なりませぬ私共まで恐悅に存じまする。

牧の　其の注進も先刻より、絶えて知らせのあらざるは、正しく味方の。

柵　あいや正しくお味方御勝利ゆゑ、最早つど〳〵御様子を、お知らせ申すに及ばぬと、怠る事でござりませう。

十次　いや〳〵知らせのあらざるは、味方の備へが亂れし故、火急を告ぐる者もなく、混雜すると見えるわいなう。

姫君　もし父君がお討死でも、遊ばしたなら何とせう。案じられてなりませぬ。

柵　いえ〳〵何の我が君様が、お討死を遊ばしませうぞ。左様な事は御不吉ゆゑ、仰せられぬが宜しうござりまする。

ト　ばた〳〵になり、花道より袴股立の侍一人、走り出來り、花道にゐて、

侍　はッ申上げます。只今明智左馬之助様が、只御一騎にて當城へ、お歸りにござりまする。

柵　光俊樣が、

皆々　御歸城とや。

牧の　はや〳〵是れへ通しませうぞ。

侍　はッ。

柵　光俊樣が御歸城あれば、何れ彼の地の御樣子が、相知れまするでござりませう。

牧の　腰元共は伯父君へ、此の趣をお知らせ申しや。

六人　畏りました。

光廉　あいや參るに及ばぬ、十次兵衛其の知らせ待兼ねたり。

柵　あの、お聲は、

皆々　伯父君樣。（ト是より床の淨瑠璃になる。）

〽聲かけまくも天が下、握る主人の伯父光廉、軍慮かしこく敗北と悟りて閉ぢし一間より、立ち出て待つ間程もなく、遙かあなたの中門を明智の身內左馬之助、敵を切り拔けしを〳〵と、奧殿近く入り來れば、それと見るより心ぜき、

光廉　待ち兼ねたり左馬之助、御身が歸城召されしは、定めて深き仔細ぞあらん。

栅　彼の地の御樣子光俊樣、早うお聞かせ下さりませ。

左馬　お待ち兼ねと存ぜし故、虎口を切り抜け左馬之助、只今歸城致してござる。

＼草鞋ぬぎ捨て庭前より、御臺へ會釋上席へ、どつかと座せば十郎兵衛、腰元どもを見返りて、

光廉　戰の樣子聞く間、栅事は子供を伴なひ、腰元共と遠慮いたせ。

皆々　はツ。

＼皆々次へ立つて行く。

光廉　晝後に及び山崎より、五度目の注進ありし故、味方の旗色よからぬとは疾くより承知いたせしが、其後は絶えて知せもなく、城兵共に申付け、街の風說窺はせしに、追々味方討死なし、光秀敗走致せしなどゝ、承はつて歸りし故、扨は天運盡きたるかと、心を勞し居つたる處、御身一人虎口を切拔け、歸城せしとは心許なし。

牧の　自らとてもかねてより敗走せしとは聞きつるが、二人の子供や腰元共の手前を思ひ、力をつけ、それと云はねど我君を、御案じ申す心のせつなさ。

光廉　仔細ぞあらん、左馬之助。

牧の　戰の樣子を、
光廉　聞かせてくりやれ。
〽心せいてぞ問ひかくれば、光俊實にもと歎息なし、
左馬　されば今曉出陣迄ハ十が九つ此度の戰は勝利と存ぜしも、天王山を出しぬいて味方が陣取なす時は敵に不都合少なからず、假令秀吉何程の軍配なして戰ふとも、味方の勝利は疑ひなしと、思ひし事の空しくなり、一旦陣所を設けしを、またゝくひまに裏手より、敵勢迫つて乘つ取られ、負色立ちしを見限りて、一の味方と頼みたる筒井順慶裏切なし、計策一々齟齬となり、敵の大軍防ぎ難く無念乍らもをめ〳〵と、不覺の敗走致してござる。
〽無念面に顯れて、語るを聞いて十郎兵衞、御臺も共に齒がみをなし。
光廉　すりや筒井順慶には、敵味方の日和を見て、旗色のよき羽柴方へ心を變じ附きしとか、
牧の　今の今迄筒井殿が、裏切りなして敵方へ隨ふなぞとは知らざりしに、
光廉　武士にあらざる二股坊主、返す〴〵も憎きやつめが。
〽拳を握り光廉が、無念の涙はら〳〵と、遙か隔たる山崎の方を睨んで忿怒の體、御臺は猶も心せき

牧の　して我君の御先途は、何れへお落ちなされしぞ。

左馬　君とかく云ふ光俊とは、戰の場も異なるゆゑ、詳しき事は辨へねど、士卒の者の知らせには溝尾、村越、三宅、比田の旗本四人が守護なして、本國丹州龜山へ引上げ給ふと承る。

光廉　鎧に染る血潮といひ、定めし難戰致せしならん。

牧の　武功があらば伯父君へ、

光廉　語り聞かせよ、なゝなんと。

〽尋ねに光俊座をあらため、

左馬　是れと申して今日の武功は別にござらねど、琵琶湖を馬にて乘つ切りしが、味方の譽れ身の面目、

光廉　なに、琵琶湖をば、

牧の　乘つ切りしとな。

左馬　伯父君御臺、お聞き下され。そもそれがしは今日都の守護を承り、四條繩手に陣所を構へ、敵や遲しと相待ちしに、早山崎は敗北と追々告來る注進に、猶豫ならねば大津迄、乘出さんと打出の濱にて、堀池田の勢を引受け戰ひしが、

〽名にし近江の戰場に、敵の矢ばせは唐崎の、雨に等しく降りかゝり、續く味方の從兵も、

大半討死なしければ、防ぐにかたき石山へ、昇る滿月弓投げ捨て、今ぞ手なみを三井の鐘、つき出す槍と渡り合ふ、橋間ぞ瀨田の關兼氏、馬上ながらに振りかぶり、堀が備への眞つたゞ中、切つて廻れば八方より、われ遁さじと取圍むを。

〽前後左右の嫌ひなく討てば開きて立別れ、仇に粟津の晴嵐も、比良の暮雪にことならず、手なみに恐れ大軍も、遠卷なして寄り付かず、敵たふ者もあらざれば、無益の罪を造らんより、一先づ當城坂本へ、歸城致して伯父君や、御臺へ委細を告げし上、又の軍議を合さんと。

〽見返るかたへは漂々たる、琵琶の湖水や浮御堂、退れ堅田の落武者も、敵の兵士を蹄にかけ、一鞭當てゝ水中へ、ざんぶとばかり乘り込んだり。

光廉　はて勇ましき物語、して〳〵それより如何せしぞ。

牧の　乘り越えしとはいふものゝ、もしや不覺は取らざるか。

左馬　さん候、それがしかねて湖水の淺深は、測量なして知つたれど、未だ馬上で乘り越しゝ覺えなければ心中に、正八幡を念じつゝ。

〽手綱かいくり諸鐙、當てる後ろに敵勢のあれよ〳〵と呼はる聲、寄せては返す濤の音、折しも烈しき比叡山おろし、爰ぞ大事と雲龍の、墨畫も狩野の永德が、筆意をこめし陣羽織、

波のまに〳〵きらめきて、浮きつ沈みつ駿足に、息を入れては引きあげ〳〵、游ぎ付きたる唐崎の、濱邊にからき大難を易々遁れ越えたるも、名馬のかけか大鹿毛の、働きとこそ知られける。

是ぞ所謂過ちの功とや言はん我乍ら、敵へ對して武士の面目、思はぬ手柄を致してござる。

〽有りし次第を物語れば、聞く兩人は打悦び、

牧の　昔が今に至るまで、あの湖を馬上にて越えたる者のあらざるに、勝れし馬術と云ひ乍ら、類ひ稀なる大手柄。

光廉　蜀の劉備は、的盧にまたがり、彼の檀溪を越えしと聞く、それは見ぬ世の物語り、是は目前至急に臨み、光俊が湖水を渡る武の功し、嘸敵勢には臍をかみ、殘念がりし事ならん。

左馬　仰せの如くそれがしが一つ松にて木の根に憩ひ、見渡す四方も遠山に、日の丸畫きし陣扇にて、暫く暑氣を凌ぐ折、陸地を廻り敵勢が、追ひ掛け來り候故、又もや馬上の人となり靜々あゆませ坂本の、十王堂の前迄來り、下馬を致して大鹿毛を、御堂の格子へ繫ぎ留め、矢立を取出し香包みの疊紙を押し開き、光俊渉湖馬と、五文字を認め、立髪へしかと結付け、其儘に殘して歸城致してござる。

〽あけて言はねど討死の、覺悟とさとる光廉が、計り知つたる底の海、

光廉　すりや大鹿毛の一命を、繋ぎ留めたる坂本も、降る心のあらざれば、軈て其の身も、

左馬　や。

光廉　はて、あつぱれなる覺悟ぢやなあ。

ト感心のこなし、ばた〳〵になり、花道より以前の侍走り出來り、

侍　はツ申上げます、只今村越三十郎殿、深手を負はれし御樣子にて、歸られましてござりまする。

光廉　それぞ火急の知らせであらう。介抱なして是れへ通せ。

侍　はツ。(ト引返して花道へはひる。)

〽樣子如何にと待つ折しも、士卒の助けに村越が、深手を怺え坂本へ、知らせの注進簑笠も

破れて傾き刃こぼれの、刀を杖に入來り、

景則　村越景則、坂本へ御注進々々。

〽心ゆるみてうつとりと、氣絕の樣子見て取りて、光俊庭へ下り立つて、

左馬　こりや村越、わづかの淺手に氣絕なし、不覺千萬。えゝ未練至極。

〽未練至極とはげまされ、我にかへりて笠をぬぎ、

景則　はゝッ、今朝よりの戰ひに身體勞れ、思はずも我を忘れし面目なさ、平に御容赦下されい。

光廉　して／＼その方たゞ一騎、農民姿と身を變じ、知らせの注進心許なし。

牧の　我君樣の御先途を、見屆け是へ參りしか。

左馬　彼の地の樣子、いかに／＼。

景則　はッ。

〽はッと答へて氣をはげまし。

景則　されば今日山崎にて、味方敗軍致せし事、定めて最早陣中より、注進あつて御存じならんが。

〽洞が峠の一戰も筒井順慶裏切りなし、瞬く間に負色の立ちし習ひに旗指物、幕や陣所もさん／＼に、亂れて再び立て直らず。

早や是迄と我君にはお覺悟ありしを溝尾殿が、おとゞめ申して比田、三宅、それがし諸共御供なし。

〽一先づ當城坂本へ御歸城あれと小栗栖の、藪陰傳ひ閑道を遁れて引上け來りし折、思ひがけなくこゝ彼處、いつか集まる農民共、

落人打つて手柄をなし、褒美の金を貰はんと、

〽竹法螺吹き立て鋤鍬にて、打つて掛るを見侮り、あしらひ〳〵主從が別れ〳〵に我君も、
駒にまたがりたゞ一騎、急がせ給ふ藪蔭より、狙ひを付けて農民が、
突出す竹槍情なや、御大將の脇腹へ、

皆々　や。

景則　がばと通れど、其儘に、
〽槍の穂先きを切り拂ひ、駒を早めて十町餘り、遁れ給へど人影の、見えぬかしこの山間にて、急所のおなやみたまり得ず、終に後落馬遊ばされ、武運の末と仰せられ、鎧を脱ぎ捨て
我が君には。

牧の　すりや農民の其爲に、最早御最期ありしとな。

景則　さあ死後に首級を隱しくれと、溝尾殿に頼み置き、馬手差し取つて弓手の脇腹、がばと突立て御生害、遊ばしましてござりまする。
〽痛手をこらえ村越が無念乍らの注進を、聞くに御臺はあるにもあられず。

牧の　して〳〵君の御首級は、何れへ持參致せしぞ、但しは敵へ奪はれしか、様子が聞きたい、何とぢやぞいなう。

景則　其の御首級は溝尾殿が、御持參あつて當城へ、引上げ召さるゝ筈なりしが、又も敵勢追ひ來り、亂軍なれば、別れ〳〵、我も其場で我が君の追腹なさんと存ぜしが、御臺所へ此の由を、告げ知らせよとの御上意ゆゑ、餘儀なく殉死を止まりて、農民姿に身を變じ、落ち延びましてござりまする。

光廉　〽役目終れば又候や、心のゆるみがつくりと、絶え入る樣子に十次兵衞、さこそあらんといたはりて。

光廉　深手の上に長途の勞れ、嘸や苦痛にありつらん。それ次へ伴なひ手當てをいたせ。

軍兵　はツ。

〽手負ひを連れて軍兵は、藥用所へと急ぎ行く。始終を聞いて左馬之助、默然として居たりしが御臺の傍へ進み寄り、

左馬　君の最期に御臺にも、お歎きあるは理ながら、最早猶豫の場合にあらず、して此上の御心底、いかゞなさるゝ御所存なるか、光俊篤と承りたし。

〽いふに泣く〳〵顔をあげ、

牧の　さあ此期に及び自らの、思案と云うては外になし、二人の子供を差殺し、返す刀で自殺なし、城

へ火をかけ亡骸を、隱して死する身の覺悟。

光廉　むゝ流石は賢女、よき覺悟、光廉とても其の心底、まつた光俊御身にも、彼の大鹿毛を十王堂へ殘して歸城致せしは、早討死の覺悟なるか。

左馬　仰せの如く山崎の一戰破れし上からは、最早天命盡きたれば、討死なさんと存ぜしが、子の恩愛に引かされて、女子は未練のあるもの故、歸城の上にて自殺の儀を勸めんものと存じの外、流石は維任將軍と呼ばれし君の北の方、男子も及ばぬ其の御覺悟、光俊感服仕る。

光廉　さはさり乍ら城中の兵士を殘らず討死させ、多くの人命失ふは近頃無益の至りかと、此光廉は存ずるが、御身の心底如何なるぞ。

左馬　手前も左樣存ずる所、とても勝つべき戰にあらねば、城兵殘らず離散させ、跡にて最期仕つらん。

光廉　それぞ無益を好まざる、亂國の世にも則ち條理。

左馬　まつた當家へ傳來せし重器の類も數多ござれば、放火の爲めに灰となし、燒亡させるも無益なれば今宵竊に敵陣へ、差贈りたく存ずるが、光廉公の御賢慮はな。

光廉　むゝよくぞ光俊心付きしぞ。先年大和多門の城にて、松永久秀滅亡の砌り、平蜘の釜を碎きしは

左馬　武門の身にとり恥づる所、疾く〳〵調べ贈つて宜からう。
光廉　委細承知仕る。
牧の　その灰燼の儀に付いて近頃未練の至り乍ら、せめて二人の子供の内、一人は此の世へ残し置き、假令零落いたすとも一度維任將軍の勅許を受けし名家の血筋、助命させたく思へども、所詮叶はぬ最期の際。
左馬　あいや其儀はお案じあるな。なまじ民家へ落しやり、後日に露顯いたさんより、それがし今宵敵將へ數多の重器を贈りし上、仁義をといて應接なさば、條理を知つたる羽柴秀吉、承引せざる事はあるまじ。
光廉　然らば御身に任せ申さん。
牧の　何分よきに頼みまする。
光廉　あゝ、思へば盧生が見しと聞く、榮華の夢は五十年、
左馬　其の邯鄲の蝶に比す、平氏の盛り短くも、
光廉　はて、是非もなき世の、
三人　形勢ぢやなあ。

〽悔悟の夢のさめ〴〵と泣き入る御臺勇將も、天を仰ぎて奥と口、別れてこそは入りにける。跡に吐息をつぎの間の襖押し明け柵が、樣子立ち聞き進み出で、恐る〳〵も手をつかへ。

柵　恐れながら御臺樣へ、折入りまして此の柵が、御願ひがござりまする。

牧の　誰かと思へば、そちや柵、して改めて願ひとは。

柵　恐れ多くはござりますれど、お家の大事と承り、只今お次で御樣子を伺ひましてござりまするが、御臺樣には御最期の、早や御覺悟と申す事、何卒冥土の御供に、お連れなされて下さりますやうお願ひ申上げまする。

〽けなげな願ひ、心には嬉しく思へどかねてより、無益と知ればつぎほなく。

牧の　樣子聞いたとあるからは、包んで詮なき事ながら、わらはを始め子供等は、脱れ難なき罪ある故自殺致して相果つれど、其方始め腰元共は、わづかな恩に義理立てして、死するは無益の事故に敵勢是へ來らぬ内、何れへなりと落延びて、命を全うしてたもや、死んで冥土の供をなし、忠義立てしてたもるより、命長らへ此世に居て、刃に伏せし我々の、囘向なとしてたもるのが、遙かにまさる忠義ぢやわいなう。」

〽とき諭せどもなか〳〵に、聞かぬ忠義の一筋に、凝りかたまりし柵が、主の詞を押返し。

柵　お詞ではござりますれど、三世の御恩が送りたさに、思ひ詰めたる此のお願ひ・何卒お慈悲に御最期の、御供にお連れ下さるやう、偏にお願ひ申上げまする。

〽お慈悲々々と手をついて、死ぬるを願ふ心根が、不便にも又頼もしく、とかく詞もなき折柄姫を伴ひ十次郎、奥の一間を立ち出て。

十次　父君の御最期遊ばせし様子は奥で承りました。とても命を捨てますなら、侍らしう私は切腹したうござりまする。

牧の　すりや生害といふ事を、最早奥にて聞きしとや。

柵　おゝ若君様、お出來しなされた、ようお覺悟を遊ばしましたなあ。

〽褒むれば姫も手をつかへ。

照子　どうぞ母様　私も、自害をさせて下さりませ。

〽年はゆかねど弓取の、子は健氣なる身の覺悟、傍に乳人が聞く嬉しさ。

柵　お姫様迄お立派な、其のお覺悟を見る上は、乳母も勇んで自殺なし、冥土のお供を致しまする。

照子　そんなら乳母も、死んでたもるか。

〽利發作らも姫君は年も行かねば遠慮なく、悦ぶ様を見る御臺、云ひ諭さんと死をとゞめ。

牧の　いや〳〵悴十次郎は、男子の事故生害させ、冥土へ連れねばならねども、そなたは女子の事なれば、其の生害は叶ひませぬぞ。

照子　そりや、何故でござりまする。

牧の　さあ、其の仔細よう聞けや。武運拙く今日の戰に敗走なせし故、逆賊無道の汚名を受け、明智の一類滅亡すれど、そも越前の淺井家にて數代續きし土岐の正統、一と度民家へ落ちぶれしも、先年織田家へ召し出され、父上樣の武功により、旣に丹州龜山の城主と迄に登庸なし、たとひ逆意にあればとて武門の意氣地に御主君を討ち奉り、將軍の勅許を受けしは身の面目、わづか三日の間でも天下の主人と仰がれし、名家の血筋を此の儘に、絕すは先祖へ大不孝、とあつて男子十次郎を殘し置くとも此末に、敵の天下と成る上は、いかで見遁し捨て置かん。そなたは女子の事故に敵へとらはれ行くとても、弓矢の情は相互ひ、よもや命を斷ちもせまい。さすれば假令かすかにも明智の血筋が世に殘り又も時節が來りなば、穢れし名をもすゝぎし上、あつぱれ明智の娘よと言はれる事もあるべきぞ。今死ぬるのが孝行と思はゞ跡に生き存へ、それに勝りし孝行を盡してくれよ、是娘、操正しく末の世に、譽れを上げてくれるのが、千部萬部の供養より、遙かに勝るよき追善、母の教訓忘れまいぞ。

柵　成程是れは姫君樣が、お跡にお殘りなされねば、御家のお爲めになりませぬ、そりやもう、是れ迄お館にて、多くの者にかしづかれ、襖の風もお厭ひありし、姫君樣が敵方へ引かれてお出で遊ばすは、定めておいやでござりませう。又乳母とてもこの儘に、お別れ申して唯一人、姫君樣を敵方へ、渡しともなうござりますれば、何をするのも御家のお爲め、我君樣への御忠節と思ひあきらめをりまする。爰の道理を思召され、母君樣のお詞にお隨ひ遊ばすやう、ちやつと御返事なされませ。

照子　乳母が一緒に參りますなら、母上樣の仰せに隨ひ、死ぬのはやめにいたしまする。

牧の　おゝよう聞き分けた、よい子ぢやわいなう。

ト此時、後ろの襖を明け、以前の腰元六人銘々短刀を差し、牧の方十次郎の白の衣服を服臺へ載せ、小四方に九寸五分を載せ持つて出來り。

白梅　冥土のお供は、私共が、

野分　いたしまするで、

六人　ござりまする。

牧の　やゝ、腰元共の此の支度は、

十次　その用意は私が、申附けましてござりまする。
牧の　すりや、あのそなたが、此の衣服を、
十次　伯父君樣の仰せには、武士の生害する時は、白の衣服に無紋の上下、かやう〳〵にするものと奥にてお教へありし故、腰元共に申附け、切腹いたす刀迄、取揃へましてござりまする。
白梅　柵殿が姬君樣のお供にお立ち遊ばせば、
野分　私共は御臺樣や、若君樣のお供して、
山吹　冥土へ參つて御介抱、
櫻木　申し上げたう存じますれば、
松江　どうぞ自殺を諸共に、
白梅　おさせなされて、
六人　下さりませ。
牧の　武運盡きたる我々を、見捨てる心更になく、嬉しいわいなう。

ト上手より以前の光康附太刀にて、陣扇を持ち、陣立の兵卒康政、其他四人附添ひ出來り、光康上手の床几に掛り、兵卒四人は左右に居並ぶ、皆々此體を見て、

牧の　すりや伯父君には、御討死の、

桐　はや御支度で、

皆々　ございまするか。

光廉　いかにも、光廉城内の軍用金を取出し、兵士を集め分配させ、說諭を加へ當城を、退去させんと勸めしかど、承引なすもの一人もなく、達てと申さば城外へ屯集なし、敵を引受け討死なすとの覺悟故、餘儀なく一同籠城と評議一決なす上は、假令いか程申諭し、存命させんと言はるゝとも承引なすべきいはれなし、倶に覺悟を致させて、冥府の供に連れられよ。

康政　君の爲めには一命を、塵芥よりも輕しと心得、義を泰山の重きにたくらべ、討死なさんと兼ねてより覺悟極めし我々共、

清政　何故あつて此期に及び、軍用金を配分なし、おめ〳〵落許仕つらんや、

忠長　君御最期と聞く上は、此の坂本に籠城なし、敵を引き受け花々しく、

武清　防戰なせし其上にて、叶はぬ時は潔く、討死なすが身の本懐、

康政　たとひいか程お諭しあるとも、

清政　日頃の君恩忘却なし、

忠長　退去などゝは、けがらはしい、
武清　いで防戰の、
四人　御用意々々々。
〽用意を急ぐ其所へ、光俊兵士をおしとゞめ、
左馬　あいや、方々、先づ待たれよ。其の用意には及び申さぬ。
光廉　御身は明智左馬之助、
康政　して用意に、
四人　及びませぬとは。
左馬　それがし只今櫓へ登り、城下を遠見致せし所、敵の軍勢追々に、押し寄せ來り候へど、更に殺氣の立たざるは、夕景ゆゑに戰爭は明朝なりと覺えたり。
光廉　何樣是は左もありなん、して先陣は誰なるか、確と見屆け來りしや。
左馬　それぞ先刻大津にて、此の光俊を討ちもらせし堀久太郎秀政が先手と相見え、花菱の旗押し立て當城の、大手間近く陣取つたり。
光廉　それぞ幸ひ日頃より、仁者と呼ばるゝ堀秀政、數の重器を渡せし上、女子の助命を賴みなば、承

引なさゞる事はあるまじ。然らば御身は敵陣へ、矢文を以て申送られよ。

左馬　はッ委細承知仕る。姫には疾く〳〵何れもへ、暇乞ひを致されよ。

〽勸めに姫は是非なく〳〵、御臺の前へ手をつかへ。

照子　左樣なれば母上樣、冥土の御供致すべきを、御家のお爲めに私は、敵に引かれて參りまする。

牧の　おゝそれでこそわらはの娘。今より敵の手へ渡れば、いかなる憂目に逢はうとも、ぢつと無念を押し怺え、命全うしませうぞ。

十次　そんなら妹、

照子　兄上樣、

光廉　さ、片時も早く退城いたせ。

〽是が名殘といひたさも、云はぬ親子やおとゞひが、禮儀正しき暇乞ひ、泣かぬ顏するもののふは泣くよりも又哀れにて、胸に涙の光俊も伴ふ姫に柵の附添ふを只力草、しをれてこそは立つて行く。跡に御臺は氣も亂れ、怺えし涙一時に、わつとばかりに泣き沈み、

牧の　家の爲めとは云ひながら、現在敵の其中へ、逆賊無道の名を取りし、親が我子を手放してやる悲しさはどの樣ぞ、ともに勸めて生害させ、冥土へ連れて行く兄よりも、はるかにまさりて不便

故、胸も張りさく憂き思ひ、死出の田長と聞く鳥の、八千八聲鳴盡し、血を吐き死すとも泣き足らねど、ぢつと怺える其のつらさ、生きた心地はせぬわいなゝ

〽歎きの内に十次郎、衣服改め小四方を、携へ出でゝ座に直り、

十次　こは母上とも思へぬお歎き、父上主君をお討ちありしは、武門の意氣地是非もなし、斯くなり果つるも皆天命、此期に及び左樣なる未練な事を仰せあるは、武士の本意ではござりませぬぞ。

光廉　おゝ遖れなる其の詞、流石は維任將軍の跡目に立つべき十次郎、成人なさば一方のよき大將にもなるべきに、かゝる勇氣のある者をいまだ十歳に滿たずして、落命させる殘念さ、泣く母よりも又一倍其悲しみは幾ばくか、悲歎に限りあらざれど、今十次郎が申せし如く、是皆主君を弑したる其の天罰の遁れ難く、妻子親族家來に迄、報い來るとは天なり命なり、悔悟なすとて返らぬ事ぢや。

康政　それと申すも信長公、忠心無二の御主君の諫めを用ひぬのみならず、

清政　わづか饗應仕損ぜしを、怒り給ひて領地を取上げ、

忠長　滿座の中にて蘭丸に、眉間を打たせ御折檻、

武清　まだ其上に秀吉の、幕下に附けとの御難題、

康政　重なる無念に止むを得ず、武門の意地と光秀公、
清政　都に於て御主君を、弑して武威を上げられしは、
忠長　悪逆無道と呼ばるゝとも、将軍の名は末世に残り、
武清　實に勇ましき此の討死、必ずお悔み、
四人　なされまするな。
牧の　血筋にあらぬ人々すら、斯く勇ましき覺悟なるに、面目もなき身のくり言、いで〳〵衣服を改め
　て、最期の支度取急がん。
白梅　いざ、お召しかへ、
六人　遊ばしませ。
　〽いざや最期と白帷子、腰元共が打ち寄りて、着せるも清し恩報じ、心静かに座につきて、
光廉　用意がよくば光廉が、逆縁ながら介錯なさん。
十次　そんなら母上、御一緒に。
牧の　はかなしと何を惜しまで朝露の、消えても玉の上にこそゆく。
光廉　おゝ、適れ秀詠。

四人　今際の辭世。

ト是にて十次郎は小四方を押頂き、肩衣を刎れ、九寸五分を取り腹へ突き立てる、是と一時に牧の方件の懐劍を咽喉へ突き立てる。腰元六人平舞臺へ下り、皆々短刀を拔き二人づゝ三方へ別れ、差違へて咽喉を貫き苦しむ、光廉この體を見て思入あつて、

光廉　あゝ、何れを見ても若木の花、あたら蕾を散らせしよなあ。

ト刀を構へる。十次郎は九寸五分を引廻す、牧の方刀を拔きがつくりとなる。跡皆々引張り宜しく、どんちやんの鳴物にて、此の道具廻る。

（坂本城外應接の場）━━本舞臺總て山上にある城外の心、諸所に岩臺の捨石を並べあり、此の模樣どんちやん、床の送りにて道具留る。

〽夏の日も早や暮れ行きて太陽の、光りに照す滿月も、冴えて射かけし光俊が、矢文の返事かう〳〵と、告ぐる初更は三井の鐘、敵に近江の坂本へ、寄手も塀の外構へ堀久太郎秀政。

ト花道より秀政、好みのかつら、甲、鉢卷、陣羽織、切緒の草鞋、附太刀にて陣扇を持ちて先に立ち跡より陣立の士卒四人附添ひ出來り、花道に留り、舞臺を見て、

秀政　誠や江州隨一の要害と呼ぶ坂本城、後ろに嶮岨の山を負ひ、前に琵琶湖の絶景を一目に望む三重の天守も高く白畫を、欺くばかりの宵月夜、はて堅固なる居城ぢやなあ。こりや汝等は我が合圖を致すまで、一先づ先きへ立歸れ。

四人　はツ。

〽士卒は是非なく引返す、秀政かしこを打見やり、

秀政　あれより矢文を射出したる、坂本城の出丸の櫓。どりや、近付いて申し入れん。

〽月をよすがに要害の、難所をたどり近寄れば、幕の内より左馬之助、待ちもうけてぞ立あらはれ。

左馬　夜目に確とは分らねど、それに見えしは寄手の主將、堀久太郎秀政殿か。

秀政　さ云ふは先刻大津にて、見參なせし敵將たる、左馬之助光俊殿。

左馬　扨は盟約違はずして、

秀政　矢文のおもて披見なし、

左馬　御承知ありて此所へ、

秀政　暮るゝを待つて入來致した。

左馬　それは千萬忝し。
秀政　して又密事のお賴みとは。
左馬　それへ參つて申したけれど、戰場の儀に失敬御免。
秀政　それにて演舌苦しからず、秀政篤と承らん。
〽邊り見廻し塀の下、石を暫時の假床几、光俊櫓へ進み出で、
左馬　扨堀氏を此處へ今宵お招ぎ申せしは、貴殿を見掛け折入つて、お賴み申す儀がござる。御承引下されうや。
秀政　そりやいかなるお賴みなるか、事の仔細は存ぜねども、不肖の手前をお見掛けあつて、お賴みとあれば此の秀政、身に適うたる儀でござらば。
左馬　すりや、御承引下さるとな。
秀政　まづ〱仰せ聞けられい。
〽信義の詞に光俊も、安堵の思ひ認めて贈る一書を取出し。
左馬　幸ひ月も冴え渡れば、それにて御披見下されい。
〽紐に結ひつけくりおろせば、秀政取つて押し開き、隈なく晴れし月代に、讀むも尊き重器

の數々。

秀政 一、不動國行の大刀、一字國俊の刀、藥研藤四郎吉光の脇差、奈良芝の肩衝、御前の釜、虚堂の墨跡、宋朝渡來無名の天目、徽宗皇帝鷹の一軸、千鳥の香爐、其外重器二十五品、右者光秀古物を好み年來祕藏の家の重器、秀吉殿へ贈る者也。」むゝ、すりやお賴みと言はるゝは、此の品々を羽柴殿へ。

左馬 いかにも、只今御披見ありし其の品々は、城主光秀風韻を好みし故、取集めたる重器にして、まつた御主君信長公より拜領なせし古代の名刀、何れも天下に稀なる寶、是迄祕藏致せしが、最早光秀武運に盡き、最期の上は坂本も、落城近きに候へば、かゝる珍器をいたづらに、火中の灰となす事のなげかはしく存ずる故、討死致す其前に、貴殿へお渡し申したし、承はれば秀吉殿には、茶事は至つて御好事にて、古物を愛し召さるゝ由、お讓り申せば此末に、何卒御祕藏下さるやう、御持參あつて其許より、よしなに御披露下されい。

秀政 はて、適れなる御心底、手前を是へお招ぎあつて、折入つてのお賴みとは、定めて明日降伏の御談じならんと思ひきや數の重器を灰燼となすを惜しみて敵將へ、贈る信義は比類なき、實に開明の士とや云はん、秀政ほとんと感服致した。

左馬　かさ高ながら櫓より、只今それへくりおろせば、直樣御持參下されい。

秀政　如何にも重器の品々を、秀政これにて請取らんが、とても物の事に今一種申受け度き物がござる。

左馬　むゝ、してお望みの其の品は。

秀政　外でもござらぬ、左馬之助光俊といふ天下の重器、此儘空しく失ふがいかにも惜しく存ずる故、千萬石の祿にかへ、秀吉公へ捧げたし、此儀御承知下されい。

〽勇士を惜しむ秀政の厚き情を打悅び、

左馬　こは忝なきその御芳志、不肖の手前をかく迄に御賞譽あつて秀吉殿へ、推擧なさんと望まるゝは此期に及び身の面目、本懷これに過ぎざれど、今それがしが降伏なし、秀吉殿へ參る時は、あれ見よ明智左馬之助は、重器を贈り敵に諂ひ、からき命を延はりしと、世の人口に掛るは必定、さある時には冥府なる光秀公もそれがしを、未練なやつと恨まれん、兎にも角にも當城を、墳墓と定め討死なし、黄泉の鬼となるより外他念これなき左馬之助、それゆゑ承引いたされぬ。

秀政　さゝ誠忠無類の其許故、定めて左樣思はれんが、それは條理を辨へざる、瓦解以前の名譽にして當今舊弊を廢し、普天の下を平均なす、時世に臨めば何故に、未練の御身を誹謗なさんや、降伏召されて城内に籠る數千の人命を、助くる時は世に尊き珍器を惜しみ召さるゝより、遙かにまさ

る報國の條理。さ、無益に寶を灰燼となすを、斯く迄惜しまるゝ其許なれば理を辨へ、曲けて降伏いたされよ。

左馬　近頃頑固の至りながら、首級にならねば敵陣へ、參らぬ所存に極めてござる。

秀政　むゝ。

〽更に變ぜぬ勇士の一徹、今は是非なく秀政も、默然として控ゆれば、光俊言葉を改めて、

左馬　いやなに秀政殿、物數ならぬそれがしをかく迄惜しみ下さるゝ、その御芳志も謝さずして、近頃あまへしお賴みながら、かゝる信ある其許をお見掛け申して今一つ、願ひ入れ度き儀がござる。

秀政　して此上のお賴みとは、如何なる儀にて候な。

左馬　別儀でござらぬ、女子一人何卒お助け下されぬか。

秀政　何と言はるゝ。

左馬　貴殿もかねて知らるゝ如く、武門の意地とは申しながら、光秀一個は三日にして滅亡なし、終には妻子親戚始め、譜代恩顧の家臣等迄、討死いたす期に及べり、是皆天の然らしむる罪ある故に是非なけれども、先祖累代相續せし、明智の血統の是れ限り、絕えなん事の殘念さ、せめて一人後世へ血筋の者を殘し度く、男子は所詮叶はねど、當年僅か七歲なる末女を一人秀吉殿へ、歎願

下され一命を、何卒お助け下されぬか、さある時には冥府なる光秀始め我々迄、末期に及び再生の御恩と心得潔く、討死なして光秀にも、冥府に於て物語らん、只それのみが今生の心掛りに候ゆゑ、仁者と見受け秀政殿へ頼み入れ度き助命の願ひ、何卒御承知下されい。

秀政　そりや早羽柴秀吉公も仁愛深き御方故、事の仔細を申しなば、假令逆徒の血筋たりとも、女子の儀故に御承知ならんが、此の秀政が愚慮にても、寶を以て頼まれしと、此後世上で流布されなば武門の身に取り恥づる所、殊更以て秀吉公、此度戰に及ばれしは、私ならぬ亡君たる信長公の弔ひ戰、それに何ぞや日頃より好める重器を敵方より、贈られたるを恩義に思ひ、主君の怨敵光秀の血筋を助命致せしと世の人口も計り難し。

左馬　すりやそれ故に此の一儀は。

秀政　達て血筋の女子一人、助命を歎願召さるゝなら、重器の品々贈らるゝを延引あつて然るべし。左すれば秀政、秀吉公へ伺ひの上、御返事いたさん。

〽難問ながら理の當然、何と答も光俊が、當惑なせし折柄に、（ト此時上手にて、）

光廉　あいやその返答は光廉が、それへ參つて仕つらん。

秀政　何と。

〽遙かあなたの城門より、立出る明智光廉が、血筋の姫を捕縛なし、乳人に引かせ立ち出づれば、光俊それと見ておどろき、

左馬 やゝ、光廉公には何故に、姫をいましめ給ひしぞ。

光廉 ほゝお、其の不審尤も乍ら、勇士を惜しむ秀政殿、血筋の助命に事寄せて、御身に降伏勸めらるれど、逆賊無道の名を取りし明智の一族何故に、をめ／＼存命致されんや、それ故明日討死と決定なせば妻子を初め、足手纏ひの腰元共殘らず生害致したり、只不便なは是なる女子、今年わづか七歳にて理非善惡も辨へざれば、是を一人御助命あつて明智が血筋二つには逆徒の名をも後年に、すゝぐ賢女と相成りなば、冥府に於て我々がその大慶は如何ばかり、寶を以て敵將へ賴まぬ證據は逆賊の血筋を捕縛いたしたる、乳人が手柄を差添へて秀政殿へお渡し申す、いざ／＼お引き下されい。

秀政 すりや、妻子には死を急ぎ、早生害を召されしとな。あたら名家をむざ／＼と滅亡さする殘念さに、理を非に曲げても降伏を勸めんものと存ぜしが、最期の上は是非もなし。血筋の女子とあるからは、此の秀政が身にかへても秀吉公へ歎願なし、乳母が捕縛の手柄にめで、助命ある樣計らはん。

左馬　それにて手前も一つの安堵、いざ〳〵重器をお渡し申さん。

〽幕引き絞れば白臺へ、並べ立てたる寶物、古刀の類、一と束ね下げ緒を以て結ひまとめ、幾筋となくまくの紐、しつかと結び繰り下せば、下に請取る秀政が、合圖の呼子吹きならせば士卒は出で丶手をつかへ。

兩人　はツ、何御用にござりまする。

秀政　是れなる二つの袋の物、縄付諸共兩人にて、我陣所迄運送致せ。

兩人　はツ。

秀政　隨分共に大切に、此の縄付をいたはりて、いやさ、大切なる袋物、あやまちなきやう心を附けよ。

兩人　畏つてござりまする。

照子　そんならぢい様、光俊殿。

柵　思へば是れが。

光廉　え丶、未練なるぞ。

柵　はあ丶。

兩人　いざ、お立ちなされい。

〽泣く〳〵陣所へ引かれ行く。

ト是れへ時の太鼓を冠せ、姫先きに立ち、柵縄を取り乍ら附添ひ、士卒二人せり立て乍ら花道へはひる。

○

御主君へ申上げます、陣所につなぎし大鹿毛が、手綱を喰ひ切り暴れ出し、支へる者を踏み散し

〽折しも俄に騒がしく、轡の音のかまびすしく、士卒一人馳せ來り。

此の城内を望みまして、あれ〳〵、あれへ參りまする。

光廉　すりや、大鹿毛が、此所へ。

左馬　手綱を喰ひ切り來るとな。

秀政　然らば是にて、くひ留めん。

〽陣扇とつて立ちふさがる、こなたを目掛け大鹿毛が、勢ひ込んで逸散に。

ト是へ鳴物をあしらひ、花道より飾りの付きし誂への馬走り出來る。秀政立ちふさがり、陣扇にてちよつと立廻りきつと留める。左馬之助此體を見て、

左馬　やあ、無益の落命させまじと、十王堂へ殘し置きしに、何故是へ參りしぞ。疾く〳〵陣所へ歸りをらぬか。

ト是にて馬は首をうなだれ、しな〳〵となる。光廉此の體を見て、

光廉　扨は年來光俊が、慈悲を施し遣ひし故、倶に討死いたしたく、此城外迄歸りしよな。

ト是にて馬はうなづき、悦ぶこなし、秀政是を見て、

秀政　畜類でさへ此の如く、恩義を思ひ諸共に討死なすを悦ぶ有樣、是にて萬事光俊殿の、日頃の御慈愛推察致す。

左馬　無益に落命致させるが、不便と存じ其許へ、お讓り申せし駿足なれど、斯く迄殉死を望む故、明朝彼れにまたがつて、倶に討死仕つらん。

光廉　それぞ佛果の如是畜生、發菩提心三世の因み。

秀政　然らば馬は此儘に、

左馬　お殘しあつて、お歸り下され。

光廉　左樣ござらば、秀政殿。

秀政　是れにてお別れ申すでござる。

〽互ひに目禮大鹿毛を、渡す仁者に受取る義者、さらば〳〵と立別れ陣所へこそは立歸る、

ト此内秀政件の馬を光廉に渡し、三人共目禮して、士卒一人附いて花道へはひる。

〽跡にしをるゝ光俊が、勇氣を共に引き立てんと、光廉櫓に打ち向ひ、

光廉　いかに、光俊、(ト是よりのりになり、) 明朝約せし戰爭に敵勢是へ押し寄せなば、手出しもなさで尋常に生害なして死する所存か、但し再三せめ倦かせ、防戰なせし其上にて、討死なすや如何に如何に。

〽いかに〳〵と問ひかくれば、光俊につこと打笑みて、

左馬　仰せにや及ぶべき、假令仁有る敵將とて、情は情敵は敵、

〽兼ねて堅固の要害に手勢僅かで籠るとも、死を極めたる防戰に、矢石を飛ばし攻飽かせ、又城内の狹間より、名ある勇士を見る時は、

〽矢頃に引付け光俊が、今宵照りそふ滿月に、弓矢の手並引絞り、ねらひ違はず馬上より、見事に射落し申さんと、勇み立ちてぞ見えにける。

ト此内左馬之助櫓の上にて、幕串を遣ひ宜しく納まる。

光廉　おゝ勇ましゝ、さもあるべし、然らば是より城内にて、名殘の杯巡らさん。

ト爰へ上手より、士卒四人出來り、

秀政　いで大腹毛を、

四人　城内へ。

ト是にて馬は勇み立ち、悦ぶこなし、左馬之助是を見下し、

左馬　はて、頼もしき、(ト光秉と顔見合せ、双方につこり笑ふを、木の頭。)名馬ぢやなあ。

ト皆々引張り宜しく。ヂヤン〳〵カケリにて、

ひやうし　幕

三幕目

山崎海道の場
八幡川原の場

(役名――齋藤内藏之助利一、齋藤伊豆守利光、百姓代助、馬士銀八、西成東作、百姓茂九作、馬士穴熊九郎藏、庄屋太次兵衞。利光の許嫁撫子、腰元柵、軍兵等。)

(山崎海道の場)――本舞臺向う松並木、在體の書割、上下植込みよき所に埒を結へし高札、山崎海道と記したる榜示杭、爰に西成東作、鎧下陣羽織大小にて、上手に床几にかゝり、軍兵二人附添ひ、下手に太次兵衞庄屋のこしらへ、百姓二人〇□手を突き控へ居る。この見得馬士唄の合方、かすめた

ろどんちやんにて幕明く。

東作　こりや、其方は當所の庄屋なるか。

太次　へい私は庄屋太次兵衞、何か御用があると仰せられましたゆゑ、當村の百姓どもを召連れましてござりまする。

東作　然らばよッく承はれ、此度武智日向守光秀謀逆によつて當月二日の夜、都本能寺へ押寄せ將軍春永公を討ち奉り、四海を握らん思ひ立ち言語に絶えたる逆賊ゆゑ、羽柴筑前守久吉公直さま中國より引揚げたまひ、この山崎にて戰爭ありしが瞬くうちに勝利となり、光秀散々に敗北して間道傳ひに落行くところ、小栗栖の藪蔭にて百姓中村長兵衞が竹槍を以て突留め、終に落命に及びしは主君を討ちたる則ち天罰、然るに武智が殘黨餘類落ち失せたる者少なからず、中にも左馬之助光俊はじめ齋藤内藏之助、溝尾庄兵衞其外音に聞えし兵士、皆戰場より行方知れず、若し見當りし者あらば早速搦めとつて差出せと、久吉公より身共が主人石田三成殿へ御沙汰によつて、村村在々へ觸れ渡す、其方共もめい〳〵に隨分共に拔かりなきやう、是れより落武者の詮議いたせ。

太次　へい〳〵委細承知いたしましてござりまする。假令どのやうな兵士でも戰に負けた弱身に附込み村中寄つて竹槍ずくめに、大勢かゝつて取押へ、差出しまするでござりまする。

○　私共は日頃から、猪狼さへ竹槍で、突留める腕前ゆゑ、

□　是れから直に人を集め、出口々々へ張番して、へい〳〵きつと詮議を、いたしまするでござりまする。

東作　如何にも、油断なきやう手配りいたせ、既に彼の長兵衛は敵將を討あたる働き天晴なる事とあつて、多分の金子をたまはつたり、其方共も彼れを見習ひ、手柄をなさば御上より御褒美を下さるぞ。

太次　それは〳〵有難いこと、さういふ事なら又一倍、骨を折るにも張合がござりまする。

○　怪しい奴が見えましたら、

□　有無をいはせず取押へ、

友次　繩附にして御陣所へ、差出しまするでござりまする。

東作　おゝ、主人石田三成殿へ早速注進仕つれ。

三人　畏りましてござりまする。

東作　然らば是れより、次の村へ申渡さん。

軍兵　はッ。（ト時の太鼓になり、東作に軍兵二人附いて上手へはひる。）

太次　さあ／＼／＼金儲けの口が出來たぞ、幕明き早々目出度い／＼。これ、こなた衆もひよつと手柄をして、御褒美に有り附いたら半分はわしが貰ひますぞ、それが庄屋のかすりでござる。

○　ようござります、きつと分口を、

兩人　進ぜますわいの。

太次　そんなら、承知でござるの。

兩人　承知でござります。

太次　いや承知とあれば有難い、上方筋には無理な洒落だが、承知の濱では鰯が取れる、大入鯛からお客が詰める、こんな目出たい事はない、是れからいつもの立場へいつて、祝ひに一杯遣りませうか。

兩人　そんならわしらも、附込みますぞ。

太次　いや、附込みとは延喜がよい。どれ、桝の隅からこぼれる程、飲みに行くからさあござれ。

トやはり馬士唄にて太次兵衛百姓附いて下手へはひる。右の唄にて花道より撫子、振袖姫のこしらへ草履がけ銀張りの杖をつき、跡より柵　腰元なり、甲斐々々しきこしらへ、小さき袱紗包みを斜に背負ひ撫子の市女笠を持ちて附添ひ、此の跡より九郎藏馬方のこしらへ、銀八同じく馬方にて、絲立な

着て、赤毛の道中馬を引出來り、花道にて、

九郎　これさ、姉さん、待ちなせい〳〵。

銀八　さつきから馬に乘つてくんなせえと、あれ程言ふのにどうしたもんだな。（ト撫子　柵　立留り、）

柵　いえ〳〵私共は、さのみ草臥もいたしませぬゆゑ、決してそれには及びませぬわいな。

九郎　これさ、さう一克に言はねえもんだ、今日はおら達も暇だから、先の宿まで合乘りに安く乘せてやらうといふのだ。

銀八　女の足に無暗に歩いて、底豆でも踏み出すよりやあ、乘つて行つた方が割ぢやあねえか。

柵　いえ〳〵、いくらお勸めなされましても、私共は歩く方が勝手ゆゑ、お斷り申しますわいな。

撫子　斯ういふうちも心が急く、柵來やいなう。

柵　さ、お出でなされませ。（ト撫子、柵舞臺へ來る。）

九郎　おい〳〵姉さん、どうしたもんだ〳〵。

銀八　これさ、まあ、待ちなせえといふに。

ト言ひながら兩人馬を引き舞臺へ來り、九郎藏上へ廻り、銀八と兩方より女形を挾み、

九郎　これさおめえ方、そんなに情の強いことを言ふもんぢやあねえ、旅人を乘せて駄賃を貰はにやあ

おら達ばかりか此馬まで、腮を釣さにやあならねえわな。（ト銀八榜示杭へ馬を繋ぎ）

銀八　大きな野郎が二人して、口を酸くして勸めるのに、いやだ〳〵と斷つちやあ、あんまり愛敬があるめえぢやあねえか。（ト此うち女形兩人氣味の惡き思入）

柵　成程さつきから段々と、御親切におつしやつて下さりまするは、有難うござりますが、兎かくお斷り申しまするも馬駕籠が嫌ひゆゑ、まだ其上に、おゝそれ〳〵、私共はつい其處まで參りますもの、もう僅の道ゆゑ、歩いて行くのが勝手ぢやと、申すのでござりますわいな。

九郎　はあ、それぢやあおめえ方は、旅の者ぢやあねえのかえ。

柵　つい、この近所の者でござりまする。

銀八　その近所から來たものが、山崎まではどれ程あると、何で道を聞きなすつた。

柵　え。

九郎　どうやら怪しい足弱連れと、跡の立場で目串を附けたが、大方こなた衆二人は、

銀八　武智の身寄りで、

兩人　あらうがな。

柵　あゝもし、めつさうな、どういたして私共は、左樣な者ではござりませぬ、必ずめつたな事をお

つしやつて下さりまするな。（ト柵、撫子をかばひ思入、撫子ふるえて居る。）

九郎　いや／＼いくら隠しても、道々二人が話しの様子、聞いちやあのがさぬ地獄耳、牛頭馬頭ならぬおら達で、亡者の素性を淨玻璃の鏡へ掛けて見たゆゑに、

銀八　畜生道の縄手から馬をすくめて附けて來たも、閻魔の廳へ引込んで、褒美の金をせしめる目算。

九郎　否でも應でも、足手を縛つて乘せて行くから、

兩人　覺悟しなせえ。（ト此時下手より以前の太次兵衛出て窺ひゐる、柵撫子を圍ひ、）

柵　いえ／＼、どのやうに仰しやつても、私共は其樣な怪しい者ではござりませぬ、どうぞお疑ひをお晴らしなされて、お許しなされて下さりませ。

撫子　もし、お慈悲お情でござりますわいなあ。

銀八　えゝ、言譯してももう無駄だ、形風俗を見たばかりで、素性は疾うに知れて居らあ。

九郎　武智の身寄りといふことを、きり／＼明して往生しろ。

柵　それでも覺えのない事ゆゑ、

撫子　どうぞ許して、

兩人　下さりませいなあ。（ト泣く。）

九郎　えゝ、ぐづ〳〵と面倒だ、それ、引ッかつけ。

銀八　合點だ。

ト銀八九郎藏立掛り、撫子柵を引立てる、此時太次兵衛つか〳〵と出てこれを留め、女形を後へ圍ひ、

太次　あゝこれ〳〵、貴樣達は女をとらへ何とさつしやる。（ト太次兵衛を見て、）

九郎　おゝこなたは庄屋樣、こいつら二人は武智方に、由縁のある女だから、連れて行つて訴人するのだ。

銀八　留めずと、そこをおどきなせえ。

太次　いや〳〵〳〵、めつたな事を言はつしやるな、此の女達はわしが身寄り、身寄りぢや〳〵、しかも此の太次兵衛が家を尋ねて、わざ〳〵來たのでござるわいの。

九郎　なに、此の女がお前さんの身寄りだえ。

太次　身寄りとも〳〵、二人共わしが伯母御、ではない、おゝそれ〳〵、姪だ〳〵、その明白な姪を捉へて、眼先の見えぬ事をいふのは、こりやあ酒でもまるつて酩酊でもしてはござらぬか、扨々迷惑千萬でござるわいの。

銀八　はて、それぢやあ武智方の身内と見たのは、おれ達の目違ひかな。
太次　目違ひとも／＼そんな怪しい者ではないから、料簡違ひをさつしやるな。
九郎　そいつァ飛んだ無駄骨を折つたが、これ蝮、たとひ怪しくねえにもしろ、折角これまでこじつけて、今更素手ぢやあ引込めねえなあ。
銀八　さうだとも／＼、態々堅田の佐助から、馬まで借りて引いて來て、是れぎりにしちやあ歸られねえ。もし庄屋さん、身寄りとあるなら女二人は、器用にこなたへ預けるから、一杯飲ましておくんなせえ。
太次　成程さう聞けば尤もぢや、わしも所の束ねをする庄屋の太次兵衛。酒手ぐらゐは否とは言はぬが生憎爰に持合せが。（ト　柵　これを聞き思入あつて、）
柵　あゝもし／＼、せめてこれをあなた方へ、お上げなされて下さりませ。
　　ト　柵　懐より十兩ほどの金を紙に包み出す、太次兵衛取つて改め、
太次　はて、是れではちつと相場が過ぎる。いやさ、直すなほに納まつた此の場の祝ひに、それ、酒手ぢや。
　　ト出す、九郎藏受取つて改め、

九郎　これ蝮、十兩だが、これで負けてやらうかな。

銀八　さうよ、二人を宿場へばらしても、二本足らずの代物を、十兩では大負けだが、庄屋様の挨拶だから手を打つてしまはうかえ。

九郎　成程手めえの言ふ通り、安いものだが仕方がねえ。

太次　はて、元の切れる商ひではなし、そこらで負けても損は行くまい。

九郎　ちげえねえの眞中だ。（ト九郎藏叺煙草入へ金を入れる。）

銀八　大なり小なりかねになつたら、是れから立場で一杯遣らうか。

九郎　さうだ〳〵、とかく飲まにやあ夜も日も明けねえ。

銀八　そんなら穴熊、出掛けようか。（ト馬を引き、）どう畜生め。

九郎　もし庄屋さん、

銀八　とんだ御厄介になりました。

ト やはり馬士唄にて、九郎藏、銀八、馬を引き下手へはひる。撫子柵前へ出て、

柵　ほんにまあ何處のお方か存じませぬが、よい所へお出で下さりまして、危い難儀を事故なく、

撫子　助かりましたは、あなたのお蔭、

柵　何とお禮を申さうやら。(ト兩人手を突き禮をいふ。)

太次　はて其禮は言はつしやるな、明智の由緣を無理やりに、わしが姪ぢやと言ひくろめて、こなた衆二人を助けたのは、深い樣子のあることぢや。

柵　そんならあなたも、

兩人　二人の素性を、

太次　知つて居る段ではない、しかも齋藤内藏之助の息子の伊豆が許嫁と、身許を洗つて知つて居るが、そんな詮議をするよりも、その美しい器量が見込み、桃と櫻を一對に、これから眺めて樂しむ心。

兩人　えゝ。

太次　今の難儀を此の庄屋が、救うて遣つた恩返しに、おゝとさへ言や二人とも、今日からわしが女房妾、これ、色よい返事を聞かして下され。(ト太次兵衞いやらしきこなし、兩人驚き、)

撫子　そんなら今の難儀をば、お助けなされて下されしは、

柵　たゞ御親切と思ひの外。

太次　おゝ、こなた衆の器量が目當、實の所は戀ゆゑぢや。

柵　さう聞く上は、姫君さま、此の場を早く、

撫子　柵來やいの。（ト撫子　柵　逃げようとするを、

太次　どつこい、逃してなるものか。

ト驛路を早めて、太次兵衞手を廣げ、兩人を追廻す。撫子　柵　上下へ逃げ廻る。此の時上手より一、二、三、四、五、六の百姓六人、竹槍を持つて出來り、

一　おゝ庄屋さま、爰にござつたか。

二　跡の藪際で、落武者を見附けた〳〵。

太次　なに、落人を見附けたと言はつしやるか。

三　まだ年若な奴なれど、見たところから手利きの樣子。

四　何でも明智方に違ひない。

皆々　さあ、來て下され〳〵。（トわや〳〵いふ。）

太次　いや〳〵そんな事には構つて居られぬ、わしは爰に用がござる。

一　何の用があるか知らぬが、お觸れのあつた落人を、見のがしては後日の大事ぢや。

皆々　さあ〳〵〳〵、早くござれ〳〵。

ト皆々太次兵衞を無理に引張り、上手へ連れてはひる。跡撫子、柵思入あつて合方になり、

撫子　これ柵。

柵　姫君さま、不思議なことで差當る、邪魔はやう／＼拂ひましたが、然し今の樣子では詮議嚴しいこの街道、必ず油斷はなりませぬ。

撫子　殊にまだ年若な明智方の落武者と、今の詞を聞くに附け、心許ない利光さま。

柵　どうぞ御無事で御目にかゝり、いづれ何處の果てまでも、共に落延びたまふやう、此の上願ふは神々樣。

撫子　その御利益を心に頼み、思ふお方のお行方の、

柵　又もや障りのなきうちに、

撫子　そんなら柵、

柵　さ、お尋ね申しませうわいなあ。

ト合方になり、撫子先に柵附いて下手へはひる、跡ドンチヤンバタ／＼になり、上手より以前の百姓六人竹槍を持ち、太次兵衞と共々逃げて出て來る、跡より利光鎧なり、よろしく亂れしこしらへ、拔身にて追ひ散らし出來り、ちよつと切拂つて留る、太次兵衞詰寄り、

太次　やあ、おのれは正しく明智の餘類、斯う取卷いては最早叶はぬ、さあ尋常に繩にかゝれ。

利光　小癪なる其の一言、如何にも汝が推量の通り、我こそ明智が股肱と呼ばれし齋藤内藏之助が一子伊豆守利光、賤しき土民の分際にて手向ひなさば皆殺しだぞ。

太次　扨こそ落人、討つて捕れ。

皆々　合點だ。

トドン／＼になり、皆々竹槍にて突いて掛る、利光これを切拂ひちよつと立廻つて、トヾ百姓皆々花道へ逃げてはひる。爰へ太次兵衞また突いて掛る、利光これを相手にちよつと立廻つて、太次兵衞を一刀に切る、是れにて太次兵衞ばつたり倒れる、利光きつと見得、ドン／＼にて此の道具廻る。

（八幡河原の場）――本舞臺上下生ひ茂りし丸竹の藪、眞中やはり丸竹をまばらにあしらひ、河原と見える手摺の張物、此後黒幕、後に切つて落し、竹の間より遠見を見せる仕組、上下舞臺端へ流れのある土手板を出し、よき所に腰掛の岩臺を置き、總て八幡河原藪際の體、入相の鐘、流れの水音にて道具留る。と誂へ凄味のある合方蛙の聲になり、花道より利一好みの鎧なり、草摺なり、糸ちぎれしこしらへ、馬柄杓を差し、誂へ栗毛の馬の、馬具に血など附きしを右の手にて口を取り、片手に兜を持

ち出來り、花道に留り、舞臺の方を見てこなし、

利一　爰は慥に八幡の間道、此邊までも追手の兵士探索なすは必定ながら、此の栗毛も疲れたれば、馬上に道を急ぐも不便。おゝ向うに流れのある樣子、あれにて水を飼つてくれん。さゝ參れ〳〵。

ト利一馬を引き、舞臺へ來り、兜を岩臺へ置き、馬柄杓を拔取り、水の音になり、件の流れにて馬の口を洗ふことあつて、よろしく下手へ馬を立てさせ、岩臺へ腰を掛け樣子を見る、馬は疲れし思入にて首で息をして居る。利一思入あつて合方になり、

利一　こりや栗毛よ、終日の戰ひに嘸かし身體疲れつらん、汝畜類に生を得て如何なる因みある故にや、此の内藏之助が乘馬となり、屢々戰場を驅け走り我が軍功を助けしゆゑ、世に並びなき駿足と不便を加へ飼ひ置きしが、其の主從の契りも薄く、今ぞ別れの時來りし、仔細といふは今日の合戰、眞柴が鋒先鋭くして味方敗北に及びしより、主君はやみ〳〵御生害、我も討死なすべきを所存あつて生き延はり、此所まで落延びしが、これより浮浪の身となりて他鄕にさまよふ利一が、共に汝を召連れて飼ひ置くことも心に任せず、不便には存ずれども、只今暇を遣はす程に、此年月の其方が我に仕へし功も、今日までと思ひあきらめ、何れへなりとも身を寄せて心ある者に養はれ、力を盡して奉公いたせ。

ト利一思入あつて言ひ聞かせる、馬は首をうなだれ、別れを惜しむ思入、利一立上り、口を取つて、

下手の方へ遣りながら、

さゝ参らぬか、行きをらぬか、暇取るは何事ぞ、いやさ、此の場を立去らぬか。

ト下へ突きやれども馬は首を振つて刎ね廻り、いやがるこなし、利一これを見て思入あつて、

むゝ、扨て畜類心なしといへども、今某の詞通じて、再び逢はぬ別れを悟り悲歎の情を起せしか。さぞあらん／＼、汝牧を放れてより此の利一が厩に繋ぎ、やゝ乗りなれて年月の艱苦を共にせしものを、運命拙き我ゆゑに養ふことも叶ひがたく、計らず爰に人間の愛別離苦にさも似たる我と汝が一世の名残り、別れに及び左程まで主を慕うて其悲しみ、生あるものゝ習ひとて、はて、過分なる志し、忘れは置かぬ忝けないぞよ。

ト利一思はず落涙のこなし、此内馬もよろしく思入、利一トゞ氣を替へて、

あゝ我ながら畜類に、詞を盡すは愚癡の至り、こやつ此儘に捨て置いて、我立去らば其跡にて、何れへか参るべし、よしなき事に暇取りて、時刻うつさば夜も更けなん。(ト空を見上げて、)月はあれども雲に覆はれ、道小暗きは便りよし、堅田の浦邊へ赴き、乳母を便りて身を隠さん。

ト利一兜を持ちて立上り、上手へ行かうとする、此時ドン／＼ばた／＼になり、上手より以前の利光

走り出て、利一へ突當り、双方飛びのき、身構へなし、朧月に顔を透し見て、

利光　や、親人なるか。

利一　おゝ忰、亂軍に隔てられ生死の程も知らざりしが、未だ存命にて居つたるか。（ト利光下に居て、）

利光　されば五位川の攻口にて、神戸信孝の陣へ向ひ、必死の戰ひなす折柄、深入りなして親人の御行方を失ひ、心ならねば取つて返し、群がる敵を切拔けて御跡慕ひ參る道、山崎の間道にて眞柴の指圖を受けたる百姓、落人詮議と人數を集め、拙者を見咎め取卷くゆゑ、是非に及ばず踏み止まり暫時の間に追つ散らし、猶親人の御身の上心にかゝり候ゆゑ、御在所いづくと尋ねしが、計らず是れにて御目にかゝり、先づは御別條なき體を拜し、大慶至極にござりまする。

利一　そちも無事にて滿足々々、さりながら敵さほどまで我々を探索なすと聞く上は、猶豫なすべき所にあらず、我は是れより堅田の浦なる、芝崎が方に身を隱せば、其方も是れよりすぐに彼の堺なる鐵砲鍛冶次郎兵衛といへるものは、かね〴〵義心ある者ゆゑ、彼れを賴んで世を忍び、必ず時節を相待ち居れ。

利光　あいや、仰せには候へども、それがしこれまで參りしは、父の御先途見屆けて命のお暇願はん爲め、最早御目にかゝりし上は、思ひ置くこと更になし、直樣戰場へ取つて返し、眞柴が陣所へ切

入つて、花々しく討死なし、名を後代に止め申さん。（ト息込むを、）

光一　扨は生きての計策を思はず、只一命を輕んじて、其方は討死なすとか。

利三　如何にも存命思ひも寄らず、親人深き御思慮あつて此の場を落延びたまふ上は、せめてそれがし戰場に屍を曝らして御主君の、冥土の御供仕らん。それ。（ト行きかけるを、）

利一　やれ待て倅、血迷ひしか、只今死するは不覺なるぞ。

利光　でも此儘に生きながらへ、汚名を受くるは殘念至極。

利一　さゝ、それが卽ち匹夫の勇、一時にはやるは粗相のいたり。

利光　それぢやと申して。

利一　はて、待てと申さばまあ〳〵待ちやれ。（ト是れにて利光つか〳〵と行き、利一の側へどつかと座し、）

利光　合點行かざる其お詞、今日の初陣に卑怯未練の振舞なさば、武門の恥辱と仰せありし、其の御教訓に引替へて。

利一　今討死を止むるは、此の内藏之助が意中の機密、倅よツく承はれ。（ト誂への合方になり、）そも今日の合戰は敵に利あつて味方に益なく、勝利の程も覺束なしと竊に未然を察せしゆゑ、主君へ對し樣々と諫言を加へしかどお聞き入れなく御出陣、果して味方敗北なしさしも維任將軍と勅許を

受けし御身を以て、終に土民の手に掛り果敢なく落命なしたまふ、實に是非もなき御運の末はこれぞ眞柴が天下を統べ武運を開く基にして、彼れ此度の武功に誇りやがて四海を掌握せん事鏡にかけて見る如し、我が心外なる一念の五臟六腑に凝りかたまり、今惜しからぬ一命も世に久吉あらん限り、生きて恨みを晴らさんと竊に心を定めたり、されば汝もまツその如く軍門に死する命を生きての忠義に繫ぎ留め、父が大事を果さずして敵の爲に討たれなば、汝再び計議を囘らし主君の仇たる眞柴を討つて會稽の恥辱を雪ぎ、其時一命捨つるこそ武士の本意と言ひつべし。さるによつて一旦の死を止むるは、爰の事、必ず粗忽の振舞いたすな。

ト思入あつていふ、利光も思入あつて、

利光　はゝツ、段々との其のお詞、御教訓のほど身にこたへ感じ入つたる思召し、實に一旦の恥辱を忍び後日の大事を遂げんこと、則ち勇士の本意なり、仰せに隨ひこれより直に、泉州堺へ身を隱し竊に時節を相待ち申さん。

利一　それ聞いて父も安堵、然し是れより住所を替へ、互ひに浮浪の身となれば、はや對面も今日限り事成就なすそれまでは、姓名隱し身を愼み、必ず敵に悟られな。

利光　遂一承知仕る、さりながら拙者は扨置き大切なる親人の御身の上、堅田まで御越しあるに道の

程も氣遣はし。(ト利光以前の馬に目を附け、)おゝ幸ひ爰に御祕藏の栗毛、これに召されて片時も早く。

利一 いゝや栗毛は疲れたれば、最前これにて暇やらんと、言ひ聞かすれども立ち去らず、其方道まで此奴を引き、途中に於て追ッ放し、長の暇を遣はしくりやれ。

利光 心得ましてござりまする。(ト時時出しぬけにドンチャン激しく、兩人聞耳立て、)

利一 あの物音は、眞柴の追手。

利光 落武者詮議の手配りならん。(ト利一心にうなづき、)

利一 こりや悴、巽に敵の手配りあれば、乾を廻つて疾く〳〵參れ。

利光 心得ました。(ト馬の口を取る。)

利一 さゝ、片時も早く。

利光 お別れ申すでござりまする。(ト利光馬を引き花道へ行くを、)

利一 こりや、待て〳〵。

利光 はッ。(ト控へる。)

利一 もしも追手に出逢ひなば、飛道具に心をつけい。

利光　心得ましてござりまする。
利一　さゝ、行け〳〵。(ト利光、利一の顔を見詰め、)
利光　然らば親人、御機嫌よろしう。
利一　おゝ、そちも堅固で、時節を待ちやれ。
利光　あゝ、これが一世の、(トほろりとなすを、)
利一　えゝ、未練ぢやわえ。(トきつと言ふ。)
利光　はツ。

ト氣を替へ、馬の口を取直す。是れにてドンチヤンになり、利光よろしく、馬を引いて逸散に花道へはひろ。利一跡を見送り、

利一　忰を落せば氣遣ひなし、我も是れより近江路へ落延びんとは思へども、今朝よりの苦戰の疲れ、暫くこれにて休息なさん。

ト捨石へ腰をかけ休み居る、馬士唄の合方になり、花道より松藏やつしなり、三尺帶、脚絆、草鞋、菅笠、蓙を肩へ引ッかけ、小荷駄の馬を引き出來り、花道へ留り、

松藏　暮れぬうちに歸らうと急いで來たが爰かしこと、山崎からの落人を詮議の爲の固めで暇取り、い

つの間にか日が暮れたが、うか〳〵するうちもう後夜過ぎ、夜の更けぬうち少しも早く、どうか家へ歸りたいものだ。（ト行きかけ草鞋の紐切れし思入あつて、）今しがたはき替へて、間のない草鞋がどうして切れたか。（ト心に掛る思入あつて、）はき替へたいにも爰らには、草鞋を賣る家はなし仕方がない、三軒家の立場まで跣足で行かう。はい〳〵〳〵。

ト右の合方にて馬を引き舞臺へ來る、利一は身の疲れに是れに乘つて行かうといふ思入あて、ずつと立つて立ち塞がる、松藏びつくりして、顫へ〳〵笠をうつ向け、利一を除けて上手へ行き掛けるを、思入あつて松藏の襟上を取る、これにて蓙の紐を解き、脱ぎ捨てゝ逃げに掛るを、後から拔打ちに切下げる、松藏はツといつて體仕掛にて二つに割れ、ばつたり倒れ、息絶える、利一これを見て思入あつて、

利一　堅田の浦へ落行くに、身體疲れ如何せんと思ふ折柄、小荷駄馬の目にかゝりしが馬士が不運、一命斷ちしは不便ながら、戰場の習ひ許してくりやれ。

ト不便なといふ思入あつて本釣鐘を打ちこむ、利一これにてきつとなる、知らせに附き後の黒幕切つて落す。竹の間より淀川堤鳥羽の戀塚あたりを見たる風景よろしき遠見になり、灯入りの月をおろし是れと一時に誂への草笛入りの合方になり、利一思入あつて靜に鎧をぬぎ捨て、後の藪の中へ隱し、

件の莚を取つて鐙下大小の上へこれを引つ掛け、よろしく馬士と見せる心にて、馬の口綱を取り、月を見上げ思入あつて、

雨催ひにて雲深く、今までそれと見えざりしが、いつか夜風に谷晴れて、清光たる玉兎の影、實にや東坡が赤壁の賦に月明らかに星稀に烏鵲南に飛ぶと言ひし、鳥の行方にあらずして、夏まだ早き雁金の堅田へ落る身の果てに、眺め淋しき絶景ぢやなあ。

ト利一悠々と月を眺めながら、上手の方へ行きかゝる。此の時下手より幕明の銀八窺ひ出で後から、

銀八　落人見附けた。

ト組附くを振拂ひ、ちよつと立上つてどんと當てる。銀八うんと脇腹を抱へ、たぢ〳〵となる、利一につたりと笑みを含み件の馬へ飛び乘る。これにて銀八見事にかへるを木の頭。此時後の藪より以前の九郎藏半身出し窺ふ、利一は馬士の思入にて上手へ行きかける。此の模樣よろしく、馬士唄、驛路の音にて、

ひやうし　幕

ト時の鐘、水の音にてつなぎ、道具出來次第直に引返す。

三幕目返し

堅田里茅屋の場
堅田浦野陣の場

〔役名＝齋藤内藏之助利一、石田佐吉三成、堀尾茂助重春、西成東作、百姓代助、馬士九郎藏、庄屋太次兵衞、百姓茂九作、石田の軍兵大勢。代助母おさが事芝崎等。〕

（堅田浦世話場の場）＝本舞臺四間通し中足の二重、藁葺の本屋根竹簀の縁側附き、向う鼠壁、眞中暖簾口、上手の褄ばすに取附け、此所一面に竹格子の窓、この窓より向うに近江の湖を見たる張物、二重下手の圍爐裏へ罐子を掛け、いつもの所簀戸の門口、下手に松の立木、この後蘆垣にて見切り、これより裏手へ廻ることあり、總て堅田の浦世話場の道具、二重に行燈をともし、此前に芝崎事おさが木綿やつし老婆のこしらへにて網をすいて居る。下手に茂九作の百姓、象股引、尻端折り、竹槍を持ち、緣側に腰を掛け居る。此の模樣濱唄にて道具留る。

茂九　これ〳〵婆さまや、代助どのは、内にござるかの。

芝崎　いえ〳〵忰はちとのがれぬ用事があつて、今朝から遠くまで行きましたが、まだ戻りませぬわいなう。

茂九　そんなら今にも歸つたら、どうぞ庄屋どのゝ所まで寄越して下され。

芝崎　はい〳〵、戻つたら直に上るでござりませう。したが、さつきにから五作どのや太郎七どのも、こちの代助に逢ひ度いと何ぢややらけたゝましう呼びにござつた樣子といひ、こなたは又氣味の悪い竹槍など持つてござるのは、いつたい今夜は何ぞ變つた事でもござりますかいな。

茂九　そんならこなたはまだ話しを聞かつしやらぬか、今日山崎で明智方と久吉さまの戰があつて、しかも天下分目の戰ひぢやといふ話しぢやが、僅なうちに片が附いて、光秀どのが負けたとやら、そこで明智方の落武者が浦々在々へ逃げたによつて、若し取押へて出した者には御褒美を下さると、爰らまでも羽柴さまから其のお觸れが廻つたゆゑ、庄屋どの始めわしらまで、船場へ固めに出るのぢやが、知つての通り此の土地では漁師と百姓の二人前で、兎かく渡世が忙がしく、人足に出る者が少ないぢや、それぢやによつて氣の毒ながら、こちの代助どのに出て貰はうと、そこで度々村の者が呼びに來るのでござるわいの。（ト此うち芝崎思入あつて）

芝崎　成程山崎に戰のあつたといふ事は、晝間ちらりと聞きましたが、そんならいよ〳〵久吉さまがお勝ちなされて、明智方は負けたのでござりますかいな。

茂九　負けたとも〳〵、しかも大將光秀は長兵衛とかいふ百姓に殺されたといふ話しだが、根が御主人

を討つた逆賊、僅かな內に滅びたのは、こりやあみんな天道樣の罰が當つたのでござるわいの。

芝崎　ほんにさうでござりませう。然し其樣な道に背いた明智どのに使はれて、共々戰の場所へ出て御難儀なさる御家來の衆は、お氣の毒なものでござりますなあ。

茂九　さうぢや／＼惡い主人に使はれたゆゑ、落人になつてまで詮議されるといふものぢや、中にも齋藤內藏之助といふ人は、音に聞えた強者ゆゑ、取り逃がしてはならぬとあつて、これ見さつしやれ、俄に羽柴さまの御陣中で、此樣な畫姿が出來て、今村々へ渡りましたわいの。

ト茂九作懷より畫姿を出して見せる、これに鎧を着たる內藏之助の畫姿畫いてあること。

芝崎　なに、それが內藏之助殿の畫姿ぢやと言はつしやりますか、どれ／＼ちよつと見せて下さりませ。（ト芝崎手に取り見て思入あつて、）成程、これでは嚴しい御詮議、斯ういふものを見るにつけ、お案じ申すは旦那樣。

茂九　や。

芝崎　いやなに、段々とのこなたの話し、よく悴にも言ひ聞かせ、村の固めに出しますわいの。

茂九　お袋さへ得心なら、息子どのに否やはあるまい、然しひよつと此話しを嘘ぢやと思ふと惡いによつて、歸つたら其の畫姿を、こなたよく見せて下され。

芝崎　はい〳〵、承知いたしました。然しこんなものをわしが家へ置いても、大事ござりませぬかいの。

茂九　よいとも〳〵、こなたに預けておきませう。

芝崎　そんなら、ちつとのうち、わしに貸して下さりませ、大切にして置きますぞや。

ト　おさが網すき道具の箱へ畫姿をしまふ。

茂九　それはさうと、最前からの長話しで暇取つてゐる其うちに、若し落人がそこらへ見えて、人に手柄をされては詰らぬ。どれ、是れから船場へ行つて、みんなと一緒に固めをしませう。（ト立上る）

芝崎　そんなら、もう行かつしやりますか。

茂九　あい、早く行つて張番しませう。（ト茂九作門口を出て、）これ婆さまや、そんならきつと代助どのを寄越して下されや。

芝崎　はい、戻れば直に上げますわいの。

茂九　そんなら、頼みましたぞや。

ト　やはり濱唄にて、茂九作竹槍を持ち、下手へはひる。跡芝崎思入あつて、

芝崎　戰の様子が知れぬゆゑ、晝のうちから代助を山崎まで遣つたれど、今の話しに内藏之助を召捕つ

て出せといふ諸所へお觸とあるからは、そんならやつぱり旦那樣には御無事でおいでなさるのか、くはしい譯が聞きたうても代助の歸りの遲さ、然し今宵ももう初夜過ぎ、やがて戻つて來やるであろ。どりや蚊遣りの焚火で澁茶なと、沸しておいて遣りませうか。

ト これより床の淨瑠璃になり、

〽案じる胸に突きいだす鐘も哀れな火ともし頃、火打取出し佛前へ灯そなへて越し方を思ふ折柄立歸る、悴も同じ物思ひ、

ト 文句の通りよろしくあつて、花道より百姓代助出來り、花道へ留り思入あつて、

代助 晝の暑さに堪え兼ねしも、丁度日暮に雨氣づき、どこか一降りかゝつたか、汗を吹去る涼しい風。

ト あたりへこなし。舞臺の芝崎はこなたへ來り。

芝崎 俄に變る雲立に、田畑の人も家に歸り、軒端の螢夏蟲の外に音なふものもなく、

代助 便り知れねば山崎まで、戰の樣子を聞きに行つたが、野邊の桔梗は盛りなれど、明智方にはちりぢりばらばら。

芝崎 風に折戸の鳴る音も、悴が歸り來たかと思ひ、幾度となくだまされしが、

代助 まことの事を母人へお話し申さば忽ちに、袖を涙で雨やさめ、

芝崎　お育て申せし利一さま、いづれへお落ちなされしか、但しは討死なされましたか、

代助　何と言つたらよからうか、内へ歸るも物思ひ、

芝崎　生死のほどをお案じ申せば、

代助　苦勞のたえぬ、

兩人　ことぢやなあ。

〽風にさからふ村雨のとぎれ〳〵もまとまりて、西へ晴れ行く雨の足。

ト兩人心々のこなしよろしくあつて、代助門口へ來り、

代助　母者人、今歸りました。

芝崎　おゝ代助歸りやつたか、待ち兼ねてゐたわいの。

代助　いや、待たるゝより待つ身のたとへ、嘸お待ち兼ねでござりましたらう。

芝崎　さあ〳〵、早う足を洗つたがよいぞ。（トすゝぎを汲んでやる。）

代助　あんまりの暑さに、今しがた流れで足を洗つて來ました。

芝崎　そんなら拭うておいたがよい。

代助　然し、折角汲んで下すつたものを。

芝崎　何の遠慮に及ぶものか、嘸まあ草臥れたことであらう。

代助　なに、あれしきの道ぐらゐ、決して草臥れはいたしませぬが、久しく降らぬ草いきれ、暑さの強いに弱りました。

芝崎　内にゐてさへ昨日今日は、凌ぎ兼ねる強い暑さ、まことに戰のあつた後なれば、もしや怪我でもしはせぬかと、大抵案じたことではない。

代助　侍らしう見えましたら、落人などゝ見違へられ、怪我でもしまいものでもないが、眞から底から百姓ゆゑ怪しむ者もござりませぬ。

芝崎　案じた悴が無事で歸り、こんな嬉しいことはない。

〽ほた〳〵悦ぶ母親の顔をまもりて代助も、その悦びに引替へて今にお歎きなされうと吐息をついてうつむけば、

代助　それはさうと、戰の話、山崎へ廻つて聞いて來たら、詳しう話しを聞かしやいの。

芝崎　こゝやかしこで百姓の、噂を聞いて來ましたれば、唯今お話し申しまする。

芝崎　最前から村の衆がこゝへ來ての話では、羽柴方に山崎で明智方が負けたといふが、いよ〳〵それに相違はないか。

代助　はい、それに違ひはござりませぬ。

芝崎　おゝ、違ひはないとあるからは、光秀さまには龜山の御本城へお出でありしか。

代助　いえ、左樣ではござりませぬ。

芝崎　それでは安土か佐和山か、何れへお出でなされしぞ。

〽言ふに代助是非なくも、

代助　お話し申すも涙の種、光秀樣には主從六人、間道傳ひ夜道をかけ、落つる途中にこゝかしこ、百姓共が屯なし、褒美に目がくれ落人を待つとも知らず小栗栖の、高藪際を通りしに、誰とも知らず藪陰より、ぐつと突出す竹槍に、光秀樣は急所を突かれ、つひに歩行もなり兼ねて、溝尾殿と諸共に片山影にて御生害と、百姓家にて詳しい話、情ないことぢやござりませぬか。

芝崎　えゝ、すりや明智光秀樣は、小栗栖村の藪蔭で、誰とも知らず竹槍に突かれて御最期なされしとか。

〽御運の末とは言ひながら、果敢ないことゝ泣き伏せしが、

して〳〵、後の方々は。

代助　先づ明智方で一といはるゝ、智勇勝れし左馬之助樣には、昨日打出の濱にて必死の働きなされし

上、近江の湖水を馬にて乘越し、此上もないお手柄をなされましたが坂本で、敵を引受け討死をなされましたと兵士の話。

芝崎　して〳〵和子樣利一樣は、御無事でお落ちなされましたか。

代助　利一樣は伊豆樣と共に先陣なされまして、鋭き働きなされし所、味方と思ひし筒井順慶敵に從ひ裏切りなし、後を切取り前後より無二無三に攻めかゝれば、味方の兵士は途を失ひ、討死なすもの數知れず、首級は知れねど御親子とも其場で討死なされしと、兵糧方の人足に詳しい話を聞きましたが、二心ある筒井が爲に、やみ〳〵討死なされしは、悔しいことではござりませぬか。

〽お主思ひに代助が、拳を握り齒がみをなし、悔し涙に暮れければ、始終を聞いて母親は泣く眼を拭ひ吐息をつき、

芝崎　スリヤ和子樣には伊豆樣と、共に討死なされしとか、本意ないことではあるけれど、討死なすは武士の譽れ、よいお覺悟でござりまする。よう討死をなされましたわいの。

〽涙かくして討死を褒むる心は歎くより、百倍まさり哀れなり。

代助　スリヤ母人には利一さまが、果敢ない御最期なされしと、お話し申さば涙にくれ、お歎きなさることであらうと、心の內で言ひ兼ねましたが、思ひの外にお歎きなく、流石は以前が武家育ち、

氣丈なことでござりまする。

芝崎　いくつにおなりなされても、お抱守りの昔を思ひ、まだ乳くさく思ふ和子さま、御最期ありし悲しさは、胸もはり裂くやうなれど、光秀樣が御最期あれば共に死ぬるは家來の役、卑怯未練に逃け隱れなされしよりは嬉しいわいの。

代助　なるほど、さう言へばそんなもの。お主が死ねば家來も死なねばなりませぬな。

芝崎　殊には今も庄屋殿から持たせてござつた人相書。

〽庄屋が預けし畫姿を取り出して悴に見せ、

此邊までも此のやうに、人相書で御詮議あれば、脱れたまふことはならぬ。何は兎もあれ討死なされましたとあるからは、歎いたとても詮ないこと、手向けをなして佛前へ後世の御回向いたしませう。

〽涙拭うて立上り、手向の水を汲み上ぐる柄杓の縁短夜や更け行く月も村雲にしばし小ぐらき木下闇、梢の風も追手かと齋藤内藏之助利一は、小荷駄の馬に打ちのりて、心おく露秋近き夏野踏分けたどり來て、

ト花道より以前の内藏之助出來り、花道にて、

利一　百萬騎の強敵にも恐れぬ齋藤利一なれど、身の病には敵し難く、今朝よりの炎天に照り附けられし故なるか、先刻より暑氣に中され、これなる馬に助けられて、やう〳〵此處まで來りしが、木の間に潮水の見えるからは、最早堅田の浦なるか、幸ひあれなる人家へ立寄り、乳母を尋ねて養生なさん。

〽苦痛を怺え門口へ辿りて馬よりヒラリと飛びおり、松へ手綱を結び附くる、內には母が物音に、

ト文句の通りよろしくあつて、芝崎外の物音に心附き、

芝崎　これ悴、表へ誰やらござつた樣子。

代助　はい。（ト表をあけて、）そこへござつたは、どなたでござる。

利一　ちと尋ねたい儀があつて。

〽尋ねる詞に代助は、簀戶の影からすかし見て、

代助　たしかに御最期なされましたと、申した口も乾かぬ內、利一樣が門口へ迷つておいでなされました。

芝崎　これ〳〵代助、そなたは何を言やるのぢや。

代助　何をわしが言ひますものか、迷つておいでなされました、南無阿彌陀佛々々々々々。
芝崎　まだ〳〵そんなことを言やるか、利一樣ともあらうお方が、何で迷つてござりませうぞ。
〽言ひつゝ門へ立ちいでゝ、（ト出て見て、よく〳〵見定め）
おゝ、和子樣でござりましたか。
利一　さういふそちは、芝崎か。
芝崎　よう尋ねてお出でなされました、こちらへお通りなされませ。
代助　これ〳〵母人、幽靈を内へ引込んで、お前何をさつしやります。
芝崎　えゝ、まだそんなことを言やるか。
利一　こりや〳〵代助、その疑ひは尤もぢやが、それがし迷うてまゐりはせぬぞ。
〽しづ〳〵入り來る利一が、姿をためつすがめつ見て、
代助　なるほど足にお替りなければ、それでは、ほんまの利一樣か。
芝崎　こゝは端近、まあ〳〵あれへ。
利一　然らば許しやれ。
〽利一緣へ腰かくれば、乳母は草鞋の紐とく〳〵、足を拭へば座になほり、

芝崎　イヤ〳〵、久しうお目に掛りませぬ、ようお達者でおいで下さいました。
利一　幾年ぶりにて逢ひたるか、そちも無事で重疊なるぞ。
芝崎　イヤモウ、何からお話し申しませうか、昨日の朝から此邊でも、山崎にての戰の話、とり〴〵いたすを聞くにつけ、あなたのお身が案じられ、夜の目も寢られず、今朝早く山崎邊まで忰を遣はし、戰の勝敗あらましを聞かせましてござります。おゝ忰、馬を裏屋へ連れて行きやいの。
代助　どれ、裏手へ廻しておきませう。
〽言ひつゝ小荷駄の口を取り、裏手へ引いて行く後に、芝崎は前へ進みいで、
芝崎　承はれば、あなたには、御先陣をお勤めなされ、人に勝れし働きをなされましたと申すこと、それに引替へ何處に一つお怪我のないはお仕合せ、こんな嬉しいことはない。
利一　最初は勝利を得たる所、味方と思ひし筒井順慶裏切りせし故敗北なし、既に討死する所不思議にのがれ落ち延びしが、暫く此家へそれがしを、かくまうてはくれまいか。
芝崎　これは又改まつたそのお詞、以前の御恩がござりますれば、御不自由さへお厭ひなくば、いつ〳〵までも私方へおかくまひ申しませう。
利一　かく落人の身となつては、賴りなき内藏之助が、賴りに思ふそち達親子、必ずよきに賴むぞよ。

〽頭を下げて利一が賴む小影の悅びの袖に淚の雨もりて、物思ひげな母御の顏さしのぞきて代助が、

ト代助下手より戻り來り、芝崎の物思ひげな顏を見、思入あつて、

代助　これ母人、何で泣かつしやるのだ。

芝崎　さあ、討死をなさらぬのが、わしや悲しう思ふわいの。

利一　合點の行かぬその詞、我討死をなさゞるを、そちが悲しく思ふとは。

〽問はれて乳母は淚を拭ひ、

芝崎　光秀樣を初めとして、御一門の名ある勇士、皆討死をなされしと、專ら街の噂故、利一さまにも御最期と思ふ所へ村長どのが、持つて來た利一樣の人相書、所詮傾く運命と思召したら諸共に、何故討死をなされませぬ。

利一　いかにも主君光秀公、小栗栖村にて生害ありし、事の仔細を聞きたる故、共に死せんと存ぜしがそれがし思ふ仔細あつて命延はり夜に紛れ、そちを便りてまゐりしぞ。

芝崎　いかなる仔細か存じませねば、主を討つたる天罰に、一度勝利はあつたれど、光秀樣を始めとして、御一門の討死も脫れ難なき天の責、よしんば乳母が命にかへ、おかくまひ申すとも、いつか

利一　は人の目に掛り、名もなき者の劍にて、果敢ない御最期なされませう。今其方が申すこと、一理なきにはあらざれど、本能寺にて光秀公主人信長公を弑せし故、其の天罰を蒙りて戰に利あらず討死せしとは愚な一言、天下の爲には往古より主をも討てば親をも討つは例少なきことにあらず、信長公は剛將故かねぐ四海を併呑せんと屢々諸國へ兵を向け、數年戰ひ止む時なく、恐多くも大君の宸襟をなやまし奉り、又萬民が塗炭の苦しみ見るに忍びず、我主君身に逆賊の汚名を取り、信長公を弑せしは、あまねく天下を治めん爲、すでに此度の戰にも味方の危急を知りし故、討死なさんと覺悟せしが、君御落命と聞きしより、心變じて死を止まり忰を落し我も亦、斯く民家に身を潛むは、折を窺ひ秀吉を討つて恨みを晴らさん爲、よしや名もなき農民の手にかゝるとも利一が、初一念を貫く所存、卑怯に命は惜しまぬぞ。

トこれを聞き芝崎嬉しげに、

芝崎　おゝさうあらうとは存じましたが、もしやと存じ此の乳母が詞巧みに御卑怯と、今のやうに申せしも、この御本心を承はらん爲、ようまあ、お明し下されました。そのお志しを承はれば、及ばず乍ら忰と共に、きつとおかくまひ申しまする。

利一　おゝ、聞屆けくれて、忝いぞよ。

芝崎　したが、油斷のなりませぬと申しまするは、今も今とて羽柴方から、齋藤內藏之助を召捕らば、褒美の金を與へると言ひ附けられし百姓が、人數を集めて出口の固め、まだ其上に御覽じませ。

（ト以前の繪姿を出し、）爰らへ廻つたあなたの繪姿。

利一　なに、それがしの繪姿とな。（ト手に取り見て、）はて速かなる羽柴が手配り、斯くまで我を探索なすとか。血路を開き戰場をのがれて爰に落人の、齋藤內藏之助利一を、斯く繪姿にて詮議なす、羽柴が手配り事をかし。（ト畫姿を見てきつとなり、）猛虎水邊に遊ぶ時、おのれが影を憎むに均しく英勇その身を潛む折柄、奇怪なるこの一札、この儘おくも殘念至極、火中に投じて、えい。

ト畫姿をねぢつて圍爐裏のうちへ投込む、掛け焔硝ぱつと立つ。

芝崎　これは。（ト不審の思入。）

利一　わが繪姿をまツ此の如く、燒き失なへば利一は、今日の戰に卽ち討死、生きながらへしは餘人にて姓名知れぬ旅の者、故鄕へ歸るそれまでは、萬事よしなに計らひくれよ。

芝崎　はい〱、お宮仕へを致すのが、わらはの願ひでござります。

利一　禮は言葉に盡されぬぞ。

ト此內芝崎と代助は甲斐々々しく立ち寄つて、利一の上着を脱がせなどする。此の前方、下手より前

幕の九郎藏門口へ來て、内の樣子を窺つてゐて、

九郎　もし、御無心ながら、灯りを貸しておくんなせえまし。

利一　ムヽ。

ト利一よろしく思入、九郎藏門を明けてはひる。これにて三人ぎよつとせしこなしあつて、芝崎は行燈を吹消し、代助はいきなり立つて行つて、

代助　これ〳〵、誰だか知らぬが、人の家へつか〳〵とはひるといふがあるものか。

ト九郎藏を外へ突き出す。此の時ばら〳〵と下手より軍兵三人現はれ出で、

軍一　あやしい馬士め、

軍二　調べの筋がある、

軍三　一緒にまゐれ。

トよろしく九郎藏を取つて押へ、引立てゝ、下手へはひる。芝崎はこの内腰屛風を利一のまはりに立て、ほつとせしこなしにて、

芝崎　おゝまあ、廻し者でゞもあることかと、びつくりいたしましたわいの。

代助　わしもびつくりいたしましたが、大方泥坊でゞもござりませう。外へ突出したらば、見廻りの兵

士に引立てられてまゐりました。もう御心配はござりませぬ。

ト この内利一胸の差し込むこなしあつて、

利一　これ芝崎、何ぞ藥は持合はさぬか。そちたち二人に此身を賴み、急に安堵いたせしそのせゐか、次第に惣身發熱なし、氣分がわるいわえ。甚だすまぬが何ぞ藥でもあるなら見てくれぬか。

芝崎　あゝ、それは困つたものでござりまする。生憎とわしも悴も達者故か、藥といつては百草一袋もござりませぬ。あゝ困つたものでござりまするなァ。

代助　これ〳〵、そんな事なら何の心配も入りませぬ。わしが一走り宿の藥種屋へ行て、何ぞ利く藥を取つてまゐりませう。

利一　イヤ、夜中と申し、よほどの道さのみな事にもあらざれば、必ず捨ておいてくりやれ。

芝崎　いえ〳〵、代助なら何の造作もござりませぬ。

代助　では、旦那樣、どうか少しの間お待ちなされて下さりませ、直に求めてまゐりまする。

利一　然らば、心を附けて行きやれ。

代助　いえもう、每日歩きなれてゐる道、何のこともござりませぬ。

芝崎　では代助、今のやうなこともあれば、よう締りをして行つたがよい。

代助　はい〳〵、畏りました。

利一　扨夜中に、いかい世話ぢや。

芝崎　旦那様には、その間少しお横におなり遊ばしませ。私がおみ足など擦つて上げませうわいなア。

利一　それは氣の毒乍ら、折角そちが親切なれば。

ト代助は外へ出、花道附際まで行き、草履の鼻緒切れるに、草履を取上げ愁ひの思入にて舞臺を見込み、心を殘して花道へはひる。芝崎は戸棚から蒲團を出して敷き、利一をその上へ横たはらせ、二枚折の屏風を立て、足を擦る。花道より堀尾茂助、鎧、附太刀、陣立のこしらへ、これに以前の九郎藏附添ひ、跡より軍兵六人、鎧下、籠手臑當にて、袖がらみを持ち出來り、花道にて、

茂助　こりや九郎藏とやら、いよ〳〵汝が訴人の如く、あれなる家に明智の殘黨、齋藤内藏之助利一が忍び居るに相違ないか。

九郎　へい、只今も申上げます通り、途中から跡を附け、慥にあの家へはひりましたを、見屆けておきました。

茂助　その方内藏之助といふことを、如何して存じ居るぞ。

九郎　へい存じて居る其譯は、明智の家に其以前、奉公いたして居りましたから、顔を覺えて居ります

る。

茂助　召捕つた上其者が、内藏之助に相違なくば、其方に褒美をくれん。

九郎　へいへ、それは有難うござりまする。

茂助　早くあれへ、案内いたせ。

九郎　畏りました。さ、かうお出でなされませ。

ト九郎藏先に、茂助軍兵皆々舞臺へ來り、茂助下手へ床几に掛ける。九郎藏簀戸より内の樣子を窺ひ、軍兵に囁く。皆々囁き合ふ。九郎藏門口を押せど明かぬゆゑ内へ向ひ、

これへ婆さまや、庄屋殿の急用ぢやへ。ちよつとこゝを明けて下され。（ト簀戸を叩く。）

芝崎　なに、庄屋殿の急用ぢや。

九郎　さあへ、早く爰を明けて下され。

芝崎　えゝ忙しない、今明けますわいの。（トおさが何心なく門口を明け、茂助を見てびつくりなす。）

茂助　それ、込入れ。

皆々　はツ。

トおさがびつくりしてうろへする、ドンへになり、皆々込入つて、軍兵利一の手を取り引き起す、

利一思入あつて、

利一　こりやそれがしを、何とめさるゝ。

茂助　やあ、何とするとは知れたこと、汝は逆賊明智の家來、齋藤内藏之助利一、此家に隱れ忍ぶこと訴人あつて慥に知り、討手に向ひし堀尾茂助、さあ尋常に繩目をうけよ。

利一　こは存じ寄らざるお疑ひ、それがし事は都方より用事あつて參りし者、齋藤などゝは思ひも寄らず。

ト九郎藏内へはひり、

九郎　その言譯はもう無駄だ、八幡の藪から附けて來て、馬士と見せたる魂膽を、おれが殘らず知つて居る。

茂助　斯く證人の出る上は、最早叶はぬ齋藤利一。それ、者共召捕れ。

皆々　心得ました。

トドン／＼になり、軍兵皆々込入り、ちよつと立廻る、此のうちおさが、うろ／＼して軍兵に突當りうんといつて倒れる。利一軍兵を投げのける。爰へ後ろより茂助組附き兩人組打の立廻り、此内九郎藏門口の所に心を配り居る。軍兵上下へ別れ見て居る。トゞ軍兵一人利一に掛る、利一軍兵を足にて

踏み倒さうとするはずみに、竹縁を踏みぬく、仕掛けにて竹縁抜ける、此の時茂助取繩を掛け、きつとなつて、

茂助　逆賊明智が家臣たる、齋藤内藏之助利一を、堀尾茂助が召捕つたり。

ト利一を引き起す、利一口惜しき思入、此時おさが心附き、利一の體を見てびつくり思入、

芝崎　こりや、旦那樣には、えゝゝゝ。（トびつくりしてどうとなる、利一思入あつて、）

利一　斯く囚はれとなる上は、羽柴の陣所へ引かれなば如何なる處置に逢はんも知れず、身の大望も思はずに、運も傾く日の岡へ、やがて首級を曝すであらう。

芝崎　すりや、御身の果ては。

利一　むゝ。（ト思入あつて、）消えて行く露の命は短夜の、あすをも待たず日の岡の峰。辭世はそちへ形見なるぞ。

芝崎　そんなら、これが。（ト寄るを、）

九郎　うぬはこつちへ。（ト芝崎を引き倒す。）

茂助　立たう。（ト二重の上より茂助突く、利一たぢ〳〵として平舞臺へ下り、愁ひの思入あつて、）

利一　堅固で居やれ。

芝崎 はあゝゝゝ。

ト又寄らうとするを、九郎藏眞中へ割つてはひる、利一肱にて九郎藏の脇腹を當てる、九郎藏たちたぢとなる。利一芝崎を見て涙を隱す思入。これを道具替りの知せ、九郎藏どうと下に居る。茂助二重より下りる。此の仕組よろしく、時の太鼓にて、

幕

(堅田浦野陣の場)――本舞臺向う近江の湖、堅田より八景を遙かに見たる遠見、上下蘆原、岩組の張物、石田の紋附きし幕を張り、よき所に振りよき松の大樹、日覆より同じく釣枝、總て堅田の浦野陣の體。爰に石田三成鎧なり、鉢卷好みのこしらへにて床几にかゝり、幕明きの西成東作陣立のこしらへにて、三成の兜を持ち附添ふ、後に軍兵高張提灯を持ち並び居る、此の模樣、時の鐘、浪の音にて道具留る。と三成鐘を算へる思入あつて、

三成 只今打ちしは、寅の刻ぢやな。

東作 はツ、仰せの通り寅の刻と存じまするが、殊の外短夜にござりまする。

ト合方になり、三成思入あつて、

三成　明智が殘黨詮議せよと、久吉公の仰せによつて、斯くいふ石田三成が直さま諸所へ手勢を配り、山崎より此邊りまで、草を分つて探索なし召捕りし者數多あれど、何れも雜兵葉武者にして名ある勇士は更になし、然るに最前堀尾氏が齋藤内藏之助の在家を聞き知り、早速討手に向はれしが首尾よく彼れを生捕られしか、但しは又手に餘り、其場で討捨て召されしか、何は格別此所にて委細の知らせを相待たん。

東作　何さま彼の内藏之助は、光秀の旗下に於ても並びなき勇士なるに、今戰場を落延びて隱れ忍ぶは由々しき大事、早速生捕り差出さば、御大將にも嘸かしお悦びと申すもの。

三成　如何にも武勇鋭き利一、主人光秀討たれし上は久吉公を敵と覘ひ、必ず逆意を企つべし、さるによつて茂助殿を先刻討手に差向けしが、今に於て此所へ其沙汰なきは心許なし、萬一取逃がさば後日の大事、仕儀によつては此の三成自身に手勢を引連れて、出張なさんも計りがたし、汝等も左樣心得、何かの用意いたしてよからう。

東作　はツ、心得ましてござりまする。

トばたばたになり、花道より茂助、軍兵を一人連れ走り出來り、直に舞臺へ來て、

茂助　三成殿、未だこれにお越しありしか。

東作　これは〳〵茂助殿、先刻より御沙汰を待ち、此處に控へ居る。して齋藤内藏之助は首尾よく生捕り召されしか。

茂助　仰せまでも候はず、百姓代助が家に押寄せ、さしも勇士の聞えある、彼の内藏之助を手も濡らさず、卽座に繩掛け召捕り申した。

三成　それは〳〵一段のお手柄、然らば拙者これにて受取り、御本陣へ召連れて御大將の御指圖次第、刑罪の儀取計らふでござらう。

茂助　何さま貴殿は討手の隊長、然らば是れにてお渡し申さん。（ト揚幕へ向ひ、）囚人齋藤内藏之助を、これへ。

軍兵大勢　はあ。

ト時の太鼓になり、花道より立廻りの軍兵六人網乘物を舁き、これを前後より警固して出來り、舞臺下手へおろす。

茂助　それ、引き出せ。

軍兵　はツ。

ト軍兵駕籠より繩附きの利一を出す、軍兵よき所へ敷革を敷く。利一此上に住ふ、誂への凄き合方に

なり、三成見て思入あつて、

三成　珍しや利一殿、今朝より山崎にて双方出陣せしなれど、五位川の流れを隔て其のあはひ遠ければ緣なくして貴殿と拙者は、遂に面會も仕らず。

利一　如何にも此の利一は三七信孝殿の陣へ向ひ、貴殿とは持口遠く、一度も掛け合はさず、遂に戰破れてより此の堅田へ來り、斯く言ひ甲斐なく生捕られ、思ひがけなき此の面會。

三成　戰場にて出逢ひなば、互ひに姓名名乘り合ひ、

利一　打物取つて花々しく、其のお相手をいたさんもの、

三成　今は貴殿も運盡きて、

利一　斯く縛めの恥辱をうけ、

三成　計らず對面いたすとは、

利一　誠に夢の、

兩人　浮世でござる。（ト兩人よろしく思入、誂への合方になり。）

三成　實に盛衰とはいひながら、此度の戰爭は主君久吉公の武運強く、さしも智勇の明智殿、遂に小栗栖の露と消えしは、織田の天下を奪はんと彼の本能寺へ押寄せて、春永を討ち奉りし叛逆その身

に報い來て誠に是非なき今日の敗軍、家臣も多き其中に器量勝れし利一殿、一度戰場をのがれながら其在所を人に知られ、斯くやみ／＼と捕はれしは、是れ運命の傾くところ、貴殿の胸中嘸かしと拙者も推察仕る。（ト利一これを聞き、忝ないといふ思入あつて、）

利一　流石は石田三成殿、仁あり義ある其お詞忝けなし、それがし主君の遺志を繼ぎ、折がなあらば久吉殿を討つて恨みを晴らさんと、思ひし事も最早これまで、斯く捕はれの身となつては、衣を裂いて本意を遂げし晉の豫讓が力もなく、今更一命惜しむに足らず、此上のお情には、片時も早く首討ち召され。

ト利一覺悟の思入、三成感心のこなしにて、

三成　はて天晴なる勇士の覺悟、さりながら其の刑罪は我君のお指圖受けし上の事、いやなに堀尾氏、一先づ三井寺の御陣へ召連れ、委細言上仕らん。

茂助　如何さま、君にも御待兼ね、然らば拙者も共々に警固いたして召連れん。それ者共、引立てい。

軍兵　心得ました。（ト立ちかゝるを、）

三成　こりや、暫らく控へい。（ト是れにて軍兵控へる。）三成受取る上からは、繩目に及ばぬ解き捨て召されい。

茂助　これは又粗忽千萬、只今迂濶に繩を解き、斯大切なる囚人を、若し取逃がさば如何召さるゝ。
三成　あいや齋藤利一殿は、卑怯未練の士にあらず、逃げ隠るゝの謂れなければ、繩掛けずとも別條ござらぬ。
茂助　それぢやと申して、みす〳〵敵方。
三成　その御心配必ず御無用、それ東作、繩解き捨てい。
東作　はッ。（ト東作立上り、利一の繩を解く、茂助呆れて。）
茂助　こりや東作殿まで同じやうに、拙者が手柄に生捕りし、其の囚人を貴殿の儘には。
東作　はて、召捕りしは其許でも、落武者詮議は主人の役目。
茂助　や。
三成　三成深き所存もござれば、縛め解きて召連れ申せ。
茂助　然らば貴殿の勝手にめされい。（ト茂助是非なく控へる、利一忝なき思入あつて、）
利一　あ、感じ入つたる武門の情、
三成　敵味方とは隔つれど、
利一　知る人ぞ知る、貴殿の御芳志、

三成　左様ござらば利一殿。

利一　いざ、御同道。

　ト利一立上る。茂助むゝと抜きかけるを、利一振向きにつこり笑ふ、茂助しやんと鞘へ納める、三成陣扇をばらりと開く、双方見合つて木の頭。

仕らん。

　ト利一嘲笑ふ、茂助恐れて顫へる。三成天晴ぢやなと東作へ思入。皆々引張りよろしく、波の音、本釣鐘の寺鐘にて、

ひやうし　幕

四幕目

三井寺本陣の場
日の岡峠梟木の場

〔役名――齋藤内藏之助利一、石田佐吉三成、百姓代助、田丸幸太夫、馬士九郎藏、西成東作、軍兵、非人。齋藤妻藤波等。〕

（羽柴本陣の場）――本舞臺三間の間、高二重、本庇、本縁附、向う紗綾形の襖、斬口に五三の桐の

紋附きし幕を張り、上の方あとへ下げて一間の瓦燈形の中窓、白壁、廊下の心、下の方一間白壁の塀、此前に槍を飾り、上手よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、總て三井寺羽柴家本陣の體。爰に○△□◎の軍兵四人水汲みなりにて控へ居る、時の太鼓にて幕明く。

○　何といづれも、逆賊明智光秀は六十餘州を掌握なさんと春永公を討ち奉り、其古への義仲同樣。

△　誠に旭の昇る如く京地に威勢をふるひしも、忽ち御主人久吉公中國から引返し、山崎にての弔ひ合戰。

□　流石の明智も叶はずして、皆ちり〴〵に落失せて、大將光秀は小栗栖村にて土民に討たれ。

◎　また左馬之助は矢走にて、敵に追はれて逃げ場に困り、湖水を乘越え逃げ延びしが、これも坂本で討死なし。

○　その外進士溝尾を初め、名ある勇士は皆討たれ、中に齋藤たゞ一人、堅田の浦に忍び居りしを。

△　馬士九郎藏が訴人によつて、捕手の人數の向ひし所、死物狂ひの手痛き働き、容易に捕ることならざりしが、

□　譬にもいふ多勢に無勢、折り重なつてやう〳〵生捕り、當三井寺の御本陣へ、繩打つて引立て來たり。

◎　今日この場で吟味なし、諸人の見せしめ日の岡にて、重き死刑に行ふ手筈、
○　昔が今に叛逆の榮えし例はないこと、
△　智勇勝れし光秀ゆゑ、知らぬ事もなからうに、
□　及ばぬ事の企てなし、末世に惡名殘すとは、
◎　思へばたはけた話しでござる。
三人　左樣でござる。（ト此時奥にて、）
幸太　やあ、かしましい、鎮り居らぬか。
○　あの聲は、田丸さま。
△　またお目玉を、
四人　喰はねばならぬ。（ト時の太鼓になり、正面より幸太夫半素袍大小にて出來り、）
幸太　最前より一間にて、明智の殘黨詮議の爲め、諸國へ廻すお觸の文案書き認め居つたるに、耳かしましい無益の雜談、役目の妨げ愼み居らう。
四人　はッ、恐れ入りましてござります。
△　田丸樣には終日のお役目、

□　御苦勞千萬に、
四人　存じまする。（ト辭儀をする。幸太夫眞中へ住ひ、）
幸太　明智が殘黨詮議なすは、これ今日の我が役目、君より大祿たまはるは斯かる役目を勤むるゆゑ、決して苦勞の事はない、汝等とても其如く、御奉公筋を思ひなば、骨を偸まず出精いたせ。
○　はッ、出精いたしますで、
四人　ござりまする。
幸太　おゝ偸むと申せば內藏之助が、隱れ忍ぶを注進せし馬士九郎藏を、これへ呼出せ。
四人　はッ、畏つてござりまする。（ト□下手へ住ひ、）
□　溜りに控へし馬士九郎藏、これへ出ませい。（ト下手にて）
九郎　はあ。（ト下手より前幕の九郎藏、おづ／＼と出來り、）
四人　下に居らう。
九郎　はッ。（ト下手へ控へる。）
幸太　堅田村の馬士九郎藏。
九郎　はッ。（ト平伏する。）

幸太　その方こと海道筋にて、强て旅人に馬をすゝめ、酒手をねだるのみならず、往來稀な山路へ引き込み、路銀は元より荷物を奪ひ種々惡事をいたせし上、深夜に及び近鄕の百姓家へ忍び入り、金銀衣類を盜み取り酒食に使ひ捨てたる段、重々不屆きにつき重き刑に申附くべき所、明智が家來齋藤內藏之助、堅田村の百姓代助方に忍び居りしを注進なせし功により、一命を助け遣はす、有難くお受けいたせ。

九郎　これまで度々惡事を働き、お上のお手に掛りましたも、地藏の顏の丁度三度目、賽の河原の石よりも重き此身の罪科ゆゑ、今度は所詮助からず切られる事と覺悟をいたし、心の鬼の角も折れ、地獄へ行つたら馬方だけ、畜生道で馬頭にでもなる氣で居つたも格別な、お慈悲を以て命助かり極樂淨土へ行つたも同然、こんな有難い事はござりませぬ。

幸太　一旦惡事は働けど、一器量ある其方ゆゑ命助けて今日より目明し役申し附ける、心を入替へ出精なし、猶も明智が餘類の者潛伏なさば探索なし、早速當所へ注進いたせ、功に依りて恩賞なすぞ。

九郎　有難うござります る、命をお助け下さりました御恩送りに心を入替へ、お上の御用に立ちますやう、出精いたすでござりまする。

幸太　いつ何時その方に、用事あらんも計られず、江州の外他國いたすな。

九郎　畏りましてござりまする。
幸太　最早罪科を許せし上は、當陣内に居るに及ばぬ。
九郎　左樣なれば此の儘に、
幸太　其方の勝手に引き取れ。
九郎　有難うござりまする。
四人　立ちませい。
九郎　はツ。(ト九郎藏思入あつて下手へはひる。)
幸太　昨日堅田浦にて捕縛せし、齋藤内藏之助利一、申し聞かすことあれば、只今これへ引出し召され。
四人　畏つてござります。
幸太　大切の囚人ゆゑ、取逃がさぬやう警固いたせ。
四人　ハツ。(ト花道へはひる。幸太夫跡を見て、)
幸太　內藏之助が詮議の役は石田氏とそれがしなれど、未だ出席なきこそ幸ひ、これへ呼出し伏罪させ我一人の手柄となさん。(ト花道の揚幕にて、)
〇　明智光秀が家臣、

△　齋藤内藏之助、

四人　立ちませい。（トこれにて床の淨瑠璃になり、）

〽きのふは八幡山崎にて、猛虎の如き齋藤も、けふは繩目の恥辱を受け、野狐に等しく首うなだれ、心に忍ぶ口惜しさ、無念面にあらしこ共、書院の庭へ引据ゑて。

トこれへ時の太鼓を冠せ、花道より前幕の利一小手をゆるめし繩に掛り、以前の四人引立て來る、利一花道にて舞臺を見て無念の思入、きつとなつて氣を替へ、靜々と舞臺へ來り、眞中より少し下手へ仕ふ。

○　はッ、仰せに任せ齋藤内藏之助、

△　召連れまして、

四人　ござりまする。

〽言ふに田丸は眼下に見下し。（ト幸太夫利一を見て、）

幸太　いかに内藏之助、われ其方に問ふことあり、逐一此の場で答へいたせ。

利一　此身に覺えの事ならば、御返答いたすでござらう。

幸太　先づ第一不審なるは、其方明智に仕へぬ先より智勇拔群に勝れしこと世人擧つて知る所、然るに

何の由緣あつてかまさしく叔父の敵を差置き、忠孝の道を忘れ却つて義龍に仕へしが、國を全うすること能はず、其後稻葉一轉齋に隨ひ扶持せられしも、又候や君臣の禮儀を失ひ明智光秀に隨身せしは、取るに足らざる愚人なり、これにて言譯あるや如何に。

利一　こは何事かと存ぜしに、此の内藏之助が三度まで、主人を替しを道知らず、愚人などゝ言はるゝは、御邊も取るに足らざる愚人。

幸太　そりや又、何ゆゑ。

利一　御邊を愚人と蔑なすは、武士に向つて問ふことを、存ぜざるゆゑ申せしぞ。

幸太　武士に向つてそれがしが、問ふことを存ぜざるとは。

利一　明智光秀が家臣にて左右の腕といはるゝ利一、匹夫下郞同樣に權威を以て人を脅し、禮を知らざる其方などが、武道の本意を何しに知らうや。

幸太　やあ、人もなげなる其一言、禮を知らぬと申せども、忠臣二君に仕へぬ本文、何しに知らうや。

利一　それがし叔父の敵を差置き義龍に仕へしは、深き仔細あつてのこと、武士の心を知らざる愚人に申聞かすとも無益なれど、諸士の嘲り防がん爲め、そのあらましを語り聞かさん。

幸太　何と。（ト樂太鼓の入りし合方になり、）

利一　われ義龍に仕へしは是れ忠孝の二つにして、義龍道三が實子にあらず、先君持重院が胤なるゆゑ先君に隨ふ忠義の一つ、まつた道三時の權威に美濃國を横領なす其罪を償ひしは、これ孝道の一つなり、然るに義龍義興とも懦弱にして我を疏んじ、遂に濃州を追出され其國を滅ぼせしはこれ則ち天命なり、又稻葉家へ仕へしが半途にして暇を乞ひ光秀に隨ひしは、一轉齋短慮にして武士を見ること知らず、婦女子に等しき料簡にて善惡さへも辨へざるゆゑ、これによつて暇を取つたり、又光秀ことは智勇勝れし武士と知つて扶持なすゆゑ、一命捨つるは此人と存ぜしゆゑ一味なしたり、斯かる例は其古へしかも唐土周の世の范中行氏智伯に似たり、人を愚人と蔑なす御邊、これらの故事は御存じならん。

幸太　いや、左樣な故事は、

利一　御存じないか。

幸太　むゝ、幼年より武道にのみ心委ねしそれがしゆゑ、文事は一向に存じ申さぬ。

利一　御存じなくば申し聞かさん、晉の安邑といへる所に豫讓といへる名士あり、初め范中行氏に仕ふ行氏豫讓を愛せざるゆゑ後見限りて智伯に仕へ、忠を盡し功を顯はす、又趙の襄氏といふもの故あつて智伯を討つ、豫讓この仇を報ぜんと身を碎き襄氏を覘ふ、これ智伯が名士と知つて扶持な

せし其恩義を感ずる故なり、われ古へに及ばずとも、武道に古今の隔てあらんや。既に稲葉家を出でゝ後明智に仕へし所、武士と知つて扶持せしゆゑ、今久吉を附け覘ふは、恩義に報ずる所なり。

幸太　然らば明智に仕へしは、晋の豫讓に習ふにせよ、逆意に與なし久吉公を敵と覘ふは愚なり、そも光秀を討ちたるは春永公の仇たるゆゑ、義に依て非道を誅し四海靜謐になさん爲め、それを汝は山崎の戰場より逃げ隱れ、堅田の里に忍ぶとものがれ難きは天の網、かゝる繩目の恥辱を受けるも、これ皆逆意に與せしゆゑ、身の誤りを改めて仁義を立つる刑罪受けよ。

〽にツくき田丸が一言に、利一怒りの聲あらゝげ。

利一　今日かゝる繩目に逢ふも、これ則ち其身の運なり、假令名將名士たりとも時によつて陣前に降り囚はれとなるも珍らしからず、既に文王は紂王に囚はれ、勾踐は呉に仕ふるも時の然らしむる變化なり、近頃自讚の大言ながら、山崎の如き大軍たりとも、一時に破る力あれど敵し難きは病の惱み、苦痛に迫つて暗々と、斯かる繩目に及びしも、古今の變化かはることなし、何ぞこれを恥辱とせんや。

幸太　むゝ。

利一　忠義を立つるそれがしを、愚人なりと言はるゝか。
幸太　さあ、それは。
利一　無禮といふこと、御存じないか。
幸太　さあ、
利一　やはり愚人と言はるゝか。
幸太　さあ、
利一　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
利一　誠の武士道知らざるは、猿に仕へる犬侍、詮議などゝはかたはら痛い。
幸太　ちえゝ。（ト口惜しき思入）
○　やあ言はして置けば、ずはら〳〵と。
△　上を恐れぬ雜言過言、
□　あまりといへば失敬至極、
◎　われ〳〵此儘に、

四人　聞き捨てがたし。

〽聞き捨てがたしと立ちかゝれば。（ト四人立ちかゝる。）

利一　やあ、燕雀何ぞ大鵬の心を知らん、囀りだては耳かしましい、口を噤んで控へ居よ。

四人　小癪なことを。

〽また立ちかゝる其折柄、奥の一間に聲あつて。

ト四人利一に掛かるを突廻して、左右へ投げのける、此の時奥にて、

三成　やあ騒がしい、者共控へい。

幸太　や、あの聲は、

四人　石田殿。

〽士卒を止め奥の間より、大紋の袖かき合せ、石田三成立ち出づれば、

ト奥より三成、立烏帽子に大紋小さ刀にて出來る、子供の小姓刀を持ち附添ひ出る。

幸太　これは〳〵石田氏には、只今出仕召されたか。

三成　先刻出仕いたせし所、君の御内意承はり、出席遲刻いたしてござる。

幸太　貴殿の出仕延刻ゆゑ、それがし代つて利一を、只今詮議いたせし所、

三成　始終の樣子は奧の間にて、逐一三成承知いたす。
○　すりや、石田樣には、
四人　最前よりの、
幸太　この場の樣子を、聞かれしとか。
〽面目なげに、見えければ、（ト幸太夫面目なき思入）
三成　先刻より御苦勞千萬、それがし替つて詮議いたせば、暫時休息いたされよ。
幸太　然らば、御免下されい。
〽席を讓れば石田三成、廣緣近く進み出で、
ト幸太夫上手あとへ下りて住ふ、三成眞中へ住ひ思入あつて、
三成　いかに齋藤内藏之助、御身和漢の書籍に明るく、故事を引いての此の場の返答、物蔭にて承はり驚き入つたる志し、武士は斯くこそ有りたきもの、忠誠の程石田三成、ほとんと感心いたしたり。
利一　臣として主を思ふは人倫の常にして、利一如きが寸志を左程まで賞美に預かり、近頃面目次第もござらぬ。

三成　敵ながらも天晴なる御身が赤心、なか〳〵以て我々などの及ばぬこと、さりながら智者の一失、三成御身に不審あり。

利一　なに、それがしに不審とは、それは如何なる事なるぞ。

三成　おゝ其の不審外ならず、名士を用ふる光秀が懇請を深く感じ、一命をも捨てんと思ふ志しは天晴ながら、左程主人を思ふならば光秀難戰の其場にて、なぜ諸共に討死なし生死を一つにいたさぬぞ、御身味方の後陣を破り、山崎の戰場をのがれ、乳母を便つて堅田浦に身を忍びしは卑怯至極、近頃未練の振舞なり、御身堅田に世を忍び如何なる事をなす所存か、これ三成が不審なり。釆配とつては鬼と呼ばれし光秀、こたびの戰爭に肺肝を碎きて計るとも、我が主君久吉公物の數とも思召さず、只一戰に亡ぼしたまひ武威近國に轟けば、何れの浦に忍ぶとも隱れ果すこと難し、及ばぬ事と知りながら戰場をのがれ命延はり、卑怯未練の名を取るは、名將勇士の恥づる所御身に似合はぬことならずや。

〽物和らかに問ひかくれば、内藏之助少しも動ぜず、

ト三成思入よろしく、利一もこなしあつて、

利一　御尤もなるお尋ね、如何にも山崎の戰場より跡を晦しのがれしは、卑怯未練の振舞ながら、それ

がし一命惜しむにあらず、堅田浦に忍びしは時節を窺ひ久吉殿の首級をたまはり亡君へ、日頃の恩を報ぜんと心を碎く此の利一、運拙くして縄目に掛り、卑怯未練と言はれる悔しさ、御推量下されい。

ヽ無念至極と拳を握り、面に怒りを顯はせば、三成莞爾と打笑みて、

ト利一口惜しき思入、三成よろしく思入あつて、

三成　光秀名士を愛すゆゑ家來に名ある者多し、中にも明智左馬之助、齋藤内藏之助兩人は車の兩輪にたとへし家來、智勇共に勝れしこと諸家ともに賞讃なす、然る所今日に至り日頃に似合はず、斯くまで理非に暗きは合點行かず。

利一　それがし理非に暗きとは、何故あつて言はるゝぞ。

三成　今御身が田丸氏へ晋の豫讓を初めとして、文王勾踐の故事を引きしは、あらゆる和漢の書籍に亘り、博識なること感心ながら、これぞ則ち下世話に申す論語讀みの論語知らず、道理を知つて道理を知らぬに似たり、我君初め此の三成も民家に産れ育ちしゆゑ、竹馬の遊びなせしより弓取りとなる今日まで、一字一點の學問せざれば和漢の故事は辨へねど、當然の理は心得たり、今御身が故事を引き田丸氏への返答は、理に當つて理に當らず、甚だ以て誤りなり。

利一　いや誤りとは心得ず、義を見てせざるは勇みなし、恩を知らぬは不忠の武士、忠義を思ひ利一が主君明智の仇を報ふが、何故あつて誤りなるぞ。

三成　則ちそれが心得違ひ。

利一　なに、心得違ひとは。

〽威猛高に罵れば、三成わざと面を和げ、（ト利一きつとなる、三成思入あつて、）

三成　明智に受けたる大恩を、報ぜん爲に久吉公を、御身が敵と附覘ふは、近頃以て神妙ながら、爰をよく辨へられよ。

利一　何と。（ト三成きつとなつて、）

三成　山崎に於て光秀を久吉公が討ちたるは、これ遺恨にあらず、元同席の朋輩ゆゑ、なに故なきに刃を合さん、光秀主君春永公を弑せしゆゑに久吉公、倶に天を戴かざる大恩のある主君の仇猶豫いたす所にあらず、これによつて中國より直に軍勢引返し、山崎に於て光秀を討滅ぼせしは今日のこれ本然の道理にして則ち君臣の禮儀なり、然るに御身我が主人を敵と覘ふは又敵にて、未だ天下に例なし、よく辨へられよとは爰のこと、今御身久吉公を主人の敵と討つ時は、斯くいふ三成御身をば主人の敵と討たねばならぬ、其時は又御身が家來我を主人の敵と討たん、我が家來また

御身が家來を主人の敵と討つの道理、さある時には果てしなく、其の主從の親子兄弟討つては討たれ、討たれては討ち、萬代の末に至らねば仇を報ふ恨みも晴れず、刃を納め泰平の御代を悦ぶ人あらじ、此の道理を辨へぬは誤りにてはあらざるや、御身學才衆に勝れ博識の聞えあれば、其例あつて言はれしか。

利一　さあ、それは。

三成　また敵を討つこと、何時の世に始まりしぞ。

利一　さあ、それは。

三成　和漢に其の例ござらぬか。

利一　さあ。

三成　但しはござるか。

利一　さあ、

三成　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

三成　其例あらば齋藤利一、事明白に語るべし。

〽威儀を正して三成が、鬼神をひしぐ一言に、さしもの利一一句もなく、當然の理に屈托なし。（ト三成きつといふ、利一理に詰りし思入にてぢつとなり、）

利一　それがし一途に久吉公を、主人の敵と覘ひしは、これ一生の誤りなり、又敵を討ちしこと和漢の書籍に例なし、流石は羽柴の家臣とて、天晴なる今の一言、誠に感服いたしてござる、今更返らぬことながら山崎の一戰に主人と共に討死せざるを、嘸や卑怯未練なりと諸家の嘲り如何ばかり末世へ恥辱を殘せしは百千悔いても詮なきこと、是れ皆我が身の粗忽ゆゑ、何面目にこれを雪がん、此上は如何やうとも、御法通りの刑罪に仰せ附られて下さりませう。

〽理に伏したる利一が、天命至る期と悟り、覺悟の體に幸太夫。

ト利一覺悟せし思入、幸太夫前へ出で、

幸太　其の殘念は其方より、此の幸太夫がいかばかり、石田殿が今少しこれへ出席なされずば、又敵の理を以て內藏之助を說得なし、我が才智を見せんもの、近頃殘念至極でござる。

トこれを聞き、軍兵四人思入あつて、

○　それは嘸かし御殘念、然し爰へ石田樣が、

△　御出席をなされずば、

□　失禮ながら田丸樣に。
◎　又敵の御說得は、覺束ない、
四人　ものでござる。
幸太　やあ、其位の理が分らいで、物の詮議がなるものか。
四人　でも、あなたには。
三成　こりや〳〵、重役へ對し失禮至極、口出しいたさず控へて居よ。
四人　はッ。
〽鶴の一聲組子共、はッとばかりに控ゆれば、三成詞を改めて、
ト四人控へる、三成思入あつて、
三成　明智の家來多き內にも、一二といはるゝ齋藤利一、山崎の戰爭に諸陣を破りし勢ひは、天下に稀なる英雄ゆゑ、一命斷つは惜しけれど、主人光秀が叛逆に與せし上は助け置かれず、重き罪科に行ふが則ち天下の大法ながら、惡にもせよ忠義を感じ、此の場で切腹申し附くるぞ。
〽言はせも果てず。
幸太　あいや、其儀は罷り成らぬ、大罪人に與せし利一、主人光秀同樣に梟木に掛けるが大法、切腹さ

せては上への恐れ。

三成　如何なるお咎めござるとも、斯かる忠義の英雄を刑罪なすは本意にあらず、切腹さすを我君より
お咎めあらばそれがしが、申し開きをいたすでござる。

幸太　ではござらうが、それがしも、貴殿と共に詮議の相役、越度となれば我身にも。

三成　其の儀は決して御苦勞召さるな、申開き叶はずば三成切腹いたすまで、貴殿の腹は借り申さぬ。

幸太　むゝ、然らば貴殿の勝手に召され。

三成　いや三成勝手に裁許はいたさぬ、これ皆君の、

幸太　や。

三成　いやさ、君は寛仁大度ゆゑ、よもお叱りの御沙汰はあるまじ。

幸太　いや、御沙汰があれば貴殿の越度、拙者は高見で見物いたさう。

〽せゝら笑ひて控ゆれば、

三成　斯く切腹と事極れば、繩目に及ばぬ解き捨てい。

四人　はッ。

〽はッとばかりに利一が、縛め解けば手をつかへ。

ト四人利一の繩を解く、利一手を突き思入あつて、

利一 昨日より重ね〳〵御芳志の段忝けなし、逆意に與せしそれがしに武士道をお立て下され、切腹仰せ附けられて御仁恵の御取計らひ、忝なくは存ずれども、先刻も申せし如く、戰場にて討死すべきを、一太刀なりとも主人の敵久吉殿を恨みんと、卑怯未練の名を取る悔しさ、何卒主人同樣に如何なる重き刑罪にも、仰せ附けられ下さるべし。

三成 尤もなる事ながら、御身に切腹申附くるは忠義を惜しむ武士の情、詞をもどかず切腹召され。

利一 忝けなくはござれども、主人と共に刑罪を此の身に受けねば生き延はりし、恥辱を雪ぐ時がござらぬ、爰の道理を聞き分けられ、主人と共に刑罪仰せ附けられ下さるべし。

三成 すりや、どうあつても切腹は、いたさぬと申されるか。

利一 斯くなりましても武士を立てたうござれば、石田氏お聞き濟み下されい。

三成 左程まで言はるゝこと強ひてとも申すまじ、人は一代名は末代、尤もなる事ゆゑに如何にも御身の願ひに任せ、主人と共に日の岡にて刑罪に行はん、妻子までも重罪ゆゑ重き御所置のあるべきところ、格別の思召しを以て助命の上構ひなし、申す殘す事あらば、何なりと遠慮なく妻子へ申し殘すべし、それがし届け遣はさん。

利一　重ね〴〵の御仁情、いつの世にかは報じ申さん、心魂に徹し内藏之助忝う存じ申す。

〽情を感じ利一が、浮む涙の折こそあれ、陣所を目がけて駈け來る代助。

トばた〳〵になり、花道より前幕の代助、尻端折りにて走り出來り、舞臺を見て、花道よき所に下に居る。

幸太　やあ、案内もなく陣所へ踏込む狼藉もの、搦め捕れ。

□◎　はッ。（トつか〳〵と花道へ行き、）腕廻せ。（ト代助の手を取るを、其儘に、）

代助　いえ、狼藉者ではござりませぬ、私ことは堅田浦の百姓代助と申す者、何卒齋藤内藏之助樣に、お逢はせなされて下さりませ。

幸太　やあ、ならぬ〳〵、汝はこれなる利一を匿ひ置きし大罪人。

◎　對面叶はぬ。

兩人　腕廻せ。（ト引立てにかゝる、代助兩人と立廻る。）

三成　者共引け。

兩人　はッ。

幸太　なぜ、お留めなさるゝぞ。

三成　利一伏罪せし上は、假令匿ひし罪ありとも、あの者に構ひなし。
幸太　ぢやと申して。
三成　入らぬお指圖、控へ召されい。
幸太　むゝ。（ト是非なく控へる。）
三成　こりや代助とやら、對面許し遣はすぞ。
代助　すりや、お許し下さりまするか。
三成　苦しうない、近う〳〵。
代助　はゝ、有難うござりまする。
〽許しを受けて代助が、魚の水得し心地にて、小躍りなして來りける。
ト代助嬉しき思入にて、口◎に失禮をしたといふ思入あつて、ト舞臺へ來る、利一見て、
利一　代助來りしか。
代助　はツ。（ト下手に手を突き控へる。）
利一　よくぞ尋ねてくれたるぞ。
代助　はツ、お召捕りになりし上は容易にお目には掛れまいと、存じましてござりまするが、石田樣の

利一　お情にて計らずあなたのお目に掛り、有難い事にござりまする。

利一　われもそちが歸らぬうち、當陣所へ引かれしゆゑ、跡は如何なりしやと年老いし乳母は元より、そちが身の上案じ居りしぞ。

代助　御詮議嚴しきあなたをばお匿ひ申せしかど、お上のお慈悲で私へは何のお咎めもござりませぬ。

利一　其方に咎めなきは寛仁大度の御計らひ、それに附いてもそちが宅へ昨夜捕手來りし折、病中ながら一方を切拔けのがれんと、暫し挑み戰ひしが、朽ちたる竹緣踏みぬきて思はぬ不覺に繩目の恥陣所へ引かるゝ利一に、名殘りを惜しんで袖にすがる乳母を捕手が足蹴にかけ、氣絶なせし樣子なりしが、乳母に怪我はなかりしか。

代助　はツ、その母人は。

〽跡言ひさして差打つぶき、何のいらへもあらざれば、（代助うつむき愁ひの思入。）

利一　乳母は怪我を、いたせしか。

代助　いえ、別條はござりませぬ。

〽言ふ顏つく〴〵打見やり、（ト利一代助の顏を見て思入あつて、）

利一　別條ないといふそちが、眼中うるみ憂ひを含むは、乳母は死去いたせしか。

代助　さあ、それは。

利一　包み隠さず仔細を申せ。（ト代助思入あつて、）

代助　斯くお察しの上からは、何をか包み隠しませう、母は昨夜自害いたし、相果てましてござりまする。

利一　やゝ、乳母は自害いたせしとか、して〳〵如何なる仔細あつて。

代助　さあ、あなたをやみ〳〵捕手の衆へ渡せしが残念と、刃を咽喉へ突立て。苦痛の所へ立帰り介抱なせど存命も、所詮叶はぬ深手ゆゑ様子を聞けば右の次第、敵の虜となりたまへば叛逆人の荷擔人ゆゑ、どうでお命ないは必定、あしきお噂聞かぬ先き、冥土でお待ち申さんと、魁いたしてござりまする。

利一　今更悔んで返らねど、よしなき我が頼らずば、乳母に命を捨てさせまじきに、残念な事いたしたり。

代助　母の自殺に私も其場を去らずと存じましたが、旦那様へ自殺の趣き申し上げ、其身のお詫びをいたしくれと、くれ〳〵母の頼みゆゑ、死する命を生きながらへ母の死骸を取片附け、取るものも取りあへず、駈け附けましてござりまする。

利一　乳兄弟の誼を思ひ、よくぞ是れへ來てくれた、そちに逢ふさへ嬉しきに、親子とてそちの面差、か程まで似るものか、死したる乳母に逢ふ心地。

（添乳されたる古を、思ひ出して利一が、涙にくれしが氣を取直し、

ト利一思入あつて、代助の顏をぢつと見て愁ひの思入、三成を見て氣を替へ、

計らずそちに逢うたるは、是れ今生の思ひ出なり、そちは死する命を延はり、母を始め乳兄弟の我が亡き跡を弔ひくれよ。

代助　仰せではござりまするが、親を失ひ主を失ひ何望みなき私ゆゑ、冥土のお供いたしまする。

利一　それはそちが心得違ひ、今一命を捨つる時は、誰が跡の弔ひなすぞ、親への不孝此上なし、早まつた事いたすまいぞ。

代助　それぢやと申して。

利一　こりや、死は易く生は難し、必ず心得違ひいたすな。

代助　はッ。

（忠あり義ある主從の心を汲んで三成が。（ト此內三成兩人の樣子を見て感心の思入あつて）

三成　いやなに利一、乳母が忰の代助とやら、計らずこれへ參りしは、時に取つてこれ幸ひ、御身の子

利一　息伊豆守へ申し送る事あらん、其の使ひ言附けられよ。
利一　石田氏の御厚情返す〴〵も忝けなし、如何にも悴伊守豆へ一封申し遣はしたし、代助其方使ひいたせ。
代助　すりや私に、そのお使ひを。
利一　おゝ泉州堺の鐵砲鍛冶次郎兵衛方に忍び居れば、尋ね參つて屆けくれよ。
代助　否といはれぬ此のお使ひ、委細畏つてござりまするが、左樣なれば奥樣も、かしこにお出でなされまするか。
利一　いや藤浪ことは先達て堀川に住居いたす、卿の意三方へ預け置いた。
代助　これへも御書が參りまするか。
利一　藤波には用はない。
三成　それ、料紙硯箱を遣はせ。
小姓　はッ。
利一　左樣ござらば、暫時の間。
三成　心靜に認められよ。

ト此内小姓刀を下へ置き、後ろにある硯箱へ紙を載せ縁端へ出す、○取つて利一の前へ置く、幸太夫これを見て、

幸太　現在敵の利一へ、三成殿入らぬお指圖、近頃馬鹿げたことでござる。

〽田丸はおのが心に較べ、密事を記し送るかと脇目も觸らず見下すを、事ともなさず利一は今日を限りの命毛に、走らぬ筆もさら〳〵と、書認めて卷き納め。

ト利一遺言を書く、二重より幸太夫これを見詰めて居る、三成は腰にさげし時計を出し、これを見て利一の書く物へ目を掛けぬ思入、利一書きしまひ立文に卷いて、

利一　然らば悴伊豆守へ、此の遺書を屆けくれよ。

代助　畏つてござりまする。

幸太　いや其一封に密事をば、書き記せしも計られず、中改めて渡しくれる。

ト幸太夫立ちかゝるを三成留めて、

三成　いや、それは入らざる貴殿の御疑念、名に負ふ齋藤内藏之助、他見を憚る密事をば何しに此場で認めませうぞ。

幸太　でも、其中を見ぬうちは。

三成　只今貴殿それがしを馬鹿者と言はれしが、此の一封を改めんと強ひて申すはそれも馬鹿念、いらぬ詮議無用に召され。

幸太　いゝや無用にいたされぬ、詮議いたすは我が役目。

三成　いや利一の詮議は我が役目、貴殿は助役控へてござれ。

幸太　むゝ。

〽助役に是非なく控へれば、（ト幸太夫是非なく控へる、利一思入あつて遺書を開き）

利一　御疑念ござらば御覽下され。「謀叛に與せしそれがしゆゑ重き刑罪に行はるべきを、羽柴殿の仁惠にて、武士の本意を立てさせんと切腹仰せ附けられたれど、身の大罪を顧みて則ち主人光秀公と同罪の處置を希ひ、梟木に掛り候間、羽柴殿を恨むことなく、永く厚情を忘れざるやう」悴へ送る此一書、これでも御疑念ござるよな。

〽遺書を開いて差附けられ、今更返す詞なく、面膨らして控へ居る。

ト幸太夫是非なく跡へ下り、脇を向き素知らぬ思入。

御疑念晴れゝば此の一書、悴方へ持參いたせ。（ト代助へ渡す。）

代助　はッ、畏つてござりまする。

利一　これにて思ひおくことなし、御法通り刑罪に、仰せ附けられ下さるべし。

三成　如何にも死刑に行はんが、一命斷つは惜しき武士、子息へ送る遺書の文面感じ入つたる志し、敵ながら天晴ゆゑ三成御身に見するものあり。やあ〳〵東作、申し附けたる品持參いたせ。

ト奥にて、

東作　はあゝ。

〽はッと答へて東作が、袱紗包みを携へ出で、

ト奥より前幕の東作袴大小にて、淺黄の袷袱紗に包みし首桶を携へ出で、

仰せに任せ此の品を、持參いたしてござりまする。

〽石田が前へ差出せば、內藏之助に打向ひ、

三成　天下に稀な勇士ゆゑ御身が一命助けたけれど、逆意に與せし上からは助け難きが政治の大法、今日死刑に行へば、これ今生の名殘りゆゑ、此の首級に對面あれ。

トこれにて東作袱紗を取る、首桶出る、利一見て、

利一　して、此首級は、誰人なるぞ。

三成　これぞ則ち御身が主人、明智日向守光秀なるわ。

利一　なに、御主君の首級とや。

幸太　やあ謀叛の棟梁明智が首級、貴殿が自儘に取出し、お咎めあらば何とおしやる。

三成　いゝや三成自儘にいたさぬ、君の御内意うけしゆゑ。

幸太　や、すりやあの首級を。

三成　入らぬお指圖、控へ召されい。

幸太　又候閉口いたすのか、扨々惡い役でござる。（ト幸太夫控へる。）

東作　いざ利一殿、對面あれよ。

〽蓋取りのければ光秀が、きのふに替る果敢なき首級、一目見るより利一が、草葉に結ぶ露ならで、はら〱〱と落涙なし。

ト東作首桶の蓋を取る、内に誂への光秀の切首ある、利一思入あつて、涙を拭ふ、笙の入りたる床の合方になり、

利一　一度惟任將事と仰がれし身も情なや、小栗栖村の間道にて名もなき土民の手に掛り、無念の御最期なされしは嘸御無念にござりませう、只今それがし君諸共、此の首級を街にさらし、冥土の御供仕る。

代助　思ひがけなく光秀公に、お目見得いたす此の代助、冥加に餘る事ながら、見るも哀れな御有樣。

三成　斯かる姿になられしも、主を討ちたるこれ天罰。

利一　よしなき企てありしゆゑ、

代助　將軍とまでなられし御身も、

三成　運命傾く日の岡に、

幸太　並べる首の業晒し、

利一　野邊の千種に花咲きし、

代助　桔梗も今は日に萎み、

三成　露より脆き、

幸太　明智の一族、

利一　思へば果敢なき、

四人　浮世ぢやなあ。

〽夢の浮世を主從が、無念の涙に暮れければ、三成心を勵まして。

ト利一代助首を見て口惜しき思入。

三成　其の歎きはさる事ながら、盛衰榮枯は武門の習ひ、三世の主と諸共に、來世で忠義を盡されよ。

〽名殘りは盡きじと三成が、首桶の蓋をなしければ、

ト三成思入あつて首桶の蓋をする、時の鐘。

幸太　やあ、べん〳〵と時刻が延びる、刑罪の用意いたせ。

四人　はあゝゝゝ。

代助　すりや、旦那様には。

利一　主君と共に日の岡へ、恥辱をさらす身は梟木。

代助　そんならこれが。

利一　乳兄弟の、此の世の別れ。

代助　お名殘り惜しうござりまする。（ト名殘りを惜しむ思入。）

三成　名殘り惜しきは理ながら、

東作　最早死刑の時刻なれば、

利一　猶豫いたさず、汝は堺へ、

代助　とはいへ、此の場を、

利一　え〻、行けといふに。

代助　はッ。

〽是非も涙に立上れば。（ト代助是非なく立上り、下手へ行きかけるを、）

利一　こりや、代助待て。

代助　はッ、御用でござりますか。

利一　辭世の一首倅の許へ。

代助　して、其のお歌は。（ト二人は思入あつて、）

利一　消えて行く露の命の短夜に、あすをも待たず日の岡の峰。（ト三成代助思入あつて、）

三成　消えて行く露の命の短夜に、

代助　あすをも待たず日の岡の峰。

三成　天晴感心、

利一　倅へ傳へよ。

代助　はッ。（トつか〲と花道へ行く。）

幸太　最早刻限。（ト立ちかゝるを留めて、）

三成　用意がよくば、

利一　いざ、御刑罪。（トこれにて代助つか〳〵と跡へ歸るを、利一これを押へるを木の頭、）下さりませう。

トよろしく思入、太撥の時の太皷にて、

ひやうし　幕

ト道具廻しにて、尻明けに、直に引返す。

（日の岡刑罪場の場）――本舞臺正面黑幕、上下松並木、日覆より同じく釣枝、松並木の後ろ藪疊、上の方に誂への立札、下の方に丸物の石地藏、總て日の岡刑罪場の體、爰に非人一、二、三、四の四人、松の木の下へこぞり居る、雨車禪の勤めにて幕明く。

一　今夜ばかりはすつかり晴れて、降りさうぢやなかつたが、今の間に忽ち曇り、

二　雨がばら〳〵降つて來たから、一寸先きも見えねえやうだ。こんな暗え晩はねえ。

三　何にしろ、天氣がいゝので、雨具の用意をしなかつたが、三太の小屋で借りて來よう。

四　さうよ、雨を凌ぐ大木はなし、濡れてもいゝぼろッこだが、ずぶ濡れはどつとしねえ。

一　然したゞの獄門ぢやなし、名高い人の首だから、爰へ打捨つて行かれもしめえ。

二　さう思ふなら氣の毒だが、手めえ爰で番をしてくれ。
三　おら達は三太の小屋で、ちよつと一杯遣つて來るから、
一　外の事なら待つて居るが酒と聞いちやあ待たれねえ、おれも一緒に出掛けよう。
四　雨が降つてるそのうちは、見廻りの衆も來やあしめえ。
二　ちつとも早く三太の小屋で、
三　一升買つてあほつて來よう。
一　もう咽喉がぐびつくやうだ。
四　意地の汚ねえ奴だなあ。
ト禪の勤めになり、四人わや／＼と上の方へはひる。時の鐘を打込み、誂への唄淨瑠璃になる。
〽村雨の降るは涙か雲よりも、晴れぬ思ひの胸とぢて、月なき宵の木下闇。
ト本釣鐘を打込み、花道より藤波、利一の妻、好みのこしらへ一本差し、手拭を冠り、赤合羽を着、饅頭笠をかざし出來る、跡よりはなれて以前の九郎藏、頬冠り尻端折りにて窺ひ出る、藤波花道にて思入あつて、
藤波　思ひがけない村雨に、軒端を借りし其家は、以前は武士の果てなるか、世に頼もしく語らひて、

惠みくれたる此の雨具、幸ひこれで姿を忍び、爰まで尋ね來れども、我が夫梟首に掛りたまふ日の岡といふ其山は西か東か行き惱めど、道を問ふさへ落人の人目を憚る身の上に、小笹のそよぐ音さへも、若し追手かと驚かされ、心ならざる浮世ぢやなあ。

〽頼む小陰も夏の夜の、草葉に群がる螢火を、よすがに辿る繩手道。

ト藤波思入あつて行きかける。跡より九郎藏來るゆゑ、はツと思ひ振返り見る、九郎藏べつたり下に居る、藤波心ならぬ思入にて舞臺へ來る、九郎藏跡を附けて來り舞臺にて、

九郎　落人見附けた。（ト藤波に後ろから組附くを振拂つて、）

藤波　こりや、理不盡に何としやる。

九郎　何とするとは知れたこと、夜は往來も稀な日の岡、明智が首を慕つて來るは、言はずと知れた明智の落人、女たりとも生捕つて、羽柴の陣所へ連れて行けば、褒美の金になることだ。

藤波　いえ〳〵わしはそなたの言やる、明智方の者ではない、都の者にて近江の方へ用事あつて參る者。

九郎　いゝやさうは拔けさせぬ、今もおのれが問はず語り、道を聞くさへ落人の人目を忍ぶ身の上と、言つたが何より慥な證據、

藤波　扨は今の問はず語りを、

九郎　聞かれし上は、目串は拔けねえ。

藤波　それ知られたら、是非に及ばぬ。

九郎　さあ、おれと一緒にうしやあがれ。

〽木々の雫のはら〳〵と、追へど拂へど夏蟲の、袖に取附く草の原。

ト九郎藏藤波に組附くを、振拂つて兩人立廻りよろしくあつて、藤波投げのける、九郎藏びつくりして、

やあ、女に稀な腕前は、扨こそいよ〳〵明智の餘類。

藤波　あ、命を取るも殺生ながら。

九郎　何を。（トまた組附くを、）

藤波　助け置かれぬ、此の身の大事。

〽一吹き落す小夜風に、ちぎれ〳〵の雲晴れて、木の間を漏れる月の影。

ト立廻つて、藤波拔打ちに九郎藏を切倒し、あツと倒れる。此の途端上手より以前の代助出來り、藤波に行當り、ちよつと立廻つて左右へ別れ窺ふ、知らせに附き日覆より灯入りの月をおろす、これにて後の黑幕を切つて落す、向う奥深に獄門臺、此上に誂への光秀と利一の首並べあり、向う日の丘の

在體夜るの遠見、兩人この月明りに顏見合せ、

代助　や、あなたは奥樣。

藤波　これ。
〽葉末の露もおちこちに。(ト兩人四邊へ思入あつて合方になり)
思ひがけない、そなたは代助。

代助　して、奥樣にはたゞお一人、いづれへお越しなされまする。

藤波　さあ、御主君諸共わが夫が、此の日の岡へ梟木にかゝりたまふと聞きしより、せめて名殘りに只一目見えんものと夜に入つて、爰へ忍んで來たわいの。

代助　私ことは三井寺で先刻御目に掛りましたが、此の世のお別れ今一度、旦那のお目に掛り度く、これへ廻つて參りました。

藤波　道行く人の噂には、堅田の浦にて敵方の捕虜になりしと聞きつるが、何れへ落行きたまひしぞ。

代助　旦那樣には私方へ昨夜お出でなされし所、訴人あつて敵へ漏れ、多人數にて取圍まれ、終に羽柴の陣中へお引かれなされてござりますが、石田殿の情にて御切腹と極りしところ、主人と共に刑罪に行ひくれよと旦那樣が、お願ひなされて此の梟木。

藤波　すりや梟木に掛けたるは、羽柴方の處置でなく、夫の願ひでありしよな。

代助　何にいたせ奧樣に、爰でお目に掛りしは、盡きせぬ御緣でござりまする。（ト代助九郎藏の死骸を見てびつくりなし）や、此の死骸は。

藤波　それは此身を落人と、知つて狼藉なせしゆゑ、據なう手に掛けしぞ。（ト代助思入あつて）

代助　おゝ、こりや奧樣にはお出來しなされた。よくお手にお掛けなされました。

藤波　此の者を、よく手に掛けしとは。

代助　此奴は馬方九郎藏とて、旦那樣を訴人せし、當の敵でござりまする。

藤波　そんなら敵であつたるか。

代助　これに附けても奧樣が、夜に入りお忍びなされしは、

藤波　明けて言はねど、そなたが來たも、

代助　心は同じ梟木の、

藤波　二つの首級を、

代助　夜半に紛れて、

藤波　あゝこれ、靜に言やいの。

〽哀れを告ぐる寺々の、鐘も雨氣にまた曇り、塒まようて啼く烏。

ト兩人あたりを窺ひ、正面の首を見て愁ひの思入、誂への合方かすめて烏笛になり、

代助　御主君といひ我が夫も、お心からとは言ひながら、ても淺ましい此のお姿。

藤波　嘸御無念でござりませうが、今更申して返らぬこと、せめては二つの此首級。

代助　あたりの寺院へ葬りて、跡懇に弔はん。

藤波　幸ひ雨に張番の、爰に居らぬは天の與へ。

代助　人目に立たぬその内に、

兩人　片時も早く、

代助　おゝ、さうぢや。

〽空も更け行く風の涼しさ。

ト兩人愁ひの思入よろしくあつて、涙を拭ひ、後ろの獄門臺へ立寄ろ、唄の切れ、黑四天の捕手四人窺ひ出で、

捕手　やあ、首盜人だ、出合へ〳〵。

代助　南無三寶。

藤波 見咎められしか。

捕手 それ逃すな。

三人 合點だ。

ト禪の勤めにて打つて掛る、藤波代助立廻つて、竹笛入りの鳴物になり、これを相手に立廻りのうち獄門臺の首をおろし、これを枷に立廻り、トヾ代助藤波引き据ゑられる、此時上手の藪を押分け以前の三成、忍び頭巾野袴ぶつさき羽織大小にて出で、捕手をさゝへ、立廻つて投げのける。これにて捕手下手へ逃げてはひる。此内兩人臺より二つの首をおろし、藤波は光秀の首、代助は利一の首を盗む。此時知らせに附き月隱れ、時の鐘、凄き合方になり三成、代助、藤波ちよつと立廻り、トヾ藤波は花道、代助は東の假花道へ行く、捕手一人出て、

捕手 曲者。

藤波代助 え。(トぎつくり思入、三成捕手を當てる、これにて月出で、)

三成 取逃したか。(ト捕手見事にぼんとかへるを、木の頭、)殘念な。

ト頭巾を取り、早く行けといふ思入、兩人片手で拜むをよろしくキザミ、山おろし、カケリにて、

ひやうし 幕

ト幕外、本釣鐘三重にて、兩人首を見て愁ひの思入あつて、これを抱へ花道へはひろ。留の木にて、
シヤギリ。

大詰　　大德寺燒香の場

〔役名――羽柴筑前守久吉、宅間玄蕃盛政、北畠中將信雄、多喜川左近將監一益、星崎長門守、津田監物、神戸侍從信孝、加藤虎之助正淸、片桐助作吉辰、平野權平政景、藍田德善院、安部仁右衞門友行、福島市松正則、長谷川丹後守義豐、笑嶺禪師、前田又左衞門利家、柴田修理助勝家、三法師丸、遠山近江守友成、佐々木陸奥守成政、山岡對馬守宗員、不破彦三元治、筒井順慶淸秀、大德寺の役僧珍念、同雲念等。〕

(大德寺門外の場)――本舞臺向う一面練塀の道具幕、日覆より松の釣枝、大德寺門外の體、爰に廐上下股立大小の侍、下手に同じく〇口の二人菖蒲革袴股立一本差しの足輕、六尺棒を持ち立ちかゝり居る、此の見得禪の勤めにて幕明く。

侍　こりや其方達は當寺の、門外警衞の御役目蒙りし、小西別所生駒殿の御家來なるか。

○　仰せの如く私共は、今日の御法會に、門外の御固め仰せ附けられました、

△ 則ち小西彌太郎が、足輕共にござります。

侍 それは御苦勞千萬にござる。今日の御法會は恐れ多くも先君たる、總見院樣御親子の七々日の御追福、我が主人羽柴殿惣奉行を勤むれば、當寺内はいふに及ばず寺外までも心を配り、警固の樣子見廻れと、主命によつて見廻る我々、流石は三家の御持ち場所、行屆いたる警固の手配り、大切なる御法會ゆゑ、猶も嚴重にお見廻り下されい。

○ その儀はわれ／＼主人より、絶間なく見廻りますやう、申附けにござりますゆゑ、

△ 三家の者ども替る／＼、大道は申すに及ばず、小路々々の裏々まで、

兩人 見廻りますやうにござりまする。

侍 未明より衆僧達御回向の御讀經、只今御供養最中なれば、神妙に警固いたされよ。

兩人 心得ましてござりまする。

ト右の鳴物にて、侍は下手へ、足輕兩人は上手へはひる。鳴物打上げ、床の淨瑠璃になる、

〽名にし負ふ淨土の雲の紫野、伽藍尊き大徳寺、今日ぞ先君七々の御忌を弔ふ久吉が、千僧供養の追福に、五畿七道の大小名列を正して參詣は、世に珍らしき大法會。

ト寺鐘を打込み、知らせに附き正面の道具幕を切つて落す。

（大德寺本堂の場）――本舞臺五間の間常足の二重、蹴込み黑塗框、銀張り彩色畫、朱塗りの丸柱、根元鍍金彫物金もの附、上下一間の間に同じ柱、白錦の緞帳をおろし、此所ではひり、高梁下彫物彩色欄間、前面へ瓜に唐花の紋附きし紫の幕を絞り上げ、この正面御簾をおろし、東西の棧敷朱塗りの柱、繧繝彩色の欄間、紫の幕を絞り、向う正面屋根の軒を見せ、軒下白壁にて見切り、屋根の上膝隠しの前側一面に楷を見せたる山の切出し、揚幕の前一面繧繝彩色の欄間、白錦の紐を掛けしを畫心に飾り、舞臺花道とも高麗縁の薄緣を敷き詰め、總て大德寺本堂の體。二重上手眞中に北畠信雄、裝束、烏帽子、指貫、小さ刀、右に柴田勝家、烏帽子、小さ刀。左に宅間玄蕃、烏帽子に大紋、小さ刀。後に尾崎長門守、熨斗目、上下、大小。下手眞中に神戸信孝、裝束、烏帽子、指貫、小さ刀。右に多喜川一益、烏帽子、大紋、小さ刀。左に津田監物、熨斗目上下、大小にて居並び、平舞臺上手に筒井順慶、長谷川義豐、福島正則、同じく下手に安部友行、遠山友成、不破元治等、いづれも烏帽子、大紋、小さ刀にて居並び、銘々の前に、白木足附の目錄臺に、香奠の包みを載せたるを置き、下手に珍念、雲念、袈裟をかけし僧にて控へ居る、此の見得音樂にて道具納まる。

勝家 今日ツた先君總見院殿、七々日追福の法會によつて、先づ第一に御連枝たる、

信雄 北畠中將信雄。

長門　附添ひとして家老星崎長門守。

信孝　神戸侍從信孝。

監物　附添ひとして家老津田監物。

勝家　織田家の元老柴田修理亮勝家。

一益　瀧川左近將監一益。

盛政　宅間玄蕃之亮盛政。

利依　畠山甚内利依。

友行　安部仁右衞門友行。

元春　不破彦三元春。

友成　遠山近江守友成。

宗員　山岡對馬守宗員。

成政　佐々木陸奧守成政。

順慶　筒井順慶。

勝家　一同參詣、

皆々　仕つてござる。〽柴田を始め一同に、演舌あれば、役僧手を突き、（ト皆々思入。）

珍念　これは〳〵何れも方には、今日の御法會に早朝よりの御參詣、御經讀誦の御供養、御殘勝に存じ上げます。

雲念　程なく笑嶺禪師には御靈前の勤行終り、御燒香濟み次第、御挨拶申し上げまするやうにござります。

珍念　此儀別席に伺候ある、外樣譜代の大名方、並びに諸藩の方々へ、申入れましてござりまする。

勝家　御叮嚀なる御挨拶、何かと御配慮相掛け申す。（ト此時大名　皆々思入あつて、）

順慶　柴田殿の御前に於て、憚り多くはござれども、

友行　今日七々日の御法會に附き、

元春　總見院殿御牌前へ、斯く申す拙者共より、

宗員　御香奠獻じ奉り度く、

成政　持參仕つて候へば、

利依　よろしく御披露、

皆々　願ひ上げ奉りまする。

〽白木の臺を差出せば、柴田は目錄打見やり、（ト目錄臺を出す。勝家思入あつて、）

勝家　これは〳〵御叮嚀なる御香奠、亡君にも嘸お悅びあらん。なに役僧衆、諸家方よりの御香奠、御靈前へ供へられよ。

珍念
雲念　畏つてござりまする。

〽衆僧は目錄携へ、牌前さしてぞ入りにける。

ト兩人の僧、目錄臺を捧げ持ち、下手純帳の內へはひる。跡に勝家思入あつて、

〽跡に勝家座を直し、

勝家　如何に方々、何と思はるゝか存ぜぬが、今日當大德寺に於て亡君御父子七々日の大法會を營むこと、小田家隨一の元老たる此の勝家に、一應は相談あるべきを一向に沙汰に及ばず、諸事久吉が一個の計らひ、人もなげなるけふの振舞、彼れ憎しと思へども御法會に出逢はずば天下へ對して濟まざるゆゑ、腹をさすつて出仕はしたれど、見ること聞くこと心に障り、思へば憎きあの猿冠者。

一益　貴殿の仰せ御尤も、いつもながら柴田殿を蔑ろにする久吉め、たゞ山崎の一戰に勝利を得たを鼻

にかけ、人を人とも思はずして、古老を差置き自儘の計らひ、新參古參の禮儀を知らぬは、流石は匹夫の成上り、かたはら痛い事でござる。

盛政　いくら勝利を鼻にかけ、高慢ぶつても根が山猿、此の程清洲で酒宴の折居並る諸侯の其中で、柴田殿の肩腰を、導引なせし大たはけ。

順慶　宅間殿の言はるゝ通り、智勇勝れし羽柴殿、

友行　是れが木下藤吉とて足輕組の昔なら、

元春　執權職の柴田殿の肩腰揉むもよけれども、

友成　播摩美作備前丹後今四ヶ國の領主となり、

宗員　探題職を勤むる身が、

成政　導引ありしは心得ず、

盛政　それも以前の恩人ゆゑ、肩腰揉んだでござらうが、追從すぎた諂ひ武士、これで大概久吉の腹の内は知れてござる。

〽己が愚を知らずして、人をさみなす其折柄、役僧一間を立出でゝ。

ト下手より以前の珍念出來り、

珍念　はッ、最早御追福の御供養終れば、笑嶺禪師御靈前にて、御拈香の式仕るやうにござります。

ト言ひ捨て引返して下手へはひる。

信雄　すりや、御回向の勤行終り、

信孝　禪師御靈前へ越さるゝとや。

長門　さすれば是れより席順の、

監物　次第を以て亡君へ、

勝家　加何にも御燒香に及ぶべし、方々左樣心得られよ。

成政　委細承知、

皆々　いたしてござる。

〽時しもこなたの純帳より、法衣を正し笑嶺禪師、附添ふ僧侶は會釋して、牌殿の翠簾かゝぐれば、金色輝く須彌檀に法號記せし御位牌、蓮のともし火煌々と、金露の香氣滿ち〳〵て實に千佛の影向も、斯くやと思ふばかりなり。

ト此うち銅鑼鐃鉢、チヤツパ、磬の音をあしらひ、以前の珍念、雲念先きに立ち、笑嶺禪師結構なる法衣、九條の袈裟を掛け、帽子を冠り水晶の珠數を手にかけ、拂子を持ち、後より子役三人、僧のこ

しらへにて一人は柄香爐、一人は香合を持ち、一人は白木の經机に經卷を載せたるを持ち附添ひ出來り、珍念雲念正面の翠簾へ手を掛ける、これにて翠簾を捲き上げる、兩人シイと制し聲を掛ける。此うち向う奥深に、前側の柱と同じく朱塗りの柱、間毎に銀張附黑緣の瓦燈口、障子、灯入りの誂へ、欄間へ白地の幔幕を絞り、正面奥の所に箔置の須彌壇、この上に屋根附の臺、箔置の大位牌、これに總見院殿大相國一品泰岩彈安禪定門と記し、此前よき所に雲あしの大机に錦の打鋪を掛け、此上眞中に金獅子の大香爐、左右に金銀七寶の花瓶に金の蓮華、銀の沙羅双樹を立て、白木緣高四ツ足附の折敷、又三方へ種々の供物、白木の木具の膳部を供へ、左右に百八蓮燈を灯し、位牌の上の欄間へ硝子の翠簾を少し見せ、此うちに金欄の幔幕を絞り、總て位牌堂の掛り、大机の前に高麗緣の二疊臺、笑嶺みな〳〵へ辭儀をなし、正面二疊臺へ上り、香を炷くことあつて、後向きになり、經卷を開き唱へる思入あつて、

〽捻香終れば、禪師は座に附き。(ト笑嶺平舞臺へ下り、皆々へ向ひ)

笑嶺 御連枝御家門は申すに及ばず、列侯の方々今日の御法會、總見院殿御靈位に於ても嘸かし御滿足に思召されん、御修行も滯りなく相濟み此上もなく存じ申す、客殿に於て御休息の節別段御挨拶仕るでござらう。

勝家　禪師には今日の勤行、御苦勞千萬に、

皆々　存じ申す。

笑嶺　後刻御意得るでござらう。

〽一揖あつて笑嶺禪師、一間の内へ入りにける。

ト笑嶺先きに立ち、子役の僧附添ひ、下手緞帳の内へはひる。

〽折から向うに呼びつぐ聲。（ト花道の揚幕にて）

呼び　左枝又左衞門利家參詣。

勝家　なに、左枝利家、

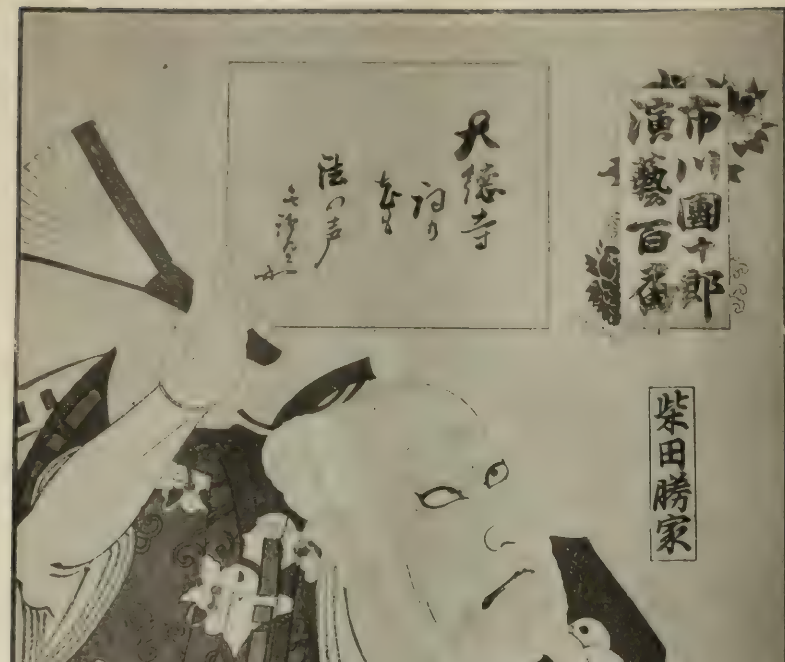
皆々　參詣とや。

〽程もあらせず左枝利家、武道を表に立烏帽子、大紋の袖たぶやかに牌殿指して入來れば。

ト花道より利家烏帽子大紋小さ刀にて出來る、跡より子役上下の小姓、白木の臺に乘せし香奠の目錄包みを持ち出來り、花道に留まる。

勝家　これは〳〵利家殿には、

盛政　只今參詣、


市川團十郎
演藝百番
柴田勝家

皆々 召されしか。

利家 御公達方を始めとして柴田氏、何れも方早朝よりの御參詣、御苦勞千萬に存じまする。それがし持病の癪症にて、思はぬ遲刻いたしてござる。

勝家 未だ御燒香濟まざれば、遲刻と申す儀もござらぬ。

盛政 御遠慮めされず、これへ〳〵。

利家 然らば御免下されい。

〽威儀を正して靜々と、靈前近く座に附けば、

ト利家思入あつて舞臺へ來り、平舞臺眞中へ住ふ。

勝家 利家殿には遠路の所遙々との御上京、長途の御苦勞嘸かしと存じ申す。

利家 柴田氏にも御同樣、疾くよりお尋ね申すべきを、かれこれ所用に取紛れ其儘に過せし段、失敬御容赦下されい。

勝家 痛み入つたる御挨拶、此方よりも使者さへ立てず、

盛政 同じ京地にありながら、我々どもゝ御無音のみ。

一益 疎遠の段は御同然、

順慶　此方よりも左枝氏へ、
友行　お詫びいたさにや、
皆々　相成らぬ。
　〽互ひに禮儀の詞終り、打ちくつろいで利家が。（ト皆々思入あつて、）
利家　扨亡君信長公は四海に轟く御名將、御武德の廣大なるは今日の大法會に、五畿七道の大小名我れ先にと上京なし、洛中洛外辻々まで多人數ならぬ所なきは、御逝去後までも織田家の御威光誠に草木も靡くが如し、古今に稀なる事でござる。
一益　利家殿の仰せの如く、これ皆先君信長公、鬼を欺く御勇氣ゆゑ、
順慶　六十餘州あらかたは、幕下に屬し敵たふものなく、
友行　逆臣明智を討滅ぼせば、織田の御家は萬々歲、
成政　大慶至極に、
六人　存じまする。
勝家　然し北國西國は未だ平穩ならざれば、御正統でも天下の繼目、三法師殿では役に立たぬ。
成政　信雄卿信孝卿御兩君のその中にて、御家督あらば大丈夫。

信雄　何は兎もあれ笑嶺禪師、御捻香終りし上は、

信孝　總見院殿の御牌前へ、御燒香仕らん。

長門　して御順次の、お指圖は、

監物　誰がなさるゝな。

長門　御順次のお指圖は、德善院殿と承はる。

友行　最早刻限でござるのに、何故御出席がござらぬか。

勝家　いや、其の順次待つに及ばぬ、御正統の事なれば先づ第一が御公達、續いて織田家の古老ゆゑ、柴田を始め多喜川殿、それ〴〵家の格により御燒香いたすがよい。

一益　柴田殿の仰せの如く御兩君を始めとして、我々御燒香いたすとも、兎やかう申す者もあるまじ。

盛政　もし又拒む者あらば、此の玄蕃が相手となり、一捻りにひねり殺さん。

〽勢ひ掛れば利家が、

利家　執權職のお詞を返すは近頃失敬ながら、亡君御父子の御法會は恐れ多くも御正統たる三法師君の御營み、萬事は羽柴久吉殿が取り行はるゝ御追福、その施主を差しおいて御燒香なさるゝは如何かと存ずるゆゑ、久吉殿出席まで、暫時御猶豫なさるゝが、よろしからうと存じ申す。

勝家　其の儀は氣遣ひめさるゝな、久吉萬事を行ふとも織田家に於て古老たる、柴田が差配いたすのに誰が何と申さうぞ。

一益　臣下といへど勝家殿は、亡君の御妹君を奥方となしたまへば、御連枝方も同然なり。

盛政　猿冠者づれがじたばたしても、所詮及ばぬ事でござる。

利家　家の格では小身より登庸なせし久吉殿ゆゑ、所詮及ばぬ事ながら、亡君の御追福たるこの御法會につきましては、久吉殿の指圖を受け、御燒香なされずばなるまいかと存ぜられまする。

勝家　なに、猿冠者めが指圖を受けねば、燒香がならぬとは。

盛政　何故あつての事でござる。

ト角めだつて問ひ掛くれば、

利家　其の仔細別儀にあらず、亡君御父子を討ち奉りし怨敵明智光秀を時日移さず山崎にて、たゞ一戰に討ち滅ぼせしは久吉殿の手柄にして、織田家へ對して大忠節、此の一戰に出張なく明智に一矢も報はざる方々、せめて安土の城なりと取返し召さるゝか、左なくば日野へお出であつて御臺所三法師君御二方を御守護あるか、又は御葬送七々日の御追福の營みあるか、何か一ッ亡君への御忠節の廉あらば執權職の事ゆゑ御燒香の御指圖御尤もに存ずれど、右御葬送御追福も皆久吉殿の

計らひゆゑ、これを差置き御燒香の御指圖あつて、若し久吉殿に右等の儀を問ひ詰められし其時に、御返答も如何やと存ずるゆゑに利家が、御隣國の誼を以て斯くお止め申してござる。

〽理を盡したる一言に、瀧川賓にもと思へども、柴田佐久間は餘所に聞き、

ト一益外大名尤もだといふ思入、勝家盛政思入あつて、

勝家 隣國の誼を思ひ御親切なる御異見ながら、一旦斯うと言ひしこと、是が非でも貫き申す。

盛政 猿冠者めが兎やかく申せば、腕づくでも燒香いたす。（ト盛政きつとなる、利家思入あつて、）

利家 然らば各々御勝手次第、拙者は未だ御香奠を御靈前へ供へねば、笑嶺禪師に對面なし、後刻順次の御沙汰を待つて、御燒香いたすでござらう。

勝家 猿と犬とは下世話にも仲の悪いものといふに、それに引替へ其許は以前のお名に似もやらず。

盛政 犬清殿が猿冠者に、恐れて此の場を退かるゝとは、近頃以て卑怯至極。

利家 卑怯至極とお笑ひあるとも、道を立つるが左枝の家風、お詞背くは御免下され。

勝家 犬と猿との引事はほんの此場の座興ゆゑ、

一益 お構ひなくと御靈前へ、

利家 左様ござらば柴田氏、

勝家　利家殿、

利家　何れも方、御免下され。

ト禮儀正しく利家は、奥殿さして入りにける。（ト利家皆々へ思入あつて下手緞帳の内へはひる。）

勝家　臆病者の左枝利家、猿冠者めに告ぐるは必定。

盛政　御兩君には片時も早く。

ト燒香促す其所へ、德善院立出でゝ。

ト下手緞帳より、德善院散髪鬘、白衣白袴にて白木の三方の上へ順次書の巻物を載せ、これを持ち出來り、下手よき所へ住ひ、皆々へ會釋なし、

德善　これは〳〵御連枝方を始めとして、何れも方には今日の御參詣御苦勞に存じまする。御燒香順次の儀、德善院申上ぐるでござりませう。

ト巻物取つて押開きしが、席を憚る順次の表、元の如くに巻き納め、默然として控へ居る、柴田は見るより不審を立て、

ト此うち德善院巻物を開き見て、讀み兼ねる思入あつて、元の通りに巻納め、三方へ載せ目を閉ぢ控へ居る、勝家心得ぬ思入にて、

勝家　藍田殿、玄以法印、持參なしたる順次書き、なぜ疾く〳〵と讀まれぬのだ。

盛政　猶豫いたさず、讀み上げめされい。

〽言へども何の答へもなければ、

勝家　こりや放心せしと相見える。只今もいふ如く順次書き讀むに及ばぬ、第一の御燒香は北畠殿を差置いて、先に立つべき者のあらんや。何といづれも、左樣ではござらぬか。

盛政　御尤もなる其お詞、春長卿の弟君、御血統の隨一たれば、誰御批判を申さうぞ。

長門　我君、御燒香あられませう。

〽言ふに監物こらへ兼ね。（ト監物思入あつて、）

監物　あいや信雄卿の御燒香第一とは心得申さぬ、我主君神戸殿は、官位も低う弟君に渡らせたまへど故春永公御同腹の御舍弟、官位の高下にかゝはらず、正道の順序こそ願はしく存じまする。

長門　詞道理に似たれども御兄弟差別あり、たとひ御本腹にもせよ、信雄公は兄君なれば、御燒香は第一番かと存じます。

監物　たとひ兄君にもせよ、神戸殿には亡君の御鬱憤を晴らさんと弔ひ戰に出陣なしたまひ、戰場に於て軍功あれど、北畠殿は其儀なければ我主君こそ第一番、これに批判のござらうや。いざ、我が

君御燒香遊ばされませう。

長門　いゝや、元老方のお詞といひ、我君が第一番。

監物　やあ、理非辨へぬ星崎長門、今一言申して見よ。

長門　主人に恥辱を與へる監物、手は見せぬぞ。

監物　小癪なことを。（ト長門、監物詰め寄らうとするを、）

一益　やあ兩人控へめされい、大切なる御法會に御牌前をも憚らず、爭ひめさるは尾籠でござるぞ。

兩人　ぢやと申して。

一益　えゝ、控へ召されい。

兩人　はゝはツ。

ト　はツとばかりに控ゆれば、兩公達は聲あらく。

信雄　やあ、星崎長門、多喜川殿の詞の如く御牌前をも憚らず、方々の手前面目なし、益なき事にて主にまで恥辱を與へる粗忽者めが。

信孝　津田監物その方も、御法會の席も辨へず、星崎同樣無禮の高聲、きつと蟄して罷りあれ。

信雄　疾く〳〵この席、

兩人　下り居らう。

長門
監物　恐入りましてござりまする。（ト下へおりる。）

盛政　あいや御兩君の御怒り御尤もにはござれども、互ひに主君を思ふの忠節、殊に今日の御法莚には大赦を行ふ折なれば、此の盛政がお詫びを申す、粗忽の段は此の席限り、御料簡下さりませう。

信雄　此儘許しがたけれど、外ならぬ宅間が詫び、

信孝　殊には法會の席ゆゑに、粗相は許し、

兩人　遣はすぞ。

長門
監物　はゝ、有難く存じ奉ります。

〜一禮なして席に直れば、一益席を進み出で。

ト長門守、監物、盛政一益に辭儀をして、元の座へ坐る。

一益　此上は御兩君一二の順を申さうより、日本國を半分づゝ預かりたまふ御身の上、御一同の御燒香こそ然るべく存じ奉る。

勝家　何さまこれは一益殿、よくこそ心附かれたり、御兩君御一同に御燒香あれば甲乙なく、平等の計らひ方、いざ押並んで御牌前へ、

一益　御燒香、

皆々　下されませう。

信雄　然らば御同伴、

兩人　いたすでござらう。

〽威儀を正して兩公達、立たんとしたまふ折も折、遙の奥に聲あつて。

ト信雄信孝へ長門守監物香包みを出し兩人に渡す、兩人立上らうとする、此の時上手緞帳の内にて、

久吉　やあ〳〵御兩所、燒香暫く〳〵。

信雄　今兩人が燒香を、

信孝　暫しと聲かけ、

兩人　止めしは、

盛政　何奴なるぞ。

久吉　羽柴右近衞の少將久吉、それへ參つて演舌なさん。

盛政
一益　何が何と。

〽にらみ詰めてぞ控へたり。程もあらせず羽柴久吉、威儀堂々と衣冠を正し、三法師君を抱

きまゐらせ、附添ふ士卒も獨歩の英雄、泰然として出來る。

トこれへ誂への音樂を冠せ、純帳を巻き上げる、上手奥深に本堂の道具、上手に久吉冠り裝束附太刀、裾を後へ挾み、子役、冠、白の裝束三法師君のこしらへ、これを肩に抱き上げ、襟に笏を差して立身、續いて利家烏帽子直垂にて附添ひ、此跡へ加藤正清、福島正則、片桐且元、平野長安四人とも熨斗目の上下、股立、大小小手臑當、着込みなりにて左右に控へ居る、勝家これを見てきつとなり、

勝家　やあ、羽柴久吉には、常に替りし今日の出立ち、

盛政　して、兩公達の燒香を、

一益　何故あつて、

三人　止めしぞ。

久吉　小田家の御相續、御正統の御家督なる、三法師君を差置いて、自儘の燒香誰が許せしぞ。

三人　むゝ。

久吉　抑々今日の大法會は御幼君の思召し、それがし命を蒙りて諸事萬端の執行に、順次を待たず自儘の仕方、それゆゑお止め申せしが、此の久吉が誤りなるか。

三人　さあ、それは。

久吉　よも、御批判はござるまいがな。
三人　むゝ。（ト三人控へる。）
久吉　如何に方々、忝けなくも法會の大施主は、則ち亡君の御相續三法師君に渡らせたまへば、御拜謁然るべう存ずる。
皆々　はゝはッ。（ト大名皆平伏する。）
義豐　それがしことは御侍、長谷川丹波守義豐。
正淸　續いて次に控へしは、左藤虎之助正淸。
正則　福島市松正則。
且元　片桐助作且元。
長安　平野權平長安。
正淸　幼君守護に附添ふわれ〳〵。
正則　無禮過言の狼藉あれば、
且元　どいつこいつの容赦はねえ、
長安　片ッ端から引捉へ、

正清　手玉に取つて、
四人　捻り殺すぞ。
＼勇威を顯はす兵士ども、こなたの諸侯は手をつかへ。
ト　これにて盛政きつとなる、勝家留める。大名皆々思入あつて、
友行　羽柴殿には御役目御苦勞。何はともあれ、先づ〳〵。
大名　お席へ。
久吉　然らばそれへ參るでござらう。
＼脇目もふらず久吉が、牌前近く座を進め、重ねて前田を打見遣り、
ト　此うち久吉三法師君を義豊へ渡し前へ出で、久吉義豊高床几へかゝる。四人は後に控へる、久吉思入あつて、
前田殿には何故あつて、順次書を讀みたまはぬ。
徳善　はツ、順次書披講の役を以へ仰せられしゆゑ、讀上げんと一見せしに御席を憚る順次ゆゑ、差控へてござる。
久吉　正路の順次に誰あつて批を打つものゝござらうや、久吉これに控へをれば、心置きなく讀み上げ

たまへ。

徳善　はッ、委細承知いたしてござる。

〽件の卷物取りあぐれば、氣早の勝家怺へかね。（ト徳善院卷物を取上げる。）

勝家　いやその順次讀み上ぐるに及ばぬ、玄以法印が席に憚ることありと言ひしは正しく自盡の順次、勝手に極めたに相違ない、其の證據には冠装束誰が許して着したのだ、生れ立から小才覺の猿智慧に今日の法會に參着せし大小名へ權威を見せんと、白痴脅しの冠装束、柴田はその手は喰はぬ。さあ、いつ官職を蒙つた。

成政　日頃辯者の羽柴殿ゆゑ、支那天竺の王からでも、許されたと言ひ拔け召さるか。

一益　たとひ富婁那の辯舌で鷺を烏と言ひくるめても、此の言譯はござるまい。

〽嘲けり笑ふを事ともせず。

久吉　事をかしき咎め立て、おほけなき冠装束、誰が官位に昇らずして濫りに着するものあらんや。

勝家　して〳〵それは何時許された、言譯なくば勝家が、その分にはいたさぬぞ。

盛政　冠装束引き剝いで、赤恥かゝしてくれようか。

〽傍若無人に立寄るを、久吉見遣りてはッたと睨み、

久吉　やあ、我に向つて尾籠の玄番、官職の許しなきに何故衣冠を着さうぞ、則ち此度三法師君三位中納言の官職を禁庭より賜はりしは天下の跡目なる故なり、久吉小田家の大老となりて、京都守護は言ふに及ばず天下平穏に鎮めよと、忝けなくも勅諚にて四位の中將に任ぜられたり、然れども所存あつて今日までその沙汰せざるは、各々の心底心得ず、不忠を見出さん爲なるわ。

勝家　すりや久吉には朝廷より、小田家大老の命を蒙り、

盛政　四位中將を許されしとか。

久吉　疑はしくば宣命の、御書をこれにて讀み上げうか。

勝家　さあ、それは。

久吉　斯く申すをも久吉が、僞りと思はるゝか。

勝家　全く以て。

久吉　僞りとは思はれぬか。

勝家　さあ。

久吉　勅命疑ふ無禮者めが。

〽寺内に響く一聲に、無念を怺え控ゆれば、

徳善　最前より餘程の間、御幼君には片時も早く、御燒香あつて然るべし。

久吉　御燒香相濟みなば、諸侯方には歸府の御暇、時刻移さず丹後殿、御幼君の御燒香。

義豐　心得ましてござる。

勝家　いや、其の御燒香罷りならぬ。

義豐　成らぬとは、何ゆゑに。

勝家　この勝家が不承知だ。

義豐　一天下の武將の燒香、不承知とは勝家殿、御幼君ゆゑ侮り召さるか。

勝家　いや侮りはいたさぬが、武將呼はり氣に喰はぬ。如何に筑前、三法師丸を御家督とは、これ汝が自儘の計らひ、改めいふには及ばねど我は織田家の舊臣にして、殊には亡君の妹君を妻となせば外戚といひ長臣たる此の勝家に示談もなく、御家督定むる内心は、言はずと知れた逆臣久吉。

盛政　勝家殿の言はるゝ如く、正しく織田家の御連枝たる、北畠殿、神戸殿兩公達を差置いて、乳の香も失せぬ三法師殿を、御家督と言ひ立つるは、己が權威を揮はん巧み。

勝家　餘人は知らず老臣たる、此の勝家は不承知だ。

〽おのが我を押通す勝家が、威猛高に罵れば、久吉公はあざ笑ひ、（ト久吉思入あつて、）

久吉　蟹は甲に似せて穴を掘ると世の諺に申す如く、勝家おのが愚昧なる心に比べし今の一言、たとひ外戚古老たりとも國家に功なき腰抜武士に、誰が示談に及ぶべきぞ、身に功なきを顧みて大言を愼まれよ。

勝家　やあ腰抜け武士とは奇怪至極、數度の戰場往來して國家に功のあればこそ、身に餘る高祿を領し今北國の旗頭と人も敬ふこの柴田を、よく腰抜けと申したな。

盛政　事新らしく申さずとも、誰しも知つた鬼柴田、年は取られても戰場で後ろを見せぬ勝家殿、腰抜けとは何の囈言、今一言いつて見よ、盛政聞き捨てにいたさぬぞ。

勝家　何らのゆゑに勝家を、腰抜け武士と申せしぞ。

久吉　腰抜け武士と申したが、お氣に障らば笑止千萬、誰しも人の非を擧ぐれどその身のことは知れざるもの久吉逐一申し聞かさん。（ト誂への合方になり、）勝家汝亡君の許しもなきに越後を攻めんと既に出陣なすといへども長尾の爲に敗北なし、辛き命をながらへて領地越前へ引取りし其折、亡君本能寺にて討たれたまひし事を聞き、卽刻都へ馳せ登り弔ひ合戰をなすべき所、若狹まで出でたれど諸勢の來らざるゆゑ、明智方の大軍に恐れ又々跡へ引返し、弔ひ合戰の間に合はざるは、腰抜け武士であるまいか。

勝家　やあ言ふな久吉、此の勝家も北國より夜を日についで馳せ登り、只一戰に光秀を亡ぼさんとは思へども、前に北條氏實あり後に長尾景勝ありて、前後に强敵あるゆゑに身動きならず、是非なくも出張延引いたしたり。

久吉　それぞ御身が愚昧ゆゑ無駄に時日を過せしなり、我も其時君命うけ西國にあつて合戰最中、既に高松を攻落せしが都の變を聞くと其儘敵へこの事を打明し、和睦をなして加勢を頼み直に都に馳せ登り怨敵明智を討滅ぼしたり、互ひに敵地に居る同然、なぜ和睦なして登られぬぞ、織田家累代の元老とて人に勝れし祿を取り一門の列に加はりながら、主人の大事を餘所になせしは不忠不義の人非人、腰拔け武士と申したが、此の久吉が誤りなるか。

勝家　はゝゝゝ、物いふ爲に明いた口とてよくも人非人と申したな、流石匹夫の羽柴久吉、人として恩を知らぬはこれ畜類と同然なり。さいふわれこそ人非人、今それがしが申さずとも人も知つたる匹夫の藤吉、馬の口取り草履取り、お茶坊主から經上つて今四ケ國の領主となり、中國探題の職となり斯くまで奴が出世したを推擧なせしは此の勝家、その大恩を打忘れ、ある事ない事言ひ罵るは、恩を知らざる人畜生、人でなしとは汝が事だ。

盛政　その山猿の冠裝束、身にも應ぜぬ官位をうけ、人もなげなる大言はこれが所謂猿利口、やがて其

身に面よりは、眞ッ赤な恥をかゝしてくれう。

久吉 此の久吉に一言半句返す詞のあらざるゆゑ、昔を數ふる愚昧の勝家、それに隨ふ宅間多喜川、かの千疋の鼻かけ猿が、一疋の眞猿を笑ふに等し、我が古へを思ふがゆゑに御身に對し仇をなさず然るに偏執の心より、我が勤功の出世を妬み、佞人共と心を合せ、あわよくば久吉を亡きものにせん底企み、疾よりそれを知るといへども、私の意趣を立つるはこれ不忠の第一なれば、是れまで口外なさゞれども織田家繼目の大切ゆゑ、汝が不忠の一二を擧げて非義を責めるは誡めにして、信義を捨てぬ我が寸志。

勝家 諫めなどゝはかたはら痛し、一理窟したけれど私事は捨て置いて、今日の法會の第一たる燒香が肝要なり。假令家督が三法師にせよ、兩公達は則ち後見、御家督も同然なれば、一の燒香順道なり。いざ北畠殿、御牌前にて燒香あられよ。

久吉 いや、北畠殿の御燒香は、亡君尊靈のお心に叶はぬ。

盛政 なに、北畠殿の御燒香が、

長門 亡君の御心に、

兩人 叶はぬとは。

久吉　先づ北畠殿は御燒香より、御牌前にて御詫あるべし。
信雄　この信雄に、御詫びせよとは。
久吉　信雄卿には御性質柔弱なるお産れゆゑ、既に御出陣に及びながら臆病風に誘はれたまひ、明智が清洲へ寄せもやせんと二萬餘の人數を隨へ敵に向はず坂の下より引返されしは何事ぞや、亡君大事に思召されし安土山を明智に取られ口惜しくはおぼさずや、殊には又御臺所日野に退散したまふを御迎ひにも出でたまはず、亡君御遺骸を尋ねたまふ氣色のなきは明智を恐るゝ臆病ゆゑ、下下の諺にさへ子は親の骨を拾ふものと申すぞかし、敵に向つて一矢も射ず、月忌佛事の御沙汰もなきはこれ不孝の第一なり、假令御子たればとて、御詫びなくては御牌前へ近附きたまふ事叶はじ。
一益　然らば神戸信孝卿、
監物　御燒香遊ばしませ。
久吉　いや、神戸殿も御詫びなくては、御燒香は罷り成らぬ。
信孝　この信孝も同樣に、御牌前へお詫びせよとは。
久吉　信孝卿には亡君の仰せに依て鷺の森へ、討手に向ひたまひしかど、其功もなくすご〳〵と尼ヶ崎

へ引取つて、空しく數日を送り、我が上洛を待ち兼ねて攻め登りたまふのは、人を頼みの臆病ならずや、倶に天を戴かぬ父の仇を猶豫なすは、北畠殿と同論なれど山崎へ出陣ありしにて聊か御怒りは薄くなれども、御相跡を爭はれ御追福の營みなきは、これ不孝の第一なり、信雄公と同樣に功臣の跡に附いてお詫びの上、御燒香あつて然るべし。

一益　すりや御血統の御公達、御兩君とも此の場にて、

盛政　御燒香は、

一益　叶はぬとや。

久吉　さいふ多喜川一益殿も關東管領の職を蒙り、鎭靜あるべき筈なるに、關東の衆に背かれ其職を捨て逃げ登られしが、遠路とは言ひながら亡君の仇を討つべき弔ひ戰に出合はず、これぞ不忠不義ならずや、まつた宅間盛政殿は織田家の臣にして臣ならず、柴田が臣が如くにして我意を揮ふは不智短才、取るに足らざる愚臣なり。（トこれにて盛政一益無念の思入、勝家きつとなつて）

勝家　返す〲も憎くき囈言、兩公達を誹謗なし、種々さま〲な惡口雜言。

盛政　我々どもは是非もなけれど、兩公達を蔑なすは、

一益　餘りといへば過言千萬。

久吉　過言なりとは事をかしや、今それがしが申せしは久吉にして久吉ならず、亡君尊靈の御教訓、御兩君は他家の御養子、御一身を以て御實家の御家督がなるべきや、三法師君は御正嫡たり、春忠公の御子なれば御正統たるが故に忝くも宣命下り、三位中將に敍せられ、惣追補使の職を蒙られ楓の如き御掌に四海を握らせたまふ天下の武將、織田家の祿を食まんもの、改心なして返答あれ。

〽理義滔々と辯舌淀まず、濁らぬ心に言ひ詰められ、血走る眼逆立ちて。

ト久吉きつと言ふ。勝家盛政一益無念の思入。

勝家　如何に筑前守、左樣な空事をいふとも誰かは誠と思ふべき、三法師君は汝が强て御家督に立てし所にして、未だ御歳三歳なれば、乳くさき御口にて何事をか仰せらるべき、信雄信孝兩公達は正しく亡君の御子といひ、既に淸洲で其方も、天下の執權は此の勝家、三法師君の御後見は兩公達と申せしぞよ。然るに今日執權たる勝家が前をも憚らず、兩公達へ過言千萬、言はうやうなき無禮者めが。

〽言はせも果てず大音聲。

久吉　無禮といふ事存じ居るや。功もなき身を古老と驕ぶり、我意に募り淸洲にて諸侯會合なせし折、

御身上下の禮を失ひ、我に腰を揉ませし法外、假令この身は新參にせよ、官位は朝廷の御制定、官位へ對して無禮ならずや。

勝家　さあ、それは。

久吉　斯く大身に登庸なせしも、亡君の御目鏡、蔑ろにするは不忠にあらずや。

勝家　さあ、それは。

久吉　但し無禮でないと申すか。

勝家　さあ、

久吉　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。（トきつといふ、勝家等三人無念の思入にて、）

勝家　えゝ、どう言へば斯ういふと、口から先へ生れし山猿。もう此上は、摑み殺して。

〽突立ち上るを、幼君見たまひ、

〽御佩刀に御手をかけ、幼君怒りの御氣色に、流石の勝家ぎよつとして、恐入つてぞ平伏なす。（ト三法師君太刀へ手を掛ける。これにて勝家はッと平伏なす。）

三法　憎い爺いめ、控へ居れ。

〽折しも傍の純帳より、左枝利家立出。（ト下手純帳より、以前の利家出來り、下手へ住ひ、）

利家　最前よりお次にて、此の場の樣子承はりしが、實に旃檀は二葉より芳しと自然と武勇備はりし天下の武將三法師君、御幼稚とは申せども最早三歳にならせたまへば御行末賴もしく、既に八幡大菩薩は胎内にましますを武內大臣補佐したまひ、三韓までも退治ありしと聞く、今日より羽柴殿武內にならせたまはゞ、誰かは是れに背かんや、斯く申す左枝利家君に隨身仕る。

順慶　われ〳〵共も一同に、今日より改心なし、

友行　亡君同樣三法師君の幕下に屬し、

皆々　奉らん。

久吉　左枝氏を初めとして、何れも方の御隨身、君にも嘸かし御滿悅。

利家　これにて織田の、

皆々　御家は萬歲。

〽左枝を始め列侯の、詞にます〳〵心に怒れど詮すべなく、牙を嚙みてぞ控へける。

ト勝家盛政一銘顏見合せ、無念の思入、久吉思入あつて、

〽久吉重ねて、

久吉　それに附いても此席へ斯く各々方参着なすは、これ先君の御武徳にて、殊更御老體の柴田氏人に先立ち遠路の所はる〴〵との御上京、嘸かし身體疲れたまはん。申し附け置きし導引の役人共、せめて此の場の持成に、力を揃へ勝家殿を、揉みやはらげて進ずべし。

〽いふより早く羽柴の郎黨、小躍りなして座を進み、

ト正清、且元、正則、長安よろしく思入あつて、

正清　先達ては勝家殿、清洲に於て我が主人久吉公に種々と導引の望みあり、吾々臣等の身に取り祝着千萬。

正則　其御禮に今日は、主人の名代われ〳〵が、肩腰はいふに及ばず首筋元より爪先まで、摑みくだいてまゐらせん。

且元　宅間殿にも其折は、何かと御取持ありし由、忝く存ずるゆゑ、お望みならば御禮旁々、手酷く揉んで進ずべし。

長安　多喜川殿にも此程より柴田殿へ御同意にて、萬端仰せ合されし草臥仲間と承はれば、いざ導引の御相伴。

正清　何れも篤と性根を据ゑ、

正則　按摩の御馳走、
四人　賞翫召され。
〽詞を揃へ荒武者ども、肩臂怒らせ詰め寄れば、柴田を始め三人は、色を變じて言句もなし
樣子見て取る左枝利家。
ト郎黨四人身ごしらへして詰寄る、勝家盛政一益恐れて取合はぬ思入、利家こなしあつて、
利家　あいや方々その導引は後してのこと、斯く大切なる御法會に私の爭ひより肝要なるは追善供養、
小田家の御家督定まる上は、片時も早く三法師君、御拜禮あつて然るべし。
久吉　何さま利家殿の仰せの如く、此上燒香の順序は一二を論ずる所にあらず、いざ長谷川氏には御幼
君を、御靈前へ誘はれよ。
義豐　はッ、仰せに隨ひ御傅役長谷川丹後、幼君の御介添仕る。何れも御免。
〽幼君抱き奉り、悠然として靈牌の御前へ誘ひ奉れば、かよわき御手にくゆらする名も柴
舟のそれならで、羽柴の功の香も高き。
ト此うち義豐子役を抱き、正面の位牌の前へ連れて行き、燒香させることあつて、元の所へ連れて來
り座に附く、久吉思入あつて、

久吉 君の御燒香相濟む上は、これよりめい〳〵の順次、前田玄以法印、その一通讀み上げ召され。

德善 はッ。

〽以前の卷物押しひらき。(ト德善院件の書物をひらき、)

一ッ總見院殿燒香の順列。最初幼君御拜禮の式終つて、それより第一番高山右近太夫長房、第二番中川瀨平清秀、第三番井桁信輝入道勝入齋、第四番三輪田五郎左衛門長秀、第五番神戸侍從信孝、第六番堀尾茂助重春、第七番保利久太郎秀政、第八番鹽川伯耆守國治、第九番蜂谷兵庫守賴隆、第十番安部仁左衛門友行、第十一番黑田勘解由長政、次に北畠中將信雄、柴田修理亮勝家、多喜川左近將監一益、宅間玄蕃允盛政、左枝又左衛門利家、其外譜代外樣の面々、參着の順次を以て、各々燒香あるべきものなり。

〽讀み終れば宅間多喜川顏見合せ、呆れて詞もなかりける、柴田は怺えず怒りの大音。

ト德善院讀みあげる、盛政一益よろしくこなし、勝家きつとなり、

勝家 やあ其の順列は承引ならず、さまでの功もあらざる者を人に先立ち燒香させ、連枝古老を差置くは、我意を振舞ふ依怙の沙汰。

盛政 非分の計らひある上は、法會の席を踏みあらし、

一益　勝手次第に、

三人　燒香なさん。

〽突立ち上れば、（ト三人立ちかゝるを、利家留めて、）

利家　あいや方々お控へなされ、羽柴殿の定められし順次は則ち戰の武功、先づ高山右近殿を第一番に置かれしは、これ山崎の先陣にて一番槍の功あるゆゑ、次ぎに中川瀨平殿、これも二番に槍を合せ敵數多討取りし、其功に依てなり、其外續く大小名皆それ〴〵の功あつて、列を定めし此の順次、承引なきは各方に、戰功あつての事なるか。

勝家　その儀は國を隔てしゆゑ、合戰の間に合はざれど、執權たる此の勝家賤しき族の下に附かうや。

盛政　家格を以て一方の、旗頭たる柴田氏、その外古參のわれ〳〵を、

一益　諸人の上に立つること、貴賤上下の禮儀なり。

利家　さゝ御尤もなる仰せながら、君御在世の折は格別、今日の御法會は怨敵光秀を討ちたる戰功、その働きの甲乙にて席を定むる御追福、武功がなくば是非に及ばず、後に附いて燒香あられよ。

勝家　やあ二股武士の左枝利家、今久吉が權威に阿り此の勝家を侮りて、彼れに心を合せしは襟元につく諂ひ武士。

利家 はて愚なる儀を申されな、われ犬清の昔より羽柴殿とは竹馬の友、諂ふ心はあらざれど、明智を討つて亡君の仇を報いし功あるゆゑ、威に随ふは追從ならず、諂ひ武士の御詮議なら、拙者を差置きそこらあたりに。（ト盛政一益へ思入、盛政聞き咎めて、）

盛政 やあ奇怪なり左枝利家、扨はこの玄蕃を啞聾と思つてか、耳障りなる汝が詞、

一益 その雜言もお口柄ゆゑ、聞かぬふりして罷りあるは、これ我が君の御追善、

久吉 左程先君の御恩を思はゞ、順次に隨ひ燒香あれ。

勝家 えゝ、またしても無禮の一言、席を憚り料簡なせど、

盛政 持つて生れた我が短慮、手がむづ〳〵してこたへられぬ。

久吉 すりや久吉へ手向ひなすか。

勝家 おゝ、見事手向ひ、

三人 いたして見せう、

〽又立ち掛れば久吉公、持つたる笏を上げたまふ、かねての合圖に狼煙の筒音。

ト勝家、盛政、一益立ちかゝる、此時久吉持ちたる笏を振上げる。これをキッカけに本鐵砲の音、遠寄せの頭を打込み、竹法螺諸所にて鳴る、これにて向う正面山の切出しの上へ、旗馬印など段々に引

出すこと、追々どんちやん烈しく、長門守、監物は信雄信孝を守護なし、義豊郎黨四人は三法師君を守護なす思入、勝家、盛政、一益は向うをきつと見て、

勝家　やゝ、かねて合圖か打上げし、狼煙と共に八方に貝鐘太皷打ち鳴らし、
盛政　洛中洛外山々の、木の間に見ゆる旗指物、一度に揚げし鬨の聲。
一益　まさしく數萬の軍勢にて、手配りなすと覺えたり。
久吉　是れみな豫て久吉が、埋伏させし味方の人數。
〽思ひがけなく驚けば、久吉莞爾と打笑みて、
醍醐、小栗栖、鷹ヶ峰、糺、大宮、大津、嵯峨、梅津、四ツ塚、東寺まで東西南北取圍む、人數はかねて汝等が猿智慧なりと蔑いたす、此の久吉が計略なるわ。
三人　むゝ。
利家　花山、船岡、加茂、御堂、大堰、桂の里かけて、四方の峰は十重二十重、軍勢ならぬ所もなく、日影にきらめく馬印。
信雄　はゝ、驚き入りし羽柴が才智、
信孝　天下を補佐なす器量備はる、

長門　久吉殿の指揮により、
監物　六十餘洲の大小名、
徳善　草木の風に伏す如く、
義豐　斯く大軍を以て取卷く上は、
正清　最早叶はぬ柴田勝家、
正則　力及ばぬ多喜川宅間、
且元　いはゞ籠中の鳥同然、
安長　いざ尋常に、
皆々　覺悟あれ。
〽覺悟々々と呼はれば、
勝家　流石は久吉企んだり、我が計略の裏をかき味方と思ひし奴輩まで、羽柴に諂ひ隨ふとも、しや、何程の事あらん。
盛政　我も共々死にもの狂ひ、どいつこいつの容赦はねえ。
一益　此上は死出の道連れ、切つて〳〵切りまくり、

勝家　一々素ッ首、
三人　並べてくれん。
順慶　やあ奇怪なる其の一言、御幼君への奉公始め、
皆々　いで、われ〳〵が。
〽勢ひかゝれば、（ト皆々立ちかゝるを、）
久吉　やあ何れも、早まるべからず、天下の武將の害となる柴田、多喜川、宅間等を今討取るは易けれど、
利家　亡君御法會の當日に、有罪を許すは非常の大赦。
信雄　清淨佛地の寺院にて、
信孝　血をあやなすは恐れあり、
利家　只何事も此のまゝに、
勝家　一旦この場は別るゝとも、
久吉　又重ねての再會には、
盛政　一命かけて、

一益　勝負を決せん。

久吉　先づそれまでは、柴田勝家。

三人　羽柴久吉。

久吉　さらば。

皆々　さらば。

〽さらば〳〵と夕榮に、目立つ瓢の馬印、譽れは世々に輝けり。

ト皆々よろしく入替り、眞中に久吉、三法師を抱きあげ、次に利家、上手に信雄信孝、下手に勝家、盛政、一益、その外皆々引張りよろしく、段切にて、

ひやうし　幕

千成瓢（終り）

講釋師筋書本

狂言趣向芝居出來穐錦

實入願御見物榮

上の巻は　天日麻呂謀悪傳　附り　大江廣元仁政録

中の巻は　地雷太郎叛逆傳　附り　契情高窓貞操録

下の巻は　人丸お六強盗傳　附り　香川三作忠義録

白浪寄東海道初雁行列揃

錦飾千種江戸着

吾嬬下五十三驛

『五十三次天日坊』は嘉永七年（安政元年）八月、作者三十九歳の折、河原崎座に書きおろされた。講談の天一坊によつて構案されたものではあるが、全然別な趣向が按配されてゐる。作者には別に明治八年稿下した天一坊の作がある。（第十一巻所輯）。彼此對照せられるならば、此の作が草雙紙仕立であり、一層興味本位目先本位であることが看取され、時代の推移も窺はれると思ふ。尚此作は作者が眞に獨立して立案した最初の作、即ち眞の處女作である點からも記憶せらるべきものと信ずるので、材料から言へば重複の嫌ひもあるが玆に收錄した。稿下の當時大好評を得た芝居で、殊に鈴鹿山のダンマリは天地人のダンマリとして後世にまでも取沙汰されたといふ。後三世河竹新七となつた竹柴金作は此の芝居を見物して狂言作者たらんと志し、默阿彌に入門を請うたといはれてゐる。

書きおろしの時の役割は四世市川小團次（觀音院法策後天日坊、お辰兄三作、隼人妻賤機）、嵐璃寛（盗賊地雷太郎實は大江廣元、三作妹お辰、鳴澤隼人）、坂東竹三郎（北條駿河介時貞、猫間中將光義）淺尾奧山（富士ケ根左九郎後左京）、嵐和三郎（鳴澤左門之介、侍女かるも）、坂東しうか（盗賊人丸お六實はおろく、乙姫、島原の傾城高窓）、河原崎權十郎（荒波主税、侍女みるめ）、大谷友右衞門（觀音院、赤星大八後典膳、石田の三郎）等であつた。

口繪にしたのは龜戶豐國筆の錦繪であり、挿繪にしたのも同筆の錦繪である。

大正十五年十二月初旬　　校訂者



序幕

（京）大内猫退治の場
（大津）觀音院旅宿の場

〔役名＝下男久助、實は大江因幡守廣元、北條駿河ノ介時貞、石田ノ三郎爲久、修驗者觀音院、花園中納言兼貞、越前の田舍道者平藏、石田ノ家臣岩淵丹下、兼貞の雜掌多中、北條ノ家臣荒波主税、觀音院ノ弟子法策。草津の於三婆ア、女順禮おかん實は盜賊人丸於六等。〕

（大内門前の場）＝舞臺眞中に白木の築地門、その左右筋塀、紅葉の立木あり、こゝに兼貞冠裝束公卿の拵へにて床几にかゝり、左右に○△の侍二人同じく公卿の拵へにて附添ひ、別に仕丁四人控へをり、總て京都大内門前の體にて幕明く。

兼貞　いかに方々、このほど木曾義仲惡逆増長なしたる故、頼朝義經へ追討仰せつけられしが、兩將の軍配にて忽ち討滅せしところ、義仲が妻は猫間中納言光隆が娘故主上より光隆へ疑かゝりしを殘念に思ひ、自殺なして相果てしところ其の靈飼猫に乘憑り、身長拔群の大猫と化し毎夜大

内に出て怪をなす故、帝の逆鱗大方ならず、既に嫡子中將光義は牢獄へ押籠めおき、近々に鎌倉表へ引渡し由井ヶ濱にて死刑とのこと。

○　それ故豆州に名の高き、修驗者觀音院に惡魔降伏の祈念を申附け、此のほどより大津八町に新に旅宿を構へをる。

△　まつた惡猫退治は京都在番の武士石田ノ三郎爲久、北條駿河ノ介時貞これを承はり、

秉貞　即ち、今日一七日の祈念の滿願なれば惡獸退散疑ひなし、方々にも心を付けられよ。

皆々　かしこまつてござりまする。

　　ト鳴物になり、花道より觀音院修驗者の拵へにて出で、後より半素袍の侍八足の机に五色の幣を立てたるを持出で、直に舞臺へ來る。

觀音　ハツ、修驗者觀音院。これまで出仕仕つてござります。

秉貞　ほう、豆州に名高き修驗者觀音院此間の役目大儀々々、其方が祈念を以て惡猫首尾よく退散なす上は、先達て申渡したる通り、恩賞として三百金宛行ふべきものなり。

△　隨分ともに丹精をぬきんで、

○　惡魔降伏の祈念、

兩人 いたしてよからう。

觀音 はあ、お氣遣ひ下されまするな、不肖が法力をもち丹精をぬきんで祈念致すに於ては、いかなる變化魔道なりとも、立所に退散なすは朝日に霜のかゝるが如し、最早變化の出る刻限、片時も早く壇上に於て、祈念の用意仕るでござりませう。

兼貞 ほゝ出かす〳〵、猶豫いたさず。

皆々 急いで祈念。

觀音 かしこまつてござりまする。

兼貞 それ、壇上へ案内いたせ。

侍士 心得ました。

觀音 左樣なれば、後刻お目見得仕りませう。(ト侍案内して觀音院正面の門の内へはひる。)

兼貞 改め言ふには及ばねども、國々に修驗の多きその中に、行法勝れし觀音院を呼上せ、降伏の祈念申付くる上からは、帝の御身に氣遣ひなし。

△ 兼貞卿の仰せの如く、おろそかならぬ此度の猫魔退散祈りの行法。

○ 法力未熟の修驗にては、なか〳〵以て及ばざることなれども、今海内に隱れなき觀音院なれば、

惡猫退散疑ひなし、

粂貞　それは格別、大切なる猫魔退治の勅命蒙むる役目の兩人、石田の三郎爲久には先刻出仕なしたるが、相役たる北條駿河介時貞には未だ出仕なさゞるや。

△　いかさま貴卿の仰せの通り、駿河介時貞には唯今に出仕もなく、何故あつて延引いたすか心得難きことゞもでござる。

○　其許の詞の如く、日頃より武士に似合はざるなまぬるき駿河介、大切なる今度の役目、惡猫退治は覺束なう存ずる。

粂貞　あいや方々さな申されそ、假初ならぬ帝より勅命下りし役目の兩人、必ず粗相申されな。

兩人　心得申してござる。

ト花道の揚幕にて「北條駿河介出仕」と呼び、時貞烏帽子、胸當着込の上へ素袍の裾を引上げ、後より主税半素袍股立にて、時貞の弓矢を持つて出で花道へ留まる。

○△　駿河介には役目の遲刻、

皆々　急いでこれへ。

時貞　然らば御免下さりませう。（ト兩人舞臺へ來り、下手へ住ふ。）

粂貞　駿河介には今日の役目大儀々々、さりながら何故延引いたしたるぞ。

時貞　御意恐入つては候へども、おろそかならぬ今度の役目、蟇目は射術の大事ゆゑ弓矢神に祈誓をかけ、思はぬ遲參、まつぴら御免下さりませう。

主税　唯今主人の詞の如く、武士の冥加にかなひたる大切なる今度の役目、油斷とては候はねど其身の淨めに念を入れ、延引なしたる主人のお詫、恐れながらよろしう願ひ上奉りまする。

粂貞　いや〳〵その心配には及ばねど、相役たる石田三郎先刻出仕なしたる故に唯今の咎め、未だ變化の出る刻限に間もあれば、階下に於て休息なし、惡猫退治に手柄をいたしやれ。

時貞　仰せまでも候はず、武門の譽れ此身の面目、身命を擲ちて惡猫退治仕るでござりませう。して、相役たる石田三郎爲久には何處に渡り召さるゝぞ。

爲久　（門の内にて、）あいや、石田三郎爲久それへまゐつて面談いたさう。（ト家臣岩淵丹下を從へ出來る。）

時貞　これは〳〵爲久殿にはお早い御出仕、御苦勞千萬。

爲久　駿河介殿にも今日の役目御苦勞に存ずる、唯今あれにて承はれば、別火物忌に身を淨め手柄をなさんとお言やるが、日頃なまぬるき其許の射術、惡猫退治は覺束ない。

時貞　是はまた爲久殿の詞とも覺えず、勅命受けたる今度の役目、何故あつて某が射術覺束ないと仰せ

らるゝ。

爲久　さればでござる、そりや其許の胸に問はつしやい。今度の上京を幸ひ島原の廓へ通ひ、傾城高窓に現をぬかす其許、藝子どもが三味線の猫の皮なら射てとることもござらうが、猫間が娘が乗憑りし惡猫退治は覺束ない。かたはら痛いと申したがよもや身共が過ではあるまい。なう岩淵丹下。

丹下　左様々々、御主人の仰せの通り弱冠微力の駿河介殿、年經た猫股退治より、似合つたやうに島原で幇間藝子と一つになり、猫ぢや〳〵でも踊られるはうが、大丈夫でござりませう。

主税　やあ、最前から押だまつて承はれば、場所柄も辨へず陪臣の分際にて主人を蔑なすその一言、今一度言つてお見やれ、許さぬぞ。

丹下　主が主なら家來まで耳が横ぞッぽうに附いてあると見ゆる。われが主人駿河介殿今度の大事の役目覺束ないから覺束ないと言つたのだ。それに何ぞや目に角たつて慮外なしたらぶつぱなすぞ。

主税　やあ、重ね〳〵の惡口雜言、舌の根切つて切下げるぞ。

丹下　はゝゝゝゝ、岩淵丹下は侍だ、われに切らるゝそれまでぢつとしてゐるものか、癡けたことを。

主税　もう、料簡が。（ト刀の柄へ手をかける。）

時貞　こりや〳〵、主税控へぬか。

主税　それぢやと申して、
時貞　こりやこの所を何處ぢやと思ふ、陪臣の身を以て立働いて見苦しい、控へてをらう。
トきつと制する。
兼貞　最前より承はるに双方共に益なき爭ひ、石田三郎が言葉尤もなれども、駿河介とても厳命蒙むる上からは、蟇目の心得なくてはかなはぬ。まだ刻限に間もあれば、この場に於て爲久時貞兩人とも、蟇目の問答承はりたい。
○　兼貞卿の言葉の如く、大内には珍らしき蟇目の問答、
△　いかさま、承はるも時の一興。
爲久　これはまた入らざる事の論談より思ひがけなき蟇目の問答、身不肖ながら石田三郎御意に從ひ、問ひ申さん。
時貞　不覺悟なれども駿河介、問ふに任せて答へ申さん。
爲久　然らば問ふぞよ。
時貞　御念に及ばぬ。
兼貞　双方ともに慮外なきやう。

兩人　かしこまつて候。（ト兩人よろしく前へ出で。）

爲久　そも〳〵蟇目の法といふは、往昔鈴鹿山の鬼神阿黑王が奪ひとりし立烏帽子といふ女田村丸に心を通はし、仁體玉と號したる名珠に密事を言ひ含め田村丸に投げ遣はす、これ玉章の初めにて、まつた鏑矢の三方に蟇の目の如き穴を明け、この矢を以て鬼神を退治、かの立烏帽子を妻となすこれ卽ち蟇目の始めなり。

時貞　いや、その蟇目の法といふは、愚人をまどはす大きな僻事。

爲久　なんと、

時貞　それ蟇目といふは形みにくき蜍蟇なれど、千歳を經る時は頭に赤き角を生じ、一つの丹玉をいだき氣を吐くとき天に通じて虹となり、闇夜といへど眼の光赫々たり。よつて夜陰に及び化鳥を射んには、蟇目を用ふる射術の傳法。

爲久　然らば蟇目に用ふる、弓の口傳はいかに〳〵。

時貞　唐土にては良公藥煎毒矢を放つ、大弓にては黑漆弓に破位弓と名づけ、式は三弦又は五弦にて敵を破るの兵器なり。

爲久　して、この日本にわたりしは。

時貞　我朝にては五人弦三人弦と名づけ、これぞ和國の弓勢を現はす。
丹下　扨鳴弦の奇術をなすに、的に音あり放つに聲あり、これらの心何と〳〵。
主稅　もとより曲れる弓の形は月に象り、番ひし形は日輪に表じ、矢は二十八宿に例へ、日月星の三光を以て直なる心を的となす。
爲久　陰陽の理を以て心を的となすならば、弓矢に表裏の差別あらん。その極意はいかに〳〵。
時貞　これぞ卽ち蟇目の術、柳は翠花は紅、傳授はちゞみ頭の如く、言ふに言はれず解くに解かれぬ。さあ、某が言葉に虛言がござるか。
爲久　さあそれは。
時貞　一言半句の批判うたぬか。
爲久　さあ、それは。
兩人　さあ〳〵〳〵。
時貞　蟇目の故實は豫め、斯樣なものかと存じまする。
爲久　むゝ。（ト無念の思入。）
兼貞　ほゝ、問ひも問ひたり答へもなしたり、兩人ともにあつぱれ〳〵。最早變化の出る刻限、兩人と

もに片時も早く。

皆々　用意いたしやれ。

爲久　蟇目の法は兎も角も、射術の手柄は爲久が粟津ヶ原に手もぬらさず、鬼とも呼ばれし義仲さへ射て落したる覺えの手の內。

時貞　その廣言は後でのこと、王位に仇なす猫間の變化、この時貞が一矢を以て、

丹下　手柄はし勝ち、

主税　片時も早く、

兼貞　いそふれ兩人。

爲久　とはいへ時貞が、（ト立ちかゝる。）

時貞　何を、（ト立ちかゝらうとする、）

兼貞　こりや。（ト眞中にて双方を隔てる。この見得にて道具廻る。）

（大內の場）――本舞臺三間高足本緣附の二重屋體、正面一面の御簾、左右狐格子、續きの御殿、此の前に左近の櫻、右近の橘あり、總て紫宸殿の體。下り端にて道具留る。

トドロ〳〵になり下手より以前の公卿、侍大勢逃げて出る、と、そのあとより大きな猫荒れて出で來り皆々を追廻し、トヾ皆々上手へ逃げてはひる。と、上手より丹下出來り手捕りにしようとするを猫暴狂つて丹下に跳びかゝり、丹下は奥へ逃げ入る。よき程に奥にてエイと矢聲して矢二本飛來り、一本は上手の柱、一本は猫に當る、猫苦しみてせりの穴へ落ちる。これより大薩摩になる。

〽實にや雲井に名をあけし弓張月の射る方も引くやあやめのそれならで、こゝに右近の橘と左近の櫻八つ花の若枝の香ぞかんばしき、

ト鳴物になり、上手に時貞以前の裝にて弓を持ち猫を押へ、下手に主税以前の裝にて雪洞を持ち、總て頼政鵺退治の見得にて眞中へ迫り上る。

時貞　はて、怪しやな、今北條駿河介時貞が忝なくも勅命蒙むり、紫宸殿の大床に今やおそしと待つ折から、

主税　震動家鳴り凄じく、嵐辻風砂子をとばし、公卿をなやます不審の變化、

時貞　南無や八幡大菩薩と心中に祈念なし、よつぴきひやうと射て放てば、

主税　覗ひ違はず矢たけびして、苦しむ聲音物凄し、

時貞　拯火を點しよく見れば、

主税　身長抜群の年經し猫魔、

時貞　かの源三位が射て落せし、

主税　鵺にもおとらぬ化生の有様、

時貞　奇異なる獸の、

兩人　有様ぢやなあ。

主税　イデ、息の根を。

時貞　言ふにや及ぶ。

ト時貞刀を抜き猫の胸許を差通し、猫は苦しんで落入る。主税時貞の刀を拭ふ。管絃になり、二重の上手へ以前の兼貞併に○△の公卿附添ひて現はれ、上下より侍大勢出來る。

兼貞　ホヽ、さすがは北條駿河介、手柄のほど、

皆々　あつぱれ〳〵。

時貞　はッ、家の面目此身の冥加、有難う存じ奉りまする。

兼貞　大内へ仇をなせし猫間の變化、時貞が射術にて立所に退治なし、君の叡感淺からず、

○　殘る方なき大内の首尾、

△　殿上人の我々まで、
三人　羨しきことでござる。
時貞　はッ、重ね〳〵御賞美の勅命、有難う存じ奉りまする。(ト爲久丹下を從へて下手より出來り、)
爲久　委細の樣子はあれにて承はる。假令一の矢は時貞殿にもせよ、二の矢は拙者がたしかに手應へ、
さすれば手柄は身共と兩人。
時貞　いゝや、乙矢も卽ちこの時貞、證據は矢の根に記せし姓名。(ト矢を拔き取つて見せる。)
爲久　して、手ごたへなせし身共が矢の根は、
主稅　覗ひは外れて、柱に二筋。(ト上手の柱へ思入、爲久見て、)
爲久　すりや、この爲久が手應へなして、
丹下　主人が射た矢はあれなる柱に。(ト主稅つか〳〵と柱へ行き二本の矢をぬき、)
主稅　矢の根は御無事に。(ト爲久の前へ出す。)
丹下　えゝ、何をおのれが。(ト矢をひつたくり前へ置く。)
兼貞　いよ〳〵手柄は駿河介、旅宿へ立越え恩賞の御沙汰を待たれよ。
時貞　有難う存じまする。

爲久　すりやどうあつても爲久が。

時貞　貴殿の矢の根は血もあやさず。（矢を取つて爲久の前へ突きつける。）

爲久　とは言へ、このまゝ。

時貞　はて、あつぱれな。

爲久　ちえゝ、いま〳〵しい。（ト矢を下へ打ちつける。）

時貞　御手練ぢやなあ。

ト嘲笑ふ。爲久刀を拔きかけるを時貞弓にて留める。皆々引張りの見得にて道具廻る。

（觀音院旅宿の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面石摺りの襖、眞中更紗の暖簾口、上手小高き床の間、七五三を張り白木の厨子、御鏡、榊、種々の供物、此の側に口を結へし壺飾りあり、上手は障子屋體、いつもの所門口、これに觀音院旅宿といふ掛札、この外藁屋根の物置、總て大津八町觀音院旅宿の體。こゝにお三婆ア摺鉢にて味噌を摺つてゐる、門口に長松酒屋の御用聞にて三升樽を提げ立つてゐる。

長松　おい、をばさん酒を持つて來たよ。

お三　さうかえ、今久助どんは買物に行つたし、法策殿は觀音院樣のお迎ひに京まで行つた故、私や留守番に頼まれたのだ。酒ならばそこへおいて行つてくんな。

長松　あい、錢ァ濟んでゐるから、酒はおいて行くが、おばさんお前飮んぢやあ惡いよ。

お三　おや、この小僧はいらざることを言はねえで早く歸んな。忌々しい餓鬼だ。

長松　忌々しい取上婆さヤアイ。

ト長松は下手へはひる。花道より畑作、太郎兵衛百姓裝にて出來り、門口へ來て、

畑作　御免なさいまし、法印樣はお宅でござりまするか。

お三　はい、觀音院樣はお留守ぢやが、どちらからござつたのぢや。

太郎　はい、私共はこの村の者でござりますが、此間からこちらの觀音院樣の御祈禱で、私のお袋の久しい眼の病ひがなほりましたので、その御禮にまゐりました。

畑作　私の親父に狐が附いて小豆飯を三升づゝ喰ひましたを、法院樣の御祈禱でさつぱり狐が放れました故、お禮にまゐつたのでござります。ト兩人目錄包みを出す。

お三　それはまあ〳〵御苦勞でござります。今觀音院樣はお留守でございますから、私がお預り申してお歸りなされたらお目にかけませう。

兩人　どうぞよろしくおつしやつて下さいまし。

お三　丁度お前方よい所へおいでなさつた、今日は觀音院樣のお立振舞で赤のお飯ができますので、御近所の衆をお招きなさるのぢやさうな。おッつけお歸りであらうから出直しておいでなさんせ。

畑作　それは有難うございます、そんなら後方參りませう。

太郎　御馳走と聞けば、お辭儀をするは嫌ひでござります。

お三　そんなら後方おいでなさんせ。

兩人　ドレ、出なほしてまゐりませう。

ト兩人は下手へはひる。花道より久助下男の拵へにて提籠に重箱、靑物など入れしを提げて出る。後より平藏、田舍者旅裝菅笠を持ちて出來り、

平藏　久助どん、丁度よいところで逢ひましたなう。

久助　いやもう、あんまり思ひがけないから私もびつくりしました。さうしてお前はどこへ行かつしやるのだ。

平藏　私は連があつて、伊勢參宮から京見物に上りましたが、お前もまあ達者で目出度うござります。

久助　それはお互ひでござります。私が旦那の旅宿は向うの家だから、まあ一緒にござらつしやれ。

平藏　そんなら一緒に行きませう。（ト兩人舞臺へ來て、久助門口を明けながら、）今戻りました。今日は大きに御苦勞でござります。

お三　久助どん、今お歸りか、大そう手間がとれたねえ。

久助　いろ〳〵の買物で大きにおそくなりました。もウし平藏殿、遠慮はないからこつちへ入らつしやりませ。

平藏　はい〳〵有難うござりまする。（ト内へはひる。）

お三　久助どん、このお方はえ。

久助　こりや私が國の越前の人だが、今道で逢つて連立つて來たのさ。

お三　さうかえ、お前さんこちらへお上んなさいまし。

平藏　はい〳〵、左樣なら御免なさいまし。（ト草鞋を脱いで上へあがる。）

お三　久助どん、そんならお前の國は越前かえ。

久助　左樣さ、私は越前の國の者、この人も同じ越前の國の者、京見物に來たといつて今久しぶりで道で逢つたのさ。

お三　さうかえ、越前はいゝ所ださうだねえ。そりやさうと今日は觀音院樣が何だかお悦びがあるから

手傳ひに來てくれろと、法策さんが呼びに來なすつたから雪の降りさうだのに家を明けて來ましたからもう歸りませうよ。その代りお汁も摺つてお平の支度もして奧の竈へかけておきました。

久助　それは有難うござります。今に旦那もお歸りだらうから、お前もお飯を喰べてお歸りなさいまし。

お三　有難うござりまするが、雪は降りさうなり家を取散しておいたから、片附けて又出なほして來ませうよ。（ト言ひながらお三門口へ出る。）

久助　そんなら、後にまたおいでなさいまし。

お三　はい、有難うござります。もし、越前のお客さんゆつくりとお話しなさいまし。（ト下手へはひる。）

久助　（茶を汲んで來て、）さあ、平藏どん茶を飲まつしやりませ。

平藏　いや、構はつしやりますな。

久助　そして、國許では皆變りはござらぬかな。

平藏　いや皆達者でござります。ときに久助どん此方は日外豆州に奉公に行かつしやつたが、どうしてこの京都へ來てござらつしやるのだ。

久助　されば、その譯は都の御所へ猫の變化が出て、大君樣をなやます故豆州で名の高い私の旦那の觀

音院様へ、その變化の御祈禱に禁裡様から迎ひが來て京へ上り、この大津に旅宿してゐるのでござります。

平藏　なるほど、その猫の話しも聞きました。その御祈禱の旦那の供でこの京都へ、豆州からこなたが上らつしつたばつかりに、私も思はずこなたに逢へたといふものでござる。

久助　いかさま、緣といふものは不思議なもの。いや又世の中には様々な變つたことがあるものでござるなう。

ト花道より修驗者の觀音院、後より法策坊主頭鼠の着附にて甲斐絹のつゝみを持出る。

觀音　法策や、だいぶ曇つて來た、大方雪になるだらう。

法策　左様でござります、二三日催してゐますから、雪でござりませう。

觀音　だいぶ寒くなつて來た、定めて料理もできたらう、早く歸つて酒にしよう。

法策　それがよろしうござりませう。（ト兩人門口へ來り、）

久助　これは旦那唯今お歸りで、だいぶ遲うござりました、嘸お寒うござりましたらう。

觀音　いやもう、祈禱が長くて弱りきつた。

法策　お師匠様、あの狐憑はよつほど骨がをれまするな。

觀音　もう一二度祈禱したら落ちるであらう。久助や料理の用意はよいか。

久助　はい、お三婆あどのがまゐりまして、御膳の支度は皆いたしてくれました。私は仰せつけられました御酒の御肴をとゝのへてまゐりました。

觀音　それは大儀であつた。（ト此時平藏を見て、）久助や、あそこにゐる人はどこの人ぢや。

久助　はい。是は私が國の者越前の者でござります、京上りを致したと申しまして、先ほど道で逢ひまして、久しぶり故あなた樣のお留守へ同道いたしましてござります。

觀音　左樣か。これ／＼越前のお人遠慮はござらぬ、ゆつくりとしてござれ。

平藏　へい／＼有難うござります、左樣ならあなた樣が此節京都で評判の高い觀音院樣でござりますか大內へ出る化猫をあなたの御祈禱で忽ち退治られたと申し、大そうな評判でござりまする。

觀音　その樣に言はれて手柄話をするではないが、修驗者も國々に澤山あるのに、わざ／＼豆州から京都までお迎ひが來て早速に登り祈禱をしたところ、立所にその變化が退治られ、金三百兩頂戴したて。

平藏　左樣なら、大まい三百兩お頂きなされたか、それは結構なことでござりまする。

法策　それ故お師匠樣の祈禱の評判を、京大阪は言ふに及ばず近鄉近在から聞傳へて、彼處の狐憑こゝ

の病人の加持祈禱、盲目は眼が明くし躄は足が立つ、大そうな評判でこゝにござるも三月越し、御祈禱料もよつほどのこと、もう近々國許へお歸りなさるのだ。

久助　そこで今日はお立振舞ひで多分のお祝ひで、近所のお人達へも馳走をなさるのでござります。

觀音　こなたも丁度幸ひだ、赤の飯を喰つて行かつしやるがいゝ。

平藏　はい／＼有難うございますが、連の者が草津に宿をとつて待つてゐますから、一度歸つてまゐりまして、斷つてまた出直して御馳走になりにまゐりませう。

久助　そんなら早く行つてござれ、まだいろ／＼話しがござります。

平藏　折角旦那樣のお志し、つい一走り行つて直に來ますぞや。（ト門口へ出る。）

法策　越前のお客、待つてゐますから、早く行つてござりませ。

平藏　はい／＼有難うござります、左樣なら旦那樣ちよつと行つて參ります。（ト此の時雪ちら／＼と降つて來る。）あゝ雪が降つて來た、たんと降らぬ中に、どりや行つて來ませう。（ト花道へはひる。）

久助　（跡を見送つて、）あゝ雪が降つて來た、こいつはどうか積りさうだわえ。（ト此方へ來り。）旦那樣、とんだ國者が參りまして、大きにおやかましうござりました。

觀音　何の／＼田舍の人は正直、馳走するといつたら悦んで行きをつた。時に料理拵へが出來たらこゝ

へ出してくれ。あゝこりや法策よ、酒の燗をつけてくりやれ。

兩人　かしこまりました。

　　ト兩人はよろしく暖簾口へはひり、久助廣蓋に鉢肴吸物を載せ持出る、法策德利を持つて出て、

法策　さあ〳〵お燗ができました、お一つ召上りませ。

觀音　おゝたべよう〳〵、有難い〳〵、さあ〳〵久助も法策も打ちくつろいで。

兩人　へい〳〵、有難うござります。（ト三人酒盛りになりよろしくある。）

久助　なんと法策殿や、今度旦那樣のお手柄、すさまじいものではないか。

法策　そりやこなたが言はずとも知れたこと。豆州は言ふに及ばずこの都方まで名の響いたお師匠樣、弟子奉公人の私らまでも肩身が廣うござるなう。

觀音　二人の者のいふ通り、自慢をするではなけれども、凡そ日本廣しと雖もこの觀音院の行法に恐らく續く者はあるまい、さればこそこの度大内の祈禱首尾よく仕果せた故、三百兩といふ御褒美にあづかるとは、あゝ有難い〳〵。さあ〳〵この祝ひに、今晩は雪は降つて來るし、夜と共飲み明かさう、そち達も遠慮なく喰べたがよい。

兩人　有難うござります。

觀音　さあ〳〵ついでくれ〳〵。あゝ有難い〳〵。
（ト法策酌をする。この時久助法策の襦袢の袖を見て、）
久助　法策殿、よい襦袢を着さつしやつたの。
法策　これは伊豆の國を出立の折、村の衆から餞別に濱松染の風呂敷と此の蜘蛛の巣絞りの襦袢を貰ひました。（ト袖をまくり見せる。）
久助　それはよい物を貰はしつたの。（ト法策の腕の痣を見て、）法策殿、こなたの腕にあるは、痣でござるか。
法策　はい、この腕にある天の字に似た痣は、こりや生れ付きでござります。
久助　はて、變つた痣でござるの。（ト思入。）
觀音　これ法策や、おぬしは今日は何だか元氣がないが、さあ一つ飲め〳〵。
法策　有難うござりますが、酒も飲みたうござりません。久助殿この杯はお前にゆづりませう。
觀音　これはしたり、折角の祝ひ酒、何故飲まぬといふのぢや。
法策　さればでござりまする。小さい時から御恩になつたお師匠樣のお祝ひ酒、元氣をださうと存じますが、今も今とて久助殿の國者衆が尋ねて來て念頃に話すを聞くにつけ、この法策が身の上は何

處の誰の悴やら、兩親さへも知れぬ孤兒、訪ねてくれる人もなく頼りない身の上と思へば、何だか悲しうござります。

觀音　なるほどそちが言ふ通り、算へて見れば十年以前、丁度こんな雪の降る朝おれが門前に行倒れになつた旅の者、その側に泣いてゐたおぬし、まだ東西も知らぬ稚兒、不便なことゝ思ふ故拾ひ上げて育てゝやつたことなれば、さう思ふも尤もながら、水の流れと人の行末、どこぞにおぬしの兩親があつて、尋ねまはつて逢はれまいものでもない。必ずきな〳〵思はぬがよいぞ。

久助　（この話を聞き思入あつて、）左樣ならこの法策殿は、兩親も知らぬ孤兒でござりまするか、それはそれは不便なこと、そのやうに歎かつしやるは尤もなれど、お師匠樣が結構なればやがて立派な身分にもなられうほどに、氣を大丈夫に持たつしやるがよいぞや。

法策　忝なうござりまする、お師匠樣といひこなさん迄、あゝ親切のお言葉、あゝもう〳〵思ひなほして、お目出度い御酒なれば、もう一つ頂戴いたしませう。

觀音　あゝ機嫌なほして飲んでたもるか。あゝ有難い〳〵、どれ〳〵おれが注いでやろ〳〵。

久助　（神前に備へある壺へ目を附けて、）もし旦那樣、この間からお前さまが大切になされまするあの壺、あれはいつたい何でござりまする。

觀音　あの壺の事に就いては、密々の話がある、久助大事にしてこゝへ持つて來やれ。

久助　はい／＼畏りました。（ト壺を持つて來り觀音院の前へおく。）して、お話しとおつしやりますは、どのやうなことでござります。

觀音　されば、この度大内の猫魔退散の祈禱、もし仕損ずれば此身の大變、觀音院が一生懸命の祈禱、ところでこの壺の中は雷玄といふ懇意な醫師に調合して貰つた南蠻祕法の大毒藥、子の方にある所の清淨の土をとり猫の形に拵へ、この毒水に浸し祕法の祈念をなしたる故、かの年經たる古猫も駿河介が矢先にかゝり忽ち一命捨てるといふ、何と祕法といふものは爭はれぬものではないか。

久助　左樣ならば、この壺の中は毒藥でござりますか、やれ恐ろしや／＼。

法策　承つて驚き入りました。然しその毒藥も用ひやうによりましては、また藥にもなるとのことでござりまする。

觀音　法策が言ふ通り、それが即ち毒藥變じて藥となるの譬、然しこの事は二人ながら必ずともに沙汰なしぢやぞよ。

兩人　かしこまりました。

ト雪おろし、時の鐘になり、花道よりばた〳〵にておかん順禮の裝にて杖と笠とを持ちて走り出來り門口を明けてはひり、

かん　もし、お助けなされて下さりませ〳〵。（ト門口を締め慄へてゐる、三人びつくりして。）

法策　なんだ〳〵人の家へ斷りもせず駈込んだは誰だ〳〵。見りやあこなたは女の順禮だが、譯も言はずに助けてくれろとは、あゝ聞えた、道で惡漢にでも出逢つたのぢやな。

かん　左樣でござります、今此宿の端れにて大勢の乞食が私を捉へてむたいな事、恐ろしい所をやうやう逃げてまゐりました。どうやら後から追駈けて來る樣子、どうぞお慈悲にお助けなされて下さりませ、拜みます〳〵。

觀音（これを聞きて、）何ぢや、女の順禮が惡漢に遭つて難儀すると、

かん　どうぞお助けなされて下さりませ。

久助　いや〳〵なりません〳〵、そんな哀れなことを言つて助けてくれいの宿をかしてくれろのと、果は強請りごとを言ふのも往々あること、その手は喰はぬ。さあ〳〵、出て行け〳〵。

法策　これさ久助どん、見た所が何もそんな強請騙りをしさうな娘とも思へない。そんなに手荒く言はずといゝぢやねえか。

久助　いや〳〵正直さうに見せるのが、騙りの山だ、さあ〳〵出て行け〳〵。
　ト手を取つて引立てる。おかん詫びる。此内觀音院おかんを見てゐて、
觀音　こりや〳〵久助、手あらくするな〳〵。順禮にしてはハテ美しいもの。こりや〳〵女、そちは一人旅か、同作があるかどうだ〳〵。
かん　はい〳〵、父さんと二人、順禮に出ましたものでござりまするが、今日道ではぐれまして一人旅でござりまする。
觀音　やれ〳〵可愛さうに。こりや久助、かう見たところが何もそんな惡い心のありさうな女とは見えぬ。まあ〳〵こちらへ上げてやれ〳〵。
久助　えゝ旦那は女さへ見るとだらしなく、いや、こんな何處の馬の骨だか知れないものを。
觀音　これさ、そのやうに言はずとも、それ、足を早く洗つてやらぬか、これ法策おぬしも手傳つて足でも拭いてやらぬか、えゝ氣の附かぬ奴だ。
法策　はい〳〵かしこまりました。それ久助どん、旦那の言附だ、早く水を汲んでやらつしやい。
久助　なんの馬鹿々々しい。どうでろくな奴ぢやアあるめえ。
法策　これさ、主と病だ、早く〳〵。（ト久助口小言を言ひながら盥へ水を汲んでやる。）

かん　これはお慮外さまでござります。
法策　さあ〱足を拭かつしやれ。
かん　有難うござります。（ト足を洗ひ上へ上る。）
觀音　さあ〱遠慮はない、ずつとこちらへ。
かん　はい〱、これが勝手でござりまする。
觀音　はて扨こちらへ來やれといふに。（トおかんの傍へ來り手を取る。久助、法策呆れて見てゐる。）見れば見るほど美しい娘、今酒宴最中に酌がなくつて寂しい所へおぬしが來るとは、あゝ有難い〱、さあ酌をしてくれ。
かん　はい〱畏りました。在所の者故、不調法でござりまする。（ト酌をする。）
觀音　これ〱わい等もこゝへ來て、酒を飲め〱。兎角酌はたぼのことだ。あゝ有難い〱。
法策　お師匠様がお寂しいところへ、丁度よい女中さん。
久助　なんのよいことがあるものか、初めて來たなれ〱しい女は、押の強いものだ。
觀音　久助、われは腹ばかり立つてゐをる。それはさうと最前そちが國者が、出なほして來ると言つたが、こゝへ來られては迷惑だ。これ久助、大儀ながら草津まで行つて斷つて來やれ〱。

久助　え、この雪の降るのに、草津まで行くのでござりますか。

觀音　はて、おぬしが國者だ、來られてはならぬ、斷つて來い〳〵。

久助　はい〳〵畏まりした、なんの來ずともよい所へ女が來たばつかりに、飯も喰はずに草津まで行くたァいま〳〵しい、どうせ歸りは暮れるだらう、提灯を持つて行くべい。

法策　久助どん、早く行つてござれ、待つてゐて一緒に飯を喰はうよ。

久助　それを樂しみに行つて來よう、奉公人は喰ふよりほかに樂しみはねえ。（ト破れた番傘、弓張提灯を持ち門口へ出て、）この雪の降るのに、人使ひの惡い旦那だ。

觀音　久助まだ行かぬか。

久助　今行くところでござりまする。（ト呟きながら花道へはひる。）

觀音　はて、よく動き泣をする奴だ、人を遣へば遣はるゝだ。これ法策、おぬしは酒が厭なら飯を喰へ。

法策　有難うござりますが、久助が歸りましてから一緒に喰べませう。

觀音　それはさうと、お三婆あは料理拵へを手傳ひに來て、腰が痛いといつて歸つたさうだが、不斷から何やかやの世話、殊におぬしを子のやうに可愛がるお三婆あ、嘸一人で困つてゐよう、大儀ながら飯や肴を重箱にでも入れて、酒と一緒に持つて見舞ひながら行つてやりやれ。

法策　さういたしませう。年寄は喰べる物が何よりの樂しみ、どれ持つて行つてやりませう。

ト暖簾口へはひる。

觀音　これ／＼娘、何も遠慮はないから、うち解けて一つ飮みやれ。

かん　有難うござりますが、私は御酒は一向に喰べませぬ。

觀音　それでも半分位は飮めよう。（ト無理におかんに杯を持たせ酒を注ぐ。）

かん　あれ、もし、こぼれますわいな。（ト法策重箱の包みと徳利とを提げ出來りて、）

法策　左樣ならお師匠樣、一走り行つてまゐりまする。

觀音　むゝ、大儀ながら行つて來やれ／＼。

法策　もウし女中さん、久助どんの歸るまで、後をお頼み申しまする。

かん　はい／＼、早う行つて來なさんせ。

ト法策觀音院と印したる古き菅笠を持ち門口へ出る。雪頻りに降る。

法策　もしお師匠樣、こりやだいぶ雪の降りが強くなつてまゐりました。私どもの歸らぬ中、

觀音　や。

法策　今夜はしつかり積りませう。（ト法策菅笠を冠り花道へはひる。）

觀音　さあ〱お娘、邪魔は拂つた、ゆつくりと致すがよい。これお娘、最前男どもが追出さうとしたのを私が助けてやつたからは、定めし私のいふ事を聞いてくれるであらうなう。

かん　そりやもう危い命をお助けなされて下さんしたその御禮故、なんなりと我身に叶ひし事ならば、必ず否とは申しませぬ。

觀音　いや有難い〱、早速ながら物は相談ぢやが、私も見らるゝ通り家内もなし一人者故不自由勝、今から私が妾になり、世話をしてはくれまいか。

かん　そりやあなたほんまの事でござんすかえ。

觀音　何、ほんまとは。

かん　さあ、在所育ちの愚者まして身寄もない此身、酒の機嫌に私を、おなぶりなさるのでござりませう。

觀音　何のなぶつてよいものぞ、眞實おぬしが色香に迷つて。

かん　そのお言葉がまことなら、私や嬉しうござんすわいな。（ト恥かしさうにする、觀音院嬉しさうに、）

觀音　斯う打解けし上からは、そのやうに離れてゐるには及ばぬことだ。さゝもつと傍へ來やれ〱。

トおかんの袖を取る、おかん振拂つて、

かん　あれ、悪いことをなされますな。（ト飛退く途端に、以前の毒の壺へ躓きかける、觀音院驚いて、）

觀音　どつこい、大事の代物。

かん　もし、そりや何でござんすえ。

觀音　こりや南蠻祕法の毒藥ぢや。

かん　えゝ。

觀音　修驗の祕法に用ふる藥、服する時は忽ち落命。

かん　そんならそれが。

觀音　こりやお娘、必ず人に言ふまいぞ。

かん　ても、怖い藥でござんすなあ。

觀音　まあ〳〵それは片附けて、（ト床の間へ壺を載せ、）これお娘こゝはあまり端近故、まだいろ〳〵と話しもある、私と一緒に奥へ來やれ。（ト觀音院立上るを、おかん引止めて、）

かん　はい、參りますことは參りますが、まだ日の暮れるに間もあるし、お燗もさめずにをりますればもう一ツお上りなされませぬか。

觀音　おゝ、喰べようとも〳〵、おぬしのいふことなら何でも聞く、さあ〳〵澤山注いだり〳〵。

トおかん酌をして觀音院に無理に澤山酒を飮ませる。

觀音　あゝ甘露〳〵、おぬしも一つ飮みやらぬか。

かん　常は嫌ひな酒なれど、今日は目出度い我身の出世、思ひきつて喰べませう。

觀音　實は夫婦の固めも同樣、飮んでくれゝば、あゝ有難い〳〵。

トおかん觀音院酌をしておかんに飮ませる。おかん觀音院の顏をぢつと見て傍へ寄ろ、觀音院嬉しさうに寄り添ふを、おかん手早く懷中より繩を出し觀音院を手荒く縛ろ、觀音院驚きて、

觀音　こりや何故に、おれに繩目を。

かん　(觀音院をぢつと見て、)やかましい、だまつてゐなよ。

ト懷ろより呼子笛をだして吹く。と、下手の藪蔭より六人の手下盗人の拵へにて出來り門を明け、

六人　頭の姐御。

かん　コレ。(ト制する。六人は内へはひろ。)仕事は間夫だ。

六人　そいつァ上首尾。

かん　此の家の内の雜物を。

六人　合點だ。

ト六人はめい〴〵に上り込み、上手屋體より明荷二つほど其他兩掛、澁紙包を持出し、明荷をよき所へなほし、おかんこれへ腰をかける。觀音院震へて見てゐたが、

觀音　ヤ、扨は順禮の女めは、

かん　どろぼうサ。

觀音　えゝ

かん　海道筋に隱れのない、

六人　人丸のお六といふ、

かん　どろぼうだよ。

觀音　えゝゝゝゝ。

六人　何と膽がつぶれたか。

觀音　えゝゝゝゝ。

かん　何もそんなにびつくりすることはねえわな。噂の高い觀音院さんとやら、貰ひ集めた御祈禱料を取らうと思つた美人局、首尾よく行つていゝ態だなう。

手一　こんな仕事のある知らせか、この頃からの丁子がしら、

手二　さい先のいゝ今夜の上首尾。
手三　濡手であはよく祈禱の金。
手四　その上雜物着類まで、
手五　ひつさらつたら滿更な、
手六　この頃にない、大きな、
六人　金額。
かん　伊豆の國よりわざ／＼と京都へ呼ばれた自惚で、無性に錫杖がらつかせ、猫叉とやら變化とやら打殺させた褒美の金、こゝらあたりの狐つき、盲目や躄をいかさまでなほして取つた祈禱料、命資本の私より一倍上手の法印さん、おとした狐に化かされて惡者と異名も人丸のお六が民の揚鼠、銜へて恥を柿の本、教へもほの／＼明しがた、恨めしさうに睨めずとも島隱れした有金をきりきり出しておしまひなよ。
觀音　そんなら褒美に貰つた金を取らうばかりのそつちの仕事、手盛りを喰つたか、あゝ有難い。
手一　こまごとぬかさず、金の在所を早くぬかせ。
觀音　ぬかすとも／＼斯うなつたら仕方がない、神前の下の戸棚に入れてある。

ト手下の一、二戸棚の錠前を捻じあけ、戸棚より錠をおろせし革文庫を出し、金包を出して、

手一　金の員數も、

手二　五百兩あまり、

かん　思ひのほかに間夫な仕事。

ト手下等金を財布へ入れて首へかける、觀音院恨めしさうに見て、

觀音　折角溜めたその金を皆とられるも自業自得、かういふことゝ知つたらば、二人の者を使ひにやらねばよかつたもの。あゝ法策やァい、久助やァい。（ト向うへ思入。）

手二　えゝやかましいわえ。（ト觀音院を蹴倒す。）

手一　さうして此奴は、

六人　殺らしませうか。

かん　むゝ。（トうなづく、觀音院びつくりして、）

觀音　あゝこれ〳〵、待つてくれ〳〵、有金雜物渡した上は、命ばかりは、

かん　助けられねえよ。

觀音　そんなら、命も有難い。（ト投首をする。手下の三壺に目を留めて、）

手三　壺の中のは金ぢやあねえか。（ト前へ持つて出る。）

觀音　あゝ、そりや金ぢやあねえ。毒だ〳〵。その毒藥の包は手箱の中にある。

六人　なに、毒だと。（ト箱の中より包みを出す。）

かん　最前聞いた祕法の毒藥、何ぞの役に立ちさうなもの、然し試して見てえものだが。（ト包みを取る。）

手一　いつそ、此奴に喰はせて、

六人　毒の試み。

觀音　なに、毒藥を、いや、飲んだも同然。（ト逃げようとするを六人にて押へて、）

六人　やかましい、靜かに喰へ。

ト壺の蓋をとり、觀音院を無理に押へ、口を割つて毒を飲ませる、觀音院苦しみ、血を吐き落入ろ。

まんまと首尾よく。

かん　僅たつた一服で。（ト煙草を呑む。）

六人　毒の利目は、

ト手下双方より觀音院を引起す、おかん煙草の煙りを觀音院の顏へふつかけるを木の頭。

かん　おッかねえものだなう。

　トにつたり思入、この見得にてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

（草　津）お三婆住家の場

（石　部）横田川原の場

同返し

（水　口）蓮花寺繩手の場

（土山、坂の下）鈴鹿山だんまりの場

〔役名――觀音院下男久助實ハ大江因幡頭廣元、盜賊兒雷太郎實ハ竹川伊賀之介正忠、三作親百姓孫右衞門、猫間中將光義、船木雅樂之助、廣元家臣平田平藏、雜掌山影玄蕃、伊勢參り與之助、弟子法策。草津のお三婆、盜賊人丸お六、日の岡息女花園姫等。〕

（お三婆住家の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面三尺の佛壇、下手膳棚、諸所崩れかゝりし鼠壁、上手一間反故張りの障子屋體。欄間に澁紙包を結びつけあり。平舞臺眞中圍爐裏、鑵子かけあり、下手に一つ竈、臺所道具、薪割臺、上手に屋根裏へ突張りをせし體にて丸太を立てあり、いつもの所竹の簀戸、一面に雪積りなり、總て草津追分お三婆住家の體。こゝにお三以前の裝にて繩を綯ひゐる、門

口に百姓の太十、作兵衛鍬をかつぎ、立つてゐる所にて幕明く。

太十　ばあさん、雪の降るのに精がでますの。

お三　これは新田の太十どんに作兵衛どんか。

作共　この寒いのに何をさつしやるのだ、好な酒でも飲まつしやればよいに。

お三　その酒もこの雪で、又六がところまで買ひにも行かれず、ぢつとしてゐれば尙寒いゆゑ、干葉を乾す繩を綯つてゐるのさ。

兩人　いつもながら達者なことだな。

お三　して此方衆は畑へでも行かつしやるか。

作兵　いや〳〵私等は仕事ではない、昨夜隣りの權右衛門親仁が死んで、今夜葬ひを出すといふ故、澤山雪の降らぬ中、幸蓮寺へ穴掘りに行くのさ。

お三　それは御苦勞でござるの、まあ家へはひつて一あたりして行かつしやれ。

作兵　今暖まると行くのが厭になる、歸りに寄つて馳走になりませう。

お三　そんなら早く行つて來さつしやれ。

太十　兎角近所に年寄は御免だ。今月になつてから、新家の隱居佐十後家に權右衛門親仁。

作兵　この次は婆さんお前だ。

お三　あゝ此の衆としたことが、今ッから死んでなるものか、鶴龜々々。

作兵　はゝあ、婆さんもかつぎてださうだ。

お三　いや、かつぎもせぬが、死んでしまつては、好な酒が飲まれぬわいの。

太十　そんなら婆さん、歸りに一升さげて來ませう。

お三　おゝ早く行つてござれ、待つてゐますぞや。

兩人　どれ、小降りの中に行つて來ようか。（ト兩人花道へはひる。）

お三　あゝ若い者といふものは、この寒さにもめげず、雪の中をざく／＼と踏んで行くが、年が寄つては役にたゝぬ。今夜觀音院樣へ行けば好な酒を御馳走になられるが、雪を見てはとば口へも出られぬ、どれ／＼酒の代りに粗朶でも焚いて暖まりませう。

ト　お三繩を片附け圍爐裏へ粗朶をくべる。雪おろし合方にて、花道より法策出來りて、

法策　段々降りが強くなるので、下駄の齒がたゝぬやうになつた。この雪ではお三婆あも嘸酒が飲みたからう。早く持つて行つて悅ばしてやりませう。（ト門口を明け、）婆さん、家にござるか。

お三　おい、誰だか明けてはひらつしやれ。

法策　兩手が塞がつてゐるから、ちよつと明けて下さい。

お三　さういふ聲は法策どのゝやうだが、どれ〳〵今明けてやりませう。（ト門口を明けて、）おゝ法策どのか、この雪によう ござらつしやつたの。

法策　婆あさん、まあこれを取つて下さい。（ト德利と重箱の包みをお三に渡す。）

お三　あい〳〵、（ト二品を受取り、）嘸寒かつたであらう。さあ〳〵圍爐裏の傍へ來て當らつしやれ〳〵。

法策　あい〳〵。婆さんお前最前腰が痛いと言つて戻つたといふから、見舞ながら來たがもう快いのかえ。

お三　おゝさうかいの、それはまあこの降るのに親切に、よう見舞うて下さつた。したが冷えたせゐと見えて、家へ戻つて圍爐裏で暖まつたら、もうさつぱりと快うなりました。

法策　それはようござつた。お師匠樣も私も、どのやうに案じたか知れぬ。

　ト法策笠を脱ぎ門口へ立てかけ、手拭にて足を拭き家へはひる、お三は德利を見て嬉しき思入。

お三　さあ〳〵こゝへござれ〳〵、おゝこりやだいぶ風呂敷が濡れた。（ト風呂敷を解き重箱を出し、）これはきれいな風呂敷ぢやの。

法策　それは濱松染と言ひます。

お三　さうでござるかいの、何にしろこゝへ干しておかうわいの。（ト圍爐裏の傍へおき、）さあ〳〵澤山くべてあたらつしやれ。

法策　やれ〳〵焚火の御馳走で、やうやく人心地になつたやうだ。

お三　遠慮はない、澤山くべてあたらつしやい。それはさうと法策どの此の徳利や重箱は何でござるの。

法策　さあ、知つての通り今日は立振舞の御祝ひで、鮒膾に赤の飯ができ今夜は酒宴があるに、この大雪に誰も來ず日頃酒好きなこなたのこと、嘸今日は飲みたからうから持つて行つてやれとお師匠様の言附で、殘り肴を重へつめ世話になるこなたのこと故、酒も口ッきりついで來ました。さあ寒さ凌ぎに、早く燗をして飲まつしやれ。

お三　それは〳〵雪の降るのによう持つて來て下された。いやもう先刻から飲みたうて〳〵ならぬところ、觀音院樣のお志しで飲みたい念を晴しまする。（ト風呂敷をとき蓋を明けて見て、）ほうこれは見事な源五郎鮒。いや又この鮒はどこがよいの、かこがよいのというても近江ほどな所はない。汁も澤山なればあたゝめて喰べませう。（ト鍋を出し此中へ鮒を入れ、圍爐裏へかける。此中法策汚なき燗徳利へ酒をうつし罐子の中へ入れる。）おゝ、肝腎の燗をつけるのを忘れてゐた。

法策　いや婆さん、燗は私がつけておいた。

お三　てもまあ、心の利いた法策殿ぢやな。
法策　鑵子の湯が沸いてゐた故、丁度燗もよささうぢや。さあ早く飲まつしやれ。
お三　どれ、大きな物で御馳走になりませうか。（ト有合ふ茶碗を出す、法策注ぎお三飲みて、）あゝ甘露々々。
こりやもう一つ重ねずばなるまい、（ト又一つ飲み、）法策どの、一つ呑まつしやらぬか。
法策　いやわしは少しも飲めぬから、こなた澤山飲まつしやれ。
お三　それでは、も一つ重ねようか、（トお三酒を飲み、思入あつて、）あゝ今夜ばかりは好な酒も飲まれまいと思つたに、以前伊豆の國の長澤村で一つ所にゐた誼にて觀音院樣のお情故、雪の寒さを忘れます。これといふのも此方の親切、よう持つて來て下されたの。
法策　なんのいの、お師匠樣始め私らまで今度大津の假住居は女きれのない家故、縫仕事から洗濯まで世話になつたこなたのこと、雪の降るのに歩くぐらゐは何でもないことぢやわいの。
お三　ほんに、此方のやうに可愛いことをいふものはないの。
ト此内お三始終酒を飲みゐる、法策ふと上手の丸太を見て、
法策　これ婆さん、家の中へ見ッともない、なんで丸太を立つたのぢや。
お三　さあ、これは屋根裏が腐つた故、此の大雪でしわらうかと、隣り村の大工どのゝ丸太を借り、用

心に突ッ張つておいたのぢやわいの。

法策　なるほど、轉ばぬ先の杖とやらぢやの。

お三　さうぢやわいの。

法策　（屋根裏を見て、）おゝ、ひどい蜘蛛の巣ぢやの。

お三　まあ聞かつしやれ、男手はなし一家親類もなければ、村の若い衆を借りるのも氣の毒故、こゝへ來てから、一度掃いたばかりでござるわいの。

法策　あゝさうかいの。（ト紙包に目を留めて、）欄間に結ひつけてある紙包みは、ありや何でござるな。

お三　なに、紙包みとは。

法策　あれ、あそこにある、

お三　あゝ、あれかいの。（ト愁ひの思入あつて、）あの紙包みを問はるゝにつけ、思ひ出すは孫がこと、生きてゐたならこなたの年配。して、法策どのは何れの生れでござるぞいの。

法策　さあ、わしは何れの生れやら兩親知らぬ孤子にて、お師匠樣の養育受け人となつたる果敢ない身の上、生れの親の筐というては、守りに入れし産毛の包に月日が記してあるばかり。

お三　それは賴り少ないことであらう、して年は幾歳になるゝぞ。

法策　治承元年の生れにて、今年十七になりまする。
お三　おゝそれでは孫と同じ年、して〳〵生れし月と日は、
法策　生れし月は五月にて而も五日の誕生にて、産毛の包みに記してござる。
お三　すりや五月五日の生れでござるか。
法策　してこなたの孫は、
お三　やはり五月五日の生れ。
法策　はて、似たこともあるものぢやなあ。
お三　おいなう、同じ月日の生れと聞けば、思ひなしか法策どのは死んだ娘にどこやらが。ほゝほんに私としたことが、孫や娘が死んでからもう十七年になるけれど、老の愚癡に心から、どうやらこなたを、眞實の孫のやうに思ひますわいの。
法策　そのやうに言はつしやると、私も實の婆樣のやうに、
お三　思ふはこれも前生の、
法策　何ぞの緣があつてのことか。
お三　生れし月も、

法策　日も一つ、

お三　あ、よう似たことも、

兩人　あるものぢやなあ。

お三　これといふのもあの包みを、こなたが問ひし故のこと、人々には包み隱せしが孫と思うて今こゝで包みを明けて見せませう。（トお三薪割臺を足代にして欄間の包みをおろし紐を解き、中より更紗包みの御書と短刀とを出し、）さあ法策どの、これを見て下され。

ト法策御書を開き見てびつくりし、黄金作りの短刀を見て、

法策　賴朝公の自筆の御書に、三條小鍛冶が打つたる短刀、これを所持する謂れは如何に。

お三　その謂れは長い事だが、一通り聞いて下され。何をかくさうこの私は、もと伊豆の國の長澤村で、お三と言ひし取上婆あ、かぞへて見れば二十年さきのこと、領主の伊東祐親樣へお出入りをする縁により、娘のお澤をお腰元に上げたところが御意にかなひ、澤野と名を替へお側勤め、その頃將軍の賴朝樣が平家の爲めに祐親樣へお預けにて、伊東においでなさるゝ折、娘澤野にお手がつき、ついにお胤を身に宿し目立つお腹に是非なくも病氣というて退る時、有難いことにはなう、出產なして男子ならば竊に隱し養育なし、我世に出なば願ひ出よと、後の證據に下されし三

條小鍛冶の短刀に御自筆の御書物。（ト件の御書と短刀を兩手に持ちて思入。）

法策　えらいものを貰はんしたの。

お三　おいなう、それから私も一心籠め、あつぱれ娘に男子を生ませ玉の輿に乘せんと、手慣し業に十月の介抱、首尾よく生ませし御胤は玉のやうなる男子故、やれ嬉しやと思ひのほか、產聲もなく息は絕え、はつとばかりに血があがり、娘も共にその場で臨終。

法策　はあ。

お三　兩の腕を一時に捥がれし私が心の悲しさ、泣の淚で取片附け、七回忌の法事まで伊豆の國にてとひ弔ひ、その後緣者の勸めによりこの草津へ來て微な暮し、折がなあらばこの二品をお上へお返し申さうと思うたばかりで十七年、ほんに寶の持ちぐさらし、果報拙い親子が身の上、推量して下されいの。（トお三泣伏す、法策お三の脊を擦りながら、）

法策　さうかいの、おゝ尤もぢやく。かういふ證據のある上は、その子が達者であつたなら言はずと知れた源家の後取り、こなたも樂をさつしやらうに、自由にならぬが浮世の中、同じ月日の生れでも氏素性もない私は達者で、系圖正しきこなたの孫が死ぬのもみんな約束事、あきらめたがよいわいの。そのやうに泣いたとて十七年も後のこと、どうも仕樣がないぢやないか。

お三　さあ譬にもいふ死んだ子の年、返らぬこと故思はなんだが、生れし月日も替らずして、孫と思ふこなたに引かされ、昔語りに愚癡をならべ、よしない涙をこぼしました。（ト涙を拭ふ。）

法策　それも私がこの包みを聞いたから起つたこと、さあ〳〵早くこれを仕舞うて、憂を拂ふ玉箒、酒で憂を拂はつしやれ。

お三　おゝ益ない話で肝腎の、酒を水にして仕舞うた。（ト飲みかけし酒を呑む。）

法策　どれ、私が燗をつけてやりませう。

お三　胸のもや〳〵を晴らしませう。

ト法策は燗徳利へ酒をうつし鑵子へ入れる。お三は二品を澁紙に包み、

法策　然し婆さん、私はよけれど此の事は必ず人に話さつしやるな。

お三　そりや又何故に。

法策　さればなう、こんな物見た人はよけれど、何にも知らぬ世間の人が聞いたらば、何を言ふやらあの婆あは大そうなことを言ひ歩く、彼奴はえらい氣違ひぢやと、お前を人が笑ひますぞえ。

お三　どうして〳〵孫と思ふこなた故話しこそすれ、他の人になんで大事を話さうぞいの。

法策　そんなら今までその事は、誰にも話さつしやらぬか。

お三　十七年がその間、今話したが初めてぢやわいの。
法策　これ婆さん、こなたの娘の澤野とやらを葬つた伊豆國の檀那寺は、今に繁昌でござるかの。
お三　いえ〳〵その時の御住持は間もなく死なれて、今の住持は替つてゐますわいの。
法策　そんなら豆州のお寺では、こんな事情は知らずかい。
お三　おいなう。

ト雪おろし合方になり、法策よろしくお三に酒を強ひる。お三段々に醉の廻ること。

法策　さあ〳〵婆さん、私は飲めずこなた一人だ、大きい物で飲まつしやい。（ト丼を出す。）
お三　丼鉢とは有難い。（ト丼にてがぶ〳〵と飲み、）あゝいゝ心持だ。
法策　もう一つ飲まつしやらぬか。
お三　いや〳〵もういけぬ〳〵。今のいつぱいで先の醉を引出し、あゝいゝ心持に醉つた。醉うた〳〵五勺の酒に。（ト手拍子をたゝき、甚句を唄ひながら倒醉れて寢る。）
法策　いつにない婆さんのよい機嫌。これ、寢るならこつちへよつて寢さつしやい。
お三　ほんに、私一人飲んでゐるなう。
法策　そりや知れたこと、お前の馳走に持つて來たのぢや。精出して飲まつしやれ。

お三　おゝ飲まうとも〳〵、志しの酒ぢやもの、飲まいで何としませう。連合はなし頼りには放れ、唯朝夕の看經とこの酒ばかりが樂しみぢやわいの。おゝその樂しみで思ひ出した、おれがよいもの見せませう。

法策　なに、よい物とはどんなものぢや。

お三　定めしあれを見せたればほしがるであらうが、こりや遣るのではない、見せるばかりぢやぞや。（ト立つて佛壇の引出しから奉書の紙包みを持來りて、）さあ〳〵これぢや〳〵、これはの、最前わしが話した娘のお澤がお邸から持つて來たお細工物、これは御殿であれがした手細工ぢやといの。それ故わしが筐と思ひ大事に持つて、まだその外にこの打敷（ト佛壇の打敷をとつて來り）この草深い田舍では見たこともないこりや古金襴、これも娘が帶の布、朝夕これを見るにつけ、何で先へ死んだ、年寄をば後へ殘し逆まごとを見るといふは、いかなる因果の報いやら、阿彌陀樣も聞えませぬわい。

ト始終生醉の思入にていろ〳〵あつて、トヾ法策の膝を枕にして寢る、法策こなしあつて、

法策　まだ言はんすかいの、あゝこりや泣上戸ぢやな、こんなことなら酒を勸めて飲まさなんだらよかつた。さあ〳〵もう泣き止まんせ〳〵。（ト搖ぶつて見て思入、）こりや泣寢入りに寢たさうな、婆さ

ん婆さん。あゝもうたわいないわい。

ト時の鐘凄き合方かすめて雪おろしになり、法策四邊を見まはし、思入あつて上の方の丸太を足にて蹴のけ、端切の木をとつて、

さあ婆さん、枕をやるよ。

トお三の襟の下へ入れ、丸太の端を上手の屋體の柱へ、お三が綯ひかけし繩にてしつかりと結びつけ、丸太をお三の首へかけ思入あつて、

南無阿彌陀佛。

ト丸太の端へ腰をかけ、その身を重りにきつと見得、お三あツともがき苦しむを見て、

婆さん、苦しからうがちつとの間だ、辛抱しろ〳〵。

ト腰をかけたまゝこづく、その度々にお三もがき終に息絶える。法策足をのばしその鼻息を窺ひ、しめたといふ思入、

もう息はとまつた。

ト丸太を外して元のやうに突張り、紙包より二品を出し、墨付を懷へ入れ、短刀を濱松染の風呂敷に包みて腰にさし、お三を頭から圍爐裏の中へ突込み、

丸太でぐつとしめたれば、咽喉にくびつた疵はなし、斯うしておけば喰ひ醉ひ、圍爐裏へのめつて燒死んだと誰が見ても思ふは必定、はて智慧も出れば出るものだ。

ト圍爐裏へ松葉を入れると煙り立つ。

益なきその身の素性を話し、出世の種になる品をおれに見せたばつかりに命を捨てしお三婆あ、然し坊主のおれに殺され、直にその湯で火葬になるは、よつぽど後世のいゝ婆あだ。どれ人の來ぬ間に少しも早く。

トつか〳〵と門口へ出で、以前の菅笠を冠る、雪頻りに降る。此時ばた〳〵人音する、法策向うを見て、

南無三。向うに見ゆるは人影、見咎められては身の大事、裏傳ひにさうだ。

ト思入あつて下手の藪を押分けてはひる。花道より以前の太十、作兵衞一升德利と竹の皮を提げ出來り、直に門口へ來て、

太十　婆さん、約束の通り一升さけて來ました。

作兵　さあ、燗をさつしやれ〳〵。（ト兩人中へはひり、お三を見て、）

太十　や、こりやお三婆あが圍爐裏の中へのめずり込んでゐる。

作兵　また株でくらひ倒れたか。

ト作兵衛つかくと行きお三を引起す、お三の顔燻つた心にて眞黒になつてゐる。作兵衛見てびつくりなし、

やあ、こりや婆さんはごねてしまつた。

太十　えゝ又穴を掘らねばならぬか。

ト呆れし思入にて作兵衛手を放す、この模様よろしく道具廻る。

(横田川原の場)――本舞臺、正面一面雪の積りし藪、上の方藁葺の渡し小屋、此の前川の流れ、榜示杭に石部宿横田川渡し場とあり、總て石部宿横田川原の體。小屋の中に伊勢參りの與之助犬を抱き菰を冠り寢てゐる。傍に菅笠柄杓などある。

ト上手より以前の百姓大津問屋といふ弓張提灯を持ち出來り、下手より百姓徳藏火の番といふ弓張提灯を持ち出來り、行逢ひて、

徳藏　おゝそこへござらつしやるは、大津の衆ではないか。

太十　こりや石部の番太どのか。

作兵　大そうな雪でござるの。
德藏　閏月があつたので、いつもより降りやうが早い、この雪に何處へ行かつしやるのだ。
太十　番太どの聞いて下されし、伊豆の國から來てござる觀音院といふ修驗者の所へ今夜盜人がはひつてな、有金やら雜物まで殘らず盜んだその上に、觀音院に毒を飮ませおッ殺して逃げをつたて。
作兵　ところで、内の小坊主も又下男も見えぬ故、その二人を尋ねに出るのだ。
德藏　それはとんだことだの、何でもこの頃は泥坊が多いので、街道筋は油斷がならぬ。
太十　大方噂の地雷太郎か人丸お六の仕業であらう。
德藏　何にしろこの雪に、御苦勞でござるの。
太十　ちと小降りになつたやうだ。この間に早くたづねませう。
德藏　そんなら早く歸らつしやい。
作兵　あい、忝なうござる。
ト三人上下へはひる。時の鐘凄き合方にて、藪を押分けて、法策窺ひ出で、
法策　今百姓めらの話を聞けば、大津の旅宿へ泥坊がはひり師匠を殺して有金から、雜物まで盜んだとあれば、こいつア家へ歸るは無駄だ。これから直に隨德寺、思ひがけなく手に入れたこの二品を

證據にしてお澤が生んだ賴朝の落胤だと僞つて、鎌倉御所へ名乘つて出れば、總追補使のさしづめ嫡子、家督になりやあ六十餘州この手の掌に握る法策、丁度生れた年月もその落胤と違はぬとは、天から授かる身の果報、はて、人の運は何處にあるか知れねえものだなあ。おれを生んだ兩親も種おろしがよかつたか、同じ五月に芽をふいた植付時の早苗稻、こいつは實入がたんまりだわい。（ト此の時菰の間より犬出て法策へ吠える。）えゝこの畜生め、しツ〱。

ト雪をまろめて犬に打附ける。この雪與之助にあたる。犬は下手へ逃げてはひる、與之助起上りて、

與之　あゝこれ、誰だか投うちをさつしやるな〱。

法策（びつくりして、）や、そこにゐたのは、渡し守どのか。

與之　いえ、伊勢參りでござりまする。（ト言ひながら小屋から出る。）

法策　ふう、してこなたは先刻からそこにゐたか。

與之　はい、この大雪で痞がおこり、宿まで行くにも行かれませず犬を抱いて宵ッから、こゝに野宿をしてをりました。

法策　それは嘸難儀であらう、見れば連もない樣子だが、いつたいこなたはどこの者だ。

與之　はい、私は三州岡崎の者でござりますが、京の島原に勤めをしてゐる姉の所へ、母親の使を兼ね

て伊勢參り、僅な路用を途中にて護摩の灰に盗まれて、據なく布子を賣り、この寒空に單衣一枚それ故持病が起りまして、まことに難儀をいたしまする。

法策　やれ〳〵それは氣の毒なことだ。何にしろこの寒さにその薄着ではたまるまい。その單衣を脱がつしやれ、私が布子を進ぜませう、これを着て行かつしやれ。

與之　思召しは有難うござりますが、それではお前樣がお寒うござります。

法策　はて、私は達者な身體故、裸でゐても障りはない、さあ〳〵早くそれをぬがつしやれ。

ト此中法策御書を菅笠の間へ入れ、短刀を雪の中へ隱し帶を解きかゝる。

與之　御親切に言うて下さりますを、お言葉返すは失禮ながら、それではどうも。

法策　はて、唯やるといふではなし、その單衣と取替へるのぢや。遠慮はない、着て下され。

與之　それほどまでにおつしやつて下さりまするなら、頂戴いたすでござります。（ト單衣を脱ぎて）左樣なら、むさくともこれをあなたへ上げまする。（ト法策に渡す、法策は與之助に布子をやる。）これは、襦袢帶迄でござりまするか、えゝ有難うござりまする。これで寒さを忘れます、地獄で佛とはこのことでござりまする。

法策　とてものことに、京まで路用の金をやりませう。

與之　それは有難うござります。

法策　それ、ひいやりと受取りやれ。

ト雪の中の短刀を出し、拔打に與之助に切附ける、與之助びつくりして。

與之　やあ、人殺しだ。

トいふ間もあらせず首を打落し、首を川へ打込み短刀の血を拭ふ、この時觀音院と記した菅笠に血したゝる事。法策につたりと思入あつて、

法策　大事を聞いた伊勢參り、命を取るに幸ひは裝恰好が似てゐる故、情ごかしに布子を着せたは、我身替りにせうばかり、首がなけりやあ誰が見ても、人手に掛つて法策は死んだと思ふ證據は菅笠これから此身は生れ代り賴朝公の御落胤、生れ年とも替らぬとはこれも何かの緣であらう」待てよ大事は小事、伊勢參りの襟に守袋をかけてゐた。（ト與之助の懷より文を結付けし守袋を出し、何心なく文を見て、）なんだ、京都島原三笠屋にて高窓どのへ三州岡崎村母そより。むうこの三笠屋の高窓は北條駿河介が身請をなし、國へ伴ふたしかに傾城、扨は殺した伊勢參りは高窓太夫が弟であつたか。（ト此時月出る。）雲もあがつて晴れ渡る月の明りに文の樣子を。（ト開き見て、）何々「一筆しめしまゐらせ候、この程はようぞや心にかけられ遠路の所お文下され嬉しく存じまゐらせ候、先はそもじ

事替りなくお暮しの由、何より目出度存じ候。此方にても親子とも無事に候まゝ御案じなされまじく候。扨いつもながら悪い耳を聞かせ氣の毒に存じ候へ共、據なき事御座候故、何卒金子四兩この弟與之助へ御貸し下され度候、そもじ事は幼少の折別れ候故定めて顔も存ずまじく候まま、兄弟同じ守袋を證據に御名乘りなさるべく候。猶金子入用の事情は弟より詳しくお聞き下され度候。先は老の筆の廻り兼ね、用事のみあら〳〵目出度くかしく。」むう、こりやいゝ物が手にいつたわえ。」顔を知らぬとあるこそ幸ひ、高窓太夫が弟となり、金の無心も四兩の四の字へ一を引いて百兩となし、四兩の金を百兩と口から出まかせ嘘をつき、騙りとるには駿河介が國へ下る途中を待受け、こいつは路用にありついたわえ。

ト思入あつて守袋を懐へ入れ、伊勢參りの菅笠を冠り、菰を引掛け柄杓を持ち花道へ行きかゝる。と、花道より久助觀音院といふ弓張提灯を點し出來る。花道にて行き逢ひ、兩人思入あつて法策菰を冠り摺違つて花道へはひろ。久助は合點の行かぬ思入にて本舞臺へ來り、與之助の死骸に躓きびつくりなし、

久助 や、こりや人が斬られてゐるが、何處の人か氣の毒な。(トよく〳〵見て、)やあ、首はなけれど法策殿のやうだが。(トあらため見て、)おゝさうだ、鼠の布子に蜘蛛の巢絞りの襦袢、觀音院と記せし

笠に濱松染の小風呂敷、こりや法策に違ひないが、首まで切つたは意趣斬りか、但しは物取りか何にしても可哀さうな事したなあ、（ト與之助の左りの腕を引ばると袖、まくれて二の腕見ゆるを久助見て）はて、合點の行かぬ、法策が左りの腕には天の字に似た痣があつたが、今この死骸に痣のないはむう、（トきつと思入、）もしやこれは、（ト久助身替りと悟る思入、此時以前の平藏先に伊勢參りの道者四人出で下手へ控へ、）

平藏　御前樣。

久助　こりや。

ト押へるを木の頭、久助死骸の笠と衣類を取置けといふ思入、平藏頷づく、この仕組みにてよろしく、

ひやうし　幕

ト馬士唄にて尻明に直に引返す。

（蓮花寺繩手の場）――本舞臺一面の松原、上手にこれより水口宿蓮花寺領と記せし榜示杭、後ろ淺黄幕。・・・に上手へ寄せて牢輿をおき、傍に玄蕃半素袍にて床几に掛り、左右に捕手八人控へてゐる體にて幕明く。

玄蕃　いかに者共、これなる牢輿の囚人は木曾義仲に縁を組み、謀叛の聞えに自殺なしたる猫間中納言が悴光義、親の因果が子に報い鎌倉表へ引渡し死刑に行ふ急ぎの道中、油斷のならぬはこのほどより晝夜に限らず盜賊徘徊なすとのこと、もし囚人奪はれなば主人を始め我々が身の上、

○　玄蕃樣の仰せ通り、今東海道に噂ある地雷太郎人丸お六、

△　まつた赤星富士ヶ根などゝ、名たゝる盜賊横行なし、

□　大小名が交代の旅宿へ踏んごみ亂暴なすは、

◎　まさしく平家か木曾の殘黨、油斷のならぬ、

四人　ことでござる。

玄蕃　そも〳〵これより行く先は、往昔阿黑王といふ盜賊住みし鈴鹿山、人家稀なる山中なれば、心をつけて警護いたせ。

皆々　心得ました。

玄蕃　最早日足も七つ下り、暮れては道も物騷なれば片時も早く峠を越さん。それ牢輿をかき上げい。

皆々　はあゝゝ。（ト立掛る、此時花道揚幕の内にて、）

雅樂　あいや山影玄蕃殿、暫くお待ち下さりませ。

玄蕃　なに、待てとはッ（トばた〳〵になり、花道より雅樂之介菅笠を持ち、花園姫と共に出來る。）やあ誰かと思へば、大罪人たる猫間が家來、

雅樂　船木雅樂之介にござります。

玄蕃　して某を呼留めしは。

雅樂　お呼留め申せしは、ちと其許へ願ひござつて。

玄蕃　なに、某へ願ひとは。はゝあこりや何か、主に放れ扶持に放れ、浪人のたつきがなさに、こりや手の内を願ふぢやまで。

雅樂　いや、なか〳〵もつて左樣な儀ではござらぬ。何をか包まん某は主用あつて國遠なし、此度の騷動に有合はさゞる此身の不運、御暇乞をいたし度くと馳付け見れば御主人には、死罪の沙汰に極りて、鎌倉表へ送らるゝと聞いてびつくり南無三寶と、夜を日についで參つた某、何卒貴殿の情にてお暇乞の御對面を、

玄蕃　だまれ。

雅樂　お許しなされて下さるやう。

玄蕃　だまれ。

雅樂　偏に願ひ上げまする。

玄蕃　えゝ、だまらつしやい。最前より押だまつて聞いてをればさま〴〵なる癡言、惡逆無道の義仲に縁を組んだる猫間光隆自殺なしたは反逆露顯、その言譯のたゝざる故鎌倉武將へ引渡し、由井ヶ濱にて死刑に行ふ光義に、對面などゝはかなはぬ事だ。

雅樂　さゝ、その仰せは御尤もながら、そこを貴殿の寸志にて、

花園　一目なりとも光義さまに、お逢はせなされて、

兩人　下さりませ。

玄蕃　やあ、ならぬ〳〵、京地にあらば兎も角も、海道筋は身共が預り、對面さすこと罷りならぬ。

雅樂　ではござりませうが、そこをどうぞ。（ト玄蕃の袖にすがる。）

玄蕃　えゝしみしつこい、放さつしやい。（ト振拂ひ。）囚人警護は殿下の言附、強つて邪魔だてするが最後、兩人共に繩かけうか。

雅樂　さあ、それは。

玄蕃　えゝ、きり〳〵と歸りをらう。

雅樂　すりやどうあつても。

玄蕃　かなはぬことだ。（ト中啓にて雅樂之介を打つ。）
雅樂　やゝこりや某が面體を。（トきつとなり、刀の柄へ手をかける。）
玄蕃　妨げなす故打つたがどうした、見りやあ刀に手をかけてわりあおれを殺す氣か。こりや鎌倉では
時限りの大事の役目蒙むりしこの山影玄蕃樣に、手向ひなさばうぬよりも主人光義が身の上だぞ。
雅樂　ちえゝ。（ト口惜しき思入、花園姫縋り留めて、）
花園　これ雅樂之介、腹も立たうが折が悪い、何事も妾に免じ、どうぞ料簡してたもいなう。
雅樂　よろしうござりまする、聊爾はいたしませぬ。必す御案じなされますな。
玄蕃　（雅樂之介の刀の柄を中啓にてたゝきて、）どうだ切らぬか、切る氣はないか、えゝ張合のない青二才
めが。（ト柄を土足にて蹴る。）
雅樂　やあ、こりや刀の柄を土足にかけしか。
玄蕃　おゝ掛けたがどうした、なんとした。
ト雅樂之介を蹴倒す、これにて雅樂之介きつとなるを、
花園　あゝこれ。（ト留める。）
捕手　（立ち向ひて、）手向ひなさば、

四人　我々が。

玄蕃　それ、打つてとれ。（ト四人雅樂之介へかゝるを、雅樂之介左右へ投退け立廻る。）

四人　心得ました。

玄蕃　それ、彼れに構はず牢輿を、早く〳〵。

捕手　はあゝ、（ト牢輿を擔ぎ上手へはひる。雅樂之介續いて行かうとするを捕手等支へる。）

雅樂　御主の御身を大切に蟲をこらへにこらへしが、重ね〴〵の傍若無人、もう堪忍の緒が切れた。片端から覺悟なせ。

四人　何をこしやくな。

ト三味線入り禪の勤めになり、雅樂之介を相手に立廻り、花園姫あちこちと此中へ入り邪魔になること。トゞ雅樂之介四人の捕手を追つて下手へはひる。花園姫後を見送りて、

花園　これ雅樂之介、長追ひして怪我しやるな。早う戻つてたもいなう。雅樂之介なう〳〵。

ト花園姫も追ひかけて下手へはひる。馬士唄になり、花道より孫右衞門年老いたる順禮にて出來りて、

孫右　こゝはもう水口の棒鼻、死んだ婆めが後生のため、西國順禮、いそがぬ旅とは言ひながら、もう

やがて日暮前、ちつとも早く今夜の宿りへ、さうぢや〳〵。（ト舞臺へ來る、此時上手にてばた〳〵と人音する。）あの人音は何ぢややら、怪我でもしてはならぬ。ちつとの間どこぞの小陰へ。それがいゝ、それがいゝ。（ト下手藪の蔭へはひる。上手とり花園姬と玄蕃出來りて、）

玄蕃　花園姬動くな。（トきつといふ。）

花園　えゝ。（トびつくりする。）

玄蕃　いや何もびつくりすることはない、そもじが賴みを聞屆け、猫間中將光義に身共がそつと逢はしてやる。

花園　え、すりや、光義樣にお前樣が。

玄蕃　おゝ逢はしてやるその代り、身共がそもじに賴みがあるが、よもや厭とはいふまいな。

花園　そりや身にかなうた事ならば。

玄蕃　おゝ、かなふとも、ついちよこ〳〵とかなふことだ。（ト袖を捉へるを、花園姬びつくりして振拂ひ、）

花園　あれ、惡いことをしやるな。

玄蕃　何の惡いことではない、そもじの慕ふ光義は男はよけれど罪極まり、近きに首はころりと落ちる首なきむくろに心中立、そんな馬鹿げたことはせず、少々男は次なれど今出頭のこの玄蕃、自由

になればそもじの仕合せ、よい返事を聞かしてくりやれ。

花園　えゝ汚らはしいその言葉、聞くもうるさい放しやいなう。

ト玄蕃を突倒し逃げるを玄蕃追ひまはす。下手より孫右衞門出來り此中へはひる。玄蕃花園姫と思ひ孫右衞門を捉へる、此の間に花園姫は下手の藪の蔭へかくれる。

玄蕃　少々男は次なれど、自由になればそもじの仕合せ、うんと返事をいたしてくりやれ。（ト此時孫右衞門を見て）や、われは。（トびつくりして飛退くを、孫右衞門捉へて）

孫右　これお侍樣、私は男は構ひませぬ。仕合せにさへなることなら、うんと返事をいたしませう。

玄蕃　えゝ、何をたわけたことを。（ト振拂ひ）姫はどつちへ失せをつた。（トうろ／＼見廻す。）

捕手　（上手より出來りて）玄蕃樣々々、大變でござります／＼。

玄蕃　なに、大變とは何事だ。

捕手　はツ、唯今鈴鹿山へかゝりし所あまたの盜賊現れ出で、牢輿を奪ひ取り逃去りましてござりまする。

玄蕃　やゝ、鈴鹿の山中にて牢輿が現れ出で、盜賊を奪ひしとか。

捕手　いえ、盜賊が牢輿を奪ひとつてござりまする。

立番　えゝ何をあわてゝ、間違つたことを。
孫右　もし、うんと返事をいたしませうか。
立番　えゝ、それどころかい。家來つゞけ。
捕手　はッ。（ト立番先に捕手附いて上手へ急ぎはひる。孫右衛門見送りて、）
孫右　いや、たはけた奴もあればあるもの。
花園　（藪より出來りて。）これ、そこな人、今の侍はどちらの方へ行たぞいの。
孫右　はい、鈴鹿のはうへ參りました。
花園　そなたのお蔭で自らが、危ふい難儀を脱れたわいなう。
孫右　はあ、それで讀めた。（ト花園姫を見て。）見れば氣高いお方ぢやが。（ト合點の行かぬ思入。）
花園　この雅樂之介はどうしたか、モシ怪我でもしはせぬかいなう。
孫右　（思入あつて、）あいや、もし雅樂之介とおつしやりますからは、もしやあなたは日の岡樣のお姫樣
　　ではござりませぬか。
花園　いかにも自らは兼貞が姫ぢやが、さういふそなたは。
孫右　はい、お目通りをいたしませぬ故、お見知りはござりますまいが、雅樂之介が親父めでござりま

する。

花園　そんなら常に噂に聞いた。

孫右　遠州見附在にをりまする、孫右衛門にござりまする。

花園　すりや、雅樂之介が親でありしか。

孫右　お姬樣でござりましたか。

花園　思ひがけない。

孫右　これはしたり。（ト思入あつて花園姬を上座へなほし、）いや、何は兎もあれあなた樣には、何故御旅行遊ばしまする。

花園　さあ、自らが許嫁の猫間中將光義樣が、無實の罪にて鎌倉へ虜となりてお下り故、一目なりともお目にかゝり、お暇乞が致したさに雅樂之介を供に連れ、これまで來る甲斐もなく光義樣にもお目にかゝらず、警護の者の狼藉に、便りに思ふ雅樂之介は多勢を相手に行方知れず、いかゞはせんと思ひしが、そなたに逢うたは神のお助け、力となつてたもいなう。

孫右　お力にならいで何といたしませう。然しこゝにおいでなされては、今にも警護の者共がとつて返さば御身の大事、幸ひあの土山宿には知邊もあれば、一先それまでお伴ひ申しませう。

孫右（下手にて人音するを聞付けて、）あれ〳〵、遙かに聞ゆる人聲は。
花園　たしかに今の警護の者。
孫右　こゝへ取つて返さぬ内、
花園　片時も早う、
孫右　さあ、ござりませ。

ト孫右衞門花園姫の手を執りて上手へはひる。と榜示杭、松並木を引いてとり、淺黄幕を切つておとす。

（鈴鹿山の場）――本舞臺一面の高二重の岩組、上下に松の大樹、總て鈴鹿山峠の體。こゝに以前の玄蕃と雅樂之介引附けてゐて、ちよつと立廻つて、

玄蕃　こりや雅樂之介には、何とするのだ。
雅樂　何とするとは知れたこと、花園姫は何れへやりしぞ、さあ眞直に在所をぬかせ。
玄蕃　いや、その詮議はこつちより、最前囚人光義を盜賊が奪ひしはうぬが賴みに極つた。さあその行方をぬかしをらう。

雅樂　やあ、盗賊どもに奪はれしその行方をば身共が知らうか、それはともあれ姫が在所を。

玄蕃　いゝや光義が在所を。

雅樂　きり〳〵ぬかせ。

玄蕃　われからぬかせ。

雅樂　さあ、

玄蕃　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

玄蕃　ぬかさにや、斯うして。（ト刀を抜きかけるを、）

雅樂　何をこしやくな。

ト留めるを振拂ひ、ちよつと立廻り、此の岩組に山幕附いて段々と高梁まで迫り上るを、黒幕にて消す。これと同時に舞臺眞中へ公家の拵への光義岩に腰かけたるを盗賊の拵への地雷太郎敬つてゐる體にて迫り上る。これにて山幕を切つて落す。

（同古社の場）――本舞臺正面二間中足の古宮、藁葺狐格子、鈴鹿明神といふ額、上手に蒲鉾小屋邊り

に松の立木。鍍金の半月をおろし、總て鈴鹿山古社の體。

光義　（思入あつて）はて、心得ぬ。斯くまで我を尊敬なす、そもまづ汝は何人なるぞ。

太郎　（思入あつて、）お見忘れありしか光義卿、我は御父光隆卿に仕へ、傍輩香川三作と口論なしてお暇出で、十年この方流浪せし、竹川伊賀之助正忠でござる。

光義　なに、伊賀之助正忠とや。（ト月影に正忠を見て）まことにそちは伊賀之助、

太郎　絶えて久しきお目見得も、

光義　以前に替る面影に、

太郎　お見忘れありしか、

光義　思ひがけない、

兩人　對面ぢやなあ。

光義　あ、そちが館を出でたるは、昨日今日と思ひしが、

太郎　實に光陰は矢の如く、算へて見れば早十年。

光義　月日に替りはあらざれど、

太郎　替り果てたる御家の成行、

光義　定めて樣子は聞いたであらうな。
太郎　篤と承知仕り、主君御最期のその日より、地雷太郎と變名なし、身は白浪の夜働き。
光義　そりや何故に。
太郎　盗賊いたす仔細はこれに。（ト懷より袱紗包みの連判狀を出す。光義とつて）
光義　どれ。（ト開き見てびつくりなし）やゝ、こりや一味徒黨の連判狀、何故あつてかほどまで、山賊野武士を語らひしぞ。
太郎　それぞ御父光隆卿無實の罪にて御自殺ありし、その御無念を晴らさんと、盗賊なして集むる軍用、まつた今日光義卿を路頭に待受け奪ひしは、御館を亡ぼすその時に總大將に仰がん爲め。
光義　ほゝお、以前の恩を忘れずして、父が無念を晴らさんとは、天晴忠義の伊賀之助、さはさりながら臣として君を恨むは本意にあらず、父光隆が自殺なせしも、思へば天なりこれ命なり、一旦汚名に曇るとも、何日かは晴れん無實の罪、その時猫間の家名を立つるが此の企てに勝りし孝養。
　ト連判狀を太郎に渡す。
太郎　えゝ言甲斐なき光義卿、佞人讒者のさかしらを、事實と心得罪なすは、一天萬乘の君ながら、下賤匹夫に劣りし政事、既に御家に年經たる古猫ですら御館を恨み、種々の怪異をなせしと聞く。

ましてや人の身と生れ、おめ〳〵打捨ておかれませうか。さあ一味徒黨に合體あるか、但し得心召されぬか、二つに一つの御返答此の場に於て承りたい。

光義　假令邪非道にせよ、臣たる身にて御館を恨むは。

太郎　では、御承知ござりませぬか。

光義　いかにも。

太郎　むゝ。（ト思入あつて差添を拔き、腹を切らうとするを光義留めて、）

光義　こりや待て正忠、何故切腹いたすのぢや。

太郎　主將に賴まん光義卿御得心ござらねば、此の企ても最早これまで、自殺いたして光隆卿へ申譯仕らん。（ト振拂ふを又留めて、）

光義　やれ短慮なり、早まるまいぞ。（トきつとなる。）

太郎　然らば、御得心下さるか。

光義　さあ、それは、

太郎　切腹なさうか。

光義　さあ、

太郎　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

太郎　如何でござる光義卿。

ト太郎きつと思入あつていふ。光義も是非なき思入にて、

光義　むゝ、左ほどまでに其方が思ひたつたる此企て、假令邪非道にせよ。今はこの身も何をか厭はん。光義合體なしたるぞ。

太郎　すりや御得心下さるとな。

光義　いかにも。

太郎　これにて正忠本意を達せり。

ト太郎につたりと思入あつて腰の巾着より玉を出し打附ける。烈しき音してぱつと煙り立つ。これを合圖に左右より大勢の手下松明を手にし、思ひ〳〵の武器を持ち出來り、

皆々　かしら。

太郎　皆の者。

皆々　合圖の狼煙は。

太郎　光義卿を警護なし、我が隠家へ御供しやれ。
皆々　合點でごんす。
光義　すりや　某はこれより一先、
太郎　彼等をしもべに、
光義　そちが住居へ、
太郎　片時も早う。
光義　正忠、さらば。
太郎　はッ。（ト辭儀をなし、）我君のお立ち。
皆々　はあゝ。

ト手下二人先に立ちて松明を灯し、此次へ斧を擔ぎし手下二人二行に立ち、次に光義、後より手下大勢附添ひ花道へはひる。太郎跡を見送りて、

太郎　絕えて久しき主君の公達、光義卿の危急を救ひ、味方の主將になしたる上は、今海内に世を忍ぶ平家の殘黨木曾の餘類。より〳〵味方に招き寄せ御館を亡ぼす日頃の本望。最早今宵も子の上刻これから先がこつちの世界、どりやそろ〳〵と出かけうか。

ト思入あつて花道へ行きかける、此時上手の蒲鉾小屋の垂を上げ、中にお六菰を引つかけ、竹杖を持ち居て、太郎を見て思入あつて、

お六　もし、ちよつと待つて下さんせ。

太郎　（振返りて、）なに、待てとはおれか。

お六　あい、お前でござんす。

太郎　月はあれども霧がくれに、姿はそれと分からねど、聲はまさしく女の樣子。

お六　あい、鈴鹿の山の往來のお情受けて世を送る、私や非人の女子でござんす。

太郎　してまたおれを、呼留めしは。

お六　お前に賴みがござんす故。

太郎　すりや、それ故に。

お六　どうぞこれまで。

太郎　賴みとあらば、

お六　來て下さんすか。

太郎　どりやそれへ行つて逢はうかい。（ト舞臺へ來り兩人顏見合せ、思入あつて入替り、）何處の誰か知らねど

も、呼び留められたは一樹の蔭。

お六　一河の流れも他生の縁、破れ莚も有合せ、さあ〳〵こゝへ。

太郎　して呼留めて、おれに頼みは。

トお六莚を敷き、太郎その上へ坐る。

お六　さあ、そのお頼みは。

太郎　頼みといふは。

お六　さあ女の口から恥しいが、お前の女房になりたい頼み。

太郎　なんと。

お六　木の間を洩るゝ月影に見ればいとしい姿故、どうか女房に持つておくれな。(ト恥かしき思入。)

太郎　(こなしあつて、)むゝ、ついに見なれぬ女だが、人もあらうに盗人を見かけて女房になりてえとははて物好な女だなあ。

お六　さあ、その盗人が望み故。

太郎　や。

お六　地雷太郎と街道筋にその名も高い盗人と聞いてゆかしく思ひしが、測らず逢ひしも盡きぬ縁。

太郎　女の身にて大膽にも、知つて女房になりてえとは。
お六　（思入あつて、）わつちもやつぱり盜人さ。
太郎　なんと。
お六　餓鬼の折から手癖が惡く、小遣ひ錢から板の間稼ぎ、美人局やら強請やら、たうとう今ぢやあ功が積み、夜盜かつさき追落し、人丸お六と異名を取つた、けちな女の盜人さ。
太郎　すりや東海道に隱れなき、人丸お六といふのはおぬしか。
お六　互ひにこれまで名は聞けど、
太郎　晝は人目をはゞかる身に、
お六　始めて逢うた、
太郎　人丸お六。
お六　太郎さん、どうぞ女房に持つておくれな。
太郎　むう、人丸お六と名を聞けば、おぬしよりもこつちから、女房に持ちてえ持參の魂。
お六　わつちが見込みもお前の魂。
太郎　世の譬にもいふ通り、


五十三次之内

お六　互ひの望みも、
太郎　似たもの夫婦、
お六　丁度ところも、
太郎　鈴鹿の山中、
お六　鬼の女房に、
太郎　鬼神とやら、
お六　地獄をかけて、
太郎　二世の約束。
お六　必ず見捨てゝ、（トお六太郎へ寄添ひ、）おくれでないよ。

ト太郎もお六を引寄せようとする。この時上手の岩の上より玄蕃どうと落ちる。此の物音に兩人飛退き、月隱れる。玄蕃探り出るを兩人突廻してちよつと立廻り、玄蕃を突きとばす。玄蕃たぢ〱となり古社の狐格子へ打つかる、と、格子ばら〱と壞れ玄蕃見事に返る。太郎お六は左右へ別れ宮の中をきつと窺ふ。狐格子の間より法策鬼の面を冠り、鐵杖を持ちいで三人一時にきつと見得。これより本行の入りしダンマリの鳴物になり、法策宮よりおり立ち三人探り合ひの立廻りあつて、法策面

を取り片肌脱ぎ、毬栗の頭になる、これと一緒に太郎お六も肌脱ぎになりきつと見得。これより太郎は法策の懐より紗袱包の廚子入りの觀世音の尊像を、法策は太郎の懐より連判狀を引出し、これをかせに立廻り、此の中へ玄蕃入り邪魔になる。トヾ尊像は太郎、連判狀は法策の手に入り、よきほどに法策の裝束脱げて世話裝になり、舞臺にある菅笠を持ち、つか／＼と花道へ脱れ行く、太郎はお六を引附け、頭を探り見て、

太郎　お六か。

お六　あい。

法策　(この聲をしろべに)えい、

ト花道より礫を打つ。太郎身をかはし、立ちかゝりし玄蕃にあたりひつくりかへるを木の頭。法策はそのまゝ俯伏になる、太郎は廚子を透し見る。お六は向うをきつと見込む。この見得よろしく、やまおろしにて、

ひやうし　幕

幕引附けると、法策立上り、懐より連判狀を出して見て、まゝよといふ思入にて懐へ入れ、菅笠を肩へかけるをきつかけに、馬士唄になり、花道へはひる。跡シヤギリ。

三幕目

（四日市）龍宮淨瑠璃の場
（桑　名）北條家元船の場

（淨瑠璃）富田趣向も地名に寄せて、蜃氣樓の色世界、桑名浦嶋浪乙姫（常磐津連中）

〔役名――傾城高窓實は三州岡崎の百姓與次兵衞娘おたか、家老鳴澤隼人、百姓與次兵衞忰與之助實ハ修驗者法策、北條駿河介時貞、龍宮の侍女わか芽、同かろ藻、北條の家臣軍八、北條の家臣荒波主税等。〕

（四日市宿端れの場）――本舞臺向う淺黄幕、松並木、上手に東海道四日市と記し大いなる埒を結ひたる牓示杭。こゝに軍八旅の侍裝にて菅笠を冠りし法策の伊勢參りを引附けてゐるを、旅の中間二人と下手に宿役人の甚平詫言をしてゐる體にて幕明く。

甚平　もし／＼お侍樣、御立腹は御尤もでござりまするが、田舍漢の伊勢參り、どうぞ御料簡なされて下さりませ。

軍八　いゝや罷りならぬ。先達大内にて猫間中納言光隆が飼ひ置きたる古猫の變化を退治なしたる北條駿河介時貞が本國へ下る同勢を、後になり前になり路次を妨げるこの伊勢參り、何とも怪しき奴

め故、今夜の旅宿へ連行き身許の詮議をいたすのだ。詫はかなはぬ無用にいたせ。

甚平　重々御尤もではござりますが、唯今も申しまする通り田舍漢のこと、殿樣のお通りが珍らしい故ついお邪魔をいたしましたのでござりませう。宿役人の私がお詫、どうぞ御免なされて下さりませ。

軍八　いゝやならぬ〳〵、兎も角も吟味なした上でなくては許されぬ。身共と一緒にまゐれ〳〵。

甚平　そこをどうぞ、御料簡下さりませ。

軍八　はて扨しつこい、ならぬといふに無禮者めが、家來參れ。

ト軍八伊勢參りを連れ中間と共に上手へはひる。下手より藤内歩きの裝にて淨瑠璃の觸書を懷へ入れて出來り、

藤内　もし〳〵甚平さん〳〵、今問屋場から急のお觸だといつて書物が來ました、讀んで下され〳〵。

甚平　なに、急なお觸だ、どれ〳〵讀んで見よう。（ト開き、）何々、淨瑠璃名題――、太夫連名、役人替名――（トそれ〴〵讀上げ、）こりやお觸書ではなくて、淨念寺の勸化芝居の口上觸だ。問屋場の書役が狂言方に頼まれたと言つたが、それぢやあお觸と口上と間違へたのだらう。あゝ、そゝツかしい男だ。

藤内　おれにまでとんだ無駄骨を折らせた、その替り問屋場へ行つて書役をおこらせてやらう。

甚平　それがようござります、私も一緒に附込みに行きませう。

藤内　えゝ下司ばつた男だ、さあ〳〵來さつしやい〳〵。

ト兩人上手へはひる。これにて前の道具を引いてとり、ドロ〳〵になり、上より大きなる蛤現はれドロドロ烈しく、蛤の口より絹張りの氣を引出し、その中より心といふ字の朧に見ゆるを引上げる。と蛤消えドロ〳〵を打上げ、淺黄幕を切つて落す。

(龍宮の場)――本舞臺一面の海にて、龍宮の唐門、樓閣を見せる。下手に淨瑠璃臺、これに常磐連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽そも〳〵龍宮城といつぱ、遊仙窟も及びなき眞砂に築く宮殿の、瑠璃の瓦に浪光る常世と名にし豐國が、極彩色の蜃氣樓、

ト鳴物になり、上手に乙姫唐團扇を持ちて立ち、下手に浦島玉手箱を抱へし見得にて、舞臺眞中へ迫上る。

〽蒼海の底にも誰か戀草の、浮名は龍の都なる玉の臺に乙姫の夢を水江の浦島とまこと嬉し

き床の海。實に水際の立姿、

浦島　浪の音の今朝から常に聞ゆるは、

乙姫　秋の調べや新なるらん。

浦島　浪路を出づる夢心地、たどるともなく來て見れば、實にも尊き龍宮城。

乙姫　千尋へだてし浪の底、思ひこがれし自らの念が屆いて嬉しいおいで。

浦島　玉をちりばむ殿造り、かの仙宮の樂しみも、

乙姫　まれの逢瀨に百歳の命も更に惜しからじ。

浦島　心涼しき、

兩人　眺めぢやなあ。

〽いつも聞く浪の鼓の音も冴えて、心づくしを絲竹の琴柱に落つる雁金の妻持つ顏も身の上に羨しくもくらべ越し、〽折も向うへ打寄せの、浪の花道二人連れ、

ト花道よりわか芽、かる藻の二人額に鰒と鮹とをつけ龍宮の侍女の拵へにて、臺輪へ大きなる枝珊瑚を載せ、釣竿にて擔ぎ、釣竿の息杖を持ちて出來る。

〽沖の船唄よい汐どきに、脇櫓にあらで二人乘り、片山ぢや合點ぢや、折れ込みぢや合點ぢ

や、丁度相肩一と息杖も、今日のお客へ御馳走に根越えて植ゑしさん〳〵こぢやの、枝も榮えて葉村屋のいつ〳〵までもかはら崎、御ひいき願ひあげしほに、蛸つぼ口の可愛らし、拍子とりかぢ浮れ來る。（ト兩人よろしくあつて舞臺へ來る。）

兩人　姬君樣、これにおわたり遊ばしましたか。

乙姬　わか芽、かる藻、待ち兼ねましたわいの。

わか　私共は今日おいでの戀人樣へ、何がな珍らしい御馳走をいたしませうと存じまして、

かる　浪路に生立つ珊瑚の枝ぶりよいのを、見立てゝまゐりましたわいな。

浦島（珊瑚珠を見て、）なるほど、口の本には珍らしい珊瑚の枝ぶり、はて龍宮城は羨しいことでござりまする。

わか　その樣におつしやらずと、今日よりは姬君樣の聟君樣なれば、此の玉殿の帝さま。

かる　珊瑚はおろか何なりとも、あなた樣のお心任せ、

浦島　これはしたり、賤しい私を勿體ない、かゝる尊き姬君の聟君樣などゝは思ひもよらず。

乙姬　いえ〳〵そのやうにおつしやれど、あなた樣は誰あらう、北條駿河介時貞樣の、

浦島　どういたして私は、賤しい漁夫でござります。

かる 漁夫とおつしやるは、美濃の國からまゐります、美しい提灯のことでござりますか。

浦島 いえ漁夫と申しまするは、漁すなどりを業といたす者でござりまする。

わか 漁すなどりとは、あゝ聞えた、お床の間にある蒔繪の料紙すなどり箱でござりまするな。

かる あなたがその漁夫樣とやらならば、濱邊で唄ふ濱唄を、御存じでござりませうがな。

浦島 さあ、その唄は何とやら。

わか 御存じならば今こゝで、さあ〳〵早う。

浦島 てんほの皮に、おゝそれよ。

ト浦島手拭を持ちふりになる。

〽さまはなア入江のな眞水の汐よ、風を便りの眞帆片帆、ゆたのたゆたの木曾路川しよんがえゝ、海士のいさりの捨小舟、通ひつめたる戀の海、ほんに〳〵ほんに逢ふ夜の濡れ浴衣、許してたべと夕汐に、わか芽かる藻が引留め、

兩人 これ申し。（トこれより四人クドキになる。）

〽男心は皆仇浪と、よその人目に立つ浪の屆かぬ愚癡をいはほ浪、寄せては返す袖の浪二世も三世も末白浪の、實と眞實があるならほんに、〽言はず語らず我心亂れし髮を飯蛸と妹

脊山から向うの殿さまの、お顔見ながら添ふことのならぬとならばどこまでも、私や死んでもお前はんばかりは實あきらめられぬ。放れ〴〵になるとても深き契りの思ひ込んだるとかやめんこやな、可愛い男の眼を覺す、おやごん〳〵のきうのです、ねぐらの闇の眼無鳥、どなたお茶あがれ、ちがたよ〳〵もそつと先で、さあ〳〵お聞きなさい、ぐるりとひねればそれまはる、よい竹澤のあたりごまゝ果しなぎさの村かもめ、浪にもまるゝもろ翼、比翼の床の玉殿へとは入りたまふ。

トわか芽、かる藻をかしみのクドキよろしくあつて、乙姫浦島の手を取り正面の唐門の中まで連れて行つて、ほつと思入。

わか かる藻や。

かる わか芽や。

兩人 がつかりしたわいの。(ト玉手箱を見て、)

わか それはさうと、あの玉手箱には、何が入れてあるであらうの。

かる 何があるやら、そつと明けて見ようぢやないかいの。

兩人 さあ〳〵、明けて見ようわいの。

〽紐をとく〳〵玉手箱、蓋おし明くればあら不思議や、光明輝き鳴動なし、一つの寶珠現はれいで、浪間へ高く卷き上ぐれば、(ト文句の通りあつて、)〽おや〳〵〳〵、あれ〳〵こりや奇妙な、たまげ果たるけうと顏、とんだは金玉人魂か、これが龍宮名代の玉か、取らんとすれど手は屆かず、あり合ふ釣竿おつ取つて打てど拂へど手應へもせんかた浪に名玉は、ぱつと碎けて、(ト兩人釣竿を打ちつけると、玉仕掛にて二つに割れ、中より金銀の花ばら〳〵散る。)〽浪の月こがねの花が降つて來た〳〵、たま持つてすくへ、蓋持つて拾へ。〽今年世がよい當りの海で、鯛やひらめは手捕へ、金銀いさごがざつくらざつくら、ざつと湧いて來る福壽海おもしろや、〽まだおぼこ氣なやもめ同志、踊り狂うて氣も疲れ、桑名の浦に風立ちて、浪間の夢や覺めぬらん。

ト三重になり、兩人上手の方へはひる。ドロ〳〵にて居所替りになる。

(北條家元船の場)＝本舞臺後ろ一面の海にてこれに元船あり、眞中雨障子をかけたる三間の屋體、正面金屏風を立て、よきところに帆柱あり、屋體には紫色に三鱗の紋の附いたる幕をおろしあり、上下にも同じ幕、大ドロ〳〵にて道具をさまる。と、やはりドロ〳〵にて舞臺上より心といふ字を船

の中へ引いて入れ、正面の幕を捲上げる。こゝに時貞脇息にかゝり居睡りしてゐる、高窓洗ひ髪傾城の裝にて鼻紙臺にもたれ居睡りゐる。後に仲居兩人控へゐる。ドロ〳〵打上げ本釣鐘になり、高窓時貞眼を覺し、顏を見合せて思入。

仲居　お二人さん、お目がさめましたかえ。

時貞　そなたは太夫、

高窓　殿さん。

時貞　そんなら今のは、

兩人　夢であつたかいなあ。(ト思入。)

時貞　桑名の沖に風待のかゝり船、こゝに名代の蛤が蜃氣樓をふくといふ噂を聞き、とろ〳〵とまどろむ中、その蜃氣樓の龍宮へ行き、そなたは目慣れた乙姫出立、

高窓　あなたは釣人浦島すがた。

時貞　妹脊替らぬ二人が仲、

高窓　ほんに嬉しい今の夢、

時貞　そなたも、

高窓　あなたも、
時貞　ほんに不思議なことぢやわいの。
仲一　お二人様のお仲のよいので、二世も三世もおろかなこと、浪の底までお放れなされぬといふ夢の辻占。
仲二　定めて乙姫様から玉手箱をお貰ひなされて、共白髪におなりなさるまで添ひとげるといふお目出度い夢。
兩人　お羨しいことでございますわいな。

ト合方、浪の音にて上手幕の内より、隼人野袴ぶつさき羽織にて出來り、下手へ來りて、

隼人　御前様には御機嫌よろしう。今日は快晴にて海上おだやか、大慶至極に存じまする。
時貞　成澤隼人道中萬端、その方が厚き心配、過分に思ふぞよ。
隼人　これは〳〵改まりましたる殿の御意恐入り奉りまする。此度の御上京大内に仇をなしたる猫魔退治の御役目、首尾よくお勤め遊ばせしも殿の御威勢、我々に至るまで恐悦至極に存じ奉りまする。
時貞　その方が申す通り、一方ならぬ今度の大役、身不肖ながら駿河之介滯りなく勤め果せしも、全く

隼人　某が手柄ならず、先祖の武功、正八幡の御加護、このやうな目出度いことはない。お詞の通りそれ故に大内表の御首尾も重疊、その御祝儀として御執心の島原の傾城高窓太夫をお根引あつてお館へ御同道、高窓どのにも嘸悦ばしうござらうの。

高窓　これが嬉しうなうてなりませうか、不思議な御縁で馴れなじみ、賤しい此身に御不便かけ身請までして下さんした殿さんのお情、隼人さんの粋なおさばき、死んでも忘れはせぬわいな。

仲一　太夫さんのおつしやる通り、苦界放れて殿さんのお傍放れず御一緒にお館へ御同道、私等までもとも／＼にお供してのお國入り、このやうなお目出度いことはござりませぬわいな。

時貞　そち達が申す通り、歸館の路次の船中までも太夫と一緒、かう見渡した海原の景色、よい詠めではないか。

隼人　まことに殿の御意の通り、東海道一の桑名の海上、あれ／＼彼方に見えまするが宮の渡し、左手は三州師崎、右手は志州の鳥羽の湊、浮繪のやうに相見えまする。

高窓　常々屏風や唐紙の繪に書いてあつたやうな、ほんに言へぬ見晴しでござんすわいな。

主税　（左門と共に下手より出來りて）はッ、殿樣には御機嫌よろしく、隼人殿にもこれにござりましたか。

隼人　主税殿、忰左門、何か慌しき樣子、何事ぢやな。

左門　親人、何事どころか此の船にあやかしがつきまして、一向動きませぬ。

時貞　（おどろきて。）何と申すぞ。

隼人　あいや、お氣遣ひ遊ばすな。これはしたり主稅殿、忰とても何を申す、あやかしがついたとは何事、船の動かざるはあれ見られよ、西北の風烈しくなりし故、風待を致す間船頭どもが碇をおろしたものでござらう。

主稅　いや／＼左樣ではござりませぬ、この船の動かぬは、まさしく鰐鮫などの仕業に相違ござりませぬ。

隼人　こりや／＼まだ申すか、武威盛んなる北條家の御船、鮫の業ぢやのあやかしのと、左樣なことはないでござらう、なそれ、いかに兩人共若年とは申しながらあまりなうろたへ、それ、めつたなことを申すな、いやさ、船中にて左樣なことは申されぬがよいて、はゝゝゝゝ。

ト兩人へ呑込ませる。ばた／＼にて下手より以前の軍八、伊勢參り出立の法策を引立て出來り、

軍八　隼人殿、これにござるか、あやかしでござる／＼。

隼人　やあ、仰々しい、殿の御前まで賤しき者を伴ひしは、何事なるぞ。

軍八　總じて船にあやかしの付きたる時は、乘合の中一人犧牲になす時は、忽ちその船走ると承る。こ

れなる怪しき伊勢參り、殿の路次を妨げなしたる故詮議の爲め船中まで召連れ參りしが、幸ひ此奴を犧牲に致さんと、引立てましてござりまする。

隼人　こりや〳〵又しても其方達まで、風待なす故動かぬ船をあやかしなど〻、御前で尾籠千萬、たしなみ召れ。

軍八　いや〳〵風待ではござらぬ。あやかしでござる〳〵。

隼人　これは又いかな事、さうあやかしに相違なくば、主君の御爲、それなる匹夫より軍八其許犧牲に立たつしやい。

軍八　え、何拙者に犧牲に立てと仰せられるか、それは眞平々々拙者生れついて犧牲は蟲が嫌ひます。

隼人　でも、御主人の御爲でござれば、

主稅　貴殿犧牲にお立ちなされ〳〵。

軍八　これはいかな事、その儀は平に御免下され〳〵。

隼人　それぢやと申して、あやかしが付いたではござらぬか。

軍八　いや〳〵あやかしではござらぬ、御厩がしでござる、は〻〻〻。

主稅　何をたはけた軍八殿。隼人殿の申さる〻通り、風待でござらうがの。

軍八　いかさま風待々々、かさい風待、半田の稲荷から帝釋天へ參詣致して參らう。（ト下手へ逃げてはひる）

時貞　いつもながら、さう〴〵しい奴ではないか。

左門　然し御前樣のお伽には、一興になる軍八殿。

高窓　ほんに氣さくなお方でござんすなあ。

隼人　（下手にゐる法策を見て、）こりや〳〵賤しき順禮、其方に用はない、次ぎへ立て〳〵。

法策　（少し前へ出て、）はい〳〵どこのお侍樣か知りませぬが、犠牲にされるといふ怖ろしい私が難儀を助けて下さりまして、有難うござります。（ト田舍言葉にて禮を言ふ。）

隼人　その方は在所者と見えるが、して生國は何れぢや。

法策　はい、私が國許は三州岡崎でござります。（トこれを聞き高窓思入。）

隼人　すりや三州岡崎の出生と申すか、して何者なるぞ。

法策　はい、岡崎の百姓與次兵衛が忰、與之助といふ者でござります。

高窓　えゝ、そんならもしや、お前の母さんは、おそよとはいはしやんせぬか。

法策　なるほど、お袋の名はおそよといふが、それをどうして。

高窓　知らいでならうか。（ト言ひかけ、時貞を見て思入あつて、）ても、思ひがけない。

隼人（この樣子を見て）これなる伊勢參りの生國を聞き、高窓殿の言葉のはし、

時貞　どうやら樣子の、

隼人　あいや先刻よりよほどの間、御前には暫らく胴の間にて、御休息遊ばされませう。

時貞　いかさま、左樣いたすであらう。

兩人　さあ、太夫さんも御一緒に、

高窓　私はちつと。殿さん御先へ。

時貞　待つてゐるぞや。

隼人　御前樣には、まづ、

主稅左門　おいで遊ばされませう。

ト時貞先に隼人法策へ目を附けながら、主稅左門附いて上手へはひる。高窓法策殘り思入あつて、

高窓　もし順禮の與之助さん、今言はしやんしたお前の母さんの名は、ほんまにおそよと言はしやんすか。

法策　おそよといふが、こなたはどうして知つてゐる。

高窓、あい、知つてゐる筈、私やお前の姉の、お高ぢやわいの。

法策（びつくりして、）なに、姉さんだ、そりやほんの事か〳〵。
高窓　まことの嘘のと、岡崎の百姓與次兵衛といふは私の父さん、おそよといふは母さんぢやわいな。
法策　えゝそんなら常々お袋の話し、小さい時に別れた姉さんなら、守袋の中に同胞の證據がある筈だが、持つてゐさつしやるか。
高窓　肌身放さず、こゝに持つてゐるわいなう。（ト守袋を出す。）
法策　私が方にも證據の守袋。
　　ト法策守袋を出し、兩人中より蛤の貝を片々づゝ出し、
高窓　この貝の片々に互ひの幼名、
法策　生れ年は父樣の手蹟、
高窓　別れ程經し姉弟が、
法策　廻り逢ひたる證據の蛤、
高窓　いよ〳〵違はぬ　弟與之助、
法策　實の姉さん、
高窓　弟、

兩人　逢ひたかつた〳〵、逢ひたかつたわいなう。（ト手を取つて思入。）

高窓　これ弟、思ひがけないと言はうか、不思議に逢うだは盡きせぬ緣、よう無事でゐてくれたなう。

法策　お前も達者で、こんな嬉しいことはござらぬ。これ姉さん、よく顏見せて下されいなう。

高窓　尤もぢや〳〵、定めて母さんの話で聞いたであらう、私は五歲そなたは三歲の年、父さんの長の煩ひ、人參代に島原の廓へ勤奉公、その甲斐もなく父さんはお果てなされ、長い勤めの其中に、久しく便りも聞かなんだが、母さんはお達者かいなう。

法策　あい、母さんは息災でござるが、樣子を言へば長い話し、引續いての國の凶作、その上母さんも私も久しい煩ひ、金毘羅樣へ髮を切り坊主になつて願をかけたお蔭で、二人とも本復はしたれども、年貢の未進がたまつて、金ができぬ時は母さんは永牢へ入らねばならぬ故、久しく便りもせぬこなさん脊に腹は替へられぬと、母さんが涙ながらおぬしは都へ尋ね行き、姉樣に逢つて樣子を話し、金の無心を言つてくれろとのこと、口でまだ〴〵いふより詳しく書いた母さんのこの文、（ト財布の中より文を出して、）これ姉さん、これを讀んで下されいなう。

高窓　母さんは御病氣でおいでなさんしたかいの、久しぶりでのこのお文、今讀んで見ようわいの。（ト讀みて、）文の樣子では、永の年月悲しい御暮し、年貢の未進が大まい百兩。

法策　たつた一人の大事な母さま、命替りの百兩の金、どうぞ貸して下されいなう。
高窓　こりやそなたが言はいでも、大事の母さんの御難儀の金調へて上げたいけれど、何をいふにも大まい百兩。（ト當惑の思入。）
隼人　（此前より出かゝりをりて、）氣遣ひいたされな、その百兩の金子、この隼人が立替へて遣はさう。
法策　や、さうおつしやるは最前の、
高窓　お前は隼人さん。そんなら二人が今の樣子を。
隼人　殘らずあれにて承はつた、思ひがけなく高窓殿の弟、殊に母御の難儀の樣子見るに忍びず百兩の金子、さ、改めて受取りめされ。（ト懷中より袱紗包を出し、兩人の前へおく。）
高窓　私が身にふりかゝる親の難儀の百兩の金。
法策　隼人樣のお情にて、お貸しなされて下さりまするか。
隼人　心置なく受取つて、親の難儀を救うてやりやれ。
高窓　嬉しうござんす。これといふのも殿さんのお蔭、隼人さんのお情、えゝ有難うござんす。これ弟、母さんの難儀の金、ちつとも早う國へ歸り、母さんを安堵させて上げてたもいなう。
法策　承知しました。あゝ兄弟は持つべきもの、これもやつぱり殿さまや隼人樣のお慈悲、嘸お袋が聞き

かれたら悦ぶでござりませう。えゝ有難うござりまする。思ひがけない百兩の、いや百兩のこのお金は、私がしつかりと受取りましてござります。

ト百兩包を財布へ入れ懐へ入れる。此内隼人傍にある文を取つて、そつと懐へ入れる。

仲居（上手より出來りて、）もウし太夫さん、最前から殿樣のお待兼ね。

同二 私等と一緒に、ちやつとござんせいなあ。

高窓 あい〳〵。これ弟、隨分その身を大事にして、早う國へ歸つてたもや。

法策 もう別れるのでござりまするか、名殘りがをしうござりまする。

高窓 そりや私も同じこと、必ず壯健で、

法策 お前も隨分お達者で、

高窓 母さんを大事にしてたもや。

法策 あい、そんなら姉さん、

高窓 弟、無事で。（ト寄らうとする。）

隼人 これはしたり、殿のお待兼、

兩人 さあ〳〵早う。

高窓　忙しない、今まゐりますわいな。

ト高窓心を殘し上手幕の内へはひる、法策後を見送りて、

法策　あゝ兄弟は持つべきものぢやなあ。これからお船頭を頼んで、漁舟でも呼んで貰つて。（ト隼人に向ひ、）へい御家老樣、左樣ならお暇いたしまする。（ト立たうとする。）

隼人　（思入あつて、）いや、與之助とやら、暫く待ちやれ。

法策　國許を急ぎまするから、どうぞお暇いたしたうござります。

隼人　いや國許へ歸るに及ばぬ、殿御寵愛の高窓殿の舍弟、今よりあらため北條家の臣下となし召使はれんとあつて、殿より下さる御墨附、いざ頂戴召され。（ト懷より上包をしたる書物を出す。）

法策　なに、御墨附頂戴とや、はゝお有難う存じまする。（ト書物を受取り開き見て思入、）秋山白露信士、こりや何でござります。

隼人　その戒名が、貴殿へ墨附。

法策　して又これは、何人の戒名でござる。

隼人　覺えはないか。

法策　へい、存じませぬ。

隼人　それぞ傾城高窓が、親與次兵衛が戒名。

法策　や。

隼人　その方の親の戒名、よもや知らぬとは言はれまい。

法策　（これにてぎつくり思入あつて、）むゝむゝ、なるほど秋山白露信士、存じてをります。私が親與次兵衛が戒名でござります。

隼人　あの、こゝな僞り者めが。

法策　なんとおつしやります。

隼人　高窓が親の戒名と言ひしは僞り、最前汝がまことしやかに親の難儀を語る内、自然と言葉に殺氣を含むは、此奴まさしく曲者ならんと思ふに違はず、こりやこれを見よ。（ト懷より今の文を出し法策へ突付け、）汝が持參の母の文、よく〳〵見れば金子四兩と書きたるを、上へ一點加筆なし、百兩なりと言ひ拵へ守袋の割符を添へ、高窓が弟と僞る曲者。察するところ此二品を何方にてか奪ひ取り、それを證據に百兩の金を騙る所存と見ぬいた黑星、何と相違はあるまいが。

法策　いや〳〵いかほどにおつしやつても、兄弟に違ひござりませぬ。

隼人　まこと兄弟に相違なくば、汝の實の父なるものは、何歳にて相果てたるぞ。

法策　さあそれは。

隼人　知らぬとあらば怪しい小僧だ。此の場の面ばれ、血寄せをなすか。

法策　あゝもし／＼、それでもお前樣、兄弟ぢやとおつしやつて、百兩の金を下すつたではありませぬか。

隼人　いかにも騙りと知つて渡せし百兩、そちが命の價ぢやわ。

法策　何とおつしやります。

隼人　最前より西北にて碇をおろし風待なすとは主人の氣色を休めん爲め、龍神の祟にや船一寸も動かざる故、一人海底へ沈むる時はその祟りを除くと聞けば、其方が一命を買取り龍神へ犧牲に備へんため、今渡したる戒名にその百兩は命の價、忝くも一命は駿河之介殿の御身替り、由縁の者のあるならば、その百兩は屆け得させん、免れぬ所とあきらめて、さあ尋常に覺悟いたせ。

法策　こりやもうたまらぬ。

ト下の方へ行かうとする。下手より主税、左門、軍八等その外侍四人出來りて、

主税　やあ逃げるとて逃がさうか、主人の路次を騷がせし憎き曲者、

左門　成敗なさんとお船まで連來りしところ、思ひがけなき難風にて、

軍八　龍神へ備へる生贄となるはおのれが仕合せ、こま言ぬかさず觀念ひろげ。

隼人　假令この場を逃去らんとするも、翼あらばいざ知らず、免れ難なきこの海上。

主税　まつこの通り、大勢にて取卷く上は、

軍八　最早脱れぬおのれが命、

左門　さあ、尋常に落命いたすか。

法策　さあそれは、

主税　但し踏付け、かき首しようか。

法策　さあそれは、

左門　落命なすか。

法策　さあそれは、

皆々　さあ〳〵〳〵。

兩人　脱れぬところと、

皆々　覺悟いたせ。（トきつといふ、法策思入あつて、）

法策　斯く取りまかれし上からは、退れ難なき此場の手詰、進退こゝに窮りしか、えゝ口惜しやなあ。

隼人　それ、者共。

ト侍二人法策へかゝるを立廻つて投げのけ、法策浪の中へ飛込む。

皆々　扨こそ曲者。（ト浪間を見込んでゐたが、）あやかしだ〳〵。（ト立騒ぐ。）

時貞　（出來りて、）扨は最前の言葉の如く、龍神の祟りなりしか。

隼人　お氣遣ひあられな、匹夫が一命捨てたる上は、御命に恙なし、

高窓　（出來りて、）何處の人か知らねども、思ひがけない今の最期。

時貞　不便な匹夫が身の果ちやなア。

トこれにて浪おだやかになる。

主税　や、今まで激しき難風も、

左門　次第々々に浪靜まり、

軍八　常に變らぬ、

三人　海のおもて、

時貞　扨は龍神の感應ありて、

高窓　この場の難儀を救ひたまふか。

隼人 御前様、

時貞 隼人、

兩人 御船も安泰、

隼人 をさまる浪に、

軍八 身共も安泰。

隼人 祝うて御酒宴。

時貞 おゝ始めい。(ト時貞につたり思入、扇を開くを木の頭。)さ、さ、始めい〳〵。

ト輕く言ふ。皆々はツと平伏する。この見得にてよろしく、

ひやうし 幕

ト此の幕一面の浪幕にて海上の體となり、下手より小船流れて出る、と舞臺の切穴より以前の法策水に濡れ、泳ぎ上りし體にてその船へ手をかけて乘移り、中にある櫂を取上げてこれに縋り、ほつと思入あつて、

法策 桑名の沖の難風に命限りと元船から、海へざんぶり飛込んだが天の與へのこの小船、危ふい命を助かつたも肌身放さず持つてゐる、三條小鍛冶の劍の威徳。えゝ忝ない。此の上は命限り根限り

何處の岸へか乘付けん。おゝそれ。

ト法策船の艪をとりきつと見得。浪の音にて艪を押して花道へはひる。浪の音にてつなぎ直引返す。

四幕目

（舞坂濱松）常學院古寺の場

〔役名――盜賊地雷太郎實ハ竹川伊賀之助正忠、同赤星大八、同富士ヶ根左九郎、修驗者法策後に天日坊、地雷太郎手下、捕手。盜賊人丸お六實ハ今井四郎娘かけはし等。〕

（常學院古寺の場）――本舞臺三間常足の二重屋體、崩れかゝりし本緣附、正面古びたる襖、上の方一間破れし塗骨の障子屋體、石塔の踏段、二重に圍爐裏、鑵子をかけ、この後に布子をかけたる掛竿、軒口に盆提灯。平舞臺下手に墓手桶、いつもの所寺の門、立春大吉と記せる札、此の外に葷酒山門入不許といふ石塔、臺石に常學院と記しあり。下手は藪、總て遠州濱松、虹ヶ岡古寺の體。こゝに赤星大八坊主の拵へにて古き塔婆を鉈にて壞しゐる、この見得黃檗の鳴物にて幕明く。

大八　あゝ、まだこのやうに暗くなる時分ではないが、昨日からの嵐にて曇り勝故、日暮が早い。いやもう荒寺に嵐は禁物、屋根はめくれる、壁は崩れる、既に門が倒れるのを突かい棒でとり留めた。聞けばだいぶ海上にも難船があつたさうぢやが、板子一枚下は地獄船乘りするは厭なことぢや、

（ト塔婆の割つたのを繩にて結へ、）まづこれで今夜の焚物もできた。もう今に歸るであらう。どれ灯りをともしておかうか。

ト大八塔婆を圍爐裏の側へ持つて行き、軒の盆提灯へあかりを點ける。花道より法策ぐつすり濡れた裝にて出來り、花道にて、

法策　天の助けの小船にて、やう〳〵岸に流れついたが、西も東も知れねえ海邊、何といふ所だか道を聞かうにも家はなし、どうせうかと思つたところ、遙かの森にぼんやりと煙りの見えたをしるべにして、やう〳〵こゝまで尋ねて來たが、見りやあ向うは寺のやうだ、人を助けるは出家の役、今夜はこゝで泊めて貰はう。何にしろずぶ濡れで、冷たくつて堪へられねえ。（ト着物をしぼりながら舞臺へ來り思入あつて、）だいぶ荒れ果てた寺だが、泊めるか泊めぬか泣付いて見よう。（ト門の外より小腰をかゞめ、）はい、お頼み申しまする。

大八　（すかし見て、）あい、どれからござらしつた。

法策　はい、旅の者でござりますが、道に迷つて難儀をいたします、どうか一夜の宿を御無心申したうござりまする。

大八　それは嘸困らつしやつたであらう。宿と違つて在方は旅人を泊めるは法度なれど、宿のある所ま

では二里半の餘もあれば、夜に入つては難儀であらう。見さつしやる通りの荒寺故、不自由さへ承知なら泊めて進ぜませう。

法策　いえもうお泊めなされて下さりませずば、森の影か辻堂で夜を明かさうと思ひました。何不自由を厭ひませう。どうぞお泊めなされて下さりませ。

大八　不自由さへ承知なら、まあ〳〵こつちへはひらつしやれ。

法策　左樣なら御免なされて下さりませ。（トおづ〳〵と內へはひる。）

大八　それ、そこに水がある、足を洗つて上らつしやい。

法策　はい〳〵有難うござりまする。

ト法策下手にある墓手桶の水にて足を洗ひ、手拭なき故着物の裾にて足を拭き、平舞臺下手へ住ふ。

大八　宿と違つて山中は夜に入ると寒さが强い、さあこゝへ來てあたらつしやれ。

法策　いえ、これが勝手でござります。

大八　はて、遠慮せずとこゝへござらつしやれ。

法策　いえ〳〵遠慮は致しませぬが、着物が濡れてをります故。

大八　おゝ、ほんにこなたはずぶ濡れぢやが、どうさつしやつたのだ。

法策　はい、難船に遭ひましたのでござりまする。

大八　それは嘸難儀をさつしやつたらう。して何處から乘らしやつた。

法策　桑名から乘りましたが、昨日からの嵐にて遠州灘まで吹流され、いやもう帆柱は折れ、潮は打込む、たうとう船がしもります故、南無三寶こゝにゐて死ぬならばと、運を天にまかせまして板子へ身體をくゝりつけ、海へざんぶと飛込みましたが、仕合せに岸へ吹上げられ、危ふい命を助かりました。

大八　はて、それは仕合せなことでござつた。まあ〳〵何にしろその着物をこゝでほさつしやるがよい。垢付いてはゐるが、今宵一夜ぢや、この布子と着替へさつしやれ。

ト掛竿にかけし布子などとつて持つて來る。

法策　左樣ならお言葉に從ひまして、お借り申しますでござります。

ト法策二品を入れし油紙の包みを側へおき、濡れた着物を脫ぐ時、百兩入りの財布をばつたり落す、大八これに目を附け取上げて、

大八　や、これは。

法策　え、（トびつくりしてひつたくり、）いいえ、こりや桑名で買つた二朱の錢、海の中で落したと思ひまし

たが、懐にありましたは拾ひ物をいたしました。

大八　はて、返す〴〵も運のよい人ぢやなう。

ト大八財布へ思入あつて元の所へ歸る。法策は着物を着替へ、財布と油紙の包みを懐へ入れる。

法策　やれ〳〵あなたのお蔭で、さつぱりいたしました。

大八　さあ〳〵その濡れた着物をこの掛竿へほしておかつしやれ、圍爐裏の火氣で明日までには乾ようわいの。

法策　それは有難うござります。左樣なら御免なされませ。

ト濡れた着物を持つて二重へ上り、圍爐裏の向うの掛竿へかける、此内大八法策に目を附けてゐて、

大八　見ればこなたも出家でござるの。

法策　いえ、私は修驗でござりまする。

大八　はゝあ修驗者どのでござるか、してどれからどれへござらつしやるのぢや。

法策　いえもう、どれからどれと的もなく、秋葉犬峯、湯殿山、諸國の坊中に逗留なし、修驗道修業の者でござります。

大八　それは若いに、御奇特なことぢや。

法策　いや最前から承りませうと存じましたが、こゝは何と申すところで、御當院は何宗でござりまするな。

大八　こゝは遠州濱松の海邊で虹ヶ岡といふ片田舍、當寺は黄檗宗にて、美濃國長洞の常學院と同寺でござる。

法策　すりや御院號も、

大八　常學院と言ひまする。

法策　見受けますればよほどの御大寺と存じますが、あなた御一人のお住居でござりますか。

大八　いや、所化どもが兩三人ござるが、これは日毎宿内へ托鉢に出ます。

法策　左樣でござりますか。

大八　もう今に歸る時分、歸りましたら何はなくとも粥でも炊いて進ぜませう。まあそれまで奧へ行つて。

法策　それは有難うござりまする。いやもう昨日からの勞れで、がつかりといたしました。

大八　嘸かし勞れさつしやつたらう。まあ〳〵ゆつくりと、足でも延ばさつしやりませ。

法策　左樣ならば御免下さりませ。

大八　どれ、案内して進ぜませうか。

法策　それは憚りでござりまする。

大八　さあ、かうござりませ。

ト大八蛇籠のこはれたのへ灯りをつけて先に立ち、法策附いて奥へはひる。花道より手下の一人坊主の拵へにて松明を持ちて先に立ち、後より左九郎手甲脚絆錫杖を持ち、この後より手下三人いづれも鐵鉢を持ち、後より手下二人佛餉米を入れる長櫃をかつぎ出來り、

左九　何と皆の者、天龍川で日の入り故四つ過ぎにならうと思つたが、晝と違つて夜が長く、思ひのほか早かつたなあ。

手一　今しがた林泉寺の五つの鐘が聞えやした。

手二　まだ四つまでは半時あまり、よつほど間がありやせう。

手三　いつも夜明に歸る道を、今日は仕事が鶍故、

手四　宵の口に歸るとは、このほどにねえ事でごんす。

左九　何にしろ縁起なほしに、早く歸つて一ぱいやらう。

皆々　有難うごんす。

左九　さあ、皆來やれ。（ト皆々門口へ來りて、）赤星殿、今歸りました。

ト皆々草鞋をとり内へはひる。手下兩人下手へ佛餉米の櫃を擔ぎ込む。奥より大八出來りて、

大八　天道殿戻られしか、だいぶ早うござつたの。

左九　さあ、當にして行つた仕事が間違ひ、まんがわるさに、

皆々　歸りやんした。

大八　これ。（ト奥へ憚る思入。）

左九　何ぞさしが、

皆々　ごんすかな。

大八　奥に旅人が泊めてあれば、ひそかに〲。して仕事が間違つたとは。

左九　さあ昨日からの難風で、遠州灘の崖ッ縁へ西國船を打ちあげたを、見附の宿で聞いた故、まぶな仕事もあらうかと、常學院佛餉に姿を替へて出かけたが、行つて見りやあ大きな違ひ、難船したは遙かの沖、それ故三文が仕事もせずにすご〲歸る道すがら、明巣を狙つて此奴等が僅な仕事をしたばかり、無駄足をして來やんした。

大八　そりやあ氣のわるいことであつた。

左九　それ、雜物をこれへ出せ。

皆々　おゝい。

ト櫃より絹蒲團、掻卷、女小袖その他銚子杯、杯臺の入りし箱などを出し積上げる。

大八　何だ夜具蒲團に女小袖、小箱の類は、中は何だ。

手一　吸物椀に重箱、銚子杯でごんす。（ト箱のまゝ見せる。）

大八　むゝ酒の道具は耳よりだ、その銚子杯を見せろ。

手一　おゝい。（トそれを差出す。）

大八　此奴ァ時代蒔繪で、いゝ代物だ。

左九　いくら蒔繪がよくつても、こんな仕事をして來ては、その杯の酒も飲めねえ。

大八　いかさま、これぢやあ寢てゐたはうが、よつほど增であつたわえ。

左九　こウ、なんぞまぶな事でもごんしたか。

大八　さあ、昨日の荒で難船のあつたを當に出かけたこなたは、何の仕事もなかつたに、家に殘つて寢てゐたおれが、その難船の仕事をした。

左九　むう、その難船の仕事とは。

大八　さつきこゝへずぶ濡れで、泊めてくれと頼みに來た、十七ばかりな毬栗坊主、聞きやあ難船に遭つた者、路用を當に泊めておいたが、僅な金と思ひのほか持つてゐるのは百兩あまり、

左九　そいつァいゝ鳥が、

皆々　かゝりやんしたな。

ト此時上手の屋體を明け、法策窺ひゐて、これを聞きびつくりする。

大八　なんと寢てゐた方がましであらうが。

手一　なるほど頭は頭だけ、寢てゐさしつても、

皆々　大きな仕事。

大八　盜人の晝寢も當がなけりやあしねえわい。

左九　してその坊主は、

大八　奥の書院へ寢かしておいた。

左九　今日の仕事の埋草に、その坊主めをちつとも早く、

大八　いや〱年は行かぬ奴なれど、一癖ある面魂、急いては事をし損じる。

左九　いや高の知れた小坊主一人、何ほどの事があらう。

大八　はてさてこなたもまだ若い、假令天狗の再來でもこなたもおれも浪人あがり、それに恐れはせぬけれど、難船をして助かつた運のよい坊主故、大事に大事をとらにやあならねえ。

左九　なるほど、それも尤も。

大八　おれが思案は勞れて寢た寢入花を窺つて、（ト突殺す思入をして、）地獄落しにかける積りだ。（ト法策びつくりする。）然し燒鳥にも撃、左九郎どのも手傳つて下せえ、またわい等は出口をがんばつて、逃がさぬやうに心を附けろ。

皆々　合點だ。（トこれにて法策思入あつて障子をしめる。）

大八　まだ時刻には早いから、前祝ひに一ぱいやらうか。

左九　おゝ丁度幸ひまんなほしに、飲まうと思つてきすを三升引いた來た。

手二　そこへ徳利を出しやせうか。

左九　直に圍爐裏で燗をしろ。

手三　おゝい。（ト櫃より一升徳利を出し、圍爐裏へ入れる。）

大八　そいつァ妙だ。これ奥に雉子の燒いたのがあつた。早くこゝへ持つて來い。

手四　合點だ〳〵。（ト奥へはひる。）

大八　ときに、目出度くこの杯で始めようか。

左九　いかさま前祝ひだ、これ燗ができたら銚子へうつせ。

手三　あい〳〵。（ト徳利の酒を銚子へうつし、手下の四は經机へ丼鉢を載せ持出る。）さあ燗ができました。

大八　どれ、目出度く始めようか。

ト皆々酒宴になる。花道より地雷太郎、人丸お六いづれも深編笠の浪人體にて出來る。後より黒の四天を着たる捕手窺ひ出來りて、

お六　もし太郎さん、赤星さんとやらの家はどこだえ。

太郎　向うに見える常學院といふ無住寺だ。

お六　氣味の惡い寺にゐるのかえ。

太郎　なんで氣味が惡い。

お六　さあ寺と聞いちやあ幽靈が怖いよ。

太郎　べらぼうめ、向うで怖がらあ。

お六　さうでもあるめえ。

太郎　何でもいゝ、早く來やれ。（ト舞臺へ來る。捕手二人は囁き合ひ引返して花道へはひる。）頼みます〳〵。

左九　これ、表へ誰か來たぞよ。

一二　あい〳〵。（ト門口へ來り、）

手一　なんだ、深編笠に破扇、永々の浪人者か。

手二　手の内なら出たことがねえ。

兩人　通れ〳〵。

太郎　いや手の内は貰ひに來ぬ、赤星でも富士ヶ根でも家にゐるなら、おれが來たとさう言へ。

手一　やあ、いけ御大そうなことを言ふ奴だが、

手二　さうしてわりやあどこから來たのだ。

太郎　どこから來ようとおれが勝手だ。わい等ぢやあ分からねえ、奥へ行つてさう言へ。

手一　おゝおいら達で分からずば、頭に言ふめえものでもねえが、

手二　して、われが名は何といふ名だ。

太郎　いゝや名は名乘るには及ばねえ、おれが來たとさう言へ。

手一　なに、おれが來たとさう言へ。

手二　おれとばかりで分かるものかえ。

左九　やい〳〵やかましい、誰が來たのだ。
手一　誰だか知れませぬが、赤星でも富士ヶ根でも家にゐるなら、
手二　おれが來たとさう言へと、御大そうな奴が來ました。
トこれを聞き、大八、左九郎思入あつて、
大八　なに、おれが來たとさう言へとは。
左九　はて、合點の行かねえ奴だわえ。（ト門口へ來り太郎を見て、）むゝ赤星、富士ヶ根に逢ひたいとい
ふ、おれといふ人はこなたか。
太郎　いかにも、おれだ。（ト笠を取る、左九郎見てびつくりして、）
左九　やあ、鈴鹿の兄貴か。
大八　なに、太郎殿が來た。（ト出來る。）
太郎　赤星、富士ヶ根久しぶりであつたな。
大八　こりやあ太郎殿か、めづらしい。
左九　さあ〳〵これへ〳〵。
太郎　お六や、こつちへはひれ。

お六　あい、御免なさい。

ト　お六も笠を取り内へはひる。大八、左九郎敬ふこなし、太郎お六は上手へ通る。皆々合點の行かぬ思入。

太郎　よく二人とも家にゐたな。

大八　こなたの來るのを蟲が知らしたか、今夜は家にゐる積りだつた。

左九　これ皆の者、鈴鹿の頭だ、知附になりやれ。

手一　そんなら、おれだ〱と言はしツたは、

太郎　地雷太郎といふものだ。

手二　今の無禮は御免なされて、頭同樣に、

皆々　お願ひ申しまする。（ト太郎頷く。大八お六を見て、）

大八　して太郎殿、この女中は。

太郎　こりやあおれが女房だ。二人とも知附になつてくりやれ。

左九　はあ、そんなら頭の姐御かえ。

大八　これは始めて逢ひました、私は赤星大八といふ者。

左九　私は又富士ケ根左九郎といつて、兄貴とは兄弟同樣にします。
手一　わしらまでもとも〴〵に。
手二　お心安く、
皆々　賴みます。
お六　そんならお前方が、赤星さんに富士ケ根さんでござんしたか、わつちやあ人丸のお六といふ生れついてのぞんざい者だから、その氣でお賴み申しますよ。
大八　はゝあ、そんならお前が噂の高い人丸お六どのか。
左九　兄貴、いゝ下齒を入れなすつたの。
太郞　いやもう目出度いか何だか知らねえが、女房に持つたその晚に鈴鹿山へ蹄が來て、それから夜通しに逃げて來たが、まあこの譯は後で話さうが、何にしろ當分此方において貰はずばなるめえ。
大八　おゝ、さういふ譯なら遠慮はねえ、ほとぼりのさめるまで、ゆつくりゐさつしやい。
お六　然し、夫婦居候でお氣の毒だね。
左九　はて、世話になるのもなられるも、こりやあ仲間の誼づくだ。（ト此時四つの鐘鳴る）やあ、今打つのは四つの鐘か。

大八　丁度旅人も寢入りばな。
太郎　（これを聞きて、）むゝ、何ぞ仕事か。
大八　これ、（ト太郎に囁き、）斯ういふ仕事をしかけておいたから、ばらした上でゆつくり話さう。
左九　それまで酒も肴もあれば、いつぱいやつて待つて下さい。
太郎　そいつァまぶな仕事だな。
お六　何だか知らないが、半口乘りたいね。
大八　いゝえ、乘るほどな仕事でもねえ。
左九　そんなら、太郎殿、
太郎　後にゆるりと、
四人　話さうかい。（ト大八、左九郎は奧へはひる。）
手一　もし、私等もその仕事に就いて、奧の出口をがんばる役目、
皆々　少しの中ゆるさつしやりませ。
太郎　おゝ、構はずと行きやれ〳〵。
お六　もし、行くなら何ぞ引ッかけるものを貸しておくれな。

手二　ほんに、里と違つて山の中は夜が更けると寒さが強い。さあ、これを引掛けてゐさつしやりませ。

ト太郎に掻巻、お六に女小袖を着せる。

太郎　こりやあ忝い。

お六　おや、意氣な着物だの。

手三　そりやあ今夜働いて來た代物でごんす。

手四　もし、寢なさるなら蒲團もこゝにあります。（ト蒲團を持つて來る。）

お六　あい〳〵。

手三　草臥休めにいつぱい飮まつしやるなら、

手四　酒も澤山こゝにあります。（ト德利を出す。）

太郎　あ、これ、用があるのに構はずと早く行きやれ。

手一　そんなら頭、姐御。

六人　ゆつくりとさつしやりませ。（ト六人上手へはひる。）

太郎　やれ〳〵今夜ばかりは枕を高く寢られるわえ。

お六　二日この方夜通しで、わつちやほんにがつかりしたよ。

太郎　女の足ぢやあ尤もだ。嘸草臥れたらうな。これといふのも主人の公達光義卿を奪ひし故、詮議きびしく鈴鹿にもうつかり足が留められず、夜通しかけて遠州まで逃げ隠れるも御父たる光隆卿の御無念を晴らさん爲めの艱難辛苦、その企てもよそに見て、言ひ甲斐なくも光義卿出家になり度き願ひとて、書置殘して行方知れず、あまり心の直なるも時にとつては却て邪魔、思へば歯がゆいことぢやなあ。

お六　その腹立は尤もだが、何をいふにもお主の事、殊には行方も知れぬ身に、今更言つても仕方がない。さあ憂晴らしにいつぱいおやりな。

太郎　む〻、さうよなあ。いつぱいやつたら氣が晴れようか。（ト銚子杯を見て、）こりやあ盗人に似合はねえ、銚子杯とは時代なことだ。

お六　大方働いて來た代物だらうよ。

太郎　何にしろ、おぬしと夫婦になつてまだ杯をしねえから、祝言代りにいつぱいやらうか。

ト杯を取上げる。

お六　ほんにさうだねえ。（トお六酌をする、太郎飲んで、）

太郎　あ〻い〻心持だ、さあ一つ飲みやれ。

お六　あい、お目出度く飲まうかね。（ト太郎酌をしてやり、お六飲む。）

太郎　これで夫婦の極りがついた。（ト兩人よろしく飲んで、）もう一つ飲まねえか。

お六　わつちやあ澤山飲むと睡くなるから止さうよ。

太郎　睡くなつたら寢やれな。（ト太郎又飲む。）

お六　もう一つおあがりな。

太郎　おゝ、數ようもう一ぱいやらう。（ト又飲む、お六思入あつて、）

お六　あゝ、空腹のせゐか、今の一つで大そう醉つた、わつちやあもう睡くなつたよ。

太郎　二三日ろく／＼寢ねえから、睡くなるのも尤もだ。

お六　そんならわつちやあ先へ寢るよ。

　　ト お六立上る。太郎お六の裝を見て、

太郎　手前が裲襠の裝といひ、宿場の小見世へ泊つたやうだ。

お六　違えねえ。（ト時の鐘の鳴るを耳にして、）引けをうつから、お前もお寢な。

　　トお六裲襠をさばく、太郎ちつとお六を見てゐて茶碗をとり、手酌にて酒を飲む。この見得靜かなる合方にて道具廻る。

（常學院内奥殿の場）――本舞臺三間の間、常足の二重屋體、正面蓮を畫きし銀襖、何れも破れて雨浸あり、左右一間銀張りの襖、二重に破れたる古御簾、欄間に常學殿と記せし額。總て古びたる體。

平舞臺に法策蒲團の上に腕を組み、思案の思入にてゐる。と、時の鐘凄き合方になり、

法策　人の運は知れねえものだ。お三婆あを殺してからとん／＼びやうしにまんがよく、桑名の海へ跳び込んだも、此の短刀の威徳でか危い鰐の口を脱れ、命を拾つてやれ嬉しやと地獄で佛に逢つたやうに寺を頼んで泊つたら、坊主に見せたは泥坊めら、落した金に目がついて寝入ばなをぐつすりと、話しを聞いてもぞつとするが、逃出さうにも勝手は知れず、殊に手下に言附けて、出口に番をつけたれば、羽子にかゝつた鳥同然、あゝおれが運ももうこれぎり、今夜は命を捨てにやあならねえ。とても死ぬなら彼奴等に花を持たして死んでやらう。どれ寝たふりをしてひいやりと襟へ白刃の來るのをば、足を延ばして待たうかい。

ト思入あつて油紙包みの二品を持ち、蒲團を被つて寝る。上手より大八褞袍裝、抜身を片手に、片手に龕燈を持ち出る。左九郎同じく褞袍にて刀と龕燈を持ち窺ひながら、

左九　赤星殿。

大八　これ。（ト兩人法策の寝てゐるをとつくりと見て、）たわいなく、どぶさつてゐる。

左九　一思ひにやッつけよう。（ト兩人龕燈を後ろの方へ伏せ探り寄り、法策の着てゐる蒲團の端を双方より足にて押へ、一時にぐつと刺し通す。この途端法策後ろへすつぽり拔け、ほつと思入あつて下手の龕燈を取り後ろの二重へ後退りに上り、破れたる御簾をおろし隱れる。）や、手應へなきは。

大八　合點が行かぬ。（ト左九郎もぢつと突いたまゝゐる。大八龕燈を取つてすかし見て蒲團を捲り、びつくりして。）やあ、こりや小坊主めは、

左九　逃げ失せたるか。

大八　出口々々に張番おけば、

左九　逃げたところがこの院內。

兩人　後追つかけて、

（ト兩人つか〳〵と兩花道へ行きかける。此時正面の伊豫簾の中へ灯りさす、これを兩人振返り見て、

大八　や、上段の間に灯りのさすは、

左九　もしや今の旅人が、

大八　隱れをらんも測られず、

左九　簾の內を、

兩人　詮議なさん。（ト兩人つか〳〵と立戻り、左右より伊豫簾へ手をかける。此時內にて、）

法策　やあ無禮奴め、下れ。

兩人　なんと。

ト伊豫簾捲上る。眞中に法策墨附を襟にはさみ、小烏丸を腰にさし、經机へ腰をかけきつと見得、傍に菊燈臺を灯しあり、兩人これを見てびつくりなし、

左九　やあ仰々しき小坊主め、覺悟なせ。（ト立ちかゝらうとする。）

法策　やあ、予が面前をも憚らず、立はだかつて無禮奴め、下りをらう。

左九　こしやくな事を。（ト切りかゝらうとするを大八留めて、）

大八　やれ待て富士ヶ根、無禮奴め下れとは、平人にては使はぬ言葉、仔細ぞあらん、まあ待ちやれ。

左九　えゝ仔細も、ござい〳〵も何あらうか。

大八　はてさて殺すは手間隙入らぬ。待てといはゞまあ〳〵待ちやれ。（ト左九郎を留め法策に向ひ、）こりや小坊主、今おのれを一刀の下に討つて捨つるは易けれど、無禮奴め下れとは、形に似合はぬ汝が言葉盜賊なせど我々も以前は由ある武士の果、仔細によつては助けくれうが、何者なるか素性を明かせ、さ、さ何と。

法策　（思入あつて）ほゝお、いしくも問ひたり。我こそは源家の正統左馬頭義朝が三男、今日本六十餘州の總追補使右幕下頼朝が落胤なるわ。

大八　（びつくりして、）やゝ、すりや頼朝が落胤とな。

左九　むゝはゝゝゝ、口から出まかせ、小坊主が落雁ならば知らぬこと、落胤なぞとはかたはら痛い。それとも何ぞ頼朝が、落胤といふ證據があるか。

法策　證據の無き事を言はんや。今より二十歳前なるが、父頼朝流人にて伊豆の伊東にありし頃、祐親が許に我母は澤野と呼んで腰元なりしが、父と語らひ懐妊なし、その折後の證據にと貰ひ受けたる自筆の墨附、まつた三條小鍛冶宗近の短刀、我相傳して所持なしたり。

大八　（扨はといふ思入あつて）扨はいよ〳〵頼朝公の御落胤にてあつたるか。

左九　して墨附の文面は。

法策　疑念を晴らさんその爲めに、讀聞かさん拜聽なせ。

兩人　はゝはツ。（ト兩人辭儀をなす。法策襟にさしたる墨附を出し、押開きて、）

法策　一ツ、その方我胤を懐胎に及び候故、三條小鍛冶宗近の短刀を守刀に遣し候。出産の後男子に有之候はゞ、竊に養育いたすべく、我平家を追討なし、源家の世となり候上取立遣はすべき

ものなり、安元二年九月十八日、澤野へ賴朝判。（ト讀上げ墨附を開き見せる。兩人はツと平伏なし、）

大八　はゝ、知らぬことゝは言ひながら、かゝる君とも存ぜずして、

左九　先刻よりの無禮の段、お許しなされて、

兩人　下さりませ。

法策　ほゝ、誤つて改むるに憚ることなし、そち達二人も浪士とあれば邪非道の賊を止め、今より我に從うて鎌倉表へ伴いたさば、一廉の武士に取立てんが、從ふ心はあらざるや。

大八　はゝ有難きその御諚、何をか包まん我々は、平家方の殘黨にて、斯くいふ我は赤星大八、

左九　まつた拙者は富士ヶ根左九郎、平家沒落なしてより源家へ降參なさんと思へど、させる賴りもあらざる內、

大八　活計に困り盜賊なせど、一生これにて朽ちんこと殘念なりと思ひしに、

左九　測らず今宵賴朝公の、御落胤に仕へるとは、

大八　我々どもが身の本懐、

左九　今より御譜代同樣に、

大八　お使ひなされて、

兩人　下さりませ。
法策　然らばこの場で主從の約を變せぬ誓ひを見せよ。
兩人　かしこまつてござりまする。
　　　ト大八、左九郎思入あつて以前の刀を取り、兩方より金打して、
大八　すなはち我々兩人が、
左九　魂合せ、
兩人　誓ひの金打、
法策　ほゝお、それにて主從三世なるぞ。
兩人　はゝ、有難う存じ奉りまする。
　　　ト平伏する。法策につたり笑ひ悠々とおりたち、兩人の間へ胡座をかき兩人を見返り、
法策　大八、左九郎。
兩人　はツ。（ト兩手を突き窺ふ。）
法策　おりやあ賴朝の落胤と見ゆるか。
大八　なに、御落胤と、

左九　見ゆるかとは。

法策　あゝ手前達も盗人をしながら、ぼんやりとした奴等だなあ。

兩人　なんと。（ト合點の行かぬ思入。）

法策　おらあ、氏も素性もねえ贋物だ。

兩人　えゝ（トびつくりする。）

法策　伊豆國の順禮が置土產にした孤兒で、觀音院といふ修驗者に取上げられて弟子となり、法策といつた小坊主だ。

兩人　やあ。（ト呆れる。）

大八　すりや證據の品も、

左九　贋物なるか。（ト兩人きつとなる。）

法策　いゝや證據の二品は贋物ぢやあねえ、眞物だ。譯を話して聞かさうから、まあ下にゐてよく聞きやれ。（ト尻を捲り、思入あつて二品を取上げ、）この二品の持主ア、やつぱり伊豆の長澤村でお三婆あといふ取上婆、此女の娘が祐親の屋敷に勤めて賴朝に可愛がられてつッぱらみ、病氣と云つて下る時證據に貰つた墨附短刀、運の惡さはその餓鬼も娘も共に產所で死に、それから寶の持ちぐ

されにお三婆あが草津へ來て、十七年がその間隠しておいたを此間おれにちらりと素性を話し、聞きやあ脱さぬ地獄耳、餓鬼の折から賽錢をくすねて覺えた小泥坊、惡い性根に太りが來て鎌倉御所を騙る氣で婆あを殺して盗んだ二品、その場を逃げ去る其時に大事を聞いた伊勢參り、見りやあ似寄の裝形、此奴におれが布子を着せ情ごかしで首を切り、死んだと見せた其場の身替り、ひやうしの好さは伊勢參りが守袋にあつた女の文、名宛は北條駿河介が年季をぬいた島原の高窓といふ傾城へお袋からの無心文、その金額の四兩と書いた四の字の頭へ一を引き首尾よく百兩騙つたを、家老の隼人に見現はされ南無三寶と板子を抱へ、跳込む海の大灘も運よく鰐の口を脱れその金故に又今夜寢入ばなを突かれるところ、鎌倉へ行く手初めに、總追補使の落胤と脅をかけたらいつぱい喰ひこの坊主に從ふとは、盗人騙りを渡世にしながら、まだ／＼惡事は附燒刃だ。さあ、かうしらばけにぶちまけたら、贋を承知で鎌倉へおれと一緒に騙りに行くか、それともいつぱい喰つたのが腹が立つならおれを殺せ。どうで一度は死ぬ身體、命は惜しまぬ大八左九郎、生かすか殺すか片をつけやれ。

　ト法策づう／＼しくいふ。兩人これを聞いてゐて、感心の思入あつて、

大八　いや驚き入つたこなたの魂、人里放れた虹ヶ岡、唯さへ凄き古寺に、手下も多き盗賊の住家も恐

れずたゞ一人、

左九　年も行かねえ身の上で、頼朝公の落胤といつぺえ喰はせた贋者と、種を割つたはびつくりした。

大八　盗賊なせど我々が、なか〳〵及ばぬこなたの肚胸、

左九　その魂に惚れ込んで、贋を承知で、

兩人　一味せう。

法策　むゝ、そんなら贋を合點で、おれが巧みに半肩乘るか。

大八　おゝ、事がばれりやあとも〴〵に、

左九　首を列べる二人が覺悟。

法策　さう聞く上はこれからア、二人を力に何かの相談。

左九　此の企てには幸ひな、今宵こゝへ訪ねて來た地雷太郎に、人丸お六、

左九　この兩人は才智も勝れ、味方に附ければあつぱれ片腕、

法策　すりやその太郎、お六とやらを、

左九　どうぞ味方に、

大八　附けたいものだ。

ト三人思入、この以前より太郎、お六後に窺ひ様子を聞いてゐたが、

太郎 いや、その味方にやあ、

お六 附かれねえよ。」

大八 (びつくりして、)や、こりや二人には、

左九 いつの間に。

太郎 晝と違つて盗人は、夜は寢にくゝこゝへ來て、

お六 殘らず聞いた今の話し、

法策 むゝ、すりやこの二人が噂に聞いた、

大八 地雷太郎に、

左九 人丸お六。

太郎 赤星、富士ヶ根兩人とは、同じ仲間の盗人だが、

お六 名だてがましく言ふほどの働きもねえけちな私等、

法策 いゝやその名は街道筋に、今隠れのないこなた衆故、

大八 この企てに頼みたいが、

左九　して又味方に、

三人　附かれぬとは。

太郎　はて言はずとも知れたこと、素性たゞしき將軍の落胤ならば味方もせうが、氏も知れざる捨兒の小坊主、高の知れた惡事の話に脅しを喰つて乘るやうな地雷太郎と思つてか。

お六　世に人わるとも人丸とも異名をとつたこのお六、同じ盜人生業でもぴんから切まで高下があるよ。

ト太郎お六煙草を喫みて思入、法策兩人をぢつと見て、

法策　むう、すりや氏も知れざる捨兒のおれ故、味方に附かぬと言やるのか。

兩人　知れたことだ。

法策　むゝ味方に附かぬといふからは、大事を知つた二人の奴等。

大八　殊に我々兩人を、

左九　蔑なす言葉は奇怪至極、

法策　生けてはおかれぬ、

三人　覺悟なせ。

兩人　こしやくな事を。

法策 それたゝんでしまへ。

兩人 合點だ。

ト大八は太郎へ左九郎はお六へ切つてかゝろ。太郎お六は煙管にてあしらひ、立廻りちよつとあつて大八、左九郎を一時に當てろ、兩人はうんと倒れろ。法策短刀を拔きかけろを兩人留めて立廻ろ內太郎廚子入りの尊像を落す、法策それを拾ひ上げ開き見て、

法策 やゝ、こりや我所持の觀世音、

太郎 これぞ此程拾ひし品、

お六 然も所は鈴鹿山、

法策 やゝ、何と、

ト法策眞中に、太郎は上手、お六は下手に別れてきつと見得。

太郎 曇り勝なる山中も、その夜は晴れて照る月に、闇よりすごき木々の影、

法策 明るき路も忍ぶ身に暗き社の帳の內、肱を枕に旅宿り、

お六 寢よとの鐘も冴えわたる、峰の嵐に雁のむら立つ女夫が羨しく、

太郎 味に絡みし松ヶ枝に色づく蔦の据膳を、喰はぬも男の恥もみぢ、

法策　木の間おとしか追落し、盗んだ金を盗まんと脅しにかけし鬼の面、
お六　狐格子の破れより怖い姿も女だけ、ぞつと素顔は覺えある、
太郎　枯野に殘る毬栗に、草の錦の能裝束、
法策　その模樣なる雲形に、月は隱れてしばしの闇、
お六　いどみ爭ふその折に、
太郎　思はず拾ふ觀世音、
法策　扨はその夜の盜賊なるか、
お六　鬼の出立は此方であつたか、
法策　思ひがけなきこの出會、
お六　これも盡きせぬ遠州路、
太郎　濱松在の古寺で、
法策　古い趣向の、
お六　だんまりほどき。
太郎　折よくこゝで、

三人　逢つたよなあ。（ト三人思入。太郎尊像を取上げて、）

太郎　この觀音の尊像は、御身が所持か但し又、餘所より讓り受けたる品か。

法策　それぞ親の形見にて、肌身離さぬ大事の尊像。

太郎　この尊像を所持なすからは、兩人共に、

お六　味方に附かう。

法策　むゝ、すりや氏素性もなき捨兒のおれに、

太郎　いゝや正しき御身故、

三人　なんと。

太郎　朝日將軍木曾義仲公の御公達、淸水の冠者義高君。

法策　むゝ素性知れざる捨兒のおれを、淸水の冠者義高とは、何を證據に。

太郎　證據といふは、この尊像。

法策　な、な、何と。

太郎　これぞ御父義仲公が信心ありし淸水の一寸八分の觀世音、この尊像へ祈誓をかけ出生ありしは卽ち御身。

お六　それ故にこそ清水の文字をそのまゝ姓となし、清水の冠者義高公と御名を附けしに、我君には劍難の相ある故に、

太郎　御家臣宇津ノ兵衛が預り、木曾の山家に御成長、然るに御父義仲公にはまさしき一家の賴朝に打亡ぼされて御落命。

お六　其の後君を宇津ノ兵衛が、御供なしてお行方知れず、御母君にはお案じ遊ばし、

太郎　此觀音の尊像に、左りの腕に天の字の痣ある者が義高故、賴むと今際の御一言。

法策　むゝ、割符を合はすその譚、いかにも左の腕には天といふ字に見まがふこの痣。(ト見せる。)

兩人　扨こそ違はぬ御公達。

法策　素性いやしき捨兒とのみ思ひじ我は、清水ノ冠者義高にてあつたるか。

太郎　はッ、某事は君の母上山吹御前の御里なる、猫間中納言光隆の雜掌、竹川伊賀之助正忠。

お六　私事は御父君たる義仲公の御近習にて、今井ノ四郎が娘かけはし。

法策　扨は太郎は我母の親里なりし猫間の雜掌、まつたお六も父の家臣、舊緣のある者なりしか。

太郎　君は木曾にて御成長故、

お六　お目見得なすは今が始めて。

法策　思へば不思議な、
三人　對面ぢやなあ。
大八　すりや、捨兒と言ひしは木曾の公達、義高公にてありしよな。
左九　さすれば君を始めとし、一味の者は、
大八　平家の殘黨、
お六　木曾の餘類、
左九　敵と狙ふは、
太郎　右幕下頼朝、
法策　今にぞ思ひ知らせてくれん。
ト　皆々きつと思入。此時下手へ手下四人出で、
手一　樣子は殘らず小蔭にて、承はりし上からは、我々どもゝ、
四人　君のお味方。
法策　一人たりとも義高が一味徒黨のほしき時節、皆も忠勤盡してくれよ。
四人　はツ。

太郎　それ、萬歳唄ふ酒宴の用意。

六人　畏りました。(ト奥へはひる。)

法策　いかに正忠、斯く味方を得たる上は、名を萬天に上げん爲め、腕の痣の天の字に朝日將軍の日を加へ、天日坊と名を改め、此の二品を證據として鎌倉表へ立越えんには、我身の上をいかゞなさんや。

太郎　それぞ拙者が若年より猫間の家に仕へし故、官職の儀を辨へをれば、路次の警護行列は逐一お指圖仕らん。

法策　して又我に相當の官位は。

太郎　當時將軍頼朝公には右近衛ノ大將故、武官なれば宰相なれど、僧官なれば權僧正が相當せり。

大八　その官位にて御下向あらば、

左九　供奉の同勢器物はいかに。

太郎　先先箱は紫紐にて黑の蠟色に御定紋たる笹龍膽の金蒔繪、つゞいて徒士の侍は、二行に列び二十人。

法策　してその次は打物なるか。

太郎　いかにも、同じ蠟色にて御紋散しの長柄には、上に黃羅紗の雨覆かけ、

法策　して／＼次は。

太郎　卽ち證據の墨附、短刀、これも同じく蠟色にて御紋散しの唐櫃に御墨附といふ衛符を立て、前後の警護は上下の侍。

法策　してまた我乘る乘物は。

太郎　この正忠が所存あつて、一品親王の乘輿に用ふる、飴色網代の乘り物。

法策　その折着する衣服は如何に、

太郎　紗綾形綸子の御召物に白茶錦の丸ぐけ帶、純子の直綴に精好の法眼袴。

大八　して、衣の時は、

太郎　やはり白茶に法服は藤色紗の僧護仕立。

左九　してまた袈裟は、

太郎　古錦襴の七條の袈裟。

法策　用ふる念珠は、

太郎　水晶にして藤色總。

大八　して〳〵扇は、

太郎　つま紅の中啓なり。

左九　して乘物のその次は、

太郎　茶瓶藥籠雨具は更なり、行列人數の增減は時にとつての次第あり、その時々により正忠が一々御傳授仕らん。

法策　はて、あつぱれなる受答、

大八 左九　我々どもが及ばぬこと。

太郎　その時こそは我も又以前に返り、竹川伊賀之助正忠。

大八　我々どもゝ名を改めて、赤星典膳、

左九　富士ケ根左京。

法策　まツこの如き出立に萬端整ふその折は、百兩に就き百石の墨附を與へて愚人をまどはし、多くの金子をかすめとらん。

太郎　まづそれまでは主從の用意の金子集むる爲め、やはり以前の互ひに盜賊。この場のことは穩密穩密。

ト波の音を打込み、正面の襖を引きぬく。と向う山越に遠州灘の遠見。奥よりお六以前の杯臺へ杯を載せ、銚子を持來る。後より手下二人一升德利と茶碗を杯臺へ載せ、持ち出來る。

お六　いざ、御祝儀の御杯。（ト法策の前へ出す。）

法策　目出度く祝はん」

お六　それ、こなた衆はこゝで勝手に。（ト手下へ思入。）

手一　お流れ頂戴、

皆々　いたしまする」（ト法策杯を取上げる。お六酌をする、皆々も一升德利の酒を茶碗にて飲む。）

太郎　〽頼みある中の酒宴かな」

ト太郎謠を謠ふ。此内手下六人酒を飲んでゐたが、あッと苦しみ始める。

大八　やゝ、手下の者が苦しむ體は、

左九　もしや飲んだるあの酒は、

お六　毒藥さ。

皆々　やゝゝゝゝ。（ト六人の手下は苦しみて血を吐き倒れる。）

大左　こりや何故に。

お六　下司ほど口のさがない者故、此の企てが洩れてはと、いつぞや大津で觀音院が所持せし祕法の毒藥を盜んでおきしが役に立ち、手下の者を殺してしまへば、大事を知つたは五人限り、これにて御安堵なされませ。

法策　さすがは人丸、

大八　あつぱれ奸計。（ト此時鷄鳴く。）

太郎　もはや鷄鳴。（ト此時向うへ灯入りの日の出を出す、みな〳〵見て、）

法策　遙かに望む海上に、

お六　波もしづかに朝日の上るは、

大八　今にぞ君の御尊號、

左九　朝日と共に輝かん。

太郎　御身の吉瑞。（ト此時以前の捕手出で、）

捕人　樣子は聞いた。

ト行きかけるを大八、左九郎兩人を引戻し、拔打にあびせる。

二人　此奴等二人は、

お六　時にとつての、

太郎　この場の血祭り。

ト これにて大八、左九郎刀を引くと、兩人見事にかへる。

法策　むゝ、目出度い。（ト 杯を取つて突出すを、木の頭）目出度い。

ト につたり思入、お六酌をする。太郎を始め大八、左九郎等は刀を後へ隱し敬ふ。この見得にてよろしく、

ひやうし　幕

五幕目

見附お辰嫉妬の場
櫻ケ池の場

〔役名――香川三作、弟雅樂之介、花園姫、親孫右衞門、空源和尚、庄屋杢兵衞、岩淵丹下、猫間中納言光義、地雷太郎。三作妹お辰等。〕

（お辰内の場）――本舞臺平舞臺、後ろ納戸、暖簾口、上手茶壁、下手戸棚、いつもの所に世話木戸

下手に隣り屋體を見せあり、下手の火鉢で田樂を燒いて居る、眞中に空源和尚○△□◎等の講中大勢なり、孫右衛門下手に居る。在郷唄にてよろしく幕あく。

孫右　これは空源樣には今日は御苦勞千萬、こちの嚊の七年忌の追善、よろしく御囘向願ひまする。

空源　イヤ孫右衛門殿、こなたは別して堅人故、年忌々々はよく法事をさつしやる、今日は七年忌の念佛をやりませう。講中の衆よ、けふは御苦勞千萬。

○　イヤモウ、私どもはもとより懇意に致し、この佛の死んだ時も湯灌迄いたしました。

△　孫右衛門殿もかたい故、年忌々々を忘れずに、よくなされまする。

□　今日は別段結構なお振舞、田樂とは春めいた御馳走でござりまする。

孫右　イヤモウ在郷の事故、何もない故、よんどころなく田樂と致しました。どうか宜しくお上り下さりませ。

◎　イヤモウ最前から、澤山御馳走になりました。サア皆の衆、お暇致しませう。

○　孫右衛門殿、大きに御馳走でござつた。

空源　愚僧は奥で囘向しませう。

孫右　これは皆樣、有難うござりまする。（トテンツヽになり、講中の者奥へはひる。）左樣なら空源樣、

奥で御回向頼みまする。

空源　ヲヽ承知致した。

ト連立ちはひる。在郷唄になり、花道より雅樂之介、小金吾のこしらへにて出來り、舞臺門口へ來て、

雅樂　お頼み申しまする。

孫右　どなたでござりまするな。（ト立つて行つて開けて見て、）ヤア。そちや都へ奉公にやつた、雅樂之介ではないか。

雅樂　ハイ、左樣でござります、親父樣にも御機嫌よう。

孫右　サア〳〵、こちへはひりや〳〵。

雅樂　左樣なれば御免なされて下さりませ、（ト合方になり、内へはひり、）姉樣にも兄上にも、お變りはござりませぬか。

孫右　オヽ何にも變る事はない。三作めは濱松のお醫者樣の所迄行たまゝ、お辰は今日母の七年の法事ゆゑ、お寺參りに行きました、ハヽヽヽ。そちにも逢はぬ故、見忘れる程になつた。マア〳〵まめでめでたい〳〵、お主大事に奉公するかや。

雅樂　それはお案じなされますな。御奉公大切に勤めてをりまする。

孫右　ムヽ、してはる〳〵此處迄、何用あつて參つたぞ。

雅樂　ハイ、少し尋ぬるものがござりまして。（ト懷中より往來帳を出して）この往來帳は水口の宿外れで拾ひましたが、よく〳〵見れば覺えのある、親の名前の所書、もしやと思つてわざ〳〵と、これ迄尋ね參りました。

ト往來帳を孫右衞門に見せる、孫右衞門手に取り見て、

孫右　ムヽ、こりやこれ俺が往來帳、水口宿の外れで俺も拾うた物がある。われに見せう。（ト戸棚より笠と杖とを出し）この品ぢや、覺えがあるか。

ト戸棚より出して見せる。

雅樂　やア、こりやこれ花園姫樣の御所持の品。どうしてこゝに。

孫右　ヤア、おのれはなあ〳〵、たつた今御奉公大切にしたと云うたぢやないか、その御主人を預かりながら、御行方も知らいでそれで忠義がたつかいやい。こゝな、うつけ者めが。東海道は盗人多く、もしも難儀に逢ひ給はゞ、何と言譯せうと思ふ。折よく俺が行合して、お助け申したればこそ、御身に怪我なくお連れ申し御かくまひ申した。然しその時盗人の爲に御怪我あらば、どうしようと思ふぞ。エヽ云はうやうなき不忠者めが。（トきつと言ふ。）

雅樂　そのお腹立は御尤も、是れには深い譯ある事。定めて樣子は姬君に、お聞及びもござりませう。此方は一人相手は多勢、追つまくッつ挑みあひ、遂深入りした石山道、姬の御身の氣遣はしく取つて返せばこはいかに、何處へ立退き給ひしや御行方知れず、南無三寶と思案の內ふと目につきし往來帳、時にとつての辻占と拾つて見れば親の名前、もしやと思ふ心から尋ね參りし甲斐あつて、姬君は恙なく御安泰にましますと聞く嬉しさ、不忠の段は幾重にもお許しあつて親父樣、姬君に御目見得。

孫右　イヤならぬ、なりませぬ。口利口にぬかしたとてこれが料簡なるべきか、不忠の罪は姬君に代つて。おのれ、かう〳〵。

ト杖にて散々に打ちまくろ。此時奧より花園姬、世話娘のこしらへ、盲目にて探り〳〵出て押留め、

花園　コレ孫右衞門、許してやつてたもいなう。（ト此時雅樂之介姬を見て、）

雅樂　ヤア姬君には、お目が見えませぬか。

花園　さいなう、そなたに別れ孫右衞門が世話になるその內に、光義公の御身の上、案じ煩らひ夜の目も合はず泣明し泣暮し、たうとうこの眼を泣きつぶし、光義樣の御在所知れる迄、孫右衞門の世話になる自なれば、娘お辰と同じやうに、お花どうせいかうせいと、指圖をしてたもひなう。

孫右　めつさうな、御主人樣を勿體ない、これもそちが不忠から。

雅樂　ハヽア、惡い心で致さねども、不忠に不忠を重ぬる科。

孫右　その科といふ事を心得をるなら、汚名を雪ぐ一つの功に、光義樣の御行方を搜し、花園樣にお逢はせ申せ。

雅樂　我身の科さへお許しあらば、命にかへて光義樣に、きつとお逢はせ申しませう。

花園　そんなら必ず雅樂之介、隨分ともによい便りを。

雅樂　ハヽア畏りました。そんなら姫君、親父樣。

孫右　早う行け。

ト孫右衞門花園姫の手を引き奧へはひる。

〽はッとばかりに雅樂之介、主と親との言附に、是非なく表へ立出でしが、名殘り惜しげに立留り。

ト雅樂之介門口へ出てメリヤス。

雅樂　たま〳〵故鄕へ歸りながら、兄の三作、姉のお辰にさへ、たゞの一目逢ひもせず歸るも何やら心殘り、兄には姫の事を賴み、何かの始末。（トあたりへこなしあつて）オヽ幸ひなるあの物置、あれ

に忍んで暫しが内、二人の歸りを待ちませうか。

〽云ひつゝやがて物置の、戸を押明けて入りにける。程なく戻る娘のお辰、後に付添ふ隣の嚊。

ト唄入り鳴物にて、花道よりお辰出る、後ろより隣の嚊女房やつしなりにて、

嚊　もウしお辰さん、此間お頼みになつた袈裟が出來て參りました故、これ迄持つて參りました。

お辰　それは大きに忝い、マアちよつと家へ來て、一服上つて行て下さんせ。

嚊　イヤ、先程ゆる〳〵と御馳走になりました故、これで直ぐに歸ります。袈裟は確にお渡し申します。

ト殘りの唄にて引返し、お辰は門口へ來り、

お辰　父さん、今歸りました。（ト内へはひろ。）

孫右　ナニお辰か、早かつたな。（ト奥より出來り、）見ればどうやら顔色が惡いが、氣合でも惡いのか。

お辰　イヽヱ何ともござんせぬ。もうし父様、昨夜お願ひ申した事、お聞きとゞけ下さりますか。

孫右　ムヽ、アノ剃髪の事か。

お辰　ハイ、今日は母さんの命日でもあり、幸ひ檀那寺の空源様もお出での事故。

孫右　ム丶、それ程迄に思ひ込んだそなたの願ひ、聞いてやる。
お辰　チエ丶有難うござります。
〽云ふうち奥より空源和尚、お辰の傍へ立寄つて、（ト奥より空源出來り、お辰を見て）
空源　オ丶娘御、歸られしか。
お辰　モシ空源様、あなたにお願ひがござりまする。
空源　ナニ、空源に願ひとは。
お辰　どうぞお弟子になされて下さりませ。
空源　ム丶何か、親父殿か。
お辰　イ丶エ、私でござります。
空源　アノ、そなたが。ソリヤ又どうして、どういふ譯で。
お辰　さればでござりまする、尼になりたい一通り、お聞きなされて下さりませ。（ト合方になり）お話し申すも恥かしながら、三年以前父さんと京參りの折清水の觀音様の境内で、父様についはぐれ、とやせんかくやと思ふ所へ、しのび姿の優しいお方、親にはぐれてさぞかし難儀、宿は何處ぢやと親切に尋ねてわざ〳〵清水から、三條の宿屋迄送つて下さる道すがら、見れば見る程よい殿

御、同じ女子に生れたならこんな殿御と添臥を、したらばさぞと一筋にふつと思うた煩惱の、心は解けぬ片糸の、結ぶたよりも荒磯の、詮方泣く／＼在所へ戻り、せめて夢にと思へども名所さへも不知火の、つくした心も一心に、御籤八卦占を取つても取つても凶の籤ばかり、叶はぬ戀と諦めて、尼になりたい私の願。

〽後云ひさして忍び泣き、孫右衛門も詞をそへ、

孫右　オヽ恥かしい事うち明けて、頼むといふはよく／＼の事ぢやと思うて、兄三作にも話したればそれ程思ふ妹が願ひ叶へてやるが宜しいと、詞にまかせてとも／″＼に、お頼み申す空源樣。

空源　なにさま、一子出家する時は九族天に通ずると、此の上もなき善根ながら、こなたは弟子には致しにくい。

〽聞いてお辰は小膝をすゝめ、

お辰　エヽ、スリヤ女子は五障とやら、三從とやらの罪ある故。

空源　イヤそれには構ひなけれど。

お辰　そんなら、なんで御弟子には。

空源　こなたは顏に色氣がある故。

お辰　ムヽ、そんなら私のこの顏に、ハアヽヽヽ。

〽はツとばかりに伏沈み、起上つて傍なる、ありあふ火鉢の鐵きうを、燒けたる儘に取上げて、おのれと顏に押當つれば、空源上人孫右衞門、おわて驚きだきかゝへ、

ト文句の通りよろしくあつて、

孫右　コリヤお辰、氣が違うたか。

空源　心をたしかに、氣がついたか。

〽藥よ水よと介抱する茶碗の水に我が顏を、すかしながめてにつこと笑み、

お辰　顏に色氣がある故に、弟子にならぬと空源樣、そのお詞は無理ならねば、燒け爛らかせしこの顏なら、何とお弟子になられませうな。

〽云ふに空源横手を打ち、

空源　オヽあつぱれ見上げたお辰殿、生れもつかぬ不具となつて、佛門に入りたいとは、これも佛へ捨身の境界、いかにも今日より我が弟子たり。

お辰　そんならお弟子にして下さるか、エヽ忝い。（ト手を合せる。）

〽喜ぶ娘に親もほた〳〵。

孫右　ア丶、親に勝つた娘が心底。
空源　ホ丶佛門に入る教化の勤行、奥の一間でゆつくりと教へ申さん、サ丶、お辰來やれ。
〽引立て奥の一間へ入る、折から我家へ戻る兄三作。
ト在郷唄になり花道より、三作出來り、
三作　ハイ、只今歸りました。
孫右　オ丶、兄戻りやつたか、サア〱はひりや〱。
三作　イヤモウ早う歸らんと心は急けど、埒のあかぬもの。
孫右　シテお醫者樣は何と云はれたな。
三作　ハイ、姫君樣のお日の容態委しく申しました所が、それは心の臟の勞れ故なか〱急には癒るまい。マアこのお藥をあげたがよい、然しこの藥を用ふるうち嬉しい事か悲しい事でか、心の臟にさはることがあらば一生の疵になる、なんでもあまり悲しい事と嬉しい事は、なるたけ常人に聞かせぬやうにと、くれ〱も申しました。この藥は家の祕傳、これを廿歳の坂を越さぬ男子の血汐と混じて飲む時は、卽座に平癒との事。
〽始終を聞いて孫右衞門、最前來りし雅樂之介、我子の命は斷つとても、主人を助くる忠義

ぞと思案にうつむく表には、物置よりも雅樂之介、戸口をそつと三作が、顔見合して立切る
戸口弟を殺すめい〳〵が思案の奥の襖を開け、親は一間へ入りにけり、三作は獨り言。

ト床のメリヤスになり、

ア丶人間の身の上ほど、苦勞の絶えぬものはない、猫間のお家に奉公せしも算へて見れば早十年朋輩竹川伊賀之助と口論なして、兩人ともにお暇賜り、この程世上の噂に聞けば、かの伊賀之助は盗賊の頭となつて味方を集め、光義卿を奪ひ取りし故、嚴しい詮議に詮方なく、鈴鹿を立つて光義樣も、御行方知れずと聞いたるが、心がゝりな事ぢやなア。

〽思ひ入つたる折からに、表へ來る旅虚無僧。

ト合方になり、光義旅虚無僧のこしらへにて、尺八を吹き出て、門口へ立ち、

〽そゞろに尺八吹きすさめば、三作はむしやくしや腹。

エ丶氣のもめるどうぶくら。エ丶通れ、通れ。

光義　通れとあらば罷り通る。（トずつと内へ入り、上へあがる。）

〽ずつと通つて上座に直れば、三作は見とがめて、

三作　ヤア、この梵論字殿は、案内なしに通るのか。笠を被つて默つてゐるは、無禮至極な虚無僧殿、

ドレ天蓋を。

〽手をかけ内をのぞいて見、

ヤア、あなたは猫間中將光義樣ではござりませぬか。

光義　ムヽ、さういふ汝は、香川三作。

三作　先づは御機嫌の體を拜し、いかばかりか。

光義　オヽ、そちも無事で、重疊々々。（ト合方になり、天蓋を取る。）

三作　シテ何故にお姿を變へさせ給ひ、この所へ。

光義　されば、これには段々仔細のある事、一通り聞いてくりやれ。（ト合方になり。）刑罪きはまるそれがしを、兒雷太郎が駈附けて、我牢輿を奪ひし事より、謀叛の企て連判狀の一部始終を物語り、岩倉大納言が指圖にて、父は無實に死ぬれども、身の科くらます所存はなけれど鈴鹿の山を忍び出で、とある寺院を賴み、一先づ東へ下らんと思ひ立つたる道すがら、汝が故鄕を思ふにより、虛無僧となつて參りしぞや。

三作　ハヽア有難き御意、幸ひ御許嫁の花園姫樣も、親孫右衛門が水口にて難儀をお救ひ申して、奧の間に御座あれば久々にての御對面、とは云へこゝに一つの難儀と申すは、あなたをこがれて眼を

泣きつぶし、只今は御療治最中、醫者が申すには嬉しい事も悲しい事も、心の臟にさはりあれば療治はならぬと醫者の教へ、今あなたの御出にて嬉しやと思召せば、たちまち盲目となり給はん。さすれば只今申されまじ、いつそ親にも妹にも旅の修行者の體にもてなし、今宵のお宿仕らん」それも忍びの御身なれば、あれなる二階で今宵はゆつくり。

光義　十年に餘る昔話、

三作　澁茶の時に仕らん」

光義　そんなら三作、

三作　光義樣、まづ入らせられませう。

〽二階へ誘ひ入りにける。お辰はやがて白無垢に、袈裟打ちかけて鏡臺を、携へ出て居直れば、空源やがて引導の經を授けて黒髮を、剃り落さんとする所へ、孫右衛門立出て。

孫右　もウし空源樣、此世の髪のある姿も最早今日が見納め、とつくり見せてやつて下され。

〽涙ながらに父親は、鏡の蓋を取除くれば、

お辰　アヽコレ父さん、そのやうな事云うては出家の妨げ、私やもうふッつりと、思ひ切つてをりまする。

〽云ひつゝ鏡にうち向ふ、寫るは二階の光義が、此場の樣子何事と、障子押し開けさしのぞく顏は違はぬ戀しい殿御。

ヤア、あなたぢや〳〵。

〽びつくり閉める障子の内、娘は俄に狂氣の如く、立つたり居たり氣はそゞろ、

トよろしくあつて、

私や尼には、もう厭ぢや、止めにして下さんせ。

〽袈裟もちぎつて取つて捨て、譯も正體もなかりける、孫右衛門もてあまし。

孫右　コリヤお辰、さつき顏に燒鐵あて出家になりたいと云ふ心から、今又急にやめにするとはどういふものぢや、今更空源樣へも言譯がないわえ。なんぼあざとい女でもあまりといへば情ない、われにや天魔が魅入つたか。

〽口說き歎けば耳にもかけず、

お辰　私やそんな事聞きたうない、なんでもあなたぢや〳〵、何處へお出でなされたぞいなア。

〽鏡を見ては後を見つ、四邊を眺めたちつゐつ、二階のあたりをきよろ〳〵と、更に正氣のあらざれば、空源もあきれはて。

空源　かくまで思込んだる者が、今出家を嫌ふ有樣、血が上つたか狂氣したか、これも前世の因緣づく、緣なき衆生は度しがたし、とつくりと氣を鎭めさせ再び得心する時あらん。愚僧はこれより歸し申す、必ず折檻したまふな。

〽云捨て空源は、是非なく寺へ立歸る。孫右衞門も溜息つき、

ト空源はよろしくこなしあつて、下手へはひる。

孫右　アヽ、これを思へば七年前に、死んだ婆が羨しい、長生すれば恥多し。

ト思入あつて奧へはひる。

〽つぶやき奧へ入りにけり、後にお辰は獨り言。

トメリヤスになり。

お辰　尼になる氣で鏡を見れば、寫りしお顏は都にて京參りに行たその折に、見染めたお方に違ひない、どういふ事で私の家に。但し戀しい〳〵と思ふ心の迷ひか、寫りしは夢か現か幻か、何にもせよあの二階を、オヽさうぢや。

〽震へる足をふみしめ〳〵、上る二階の段階子、そつと覗いて飛下りつ、

ト二階を上り、そつと覗いて見てとびおり、

ヤア〳〵、あなたぢや〳〵〳〵、やつぱりさうぢや、あなたぢやわいナア、マア〳〵思ひ掛けないと云はうか、不思議と云はうか、どうして此處へあのお方が、コリヤ、かうしてはゐられぬ。

〽しどけなりふり帶しめ直し、襟許合せ鏡に向ふ我顔に、疵の痕さへ胸せまり、はつとばかりに氣落して、恨みの涙はら〳〵。

エヽどんな、尼になる氣で疵つけて、今更あなたに逢うたとて、この身を恥ぢてなか〳〵に云寄る詞も情ない、それでなくとも都と違ひ田舍育ちの蓮葉者、どうでお氣には入らぬがち、その上にこの疵とは、エヽ淺ましい口惜しい、何でこのやうな事したぞ、コリヤ何とせうどうしようぞいナア。

〽娘心の一筋に、かつぱと伏して泣きゐたり。光義公聞しめし、心根あはれと思ひけん、しづ〳〵二階を下り立ちて。

光義 これは〳〵此家の娘か、それがしは旅の修行者、足を痛めて一夜の無心、早速承知下されて今宵は此處に一宿致し、何かと世話になり申す。

〽詞にお辰は嬉しげに、

お辰　そんなら今宵は私の家に、お泊りなされて下さりまするか、エヽ有難い忝い、もう〳〵必ず遠慮なしに、一夜はおろか二日も、三日も十日も百日も千日もお泊りなされて下さりませ、日頃戀しいいとしいと、思うた私の念が届き、はからず今宵お泊りで、あなたのお顔を見る嬉しさ。

トなまめいた合方になり、

光義　その御親切はかたじけなけれど、どういふ折に逢うたやら。

お辰　そのお見忘れは御尤も、かぞへて見れば三年前、頃は彌生の半にて清水參りのその時に、父さんには道にてはぐれ、東西知らぬ都の町、何と詮方難儀の節、折よくあなたがお出でにて、三條の宿屋なら送つてやらうといふ折しも、村雨に相合傘、道すがら名所のお話し。

光義　さうお云やれば覺えある、三年以前の物語、思へば不思議な縁であつたなう。

お辰　サアその御縁が思ひの種、いたづら者とおぼしめさうが、その時ふつと思ひ染め、こんな殿御と添臥の、位もあらば世の中は女に生れた甲斐あつて、嬉しからうと戀路の闇、迷ひそめてもいかにせん、この身は賤しい田舍育ち、叶はぬ戀と諦めて思ひ立つたる菩提心、嫁入り沙汰を聞くも厭、いつそ思ひの黒髪を切つて佛の御弟子とも、ならん心で檀那寺の上人樣にお願ひ申し、思ひ切る氣の戀衣、墨染衣ぬぎかへて鏡に向うたその時に、寫つたお顔は正しくあなた、それから再

ぴ煩惱の絆は切るに切られぬ黑髪、尼になるのが厭になり、人にも親にもうとまれても、思ひ込んだる私が心、不便と思うて下さりませ。

トよろしくあつて、取り縋る。

光義　それ程までに身の事を。嬉しいぞや、さりながら、應と云はれぬ深い譯、話すも世間をはゞかる事、親切の心の程は忘れねど、逢はぬ昔と諦めて、ふッつりと思ひ切つて下され。

〽聞いてお辰はどうと伏し、

お辰　そんなら戀は叶はぬか。ハアヽヽヽヽ。

〽はッとばかりに引出の、剃刀とるより我咽喉へ、突き立てんとするその手を捕へ、

ト文句の通りよろしくあつて、

光義　コリヤ待て女中、早まるまいぞ。

お辰　イエ／＼女の口から恥かしい、叶はぬ時は死ぬ覺悟、どうぞ放して殺して／＼。

〽無理に抱留め見合す顏。

光義　ヤヽ、そなたの顏のこの疵は。

お辰　サアこの疵もあなた故、叶はぬ戀と諦めて尼にならうと思うたら、色氣が顏にある故に弟子には

せぬと空源様の、詞に我手で心の燒鐵。

〽生れもつかぬ疵つけて、尼になる氣もあなたへ心中。

これ程慕ふ私をば、情ないあなたのお詞を、聞くよりいつそ殺して下さりませ。

光義　イヤもうそれ程迄の心中立、その心根が不便、イヤその心に惚れました。

お辰　エヽ、そんなら今から二世の契り、オヽ嬉しうござんすわいナア。

〽後は互ひに抱き付き、わりなき仲ぞむつまじく。花園姫は眼病の、さぐりながらに一間を出で。

トお辰光義にひつたり寄り添ふ。花園姫奥より探り乍ら出來り、

花園　お辰さん、此處にかえ。

〽聲聞くよりも二人は別れ、一目見るより光義びつくり、

光義　ヤア、そなたは花園。(ト思入。)

花園　エヽ。

光義　イヤ、話に聞いた旅のお方か。

花園　ハイ、左樣でござります、水口とやら申す所で、難儀の場所で此家の主人、孫右衞門に助けられ

し旅の者でござります。

光義　ムヽさうでござるか、わしも旅の者、サア旅は憂いもの辛いものでござりまする。

〽妻と知りつゝ名乘られぬ、三作が敎の一言、浮世の義理ぞつらかりける。お辰は心いそいそと。

ト光義切なき思入、お辰は嬉しさうに、

お辰　ほんにお花さん聞いて下さんせ、お前に此中お話申した、都で逢うた戀人が今日此處へお泊りなされ、私の願ひが叶うたわいなア。

花園　それはマア嬉しうござんせう、そのお話を聞くにつけ、逢ひたい見たいそのお方は、何處にどうしてござんすやら、それが苦勞さ氣遣ひさに、この目を泣きはらし盲目となつて此頃は。

〽物の黑白もわからねど、心に覺えてあり〳〵と、目先に見ゆる戀しいお方。

今にも尋ぬるそのお方に、逢うても甲斐ない盲目の。

〽見る事さへも叶はぬは、いつそ死んだがましかいの。

誰も戀路は同じ事、私が心の切なさをコレ申しお二人樣、御推量下さりませ。

〽身を打伏しての悔み泣、心を思ひ光義は胸もはりさく共涙。

ト光義切なきこなしあつて、

光義　聞くも哀れな物語、尋ぬる人が聞いたならさぞや嬉しう思ひませう、必すきな〳〵思はずに、隨分ともに氣を慰め、早うその眼の癒るやう、又その人が此世にあらば隨分身をば大切に、なさる方がよろしうござります。

花園　有難うござります、そのやうにマア御親切に云つて下さる故、どうやらお聲がそのお方に、似たやうに思はれまする。

〽うちふさぎしが氣を取直し、

私とした事が、よしないお方に身の上話、さぞお笑ひでござりませう、お辰さんはさぞ悦び、そんならお二人さん、お樂しみなされませ。

〽傍に現在我夫のゐるをも知らぬ盲目の、閉ぢふさがりし障子をば明けて心の奥の間へ、さぐり、さぐりて入りにける。後見送りて光義が、

光義　何處の誰を慕うてか、アヽ思へば哀れな事ぢやナア。

〽泪にくれる面ざしを、お辰は見るよりうらめしげに、

ト　お辰少しく嫉妬の思入にて、

お辰　そのやうにお花さんを思ひやり、私の心は知らしやんせぬか。
光義　それを知らいで何とせう、そなたの親切忘れぬしるし、今宵後夜の鐘を合圖に、アノ二階へ。
お辰　そんなら後夜の、鐘を合圖に、
光義　必ず人にさとられまいぞ。
お辰　合點でござんす。
〽約束かため飛立つ嬉しさ、お辰が胸も光義も、奥と二階へ別れ入る。折柄庄屋があわたゞしく。（トバタ／＼になり、花道より庄屋出來り）
庄屋　孫右衛門殿、々々々々々。
孫右　ハイ／＼、どなたでござります、（ト奥より孫右衛門出て）ヤア、あなたはお庄屋様、サア／＼これへおはひりなされませ。
庄屋　ゆるさつしやい。
孫右　何か御用でござりますか。
庄屋　オヽサ、急な御用は外でもない、今代官所へ呼ばれた處、岩淵丹下殿といふお侍が參られて、猫間中將光義と申す者、孫右衛門方に匿ひある故討手に向ふとの事、尋常に繩掛けるか、首にして

渡せばよし、さなくば踏込み家捜しとの事、それ心得てゐさつしやれ、よいか〳〵、ドレドレ參りませう。

〽云捨てゝ立歸る。孫右衛門は心もそら、胸に思案のとつおいつ。（トメリヤスになり、）

孫右　ハテ心得ぬ、猫間中将光義様は御行方も知れぬとあるが、此家に在す筈はなし、そこに氣遣ひはなけれども、縁につながる姫君様、コリヤ聞捨てにはならねわえ、まづ濱松の眼醫者の所へ暫く預け申さうか、イヤ〳〵それでも矢張り安心ならぬ、ハテどうか、よい思案がありさうなもの。

〽案じさなかへ表より。（ト物置より雅樂之介出來りて、）

雅樂　オヽその思案、貸して進ぜう。

〽ずつとはひる歌之助。

孫右　ヤア、そなたは悴雅樂之介、何しに此處迄戻りやつた。

雅樂　ハテ忘れた物がある故に。

孫右　スリヤ又、何を忘れたぞ。

雅樂　大切なる花園姫を。

孫右　ヤヽなんと。（ト合方になり。）

雅樂　オヽ分りますまい。實はあの花園姫はわしが女房にしようと思うて、やうやく連れて出た處、途中にてはからず行方を失ひ、尋ねて來た甲斐もなく、光義公の詮議に出よと云附けられ、出ごとは出てもこれ迄に、思ひ込んだる男の一心、是が非でも女房にせねばならぬ、それ故に戻つて來た、サア花園姫を渡さつせえ。（ト立ちかゝる。）

孫右　ヤアおのれ、云はしておけば法外千萬、お主樣を女房にするとは人面獸心、かやうな奴は生けてはおかれぬ、この人畜生めが。

ト引き附けて打つ、その手を留めて、

雅樂　コレ親父殿、その畜生にはこなたがしたのぢや、十二の折から都の奉公、朝夕傍に附添うて子供心にお姫樣を綺麗なものぢやと思ひ染め、二年三年經つ中に俺も男に生れたら、あんな女を女房に持つて樂みてえと思ふ矢先猫間家の騷動、幸ひの時節到來を嬉し悅び花園姫を引出しても、今に思ひも遂げず別れ〳〵、やうやく尋ねた姫の在所、かくまつてある花園を渡してくれ、貰ひに來た、それが厭なら代官所へ、この由を訴へる、サア親父殿、返事はどうぢや。

〽云はれてくわつと孫右衞門。

孫右　ヤア犬にも劣つたど根性、うぬ、その舌の根をとめてくれん。

〽雅樂之介が差添を拔くより早く脇腹へ、柄も通れと突立つる、急所の痛手にかつぱと伏し、苦しき息をほつとつき、

ト孫右衞門雅樂之介と立廻りながら、脇差を拔いて脇腹へ突き立てる、雅樂之介どうとなつて、

雅樂　おでかしなされた親父樣。（ト竹笛入りの合方になり、）廿歳未滿の雅樂之介がこれなる血潮、姫君樣の御眼病、今こそお役にたちませうがな。

孫右　ヤヽ、何と。

雅樂　最前歸るその時兄三作や姉のお辰殿にたつた一目逢ひたさに、木部屋に忍ぶその折から、門口にて話を聞くに廿歳前の男の血潮、藥に混じて飮ます時は、眼病卽座に平癒との物語を聞くにつけ價の高い藥があつても、血潮がなければ役にたゝず、せめて不忠の言譯に藥の役にたゝんと思ひ又二つにはあなたに手柄をさせん爲、只今の雜言過言も手にかけられて死す覺悟、親父樣先立つ不孝はお許しあつて不孝の段、

〽お許しなされと迸る。血潮に淚あらはせり。扨はさうかと孫右衞門、悔む歎きを押包み、

ト文句の通りよろしくあつて、

孫右　ムヽ、スリヤ俺が手にかゝるは、覺悟の上にてあつたるか、知らぬ事とてこの親が、血潮の役に

たてんとて、それ故我子を殺したわ。
雅樂　そんならあなたも、そのお心で。
孫右　オイヤイ、割符を合す親子が心、これでこちが忠義も立つたぞ。
雅樂　チエ、忝い。
〽悅ぶ親子が忠心を、洩れてや奥の一間より、花園姫はまろびいで、
ト花園姫奥より駈け出來り、
花園　樣子は殘らず聞いてゐた。コリヤ雅樂之介、はかない最期をしやつたなア。
孫右　サヽそのお歎きは有難けれど、忰が忠死のこの血潮、少しも早く姫君樣。
〽茶碗に汲み取り藥を合せ、姫は嬉しさ持つ手も震ひ、孫右衛門は介抱の、妙藥ぐつと飲みければ、忽ち五臟惱亂し、うんとばかりに倒れ伏す、はッと驚くその內に、不思議や忽ち兩眼開き、すつくと立つたる花園姫、孫右衛門は見てびつくり、
ト文句の通りよろしくあつて、
ヤア〳〵、あなたはお目があきましたか、コリヤ雅樂之介悅べ、お目があいたぞ〳〵、チエエ有難や嬉しやなア。

花園　オヽ嬉しいぞや雅樂之介、そなたが命捨てし故、わしの目が明らかになつた。忘れはおかぬそなたの忠死。

雅樂　御平癒あつたか、忝や。

〽につこと笑ふが暇乞、知死期も近き斷末魔、一間をぬつと兄三作、雅樂之介が首打落し突立ちたり、孫右衛門はつめよつて。

ト此時奥より三作出來り、やにはに雅樂之介の首を打落す。

孫右　コリヤ三作、弟の雅樂之介が忠死の最期、詞もかけず、なぜ首打つた。

三作　さればく\、兄に勝りし弟が忠死、苦痛さするがいとしさから、又二つには御身代りのお役に立てんため。

孫右　ムヽ、スリヤ何人の御身代りに。

三作　猫間中將光義公の御身代り。

孫右　ムヽ、シテ光義樣はいづれにましまします。

光義　おゝ中將光義これにあり、それへ參つて對面せん。

〽聲かけながら光義公、二階より下りたち給ひ、

ト光義下手二階より出來る。

孫右　ヤア、誠にあなたは光義樣。

花園　ようまあ御無事で、どうして此處へ。

〽喜び合ふぞ道理なり、光義淚を押拭ひ。

光義　孫右衞門親子が忠義といひ、雅樂之介が命を捨て、我夫婦をかくまでも、ォヽ過分なるぞ。

〽嬉しいぞやと詞にはッと孫右衞門、三作も頭を下げ、

三作　ハヽア、弟が自殺は天の與へ此の前髮を幸ひに御身代りの御用に立て、御褒美には恐れながら、一滴の水一枝の花、それが未來の弟へ御加增、モシ親父樣、忠義のための非業の死、前世の業と諦めて、先立つ弟が不孝の罪、お許しなされて下さりませ。

〽主從四人が溜淚、一度にわッと聲をあげ、泣沈むこそ道理なり。三作やがて心づき。

イヤ〳〵泣いてゐる所でない。庄屋の知らせも雅樂之介がこの首にて、鷺を烏と目をくらまし、此場の首尾をつくろはん、親父樣には御二方を、落しまゐらす支度が肝要

〽氣をせく折しも表へ人聲、庄屋が案內に岩淵丹下、捕手の人數從へて、門口に大音あげ、

トこの內三人奧へ忍ぶ。

丹下　ヤア／＼孫右衞門、此家の内へ猫間中將光義、姿を變へて來りし由、庄屋が案内で向うたり、サア異議なく首を討つて渡すや、但し踏込み召捕らうか。サア／＼いかに／＼。

＼と呼ばゝれば、三作は戸を開き、小腰かゞめて手をつかへ、

三作　ハヽア、これは／＼御役人樣。先づ／＼、お觸のありし中將光義、最前參りし修行者の面體が似たる故、引捕へて詮議なせば光義に相違なし、欺し寄つて首討取り、只今持參致しまする所、ようこそ御入來忝し、イザ御受取り下さりませ。

＼弟が首を差出せば、丹下は受取りとつくと見て。

丹下　オヽでかした／＼よう討つた、光義の首に相違なし、褒美には、暫しなりともかくまひし罪を許してくれん。いざ鎌倉へ知らせん、者共參れ。

＼首を器に納めさせ、四邊を睨み岩淵丹下、旅宿をさして立歸る。行く間遲しと三作が、

三作　サア／＼、親父樣々々々。

孫右　悴、首尾よく討手をあざむきしか。

三作　目立たぬやうに拔道から、姫君樣と光義樣、御二方を忍ばすは掛川の知邊の方へ。

光義　スリヤ、それがしは姫諸共、

孫右　しばしが間知邊の方へ、
花園　お辰殿へはそなたから、
三作　後氣遣はずと、片時も早く。
孫右　サア、ござりませ。
　　三作は後見送り。
〽又も追手のかゝらぬ内と、心飛立つ主從が、踏みだす足も掛川の知邊の方へ落ちて行く。
　　ト文句の通りよろしくあつて、
三作　雅樂之介が忠義によつて、御身替りにてあざむきしが、もし又露顯し再びこの家へ討手來らば、なにがなしに期をのばし、そのひまには掛川まで、お着きになるに疑ひなし、ア、ヤレ〳〵あぶない事であつたなァ。
〽胸なでさする奥よりも、小本片手に妹のお辰。
　　トお辰奥より出來り、
お辰　オ、兄さん、此處にござんしたか。
三作　オ、妹お辰、そなたは今迄奥にゐやつたか。

お辰　アイ、わたしや生れ性が見たい故、三世相を出して見たればなア、どこにあるやら見つからぬ、兄さん、ちよつと見て下さんせ。

〽本取上げてとつくと見。

なに〳〵、この生れ性の人は、前世は富士川の大蛇にして、女なれば悋氣嫉妬をつゝしむべし、とかく夫婦の緣薄し。

お辰　アヽモシ兄さん、もう止めにして下さんせ、そんな事なら見たうない。

〽取つて投付けあちら向く、折しも告げ來る後夜の鐘。

トお辰鐘の音を耳にして、

サア〳〵〳〵、あの鐘は後夜ぢや、後夜ぢや、後夜ぢや、後夜でござんす。

〽鐘を聞くよりいそ〳〵と、しどけなりふりしやな〳〵と、二階へこそは走り入る。三作は不思議顏、

三作　何の事だ、あれは後夜ぢや〳〵と、無性に悅んで、何を云ふやらしどもない、それはさうと御二方は恙なく落給ひしか、アヽ案じられる事ではあるわえ。

〽案じなかばへお辰は立出で、

ト お辰下手の二階より出來りて、

お辰　兄さん、お前は知らしやんせぬか〳〵。エヽもう、知らしやんせぬかいなア。

ト傍へ寄り、胸を取る。

三作　是は又譯も云はずに、何を知らぬかと云ふのぢや。

お辰　エヽ何ぢややら悟りの惡い、宵に泊つた修行者樣を、知らしやんせぬかといふ事ぢやわいなア。

三作　ムヽ、あの虚無僧の御修行者か、今のさきお立ちなされた。

〽エヽとびつくり、目は逆づり、

お辰　シテお立ちなされた、その先は。

三作　夜道をかけて、掛川まで。

お辰　エヽ、こりやかうしてはゐられぬわえ。

〽面色變つて行きかゝるを、三作は引留め。

三作　コリヤヤイ妹、血相變へて何處へ行く。

お辰　アノ修行者の、後追つて。

三作　コリヤ、そちが行くには及ばぬわえ、親父樣とお花殿、お二人附けてやつたれば、道に迷ふ氣遣

ひない。

お辰　ム、、してお花さんは、何故に。

三作　されば、お花殿は許嫁の、ありや御夫婦ぢやわい。

お辰　エ、。

〽はつとびつくり、狂氣の如く、

エ、知らなんだ〳〵、知らなんだわいなア。ム、、私に隱れて此處を逃げ、二人しつぽり樂しまうとは、エ、腹の立つ腹の立つ、ようも〳〵私をだまし、逃げて行くとはあんまりな、三年このかた戀ひ焦れ、不思議に逢ひは逢ひながら、お花さんと御夫婦とは今の今迄隱してゐて、男を寢取つて逃げをつたなア。

三作　そんならわれが三年このかた、戀ひ焦れた男と云つたは、

お辰　アイ、アノお方でござんすわいなア。

三作　エ、途方もねえ人を見染めたなア。コリヤヤイあのお方は、汝がためにはつながる緣の、お主樣ぢやわやい。

お辰　エ、、そんならあのお二人さんは。

三作　オヽサ、猫間の嫡子光義様、日の岡の息女花園様ぢやわやい。所詮叶はぬ戀と諦め、ふッつりと
思ひ切れ〳〵。

お辰　いやぢや〳〵〳〵、わしやなんぼでも思ひ切られぬ、なまなか嬉しいお詞を、聞いた上では
いッかな、いかな。

三作　それぢやといつて、現在の。

お辰　サア、たとひ主でも家來でも戀に上下の隔てはない、思ひ切れとはそりや兄さん、胴慾ぢや〳〵
胴慾ぢやわいなア。大事の男を寢取つた女、恨みのあるたけ云うた上、取殺さいでおくべきか。

〽血走る眼に逆立つ黒髪、三作はもてあまし、

三作　ムヽ扨は悋氣嫉妬よな。コリヤ親が許した許嫁の仲を裂くとはそちが無理、よッく心を落着け身
をかへり見よ。

〽さとせばわつと泣出し、

お辰　ムヽ、スリヤたゞさへ不器量なこの顔へ、疵までついた私が顔ゆゑ。

三作　イヤさうぢやなけれど、ぬしあるお方、それにそなたが横戀慕、こりや妹、汝が無理ぢやぞ。

お辰　イエ〳〵、たとひ無理でも邪でも、わしや堪忍がもうならぬ。

三作　〽斷出す妹が帶引戻し、不便さあまる涙をかくし。
ヤイ妹、なぜそのやうに辨のない事ぞ、不斷平生兄が詞に唾を返した事のねえ、素直に育つたそちが生立、それに引替へ聞入れぬは、いかなる天魔が魅入りしぞ、親や兄迄不忠者と末世に汚名取らするか。よい〱、とてもさうした心なら生け置いてどのやうな、妨げせんもはかられず、今兄が手にかくる、覺悟してそれへ直れ。
〽刀の柄へ手をかけて、おどせどいッかな惡びれず。

お辰　オヽ面白い、兄さん、切られませう、サア〱切るとも突くともしやんせ。
〽身をつき付くる顏色に、

三作　ムヽ、もうこれ迄。
〽刀引拔き後へ廻り、いかにお主のためぢやとて、現在妹を切るといふは、いかなる前世の因果ぞと、どうと伏して泣き入りしが、涙を拭ひ氣を取直し。
コリヤ妹よう聞けよ、汝が弟雅樂之介はな、お主の眼病癒さんため忠義のために死んだわやい、それに引替へおのれはなア、お主の戀路を妨げなしお命まで取らんとは、云はうやうない不忠者めが、サア雅樂之介が忠死に恥ぢ、その惡念を思ひ切り誠の人になつてくれ、兄が頼みぢやコレ

妹。

〽だましすかせど耳にもかけず、血走る眼氣は逆だち。

お辰　たとひ不忠にならうとも、一旦かうと思うたからは、思ひ切られぬ女の一念。

三作　ムヽ、すりやこれ程云ひ聞かしても。

お辰　イヤ、聞かぬ〳〵、聞きませぬ。

〽行かんとするを留むる兄、放せやらじと爭ふはずみ、急所に當りのけざまに、うんとばかりに倒れ伏す、これ幸ひと三作は、有合ふ繩にて縛りあげ、柱にしつかとくゝりつけ、

ト文句の通りよろしくあつて、

三作　アヽ、懦弱と思へど血筋の妹、不具な子程可愛いと、兄のおれさへ不便さに、親父様のお歎きが思ひやられておいとしい。アヽ女は五障三從に、嗜むべきは悋氣ぢやなア。

〽姿見返り振返り、涙拭うて奥へ行く。更けゆく夜半の嵐につれ、息吹返し目を開き、見れば悲しやいましめの、繩目にうごく事さへも、涙の顔を振上げて。

ト文句の通りあつて、三作は奥へはひろ。お辰こなしあつて、

お辰　エヽ、聞えませぬ兄さん、恨めしいは花園姫、なつかしいは光義様、私をだしぬき立退いて姫と夫

婦にならうとは、ヱヽ胴慾ぢや〳〵、胴慾ぢや〳〵、胴慾ぢやわいなう。

〽立つたり居たり身をもがく、猶しめからむいましめ繩、悲しさなんと詮方も、泣くより外の事ぞなき。やゝあつて起直り、

ト早めの三重、薄ドロ〳〵になり、

オヽそれよ。（ト思入あつて、）傳へ聞く宇治の橋姫は深く契りし男を寢取られ、その恨みを晴らさんと夜な〳〵貴船の社へ參り、とり殺さんと呪ひしを、繩目にかけられ出る事ならねば、身を食ひ切つて血潮をふくみ、匕首を畫きしに不思議や、血潮はすでに陰火となり、いましめ切つて身をのがれ生きながら鬼となつて、七代祟りをなせしとかや、それにならうて我も亦、身は賤しくとも橋姫と、恨みは同じ一念力、今から歌の奇特にていましめを切つてたべ、幸ひこゝに筆硯、この衝立へ、オヽさうぢや。

〽筆をくはへて衝立に、墨黑々と書きしるし。

ト衝立へ「恨みわび消えなん後も迷ふとは、浮身の果の煙とも見よ。」と書く。

〽さら〳〵と書終れば、不思議や陰火ひらめきて、何處ともなく一疋の小蛇、顯れ出でゝいましめの、繩をふッつと食ひ切つたり、お辰は嬉しく伏拜み、

トよろしくあつて、

アラ有難や忝や、この上は花園姫の後追駈けて、恨の程を思ひ知らせん、オヽさうぢや。

〽丈なる黒髪振りみだし、怒れる眼は鬼瓦、後を慕うて駈け行く。音に驚き飛んで出る、三作は妹の見えぬは不思議と縄切れし、傍に書きし一首の歌。

三作 ムヽ、扨は御二方の後を慕ひ、追駈け行きしに相違ない、姫君の御身の上、遠くは行くまじこれよりすぐに。オヽ、さうぢや。

〽一腰ぼッ込み逸散に、飛ぶが如くに、

ト三重、雨の音にて此の道具廻る。

(櫻ケ池の場)――本舞臺通しの高足の堤、後ろ波の遠見、上手柳の立木、脇に建札、櫻ケ池と記せし榜示杭、前側波板、下手藪疊、在郷唄にて道具とまる。

ト直に浄瑠璃になり、

〽駈けり行く、夫を慕ふ一心に、こけつ轉びつかちはだし、櫻ケ池へたどりつき、ホッと一息つく所へ、中有を飛んで三作は、お辰が帯際しつかと捕へ、

ト お辰よろしく出て、水を飲む事。後より三作前のこしらへにて追ひ駈け出て、

三作 コリヤ待てお辰、云ふ事あり。

〽云へども何の答さへ、櫻ヶ池の土手傳ひ、上るをやらじと三作が、お辰が襟上引捕へ、

コリヤ妹、わりやどうあつても、惡念を止めねえなア。

お辰 イエ／＼、たとひ私はこの池の藻屑となつて果つるとも、一念は花園姫の影身に附添ひこの恨み、やはか晴らさでおくべきか。

三作 チエヽ淺ましい、おのれはなア。(ト一ツ鉦の入りし合方になり。)ハヽアこれを思へばその昔、我母女子を得ん事を、この櫻ヶ池の龍神へ誓つて設けし女子はそなた。そも／＼この櫻ヶ池の龍女といふは、その昔嫉妬深き女あつて、この池へ身を沈めしが、嫉妬の一念毒蛇となり、代々祟りをなせしより、この惡靈を脱れんと、龍神とあがめしよりその利益神の如し、嫉妬の惡念起りしも、お辰といふ名を附けしも前世の業因、淺ましやなア。

お辰 この惡念も花園姫故、思へば／＼ねたましや。

〽はつたと睨む有樣は、髮逆立ちて炎をはき、兩眼くわつと血をそゝぎ、三作目がけ飛びかかり、さながら鬼女の如くなり。三作はきつと見て、





三作　ムヽ扨は毒蛇の本體を顯せしな、血筋の緣もこれ限り、お主の妨げなすからは、不便ながらも殺さにやならぬ、妹覺悟。

〽拔く手も見せずお辰が脇腹、ぐつと突込む氷の刃、あつと叫びてくる〳〵、髮逆立ちて苦しげに。

ト文句の通りあつて、

お辰　ムヽ、そんならいよ〳〵殺すのぢやなァ。

三作　オヽ、お主の大事にやかへられぬわえ。

お辰　オヽ殺さば殺せ女の一念、生替り死替り、恨みをなさでおくべきか。

三作　その惡念發起して、成佛してくれ、コリヤ妹。

お辰　イヤ成佛猷ぢや、恨めしい。

〽恨みの眦血をそゝぎ、虛空をつかんで死してんけり。三作はどうと座し、不覺の涙恩愛に櫻ケ池の水庭より、ふき出す男泣。

トメリヤスになり、思入あつて、

三作　思へばそちはこの池の、大蛇の性を受けたる故、おのれと蛇身の形をあらはし花の盛りをあらけ

なき、夜半の嵐に櫻ケ池の藻屑となつて散り失せしか、これも定まる前世の緣、せめては彼が亡骸をこの水底へ沈めなば、魚鱗の餌食となり、罪障消滅なす時あらん。

ト唄念佛になり、三作お辰を池の中へ沈める。ドロ〳〵焰硝火ぱつと立ち、燒酎火燃える。

南無幽靈出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々々々。

〽しばし回向の折こそあれ、討手の頭岩淵丹下、手の者引連れ追取り卷く。

ト丹下捕手を引連れ、出來りて、

丹下　ソレ。

捕手　動くな。

三作　コリヤ、何となされまするな。

丹下　ヤアぬかすな三作、光義なりと僞つて最前渡せし首は贋物、サア誠の光義を渡せばよし、但し何處へか落せしか、まつすぐに白狀せよ。

三作　ヤア光義公の御首に、贋と誠の二つがあらうか、承知しながら今となり、とやかく云ふは丹下樣お役人には似合ひませぬな。

丹下　ヤア、口がしこくもぬかしたり。ソレ、三作をからめとれ。

捕手　心得ました。

ト三つ太鼓にて十手を持ち打つてかゝる。立廻りあつてきつと見得、誂へ大小入りの鳴物になり、ト、捕手逃げてはひろ。三作追駈ける。丹下切つてかゝる、三作渡り合ひ立廻り、よろしき所へ本鐵砲の音する。三作胸板を撃抜かれ血を吐き苦しみ倒れる。丹下逃げてはひる。この時藪疊みより地雷太郎種ヶ島を持ち。押分け出てきつと見得。本釣鐘すごき合方になり、火縄を打振り〳〵三作は、死骸を見てにつたりと笑ひ、

地雷　我猫間家へ仕へし折、遺恨重なる香川三作、今宵はからず撃殺せしは、ハヽヽヽ。ハテ心地よき、死ざまぢやなア。(ト思入。)

捕手　やらぬわ。

ト此時捕手寄り、打つてかゝるを早く立廻り、見事にかへし、

地雷　ムヽ、ハヽヽヽヽ。

トかけり、山おろしになり、

ひやうし　幕

六幕目

袋井驛の場
日坂小夜の中山の場
大井川の場

〔役名――人丸お六、奥方賤機。成澤隼人、倅左門之助、家來原文藏、赤星大八、宮川艷之丞、弟子扇十郎、まだら軍八等。〕

（袋井驛の場）――本舞臺一面の黑幕、上手藪疊、前に井筒、松の立木。下手に袋井、小夜中山と記せし榜示杭、舞臺眞中に夜泣石あり。下手に四ツ手駕籠おろしある。すべて袋井驛の體。鳴物にて幕あく。とこゝに宮川艷之丞、女形置帽子、振袖にて、四ツ手に乘り、扇十郎附いて出る。雲助大勢取卷いて、わや〳〵云つてゐる。

雲〇　サア、役者なら役者のやうに、長い錢を出して通れ。

扇十　何を云ふのだ。後の宿で酒を飲ませ、酒手をあれ程やつておいたに。

雲△　べらぼうめ、鰌汁位ぢや飲んだ内にや入らねえわ、酒手の二朱や一分の金にや目はかけねえ、袋井から掛川かけて九百九十人の仲間へ、こまかくきざんで九十九文にも足りねえわ。

雲○ オヽさうだ〳〵、役者と見て素直にしちやア、仲間へ對して面が立たねえ。

扇十 これさ〳〵、さう強面に云はねえものだ、駕籠に乘つてござるのは宮川艷之丞と名乘つて、今度上方から鎌倉へお下りの女形、おいら達がお供をしてゐてかれこれ道中でお前方に、取巻かれたといつちやア、太夫元へ對してすまねえわけ、大概相場もあつたものだ、マア〳〵靜かに〳〵。

雲△ いやだ〳〵、酒手が不足だ、通す事はならねえぞ。

雲○ 手前ぢや話がわからねえ、太夫さんに逢つて云はう。

扇十 これさ〳〵、太夫さんに逢つたとて、そんな無體な相場はねえ、それにこの太夫さんは、元京の宮川町で勤めをしてゐた色子だけ、ほんの女を見るやうだから、そんな事を云ひかけてひよつと癪でも起されちやア、俺一人迷惑する。

雲△ そんなら酒手をもつと出すか。

扇十 サア、それは。

雲○ エヽ面倒な、ソレ中の太夫さんを引出すがいゝ。

ト垂を上げて引出す、艷之丞女形のこしらへにていやらしく出て、

艷之 アレサ何だねえ、そんな手荒な事をしちやあいけないよ。

雲△　ヤアお前か、これでも太夫さんか。

艶之　アイ私が宮川艶之丞、今はすがれの花なれど宮川町にゐる時は、叡山や三井寺から私を互ひに張合うて、寺を開いたお方も數多、今は役者となつたれど、お望みならばお寢間のお伽も致しまする。

雲△　これでもお寢間の伽をするとよ、べらぼうに長い面だナア。

雲○　おらア夕顏の化物かと思つた、この有樣ぢやア路川もたんと持つてゐめえ、せめて二人の雜物でも。

雲二　オツト合點、引剝げ〳〵。

ト大勢かゝつて裸にして、艶之丞の懷中の財布を引出す。やらぬ渡せと爭ふはずみに井戸の中へ取落す。扇十郎それと立寄るを裸にして、雲助着類を駕籠へ押込んで、逸散に引擔ぎ、逃げてはひる。

扇十　エヽ無念口惜しやなア、俺も宮川扇十郎と云つて名の通つた旅役者、裸にされちやアどこまでも後追駈けて、オヽさうだ。

ト逸散に追駈けはひる。

艶之　アヽコレ〳〵扇十郎、長追ひして怪我しやんな。情ない雲助ども、いかに無間の鐘が近いとて、

二八十六で文つけられ、思へば二九はこのやうに、四五のはたちで丸裸、袱紗包みは井戸の中、ア丶落した金が欲しいなあ。

ト馬士唄になり、まだら軍八侍にて出來り、

軍八　ヤレ〳〵草臥れた〳〵、今日は殿駿河之助樣、金谷宿の泊り故、御本陣へ先觸の身共、ドリヤちつとも早く急がうか。（ト舞臺へ來り艶之丞を見て、）ヤア、この道中に丸裸で、お前はまあどうしたのだ。

〽云はれてこなたは、涙ながら、

艶之　ハイ、私や旅の者、只今こゝを通りかゝり追剝に出逢うて、衣類は殘らずはぎとられ、貯への金はアレアノ井戸の中へ、騷ぎのまぎれに取落す、これがほんの譬に云ふ通り裸で道中はなりませず、御見受け申してあなたへお賴み、どうぞあの井戸の中の金を取つて下さりませ。

〽云はれて軍八好色者、目を細くしてうちうなづき。

軍八　それは何より易い事、然し取つて進ぜる代り、禮はきつとあるであらう。

艶之　それはもう、取つてさへ下さるなら、その金はあなたへ半分。

軍八　イヤ、その金よりもそもじの情、それが身共は所望でござる。

艶之　それはお嬉しうござりまする、そのお禮なら此方から。
軍八　ムヽ、扨はそもじも氣あり名古屋か。
艶之　宮重大根が私や好物。
軍八　そんならしばし、待つてゐや。
　　トをかしみの鳴物になり、軍八裸になつて井戸へはひる。艶之丞も井戸の中を覗いてゐる、この内雲助脱ぎ捨てゝある着物を見て、
雲助　ヤア〳〵、此處に衣類が捨てゝある、丁度今夜の内會に、オヽしめた〳〵。
　　ト持つて行きかゝるを、艶之丞取付きて、
艶之　それは私の連の着物、持つて行くとは泥坊ぢやなア。
雲助　オヽ人の物を只取る生業、サア渡しやアがれ。
艶之　イヤ〳〵、渡さぬ〳〵。
　　ト爭ひ、蹴倒されて泥坊逸散にひつさらつてはひる。又をかしみの鳴物にて、軍八井戸より財布をくはへ、裸で出て、きつと見得。
軍八　思ひの外に淺井戸で、まんまと首尾よく金の包み。アヽ寒い、ハツクサメ、ガタ〳〵、女中は何

とした、ハツクサメ、なに泥坊に着物をとられた、ハツクサメ、かうしてはゐられぬ。

〽うろたへ騒ぐを艶之丞押留め。

艶之　コレもうし、今更悔んで返らぬ事。

軍八　アヽいかさまなア、そなたの色に迷うたばかりで、勘平ならぬ軍八が御先觸の供には後れ、殿の旅宿も見屆けず、コリヤ軍八が武士はすたつたわい。

艶之　サアその狼狽者には誰がした、みんな私が頼みから、恨みはのけてこれからは、一先づこの場を立退いて下さんせ、私が金を才覺して、古着でも買うて來たなら。

軍八　いかさま、それもよからう、もはや八ツ時。

艶之　ひだるいお腹、

軍八　團子なりとも、

二人　よこぐはへに、

〽塒を急ぐ旅烏、かはい〳〵の夫婦連、互に裸の肌と肌、抱きつきしが軍八が、驚きて飛びしさり。

ト文句の通りよろしくあつて、

軍八　ヤヽヽヽ、こりや女と思ひの外。

艶之　アイ・私や疝氣でござんすわいなア。

〽とあきれ顔、

軍八　そんならそなたは、女でなくて。

艶之　アイ、宮川町の艶之丞と云うて、元は色子を勤めた者、今では變る旅役者。

軍八　エヽそんなら手前はくはせ者か、エヽいま〳〵しい、せめてもの腹いせに、金を此方へ渡してしまへ。

ト風の音にて艶之丞を蹴倒し、逸散に軍八は花道へはひる。

艶之　アヽ申し、そりやお前聞えませぬ、折角一緒と樂しんだに、私ばかりを蹴倒して、逃げて行くとはあんまりな、よし〳〵この上は天に上らばとんびだこ、地へもぐらば土龍、一緒にならいでおくべきか。

〽後を慕うて、したひ行く。

ト三重になり、黒幕を切つて落し、小夜の中山の體になる。

ト行列三重にて道具よろしく納まる。と下手より乗物に供廻り附添ひ出來り、文藏若侍手をつかへ。

文藏　ハヽア奥樣へ申上げます、只今金谷の宿にて承りますれば、最早殿樣にはお下りにて、今宵金谷がお泊りとの事、旦那樣にも御一緒にお着きの由にござります故、掛川迄金平を只今見せにつかはしました、立歸りまする迄、しばらくこれに御休息。

トバタ〳〵になり、中間金平下手より駈けて來り、

金平　オヽ文藏樣、これにござりましたか。

文藏　オヽ金平戻つたか、シテ殿樣には。

金平　ハヽア、掛川の宿の御本陣へ參りまして承つたる處、殿駿河之助樣には金谷のお泊り、大旦那樣にも御一緒との事。

文藏　奥樣、お聞きなされましたか。

賤機　オヽ金平大儀であつた、そんなら今宵は金谷のお泊り、文藏何としたらよからうなう。

文藏　ハヽア、途中でお逢ひ遊ばしては、近習衆の手前といひ、旦那樣の思召しも如何、なにさま是れよりとつて返し、金谷の宿にお待ち遊ばし、ひそかに小夜より旦那樣の御旅宿迄いらせられませう。

賤機　いかさまそれがよささうな、皆の者も大儀であつた。ソレ文藏、酒手と申すを遣はしや。

文藏　ハヽア。コリヤ〱人足ども、些少なれども祝儀を遣はす、取つておきやれ。

金平　ヘイ〱、有難うございます。

文藏　オヽこの景色を御覽なされて、暫く此處に御休息の間早う行つてこい。

金平　それは有難うございます。（ト思入あつて、）サア〱人足ども、暫くの間麓へ行つて、一杯やらう
サア〱來い。

ト禪の勤めになり、下手へはひる。しつとりとした合方になり。

賤機　コレ文藏、改めて云ふ迄もなけれど、殿北條駿河之助樣久々京地に御在番、夫隼人殿悴左門之助と共に長々かの地に御住居、然るにこの度殿樣には、帝を惱まし奉つる猫の怪異退治のお役目、蟇目の法にて射留め給ひ、叡感にあづかり給ひしが、その蟇目の法も隼人殿、殿に御傳授申せしより、大切なお役目を首尾ようお勤め遊ばせしとの事、遠い岡崎峠迄隱れなき取沙汰、聞いて嬉しさ妾まで喜ぶ間もなう殿樣には、日夜遊里にお通ひ遊ばし、ついに高窓とやらを御身請、御身持よからぬよし鎌倉へも聞えしとか、さすれば今にも御歸國あらば、いかなるおとがめあらうも知れず、殊に此頃後室樣には日頃に替りて御心荒く、やゝもすればお次の者を打擲し給ふのみ

ならず、悴駿河の放埒も、まつたく隼人が勸めかとお怒りの體といひ、御家中の取沙汰も殿樣と御一緒に、遊里へお通ひなされしと、聞く度々の妾の苦勞、只ならぬ身に種々の噂を聞くに心ならず、我夫のお迎ひに是までは旅立ちまゐりしが、最早御歸國とあるからは、ひそかに殿の御旅宿にて、この由具に申上げ、案じられるは夫の身の上、この賤機が心の內推量してたもひなう。

〽涙にくれて物語れば、文藏もなぐさめかね。

文藏　そのお歎きはお道理ながら、餘人は知らず旦那樣はその御案じには及びませぬ、高窓殿を身請の事も何ぞ深い譯ある事、必ずきなく〳〵思召すな、早御臨月も來月故、御身を大事に遊ばしませ。

賤機　そりや必ず案じやんな、何にもせよ御歸國ありて、鎌倉より御上使のその折に、隼人殿御申開きの御心得、それにしても早う我夫に逢うて。

文藏　いかさま、今宵のお泊りにて。

〽主從語らふその折から。
ト行列三重になり、上手より乘物に侍附き出て、

大八　これは〳〵、いづれのお方かは存じませぬが、失禮御免下さりませ。

文藏　イヤモウ旅は御同然の事、御遠慮なく、マア〳〵此方へ〳〵。

大八　皆の者も大儀であつた、姫君樣の御休息の間、酒でも飲んで來やれ。サア〳〵些少でも酒手を遣はす。

ト酒手を取出してやる。

人足　ヘイ〳〵行渡つた旦那樣、有難うございます、サア〳〵一杯やつて來よう。

ト禪の勤めになり上手へはひる。大八思入あつて乘物に向ひ、

大八　イヤ明石樣、さぞ御窮屈でござりませう、まづ是へ御出であつて、暫く御休息遊ばしませ。

お六　ほんに、それへ出て見晴らしませう。

ト合方思入にて、人丸お六姫のこしらへにて出て、乘物の脇へ腰をかけ、大八に向ひ。

コリヤ大八、此處は何といふ所ぢや。

大八　ヘイ、此處は小夜の中山でござります。

お六　シテ、あれなるお方は。

大八　あれにござるは、やはり旅のお方。

トお六こなしあつて、賤機に向ひ、

お六　これは〳〵どなた樣かは存じませねど、承れば矢張り道中なさるお方とか、どれへお通りなさ

れまする。

賤機　ハイ、私は三州岡崎、所用あつて掛川迄。して、あなた様は、

お六　ハイ、播州の姫路より鎌倉へ參る者、今宵は金谷へ旅宿のつもり、あなた樣にはどれへお泊り。

賤機　ハイ、私も金谷の泊り。

お六　そんなら同じ金谷の泊り、袖振り合ふも他生の緣、今宵は夜と共、

賤機　打ちくつろいで、

二人　話しませう。

ト兩人悦ばしき思入。大八こなしあつて、

大八　旅は道連、世は情、

文藏　泊りも同じ金谷なら、お供はお供同士にて、

大八　旅のお話し、

文藏　諸國の舊蹟名所のいはれ。

大八　コリヤ面白くなつて來ました。サア〱一服致しませう。

ト すり火打ちにて吸付け合ひ、煙草を飲み、

文藏　モシ大八樣とやら、アノ丸い屋根の見えるは、あれはどこでござりまするな。
大八　アレかえ、あれはかの飴寺さ。
文藏　そんならあのこちらの屋根が、飴の餅の因緣の、觀音堂でござりますか。
大八　オヽそれ〱、懷妊女を泥坊が切殺して疵口から生れた赤兒を、有難い和尙樣が、飴の餅で育てたといふ、甘い因緣話、ハヽヽヽ。
　　ト此時賤機苦しきこなしあつて、
賤機　アイタヽヽヽ。（ト三人びつくりして、傍へ來て）
文藏　どうなされました、お氣をたしかになされませ。
お六　モシ、お癪でも起りましたか。
大八　これお女中、しつかりとなされませ。
賤機　ハイ有難うござります、今の話を聞きましたら、たゞならぬ身に何とやら、ぞつと氣合に障りまして、俄にかぶりまする。（ト下腹の痛むこなし。）
お六　ムヽ、そんならあなたも御懷妊。
賤機　ハイ、九月になりまする。

お六　それは〳〵、さぞかし御難儀、ドレ、私がさすつてあげませう。

曉機　ハイ忝うござります、アイタ〳〵〳〵。

大八　ア、コレ文藏殿とやら、九月と聞いて見れば、ひよつと御出産があらうも知れぬ、こゝには我等兩人で附いてをれば氣遣ひない、其許早うどこぞへ行て、醫者を頼んでござらつしやれ。

文藏　いかさま、左樣致しませう。ア、困つたものぢやナア、そんならお氣の毒樣ながらお二人樣、お頼み申します。奧樣、私は行て參ります。

曉機　オヽ、早う歸つて來てたもや。

〽云ふも苦しき息づかひ、文藏は氣もそゞろ、後へ心は殘れどもつい一走りと駈出す、躓く拍子に草鞋の紐。

文藏　ハテ、まだ新しきこの草鞋、はきかへて間もなく、ハテ氣掛りな。

〽心にかゝれど急ぎの用、これぞ主從三世の緣、切目と更に白眞弓、はるかの里へ急ぎ行く後に明石は心をそへ。

ト　お六傍へ立寄つて、

お六　もしお女中、何ぞ合藥はお持ちなされませぬか。

曉機　ハイ、ございます。（ト懐より藥包を出す。）
お六　オヽ是れがあれば氣丈夫。コレ大八、どこぞへ行て湯を貰うて來い。
大八　ハイ、畏まりました。（ト思入して上手へはひる。）
〽これもとつかは走り行く。明石は腹をさすりながら。
お六　モシ、こゝらがようございますか、そしてこの胴巻のやうな物は、是はお腹帶でございますか。
曉機　イエ、それは路用を入れた胴巻でございます。
お六　ムヽ、お金か、お金を肌につけてゐては、猶冷えて惡うございます。（ト持ちそへてにつこと笑ひ。）
たしかに目方は百兩餘り。
曉機　エヽ。
お六　イヤサ、お前の肌にあつちやア毒だ、コリヤあわつちに貸しておくれ。
曉機　イエ〳〵、その金は夫へ渡す大事の金、こればつかりは。
お六　ならねえか、貸さゞあ借りめえ、貰つて行かうよ。
曉機　ムヽ、ヤヽ俄に變りしそなたの詞、スリヤ最前から眞實に、介抱したもありやうは。
お六　この金を取らうばかりさ。

お六　オヽ、泥坊よ。

賤機　エヽ。

トびつくりしてどうとなる。

賤機　扨はそなたは。

お六　今街道に隠れのねえ、人丸お六といふ傳法な泥坊さ。（ト合方一つ鉦になり、）こなたの金を持つてゐるのを、金谷の宿で足がつき、手下の所から知らせ故旅を稼ぎの女形、振袖姿を引剝いで丁度役にも立茶番、人丸から出た明石といふ屋敷娘の早拵へ、首尾よくいつた狂言の臺詞廻しもでたらめに、後からついた侍も赤星といふ仲間の者、井戸へはひつた侍の着物をさらつて出來合武士、所詮わつちが見込んだら、取らにやァ茶番の落がねえ、この百兩は景物に、きり〱くれてしまひなねえ。

賤機　ムヽ、扨はそなたは盜人よな、アヽよしや病に苦しむとも、成澤隼人が妻の賤機、やはかこの金渡さうか。

お六　渡さねえと云やあ是非がねえ、可愛さうだが手強い事もせにやァならねえ。

〽金を引合ふその折から、

ト　お六賤機胴巻を引合ふ。此時島隱れ、やつしなりにて出來り、

島隱　頭。

お六　オヽ島隱れか、手傳つてくれ。

島隱　オツト合點だ、ヤイ女、もう叶はねえ、その金を渡してしまへ。

　ト風の音にて爭ひ、胴巻ぐるみひつたくり、賤機やらじと爭ふはずみに、ウンと當てられ、倒れる。

　へヽ、もろい奴だ、くたばつたさうな。

お六　手前もひどい事するぜ、女をそんなに、それだから憎まれて、いつでも女が惚れやアしねえ。

島隱　へヽ、姉御、有難えぜ。

　ト風の音になり、此時赤星大八、手下大勢と出て、

皆々　頭。

お六　大きな聲だなう。

大八　シテ、この女はどうしたんだ。

島隱　今姉御が休ましたのだ。

大八　アヽ惜しいもんだ、ドレ俺が。（ト活を入れる。賤機息を吹返す。）

手下　姉御、面倒だからばらさうか。
お六　待ちねえ、腹に餓鬼があらあ、ばらすのも殺生だ、縛りあげろえ。
皆々　合點だ。
ト引立て縛りにかゝる。賤機懐剣を抜いて立廻り、きつとなつて、
賤機　ヤア、慮外しやると許しはせぬぞ。
お六　エヽ何をぐづ〳〵意氣地のねえ、早く縛りあげろえ。
　　よつてたかつて高手小手、賤機無念の齒を食ひしばり、
賤機　エヽ口惜しや殘念な、この文藏は何故遅い事ぞ、早う戻つてくれぬかいなう。
お六　エヽやかましいわえ。（ト お六胴卷をすら〳〵と引出す、それを賤機押へ、きつとなる。）小判で丁度百兩、サア大八、行かうぢやァねえか。
大八　サア、わつちや一人殘りませう。
お六　なぜ、一緒に行かねえ、一杯飲まうぢやねえか。
大八　わつちや酒より、姉御。（ト囁く。）
お六　ムヽ、さうか、然し可愛さうに、孕んでゐるに。

大八　それだと云つて頃合は、年増盛りの愛嬌者、見脱して行くも惜しいものだ。

お六　そんならおぬしの勝手にしねえ、わつちやあ先へ行かうよ。

〽二人の樣子を聞取る賤機、扨はと驚きしばられながら、お六が傍へすりよつて、

賤機　アヽコレ〱女中、もうかうなつては是非がない、金はこなたに進ぜる程に、どうぞ此身を汚す事は、許して下され、コレ申し。

〽詫ぶれど、更に聞入れず、

お六　そりやどうとも勝手にしな、こつちやァ見込んだ金さへとりやア、もうお前には用がねえ。

手下　そんなら姉御、おいらも一緒に。

お六　サア、一杯やらう。

ト禪の勤めになり、上手へはひる。大八振袖を肩へかけて金をよみながらこなし。あたりを見廻し、こなしあつて、

大八　コレ女中、何もいやがる事はねえ、いふ事を聞いてみねえ、まんざら憎くもねえものさ。

手下　そのおあまりは我々も。

賤機　エヽ汚らはしい何事ぞ、コリヤマアどうせう〱。

〽あせり狂へど身はいましめ、かよわき女も一心の凝りかたまつたる一生懸命、縄引きちぎつて大八が、腰刀を奪ひ取り。

ト文句の通りよろしくあつて、

女ながらも覺えの手の内、覺悟しや。

ト禪の勸めにて切つてかゝる。手下皆々立廻り乍ら逃げてはひる。賤機追駈ける。大八抱き留めてきつとなり、

大八　これさ／＼、われも聞分の悪い、そんなあぶねえ事をせずとも、マア刃物を此方へ渡しな。

〽刀を取らんとするはずみ、あはれむべし賤機が、乳の下より脇腹かけて、眞一文字に切下ぐれば、アッとばかりにどうと伏す。

ヤア／＼こりや怪我ぢや、堪忍してくれ、惜しい事をしたなア、これぢやあ所詮命はねえ。

〽云ふに賤機起直り、苦しき息をつきあへず。

賤機　チエヽ口惜しや残念や、人でなしの手にかゝり、死するも此の身の因果なれど、お家の成行夫の身の上、その納まりも聞く事ならず、かゝる深傷を負つたれば存命叶はぬこの賤機、腹な子までもとも／＼に、おのれがために死ぬからは、生替り死替り恨みを晴らさでおくべきか。

大八　オヽ恨みがあるならいつでも出い、幽靈でも手前なら毎晩抱いて寢てやるわ、然し所定めぬ盗人が旅から旅を稼いであるきやァ、搜して來ても知れにくからう、とてもの事に俺と一緒に、行く先々へついて來い。

賤機　云ふにや及ぶ、何處迄もおのれが身體に附きまとひ、殺さいでおくべきか。

大八　勝手にしろ、サア留めの刀覺悟しろ。

トかさい念佛にて少し立廻りあつて切倒す。此の時赤兒の聲し、赤兒疵口より產れ出る。

何だ〳〵赤兒か、疵口から產れ出たか、ドレ〳〵抱いてやりませう。然し此奴が成人して、敵なんぞと云はゞ面倒、ひねり殺してくれようか。

〽云へば死したる賤機が、一心通じて起直り、血にまみれたる手を合せ、拜む折からはるかに人影。

アヽ向うに見ゆるはたしかに文藏、裏道傳ひに、オヽさうだ。

〽赤兒を投捨て赤星大八、刀を鞘へ藪疊、押分けてこそ落ちて行く。引違へて駈來る文藏、提灯てらして死骸につまづき、

文藏　ヤア〳〵〳〵、奥樣には數ケ所のお手疵、最早ことは切れはてたか、チエ、殘念や遲かりし、扨

は最前の兩人は、盜人にてありけるよな、後追駈けて、オヽさうぢや。

〽馳行かんとなす向うより、

ト行列三重になり、花道より鳴澤隼人、左門之助旅なり、大小、箱提灯を持つて出ろ、

隼人　ヤア、旦那樣でござりまするか。

文藏　オヽ、そちや文藏、いかゞ致した。

隼人　ハア、その仔細は、オヽさうぢや。

ト腹切らんとする。左門とめて、

左門　コリヤ文藏、何故あつて。

文藏　ハア、申譯がござりませぬ。

隼人　如何の儀ぢや、仔細を申せ。

文藏　ハヽア、仔細は長き事ながら、あなた樣のお出迎ひに奥樣が御出の處、俄にお產の御惱、如何はせんと思ふ折から盜賊どもにはかられて、醫者を賴みに參りし後、情なや奥樣には。

隼人　如何致した。

文藏　盜賊の手にかゝり、あへなくお果て遊ばしました。

左門　ヤヽなんと、母上樣にはおはてなされしとや、ハヽア。

　　トびつくりして當惑の思入。

文藏　それ故に、此の場にて。（ト又刀へ手をかける。）

隼人　コリヤ狼狽者めが、今其方が切腹なすとも、死したる妻が蘇生すべきや、敵の面體覺えあらば、その敵を討つてなぜ手向けぬ、犬死なすか、たはけ者めが。

文藏　ハヽア敵を討てとのお詞は、冥加に餘り有難う存じまする。

左門　シテ母人の御亡骸は。

文藏　即ち向うの山蔭に。

隼人　サヽ、案内致せ。

文藏　ハヽア。（ト三人本舞臺へ來り、）

左門　親人、御免下さりませう。

〽文藏が案内に死骸の傍へ立寄つて、一目見るより涙に沈み、

コリヤむごたらしく母上を、エヽ殘念や遲かりし。

〽立つたり居たり狂氣の如く。

文藏來やれ。(ト行きかゝる。)

隼人 コリヤ待て悴、何處へ行く。

左門 敵の面體知つたる文藏、彼れを召連れ盗人の、後追駈けて母の敵。

隼人 ハテ汝も亦たはけた事を。かゝる事をなす者が、こゝらあたりにうか〳〵と、汝が來るのを相待ちをらうや、急く場所でない左門之助。

〽とゞむる折から赤兒の泣聲。

やゝ、赤兒の泣聲は。

左門 たしかに母の御身のほとり。

〽文藏手早く賤機が、袖引きちぎつて押包み、隼人が前へ連れ來れば、

ト隼人指を折り思入して、

隼人 我が出立のその折に、たゞならぬ身になりしよし、數へて見れば九月。

左門 おんいたはしや疵口より、

文藏 生れ給ひしこの嬰兒、

隼人 シテ、男子か女子か、

文藏　玉のやうなる御男子でござります。

隼人　ハア、産れながらに母には別れ、果報つたない者ぢやナア。

トバタ〳〵になり、侍一人花道より駈け出て、

侍　申上げまする。

隼人　あわたゞしい、何事ぢや。

侍　只今御部屋の高窓殿、掛川驛の御本陣にて、御出産でござりまする。

隼人　フウ、それは重疊、シテ若君なるか、姫君なるか。

侍　ハア若君樣にござりまする、それ故火急の御道中ながら、今宵金谷のお泊りは、俄に掛川のお泊りに相成りました。

隼人　オヽ承知致した、追付御祝儀に罷り出でん、早く行け。

侍　ハヽア。（ト引返してはひる）

文藏　扨はかの高窓殿には、御懷妊なるにより、廓の根引きなされしならん、それとは知らず種々のよからぬ噂に賤機樣、御案じなされて禍を、御身に受けさせ給ひしか。

〽思へばはツとふさがる胸。隼人親子もとも〴〵に、暫し愁ひに沈みしが、隼人は赤兒を抱

上げて、

隼人　殿様といひ我ら迄、今宵はからず男子を出産、アヽ歎きの中の喜びぢやなア。(ト思入)コリヤ左門之助、賤機が亡骸はこのほとりの寺院を頼み、假葬を致しおけ。

〽はツと答へて左門之助、文藏とも〴〵泣く〳〵も、母の死骸を旅駕籠の、中へかき入れ舁き上げさせ。

左門　左様なれば、親人様。

隼人　オヽ悴、よう回向を致せ。(ト此時赤兒泣く、)オヽ泣くな〳〵。

〽ゆすぶりながら別れ行く、足も愁ひと喜びと、一足づゝに後や先、心は千々に鳴澤隼人、掛川さして急ぎ行く。

ト此の模樣よろしく、三重の送りにて　　幕

(返し大井川の場)――本舞臺平舞臺、正面波の遠見、前面にも波幕張りあり、蓮臺にて川を越す事あり、すべて東海道大井川の體。波音にて幕あく。

ト直に淨瑠璃になり、

〽名にひゞく、水音高き大井川、宵闇暗き川端に、息せき來る赤星大八。

大八　コウ／＼若い衆、急ぎの用で越さねばならぬが、何と出してはくれまいか。

川越　オヽ合點だ、夜川は豫て法度だが、酒手次第でやりますべい、一貫づゝ下せえやし。

大八　オヽ承知々々。ソレ一貫。（ト一貫やる。）

川越　コリヤアもし、一人前だね。

大八　なぜ／＼、一人で越すのに、一人前は當り前だ。

川越　旦那、御常談ばかりおつしやる、お連の分も下せえまし。

大八　何だ連の分、何の連があるものか。

川越　一緒に來いと云ひなすつたから、何處迄も附いて行くと、お前の傍につらまつてゐるものを。

大八　ヤア。（ト薄ドロになり、賤機の幽靈出る。大八震へる。）エヽ、來ねえでもいゝ事を。（ト思入。）サア、
もう一人前たしかに渡すぜ。

川越　サア、そんならお出でなせえ、然しこの女中衆がお前の傍を離れるのが、厭だと云ひなさるから
大きな蓮臺で相輿に致しやせう。

大八　どうでもいゝから早くしろ。

川越　サア／＼、お乘んなせえ、何だかこの女中は顔色が蒼白で、氣味の悪い女中だナア。
大八　ア丶、コウ／＼、女の事は云つてくんなさんな。サア／＼早く賴む。
ト波の音になり、すごき合方。
川越　サア／＼、深いぞ／＼。
川〇　でえぶ空が變つて來たぜ。
川△　さういふ中もう降つて來た、そりやあさうと、今朝この川へはひつた、伊勢參りの孕み女は、ありや大方流されたらう。
川□　さうよ、此頃は川瀨が早く、大方土左衛門になつたらう。
大八　そりや可愛さうな事をしたなア。
〽話の折から俄の大雨、砂石を流し川音ひゞき、闇の夜にひらめく陰火、コハ不思議傍にありあり賤機が、血まみれなる立姿、さも恨めしげなる聲音にて。（ト兩窓をおろす、）
賤機　可愛さうだといふ事を、こなたは知つてゐやるかや。
大八　ヤア、わりやさつきの女め、扨は一緒に附いて來たか。
賤機　オ丶、一緒に來いといやつた故、どこ迄も附きまとひ、取殺さいでおかうか。

大八　エヽ執念深い女めだなア、うかんでしまへ。

ト刀を抜いて切拂ふ。大ドロになり、幽靈消える。これにて兩窓をあける。

川越　ヤア、明るくなつた。

大八　ソレ、やつてくれ。

川越　オヽ合點だ。深いぞ〱〱。

トよろしくあつて淺黄幕をふりかぶせろ。馬方八藏お六を乘せて出來り。

八藏　サア女中、此處迄が定めの所だ、サア下りてくんなせえ。

お六　アイ〱、抱いて下ろしておくれな。

ト下りかゝる拍子に、金包を落す。

八藏　ヤア、コリヤ金。

ト取りにかゝる。

お六　どつこい、それを。

ト爭ふ内、禪の勤めになり、槍持定助駈けて來り、思はずちよつと當つて、見得よりダンマリになり淺黄幕を切つて落し、兩窓をおろす。正面波の遠見、民家の火入になり、よろしく、

ひやうし　幕

七幕目

三島驛喜瀬川屋の場
同　塀外の場

〔役名――三島お仙實は人丸お六、富士ヶ根左九郎、喜助實は朝霧島藏、荒浪主税、原文藏、猫間中將光義。新造曙等。〕

（喜瀬川屋の場）――本舞臺常足の二重、後ろ惣暖簾。下手用水桶。すべて三島驛喜瀬川屋の體。跡り地にて、よろしく幕あく。

喜助　モシお仙さん、今宵の首尾は。

お仙　惡くもねえ、七八番の仕事はしたよ。

喜助　モシお六さん、段々お前のお骨折で軍用の金も調ひ、天日坊樣明朝は此處を御通行にて、鎌倉へお下りの由、まつた猫間中將光義樣の御在所も相知れて、今宵はこの二階迄忍んでお出である筈なれば、この朝霧島藏とお前と二人お供して、ひそかに鎌倉へ伴へと、伊賀之助殿より御文通、委細はこれに。（ト文を出し、お六に渡す。）

お六　ムヽ、スリヤ夫伊賀之助殿よりの文通とナ。（ト文を讀んで思入）この手紙の樣子では、今宵の内に此家を拔出で、光義樣のお供して鎌倉へ行くとある。そんなら今宵、朝霧島藏。

喜助　畏りました、まづそれ迄は我らは喜助。

お六　このお六もやつぱりお仙、アヽそれにつけても心の知れぬは富士ケ根左九郎、この頃度々こゝへ來て私を口說く橫戀慕、一味の連判してゐながら戀をしかけて心變りか、但し私の心を引くのか何にもせよ合點の行かぬ左九郎が心の底、試してみるも今宵の內。そんなら朝霧、光義樣のお出でもあらん、人知れず。

喜助　心得ました。

ト踊り地にてはひる。これにて此の道具廻る。

（部屋の場）――本舞臺平舞臺。後ろ中障子、舞臺前手摺り、上手に六枚屏風あり。下手に段階子、手摺りおきあり、二階のこゝろ。名古屋名物にて道具とまる。と獨吟になり、光義宗十郎頭巾、黑羽織衣裝にて、下より喜助案内して出て、

喜助　モシ旦那、こゝがお仙さんの部屋でござります。

ト内へ向ひて、

モシ、旦那のお出でござります。

ト内にてお六の聲にて、

お六　オヽ、よく來ておくれだ。嬉しかつた、喜助さん御苦勞。（ト思入。）

喜助　そんならしつぽり、お仙さん、たんとお樂しみなさいましよ。

ト踊り地にて二階を下りる。此時左九郎窺ひ〳〵忍び入る。此内お六光義を上座へ直し、合方になり、

光義　コリヤ掛橋、外に誰も人はなきか。

お六　外には誰も白波の、身過ぎ世すぎも若殿のお爲故恥かしきこの姿、お許しなされて下さりませ。

光義　シテ、伊賀之助にも、變りなきや。

お六　ハヽア有難きそのお尋ね、猫間中將光義樣、思ひもうけぬ今宵のお入り、夫が文に承りお待ち申して恙なき、御顏を拜し奉り、いかばかりかお嬉しう存じまする。

光義　ホウ掛橋、そなたも無事で身に於ても滿足致す。先達て伊賀之助がそれがしを一味の者の總大將にせんものと、勸むる忠義は感じ入れども、上に對して弓引かん所存はかつてあらざれば、我は出家を志し、鈴鹿山をひそかに落ち普化宗門の徒弟となつて世を忍びゐたる所、再び袋井の宿

はづれにて追手に出合ひ難儀の折から又伊賀之助に助けられしが、その時花園と孫右衛門の兩人を見失ひ、朝夕心にかゝるにつき、一度鎌倉へ下りて兩人が行方尋ねんと、天日坊殿の同勢の中に加はり、この宿迄落ちのびて來りしが、猶も詮議の嚴しければ、今宵はこの二階に忍び汝と共に下るべしと、伊賀之助が申すにより、これ迄は來れどもかく詮議嚴しければ、とてもこの世に存らへ難き此の身、すみやかに生害なして、追手の難を脱れんと思ふぞや。花園が行方は掛橋頼む。オヽそれ。（ト切腹しようとするをお六とめて、）

お六　是れはしたり光義樣、あなたが甲斐なきお心故、夫が忠義も水の泡、猫間のお家を立てんといふ、お志しのなきからは、君より先へ、オヽ、さうぢや。

光義　アヽコリヤ、掛橋、必ず短氣を出すまいぞ。

お六　そんならあなたも御生害、留まり給ふか。

光義　サア、それは。

二人　サア〱〱。

お六　ちつとは家來の云ふ事も、聞いてくれたがよいわいなア。（ト泣く、思入あつて、）

光義　その恨みも尤も至極、然らば思ひ留まつて、

お六　思ひ留つて下さりますか、アヽ嬉しや、それで落ちついた、そんなら暫しあの一間で、夫の指圖のある迄は、お待ちなされて下さりませ。

光義　然らば掛橋、萬端よきに。

お六　イザ、入らせられませう。

ト獨吟の切にて光義を忍ばせる。左九郎ずつと出て、

左九　イヤなにお仙さん、イヤサお六さん、この間から度々に心のたけを割つて口説けど、いなやの返事もないといふは、そりやお前あんまりだ。今宵は是非にお六さん、色よい返事を聞かにやアならぬえ。

お六　エヽ又しても〳〵、あぢやらも大概にしやしやんせ。

左九　イヤあぢやらではない、眞實だ、是非に色よい返事を頼むぜ。

お六　エヽけがらはしい何事ぞ、賤しい勤めはしてゐても伊賀之助といふ夫のある身、言はゞそなたは家來同然、主に向うて慮外であらうぞ。

左九　ムヽ、スリヤどうあつても。

お六　なんの、そなたに。

左九　ムヽ、もうさう聞いちやァ此方も意地づく、手荒い事をしても靡けて見せる、なんの慮外もすさまじい。コレ、もうちつと慮外をしてみせう、コリヤかうするが何とする。（ト踏み据ゑる）サアこれからは往生づく、厭と云やァ奥の間に忍ばしてある中將光義、代官所へ訴人する。

お六　ムヽ、先刻にからの樣子は殘らず。

左九　オヽ聞いた、知つてゐる。訴人をせうか。

お六　サアそれは。

左九　うんと云ふか。

二人　サア／＼／＼。

お六　ムヽ、そんならそなたは連判の、一味の中へ入りながら、

左九　オヽ心變りだ變心だ、そこが戀は思案の外。コレお六、きり／＼返事はトヾどうぢや。

お六　さう聞いては夫の大事、コリヤこの儘にはおかれぬわえ。

ト光義の刀を持つて來り、唄入りの鳴物にて立廻り。

左九　ヤア、人殺し／＼。

トいふを口を押へ、ねじ伏せる。

光義　ヤアお六か、それなる者は何故あつて手にかけしぞ。

お六　此奴は味方の者なれど、約定を反故にして我君の御身の上、訴へんとなせし故餘儀なく手にかけましたわいなア。

ト　バタ／＼になり、新造曙駈けて來り、この様子を見て、

曙　ヤア、お仙さんが人殺し／＼。

ト云ひながら逃出すを、入れかはりて刺通し、左九郎の死骸へ重ねてにつこり思入。

お六　かうしておきやア二人は心中。

光義　いかさま、流石は人丸。

お六　我君には今暫く、以前の一間にお忍び遊ばせ。

光義　然らば合圖を、相待たん。

トはひろ。お六は客の床へ行く思入にて、次の部屋をモシ／＼と起す。客は寢ぼけし顔をして出來り、上の着物を脱ぐと、下は黒四天捕手のこしらへにてかゝる。これより八方より、大勢の客上着を脱いで黒四天になり、十手にて打つてかゝり、お六と立廻りよろしくあつて、きつと見得。これにて此の道具廻る。

（塀外の場）——本舞臺通しの黒塀、二階前障子、この前忍び返し、下手に見越しの松。すべて喜瀬川屋裏手の模樣、踊り地にて道具とまる。とバタ〳〵になり、荒波主税、原文藏廻し合羽、笠を被り、左右より出て突當り、合羽を脱ぎ捨て、十手を口にくはへ、繩さばきの見得になる。三つ太鼓になり、二階の格子をめり〳〵とこはし、お六素網のこしらへにて出て、きつと見得。これより文藏主税兩人を相手に屋根の上の立廻り、捕物の立廻りあつて、よろしき見得にて、

ひやうし　幕

八幕目　（江戸）大江屋敷詮議の場

〔役名〕——天日坊實は清水ノ冠者義高、下男久助實は大江因幡頭廣元、赤星典膳、盜賊朝霧の峰藏、平岡平藏、若黨雲平、近習、捕手等。〕

（大江門前の場）——本舞臺上手へ寄せて冠木門、上手出はひりの潛り門、左右海鼠壁、臼窓の屋敷長屋、總て大江廣元門前の體。上手に平藏、下手に足輕二人控へてゐる。此の見得、時の太鼓にて幕明く。

平藏　唯今打ちしは八つのお太鼓、最早品川表より天日坊殿お入りの刻限、この程竹川伊賀之助、赤星

典膳兩人より一應のお調べ相濟み、今日こそは御落胤の御證據並びに御成長の御身許調べ、主人大江廣元公一世晴れの御大役、事なく御詮議相濟むまで、非常を守る拙者が役目、其方どもゝ、心を附けて、御門外の警護致せ。

足輕　畏つてござります。

平藏　(向うを見て)噂をすれば影とやら。彼方へ見ゆるは赤星典膳、幸ひこれにて出迎ひなさん。そち達もそれに控へよ。

足輕　はッ。

卜平藏は上手、足輕は下手へ控へる、時の太鼓になり、花道より典膳上下大小、雲平袴股立にて附添ひ、峰藏紺看板見すぼらしき中間裝にて無心を言ひながら出る。後より中間二人附きて出來る。

峰藏　もし、いくらかくらとは言ひませぬ、どうぞ合力をして下さりませ。

雲平　やい〳〵こいつがお旦那へ向つて、強請などゝ下りをらぬか。

峰藏　えゝわれが知つたことぢやあねえ、典膳樣に借りるのだ。

雲平　まだ〳〵申すか、無禮者めが。(卜立ちかゝらうとする。)

典膳　こりや〳〵、雲平待て。

雲平　はッ。(ト控へる、典膳峰藏へ思入あつて)
典膳　合力致し遣はさう、あれへ參れ。
峰藏　へい、どこまでも參ります。
平藏　(出迎へて)これは〱赤星典膳殿にはお先のお役目、御苦勞千萬に存じまする。
典膳　おゝ平岡平藏か、出迎ひ大儀。
平藏　はッ、(ト辭儀をなし、典膳は上手へ通る。)して天日坊殿には、最早御尊來にござりまするか。
典膳　いかにも、程なく御入りなれば、御座の間の用意めされ。
平藏　畏つてござりまする。
峰藏　(下手にて)もし、どうぞ早く分けて下さりませ。
雲平　やあ、又してもづか〱と、默りをらう。
峰藏　えゝこのさんぴんめ、又四文と出やあがるか。
雲平　何を。(トきつとなる。)
典膳　こりや〱、兩人ともに控へい。
峰雲　はッ、(ト控へる。)

平藏　卒爾ながらあの者は、何者にござりまする。

典膳　さあ、彼は以前召使ひし權助と申すもの。

峰藏　えッ(ト思入。)

典膳　(目交なして、)下部でござる。

平藏　お召使ひでござりますか。(ト不審の思入。)

典膳　いやなに平岡氏、身者此の者に用談あれば、其許には御入りの趣き廣元殿へ傳達召され。

平藏　畏つてござりまする。

典膳　さゝ、早く〳〵。

平藏　左樣なれば、後刻御意得ませう。(ト思入あつて足輕附いて潛門へはひる。)

典膳　こりや、雲平始めその方共も、堀際にて供待致せ。

雲平　でも、お旦那さまばかりを。

典膳　はて、苦しうない、參れと申すに。

雲平　はッ。(ト雲平先に中間附いて下手へはひろ。典膳あたりへ思入あつて、)

典膳　朝霧の峰藏、これへ來やれ。

峰藏　親方、もういゝかね。

典膳　だいじないわい。(ト峰藏典膳の傍へ來て尻を捲りしやがみゐる。)いやその方も氣の利かぬ、何故合力が受け度くば、身共が旅宿へ參らぬのだ。

峰藏　參らぬどころか此間から幾度行つたか知れねえが、やれ御用だの留守だのと追返されたが忌えましく、今日は是非とも逢はうと思つて、そこで途中に待つてゐたのだ。親方、ちつとばかり貸してくんなせえな。

典膳　おゝ、貸せなら隨分貸してもやらうが、手前もいつがいつまでも、そんな態をしてゐずと、天日坊殿に從つて、二本差す氣はねえか。

峰藏　いや、二本差しは眞平だ。長い物を突ッさして、しやちこばつてゐるより、年中下馬一枚でも飮みてえ時にはかッ喰ひ、打ちてえ時には打つのが樂しみ、その打ち棒を典膳樣、どうぞ貸して下さりませ。

典膳　あゝこの人にして此の病ひあり。(ト言ひながら小判を五兩出し、紙に包んでやり、)それ、以前の誼だ。

峰藏　(明けて見て、)もし、たつた五兩かえ。

典膳　五兩で不足だといふのか。

峰藏　不足か不足でねえことは、お前も以前は苦勞人だ、知れさうなものぢやあねえか、長い短い言はねえから、五十兩貸して下せえ。（トずつけり言ふ。）

典膳　貸すことはならねえわ。

峰藏　何故ならねえ。

典膳　五兩たりとも合力なすは、此身の以前を隱さう爲め、それを附込み不足呼はり、達つてと言はゞ刀の錆だぞ。

ト刀の柄へ手をかけきつとなる。峰藏わざとびつくりして、

峰藏　あゝこれ、待つて下せえ〳〵、金に命が替へらるゝものか。もう〳〵こなたに金は借りねえ、怖いこと〳〵。（トわざと怖るゝ思入、典膳刀の柄へかけし手を放し、）それなら命に恙のねえ内、命を貰つて歸らうかえ。（ト思入あつて、門の方へ行かうとする。）

典膳　こりや待て朝霧、何れへ行く。

峰藏　廣元樣へ訴へて、褒美の金を貰ふのだ。

典膳　むゝ、すりやわれが身の上を。（ト刀を拔きかける。）

峰藏　知れたことだ。

ト　きつといふ、典膳思入あつて、シャンと刀を納め、

典膳　五十両貸してやらう。

峰藏　何と。

典膳　それ。(ト袱紗包みの金を投り出す。)

峰藏　間違えはねえかえ。(ト中を改めて見る。)

典膳　あゝ、われも悪事は根づよい奴だ。

峰藏　親分、お前を見習つたのだ。

典膳　おきやあがれ。(ト世話に言つて氣を替へ、)またも困らば我旅宿へ。

峰藏　なくなつたらば参りませう。

ト金を懐中する。此の時門の内より平藏出來りて、

平藏　はッ、典膳殿へ申上げます、天日坊殿御入りなき内、設けの御座所を御内見下さりませう。

典膳　おゝ承知いたした。

平藏　いざ、御案内仕りませう。

典膳　(峰藏へ思入あつて、)こりや權助。(ト峰藏知らぬ顔してゐるので、きつとなつて、)權助。

峰藏　へゝい。（トつくばふ。）
典膳　早く歸れ。
峰藏　畏まりました。
典膳　どりや、內見致さうか。
　　　ト唄になり、典膳、峰藏へ思入あつて平藏附いて門の內へはひる。峰藏見送りて、
峰藏　惡事にかけちやあ拔目のねえ名うての赤星大八故、どうで素手ぢやあ行くめえと、今日天日坊が調べを幸ひ、身許をたゞす廣元の屋敷前を道具に使ひ、貸さにやあ直に訴人をすると、威しをかけて強請つたこの金、なるほど惡いことにやあ智慧の出るもんだ。
　　　ト懷より金を出して思入、此內後へ平藏足輕兩人窺ひゐて、
平藏　それ、召捕れ。
足輕　はツ。捕つた。（ト兩人峰藏を捕へて引据ゑる。）
峰藏　こりやあ、私を何とさつしやります。
平藏　何とするとは知れたこと、詮議がある故搦めとるのだ。
峰藏　南無三、こいつはたまらぬ。

平藏　それ、繩をかけい。

ト兩人を振拂ひ、逃げようとするを平藏附廻して當てる。峰藏倒れる。

足輪　はツ。

ト峰藏に繩をかける、この時向うにて大勢の聲にて、「下にをらう〳〵」と聲する。

平藏　最早天日坊樣のお入りと見ゆる。（ト言ひながら峰藏に活を入れると心附き、）

峰藏　やあ、こりや喰ひこんだか。

平藏　引立てい。

足輪　はツ、立たう。

峰藏　えゝ忌えましい。

ト平藏先に皆々門へはひる。これにて道具廻る。

（廣書院の場）――本舞臺三間中足の二重屋體。正面銀地大紗綾形の襖。上手下手とも杉戸の出入り、總て廣書院の體。こゝに近習○△の兩人麻上下にて左右に控へゐる。

○　今日ツたの御詮議は御落胤の證據たる、賴朝公のお墨附並に小鍛治宗近の短刀、右二品の御改め

△ まつた御幼少より今年まで、御成長ありし御身許調べ。
○ 最早先番の侍たる赤星典膳入來なせば、
△ 天日坊殿の御入りにも、さのみ程もござるまい。
トばた〳〵になり、花道より侍一人走り出來りて、
侍 はツ、申上げまする。
○ 何事でござる。
侍 唯今品川の御旅館より天日坊殿の御入りにござれば、お取次お願ひ申しまする。
兩人 承知いたした、
侍 はツ。(ト引返して花道へはひる。ト奧にて御出席と呼ぶ。)
兩人 はツ。
ト兩人辭儀をなす。時の太鼓になり正面の襖を左右へ開くと、廣元立烏帽子大紋にて出る。後より侍
小姓等附添ひ出る。
○ 御前樣には今日の御役目、
△ 御苦勞千萬に存じ奉りまする。(ト辭儀をなす。)

廣元　おゝ、天日坊入來なせしとか。

兩人　はッ、御意にござりまする。

ト向うにて「天日坊殿の御入り」と呼ぶ、と花道より小姓墨附の入りし箱を三方に載せて持ち、他の小姓短刀の入りし箱を三方に載せて持出で、續いて天日坊、着附、直綴、白の長袴、中啓を持ち、後より典膳、侍四人附添ひて出來り、天日坊は上手に立ち、典膳は下手へ控へる。

廣元　これは〳〵天日坊殿には、ようこその御入來、お下にあつて御休息召れ。

ト天日坊廣元の顏を見て久助と思ひ、びつくりして、

天日　や、そちは。(ト扨はといふこなし。)

廣元　大江因幡守廣元にござる。

天日　む、座が高い、下れ。

廣元　いや、下り申さぬ。

典膳　なに、下らぬとは。

廣元　役目故上席仕る。

典膳　やあ、假令いかなる役目にもせよ、當時將軍賴朝公の御落胤たる天日坊殿、高座の無禮下りをら

う。

廣元　いや將軍の御落胤故、この席は下り申さぬ。

天日　とは又何故。

廣元　鎌倉殿の嚴命にて關東八ヶ國の政治を預かる大江因幡守廣元、今にもあれ近國の謀叛峰起の輩あらば、采配取つて指揮なす某、その身は輕き廣元ながら重き役目を蒙むる中は、卽ち右幕下頼朝公同然、まつた天日坊殿には未だお調べは相濟まねど、御落胤とあるからは頼朝公の御嫡子ならずや、子として親の上席なす作法はよもやござるまい。

天日
典膳　むゝ。

廣元　役目故上席なす、この廣元が誤りなるや。

兩人　さあ、それは。

廣元　よも誤りではござるまい。

　　　トこれにて天日坊典膳顔見合せ、無念の思入あつて、

天日　むゝ、父の名代とあるからは苦しうない。

廣元　然らば、それにてお下にござれ。

兩人　むゝ。（ト兩人顏を見合せ、天日坊座に着く。）

天日　して今日ッた當館へ予を招ぎしは、いかなる仔細ぞ。

廣元　斯く御尊來を願ひしは、賴朝公の台命により、御落胤の證據の二品、且は御誕生この方何れにて御成長ありしか、事の次第を伺はん爲め。

天日　おゝ、何なりとも相尋ねよ。

典膳　逐一これにて答へ申さん。

廣元　承はるでござらう。まづ第一に承はらんは、何れにて御誕生ありて、斯く御成長はされしぞ。

天日　予が生立は元達伊賀之助より申せし如く、父賴朝伊豆ノ國祐親が許にありし時、母は澤邊と名を呼びて腰元なりしが、竊に語らひ父の胤を身に宿し、證據に賜はる墨附短刀、其の後故鄕へ立歸り產落せしは斯くいふ天日、母はその折果敢なく歿り、由緣の者が養育なせしに石橋山の一戰より予を伴ひて伊豆を立退き、美濃國長洞なる常學院の門前にて、旅路の勞れこれも死去なし、予は同寺へ助けられ弟子となりて成長なしぬ、然るにその後星霜經て、十五歲となりし時住職天道病に冒され、既に命も旦夕なりし重き枕邊へ竊に招き、御身はかゝる尊き素性と證據の二品取出し、予を伴ひし由緣の者が今際の話を具に告げ、我は沙門の身の上故斯かる事を言出でなば慾に

迷ひし賣僧などゝ世の人口も計り難く、故にこれまで包みしが最早命數に限りあれば、我なき後は鎌倉へ訴へ出よと言終り、ついに空しく相果てたり、それより五年がその間諸國を廻り臣下を求め、此度東へ下向に及ぶ、予が生立より成長のあらましは斯の通り。(ト思入にていふ。)

廣元 ほゝ、御誕生ありしより御成長の趣き逐一承知仕る。不審なるは常學院天道が包みし內は兎も角も、賴朝公の御落胤と素性知れたるその後に、五ヶ年が間等閑になし何とて鎌倉へ訴へ召れぬ。

典膳 その儀は典膳言上なさん、君が師とせし常學院は卽ち拙者が舍兄故、重緣によつて家臣となり、鎌倉表へ訴へ出でんと御還俗をお勸め申せしに、佛門修行にお心委ね、假令將軍の落胤にもせよ一旦佛に仕へしからは還俗なぞとは思ひもよらずと、御承引無之故據なく、そのまゝ五ヶ年が間延引せり。

廣元 さほど還俗の志しなき佛門修行の御身にて、東へ下る道中筋常に帶劍めされしは、近頃もつて心得申さず。

天日 佛門修行の身なればとて、帶劍なさゞる事あらんや。既に山門の衆徒は、いで禁廷に事ある時は鎧を着し太刀を佩き、表に武門の威を現はせど心に佛門の敎へを守る。予も賴朝が落胤故表に武門の帶劍をなすとも、心に佛門の十戒を保てり。

廣元　その十戒を保つ御身で、道中筋の行列に弓鐵砲の飛道具をいかめしく持たせしは、殺生戒を破るに似たり、十戒具足とは申されまい。

典膳　弓鐵砲を持たせしは我君には御存じなきこと。伊賀之助と某の計らひにて持たせたり。君は當時將軍たる賴朝公の御落胤大切なる御身故、今四海靜謐とはいへど、平家の殘黨木曾の餘黨こゝかしこを徘徊なせば、これらを威さんその爲めに飛道具を用ひたり、これ主を思ふ臣下の忠義、よくこそ心附きたりとお褒めこそあるべきに、不審をたつるは廣元殿とも思はれぬ一言、かたはら痛く存じ申す。

廣元　してまた無官の身を以て、多人數の同勢を召連れしはこれ如何に。

典膳　それも唯今言ひし如く、御落胤の御身を大切に多人數を伴うたり、まつた天日坊殿を無官とはいかゞぞや。右近衞の大將たる賴朝公の御嫡子なれば、生れだちより宰相の官位は御身に備はりある故に千人の供奉を伴うたり。

廣元　すりや宰相の官位ある故、多人數を伴ひしとか、然らば天日坊殿へ廣元お尋ね申し度きは、大納言と宰相の官位とは、どちらが上にてござる。

天日　（嘲笑ひながら、）こは廣元には血迷うてか、いかに東の武士とて官位の高下を辨へなきか。納言は

大臣につゞき、宰相は中將に續く、遙かに劣る下官なり。

廣元　大納言と宰相の官位の違ひを御存じあらば、何とて聖護院の宮一品親王の乘輿に用ふる、飴色網代の乘物には召されしぞ、

天日　とは又何故。

廣元　さればとよ、一品親王の御沓を執るは大納言ならでは叶はぬ由、その沓さへも執ることならぬ宰相の御身にて、飴色網代の乘物を何故あつて用ひられしぞ、その御返答が承りたい。

　　トきつといふ。天日坊典膳と顔見合せて嘲笑ひ、

天日　いやなに典膳、大江因幡守は才智勝れ、發明な者ぢやと聞きしが、見ると聞くとは大いな相違ぢやな。

典膳　何さま、今鎌倉殿中にて秩父大江と言はれながら、辨へなきと見えまする。

廣元　なに、辨へなきとは。

天日　一品親王の乘輿に用ふる飴色網代を辨へをるか。

廣元　さ、それは。

天日　よもや辨へはあるまいな。

廣元　さあ。

天日　辨へなくば言ひ聞けん、後學の爲め承はれ。そも聖護院の宮は禁廷のお控へにて、御跡目これなき時は十善の御位に上る、又御一代一品の御位にて終りたまふ御方あり。故に他宮方と違ひて御身の上定まらず、降りみ降らずみ時雨にかたどり聖護院の宮に限り、飴色網代を用ひられたり、これ位によつて川ふるにあらず、予も亦頼朝の落胤ながら、源家の世取りと相成るか、又は連枝の身分となるか、降りみ降らずみ定めなき天日坊が身の上故、飴色網代を用ひしは、よも誤りではあるまいが。

廣元　さあ、それは。

天日　たゞし、予が誤りなるか。

廣元　さあ。

典膳　批判を打つか。

廣元　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵。

天日 返答聞かん、大江ノ廣元。

ト きつといふ、廣元思入あつて、二重より下りて平伏し、

廣元 はゝ、詳細なる御答へ、一言半句の申しやうなし、恐入り奉りまする。此上は御落胤の御證據の品、廣元へ拜見仰せ付けられませうならば、有難う存じ奉りまする。

ト 平伏する、兩人はしめたといふ思入あつて、

天日 いかにも望みに任せ、拜見させん。典膳よきに計へ。（ト言つて二重へ上り眞中へ座る。）

典膳 畏つてござりまする。（ト上手へ來り、箱より墨附、短刀を出し箱の蓋の上へおき墨附を開き見せ）これぞ證據の卽ち墨附、（ト廣元とつくり見て拜をする、典膳又短刀を取つて、）三條小鍛冶宗近の短刀。

ト 見せる。廣元これを見て拜をする。典膳は元の如くに仕舞ふ。

廣元 はゝ、賴朝公の御墨附、三條小鍛冶の御短刀、御落胤の御證據相違ござらぬ。かゝる正しき御身をば、台命とは申しながら御疑ひ申せし段、その罪輕からず、この申譯には此の場におき廣元切腹仕りいたし、御許容願ひ奉る。

典膳 むゝ、さすがは大江ノ廣元殿、切腹とはよいお覺悟、君にも御許容あらんほどに、とく〳〵用意いたしてよからう。

廣元　委細承知仕る。

天日　あいや、切腹には及ばぬ。

廣元　や、

典膳　折角大江が覺悟なせしを、なぜ我君にはお留めありしぞ。

天日　さあ、斯く予が身許を詮議なすも、元より父の命にして、正しからざる者にてあらば、源家の恥辱と相成る故、一命かけての此の詮議は父に對して大忠臣、やがて斯くいふ天日が源家の世取りと相ならば、予が臣となる大江ノ廣元、萬卒は得易く一將は得難し、惜しき忠臣のその方に、いかで切腹申附けんや、死する命を存へて猶も忠勤勵みくれよ。

ト典膳に呑み込ませていふ、廣元平伏して、

廣元　はッ有難き御懇の御意、恐多きことながら、さすがに源家の御正統、御仁惠のほど感服仕つてござりまする。

天日　おゝ予もそちが忠義には、ほとんと感心致した。

廣元　恐れ入り奉りまする。

典膳　御身許調べ相濟む上は、最早君には御歸館あつて、然るべう奉じまする。

天日 おゝ歸館致すであらう。

廣元 あいや、御歸館の儀は暫く御猶豫下さるべし、不束ながら拙者が手前、粗茶一服差上げたう存じまする。

天日 予も茶道は好の道故、手前もさこそ、賞玩なさん。

廣元 左樣ござらば奧殿へ、

典膳 御案内いたされよ。

廣元 畏つてござりまする。

天日 然らば廣元。

廣元 君には先づ、

皆々 いらせられませう。

ト管絃になり、天日坊先に典膳、廣元、小姓、侍附いて奧へはひる。これにて道具廻る。

(奧殿の場)――本舞臺三間の間中足の二重。正面床の間違ひ棚。上手に附屋體、一面に塗骨の障子を開きあり、下手枝折門、折廻して綺麗なる網代塀、總て奧殿の體。こゝに○△の中間二人番手桶箒を

持ち掃除をしてゐる。

○　風が吹くと紅葉が散るので、掃く傍から埃になる。
△　紅葉（猪肉）と言やあ、もう數寄屋河岸へ股ッたぶが出かけたぜ。
○　これからは彼奴の世界だ、掃除をしまつたら切合で行かう。
△　さう聞いちやあ、葱の匂ひがぷん〳〵と匂ふやうだ。
○　意地のきたねえ奴だ。

ト掃除をしてゐる。上手より侍二人出來りて、

侍一　こりや〳〵下部でも、唯今この御數寄屋へ天日坊殿の御入りなるぞ。
侍二　掃除をしまつたら、早くまゐれ。
○△　畏りました。
侍一　いやなに藤吾殿、今日の御詮議は定めて主人の御手柄と、思ひのほかな儀ではござらぬか。
侍二　さればでござる、一々先方へ先を取られ、日頃に似合はぬ殿の御不覺。
○　はゝあ、そんなら今日の御詮議は、
△　殿樣が負けさつしやつたか。

侍一　え〻、下として上のお噂、掃除をしまつたら早く立て。

○△　へ〻い。（ト兩人下手へはひる。）

侍一　いや、御詮議の樣子をば、平藏殿へ申さうではござらぬか。

侍二　いかさま、嘸待ち兼ねてござらう、さあ御同作仕らう。

ト兩人上手へはひる。時計の七つを打つ音して、正面の障子を左右へ引いて取ると、上手に天日坊物思ひのこなし、下手に典膳悦喜の思入にて控へゐて、あたりを窺ひ、

典膳　我君、首尾よく參りましたな。

天日　む〻、（ト頷き、やはり思案の思入。）

典膳　事十分にまゐりたれば御悦喜あるべきに、何やら濟まぬ御顏色、お心にか〻る儀でもござりますかな。

天日　（思入あつて四邊を窺ひ）いかにも、我心にか〻るは初めて逢ひし廣元が、その面容は三年以前觀音院方にありし時分、越前の國の生れにて、久助と言ひし下男ありしが、瓜を二つに割りたる如く世にも似たるものあれど、あまりと言へばそのま〻故、何とやら心がか〻り。

典膳　む〻、すりや廣元の面體が久助とやらに似てをる故、もしやそれかと思召すは、そりやお心の迷

ひでござる、名におふ大江ノ廣元が下男であらう筈がござらぬ。必ず御案じなされまするな。

天日　彼れが久助にあらざれば、我大望は成就せり。今鎌倉で才智勝れし秩父の庄司重忠は小田原宿にて土下座をさせ、まつた大江ノ廣元を一言の下に言ひ伏せたれば、最早我に敵する者なし。

典膳　これといふも伊賀之助が君のお力になりし故、然し龍の吉夢を凶夢と言ひしは、正忠殿にも似合はざる、智者の一失でござる。

天日　何さま、夢は五臟の煩ひ、善惡ともに當にはならぬ。

ト此時下手より廣元序幕の久助の拵へにて小腰を屈め出來りて、

廣元　法策殿々々。

天日　(廣元を見て、)や、そちは。(トびつくりして南無三といふ思入。)

廣元　久助でござります。久しぶりで逢ひましたな。

典膳　(扨はといふこなしあつて、)すりや、その方が久助とな。

廣元　はい、伊豆國の長澤村で觀音院といふ修驗者の所に、法策殿と一つにゐた、私や飯炊の久助でござります。

典膳　なるほど、面體恰好まで、はてなあ。

廣元　何はともあれ法策殿、こなたも達者で目出度うござる。(ト二重へ上らうとする。)

典膳　こりや〳〵我君の御身近う、下ざまの身を以て無禮至極控へをらう。

廣元　あゝこれ〳〵そのやうに言はつしやるな、こなたは様子を知らつしやるまいが、伊豆國にゐた時分は、法策殿と私とは一つ鍋の物を食つた仲だ、無禮とやらは許さつしやりませ。

典膳　やあ又しても法策などゝ跡名もなき名を申し、言ひかけひろぐ匹夫めが、達つて申さば許し置かれぬ、見違ひなして後悔いたすな。

廣元　えゝ此の人はしつこい人だ。三年あとまで一つにゐた法策殿を見違へてよいものか。

典膳　やい〳〵此奴が。法策々々と、こりや彼方を誰だと思ふ、忝くも源家の長者頼朝公の御落胤天日坊殿なるわ。

廣元　はあゝ、それぢや法策殿は天日坊殿と名を替へさつしやつたか。

典膳　まだ〳〵申すか。無禮者めが。

トきつと廣元へ思入、廣元びつくりせしこなしにて、

廣元　あゝこれ、そのやうに睨めさつしやるな。私はびく〳〵としますわ。これ法策殿、番頭どのがやかましく言つてならぬ、何とか言つて下されぬか。

ト平舞臺にて天日坊へ思入、此の内天日坊典膳と顔見合せ思入あつて、

天日　こりや久助とやら、予はそちが尋ぬる法策ではないぞよ。

廣元　えゝ、こなたまで同じやうに。（ト口眞似をして）予はそちが尋ぬる法策ではないぞよ。仔細らしいことを言はつしやるな。然し以前と違つて立派な裝、僅三年經たぬ内にえらい出世をさつしやつたの、それに引替へ久助はやつぱり元の飯炊奉公、おしなに近い越前者さ、はゝゝゝ。いや、こなたに別れたは何時であつたか、おゝそれ〳〵三年後に觀音院樣が猫退治の祈禱に賴まれ、大津に旅宿をしてゐた時だ。それ雪の降る日に立振舞があつたつけ、があの折外から駈込んで來た美しい順禮娘、怪しい奴と思つたのを旦那樣が女好故、やれ可愛さうに助けてやれ久助、足を洗つてやれ久助、拭いてやれ久助と、私ばかり使はッした擧句の果に大津まで使ひにやられ、比叡おろしの大雪で、ちゞみ上つて歸つて見れば、旦那樣は死んでぢやが、毒にでもあたつた樣子、いやもうこなたはゐず、おれ一人でどのやうに困つたらう。あゝまだこなたに話したいは、それ草津にゐたお三婆あ、これもその日に酒に醉ひ、圍爐裏へのめつて燒死んだて。傍に家の蓋物があつたが、こなたなんぞ持つてでも行きはしなんだか。（トこれにて天日坊ぎつくり思入廣元こなしあつて）何しろ合點の行かぬは、何ぼ酒に醉つたとて我身體へ火の附くのを知らずにゐよう筈がな

い、大方これは誰ぞの仕業。（ト天日坊へかけていふ。）

天日　やゝ。

廣元　その時からしてこなたは見えず、生死のほども知れぬ故明暮心にかゝつたが、思ひがけなく三年ぶりで不思議に逢つた法策殿、あゝ命あればでござるなう。

典膳　やあ、言はしておけばべら／＼と、我君の御身の上にお覺えもなき事を、聞く耳持たぬ、退りをらう。

廣元　えゝこなたの知つたことぢやあねえ、默つてゐさつせえ。（ト天日坊に向ひ、）そんならこなたはどうあつても、法策殿ではないとな。

天日　いかにも。

廣元　いゝや知らぬとは言はさせぬ、きつとした證據がある。

典膳　なに、證據があるとは。

廣元　法策殿の左の腕には天の字に似た痣のあるのが、たしかな證據でござるわい。

天日　え。

廣元　さあ左の腕を見せさつしやれ、痣がなければ天日坊殿、痣があれば法策殿、口でまだ／＼言ふよ

りも、證據の慥を見せさつしやれ。

天日　さあ、それは、

廣元　但し法策殿でござるか。（ト典膳にいふ。）

典膳　さあ、それは。

廣元　見せさつしやるか。

天日　さあ、

廣元　さあ、

兩人　さあ、

三人　さあ〳〵〳〵。

トこれにて天日坊典膳に目交をする、典膳つか〳〵と下りたち、刀を拔きかけるを廣元留めて、

廣元　二つに一つの返事をさつしやれ。

ト典膳を突放してきつと思入。典膳もこなしあつて控へる。天日坊是非なき思入あつて、

天日　おゝ、いかにも我は法策だ。

廣元　おゝ、法策殿とは知つてあれど、こなたの口から名乘らつしやらぬ其の中は、進ぜるものが進ぜ

られぬ。（ト懐より小さき掛物を出し、）こりや此間國者から貰うたが、聞けば頼朝樣のお歌だとかいふことだが、知つての通り私は無筆、何と書いてあるか讀めぬが、こなたの親御とあるこそ幸ひ今日逢うた土産にこの久助が進ぜます。（ト天日坊の前へ出す。）

天日　むゝ、すりや此の一軸は、父頼朝の手蹟とな。

廣元　とつくり讀んで見さつしやれ。

天日　どれ。（ト掛物を取り上げ開き見て、）なに、伊豆國長澤村修驗者觀音院弟子法策召捕るべき者也。

天典　やゝゝゝゝ。（ト兩人びつくりする。廣元つか〳〵と二重へ上りて、）

廣元　賣僧め、下れ。

ト天日坊を二重より突落す。この途端後より近習廣元の大小を持ち、一人は手箱を持出で左右へ控へる。天日坊口惜しき思入にて下よりきつと見、につたりと笑ひ、脇差を差し眞中へ座をしめる、典膳もこなしあつて、

典膳　扨こそ、おのれは。

廣元　頼朝公の嚴命により、平家の殘黨木曾の餘類詮議の爲めに姿をやつし、觀音院が下男久助と云ひしは、大江因幡頭廣元なるわ。

天典　むゝ。

ト兩人顏見合せ無念なる思入、此の時上手の障子を明ける、と内に序幕の鼠布子蜘蛛の巣絞りの襦袢、濱松染の風呂敷、網代笠吊してある。

廣元　あいや法策、あれを見よ。

天日　（見てびつくりなし、）や、これは。

廣元　いつぞや石部の横田川にて降り積む雪の白妙に、紅に染みたる首なき死骸、着せし衣服は鼠布子に襦袢は覺えの蜘蛛の巣絞り、邊りにありしは血に染みし、觀音院と記せし笠に濱松染の小風呂敷、汝なりとおどろきて改めたる左の腕に、天の字に似た痣なき故、法策ならぬことを悟り、何故かゝる仕業をなせしと不思議に思ひをつたるに、御落胤と僞らん惡事を企つ計策に、その身を死せしと見せたる身替り、何と相違はあるまいが。

天日　むゝ。

廣元　まつた賴朝公の御墨附、まつた宗近の短刀は何れにて奪ひ取りしぞ、まつすぐに白狀なせ。

天日　やあ、奇怪なるその一言、證據の墨附短刀は此方が所持なるに、奪ひしなどゝは何を證據に。

平藏　（下手にて、）あいや、その證據これにあり。

典膳　なんと。

ト下手より平藏先に以前の峰藏の繩附を足輕に引立てさせて出來る。天日坊平藏見て、

天日　や、そちはいつぞや大津へ來り、

平藏　越前の國の道者と言ひしは、大江の家臣平岡平藏。

天日　して、證據といふは。

平藏　即ち、證據はこれでござる。（ト峰藏を前へ出す。）

典膳　や、われは朝霧、

峰藏　大八殿、もう手證はあがつたわ。

平藏　さあ、今一度法策始め地雷太郎大八等が、惡事を此の場で白狀なせ。

峰藏　私が命さへ助けて下さらば有體に申します。天日坊が證據の品はお三婆あの娘のお澤が賴朝樣から貰つた品、婆あを殺してそれを盜み、お澤が産んだ落胤と拵えこんだが惡事の始まり、是に荷擔の伊賀之助は地雷太郎といふ盜人、この典膳も一つ仲間、まだ〳〵こればかりぢやあねえ、天日坊が本名は。

ト言ひかけるを、天日坊拔打に峯藏の首を打落す。

平藏　やあ、こりや天下の囚人を手籠に討ちし不屆者、覺悟なせ。

天日　むゝ、斯くなる上はもうこれまで、囚人如きはまだなこと、廣元汝も生けてはおかぬぞ。

典膳　その首の用心なせ。（ト天日坊、典膳きつとなる。）

廣元　やあ、賴朝公の目代たる廣元に向ひ、無禮奴め。（トきつとなり。）

平藏　それ、召捕れ。

ト上手下手より捕手六人十手を持ちてばら〳〵と出て、

捕手　動くな。（ト兩人を取卷く。）

廣元　最早脫れぬ、尋常に覺悟なして。

皆々　繩にかゝれ。

天日　さいふ大江ノ廣元始め、片ッぱしから覺悟なせ。

典膳　刀の目釘のつゞかんだけ、切つて〳〵切りまくるぞ。

廣元　何をこしやくな。

平藏　者共、それ。

捕手　はッ。

ト廣元は近習と共に奥へはひる。平藏は典膳にかゝり立廻りになり兩人上手へはひる。天日坊は六人の捕手を相手に大まくしの立廻りあつて、此の道具廻る。

(奥庭の場)――本舞臺一面の黒幕上下紅葉の立木、總て奥庭の體。と、上手より典膳拔身にて出るを四人の捕手追ひかけ來て立廻り、捕手は下手へ逃げてはひる。典膳ほつと息をつく後へ平藏伺ひ出て

平藏 典膳、捕つた。(ト十手にて打つてかゝるを、身を返して刀をさし附ける。)

典膳 天日坊が大望の惡事露顯の上からは、どうで終ひは梟木にかゝりやつがなる赤星典膳、冥土の旅の道連に刀の刄金のつゞかんだけ、切つて〳〵切りまくる。平藏われも覺悟なせ。

平藏 何をこしやくな。

ト大小入りの鳴物になり、兩人一寸立廻りあつて典膳平藏を當て、倒れるを切らうと刀を振上げるとドロ〳〵になり、上手へ陰火燃え身體自由にならぬ思入いろ〳〵あつて、

典膳 はて心得ぬ、俄に五體の自由にならぬわ、むゝ、いつぞや小夜の中山で打ッぱなしたる女の死靈、又もや此身をなやますか、えゝ執念深い奴だなあ。

ト典膳陰火を切拂はうとし引戻され、苦しみ焦る思入あつて、どうと倒れる。此の時平藏心附き起上

りて典膳に繩をかける。以前の捕手も出來る。

平藏　天日坊に荷擔の一人、赤星典膳を召捕つたり。

典膳　ちえゝ死靈の祟りに捕虜となりしか、殘念やなあ。（トすつくと立上り、きつと思入。）

平藏　最早籠中の赤星典膳。

捕人　きり〱歩め。（ト捕手前へ廻り十手を振り上げる。典膳これを蹴倒して、）

典膳　案内さらせ。

ト時の太鼓になり、皆々上手へはひる。これにて黑幕を切つておとす。

本舞臺正面奥深に門をなしたる枝折門、左右折廻して網代塀、上手に井筒、諸所に紅葉の立木、上手に柴垣、總て奥庭の體。と以前の捕手六人出來りて小影へ忍ぶ。本釣鐘になり、正面の網代塀を切破り天日坊大童にて拔身を持ち出で、四邊を窺ひ思入あつて、

天日　三年以前草津にて測らず手に入る二品より落胤なりと僞つて、鎌倉武將の嫡子とならん慾にふけりし望みも、その後此身の素性を正忠に聞けば、父の仇たる賴朝を討亡すには幸ひと、猶も一味を語らうて名におふ秩父の重忠さへ威光を以て土下座をさせ十が九つ仕果せしも、才智勝れし廣元に見現はされし上からは最早今宵が命の終り、二十五歳の曉も待たで朝日のその名さへ霜と

消え行く身の果ぢやなあ。

ト思入あつて井筒の傍へ行き、短刀を啣へ水を汲まうとする。後より捕手窺ひ出で、

捕手 とつた。

ト聲をかけ、皆々取りまき大立廻りになり、トヾ突棒、さす股、錑にて天日坊を左右より捕へる。

天日 ちえゝ、捕虜となりしか、口惜しい。

廣元 （上手にて、）やあ〳〵者共引け。

捕手 はツ。

ト皆々後へ下る。上手より廣元烏帽子大紋にて中啓を持ち、近習三方へ九寸五分を戴せて持ち出來る。これと同時に下手より平藏、典膳の首を持ち出來る。

天日 やあ、われは大江ノ廣元、捕虜となりしを留めしは。

廣元 木曾義仲の嫡男清水ノ冠者義高故。

天日 なに、我を冠者義高とは。

平藏 赤星典膳が白狀によつて、淸水の冠者と知つたるわ。（ト首を見せる。）

天日 すりや、典膳が白狀なせしとか、やゝゝゝゝ。

廣元　兩の翼と賴みたる伊賀之助は露顯を悟り、旅宿に於て切腹なしたり。また彼れが妻たる人丸お六も三島の宿にて遊女となりしが、人殺しの罪露顯なし多勢を以て搦めとり、その外一味の者共は皆それ〳〵に手當なし、殘るは典膳唯一人、その典膳も白狀いたせば最早脫れぬ其身の運命、その名を名乘り尋常に、覺悟を淸く切腹召され。

天日　（ぢつと思入あつて、）斯くなる上は何をか包まん、伊豆國長澤村の修驗者觀音院が弟子法策、後に右幕下賴朝が落胤天日坊と言ひし我こそは、朝日將軍木曾義仲の忘れ形見、淸水の冠者義高なるわ。

皆々　扨こそなあ。

天日　最早我運命もこれまでなり。（ト懷より墨附を出し、賴朝とある所を貫き、直に我腹へ突立てる。）

皆々　これは。

天日　晉の豫讓が例に習ひ、此の墨附に記したる賴朝の名を貫けば父の敵を討つたも同然、これにて恨みも晴れたれば、源家の重寶宗近のこの短刀は廣元より、賴朝殿へ返しくれよ。

廣元　（天日坊より短刀を受取つて、）ほゝ、惡に强きは善にも强し、さすがは木曾の御公達、

平藏　あつぱれなる、

皆々　御生害。

天日　いざ、介錯なせよ、大江ノ廣元。

廣元　いふにや及ぶ。

ト廣元大紋の袖をはね、太刀を拔放し後ろへ廻り振上げる。天日坊廣元と顏見合せ、引張りの見得にてよろしく、

ト幕引附けると、エイと首を落す掛聲する。

幕

五十三次天日坊（終り）

天日坊

（附錄）主なる興行年表

戀相撲

年時	座名	名題	浪五郎	幸次	長吉	おさき	丈之助	お仲	清七
明治五年一月	中村座	戀相撲春顏觸	中村芝翫	尾上菊五郎	尾上菊五郎	坂東三津五郎	坂東簑助	嵐榮三郎	尾上芙雀
明治十二年九月	中島座	勝相撲神明達挽	中村壽三郎	松尾猿之助	尾上幸藏	澤村巴枝	吉川桂子	嵐德之助	坂東橘雀
明治四十五年二月	歌舞伎座	戀相撲春顏觸	尾上榮三郎	中村東藏	尾上菊五郎	尾上芙雀	中村吉右衛門	岩井粂三郎	坂東三津五郎

千代田の神德

年時	座名	名題	家康	信泰	築山	おまん	半藏	彌十郎	七郎次	作左衛門	秀吉
明治十一年六月	新富座	松榮千代田神德	市川團十郎	坂東家橘	市川團十郎	岩井半四郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	市川左團次	中村仲藏	尾上菊五郎
明治十五年二一月	中島座	駿遠參箇三葉葵	中村壽三郎	市川鬼丸	中村壽三郎	中村壽	片岡市藏	片岡市藏	尾上幸藏	勝川又吉	勝川又吉
明治三十六年十月	歌舞伎座	松榮千代田神德	中村芝翫	市村羽左衛門	市川八百藏	尾上梅幸	市川八百藏	片岡我當	市川八百藏	片岡市藏	中村吉右衛門

大閤記

年時	座名	名題	内藏之助	秀吉	勝家	佐久間	伊豆守	代助	柴崎	前田	徳善院	瀧川	光秀
明治三年一月	守田座	館扇曾我訥芝玉	｜	中村芝翫	中村仲藏	市川左團次	｜	｜	｜	澤村訥升	坂東喜知六	中村翫太郎	｜
明治五年十月	守田座	三國無双瓢軍扇	河原崎權之助	河原崎權之助	中村仲藏	市川左團次	市川子團次	山崎幸升	岩井しげ松	中村芝雀	市川團八	中村鶴藏	｜
明治九年九月	新富座	音響千成瓢	市川團十郎	坂東彦三郎	市川團十郎	市川左團次	澤村訥升	市川左團次	坂東彦三郎	澤村訥升	大谷門藏	市川團右衞門	坂東彦三郎
明治十八年五月	市村座	花見時瓢太閤記	｜	市川團十郎	市川左團次	市川海老藏	｜	｜	｜	助高屋高助	尾上菊五郎	尾上松助	｜
明治二十七年三月	春木座	三國無双瓢軍配	｜	市川八百藏	中村雀右衞門	中村勘五郎	｜	｜	｜	尾上菊之助	｜	市川宗三郎	
明治三十一年二月	明治座	歌合桔梗瓢	｜	市川權十郎	市川左團次	市川荒次郎	｜	｜	｜	市川小團次	市川壽美藏	｜	
明治三十三年十月	明治座	齋藤利三堅田譚	市川左團次	｜	｜	｜	市川米藏	市川莚升	市川紅若	｜	｜	｜	
明治三十四年三月	歌舞伎座	大徳寺燒香	｜	市川團十郎	尾上菊五郎	市川八百藏	｜	｜	｜	中村福助	尾上松助	片岡市藏	
明治四十一年十月	歌舞伎座	三國無双瓢軍扇	市川八百藏	市村羽左衞門	市川猿之助	市川高麗藏	市村羽左衞門	澤村宗十郎	尾上松助	尾上梅幸	中村芝翫	市川八百藏	
大正四年四月	帝國劇場	繪本太閤記	｜	澤村宗十郎	松本幸四郎	澤村長十郎	｜	｜	｜	尾上梅幸	市川小團次	尾上幸藏	
大正六年八月	帝國劇場	齋藤利三堅田落	中村吉右衞門	｜	｜	｜	坂東三津五郎	守田勘彌	尾上松助	｜	｜	｜	坂東彦三郎
大正十年五月	歌舞伎座	大徳寺	｜	市村羽左衞門	市川中車	片岡市藏	｜	｜	｜	中村歌右衞門	市川段四郎	中村鶴藏	

大正十年九月	明治座	堅田落	市川中車	―	―	―	市川延升	片岡市蔵	市川紅若	―	―	―
大正十五年五月	帝國劇場	三國無双瓢軍扇	―	市村羽左衛門	松本幸四郎	守田勘彌	―	―	―	澤村宗十郎	尾上松助	

天日坊

年時	座名	名題／役割	天日坊	伊賀之助	お六	廣元	大八	隼人	おさん
安政元年八月	河原崎座	吾嬬下五十三驛	市川小團次	嵐璃寛	坂東しうか	嵐璃寛	大谷友右衛門	嵐璃寛	山崎國五郎
慶應元年四月	中村座	義高島千摂網手	市川小團次	河原崎權十郎	岩井紫若	坂東龜藏	坂東龜藏	河原崎權十郎	坂東龜藏
慶應三年十月	市村座	大江政談雪墨附	市村家橘	關三十郎	市川左團次	坂東龜藏	市川九藏	市川左團次	坂東龜藏

大正十五年十二月十八日印刷
大正十五年十二月二十一日發行

『默阿彌全集第二十七卷』

非賣品

補修　河竹糸女

校訂編纂者　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地　堀江關武

印刷所　東京市小石川區諏訪町五十六番地　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂





